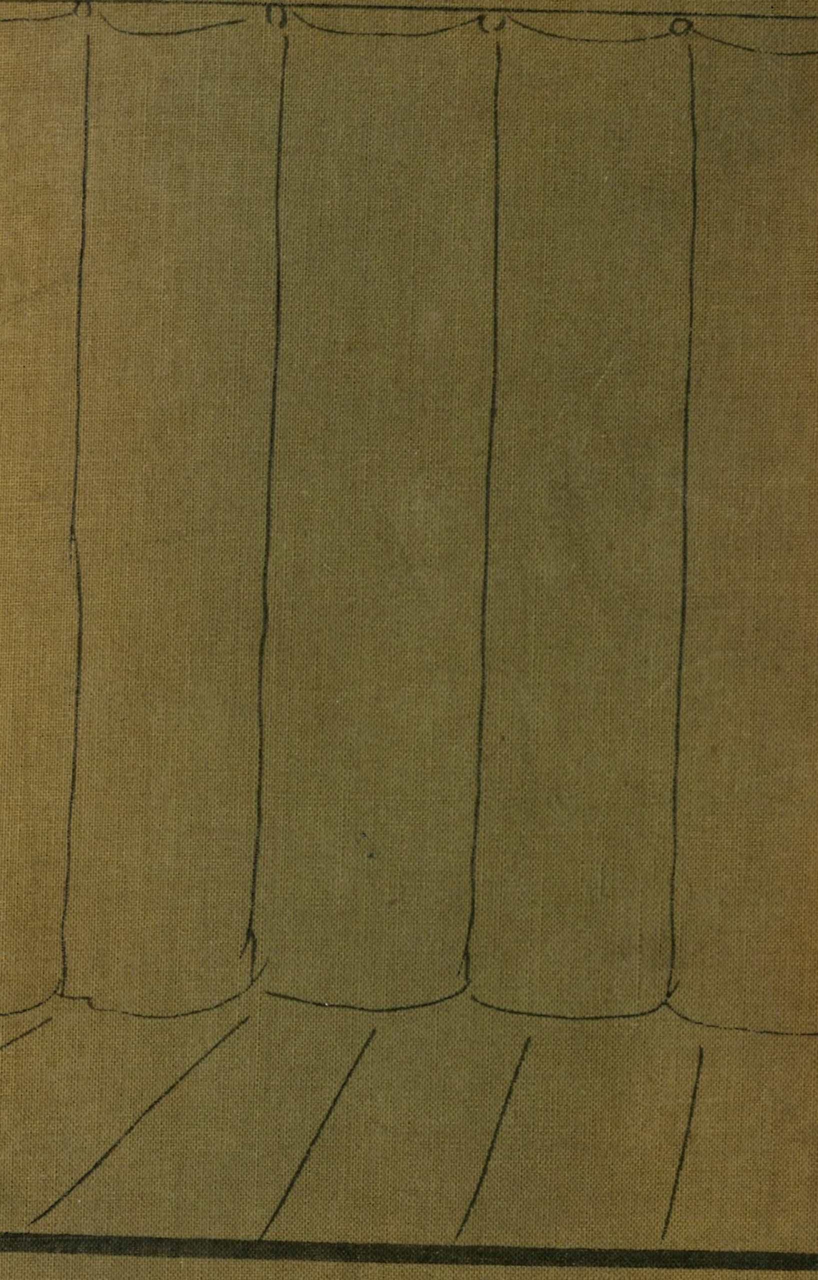
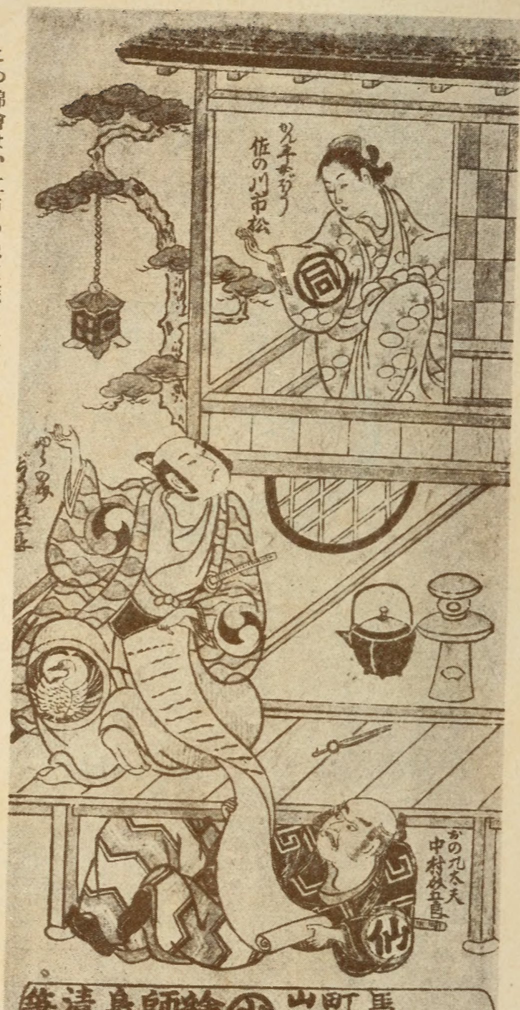


日本戯曲全集
第十五卷

赤穂義士劇集

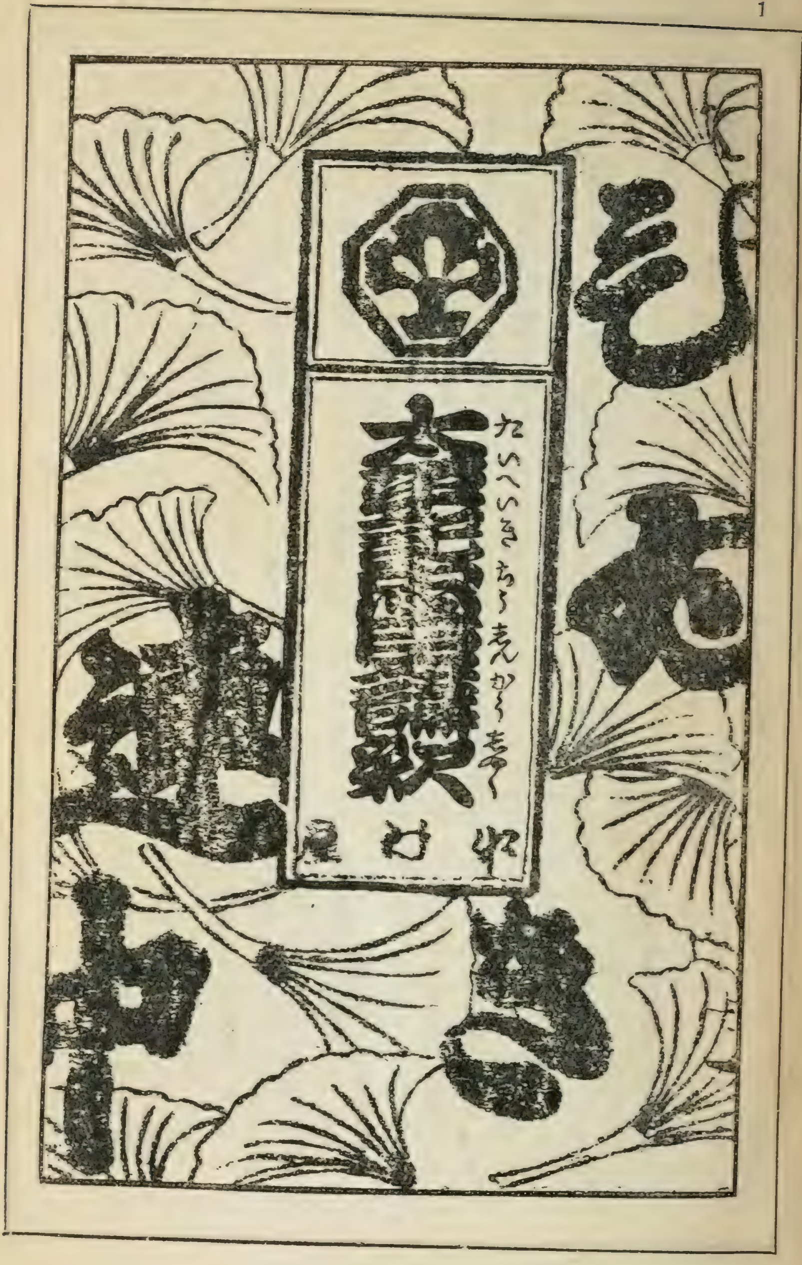
東京
春陽堂版

この錦繪は、江戸の忠臣藏の最初の繪と云つてもいゝでせう。寛延二年五月、市村座上演の「假名手本忠臣藏」七段目で、坂東彦三郎の由良之助、佐野川市松のおかる、中村助五郎の九太夫であります。鳥居清信の筆であります。



日本戲曲全集　第拾五卷　目次

赤穗義士劇篇



太平記忠臣講釋

赤穗義士の一件が落着したのが二月四日で、その十六日から旣に中村座で、曾我の討入に當込んで義士の狂言を出したと云ふ。併し、公然とこの事件を、戲曲に仕組んだのは、近松の「碁盤太平記」が初めであらう。世界を太平記に持込んで、吉良を師直、淺野を鹽冶に擬めた趣向が巧かつたので、後から〱と續々出來る義士劇も、大抵はこの世界を踏襲する事になつた。百餘種もある同種の戲曲の中で、最も有名にして上演度數の多いのは、云ふまでもなく「假名手本忠臣藏」で、次いではこの「太平記忠臣講釋」である。忠臣藏は一貫した筋に據り、忠臣講釋は銘々傳といふ趣向である。作者は近松半二で、明和三年十月、竹本座の手摺にかゝつたのが最初である。

全部は十段續きで、大序は「鎌倉御所殿中の場」判官が師直を刃傷する所から矢間重太郎の駈附けで、手取り早く始まつてゐる。第二段が「本國の場」で本卷收錄の通り。原作では重太郎なのが千崎彌五郎に變つてゐるだけである。第三段は「九太夫切腹の場」第四段は「勘平石切りの場」いづれも脚本と同じである。第五段は「道行人目の重縫」で縫之助と浮橋の道行が劇中劇で、揚屋の場に變るのである。この道行は今でも薗八節に殘つてゐる「鳥邊山」だが、本卷の脚本には、この道行を省いて、道成寺の踊を人形で見せるといふ趣向になつてゐる。これは前興行に三世中村歌右衞門が道成寺を踊つて當てたので、それを人形で繰返しただけである。第六段は「四條河原の場」第七段は「喜內浪宅の場」第八段は「山科閑居の場」いづれも脚本と少しも違はない。本集の脚本は爰で終つてゐるが、原作にはまだ後がある。第九段目は「問註所の場」で天川屋義平の拷問、第十段目は「討入の場」が義平の夢になつて、平右衞門の早打に義平が白狀して赦免されるので終りになつてゐる。

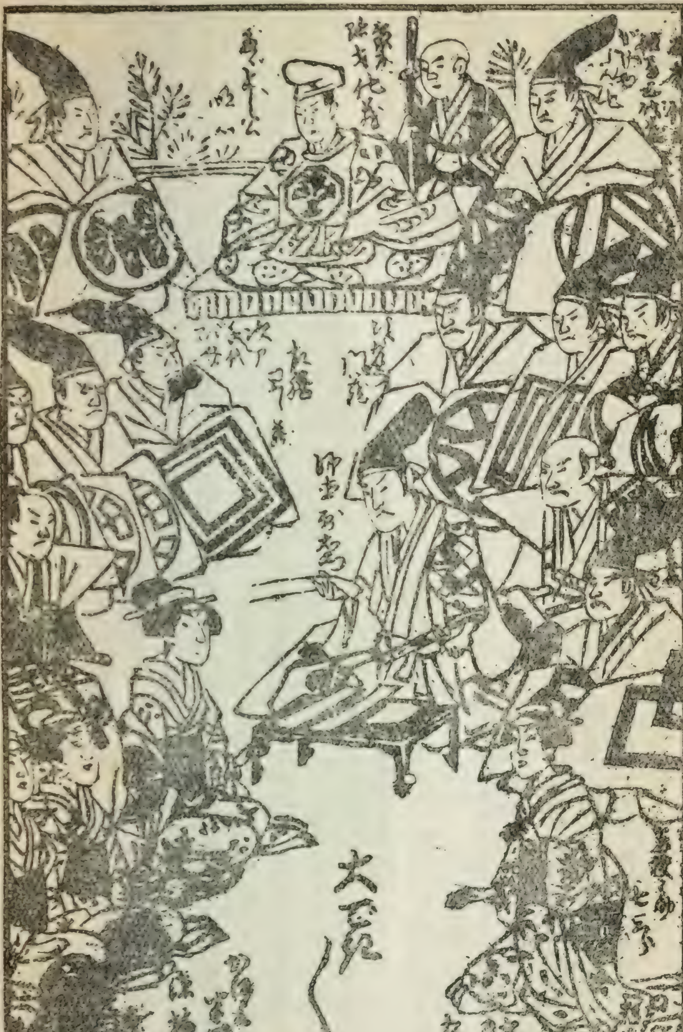
これを歌舞伎に移入したのは、江戶の方が先で、書き卸しの翌年、明和四年三月、市村座が最初である。この時の役割は——浮橋（澤村豐松）お北（坂東愛藏）九太夫（中村助五郎）おれい（富澤辰十郎）勘平（市川八百藏）重太郎（大谷廣次）師直（坂田半五郎）かほよ（吾妻藤藏）次郎右衞門、義平（坂東三八）おりえ（瀨川菊之丞）由良之助（市川團藏）縫之助（市村羽左衞門）等であつた。

大坂では、明和四年五月の角の芝居が最初である。この時の役割は——おりえ、お縫（嵐雛助——お縫は原作のお北であるが、何の譯か斯う直つてゐる）勘平（中山來助）縫之助（市野川彥四郎）おれい（芳澤あやめ）喜內女房（嵐小六）師直（嵐七五郎）九太夫（中山新九郎）重太郎（藤川八藏）であつた。

京都では、明和五年二月の、四條北側東の芝居が最初である。この時は——三左衞門、お百（嵐吉次）義平、平右衞門、傳次（谷村楯八）定九郎（嵐大藏）喜內、九太夫、藥師寺（三桝仙五郎）近江屋亭主、丑兵衞（江戶坂善吉）浮橋、力彌（松山小式部）喜內女房（姉川佐吉）おいし（嵐千四）おくみ（中村吉松）おれい、平右衞門女房おまさ（山下吉三郎）重太郎、勘平、縫之助、若狹之助（岩田百松）おりえ、かほ世（桐野谷嘉吉）由良之助（澤村太吉）等であつた。これはいづれも三流どころの俳優らしい。

本集へ收錄した脚本は、文化九年七月中村座で、三世中村歌右衞門が七役を替つた、有名な上演の折のものである。この時は、增補と賦してある程で、大序なぞ原作とは大分變つてゐる。これは別項「義臣傳讀切講釋」の序幕を、ソツクリ拜借して持込んだのである。また「四條河原の場」の前には、「鎌腹の場」が附いてゐる。彌作の鎌腹である。これも別項の「いろは假名四十七訓」から取つたので、しかも原作とは違つてチョボまで入つてゐる。セリフも大分變つてゐる。そして、彌作內の前に「大井川の場」が附いてゐて、彌五郎が川越し人足と立廻りの所がある。この時の立作者奈河篤助が、歌右衞門に賴まれて訂正したものらしい。現今傳はる「鎌腹」の義太夫は、これらから來たものであらうか。また九十段目は省いて、「山科閑居」で終つてゐる。尤も義平拷問の件は最終としては淋しいから、この淨瑠璃通りを歌舞伎で上演した事はないやうだ。この時の役割は——師直、重太郎、お組、太鼓持ち次郎右衞門、彌作、萬歲栃右衞門、由良之助（中村歌右衞門）彌五郎、判官（關三十郎）顏世、おりえ（岩井半四郎）おいし（市川おの江）浮橋、お北（藤川官吉）石堂、喜內女房（荻野伊三郎）若狹之助（中村七三郎）勘平、力彌（尾上松助）九太夫、義平、平右衞門（市川市藏）藥師寺（大谷門藏）丑兵衞（桐島儀右衞門）定九郎（中村東藏）おれい、喜內（助高屋高助）等であつた。

扉及び次頁へ入れた凸版は、いづれもその時の繪番附である。



太平記忠臣講釋

大序

鶴ヶ岡假御殿の場

役名──足利直義公。高野武藏守師直。鹽谷判官高貞。桃井若狹之助安近。石堂右馬之丞。大鷲文吾。鷺坂伴內。腰元、勝野。細川妻、關の戶。今川妻、小浪。大佛妻、渚。鹽谷妻、顏世御前實ハ腰元侍從。

本舞臺、三間の間、高足の御簾屋體、東西落ち間、後へ寄せて、竹の節欄干の金襖、圓覺寺奧殿の體よろしく、幕の內より、石堂右馬之丞、鹽谷判官、桃井若狹之助、山名次郎左衞門、その外諸大名大勢、何れも烏帽子素袍にて、東西に並よく並ぶ。天王立ちにて、幕明く。

ト直ぐに淨瑠璃。

〽君明德を行ふ時は、衆星北辰にたんぞくする如し。されば納まる時津風、枝を鳴らさぬ鎌倉山、今日上巳の嘉儀として、この靈壇を假御殿、袖をつらぬる有樣は、ゆゆしかりける次第なり。

ト內より

呼び　出御ウ。

皆々　シイ……。

ト序の舞になりて、正面の簾一面に卷きあげる。足利直義、烏帽子狩衣にて、二疊臺に坐る。高野師直、烏帽子大紋にて、並び居る。

直義　いま四海一統に歸し、諸侯の人々群參せらるゝは、これ全く予が武德にあらず。兄尊氏の軍功に依つて、南都の餘黨一時に亡び、新田の殘黨、楠が枝葉まで、戰はずして從ひ靡くは、偏へに氏神の加護ならん。

師直　上意の如く御代萬歲。

右馬　萬々歲と只々

皆々　おめでたう存じ奉ります。

ト平伏する。

右馬　何れも、我が君御機嫌の御尊顏の拜し奉り、お互ひに喜びを重ねまする儀でござる。

次郎　草木もゆるがぬ、足利の御繁榮、戸ざゝぬ御代とは今この時。有り難き儀ではござらぬか。
皆々　左樣でござる。
師直　改めての上意。
皆々　ハア、。
師直　鹽谷判官高貞。
判官　ハッ〳〵。
師直　桃の井若狹之助安近。
若狹　ハッ〳〵。
師直　先達て勅使饗應の日の儀、兩人相勤めらるべき旨、嚴命を傳へし通り、即ち今般御下向につき、分けて明日は大切の御祝儀。お能終らば御對顏の式。兩人とも麁忽なきやう、相勤むべき旨、改めての上意。
判官　ハッ、憚りながら不才の高貞、公卿堂上饗應の故實、曾て覺悟は仕らず、師直どのには高家の古老、萬事貴所のお指圖を蒙り、相勤むべき兼ねてのお下知、愚昧の某、御教導に依つて、役目首尾よく相勤めまするやう、願ひ奉りまする。
若狹　若輩の若狹之助、高貞どの同樣に、御教示願ひ奉りまする。

師直　痛み入つたる御挨拶。身共とても、故實萬端、究めたと申すではござらねども、我が家の職分でござれば、覺悟いたし、あらましは、お指圖に及びませう。對顏の式は國の大禮、明朝未明に御傳授申さう。
兩人　有り難う存じ奉りまする。
師直　イヤナニ、石堂どの、最早老衰の武藏守、四海の政務を司どりますれば、萬事詞を添へませねば、君の御前が納まりませぬ。それゆゑ繁多にござるから、殆んど困り入りまする事でござる。
右馬　御尤も。我が君御若年、殊に以つて執事の職は、四海の鏡となるべき役儀、御心勞察し入ります。
次郎　當時執頭の御威勢は誠に朝日の登るに等しく、貴所の洩れたる時は、一向に世界は暗闇同然、これが彼の譬へに申す、飛ぶ鳥も地に落ちるとやら、お羨やましい儀でござる。
師直　イカサマ、左樣な儀もござるか。先頃君の御代參に、八幡宮へ社參の折柄、身が乘り物より出ると、鳩が凡そ七八十羽、鶴めが十四五羽ばかり、羽搔を縮めてバタリバタリと落ちました。近習の者どもが持ち歸りて、調味いたして食べましたげにござる。ハ、、。

大一　然らば貴所のお供いたし、鷹狩りに出ましたならば、手も濡らさずして好い得物を致すでござらう。近日お催ふしを願ひまする。

大二　イヤ、また鳥類ばかりでもござらぬ。大小外様によらず、途中にて出合ひ申さば、犬つくばいにかッつくばい、お鬚の埃を拂ひまする。

大三　例へ犬猫と云はれても、師直公の御意に叶ひ、立身は致したいものでござる。

大四　執權の御機嫌を損ずるが否、只一睨みに忽ちでござる。

大五　鷹に取られた雀同然、みじめなものでござる。

大一　左樣々々、隨分御意に入りますやう、御機嫌を取るが第一でござる。

右馬　これは各々、そりや何を御意なさるゝ。權に伏して阿り諛らひ、その身の立身を望むなどは、人倫の道にあらず。不義の榮をなすは浮べる雲、虚名は武門の恥づる所、諸侯列座の席に於て、餘りと申さば麁忽の至り、以後をキッとお愼しみなされてよからう。

　ト五人顏を見合せる。

〽道の道たる一言は、實にも四海の石堂なり、詰め番の侍ひ罷り出て。

　ト侍ひ出て

侍ひ　兼ねてお願ひの通り、詠み歌御添削に預からん爲に、諸大名の奥方、宿坊に相詰められてござりまする。

師直　イカサマ、勅使獻覽に供ふる和歌、面倒ながら見て遣はさずば相成るまい。

次郎　分け、拙者が妹などは、至つて鈍き生れなれば、師直公のお庇を以つて、歌の數にも入りますやう、御添削を願ひまする。

師直　すべて地下と堂上とは、詞の相違もござれば、そこが彼の傳授ものでござる。

判官　文武二道に秀でたる師直どの。愚妻顏世はこの度の御會が、始めての儀でござれば、何分よきに御判斷下されい。

師直　氣遣ひ召されな。顏世どのは都育ち、堂上にも交りし歌人の由承はれば、詠歌もさこそあらんと、中々奥床しう存ずる。

判官　如何でござらうやら。

師直　明日は對顏の式、未明より寸暇もござらねば、拙者は只今のうち、女中方の和歌、判斷の致すでござらう。

次郎　我れ〱は宿坊にて、還御の時刻を相待ちませう。
判官　いよ〱明朝未明には、饗應の式を御傳授下さるか。
師直　承知々々。師直が附添ひ居れば、麁忽のあらうやうがない。御兩所ともに、落ちついてござれ。
兩人　有り難う存じまする。
右馬　然らば後刻。
次郎　還御の後。
大一　何彼のお談じは。
判官　詰め所に於て。
右馬　師直どの。
師直　各々。
皆々　お別れ申す。
〽互ひに式禮おごそかに、善惡邪正立別れ、奥に聞ゆる管絃の、笛にたぐへて。
ト大三重に、中へ下がり葉を打ち込む。右馬之丞、次郎左衛門、判官、若狹之助、その外大名大勢、下へ入る。師直、見送る。チョン〱にて、道具ぶん廻す。
本舞臺、一面に塀、眞中に四つ足門、出入り、始終管絃にて、道具納まる。

ト向うより、文吾、麻上下、高股立ちにて、後より卷き物の進物を、吊り臺に乘せ、家來に舁かせ、出ると門の内より鷺坂伴内、同じく麻上下にて出て
伴内　おてまへは鹽谷どのゝ身内、大鷲文吾どの。
文吾　これは執事の御家來、鷺坂氏、この間は暫らく御疎遠。
伴内　誠に先日は、ゆる〱御意得ました。その砌り手前旦那が折入つて、お頼み申されし彼の一儀。
文吾　成る程、主人判官の奥方。
ト云はうとする。
伴内　ア、コレサ。
ト顏にて家來に敎へる。
文吾　成る程〱。コリヤ、其方達は、献上の品を宿坊へ持參いたし、身が參るをお待ち居れ。
家來　畏まりましてござります。
文吾　行け〱。
ト家來、吊り臺を持つて奥へ入る。
誠にその節は、お執成しゆゑ、陪臣の私し風情、高家たる師直公の、御懇志の御意に預かり、斯樣な有り難い儀はござりませぬ。

伴内　なんの／＼。時にその砌り、貴殿の朋友矢間氏が、旦那より承はられし内々の儀。その首尾は如何ござるな。

文吾　その儀は少しもお氣遣ひあられますな、重太郎儀は奥向きの、萬事取賄ひ罷りあれば、追ッつけ奥樣より色よい御返事が參るに相違ござりませぬ。

伴内　この度の御用向、鹽谷どのに手柄をさゝうとも、又どのやうにしくじらさうも、主人師直が心次第。例へ道ならぬ事にもせよ、取持ち召さるゝが、却つておてまへ達の忠義と申すもの。

文吾　左樣存じて樣々に、手段の致し居りまする。して、師直さまには奥方を、いつの間に御覧なされ、斯程に御執心でござりまするな。

伴内　されば／＼。去秋六浦の紅葉見物の折柄、夜目にちらりと御覧あつて。

文吾　すりや、夜目遠目に、顔世御前を。

伴内　それより切なる、お物思ひサ。

文吾　ハテ、左樣でござるよなア。

ト伴内、フッと思ひ出したこなしにて

伴内　オヽ、さうだ。ナニ文吾どの。まだ申し談ずる儀もござれど、大切な主用、ハタと失念いたした。身は方丈へ參つて來るうち、暫らくお待ち遊ばし下されい。

文吾　承知仕りました。隨分ゆる／＼。

伴内　ハテ、遲くはないか。

ト門の内へ入る。

文吾　重太郎が指圖の一件、どうぞ首尾よく行けばよいが。

ト思案こなし。誂らへの唄になり、向うより勝野、振り袖の形、文箱を持ち來る。

文吾　お小姓の勝野どの、侍從どのよりのお使ひか。

勝野　左樣でござります。このお文箱をお前樣へ、直にお渡し申せとの、お云ひつけでござりまする。

文吾　待ち兼ね居つた。御大儀々々々。

ト文箱を取上げ

すりや、此うちのお文は、奥方顔世さまのお名が記しあるな。

勝野　奥樣のお手に似せ、侍從どのが認めましてござります。

文吾　よし／＼、して侍從どのには。

勝野　奥樣のお乘り物にて、もう追ッつけ。

文吾　もう、よい／＼。おてまへには早くお歸りなされ。

勝野　慥かにお渡し申しましたぞえ。
　ト引返へし、向うへ入る。
文吾　執事たる師直公、主人奥方顔世御前、兼ねてよりの御執心とあつて、重太郎とこの文吾に、取持ちせよと無體の難題、お腰元の侍從を賴み、顔世さまに仕立て上げ、添削の席さへ首尾よく濟めば、殿樣のお役目も、滯りなく納まる工風。一時も早くこの文箱を、師直さまへ差上げたいものだが。
伴内　大鷲文吾どの〱。
　ト呼び出る。
文吾　伴内どの、幸ひの所、この間のお返事が參りました。
伴内　ナニ、顔世御前より、御主人へお返事が。
文吾　御苦勞ながら、お取次ぎ下されい。
　ト渡す。
伴内　これを旦那へ差上げなば、さぞ滿足であらう。慥かに落手いたした。
文吾　萬事よろしくお賴み申しまする。
伴内　承知〱。
文吾　然らば拙者は。

伴内　もうお出でなさるゝか。
文吾　其うち御意得ませう。
　ト兩人よろしく、門の內へ入ると、チョン〱にて、道具ぶん廻す。
　一面、通しの二重舞臺、見附け金襖、欄干通り半簾、すべて客殿の體。右二重の眞中に、師直、大紋の下ばかりにて、封じ文を見て居る。始終管絃にて、道具納まる。
師直　この一通は顔世よりの返事、高野の君樣參る、渡りを待つ八ツ橋より……唐衣の古歌を思へば、八ツ橋は、杜若の名所。取りも直さずかほよ花。ハテ、憎からぬ筆のすさみ。
　ト封を切り、ちよつと見て、こなしあつて、側なる手箱より、眼鏡を出して掛け
徒然なる春雨に、まさり行く淚川とや、淺き渡りとは思ひながら、稻船のいなにてあらぬ心なれど、たゞ人目の關のゆるしなければ、御返事も心ならず、後や先なる事のみ、よきにお見分け下されかし、只この上はゆる〱しきお目もじ御沙汰の程、松を時雨に染めばやと、うつ

し心の我れながら、櫨紅葉色まし候ふ、來世も同じ蓮は
ぬ事を、祈りよ〳〵、めでたく〳〵……ハテ、可愛らしい
この水莖、殊に假名の運びも拙なからぬ、ゆる〳〵しき
逢ふ瀬を待つとは、忝ない〳〵。
ト文箱を抱きしめて、いろ〳〵こなしあつて
誰そ居らぬか。來いよ。

侍ひ　ハア〻。
ト出て
御用でござりまするか。

師直　申しつけたる通り用意いたせ。

侍ひ　畏まつてござります。
ト奥へ入り、文臺を持ち、外に一人、火鉢を持ち出て
師直が前へ直し入る。侍ひ一人殘る。

師直　女中達を順々に通してよからう。

侍ひ　ハツ。
ト花道へ向ひ
細川の奥方關の戸さま。御免でござる、お通りなされ。
ト向う揚げ幕にて

關の　ハア、、。
い、麗うちかけもしとやかに、歩む姿の柳腰、桃の媚びあ
る風情にて、愛想こぼるゝ袱紗物、短册諸とも直し置き、
遙か下がつて手をつかへ。
ト淨瑠璃に構はず、矢張り管絃打つて居る。
お役目とは申しながら、御苦勞に存じ上げます。

師直　修理どのゝ奥方關の戸どの、ドレ〳〵。
ト金の包みし袱紗を取上げ、ニツコリと思ひ入れ。

關の　恐れながら我が君樣を、祝し申せし筆のすさみ、御
添削をお願ひ申し上げまする。
トこちらの袱紗を開き、短册を出して

師直「春秋を一つに見ばや武藏野の、都の花を移し植ゑて
や」……こりや天晴れでござる。

關の　お恥かしうござりまする。

師直　イヤ、なか〳〵出來ました。併し、この天爾波が、
今少し据り兼ねます……春秋を一つに見ばやを、とても
の事には、斯う致したがよいではござらぬか。

關の　兎角よろしうお指圖、お願ひ申し上げまする。

師直　すべて、歌は心につるゝもの、そもじの詠歌は、一
入可愛らしい詠み歌でござるな。
ト顏をヂロリと見て
ちと夜分には、手前屋敷へお出でなされ。何か心入れに

なる儀を、教へて進ぜませう。

關の　有り難う存じまする。

師直　この添削は身が添削の通り、淸書を致して進ぜませう。

關の　左樣ならば私しは。

師直　ござれ。

關の　重ねてお目もじ致しませう。

師直　ア、〱。

ト關の戶、こなしあつて、侍ひ、案內して奧へ入る。

師直、後見送り

細川の內室は、餘程油の乘つた年輩。彼奴、よい食ひ頃な女だわえ。

ト管絃になり、向うより、小浪、渚、同じく衣裳、襠補にて、小浪は臺に扇子箱を乘せ、渚は小判を袱紗包みにして、靜かに本舞臺へ來て、右の品を文臺の上へ直し、左右へ別れ、手を仕へる。

各々方は。

小浪　自らは今川主計が妻、小浪と申す者。

渚　大佛釆女が妻、渚でござります。

小浪　粗末ながら扇子一箱、お持ち用に遊ばし下さりませうなれば、有り難う存じまする。

ト臺に扇子箱を乘せて、差出す。師直、これを取上げしつかり重いと云ふこなし。

師直　こりや、忝ない。定めし天地金でござらう。しつかりと。

ト手を引くこなしあつて

ハ、、、、、。御扇子受納申す。

渚　私しのも、よろしう御添削、お願ひ申し上げます。

ト包みの金を出す。師直、これをも持つて見て

師直　こりや、お心の附かれた善い文鎭でござる。

ト文臺の短册を取りて

これが今川どのゝ奥方か……「都邊を今日天下がる雛鶴の、松の齡も千代と啼くなり」……天晴れ秀逸〱。

小浪　お恥かしうござりまする。

師直　さて渚どのゝはこれか……「武藏野にかるかや野邊も今日よりは、花咲く春にあひにけるかな」……イヤ、渚どの、すべて假名どめは、口授口傳のござるもの。とても事に下の七文字を、花咲く春にあふぞ嬉しき。

渚　段々、有り難うござりまする。

師直　なんの〱。して、鹽谷どのゝ奥方は、どれにござ

るな。

小浪　顔世さまには、御持病が起りまして、暫らくお次に、お休みなされてゞござりまする。

師直　それは氣の毒。最早顔世どのばかり。ナニ渚どの、慮外ながら、これへ取次いでおくりやれ。

渚　畏まりました。左樣なら我れ〳〵は

小浪　最早お暇戴きませう。

師直　御勝手に〳〵。

小浪　左樣ならば渚さま。

渚　マア、小浪さま。

小浪　師直さま。

兩人　重ねてお目もじ申し上げませう。

師直　ア、〳〵。

ト始終、鳴り物にて、兩人向うへ入る。師直、思ひ入れあつて

始めて彼の君に見ゆると思へば、どうか胸がときつくやうだ。

ト亂れになり、師直、衣紋つくろひ、いろ〳〵思ひ入れ。向うより顔世御前、衣裳、襠裲にて靜々出て、平舞臺よき所へチツと坐る。

フウ、鹽谷の奥方、顔世どのな。

顔世　ハイ、左樣でござります。

師直　オヽ、さうだ〳〵。いつぞやは夜目と云ひ、ちよつと見たばかり、又とくと見れば見る程、イヤモウ。

ト思ひ入れ

ズツとこれへ〳〵。

顔世　ハイ。

師直　大事ない。これへ〳〵

顔世　ハイ……あなたが師直さまでござりますかいな。

師直　如何にも師直だ。彼の高野君だて。

顔世　お目もじ致しまするは初めて。この度夫判官、大切なる役目と申し、自らが及ばぬ腰折れ、御添削も偏へにあなた樣のお引廻しにて、兎角よろしうお頼み申し上げまする。

師直　なんの、お頼み申し上げます事がござらう。此方より頼み上げた事、早速に憎からぬ御返事、師直、手に取ると、身もとけ〳〵と致した。あの水莖の通り相違はござらぬか。

顔世　何しに僞はりを申し上げませう。

師直　すりや、眞實。

顔世　お恥かしう存じまする。
師直　イヤ〳〵、モウ、どうも斯うもならぬわいの。
　ト顔世が側へ寄り添うて
コレサ、渡りを待つ八ツ橋め。
　ト引寄せる。
顔世　エ、。
　ト退かうとする。
師直　ハテ、恥しい事はないわいの……濡れぬ先こそ露をもいとへ、そもじが得心の上は遠慮に及ばぬ。打解け召され〳〵。
顔世　ほんに、不束な自らを勿體ない、誰れござりませう、高野師直さま。あなたが思し召し下されまする段、有り難いと申しませうか、忝ないと申しませうか、身に餘りまして、お嬉しう存じまする。
　ト云ひながらソロ〳〵と側へ寄る。師直、現になり、同じやうに側へ寄り
師直　さうお云やつても、矢張り判官どのが可愛からうが。
　ト嫌らしきこなし、顔世、身を縮め
顔世　なんのマア、人こそ見えね秋は來にけりでござりまする。
師直　そんなら、これからこの師直を、可愛がつて給はるか。
　ト手を取つて、嫌らしきこなし
顔世　エ、モ、つんと役目とは云ひながら、アタしつこい。
師直　ヤ、、何がしつこい。
　トむつとする。
顔世　サア、それは。
師直　身共が事か。
　ト思ひ入れ。顔世、こなしあつて、師直が側へ寄り
顔世　イ、エイナ、遠いは花の香を添へて一入戀しさいや増せど、常々側に居りますと、つい愛想が盡きまして。
師直　判官には飽きが來たか。
顔世　アイナア。
師直　誠に、戀は人目に隔てられ、たまさかの逢ふ瀬に、互ひに憂を語るが樂しみ深きと、文にもあれば、ナウ、顔世どの。
顔世　サア、何事も私しが申す詞を、お聞入れ遊ばして。
師直　役目の名利。我が君さへ、何かにつけてお心置かる師直なれども、そもじの仰せには、しんぞなよ竹。
顔世　そんなら、判官さまのお役目も。

師直　首尾よう勤めさすワ。
顔世　歌の事も。
師直　添削に、及ばぬ。
顔世　エヽ、忝なうござりまする。
師直　忝ないが誠なら、ちよつと爰で。
　ト引寄せる。
顔世　エヽ、滅相な。
　ト飛び退く。
師直　ハテ、大事ないわいの。
顔世　それでも人目もあり。
師直　イヤ、氣遣ひない。身共が詞を出さねば、誰れあつて、一人も爰へ來る事は叶はぬ。苦しうない。ツイちよつと。
　ト抱きつくと振り放し
顔世　アヽ、コレ、モシ、……又の逢ふ瀬にしつぽりと、お語り申しませう。マア、どうぞ。
師直　否か。
顔世　サア、否ではなけれど、今日はお添削、大切な場所でござりますれば、お免しなされて下さりまし。
師直　イヤ〳〵、斯う云ふ首尾は又とあるまい、是非ちよつと。
顔世　それでも、つんと面伏せに、どうも。
師直　身共もならぬ〳〵。
　ト無理に引寄せる。
顔世　アヽ、コレ。
　トその手を振り拂ひ、此方へ來て
如何に執事なればとて、みだら千萬な。お嗜みなされませ。
　トきつと云ふ。師直、夢中になり
師直　コレ、どうぞ、拜む〳〵。
顔世　否でござります。アタしつこい。
師直　否でも應でも、是非ちよつと。
　ト振り拂ふ。早舞ひになり、顔世、向うへ走り入る。師直、突き倒された儘、後見送つて、思ひ入れあつて、
ソロ〳〵と起き上がり
今の顔世が體たらく、この文とは拔群の相違。
　ト以前の文を出し、とつくりと見て、合點のゆかぬ思ひ入れにて、文臺の短冊を取上げ
師直　これが顔世の詠み歌……「さなきだに重きが上の小夜衣、我が妻ならぬ妻な重ねそ」……こりや、コレ、新

古今の古歌。

ト文を見て

つれ／＼なる春雨に、まさり行くなみだ川とや、淺き渡りとは思ひながら、稲船のいなにもあらぬ心なれど、只人目の關の許しなければ、御返事も心ならず。

トまた短册を見て

「さなきだに重きが上の小夜衣、我が妻ならぬ妻な重ねそ」この古歌に添削と、身共に見せる顔世が心體。この文言とは拔群の相違……さりながら兩方共に筆蹟は同筆ハテ心得ぬ。

〽さては我が戀の叶はぬ印し、恥しめたりと心づき。

ト短册と文を見て思ひ入れ。

思ひ出だせし事こそあれ。昔し仁平の頃、兵庫頭源頼政、木がくれてのみ月を見る夜の殿守り怠らず、或る夜官女あやめの前を垣間見、思ひ初めし折柄、帝これをきこし召し、彼のあやめを賜はらんと、多くの官女を一樣に出で立たせ、此うちにてあやめの前を選び取れとの勅命なれば、頼政一期の面目を思ひ、五月雨に澤邊の眞菰水こえて、いづれあやめと引きぞわづらふ、と取敢へず詠せし時、官女のあやめの前打笑みしゆゑ、さてはと心得、宿の妻とする。それとこれとは品變れど、心は一つ、この筆蹟に、詞巧みに色を失ふ墨色、思ひ廻せば、顔世は藏人右少辨俊基が娘にて、大内に仕へ、歌道は吉田の兼好に習ふとも聞く。それに引きかへ、この墨つぎと云ひ、手蹟の拙なさ。今の詞の云ひなしは、下品な女。エヽ、聞えた。さては身共が心を掛け、重太郎を以て口說きしゆゑ、この度の判官が役目、首尾よく勤めさせんばかり、面ざし似たる外の女を與へしに相違ない。思へば／＼不敵とや云はん。ハレ奇ッ怪千萬。

ト大名五人、奥より出て

大一　師直どの。最早還御の刻限でござる。

師直　これは何れも。

五人　供奉の御用意あられませう。

師直　左樣いたさう。

ト手を叩く。

侍ひ　ハッ。

ト侍ひ、廣蓋に大紋を乘せ、持ち出ると、序の舞になり、師直・裝束着替へる事いろ／＼あつて、皆々手傳ふ。

五人　イザ、お越しあられませう。

師直　ア、〳〵
ト花道の中ほどまで行き立ちどまり、こなしあつて、懐より以前の短册を出し、無念なるこなし。
大一　イカサマ、ハヤ、執事職をお勤めなさるゝは、御苦勞な儀でござる。
大二　四海の政道は申すにまでもなく、誠に箸のこけた事も、師直どのゝ御心配。
大三　それゆゑ日増しに御威勢強く、湖をかい干さうが、富士の山を逆しまに、なされうが、お心の儘。
大四　唐土はいざ知らず、日本の內の事ならば、お心に叶はぬと云ふ儀はござらぬ。
大五　そこを以て存ずれば、天地開き始まつてより、斯程の儀はござるまいかと存ずる。
五人　左樣でござる。
師直　かばかり諸侯の尊ぶ師直、素性知れざる女めに。
五人　如何なされた。
師直　チエ、。
トきつと思ひ入れ。
呼び　還御。
ト皆々、師直と顏見合せ
師直　サ、參りませう。
ト下がり葉にて

幕

二幕目　足利御殿廣間の場

役名 ── 高野武藏守師直。鹽谷判官高貞。桃井若狹之助安近。石堂右馬之丞。山名次郎左衛門。仁木多門正。茶道、珍才。

本舞臺、打拔き、覗き繪の金襖。下座の方に、兩面緞張りの衝立、すべて足利御殿廣間の體。好みあり、幕の內より大名四人、素袍、烏帽子にて居並ぶ。管絃にて幕明く。
ト揚げ幕にて
呼び　石堂右馬之丞出仕。
呼び　山名次郎左衛門出仕。
ト向うより、右馬之丞、次郎左衛門、烏帽子、大紋にて、奥より多門正、同じく烏帽子、素袍にて出る。
多門　右馬之丞どの山名どの、御出仕でござるか。

右馬　仁木氏、はや勅使にもお入りでござる。
次郎　御對顏は相濟みましてござるか。
多門　イヤ、只今お能の始まりでござる。
右馬　して、師直どのには、何れに。
仁木　何かお懸合ひの事ござつて、お白書院へ、出られましてござる。
大一　暫らく間もござれば。
大二　御兩所は先づ〳〵これへ。
右馬　イザ、山名氏。
ト鳴り物にて、本舞臺へ座につく。向うより師直、若狹之助、烏帽子、大紋にて出る。
師直　石堂氏を始め、各々、出仕御大儀千萬。
右馬　武州どのには、前夜よりお詰め切りの由、別して御苦勞、察し申す。
次郎　先づ〳〵、これにて暫らく、御休息あられませう。
師直　イカサマ。
ト兩人舞臺へ來り、座につき
高砂のお能終るまで、先づ息をつきませう。
次郎　お役目とは申しながら、御老體の貴殿、さぞお疲れでござらう。

師直　君へ御忠節と存ずれば、さのみ疲れも致さぬ。夜前酉の上刻より御旅館へ、勅使院使の御機嫌を伺ひ、直ぐに出仕つかまつり、今日の指圖萬端、三日三晩と申すものは、まんぢりとも臥せられぬ。餘程きけばきゝました。ハヽヽヽ。
右馬　若狹どのにもこの度のお役目、何かと御心勞にござらう。
若狹　未熟なる安近、萬事師直どのゝお下知に依つて、只今までは役目も大半、首尾よく相勤めましたれば、各々方にもお喜び下されい。
師直　ナニ、若狹之助どの、院使の御座は牡丹の間、お香爐の火廻り等を、氣を附けさつしやれたか。
若狹　先刻とくと相改め、麁相なきやう計らひましてござります。
師直　よくぞお心附かれました。アヽ、同じ饗應使を勤めても、相役の判官は、何を致して居らるゝか。ハテ苦々しい。
ト右馬之丞へかけて、こなし。
右馬　若狹どの、御同役鹽谷どのには、未明より出仕いたされたでござらうの。

若狹　成る程、先刻お廊下におきまして、遠影にちよつと見かけましたが、慥かに判官高貞どの。

多門　アイヤ〳〵、若狹どの、それは貴殿のお目違ひ。鹽谷どのには、未だ出仕は致されぬと存じた。ナア、各々。

大一　左樣でござる。何れの間にても我れ〳〵は

三人　未だ見かけませぬやうにござる。

右馬　すりや、饗應使たる高貞どのには。

次郎　群侯の方々さへ、殘らず登城相濟んだるに、當役たる高貞どの、斯くまで遲刻召さるゝとは、こりや、如何いたした儀でござらう。

師直　如何なるゆゑか存ぜぬが、判官どのには、兎角役目を麁略に致され、さて〳〵氣の毒千萬でござる。

大四　諸侯多きその中より、饗應使に選まれしは、武士の身の面目。

大三　寢食も打忘れ、怠りなく勤めるも、君への忠節と申すもの。

大二　却つて麁略に致さるゝは、第一君への不忠。但し、役目を慰みと思うてござるか。

大一　何にもせよ、我まゝ千萬。こりや、キッとお糺しなされい。

右馬　兵庫どの、扣へさつしやい。判官高貞は一城の主、さほどの事に辨まへなくして、國の政事が治まらうか。全體病身の高貞どの、この程よりの心遣ひ、例の持病がさし起り、それゆゑ遲參の儀でござらう。

多門　石堂どのゝ御意ではござれど、急病ならば早速その旨、言上にも及ぶべきところ

次郎　全體この度の勤め方、上を恐れぬ横道の振舞ひ。これが彼の俗に云ふ、馬鹿太いのでござる。

皆々　左樣でござる。

ト鳴り物キッパリ鳴る。向うより、判官、長上下にて出て、皆々を見て、恟りしたる體にて、ツカ〳〵と本舞臺へ來て

判官　これは〳〵各々、お早い御出仕でござる。某も取敢へず、只今出仕つかまつつてござる。

ト師直、脇見して居る。右馬之丞、若狹之助、氣の毒なる思ひ入れ。

右馬　判官どの、漸やく只今でござるか。

判官　石堂どの、何れも……桃の井どの、只今登城の砌り、申し合せの使者を遣はしてござれば、はや御出仕と承り、少し敗亡いたしながら、罷り出でましてござるが、

貴殿に執事御下知の刻限よりは、餘程お早う御出仕なされたは、如何の儀でござる。
若狹　刻限は即ち。
ト師直を見る。師直、咳ばらひして、云ふなと云ふ思ひ入れ。
有馬　イヤ、判官どの、禮服が相違いたしてござる。
判官　この儀も即ち長上下と、執事よりお指圖ゆゑ。
ト若狹之助を見て
有馬　相役たる若狹どのにも大紋、各々方には、ムウ。ソレ。
ト立つて、文字張りの衝立の蔭へ入る。
珍才々々。兼ねて用意の、大紋々々。
珍才　ハア、。
ト珍才、廣蓋に大紋、烏帽子を乘せ、外に、茶道、附き出て、着替へる。心の内急くこなし。叱り廻し、紐を引き切る。判官、ギックリ、思ひ入れ。此うち
師直　何れも、只今高貞には、出仕召されたではござらぬか。
多門　只今罷り出でられましたが、何かいから、狼狽へ、何方へか參られてござる。

皆々　判官どの、高貞どの。
トロ々に呼ぶ。
判官　ハツ、ハツ〳〵。
ト袴の紐を結びながら、向うへ出て、下の方に坐る。師直、ヂロリと見て
師直　判官、おてまへには、なんと今日の饗應を心得てござる。
判官　ハツ〳〵。
師直　對顏の式は分けて大禮。萬事麁略なきやうに、くれぐれ申し渡したるに、斯樣な遲刻召されたは。
判官　ハツ〳〵。
師直　勅使のお成りは卯の上刻、お能も二番目、はや、中入りでござるぞや。
判官　エ、〳〵。
ト大きに悔り。
師直　若狹どのには、寅の刻より登城、諸侯の方々一人も殘らず、先刻までに相詰められしに、おてまへ、役儀を蒙むりながら、故意に遲參せられしか。君の御意を蔑ろに致すのか。
判官　イヤ〳〵、全く左樣ではござらねども、今日の式作

法は、夜前お指圖下さるべき由ゆゑ、お屋敷へ參りしかど、御退散なき由にて、御對面も下されず、また今日の刻限は、巳の刻と兼ねてのお指圖なれども、大切の役儀でござれば

師直　コレサ〳〵、高貞、斯く云ふ師直は執事の役目、夜と共に御殿に相詰め居つて、君の御用を承はらねばなり申さぬ。御邊が何か尋ねにござらうかと、屋敷へ歸り待つては居られぬ。合點の參らぬ事があれば、なぜ未明より登城召されぬ。身にも應ぜぬ大役を勤めれば、一夜二夜は眠らずにござつても、强ち苦勞なものでもない。エエ、聞えた。こりやナニ、奧方顏世どのゝ懷へばかり入つてござるゆゑ、朝起きが苦しいか。ハヽヽヽヽヽ、さうであらう。役目と云ふも暫しのうち、君の御用終るまでは、ちとお嗜なみなさるがよい……嗜なまつしやい判官。

判官　これはハヤ、怪しからぬお詞。愚昧ながらも、さほどの儀は。

右馬　アイヤ〳〵、高貞どの、全く貴殿のお心得違ひ、それゆゑ遲刻召されたであらう。御自分の不調法、申し譯には及び申さぬ。執事たる師直公へ對し、お詫びを〳〵。

トこなしあつて云ふ。判官、ヂツと思ひ入れ。

判官　重々の不調法、眞平御免下されい。

ト平伏する。

次郎　鹽冶どの、すりや御自分の不調法とな。

判官　申し譯もこれなき仕合せ。

皆々　ハテ、笑止千萬。

右馬　イヤ、師直どの、判官にも不調法を顧みて、恐れ入つて居られまする。何卒御立腹をなだめられ、萬事よろしくお指圖の儀を。

師直　身共とても高貞に對し、遺恨あると云ふでもござらぬ。オウ判官、おてまへ、定めて承知であらう……畢竟只今のやうに申すも、御用を大切に存ずるゆゑ、石堂どのの御挨拶と申し、この上は改めて、何かとお指圖いたすでござる。

右馬　早速お聞入れ下され、拙者に於ても何程か大悦。高貞どのにも、御安堵でござらう。

判官　千萬忝なう存じまする。

ト奧にて「田村」の切りになる。

若狹　お能も最早田村の終り。

師直　次は東北、春日龍神、祝言終らば勅使の配膳。



文化九年七月中村座所演



三世中村歌右衛門の師直　二世關三十郎の判官

多門　我れ〳〵も暫しのうち
皆々　詰め所へ罷り扣へませう。
判官　然らば拙者はお次へ參り、配膳の用意仕りませう。
師直　アイヤ〳〵、今日勅使へ献上の品、只今これにて內
見いたし、その上よきに指圖いたさう。
判官　只今、よろしく願ひ存じまする。
師直　桃の井どのには院使より、不時の御用も計られず、
花鳥の間に扣へさつしやい。
若狹　畏まつてござります。
師直　方々、御大儀。
右馬　後刻、御意得ませう。
ト鳴り物になり、右馬之丞、先に皆々奧へ入る　師直、
判官、殘り
判官　珍才々々。献上の品を、これへ〳〵。
珍才　ハア。
ト白木臺に掛け物の箱を乘せ、外二人の茶道、黃金と
巻き物臺を持ち出で、よき所へ並べ、珍才、判官へ目
錄を渡し入る。
判官　目錄に引合せ、御苦勞ながら御內見。
ト師直、書付けを取り、引き合せ見て

師直　白綾十本、黃金二十枚、外に墨蹟と印しあるは。
判官　先達てお指圖下されしゆゑ、拙者が家に傳來せし、
夢想國師の松月の一軸、家の規模と存ずるゆゑ、献上
仕りたう存ずる。
師直　承り及んだる松月の掛け物は、日本に只一幅。國
師の墨蹟、拜見いたす。
判官　憚りながら。
ト臺とも差出す。師直、披き見て
師直　こりやアなんだ。松の月。尤も聲は同じけれど、世
に知る照月は卽ち照る月、松と照との文字の相違、斯樣
な似せ物が差上げられうか。アヽ、馬鹿な事を。
ト抛りつける。
判官　武家の歌人と呼ばれたる、貴殿とも覺えぬお詞。松
月を照る月とは、聊か思し召し違ひかと存じまする。
師直　ヤ、なんと。
判官　すべて、月は照るを以て賞翫するは、常の習ひな
れども、また文に綴り、或ひは歌に詠ずる時は、月を隱
すが和漢の文法、照月は熟字にあらず。斯ほどの儀を辨
まへず、不學短才の國師ならば、例へ能書たりと云ふと
も、何を以て寶とすべきや。サア、斯やう申さば何とや

ら、烏滸がましくはござれども、外に意味ある事なれば、御賢慮承りたう存じまする。

師直　その始めを知ると雖も、その終りを知らずんば、必らず道を解く事なかれ。おてまへ如き文盲人に、論ずるには足らねども、後學の爲云つて聞かせませう。

ト少し居住ひを直し

照月と云ふ唱歌は、ア丶、歌仙源の順が歌に、水の面にてる月波を數ふれば、今宵ぞ秋の最中なりけり……照る月浪は卽ち照月、この歌を歌仙に入れしは、拙者の麁相か、詠み人の文盲か、畢竟この座に、何れも居らねばこそ、外にて左樣な事をお云やると、思はぬ耻辱を取り申すぞ。ハテ、笑止千萬。

判官　只今御意なされたる、順が詠歌に、水の面にてる月波をかぞふれば、と詠じたるは、月のてると云ふ心にあらず、睦月より葉月まで、正月二月と三月と、月なみを數ふれば、今宵ぞ秋の最中なりけり、と准へて詠ぜしは、天晴れ秀逸、照ると云ふ字は緣語にて、照月は熟字にあらず。但しは又、高貞に、誤まりばしござるかな。

師直　サ、それは。

判官　この心を以て鹽谷が家に傳來せし、一軸の文字は卽ち松の月、國師の正筆に紛れござらぬ。智者も千慮に一失と、文武に秀でし師直どのなれども、聊かこの儀はお誤まりか。今一應も再應も、とくと御賢慮めぐらされ

ト此うち、師直、掛け物を寸々に引裂く。判官、惘りして

ヤ丶丶、こりや獻上の一軸を。

師直　破却しても苦しうない。

判官　ヤ、なんと。

師直　大切なる勅使へ獻上、麁相の品を差上げては、都へ對して君の御恥辱。金銀の惜しむまゝ、有り合せたこの墨蹟、餘り粗末に見えるゆゑ、引裂き捨てたがなんとする。

ト判官、キッとなりて

判官　貴殿、そりや、餘りの我まゝ。

師直　何が我まゝ。斯樣な事を吟味いたすが、執事たる身共が職分。

ト云ひ／＼立ち上がり

この白綾も見苦しい。斯樣なものは差上げられうか。馬鹿の事を。

ト臺を踏み碎く。判官、こなし。師直、肩にて笑ひ、

悠々と奥へ行かうとする。ツカ〳〵と寄つて、袖を扣へ

判官　この品が御意に入らずば、何卒外にお指圖を。

師直　今日は御用が繁多、相手になる暇がないわえ。

トむごく振り切り、師直、こなしあつて、奥へ入る。判官、いろ〳〵こなしあつて、奥へ駈け込まうとする此うち右馬之丞、下の口より出かゝり居て、この時ツカツカと向うへ出て

右馬　判官、お待ちやれ。

判官　石堂どの。

右馬　私しの宿意に依つて、家の大事を引出すか。

判官　サ、それは。

右馬　師直が我まゝは、今更の事にあらず。

判官　ぢやと申して。

右馬　急く場所でござるまい。マヽ、とくと心を靜められよ。

ト判官、ヂツと下に居て

判官　御懇志の御意見、承知いたしてござる。

右馬　御合點が參つたか。

ト判官、碎けたる臺を取集め

判官　差當つて斯くの仕合せ。

右馬　當惑は尤も至極、さりながら、例へ品は變るとも、勅使の御機嫌に叶ひなば、今日の式は相濟む。獻上の品、午の上刻、貴殿に代つて、よきに計らひ申す間、御安堵なされたがようござる。

判官　すりや、お計らひ下されんとな。忝なう存ずる。

右馬　お能終らば配膳の刻限、無念を忍んで指圖を受け、萬事間違ひないやうに。御承知でござるか。

ト判官、少しウツトリとしたるこなし

判官　委細承知仕つてござる。

ト右馬之丞、つく〴〵と見て

右馬　改めて申すには及ばねど、身を立て、道を行ふは、堪忍の二字が第一。斯く申す右馬之丞、五ケ年以前、饗應使の折柄、先ツこの如き種々の狼藉、討ち果さんと幾度か、刀に手をかけたれども、退いて思慮いたせば、この身ばかりか家の斷絶、先祖の忠勤、水の泡とならん事本意ならずと存ぜしゆゑ、武道に替へ、恥辱に替へ、堪忍を守りしゆゑ、只今までも恙なく、ゆるがぬ石堂右馬之丞、勅使の歸路も最早明朝。今暫らくの間なれば、先祖へは孝、君へは忠、家の大事に思ひ比べ、御辛抱が肝心

でござるぞや。

トいろ〳〵こなしあつて、判官、ホロリと泣く。

判官　朋友の交誼とて、御懇志なる今のお詞、高貞、心魂に徹してござる。この上は御意に從ひ

右馬　例へ師直、權威に募り

判官　無禮狼藉いたすとも

右馬　お役目首尾よう相濟むまでは

判官　卑怯未練と諸大名の

右馬　後指さゝるゝとも

判官　君への忠義、家の大事。

右馬　キツと愼み召さるぢやまで。

判官　御安心下されい。

右馬　ホヽ、それでこそ大丈夫。大功は細瑾を顧みず。

判官　石堂どのには、先づ〳〵詰め所へ。

右馬　毛も角も。

ト行かうとして立ち止り

誰が爲の名なれば身より惜しむらん。

判官　果敢なきものは武士の道。

右馬　取り得がたきは、弓矢ぢやよなア。

ト管絃になり、右馬之丞、心を殘し奥へ入る。

判官　朋友多きその中に、石堂どのゝ今の敎訓、我が爲には金言良藥

ト云ひながら、獻上物を見て

とは思へども餘りの法外。

ト無念のこなし。九ツの時計の中へ、管絃を打込み、若狹之助、長上下に改め、三方に膳部を飾り、目八分に捧げ出て

若狹　高貞どの、最早配膳の刻限でござる。御邊には何ゆゑこれに。

判官　ナニ、最早配膳の刻限でござるとな。併し拙者には執事よりお指圖もござらぬゆゑ、如何あらんと見合すうち、見ますればお三方。すりや、お料理は七五三でござるか。

若狹　執事よりのお指圖でござる。

判官　ハテ心得ぬ。役儀は同じ饗應配膳、先達て拙者へは三汁一菜、膳部は即ち掛け盤と、旁々のお指圖ゆゑ、その用意申しつけしが、貴殿へは七五三、身共へは三汁一菜、お料理の相違と云ひ、ホイ。

ト奥より次郎左衞門、出て來り

次郎　饗應使は何れにござる。配膳の刻限でござる。お膳

部を、早く〳〵。

若狹　ハツ〳〵、高貞どの、して貴殿には如何召さるゝ。

判官　御料理と云ひ御膳部まで、拔群の相違なれば、今となつては火急には。

トうろ〳〵する。

大名　御膳部は如何でござる。饗應使はどれにござる。

ト云ひながら、多門正、大名四人出て來り

多門　これサ、桃の井どの。執事より御催促でござる。なぜ御膳部は持參召されぬ。

若狹　只今差上げんと致すれども、同役の高貞どのには。

次郎　ハテ、判官にはお構ひなく、貴殿は早く差上げさつしやい。

若狹　ぢやと申して。

仁木　刻限が延引いたす。

四人　早くござれ〳〵。

トロ々に云ふ。若狹之助、是非なく奧へ入る、判官、ウロ〳〵して

判官　若狹どの、暫らく〳〵。

ト行かうとするを、次郎左衞門、隔てゝ

次郎　判官どの、御自分とても饗應使の當役、なぜ早く御膳部を差上げ召されぬ。

判官　その用意も仕れども、お膳部の相違と申し

皆々　何が相違仕つた。

判官　桃の井どのは七五三、拙者は三汁一菜と。

仁木　そりや、何者が指圖いたした。

判官　執事たる師直どのより。

師直　イヽヤ、身共、左樣なお指圖を致した覺えはないぞ。

ト管絃になり、師直、奧より出て來る。

判官　師直どの。兼ねて貴殿のお指圖とは、萬事相違いたせしゆゑに。

師直　指圖とは何が違つた。

判官　今朝登城の刻限と申し、大紋を長上下と仰せ聞けられしゆゑ、先刻も見苦しき敗亡。それは格別、今となつて、差上ぐべき御膳部と云ひ、お料理まで。

師直　七五三、五々三、殿上人の膳部の定例、掛け盤は旅館の御膳部、斯程の事は師直が、例へ指圖いたさずとも大抵知れた堂上のもてなし、さほどの事も辨まへず、饗應を勤め召さるゝか。

判官　あらまし覺悟は致せども、今日の儀はお指圖ゆゑに。

師直　默れ判官、我が君のお目鏡にて、執事を勤める高野
　師直、左樣な指圖を致さうか。
判官　ヤ、
師直　但し器具の用意はないか。おてまへ用金拂底なら
ば、なぜ役目ゝ辭退いたさぬ。なんと何れも、聞かつし
やつたか。判官は困窮ゆゑ、饗應の器物が備はらぬさう
でござる。なんと不便ではござらぬか。
次郎　僅か五萬石か七萬石、大神宮のお初穗か、はつち坊
主の報謝米ほどの身上で、常に借上をやらるゝゆゑ、か
かる大じな役目　時は、ぎつちり手閊へて、得ては斯や
うな尾が出るものでござるて。
多門　家の規模と云ひながら、身にも應ぜぬ大役を、辭退
もせず勤めるは、彼の下說に申す、人參飲んで首を縊る
やうなものサ。
大一　とゞのつまりは滿足に、なか／＼生きてはござられ
ますまい。併し、腹へ突ッ込んでは、後へも先へも參り
難し。
大二　のたうち廻つて苦しむより、淵川へでも身を投げる
か、但し首でも縊る方が、一思ひでようござらう。
大三　左やう／＼、相應な川でも見たてゝ、ひいやりと飛
び込んで、命を果すが增しでござる。
大四　それよりは、まだ心安い儀がござる。朝夕三度の食
を止め、飢え死を召さるゝが、高貞どのゝ分相應。左樣
ではござらぬか。
皆々　フ、、ハ、、、、
　ト判官、いろ／＼無念のこなしあつて
判官　師直どの、さては高貞に遺恨あつて、諸侯滿座の席
に於て、某に恥辱を與へんといふ企みよな。
師直　企みなどとは何の戲言。高貞、其方は大罪人たぞ。
判官　ナニ、高貞を大罪人とは。
師直　なに恨みあつて恐れ多くも、我が君を調伏いたした。
判官　何がなんと。
師直　慥かな證據はこの一首。
判官　その短册を證據とは。
師直　汝が妻の顏世より、予が添削をと持參の詠み歌……
　「ちらさばや見ぬ唐土の鳥は來じ、桐の葉わくる秋の夜
の月。」歌の心は治まれる御代をさみせし、天爾波の運び
なんと調伏ではあるまいか。
判官　イ、ヤ、その歌は相違いたした。
師直　ナ、、何がどうした。

判官　奥顔世が持參せしは、新古今のうち、古歌の短册。
師直　すりや、小夜衣のこの古歌よな。
　トまた一枚短册を出す。
判官　如何にも。
師直　フム、さては顔世と云ひ合せ、古歌に添削を望みしは、恥辱與へん汝が結構……「さなきだに重きが上の小夜衣、我が妻ならぬ妻な重ねそ。」と、古歌を以つて師直が、戀慕を恥しめ恥辱を與へ、その上、素性賤しき女を顔世などと似作らせ、某をうつけにして、よくも身共を計つたな。淺き企みにやみ／＼と、陷るべき師直ならず。奇ッ怪千萬。
　ト判官に短册を打ちつける。
判官　これは存じ寄らぬお疑ひ、その儀は高貞、夢に存ぜず、奥顔世が後にての噂。
師直　その噂、何と云つた。
判官　サ、その儀は、
次郎　顔世どのに相談召され。執事を騙かり、この度の役目、首尾よく勤めた上、夫婦寄つて馬鹿者にする企みであらうが。
判官　怪しからぬ儀を御意なさる。畢竟それは物の間違ひ。

多門　その間違ひとは得知れぬ女を、顔世に仕立て師直どのを、物の見事に騙かつたは、無事に指圖を受けん爲。
　判官高貞、武士でござる。女童を賴りと致し、大
判官　切の役儀が勤まりませうか……如何やうな儀がござつたか、夢聊か存せぬ事。山名どの、朋友の交誼、何卒執事の御機嫌を。
次郎　存じ申さぬ。おてまへのやうな侍ひを、朋友なぞとは穢らはしい。
　ト判官、また多門正に向ひ
判官　仁木どの、貴殿とは圍碁の交はり、近頃以て御苦勞ながら。
多門　否だ、存じ申さぬ。
判官　陶山どの、各々、どうぞ師直どのへ、お執成しを、
　ト皆々を賴む。何れも顔を外け、空うそぶいて居る。
　ト、師直が側へ行き
某が不調法にて、配膳の役の仕損じは、返す／＼も身の誤まり。まだも賴みは下城の式。何卒お指圖下されい。
　ト師直、顔を外ける。
愚妻の顔世に御執心とあらば、拙者キッと申しつけ、武士の面目を捨てましても、お心に委せませう。この役目

仕損じましては、不忠者の名を殘すか、歎かはしう存ずる。家の瑕瑾もこの身の恥辱も、忠節には代へられませぬ。判官高貞、この如く、兩手を突いてお願ひ申す。

ト こなし、泣く。

師直　イヽヤ、罷りならぬ。

判官　エヽ。

師直　人我れに辛ければ、我れ又人に辛しの譬へ。顏世が事も望みでない。

判官　すりや、理を非に枉げて斯ほどまで。

師直　なんと判官、思ひ知つたであらうがな。

判官　ムウ。

ト 柄に手をかけキツとなる。

師直　帶劍に手をかけるは、師直を切害するか。足利の殿中だぞ。

ト 判官、ヂツと思ひ入れ。

執事の職は君を補佐し、四海の政事を司る師直に、手向ひするは、我が君へ敵するも同然。即ち鯉口三寸拔くや否、從類までも逆磔刑。サヽ、拔かぬか。切らぬか。お身達如きなまくら刃金、師直が身には立たぬ。何を小癪な。

ト 此うち判官、提げ緒にて柄を巻き、いろ〳〵あつて氣を替へ

判官　ハヽヽヽ、なに恨みあつて手向ひを仕らう。この上のお情には、せめて御下城の式なりとも、勤めたきこの身の願ひ。お指圖なし下さらば、生々世々の御高恩。モシ。

ト 袖を抑へる

師直　姦しいわえ。

ト 立ち蹴に蹴飛ばす。判官、擬勢する。

殿中だぞ。

ト 又ヂツとなる。

何れも。判官が態を見さつしやい。

皆々　よい態でござる。ハヽヽヽ

師直　うろたへ者を捕へ、よい慰みを致し、積欝を晴らし申した。

皆々　左樣でござる。

ト 八ツの時計鳴る。

次郎　最早未の刻。

師直　はや勅使下城の刻限。奥へ參り、桃の井どのへ、指圖いたして遣はさう。

ト行かうとする。
判官　アヽモシ、この上のお情に、何卒御下城の式ばかりを。
師直　ムウ。高貞、近う。
ト判官、嬉しきこなし、側へ行き
判官　ハヽハツ。
師直　馬鹿な面だ。
ト中啓にて、面をハタと打つ。早舞になり、こなしあつて奥へ入る。皆々續いて入る。皆々續いて入る。此うち判官、よろしく一人々々へこなし。素袍を裾にて刎のけ／＼入る。判官、拳握り、ムウと思ひ入れ。
奥にて
呼び　勅使の御歸館。
ト判官、恟りして
判官　鹽谷の家の絶對絶命。
ト目釘なしめし、下がり葉になる。
さうだ。
ト勢ひ込んで、奥へ駈け込む。鳴り物靜かになり、右馬之丞出て
右馬　日頃短慮の判官高貞、後日の大事を思へばこそ、我が諫めを承知して、堪へ忍ぶ心の內。さりながら、佞奸邪智の師直なれば、この上の納まりは、ハテ、何とかな。
ト舞になり、大バタ／＼にて、珍才、奥より走り出て來り
珍才　サア／＼／＼、大事ぢや／＼／＼。
右馬　珍才々々、大變とは何事なるぞ。
珍才　何ぢや知らぬが切りました。こりや、斯うしては居られぬわえ。
ト走り入る。右馬之丞、ヂツと思ひ入れあつて、小柄にて長上下の裾を切る。此うち大名大勢走り出て行き違ふ。多門正、出て來り
多門　口論でござる／＼。
右馬　仁木氏、相手は誰れ／＼でござるな。
多門　只今鳥の間のお廊下で、鹽谷判官高貞、高野師直どのを刃傷に及び
トまた大バタ／＼にて、大名大勢出て來り
大勢　喧嘩でござる。大事でござる。
ト立ち騷ぐ。
右馬　ヤア、方々、靜まられよ。例へ刃傷に及ぶとも、それ／＼の役人あれば、各々方の與からぬ事。驚ろいて立

ち騒ぐは、武士の心懸け薄きに似たり。詰め所〳〵を持ち固め、大切に警固召され。餘り見苦しうござるぞ。

ト大音にて云ふ。

皆々　心得てござる。

ト皆々東西へ別れ入る。

右馬　君の御前、心元ない。ソレ。

ト殿立ち引き上げ、走り入る。矢張り鳴り物大バタバタにて、師直、人體崩し、逃げて出る。次郎左衛門、これを介抱して出る。

師直　師直は君を恐れ、帶劍に手はかけませぬぞ。

次郎　その儀は、我れ等證人でござる。

トこの時また大バタ〳〵にて、判官、師直を追つて出る。大名大勢附き添ひ、止めながら出て來り、判官、師直へかゝるを、有り合ふ屏風にて、キリ〳〵と立て廻し、判官を圍うて

皆々　判官どの、先づ〳〵待たつしやい。

ト判官、屏風を乘り越えて

判官　師直。

師直　なにを。

判官　エイ。

ト小さ刀を投げつける。師直が長上下の先へ仕掛けにて刀立つ。師直、轉ぶ。木の頭。次郎左衛門、この刀を拔かうとする。判官、無念のこなし。右馬之丞出て、これを制する。よろしくキザミ、

ひやうし幕

三　幕　目

鹽谷本國の場

役名——曲木久之進。奧山孫七。大星妻、お石。斧九太夫。早野三左衛門。千崎彌五郎。斧定九郎。大星力彌。大星由良之助。

本舞臺、三間の間、高足の二重舞臺、見附け時代襖。上の方、障子屋體、前に安土を築き、大的をかけ、下の方に、奧山孫七、曲木久之進、麻上下の肩を脱ぎ、弓矢を持ち、稽古して居る。紺看板の中間二人、矢取りの見得。かけ聲よろしく、下の方柴垣、枝折り戸、よろしく飾りつけ、神樂にて幕明く。

〽堪忍の文字しきせんの實あれども、時に取つてはやむ事を、鹽谷判官高貞、鎌倉にての御身の災ひ、知らぬお

國の御城内、家中集まりざゞんざやら、舞ひつ謠ひつ酒、機嫌、曲木久之進、奥山孫七、庭の安土で武藝の嗜み、その爭ひぞ君子なる、中り〳〵と矢取りが聲、一手々々に古實の射法、一寸二寸の掛け的より、心遣ひに仇矢なき、大星由良之助が内室、屋敷模樣の襠補も、地味な家老のおかもじ風、奥より立ち出で〻。奥よりお石、出て來り、

ト兩人此うちよろしくある。

會釋して

いし　これは〳〵、曲木さま、奥山さま、御酒宴の座敷をよけて、よいお心掛け。さりながら、諂諛の御代に、武藝のお心がけはお奇特。ホヽヽヽ、私しとした事が、お座敷で彼方此方のお相を致し、詞多きは酒機嫌、お免しなされて下さりませ。

〽家老の妻の顔もせず、詞を廻す發明は、實に大星の室家なり。

久之　これは、お石さまの痛み入つたる御挨拶。この久之進も御酒が過ぎて、醉ひ醒ましの弓の稽古。

孫七　拙者とても常々は、一吸もたべませねど、大星さまのお待遇で、孫七が腸は酒漬け。

いし　オヽ、けうとい。忠義でも不忠でも、まさかの時でなければ、武士の腸、詮索は切腹の時。不吉な事仰しやらずと、皆様がお待ち兼ね。私しがお迎ひに參じた程にサア、早うお座敷へ。

兩人　また御酒でござるかな。

〽詞なかばへ、奏者番罷り出て。

侍ひ　ハツ、申し上げまする。御家老斧九太夫さま、お金役人早野三左衛門さま、御登城でござりまする。

ト引返して入る。

いし　オヽ、その通り。イザ、お二人様。

兩人　御同道仕らうか。

いし　マア、お越しなされませ。

〽打連れ奥に入る間もなく、相家老斧九太夫、家中でぱりつく麻上下、のつし熨斗目に人體年輩、後に續いて金役早野三左衛門、玄關より入り來り。

トこの文句の内、序の舞を打込み、向うより九太夫、麻上下、大小。後より三左衛門、同じ形にて出て來り

花道にて

九太　三左どの、お聞きなされ。最早諸士の面々、酒宴最中と見え、あの如く囃しもの。思ひの外遲參いたして何とも氣の毒。サヽ、急ぎ出仕いたさう。

三左　仰せの如く、酒宴も餘程酣の樣子。拙者めも心せく道。御老體に似合ひませぬ、お早い御步行。

九太　サヽ、ござらつしやい。

〽心得通る廣間の方、知らせに出迎ふ家老職、大星由良之助、祝儀の上下爽かに出で立ち。

ト兩人舞臺へ來る。奥より由良之助、出て來る。始終鳴り物打ちつけ。

由良　これは〳〵九太夫どの、三左衞門どの、早速の御登城、近頃御苦勞千萬。

九太　イヤ、拙者より御亭主役の由良之助、さぞ御心配。早朝より登城いたす筈なれども、悴定九郎は鎌倉へ參勤のお供。さるに依つて一人の孫めが、祖父を附け廻して離しませず、見れば又憎うもござらず、やうやう三左が見えまして、同道仕つてござるて。

三左　成る程、九太夫どの、仰しやる通り、拙者が悴勘平めも、不屆きござつて殿の御勘當なれど、寢覺めにも思ひ出しまするは不便さゆゑ。推察仕つてござりまする。

由良　イカサマ、親心では御尤も。この間も申す通り、この度年始のお勅使、鎌倉へ御下向あつて、殿樣と桃の井若狹之助さま、饗應の役目を蒙むり給ふは、殿の譽れ、お家の規模、キツとお喜び奉れと御意。さる十一日より十四日まで、饗應のお役目相濟むと存じ、今日一家中打寄り、殿樣よりの御酒頂戴。最早諸役人は溜りの間で酒宴最中。アレ、唄ひますやら舞ひますやら、餘程酣の樣子でござりまする。

九太　イカサマ、左やう相見えまする。

トこの時下座より數多の人聲する。

〽三人とかう挨拶のうち、由良之助聞き耳立て。

由良　御玄關の番人參れ。

侍ひ　ハツ。

ト侍ひ、下座より出て

御用でござりまするか。

由良　最前より心得ず存ぜしか、只今聞けば御城内に、大勢の人聲、何事なるぞ。

侍ひ　されば、その儀は、只今大手の御門に、凡そ三尺ばかりの蜂の巢あり、山蜂一疋飛び來りて、巢のあたりを飛び巡りしに、彼の蜂の巢より小蜂多く飛び出て、山蜂を刺し殺す間もなく、數萬の山蜂群がり來つて、小蜂を殘らず刺し殺し飛び去り、これを見る人珍事なりとて、群集仕りまする儀にござります。

ト入る。

三左　ナニ、すりや山蜂の仇を報い、小蜂を殘らず。ハテナア。

九太　俗に云ふ蜂の戰ひ、耳には聞けど、善惡邪正樣々の說も、奇代の珍事。

〽これは不思議と兩人も、なんと評する詞もなし、由良之助も蜂の戰ひ、胸に當れど、さあらぬ體。

由良　すべて蜂の戰ひ、山林水邊には間々ある事怪しからず。蜂の中にも、尾に毒なきを蜂の頭とする。その蜂小蜂に刺し殺されたるに、山蜂仇を報ふと見えたり、蜂は元より節義を守る、虫なれば嘸あらん。これを思へば人として、忠孝なきは、彼の虫にも劣つたり、侍ひに猶以て、蜂こそはよき鑑ではござらぬか。

〽未然を察する由良之助、後に思ひ合すれば、さてこそ蜂の戰ひも、鹽谷の家に災ひの、その前表と知られける九太夫はにこ〳〵笑ひ。

九太　御家老の講釋、承つて會得いたしした。シタガ、虫も生あるものゆゑ、出頭を嫉み、刺し殺したものでござらう。ハヽヽヽ。

由良　仰せの通り、人でも虫でも心がなくば、論に及ばず一寸の虫にも五分の魂ひ。兎角世界は虫を殺すが武士の嗜なみ。サア、九太夫どの、三左どの、マ、奥へ。

九太　然らば左樣仕らう。老人の遲參、御免あれ。群集の諸士へ挨拶仕らう。

三左　イカサマ、これに長居はこの上の無禮　イザ、由良之助さま。

由良　イヤ、拙者は自由ながら暫時休息、お後より。

九太　御尤も。九太夫、其うち取持ち致す。三左衞門、

三左　然らばお先へ。

九太　サヽ、來られよ。

〽打連れてこそ入りにける、奥は祝儀の聲高く。

ト奥にて謠の聲する。

〽壽を祝ひ納めても、胸納まらぬ由良之助、蜂の戰ひ氣がゝりと、工風をめぐらす時計の間。

ト奥にて謠の聲する。

〽辰巳の角の櫓の遠見、あわたゞしく走り出て。

ト向うより菖蒲革の侍ひ一人、出て來り

侍ひ　ハツ、鎌倉より早打ちと見え、お城の馬場先を押し來ります。

由良　ナニ早打ちとや。其方參つて、この所へ早く〳〵。

侍ひ　ハッ。

ト引返して入る。

〽吉凶如何にと由良之助、縁に立ち出で、今や今や、待つ間程なく數多の人夫、乘り物手がたにつき〳〵も、すた〳〵息、白洲に乘り物舁き据ゆれば。

ト此うち山駕籠に大星力彌、早打ちの拵らへにて乘りこれに雲助、定役とも七八人、これを舁き、かけ聲して舞臺へ舁いて來る。

〽由良之助。聲をかけ。

由良　早打ちに來りしは忰力彌、女房參れ。息つぎに水を。

いし　ハッ。

ト奥よりお石、茶碗を盆に乘せ、持ち出て、力彌に與へ

サ、一口飲んで氣を靜め、氣をしつかりと持ちませうぞ。

ト力彌、よろしくある。

由良　コリヤ、力彌、其方參るは大切のお使ひならん。樣子が聞きたし、なんと〳〵。

力彌　ハッ、今日の早打ちは殿の御大事。

由良　如何に面々、鎌倉より凶事の早打ち參つたり。何れも參つて仔細を聞かれよ。

〽酒宴の席も俄かに散亂、斧早野赤木奥山鹽田、その外侍ひ諸役人、追取り刀で駈け出で〳〵。

ト奥より九太夫、三左衞門、俵左衞門、久之進、孫七、その外侍ひ大勢、麻上下にて走り出て

九太　早打ちとは心許なし。

皆々　仔細はなんと〳〵。

〽仔細は如何にと急き立つれば、力彌、息をつき敢す。

力彌　されば殿樣、饗應使のお役目、十一日より十四日まで、首尾よくお勤め遊ばされ、白書院にて勅答の儀式あるところ、高野師直執權の職に誇り、殿へ無禮のありしと見え、殿中にて師直へ刃傷に及び給へども、双方ともに御存命、網乘り物にてお城よりお預けとなり給ふ。それより直ちに馳せ參じ候ふゆゑ、後の仔細は存ぜず。追ひ追ひ注進御座あるべし。御賢慮あつて然るべう存じまする。

〽色を變じて述べければ、並み居る諸士は、ハッと仰天、母は力彌が側に寄り。

いし　思ひがけないお家の騒動、其方もさぞ驚ろき。定めて心が勞れうに、よう早打ちにおぢやつたなう。御評議

は皆様お出でなされば、マア、氣を靜めて休息しや。

〽脊撫でさすり勞れば、父は力彌をはつたと睨み、

由良　ヤア、未練な有様。コリヤヤイ、かゝる主君の御大事、何ゆゑ注進延引せしぞ。不屆きな悴、我が目通りは叶はぬ。キリ〳〵そこを立つてうせう。

力彌　なに命さへあるならばと、日を時に替へ打たせしに、まだ延引とのお怒りよな。

由良　時日どころか一刻を爭ふ忠不忠、詞を返す慮外者、キリ〳〵と立て。

力彌　ハハツ。

〽怒りの面色、ハアハッとばかり詮方も、力彌は案に相違して、しを〳〵立つて入りにけり。

ト力彌思ひ入れあつて入る。

いし　これは又お心のないやうな、あなたのお叱り。我が子を贔屓するではなけれど、町人であの年なれば、手跡の稽古最中。鎌倉よりこの伯耆まで二百里あまり、五日半に來りしは、出かし居つたと譽めはなされいで、遲いとてお叱りは、殿様のお大事ゆゑ、當惑なされて……九太夫さまは御老體、あなたが御思案なされぬと、御家中は闇。モシ、お氣を鎭めて下さりませいなア、

〽諫める妻を見向きもせず。

由良　只今力彌を叱りしは、殿のお大事を聞くより、我れ我れに告げ知らさんと思ふ一念にて、二百里を五日半に來りしは世の常ならず。オヽ、悴出かしたりと賞美せば、張り詰めたる一心の釣り緒、忽ち切れて命を失ふ。その期に及び耆婆扁鵲でも、いつかな蘇生する事叶はず。さるに依つて心を弛まさぬやうに、さてこそ只今叱り置き目通りを遠ざけしは、自然と念を休める故實。

諸士　成る程。

〽物に馴れたる大星と、諸士も感ずるばかりなり、九太夫、眞中に進み出て。

九太　サア、何れも。鹽谷のお家の大事、高下に依らず祿を頂戴仕る者は、臍を固めて分別どころ。双方とも御存命と云ひながら、折と云ひ場所と云ひ、全く殿のお誤まり。輕うて流罪、重うて切腹、それを思へば胸に迫り、智慧分別もなか〳〵出ぬ。由良之助どのには魂ひが餘計あつて、子息を叱り召されたは、驚き入つたる大丈夫。何かと云ふうち、二番手の早打ち來らん。この一左右がお家の決着。一家中の身の安否、何れも、退座無用。

〽云へば皆々息を詰め、二番手遲しと待ち居たる。

由良　オヽ、九太夫どの、お詞御尤も。某が存ずるは、御代穩かに治まり、武士も町人も同じく、妻子をはぐくみ枕を高く臥せらうと思へば、降つて湧いたる殿の災ひ。併し双方お命に別儀なければ、御知行献上して、お國替へと思はるゝ。これからは家老用人、すべて一家中、大小差しながら鋤鍬持たねばなりますまい。アヽ、思ふやうにはならぬ世界。斯樣な事とは存ぜず、今朝より亭主役にて甚だ草臥れ。また早打ちの參るまで、無禮ながら暫らく疲れを晴らし申さん。何れもこれにござつて、御評議を頼み入る。石も參つて介抱いたせ。

いし　常のお氣質とは事變り、九太夫さまの思し召し、あなたがお出でなされいでは。

由良　いらざる差出。其方が何を存じて。

九太　イヤ／＼、由良どの、一大事の評定、役柄は知れた事。貴殿がこの場に居らいでは。

由良　ハテ、お頼み申し上げるからは、善悪ともに御多分次第。

皆々　でも、貴公の御賢慮に。

由良　なんの賢慮。これからは算盤と秤の目でも、せゝらずばなりますまい。

いし　それぢやと云うて。

由良　ハテ、構はずと參れ。

〽身のかくまひを只管に、口には云へど心には、殿の御身の納まりを、胸にとつくと疊み込み、慾と見せたる大星が、所存も神は白書院、夫婦打連れ入りにける、九太夫後を見送つて

ト由良之助、お石、入る。

九太　ハテ、思ひがけなき大星が體たらく。アヽ、侍ひの風上にも置かれぬ家老。主君の事は毛頭思はず、その身の榮華を思ひ計る、見下げ果てたる由良之助、彼れが詞を用ひなば、萬人の誹りを受けん。今にもせよ追つての注進また來らば、善悪に依つて一家中の魂ひ定めん。何れもその旨心得られよ。

〽未だ詞も終らぬ所へ、遠見の足輕駈け來り。

ト ばた／＼にて、侍ひ出て來り

足輕　ハツ、二番手の早打ちと見え、乘り物二挺押立て、參りまするやうにござりまする。

皆々　ナニ、二番手の早打ちとや。

〽聞くより皆々立ち上がる。九太夫、急いたる顏色にて。

九太　この由良之助は何して居らるゝ。かゝる大事に便々

と、事を頼むも程のあるもの。大腰抜けでござるわい。

〽襠襦裾小短く、奥よりお石が夫の口上。

ト　お石、出て來り

いし　由良之助、殊の外疲れまして、御酒たべて居りまする。早打ちが參じたらば、よろしく御評議。

九太　コレサ、御内證、家老職がさう云うて、なんと埒が明くものぞ。御内證諸とも諸士の方々參つて、同道召されよ、早く〳〵。

いし　畏まりました。

ト　お石、諸士、奥へ入る。

〽早く〳〵と追ひ〳〵の使ひに是非なく由良之助、殿の凶事に胸も関所はふさがれて、通る物は酒ばかり、飲みさへすれば一向に、心も据り目も据れど、醉はぬ顔して座敷に直り。

ト　奥より由良之助、醉ひたるこなし、諸士に介抱されて、出て來り

由良　何れも御苦勞、二番手の早打ち參る由、キツと承知仕つた。

〽はや巻きかける管よりも、綱引人歩が、エイ〳〵〳〵、體はびつしり汗雫、二挺の乘り物お白洲に、どつさり下ろせば、九太夫聲かけ。

ト　此うち向うより千崎彌五郎、斧定九郎、早打ちの形、山駕籠二挺、雲助大勢舁いて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。

九太　只今の早打ちは、千崎彌五郎と悴定九郎な。五臓六腑を揉み切つたりとも、肺の臓全くば、物の云はれぬ事あるまじ。注進の様子。サヽ、なんと〳〵。

〽早う〳〵と老人の、氣いら立ちに千崎彌五郎、咽喉をうるほし、兩眼に涙をそゝぎ。

彌五　先達て力彌どのゝ御注進にお聞きの通り、勅使お着の始めより、定九郎と某が、殿のお側に附添ひ奉り、十四日勅答の時、兩人ながら配膳のお役に伺候のうち、殿師直を刃傷に及び給ひ、お誤まりの極まり、お預けの館にて、殿はその夜

皆々　ヤ、

彌五　御切腹でござりまする。

皆々　ヤア。

〽聞くよりハツと並み居る諸士、水に離れし轍の魚、ひれふし吐息をつくばかり、九太夫五體を慄はしながら。

九太　して〳〵悴、御舍弟縫之助さま、お家相續なさる



文化九年九月中村座上演　二世關三十郎の彌五郎

か。
定九　されば、あなたは御別條なく、石堂さまに御入り。まつたお屋敷も卽座に召上げられ、奥方初め諸家中も散り散り、一先つ御本國へ上らんとの、評定にござりまする。
〽云はせも果てず刀押取り、白洲に飛び下り、定九郎が髻摑んで、ぐつと引寄せ。
九太　ヤイ、爰な卑怯者め、その節例へ配膳の役なりとも卽座に駈けつけ、師直を打ちとめ、なぜ殿のお憤りを晴らし奉らぬ。さなくんば鎌倉にて追ひ腹を仕り、冥途のお供いたさぬぞ。生き長らへてノメノメと、どの面下げてこの早打ち。エヽ、親まで武士を捨てさす悴。見るもなかなか穢らはしい。
〽老の腹立ち氣の張り弓、押取つて、りうりうと、罵り立てられ定九郎。
定九　拙者も左樣存ぜしかど、今生にて只一目、親人に御對面。
九太　まだ吐かすか。家を出る時妻子を忘れ、刃を取つてその身を忘るゝとは、戰場へ赴むく武士の心得、腐り切つたる根性の悴、御城内には暫時も叶はぬ。御當ちや、出てうせう。
定九　ナニ、拙者めを御勘當とや。
九太　長居せば、手は見せぬぞ。
定九　ヘイ。
〽父の怒りに定九郎、顏も得上げずすごすごと、御門外へと出て行く。
ト定九郎、こなしあつて向うへ入る。
〽始終を聞き居る彌五郎は、ずんと立つて二腰拔き出し由良之助の前に置き。
彌五　只今九太夫どのゝお詞を、つくづくと思ひ廻せば、重々不忠者とあつて、某追ひ腹いたしたりとも、草葉の蔭にて亡君の、御心にも叶ふまじ。それにつきこの刀こそ、殿より拜領、お心に叶はぬ某、帶するは畏れあり、その上、今日より主なしの天竺浪人、卽ち此まゝお預け申す。この後一つの功を立て、御所存に叶ふ事を仕らば、その時お返し下さるべし。偏へに願ひ奉る。
〽頭を下げれば由良之助、熟睡のとろとろ目。
由良　成る程、千崎、それよろしからう。なかなか武士は立ちますまい。云はゞ臆病、腰拔け侍ひ、拜領の刀は似合はぬ。由良之助、キッとお預かり申した。今より浪人

の其方、某が目からは誠の武士とは思はれぬ。さればこの座に居つて面目もあるまい。勝手次第に出て行きやれ。サア、行かれい、早く出てお行きやれ。

〽怒り上戸の怒り聲、彌五郎返す詞もなく、しをれ出づるぞ不便なる。

ト兩人よろしくあつて、彌五郎、下手へ來り、思ひ入れあつて、柴垣の蔭へ忍ぶ。

〽九太夫顔を打ち守り

九太　酒量性を計ると、虚實の分らぬ御家老職。かゝるお家の一大事に、由良之助、餘り酒が過ぎ申すぞ。

由良　成る程、御酒たべ申した。併し、殿が師直を切り給はぬ、其うちが一大事。斯やうなるからは、一大事から遙か過ぎて、どうも後へは歸られぬと存ずるから、女どもに酌させて、御酒下さつたが、勿論醉ひは致さぬ。サアサア、御評定承らう。慮外ながらキッと承る。

九太　されば、聞かるゝ通り、御舍弟縫之助どのは、石堂家へ御養子なれば別條なし。併し、此方の屋敷は卽座に召上げられしとの事。定めて當城も明け渡せとある御敎書下らん。殿御存命の間、明け渡せと御遺言あらば格別、さもなくば、この城を枕にして討死、それでは主君の御無念も少しは晴れん。この評議一決せば、討死いたす者ども血判いたして、御用金を配分いたさん。由良之助どの。由良之助、コレサ由良之助どの

由良　成る程、承つた。

九太　コレサ、大事の評議に醉ひ草臥れて、フラフラ眠氣は。コレサ、只今申すは討死いたす家中の分。

由良　金分配されうと仰しやるか。その儀は由良之助、不得心でござる。先討死と極めて、金銀は何になさる。刃を取つてその身を忘るゝと、定九郎どのに意見を仰しやつたではないか。生き殘つて、金配分いたしたい所存でござるか。

三左　こりや、由良之助どのゝ仰せではござれども、この城をノメノメと明け渡すは無念の至り。

久之　オヽ、某共も討手を引受け。

彌五　矢種があらん限り射盡し

孫七　討死仕らん、何れも。

三左　御同心の衆中は

皆々　血判〱々々。

九太　オヽ、潔し。然らば血判の上にて、金配分はこの九太夫が計らはん。三左衛門、サヽ、これへこれへ。其方は

御用金の役人なれば、御用金は如何程ある。それ承らう。

三左　ハッ、委細殘らず帳面に記し置き、金高は凡そ二十萬兩

ト帳面を出す。

九太　オヽ、九太夫が心積りもその通り。ドレ、その帳面これへ。

ト披げて見て

內三萬兩は、奥方御一生のお貯へ金。また二萬兩は、御舍弟縫之助どのへお形見分け。千兩に殿樣御石碑料、殘つた十四萬兩と九千兩……ムウ、金高相違なけれど、內一萬兩、大星由良之助どの、御用金に相渡すと、帳面に記しあれば、由良之助〳〵々々々々。

由良　オヽ、成る程、お金の事承つた。

九太　イヤサ、この帳面に記しある、一萬兩は何の御用になされた。

由良　オヽ、搗てゝ加へて金の吟味か。その金子は某が、ア、何やら。オヽ、それ〳〵、普請方曲木久之進出られい。

久之　ハツ。

由良　去ぬる寅の年八月八日、辰巳の大風、山々の木々を吹き折り、お城の戌亥の角のお櫓惣塀、石垣一町餘り崩れ損じ、早速御普請へ申しつけたるを覺えて居られう。

久之　如何にも、仰せの通りでござりまする。

由良　その時の石材木、大工日雇左官の作事入用金、千九百兩。

久之　成る程、その節の御入用、久之進がお帳面に記し置きましてござります。

由良　見さつしやれ、由良之助こもうは致さぬ。

九太　然らば相殘る金子は如何いたされた。

由良　まだ申せか。申し開かう。ア、それからは、米方の役人奥田孫七。

孫七　ハツ。

由良　四年以前卯の年、百十ケ村青葉もなく、百姓町人飢渇に及ぶ。大坂堺の商人より、米三千石買ひ取つて、御領分へ御施行米。その運賃諸式入用、五千五百兩

孫七　御意の通り、私し掛りゆゑ、委細この如く、お帳面に記し置きまして、相違ござりませぬ。

ト面々帳面を見る。

由良　殘る金は鹽濱破損。鹽田俵左衞門

三左　成る程、その時外海より荒浪打つて、鹽舟凡そ二千艘、おも楫取り楫叶はゞこそ、難船の船頭に御合力金八百兩、元の潮と消えゆく金も、大星さまのお慈悲と、その砌り、それ〳〵より殘らず受取書を取り置く。御用の節は、差上げまするでござりませう。

由良　實に誠、まだ〳〵、辰の年の洪水に、大手通りの要害堤、三百間崩れたる入用金、千八百兩、なんと相違はあるまいがな。

〽由良之助が胸算用、懸河の辯の滔々と、水を流すが如くなり。九太夫帳面引合せ〳〵、

九太　ムウ、如何にも算用相濟んだが、外に不足とあるは三左衞門、如何いたされた。

彌五　さればその千兩、某が算用違ひと存じ、帳面吟味いたせども、入用方かつて見えませぬやうにござりまする。

九太　イヤ、そりや暗い。殿御存生のうちならば、疑ひも立つまいが、こなたが引込むと、この九太夫は思はるゝ但し勘當の勘平に、合力でもし召されたか。この節なれば事を糺し、云ひ譯なくんば國法に行はん。申し開きの料簡さつしやい。

三左　如何にも、再三勘考仕れども、その筋を得ませぬは某が役目の不調法、重々恐れ入りましてござります。

〽覺悟極めし面色を見てとる大星、ずぶ〳〵しながら。

由良　アヽ、物覺えの惡い三左衞門。その金千兩は、去年何月やら、嚴島詣での時、拙者がお借り申したわサ。

三左　アイヤ〳〵、その儀は三左衞門、曾て覺えが

由良　無いとは云はさぬ。帳面に附け落したを、思ひ出して見やれ。それを無いとは、某を庇ふ所存か。この期に及び、ハテサテ、馬鹿律氣な仁ではござるわえ。ハ、ハ、ハ。

〽我が身にかぶる大星の、心は知らねど三左衞門、情を感ずるばかりなり、九太夫膝を立て直し。

九太　コレサ、由良之助どの、如何に家老なればとて、相役にも斷わらず、千兩と云ふ金を、私用に遣うて事が濟むか。高祿取つて何暗からぬ大星どの、その金は何にせられた。サヽ、承らう、聞きませう。

由良　アヽ、これはどうぢや。左樣になされな、埃が立つ。

九太　イヤサ、一家中の鑑となる、貴殿と九太夫、借りた

由良　では濟み申さぬ。サア明白に申さう〳〵、その金子千兩は、或ひは彌生の花盛り雨のつれ〳〵雪の朝、室の揚げ屋で使ひ果してのけました。

九太　アノ、貴殿が。

由良　左樣々々。

〽ちりはいつけば九太夫も。

九太　イヤハヤ、言語道斷、とつてもつかぬ家老の身持ち。日頃立派な顏をして、大星の傾城狂ひ、何れも、物が申されぬ……例への通り、主無しになると、皆化が顯るゝ。サア、この上は、城を渡すか討死か、評議を極め祿の高下に拘らず、殘る十三萬九千兩、身が宅にて配分いたす。何れも、お來やれ。

三左　でも、大星どのがこの體では。

九太　醉どれどのに何の遠慮。心が附いて欠座は勝手次第。

皆々　然らば此まゝ、九太夫さま。

九太　思へば氣儘な。

　ト由良之助へ思ひ入れして、氣を替へ

サ、、お來やれ。

〽醉ひつぶれたる大星を、尻目にぐつと睨みつけ、先に進む斧九太夫、三左衞門は大星の、情を深く請けながら。一人後にも殘られず、是非なく打連れ立ち歸る。

　ト九太夫先に三左衞門、皆々思ひ入れして、よろしく向うへ入る。

〽まだ醒めやらぬ由良之助、人音ひつそと靜まれば。

　ト由良之助、一人殘り、よろしくあつて

由良　誰そあるか。水を一つ所望ぢや。コリヤ、水をくれいよ……これはどうぢや、誰れも居らぬか。九太夫どのは如何いたされた。由良之助、御評議承らう。例へ御酒たべても、勤むる所はキツと勤むる。醉ひは致さぬ何れも、評議仕らう。

　トあたりを見廻し

これはしたり。家中は殘らず、下城いたしたさうな。

〽彌五郎が差置いたる、大小にふと目を附ければ、柴垣の小蔭より、由良之助が胸中を、窺ふ千崎、奥よりは、力彌親子が覗くとも、いざ白書院大廣間、見廻し〳〵。

　ト由良之助、あたりを窺ふ。下の柴垣より、彌五郎、上の障子屋體より、力彌、お石、出かゝり窺ふ。

彌五郎は恩顧の者、これ程の事に心附かぬ、侍ひにては

なけれども、九太夫が實氣を聞き、我が身に迫り、拜領の刀なりと、預け行きしはさる事なれど、差添まで差し置きしは、ムウ。

〽仔細ぞあらんと千崎が刀、抜きはなし、見れども變らぬ。

ト彌五郎が刀の目釘を抜き見ると

こりや、見覺えのある拜領の刀。

〽別條なしと取納め、差添抜けば。

ヤ、、こりや、中の刀は腹切り刀、殊に切尖、朱に染みたるは、もしや。

〽不思議と目釘を抜き見れば。

さてこそ義貞と銘を打つたるは、鹽谷のお家の御先祖より、傳はつたる九寸五分。さては此お刀にて、御切腹をなされしか。ハ、ア、我が推量に違はず、深き心の千崎彌五郎どの、御血をあやされし腹切り刀を、某に渡さん爲であつたよなア。チエ、、忝ない。

〽肝にこたゆる忠義の程、奥と口とに窺ふ三人、由良之助は一心不亂、血に染みたる切尖を、眼たゝきもせず打守り、殿の鬱憤察しやり、無念の涙はら〳〵〳〵、五臟六腑を絞り出す、さてこそ後の大星が、主君の仇を報うたる、根ざしは斯くとぞ聞えける。

トこの文句のうち、由良之助、いろ〳〵ありて、トゞ四人顔を見合せ、由良之助、ちやつと刀を隠す。三人思ひ入れよろしく、

ひやうし幕

四幕目　鹽谷館の場

役名――奥方、顔世御前。鹽谷爲若丸。大星力彌。大星妻、お石。天川屋義平。斧九太夫。大鷲文吾。近松半六。梅田定七。近藤傳四郎。大星由良之助。

本舞臺、向う一面に、中足の通り屋體、見附け緞張りの障子を立て、上の方涙板、下手枝折り門、柴垣、爰に顔世御前、後室の形にて、褥に座し、腰元一に髪をすかせて居る。爲若、杯を持ち、やんちやを云うて居る。腰元二、これをなだめて居る。下手の方に力彌、經机の經巻を巻いて居る。琴唄にて幕明く。

〽幣木のありとは見えて隔たりし、國にも殘る姿見の、

鏡影のつらきより、我が妻𥿻の引別れ、死ぬべき命も若殿の、愛に引かれて黒髪も、惜しや盛りの二つ髷。

ト此うち皆々よろしくある。力彌、經卷を巻き納める。

爲若　もそつと、あかを食べよう。つげ〳〵。

腰二　イヽエヽ、それではお過ぎなされます。もう御無用に遊ばしませ。

爲若　否おや〳〵。

顏世　コリヤ〳〵爲若。其やうに無理云やると、また自らは、彼方へ行きまするぞ。

力彌　イエ〳〵、若樣は溫なしうござります……サヽ、お杯を下に置かれまして、お詫びを〳〵。

ト杯を取つて、三方に載せ、爲若に辭儀せいと敎へる爲若、その通りして

爲若　ハイ、もう酒は食べませぬ。

力彌　御堪忍遊ばされ

爲若　御堪忍遊ばされ

力彌　御一緒に入らしつて下さりませ。

爲若　御一緒に入らしつて下さりませ。

力彌　ヘイ〳〵、この通りお詫びでござります。

顏世　オヽ、お行儀がようござる。隨分溫なしうしませうぞ。

ト爲若、まだ辭儀して納まる。腰元一、此うち髮を結ひしまひ

腰一　やう〳〵お髮をあげましたが、さぞお心惡うござりませう。お免しなされて下さりませ。

顏世　あの云やる事わいの。今日はお客の設けもあれば、取亂しても如何ゆゑ、其方衆の勸めを幸ひ……オヽ、綺麗に出來たわいの。

ト鏡臺を片寄せる。

力彌　ハツ、申し上げまするは、今日は私しが母、何か存じつきましての儀に依り、暫らくお經をお止め遊ばすやう、願ひ置きしとござりまするゆゑ、お讀みさしの經卷は、お脇へ巻き納め置きましてござりまする。

顏世　はる〳〵これへ移ると其まゝ、こなた衆親子の厚き世話、また多くの召仕ひも、皆暇を遣はすうち、幼ない時より馴染みとて、これなる二人が見捨てぬ介抱。志しの優しさ、嬉しいぞや。

腰一　勿體ない事御意遊ばしませ。これまでの御恩の御前樣。

腰二　私しどものお願ひ叶ひ、お國へまでお供いたしまするは

腰一　この身の冥加、一生宮仕へ致しまする。

兩人　お目かけられて下さりませ。

顏世　そのしをらしい眞心も、思へば果敢ない、身の上ぢやなア。

へ身に花咲かぬ顏世御前、引籠りたる閑居の館、いとゞ淋しく見えにける。折柄奧より一酒携へ、お石しとやかに手をつかへ。

ト奧より、お石出て

いし　御前様、ようお髪を遊ばしました。今刻も申し上げまする通り、はる〴〵とのお國入り。世が世の時でましまさば、お花見遊山に申し上げるは愚か、御家中が打寄つて、お能やら御酒宴やら、おめでた揃ひに引きかへて、御經讀誦にお遑なく、お心浮かぬは御道理なれど、却つてお身の爲ならず、お氣晴らしに酒一獻差上げんと、不調法なる私しが指圖、お許し遊ばし下さりませ。

へ云ふ口の切りきざみ、實にも家老の妻ぞかし。

顏世　オヽ、優しき其方の心使ひ。由良之助を始めとして主臣となるも深き因縁、判官さまにお別れ申せし折柄、共に自害と思ひしに、この爲若が可愛さゆゑ、一先づ國許と大勢の進めに、是非なく命を長らへ來りしに、我が夫の七々七日も過ぎざるうち、お屋敷は云ふに及ばず、この屋敷も今日中に、相渡せとの仰せ。お請け申せし家中を始め、馴染みの館も今日限り、別れ〴〵にならんも知らず、せめて名殘に主從の、杯なりとせんものと、思ふ折柄其方の深切。めでたいと云ふでもなし、誰れ彼れと云はうより、力彌を始め女子同士、杯を始めませう。

へ詞數云はでの森の露涙、こぼれかゝれるお物語、いざと汲みなす杯の、哀れいや增す千代八千代、名殘り數そふ春毎に、色どる花もいつしかに、散りや果てなん世の憂さも、とり〴〵に、酒宴半ばも過ぎる頃、明くる襖の內外に、心を配る大星由良之助、謹んで頭を下げ。

ト皆々、杯事よろしくある。奧より由良之助、出て來り

由良　奧様には珍らしき御催ふし。爲若さまにも御機嫌のよい御顏ばせ見奉り、拙者めも大悦至極に存じ奉ります。

顏世　オヽ、由良之助か。最前から待ち兼ねました。時も時と面白さうに、酒事どころではあるまいと、其方の思惑

も如何なれど、知りやる通り、今日につゞまる館の見納め。上使のお入りなされるまで、主従名殘りの杯事。必らず叱つてたもんなや。

由良　これは又私しに、なんのお心を置かるゝ事。お上館は覺悟の前、せめてあなたの此お屋敷、申し請けたき願ひを立つれど、いつかな叶はぬ鎌倉の政道、渡す時刻も暮れ六ツ過ぎ。何は差置き、コリヤ忰、泉州堺の天川屋義平、某に對面いたしたき由、お次に扣へ待たせあるとの事。今少し暇どるうち、其方は勝手へ參り、支度でも申しつけい。

力彌　委細畏まりました。左樣ならば御前樣、後刻お目見得仕りませう。

由良　コリヤ、必らず麁相のないやうに心づけい。

力彌　ハツ。

〽父が詞に大星力彌、返事と共に立つて行く。

ト力彌、奧へ入る。

顏世　イヤナウお石、今日は殊ない心使ひ、最早其方とは杯は濟む。これからは由良之助、密かに話す仔細もある。爲若連れて奧へ行きや。

いし　ハイ〳〵、畏まりましてはござりますれども、お手廻りは皆お暇、何ぞ御用もござりませう。必らず御遠慮遊ばしますな。

由良　イヤ、御意を返すも恐れ、腰元衆も居れば、其方は罷り立て。

いし　左樣ならば爲若さま。

爲若　ハイ、母上樣。

顏世　サア、早う行きや。

〽早うと云ふも主命の、重き仰せに是非なくも、心殘して奧の間へ、立つて行く間もあるやなし。

トお石、こなしあつて、爲若を連れて、奧へ入る。

この上は其方と杯事。サア、一つつぎや。

ト杯を取上げる。腰元一つつぐ

サア、其方達も用事はない。暫らく奧へ、早ら行きや。

腰元　畏まりました。

ト合ひ方になり、兩人奧へ入る。顏世、あたりを見廻し、思ひ入れあつて

顏世　サア、邪魔は拂うた、由良之助、近う寄りやいなう。

由良　ハツ。

ト側へ行く。

顔世　今更云ふではなけれども、我が夫お果てなされしより、杖柱とも思ふは其方。見放してばしたもんなや。國入りの時云うた事、よもや忘れはしやるまいの。

由良　何がさて、お主の御爲、なん條忘れ候ふべき。

顔世　オヽ、これはしたり、その三つ指を取措いて、ソレ、昨日の文の、返事はどうぢや。

由良　ハツ、仰せに任せ認め置きし、我れと我が手の文使ひ。詳しい事は此うちに。

ト文を差出す。

顔世　オヽ、其方の送りし返事は、コレ。

ト同じく文を出し、兩方取りかはす。

〽互ひに取り合ふ文と文、障子をそつと窺ふ女房、外面に立ちどまりし天川屋。

トこの時、上よりお石、下の柴垣より義平、出かゝり窺ふ。

〽聞くとも知らず此方には、醉つもつれつ大星が、側に寄り添ふ顔世花、思へば憎しと女房が、障子をばつたり驚ろく二人。

ト顔世、由良之助、よろしくあつて、よき程に障子ソツと明け、三人顔見合せ、お石、障子ピッシやり。義平も思ひ入れ、由良之助、顔世俯り、顔世は奥、由良之助は上手へ入る。

〽後には別るゝ主從が、疵持つ足の裏傳ひ、入る間遅しと窺ふ義平、切戸かけ金無二無三、云ひ破つてくれんずと、踏み込む奥より暫らくと、止むるお石が胸倉つかみ。

義平　モシ、御家老樣の奥樣、如何に殿樣がお果てなされたとて、あらう事か三代相恩のお主樣と、せゝくり合ふ根性で、家老職と云はれますか。この義平は町人なれど、大恩受けたお家の騷動、由良之助さまの御分別も聞かうと思ひ、泳ぎつくやうに存じ、はる／＼參つた甲斐もなう、淺ましいお館の有樣。もう一言も二言もない、殿樣のござる内こそ御用達、これからは義理もない。畜生のやうな侍ひに、金取らるゝと思へば腹が立つ。奥へ踏ん込み金を催促、殘らず算用せにや置かぬ、お退きなされ／＼。

〽腹立ちまゝの眞實心。

いし　オヽ、尤もぢや、義平どのの腹立ちに、返す詞のあるべきぞ。定めて其方の心にも、この石も一緒になり、お主を勸めると、積らるゝも恥しい。露ほども知るなら

ば、何しに斯くと云ひませう。様子を見聞くはたつた今
兎にも角にもこの石が、夫の所存を聞くまでは、何事も
預けて下され。義平どの、聞き分けて下されいなう。
〽座は變れども兩の手を、土にすりつけ頼み入る。
義平　ハテ、お前の御亭主、問ふ事あらば御勝手次第。義
平ばかりは一人前、お金の算用せにや置かぬ。お止めな
されな、そこ退かつしやい。
〽また駈け出だす後より。
　ト奥にて
九太　義平待つた。鎮まれよ。
　ト九太夫、出て來る。
〽と呼び止め、襖をさつと斧九太夫、刀片手に一間を立
ち出で。
　最前よりの様子、具さに承知いたした。其許の憤り、尤
もとは云ひながら、由良之助の誤まりと、殿の御用金は
また格別、某聞き屆けし上からは、其方が立つやうの料
簡は、追つけ仕上げて見せませう。イヤナニ、お石どの、
其許は奥へござつて、只何事も知らぬ體。某悪しくは計
らふまじ。
いし　段々厚き思し召し、何卒夫の悪名も。

九太　サア、何も彼もこの胸に。
いし　萬事よろしう九太夫さま。
九太　ござれと云へば、先づ〳〵奥へ。
いし　ハイ。
〽ハッと立つ足夫の身の上、如何と心まはり縁、是非な
くな〳〵も入りにける、とくと見すまし斧九太夫、義平が
手を取り押し直し。
　トお石、奥へ入る。九太夫、義平、よろしくあつて、
　上座へ通し
九太　天川屋の義平には、武士も及ばぬ魂ひと、聞いては居
れどまさかの時、役には立つまいと、今の今まで存ぜし
が、一を打つて萬を知る、只今其許の一言で、心の内を
見抜いた某、改めて頼み入りたき一大事、聞き屆ける所
存なきや。
義平　何がさて、餘の儀は格別、殿様の御恩さへ忘れぬあ
なたのお頼みならば。
九太　そりや、聞き屆け下されうとや。
義平　如何にも。
九太　先づ以て忝ない。存じの通り主君の御最期、聞くと
其まゝ冥途のお供と、某が遮つて申せしかど、心揃はぬ

一家中、無念の數日を送るところ、城内は元よりこの屋敷、今日中に明け渡せと、嚴しき御沙汰。晝夜詰めたる館の内、召上げらるゝと思へば、無念に無念を重ぬる某、切腹いたし、忠臣二君に仕へぬ魂ひ、餘人はともあれ某一人、上使を待ち受け切腹いたす、兼ねての覺悟。頼みと申すは爰の事。某切腹いたせし後、心がゝりは奥方御親子の御事、女儀と云ひ、御幼少、何卒其許引取つて、御介抱下さらば、未來の迷ひ更々なし、君君たらずと雖も、臣以て臣たる九太夫、偏へに頼み存じまする

〽聞くより義平、ハタと手を打ち。

義平　ハヽア、驚ろき入つたる御心底、御主人方を大事と思し召す、そのお心を見込んだからは、畏まりました。如何にもお預けなされ。預かりませう。

九太　すりや、聞き届け、お世話なされて下さらうや。

義平　天川屋義平は男、御恩ある殿樣の奥方、憚りながら指もさゝす事ぢやござりませぬ。

九太　ハヽア、忝ない〳〵。その一心を聞く上は、我れも家中の氣質を計らひ、何彼の事を謀し合せん。其許にはまだ外に、頼み置きたき仔細もなれば、爰は端近。お次の間で、暫時休息。

義平　成る程、この期に及び、御遠慮はござりませぬ。お心殘りのないやうに。

九太　重々の御厚志、先づ〳〵あれへ。

義平　左樣なら、九太夫さま。

九太　萬事頼み入りまする。

〽云ふに否とも町人の、押さるゝ程猶痛み入り、無禮は御免と九太夫に、挨拶とり〳〵別れ行く。

ト義平、よろしくあつて、奥へ入る。

〽折もこそあれ大鷲近松、遙か下つて手を仕へ。

ト文吾、半六、出て來り

半六　委細はあれにて承り、驚き入つたる貴殿の御思案。我れ〳〵とても先ツその如く、死すべき時に死なざれば、死に勝る恥ありと、上使を引受け潔よう、切腹仕るが亡君への忠義。

文吾　九太夫どのにも只今の、お詞よもや相違はござるまい。

九太　オヽ、頼もしき若殿ばら。これにつき、如何にしても呑み込まぬは、某斯くと一決すれば、これに乘らぬ由良之助。各々の心底、某と同心なれば、萬事申すに及ばぬ。この上は由良之助に、面談いたせし上の事。

半六　仰せの通り、重役の由良之助どのゝ御所存を、今一應。
文吾　承はるも即お禮儀。
兩人　我れ／＼も御同道仕らう。
〽話しの中の闇押し開き。
由良　大星由良之助、用事承はらん。
〽臆する色なく眞中に、むんづと座したる兩家老、何れ劣らぬその風情。
　ト奥より由良之助、出て來り、九太夫が側に住ふ。
九太　イヤ大星どの、この度の殿の御最期、貴殿には無念に思されぬか。先づその儀が承りたい。
由良　これは又、知れた事のお尋ね。我れ／＼始め一家中御恩を受けたる殿の御最期、無念に存ぜいで、なんと致さう。
九太　ア、イヤ／＼、それでは舌が二枚ござるワ。御用金を配分し、いづくへなりとも立退かんと、云はれし詞、反古にはなるまい。サア、それでも主君へ忠義の道が
由良　立つとも／＼。貯へありし殿の金子、外々の者へ渡さうより、我れ／＼が申し受ければ、亡君御先祖の弔ひ、なか／＼お家のお爲になりまする。

九太　ハテ、御家老ほどあつて、末の末まで思し召し、弔い料とは聞えたが、某始め諸士の面々、上使を引受け、城を枕に討死して、冥途のお供仕らんと、一決したる評定も、貴殿一人頭を振り、時日を移すその心は。
由良　イヤそ、その儀は申さいでも知れた事、追ひ腹いたすも亡君の、お爲とは申しながら、後にましますお二方樣へ、不忠となるが心附かぬか。さるに依つて惜しからぬ、命を惜しむ由良之助。
九太　ムウ、それ程惜しむ命で、顏世御前のお爲とあらば
由良　云ふにや及ぶ、主君の奥方。
九太　イヤそ、主君の奥方やら、其許の奥樣やら、人は知らぬと思されうが、三寸見拔いた拙者が眼力、乳繰り合うて居らるゝに、なんと違ひはござるまい。
〽てつぺいひしぎに、ちつとも動ぜず。
由良　オヽ、御推量の上は包むに及ばず、奥方の心を引き見ん爲、甘い企みも女儀相應、貞女の道も忘れ給はゞ、その時御意見申さんと、思ふに違ふ御貞節、申し出して手持ち無沙汰。眞平御免を蒙むりしを、不忠不義とのお疑ひ、九太夫どのとも存ぜぬ仰せ。
九太　イヤ、その詞、暗い／＼。誠、貞女の心を試すに、

何ゆゑ艶書は送り召された。
由良　ヤア、艶書なぞとは毫頭拙者
九太　覺えないとは云はさぬ證據、我が手に入りし奧方の手蹟、度重なりし文の表、顯はれ渡るこの一通。
由良　それは。
九太　これでも覺えはござらぬか。
由良　サ、それは。
九太　云ひ譯あるか。
由良　サア。
九太　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
九太　云ひ譯あらば承らう。サ、、どうだ。
〽と理の當然、家中もさてはと顏見合せ、口をつぐんで扣へ居る。
由良　ア、我れながら各々の手前、面目もなき身の懺悔。顏世御前の色香に迷ひ、恐るべき主君の恩を忘れ、御身を穢せし勿體至極、隱しおほせる罪料も、某一人引受けて、腹仕らんが何れもへ、武士の端なる申し譯。首は何所に曝らさるゝとも、ちつともいとはぬ主君の罰。この上は九太夫どの、武士の情、介錯賴み存じまする。

九太　ホヽウ、切腹と願はるゝは、侍ひらしき性根があつて賴もしい。代々の家老筋と云ひ、命ばかりは助けたけれど、心一致に固まる我れ〳〵。不義の惡名、さつぱりと切腹召され。拙者介錯仕らん、ヤア〳〵、誰れかある云ひつけ置きし用意の三方、早くこれへ。
力彌　畏まりました。
〽詞にハツと大星力彌、父が最期と白木の三方、其が前に直すれば。
ト力彌、三方、腹切り刀を持ち出て來り、九太夫が前に直す。九太夫思ひ入れ。
九太　コレサ力彌、親の最期と聞き、心亂れて麁相はあり內。氣を押し鎭め、この三方、ナ、ソレ、由良之助どのへ、早う〳〵。
力彌　イヤ〳〵、子として父の心を知らずんばあるべからず。この三方の置き所、微塵違はぬ父の寸志、お受けあられよ、九太夫どの。
九太　ヤア、力彌默れ。切腹とはなんの痴事。麁忽いたすと手は見せぬぞ。
由良　イヤ、さは云はれな九太夫どの、腹切り刀差しつけしは、悴力彌が計らひならず、我れより先へ其許に、切

腹進める冥途の餞別。
九太　なんと。
由良　君御存生の内よりも、兼ねて師直に心を通じ、金銀を以て媚び諂ひ、始終を窺ふ時も時、この度の主君の御越度、御落命ありし元の起りは高の師直、さすれば貴殿もかゝる罪科、明白たらんと思ふより、某密かに諸士を招き、先づ斯う〱の物語り、我れは何にも知らぬ顔、只強慾の詞を立て、奥方に戀慕と見せかけ、底意を探る覘ひの的、よもや外れは致すまい。
〽云はれて恟り騒がぬ顔。
九太　ハヽヽヽヽヽヽヽ、我が罪を隠さんと、誠しやかに云ひ並べても、その手では行かぬ〱、四の五の云はずと其方から。
由良　イヤ、滅多に腹は仕らぬ。詮議の糸口御自分の、お目にかけるはこの三方。
九太　ムウ、この三方を詮議の種とは。
〽合點ゆかずと引きのくれば。
ト九太夫、三方を取りのける。三左衛門が切落首出る。
ヤア、こりや金役早野三左衛門が首。さては金紛失の云ひ譯なく、腹切つて相果てしか。

由良　推量の通り、殿の御用金を盗み取られ、切腹いたせし早野三左衛門、書き殘したるこの一通、直ぐに讀んで云ひ譯をしやれ。
ト由良之助、懐中より小柄をくるみし一通投げつける。
〽差出す一通ひつたくり、披けば内に巻き込む小柄。
九太　ヤア、この小柄は。
ト恟り。
由良　ホヽウ、師直が定紋のその小柄、なんと覺えがござらうがな。
九太　何がなんと。
由良　お金紛失の砌り、御金蔵の内に落ち散りしその小柄、主は誰れとも知れざる盗賊、三左衛門が越度となり、切腹するより外なしと、覺悟の體を察せしゆゑ、先達て某引受けしを、本意なく思ひ、心一つに料簡定め、我れにも知らさず相果てし、後にて見ればその一通に添へたる小柄、よく〱見れば見覺えあり、疾より我れに見するならば、やみ〱と殺しはせじ、云ひ譯も無益なりと、思ひ詰めたる老人が、不便の最期を見るにつけ、師直が所持の道具、貰ひし者外になし、心に覺えあればこ

そ、一目見て驚ろきしは、云はねどそれと顯はれ口。最早陳じても陳じさせぬ。尋常に切腹あるか。

九太　サヽそれは。

由良　但し云ひ譯の筋あるか。

九太　サヽそれは。

由良　サア。

九太　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

由良　よもや一句もあるまいが。

〽やわらで見拔く詞のかすがひ、力彌、大鷲膝立て直し。

力彌　最早遁がれぬ、尋常に繩かゝるか、

文吾　但し踏み込み繩かけようか、返答はなんと。

〽詰め寄る兩人、大星暫しと押し隔て。

由良　ヤレ早まるな、科人とは云ひながら、繩打つは匹夫の業、一二を爭ふ家老樣、此方より手をかけて、未練な役は仕らぬ。尋常に切腹あれ。遲刻ある程重なる不忠。九太夫、早く〳〵。

〽云へど答へも並み居る家中。

力彌　云ひ譯なくば、我れ等が切腹進めうか。

文吾　お望みならば打ち首搔き首。

半六　最期の念慮勝手次第。

皆々　サア〳〵、なんと。

〽口々に、折り重なつたる手詰めの場所、さしもの九太夫惡びれず、諸肌押脫ぎ物をも云はず、刀逆手に取り直し、弓手に突き立て引き廻す、その手をしつかと由良之助。

由良　ホヽウ、尋常に切腹、天晴れ斯くこそありたきもの。併し、某思ふ所存もあれば、暫し苦痛を堪えあれよ。

〽刀拔き取り一間に向ひ。

奧方の仰せの通り、九太夫切腹いたせし間、お心安く、思し召し下さりませう。

〽申し上げれば顏世御前、お石引連れ立ち出で給ひ。

ト顏世、お石、出て來り

顏世　成敗の樣子、あれにて見屆け、この上の喜び。自らばかりか其方衆の、願ひの邪魔する大惡人、切腹せしも由良之助の計らひ。國入りのその日より、諜し合ひたる心の割符、其方に探る計略の、底意を見拔きし主從の、互ひの胸は敵味方。如何に惡事をなすとても、主の最期を喜ぶのみか、まだその上に我れ我れが、身の上とても

告げ知らす、コリヤ、天道の與へ給へる腹切り刀。なんと思ひ知つたるか。
〽怒りに交る御淚。
いし　數なりませぬ私しまで、仰せを受けし最前の仕儀、御家來にまで幾瀨の御苦勞、さぞ御無念にござりませう。
〽お道理さまやとお石が介抱、脊撫でさするばかりなり、九太夫無念の齒振り上げ。
九太　エヽ、殘念や口惜しや。一物ある由良之助と、我れも底意を探るうち、合點ゆかざる文の通路、仔細あらんと思ふ折、最前奧にて拾ひし文も、いま思へば計略の、網にかゝりし運の盡き。これより外に云ふ事なし。はや首打てよ由良之助。
〽無念に凝つたるその眼ざし、お次に扣へし天川屋、時分はよしと立ち出づる、切り戸も開く胸披く、袴羽織れ靜々と、白洲に額摺りつけ〳〵。
ト義平、下手に出て
義平　何も申し上げませぬ、由良之助さま、重々あやまり入りました。元來輕い身を以て、お國の御用承つてより、經上がりました私し、殿樣の御樣子、聞くと等しく口惜しく、何卒この恥辱、雪ぎやうはない事かと思ふに、任せぬ町人の悲しさ。何は兎もあれ御恩の殿樣、後の御用も承はらんと、お悔みがてら參りしところ、由良之助さまのお身持ち散々、ア、コレ、年一合でも御家來なら千五百石のあなた樣でも、いかんだ性根を矯め直さんものと、思へば〳〵身も世もあられず、最前のやうに申したも、下司の智惠は後の後悔、お赦しあつて何かの御用仰せつけられ下さらば、家の面目、拙者が譽れ。力彌さま、大鷲さま、そこへよろしくお執成し、偏へにお願ひ奉ります。
〽厚き詞に人々が、感ずるも又淚なり。
由良　切なる其許の志し、誠を見拔き某が、賴み入りたき一大事、如何にお石、九太夫が一味の輩、立ち聞かんも計られず、奧方のお供して、詰め所〳〵を心附けよ。
いし　畏まりました。左樣ならば御前樣。
額世　猶この上とも心をつけ、よしなに賴むは由良之助。
由良　委細承知仕る。
額世　お石、おぢや。
〽一間にこそは入り給ふ。
ト額世、お石、奧へ入る。九太夫、思ひ入れあつて
九太　疾にも斯くと知るならば、仕樣もやうもあるべき

に、先を取られし殘念やなア。
〽よろめき廻る九太夫が、髻摑んでぐつと引寄せ。
由良　爰な人非人めが。主君の祿を食むとは云へど、その味ひも知らざる不忠。表に包む惡事の裏、悴定九郎ヲ退けしも、家中に肌身を許さす勘當。皆内通の手筋を拵らへ、師直が犬となつて、有る事無い事告げ知らす犬侍ひ。相殘る面々は、御最期の折柄を、思ひ出して無念の涙、體は野邊に臥すとても、おのれヤレ、主君の敵打たんと思ふ魂ひに、比べ難なき人畜生。チエ、、獄卒とや云はん、魔王とや云はん、見るも忌はし、腹立ちや。
〽緣板ににじりつけ、無念の涙にくれければ、大星力彌、父が前に手をつかへ。
力彌　その御無念を散ずるは、一時なりとも事を急ぎ、敵師直が館へ込み入り、討ち取る手筈が肝要かと存じまする。
由一　なにサ〳〵、進むは却つて退き易し、用心嚴しき高の師直、容易くはあるべからず、一先づ屋敷を上使に渡し、思ひ〳〵に國を立退き、都山科に住居を定め、師直を討つ密事の段々。一味徒黨に固まる人數。夜討の駈引き、その場の用意、見込んで賴むは義平どの。

義平　イヤモ、その儀はちつともお氣遣ひなされますな。武具は勿論、忍び裝束小手脛當、お入用の品々は、お受け申して仕立てるも、御恩を受けたるこの義平。
由良　ホウ、實に至極せし志し、云はず語らぬ大星が、兼ねて夜討と定めたる、その姓名は明かさずとも、徒黨の人數は四十餘人、いろはの文字の合ひ印、鎖帷子弓鐵砲、忍び入るには繼ぎ梯子、銘々得物を引ッ提げて、一度のかけと二度の役、先陣後陣と入り亂れ、本意を達する我が胸中、他聞を憚る一大事、九太夫に聞かさん爲、苦痛させしも主君の罰、肝先にこたへたか。
〽目の内鋭き武士の、忠義の程こそゆかしけれ、義平、涙を押隱し。
義平　ハ、ア、武士の鑑の由良之助さま、私し風情が根性ヲ御覽じ、御用の筋を賴むとのお詞、身に取つて如何ばかり。御恩に甘へた事ながら、大星さまへお願ひの品、御覽じて下さりませ。
〽云ひつゝ立つて小蔭より、我が子の手を引き氣もいそいそ。
ト下の柴垣より子役の由松が手を引き出て、よき所へ直し

ハイ〳〵、お願ひと申しまするは、この倅、一生我が手に置きまして、何の斯うとの商賣の當てもなく、親こそこの身で果てるとも、せめて此奴を侍ひにしたいと、及ばぬ望みも猿猴の、つきせぬ御恩は由良之助さま、お頼み申さん爲ばかり。はる〴〵連れて參つた心。何卒あなたのお手廻りで、お使ひなされて下さらば、倅が大慶、拙者が安堵。

由良　ア、イヤ〳〵、かゝる大事を打明けて、頼む程の某、殊に寵愛の一子、人質に取る望みはござらぬ。心遣ひは無用にさつしやれ。

〽見透かす一句にさしもの義平、恟りせしがさあらぬ顔。

義平　ハア、その誠あるあなたの見込み、一生不通の養子分に、お貰ひなされて下さりませ。

由良　イヤ〳〵、我れ〳〵は、今日あつて明日ないこの世の暇申し受けて何の益。

義平　サヽ、その益ない養子をなさるも、敵に心を許さん企み。

由良　ムウ、尤も。我が子にせよとは好い分別。如何にも某、申し受けるでござらう。

義平　すりや、御養育下さりませうとや。エヽ、有り難い有り難い。コレ由松、そこへ出て、お禮を申せ〳〵。

由松　ハイ、小父樣、坊が事を、お頼み申し上げまする。

　トそこへ出て、由良之助に辭儀する。義平、介抱して

義平　これで義平が胸もさつぱり。御用に聞くも倅が爲、養育頼み奉りまする。

〽心の内は人質と、思ひ定めし契約は、大事を洩らさぬ誓言に、我が子の命投げ出して、男一疋巾廣の、絹すれとこそ知られたり、由良之助感じ入り。

由良　さほど据りし貴殿の魂ひ、今より我れ〳〵手本となし、敵師直を附け覘はゞ、例へ盤石の内に隱るゝとも、やはか仕損じ申すべき。何れも、とくと心得られよ。

〽詞にハッと喜ぶ義平、手負ひは無念の齒嚙みをなし

九太　淺き企みに乘せられし、せめての腹癒せ汝等が、師直公へ附け覘ふ、知らせの早打ち、これを見よ。

〽肩衣取つてやり水へ、流れ鋭き時こそあれ、一味徒黨の諸士の面々、梅田定七、近藤傳四郎、その外追ひ〳〵馳せ來り。

　ト九太夫、肩衣を取つて流れへ打込む。よき時分、時の太鼓になり、向うよりバタ〳〵にて定七、傳四郎、

その他諸士大勢・走り出て來り。

定七　由良之助どの、御計略の通り、斧九太夫の切腹見屆け。

傳四　我れ／＼に至るまで。

大勢　滿足いたしてござる。

〽聲々に呼ばはれば

九太　エヽ、一度ならず二度の後悔、合ひ圖を待つたる某へ、一味なせしうぬ等まで、

定七　オヽ、云ふにや及ぶ。其方に心を寄せし人非人、殘らず一間にからめ置く。

傳四　汝が死出の導きさせん。性根を亂さず尋常に

大勢　最期を淸く仕れ。

〽恥しめられてもひるまぬ我慢。

九太　我が首一つを汝等が、千萬石の加增と思ひ、急いで介錯。

由良　オヽ、心得た。ソレ力彌。

力彌　ハツ。

〽心得たりと大星力彌・ひらりと拔く間向うより。

ト力彌、刀振り向けると、向うにて

呼び　御上使のお入り。

皆々　ナニ、上使とや。

トきつとなる。

由良　コリヤ、

ト制する、力彌、九太夫の首を切る。舞臺前板返しにて、切り首出る。皆々ツカ／＼と出る。

〽御上使これへ。

ト下に座す。チョンと木の頭。

大勢　お通りなされい。

トよろしく、拍子、　ひやうし幕

五　幕　目　　北白川石屋の場

役名──石切り、五郎太實ハ早野勘平。稽古娘、お京。同、おきん。同、銀太。家主、五右衛門。入間丑兵衛。北村傳次。九太夫後家、お禮。同娘、お組。大星由良之助。

本舞臺・三間の間、茶壁、暖簾口・更紗の暖簾を掛け、上の方、九尺の障子屋體、門口に丸柱、笠木附

きの平地戸、これに琴指南、兵法初心の稽古所と書いたる掛け看板、風流なる道具立て。二重舞臺におくみ、振り袖娘にて、同じくお京に琴を敎へて居る。舞臺の下の方に五郎太、石鑿を持ち、御影石を切つて居る。側に銀太、おきん、これを立つて見て居る。よき所に誂らへの石塔据ゑてある。すべて白川の隱宅の體よろしく、琴唄にて幕明く。

〽所も名にし白川の、隱居や手かけ尼道心、遊民の隱れ家にて、月雪花に事欠かぬ風雅の里、門口に琴の指南所、兵法の稽古場と、二行に書きたる吊り看板、表の庭にはずつしりと、御影に依らぬ御影石、石切り鑿にかつちかつち。

トこの文句のうちお京、矢張り琴を彈いて居る。五郎太、石を切つて居る。

五郎　アヽ、コレ〱、其やうに側に寄ると、この石ごつばが、可愛らしいその目へでも入つたら、それこそほんに一生の疵物。もつと遠くへ寄つて居やう。

銀太　それ見なさんせ、おきんさん、また叱られてぢやわいなう。

きん　なんの、わたしぢやない、叱られたのはお前ぢやわいな。

銀太　イヽエ、お前が叱られたのぢやわいの。

きん　イヽエ、お前が。

ト爭ふ。

五郎　コレ〱、其やうに喧嘩せずと、稽古が濟んだら早くお歸り。

きん　ほんに、今日は母さんが、どこへか連れて行くと云はしやんした。

銀太　わたしも內へ歸つて、なんぞ旨い物でも食べようわいの。

五郎　オヤ〱、そんな意地きたなをお云ひでない。

きん　打ッちやつてお置き。お京さん、まだかえ。

お京　アイ〱、わたしや「後朝」を、ま一つ浚うて參るから、お前方、お先へお出で。

きん　そんなら、お師匠さん。

兩人　また明日。

〽云へど師匠は口吃り、辭儀おれそれも仕方にて、廻らぬ舌を。

くみ　ア、アイ。

〽アイと一口二口、みな打連れて歸りける。



文化九年七月中村座上演

尾上松助の石切り五郎太

ト兩人、連れ立つて向うへ入る。

五郎　成る程、女の子といふ者は、つべこべとよく口を……ハ、、、、。ア、、毎日のつゝてんころりんにて、とんと聞き飽きた。併し、お前方は、わしが石を切る音がさぞやかましうごんせうの。イヤ、やかましい次手に、母御樣がお歸りなら、居合ひ腰になつて、稽古場が掃かずにあつたら、不性流ぢやとやかましからう。イヤ又、女の兵法を使ふのは、どこの所がどんなであらう。

お京　アレ、また五郎太どのゝあんな事を。モシ、お師匠さん、わたしやお叱りなさらぬやうに、稽古場掃いて參ぜう。

五郎　それがよい。隨分綺麗に掃除をさんせ。

お京　掃除してから、お師匠さん。

〽つべこべお京は走り行く。

ト お京入る。

五郎　ほんに、おれも野良をかわくと云はれぬうち、ドリヤ、仕事にかゝらう。

〽立つをどんざの袂を扣へ、早速に物云はれず、用あり顏を。

お組さん、なんぞ用でもあるのかえ。

ト お組、思ひ入れあつて

アア、また物云ふに暇がいらう。

〽云はれてハッと赤らむ顏、戀なればこそ紅葉搯つたる、卷紙の反古取出だし、石塔の漆墨を墨さしにて、さらさらさらと走り書き。

ト書いて五郎太に見せる。五郎太、讀み下して

ムウ〳〵、また晩に忍べかえ。イヤモウ、わしも內方で、父御樣の石塔を、お切りなさるゝ手間に來たのが、お前とわしが緣の始め。毎日附け飯で仕事すればとて、お前まで付け飯にしたら、宵に河漕召されたる、船は其まゝありながら、母御に網を下ろすのを、見付けられては、オヽ、怖い事〳〵……イヤ、それはさうと、先度お前に借りました大枚の金、ひよつと知れたら、大抵の事ではあるまいと、ほんにそれが苦勞になつて、案じてばつかり居ますわい。

〽云ふにお組が墨壺の、筆で云はすを讀み下し。

ムウ、そんならお前が、戶棚の鍵を預かつて、金を出し入れするとかえ。それなればマアよいが、併し、話しの度々に、斯う紙を使つては、紙屋に伯父さんを持つても堪るまい。この反古では大佛の、張拔きせうと……ア、

まゝよ。
〽鬼の來ぬ間と寄り添へば、どこやらお組も恥かしう、抱きつくにさへ手も吃り、おづ／＼抱いていとしとも、云ふより遙か云はぬのは、可愛らしうていぢらしき。

トよろしくあつて

〽折から表へ破れ傘、古土瓶と鍋蓋焙烙欠け德利、加賀の古簑越中褌香のもの漬け櫻だいの片し／＼、行燈に取添へ三四人。

トこの文句のうち、向うより五右衛門、家主の形にて先に、後より三人、掛乞ひの形にて、銘々いろ／＼の物を持ち、捨ぜりふを云ひながら出て來り

五右　なんでも、爰らあたりに違ひはないて。

三人　着て居るものを、引ツ剝いでやるがよい。

五右　ちつと物を尋ねませう。內方に、石屋の五郎太は居ませぬか。

ト云ひながら開きを明ける。五郎太、これを聞いて、お組を振り放し、逃げようとするを、皆々五郎太を見付け

四人　ヤア、見付けたぞ／＼。

トずつと內へ入る。お組、思ひ入れ。五郎太これにてザツとなつて

五郎　オヽ、これはお家主様、皆の衆。

五右　ナニ、お家主様……イヤ、おぬしは／＼、ようも／＼斷わりなしに、隨德寺とやらかしたな。コレ、この貸し方の衆と打寄つて、家內家財引ツくるめて見たところが、先づ家賃米代焚木味噌油、その外の買取りが五兩三分何がし、六兩足らずのその中へ、古道具屋へ値踏みをさせたら、たつた九百にもなるならず。

掛一　それ／＼、お家主の云はるゝ通り、コレ、わしらは醒ケ井の拵らへ屋だよ。石屋の手間取りには不相應な、研ぎ賃に身を流す、蓉へ鞘の塗り賃が五兩。サア、いま受取らう／＼。

掛一　コレ／＼、おらが道具店に一昨年から、ふらつかせて置いた後付け野袴、こんな褞袍の形に似ぬ、その錢が一貫九百。

掛三　イヤ／＼、まだそればかりぢやない。朝夕飯の代りに、命を繋いだ蕎麥の錢が、二貫三百六拾四文、サア、いま持つて行かにやアならぬ。

五右　これサ、マア待たつしやい。大法だから家賃を先へ取らにや置かぬ。それに又、薪屋の方が塞がつて、薪の

代りに竹簀の子を折つては焚き／＼、大屋根の瓦を、火鉢の代り、揚句の果は、雪隱の戸までを、アノ爰な大盜人め。

四人　サア、只今算用しろ／＼。

ト舞臺を叩き廻し、やかましう云ふ。五郎太、氣の毒なる思ひ入れ。

五郎　ア、、コレ／＼、尤もぢや／＼が、爰はわしが仕事先。其やうに云はれては、爰の內へなんとも氣の毒。どうぞもちつと料簡して、コレ、拜みまする／＼。

五右　イヤ、ならぬ／＼、モウ／＼／＼、拜み倒しに懲り果てた。

掛一　錢がなくば着物なりと。

掛二　但し、代官所へ引摺らうか。

掛三　たつた今、譯を付けるか。

五郎　サア、

四人　サア／＼／＼、

五右　引摺つて行くがよい。

〽歩め／＼と引立つる、袂にお組が取り付いて。

くみ　コヽ、コレモシ、ハ、腹の立つは、ド、道理ぢやけれど、カ、堪忍して／＼。

ト皆々を留める。

〽心は云へど、舌廻らず、一人うろ／＼氣をあせる。

五右　ハア、美しい娘御が、何か云ふが、ねつから解らぬ。

三人　構はずと連れて去なう。サア、來やれ。

ト五郎太を引退け、また立ちかゝる所を、奥よりお京走り出て

お京　ア、、モシ／＼、アレあのやうに、お師匠さんの留めてぢや程に、マア、堪忍して上げさんせいなア。

五右　ナニお師匠さん。ムウ。それなら吃りどのがアノ琴の師匠か。

掛一　弟子どもは當り前だが、師匠どもとは珍らしい。

掛二　ハテ、聞えたわえ。さてはあの五郎太めが、師匠どもをちよろまかし

掛三　女房どもにしたも知れない。

五右　なんであらうと、こんな者を置くからは、この內も掛り合ひだ。ムウ、戸障子外してなりと、貸した物を取らにやならぬ。

三人　それがようごんせう。

ト此うお組、何か書く。

お京　マア／＼、待たしやんせ。コレ、お師匠さんのお斷

わり、口では云はれぬこの書付け、ちやつと讀んで見さんせいなア。
トお組が書いた物を取つて五右衛門へ見せる。
五右　なんだ。母さんが戻らしやんしたら、よいやうにせう程に、やかましう云うて下さんすな……シタガ、ハテ、口に似合はぬ、よく書いたなア。併し、此まゝによい手な事と云つて
三人　騙すのぢやアないかの。
五右　マア〱、何しろあのお娘が斯う云ふから、爰の母御が戻られてからの事にしませう。
三人　それもさうかえ。
お京　サア、そんならそれまで、あの裏の兵法の稽古場へ。
四人　行つて待つて居ませうかい。
五右　五郎太、もう逃がしはしないぞよ。
四人　サアごんせ。
〽サア〱お出でと連れ立ち行く、後に五郎太が吐息つき。
五郎　お組さん、とんだ事までお前のお世話。母御さんへよいやうに……ア、ひよんな事を聞かれて、ほんに面目次第もない。ドレ、マア、仕事にかゝらうか。

トまた仕事にかゝる。お組、辛氣な思ひ入れ。
〽石より堅い後家風二つ髷、立歸る我が家の內。
トこの文句のうち、向うよりお禮、後家の拵らへにて、珠數を持ち出て來り、直ぐに舞臺へ來り、內へ入る。
れい　オヽ、五郎太どの、精が出ますの。
五郎　ホウ、お歸りなされましたか。
トお組、思ひ入れ。
くみ　カヽ、母さん、お早う。
れい　娘、さぞ待ちやつたであらうなう。
トずつと上へ住ふ。
五郎　マア〱、一服おあがりなされませい。
ト煙草盆を出す。
れい　オヽ、これは憚り……さうして、お組、もう稽古は仕舞つたか。
くみ　アヽアイ。
〽あいとは云へど男の難儀、母にそれとも云ひ兼ねて、書いて見せたは何事か。
トこの文句のうちお組、何か書いて、お禮に見せる。お禮、思ひ入れ。五郎太構はず、石を切つて居る。
〽白川邊に目印の、門口に案內して。

トこの文句のうち、向うより北村傳次、誂らへの形にて出て來り、直ぐに門口に來て思ひ入れあつて

傳次　ちとお頼み申したい。劍術の御指南なさるゝ、お禮さまは御在宿かな。

ト五郎太、仕事をしながら

五郎　アイ、お禮さまはお宿でござります。

傳次　ナニ御在宿とや。然らば御免下されい。

〽然らば御免と内に入り。

トずつと通り、お組を見て思ひ入れあつて下に住ふ。

れい　ウム、ついにお近付きでもないお方は……即ち主の禮は私し、あなたは。マア、何れのお方、して何の御用で。

傳次　すりや、あなたがお禮さまとな。某事は、當所を勤めし浪人、北村傳次近春と申す者。承はれば劍術御指南なさる由、仕官の望みあるに依り、お敎へに預からんと、それゆゑ今日、また二つには藝道お試みあつて、御息女を下されんとある儀承はつて、わざ〳〵參上仕つた。

れい　オヽ、これは〳〵、わたしが女の身を以て、劍術なぞとは、モほんの世渡りの爲ばかり、お敎へ申すとはあられもない事。また娘が事はお聞きもあらん。即ちこれに居りまするが、もう親の欲目でがな、十人並、虫の業やら幼ないから、とんと舌の難病。それさへ御合點ある事なら、脊丈伸びた一人娘、御相談は兎も角も……コレお京、お茶上げましてたもいなう。

お京　アイ。

ト茶を汲んで出す。

傳次　これは忝ない。

〽互ひの挨拶おれそれの、間もなく又も入り來る、これも同じく浪人風。

トこの文句のうち、向うより入間丑兵衞、誂らへの形にて出て來り

丑兵　ちと御免下されい。お禮さまはお宿にかな。

ト云ひながら、會釋して内へ入る。皆々思ひ入れ。

れい　ハイ、禮は私し。してあなたは。

丑兵　拙者事は入間丑兵衞と申す者、承はれば御息女に、劍術鍛練致せし者を、聟にお取りなさるゝ由承はり、即ち某、少々太刀筋覺えござれば、娘御申し請けたさ、僭正ケ谷の邊より、わざ〳〵伺候いたしてござる。

れい　オヽ、これは〳〵、ようぞお出で下さりました。只

今もこれへ見えてゞあれど、娘は格別、この禮が、あなた方の御手練、とくと拜見いたしたその上でなければ、マア聟がねには……ナウ、お組。

ト云へば娘は石切りと、見合す目と目に五郎太は頷き。

ト五郎太、揉み手して

五郎　へ、、、、イヤモウ、私し風情の職人が、申すは憚り、慮外ながら、これへお出での聟樣は、何流儀かは存じませぬが、竹刀なりと木太刀なりと、一勝負なされた上、どちらへなりとお勝ちの方へ、御縁組みをなされまするが。

れい　オヽ、そりやわしもその心。イヤ、早速ながらお二人樣の、マアお手際を拜見いたして。

丑兵　如何にも、拙者も少々覺えがござる。先づ其許のお手際はな。

傳次　數限りもなき食類の第一、飯は食ひ司、朝夕三度の飯時にも、七八膳に瞬くうち、汁ならござれ、壺平も三膳四膳、お膳の加減腹の加減で、一升の飯を一度にしてやるのサ。

丑兵　ハテ、なか〳〵手際な儀でござる。然らば又、麵類はな。

傳次　蕎麥に取りては讃岐の國、金比羅信者の馬喰町、鴨南蠻は百膳を、三十九杯とお目に掛け、歸つて茶漬を十六杯、翁蕎麥なら只一口、皿を脊丈はまだな事、二階がなくば天竺へも屆かせん。なんと剛氣なものであらう。

丑兵　イヤモウ、驚ろき入つた蕎麥の食ひ振り、甚だ感心仕つた。

傳次　まだ〳〵こんな事ではない。日待の茶飯五目飯、或ひは菜飯に田樂なら、豆腐の十挺二十挺、物の數にて數ならず、又は餅菓子乾菓子の類、餘さず漏らさず、大食の手並は腹に覺えあるわえ。ム、、、、ハ、、、、。

ト嘲笑ふ。

丑兵　成る程、そのお手際を承つては、某閉口いたしたいが、左樣な未熟不鍛練では、まだ〳〵聟とは申されまい。

傳次　なんとお云やる。身共が手際未熟とな。何が未熟だ、性根を据ゑて物を云へ。

丑兵　如何にも性根を据ゑて云つて聞かさう。拙者がこの腹へ。

傳次　オヽ、望みならば、

丑兵　しかと喰はすか。

傳次　見事この北村にも。

丑兵　オヽ、望みならば

傳次　喰へよ。

丑兵　喰はすぞ。

傳次　ドヽ、どうして。

丑兵　すべて大食をやるには、膾を喰ふか猪口なぞの、手輕き物を菜として、數々喰はぬが暴食の法。殊更汁は腹寒げ、喰ふまじき事なるに、壺平替へるは未熟の第一。

傳次　ヤ、なんと。

丑兵　まだその上に鴨南蠻、三十九杯食せし上、歸つて茶漬を十六杯、喰ひしなぞは大きな僻事。それ腹に方量あり、僅か五尺の體を持ち、蕎麥の器を天竺へも、屆かせんとはほんの痴言、田樂なぞは人として、至つて好きな者ありとて、それも二挺三挺が關の山にして、何とて十挺二十挺、一人の手際に行くべきぞ。餅菓子なぞは猶以て、殊に駄菓子の嵩張り物、お市粟燒捻ぢ金の、堅いは口がけつたるく、五つも喰へばこめかみが、忽ち痛んで頭痛となる。左樣な事も辨まへず、只出任せの口だんばく。人は誠に思はうが、この丑兵衞は呑み込まぬ。

傳次　ハテ、思ひも依らぬ。

トぎよつとして

つまびらかなる長物語り、イヤ／＼、なか／＼聞き事でござるであつた。然らば富士の山に腰を掛け、彼の湖を呑み乾したる、例しもあるが、なんと／＼。

丑兵　それこそ子供の赤本に、書き著はしたるほんの俗說。何條これらの事あらんや。

傳次　然らば貳分が素麵を、洗ひながらに皆喰ひ、欠落ちしたる飯炊きは。

丑兵　オヽ、それもほどある話しながら、これぞと誰れも見た者なき、世間で云ひたす大空事。

傳次　して又、衣類諸道具を食するものゝ、あるのは如何に。

丑兵　皆これ其まゝ食すにあらず、袷を曲げて初鰹を、火鉢を賣つて酒に替へ、變化なしての大食大酒、何とて道具拍子木を、それなりに喰ふ兩武者あらん。サア、丑兵衞が詞に僞言があらば、一言一句、非太刀を打て。北村どの。

傳次　サ、それは。

丑兵　サア。

兩人　サア／＼／＼。

丑兵　お身達如きのへこ／＼腹、丑兵衞が仕込みの腹にや滅多に叶はぬ。ア、、つがもない。

ト兩人掛合ひ、出鱈目にこんな事を云ふ。お禮呆れる。

五郎太、笑ひ出し

五郎　ハ、、、、、あなた方のお手際とは、大喰ひをなされた事かな。

兩人　知れた事。

五郎　こなたでお望みなされますは、劍術柔術の手際の事。

兩人　そりや、武士の嗜み。

五郎　そんなら、これで木太刀の勝負。

ト有り合ふ木太刀を眞中へ直し

憚りながら御兩所樣、私しは存じませぬが、兵法の極意と申すは、一旦の勝は勝ならず、始終の勝を肝要なりと承はれば、未練な勝負はなされますな。

丑兵　イヤ、おのれが分際で、ナニ推參な。すッ込んでうせう。

五郎　イ、エ、左樣に仰しやりますな。私しも人に聞きましたが、渭濱に釣りせしその中に、大公望といふ者が、あつたとやら申しまする。どこの五目のその中に、どんな手者があるまいとも。

傳次　面白い。そんならわれも手が利くな。

丑兵　相手にならう。

傳次　身共がならう。

ト云ひながら木太刀を取つて兩人打つてかゝるを、五郎太手早く立廻つてしやんと留める。

五郎　モシ、何をなされまする。お二人で勝負をなされませ。

兩人　そこを斯うして。

トまた打つてかゝる、五郎太、兩人とよろしく立廻つて

五郎　いらざるてんがうなされますな。

ト見事に投げ退ける。

兩人　イヤ、推參な。

ト立ちかゝる。

れい　ア、コレ、手並は見えた。筭は知れた。

ト兩人、思ひ入れ。

丑兵　ムウ、知れたとは、この丑兵衞か。

傳次　イヤ、この傳次でござらうがの。

れい　イ、ヤ、筭に取るのはこの五郎太。

五郎　エ、。
　ト思ひ入れ。
れい　オ、、劍術と云ひ器量と云ひ、娘が夫にする人は、こなたならでは無いわいの……尤もハヤ、丑兵衞どのゝお流儀は竹の内、傳次どのは宅間流、いづれに劣りはなけれども、分けて五郎太が流儀を見るに、今は絶えて知る人なき、たくみや流の奧儀を極めし、天晴れよい聟がね。
五郎　すりや私しを。
れい　氣には染まずと娘お組と、女夫になつて下されいの。
〽聞いて二人のすまた聟、すつぱだかつて下手の鞠、井戸へ落した心地なり。
傳次　丑兵衞どの。
丑兵　傳次どの。
兩人　お互ひに遺恨はござらぬ。
丑兵　併し、馬鹿々々しい花聟詮索。
傳次　とてもの事に、たくみや流の
兩人　その奧の手を。
〽胸倉取つて引立つれば、後へ爪立つ、とんぼ返り、投げ付けられて二人の侍ひ、生兵法々々ほふがまち、腰を抱へてしかみ面。

　ト よろしくあつて
れい　なんと手並を御覽じたか。まだ心元なくば、この母が、これからは眞劍を振舞ひませうか。
丑兵　イヤ、重ね〲のお造作で
傳次　大食自慢の我れ〱も
兩人　おなかゞ滿腹仕つた。
〽痛み入つたと門口から、逸足出して逃げ歸る。
　ト兩人、這々に逃げて向うへ入る。
〽五郎太が手並に借錢乞ひ、家主先に慄へ聲。
五右　家賃も命のあつてこそ。
〽こそ〲拔けて去ぬ所を。
　トこの文句のうち、奧より五右衞門と掛乞ひ三人も出て、拔き足にソロ〱門口へ出る。
れい　ア、、コレ〱、待たつしやれ。
四人　ハア、イ。
　ト慄へ聲ながら坐る。
れい　アノ、こなた衆は、此方の聟へ、金催促に見えたのぢやの。
五右　イエ〱、なんの私しどもは
四人　左樣な者ぢやござりませぬ。

れい　イヤ〳〵、隱さつしやるな。さう聞いた。今日から聟に定める上は、不埒な事をそれなりに、聞き遁がしには捨て置かれぬ。不肖ながらマアこれで、料簡して下され。

ト包み金を投げろ。

〽品よう捌く柳生流。

五右　エヽ、そんならこれを私しどもに。

ト金を取上げ、四人思ひ入れ。

へヽヽヽヽ。

三人　ホヽヽヽヽ。

五右　これは、マア〳〵、お冥加ないと申さうか、お有り難いと、おめでたい御祝言。なんと皆の衆、結構な事ではないか。

三人　イヤ、モウ、此やうなおめでたい事はござらぬて。

五右　それサ、次手に善は急げとやら、お取持ち致しませう。

〽何がな追従、掛乞ひ變じて仲人役、てんでに運ぶ酒肴

五右　私しは家主でござります、ずんと前から聟どのゝ氣性を存じて居ります。それは〳〵正直な、ほんにもじきなかも人に損を掛けぬ人、オヽ〳〵。それに忘れた。聟どのゝ荷物か、爰に破れ行燈。

〽家重代の古道具、

掛一　拂賣りにしたところが

掛二　百二三十文の御身上。

五右　祝うて一つ打ちませう。

四人　しやん〳〵〳〵。

五右　三兩一歩で、借錢取り濟ました。

四人　しやん〳〵のしやん。

〽しやんと妹脊の固めの杯。

れい　サア、これからは色直し。娘、奧へ。

五右　私しどもは、

四人　開きませう。

れい　聟どの、お組、奧へ。

ト お組が手を取る。

〽親子は奧へ掛乞ひども、我が家へこそは立歸る。

ト お禮お組は奧へ、五右衞門先に三人は捨ぜりふ云ひながら向うへ入る。五郎太殘り、思案の思ひ入れ。

〽寺々の六ツ打ち交ぜて、思案ちまたに恩と義理、重ね戸棚のとつおいつ、奧を見廻し獨り言。

ト合ひ方。

五郎　イカサマ、緣は味なもの。鹽谷の家中、早野勘平と云ふ侍ひが、殿の御不興を蒙むりて、本國へは音信不通。歸參を祈る甲斐もなく、主人の最期と聞く無念さ。親人三左衛門どのも、御用金失ひし科に依つて、切腹と聞いて、賴みの綱も切れ、せめてはその金子を償ひ、それを功に由良之助どのへ、連判に加はり、草葉の蔭の御勘當、お詫びを願ふ便りにと、思ひ附いた金の才覺。無心の綱に云ひ交し、思はず夫婦親子の結びも、嫌と云はれぬ金の義理詰め、今宵のうちにこの家を出て、敵討ちの供すれば、再び生きて歸らぬ身の上、薄き契りと知らずして、喜ぶ娘が心の內、不便と思へどこの內に、安閑として居ては、御主人への功立たず、ハテ、なんとしたものであらう。

〽なんと詮方內證の、お勝手はまだ白紙に、かけ硯の置き所、やう／＼探して行燈の蔭、書く墨色は人柄に、似せぬ能書の散らし書。

トこの文句の通りあるうち、お組出て來り、フツとこれを見付けて思ひ入れ。

〽ちらと見つけてお組が廻り氣、脇からちよつと狀の端、はつと引取りさあらぬ顏。

オ、、誰れかと思うたら、ほんに、よう書く手を持つて居る人に、こんな惡筆を見せるのは恥かしい……お組さま、イヤ、さまぢやない、もう女房ども。其方は、アノ眞實、おれが可愛いか、但し憎いか。コレ、それが聞きたい。

〽味な所へ紛らせば、戀仲ながら今更に、改まつたる初女夫、恥かしさうに。

くみ　カ、可愛い。

五郎　イヤ、嘘であらう。

くみ　ナ、なんの、ホ、、ほんに。

五郎　サア、其方、ほんに可愛ゆくば、一生の無心があるが、聞いてたも……と云ふは外の事でもない、今日夫婦に成つた今夜、其方の方からさつぱりと、おれに緣を切つてたも。

くみ　エ、。

ト思ひ入れ。

五郎　サ、、愕りの筈、合點がゆくまい。男の方から女房に、去られたいではなけれども、何を隱さうこの間、其方に借りた百兩の金は、おれが主人と崇むる人に、差上げた目見得金。その金の德で元の武士に立歸り、明日は



文政元年九月中村座所演　五世瀨川菊之丞のお組

東國へ下らねばならぬ仕儀。この世に居るも今宵限り。暇乞ひのその書置、母人へ渡してたも。女房、さらば。

〽と立ち上がる、思ひ掛けなき詞にハッと。

ト五郎太、行かうとするをお組引留め

〽驚ろくばかり口へは出ず、もだつく胸のもつれ緣、糸

くみ　マ、待つて〳〵。ソ、そりや、ナ、なぜに〳〵。

に云はする怨み言。

ト有り合ふ琴にて支へ、唄にかゝる。

〽愛し可愛き方さまに、見放されんも白露の、葉末に結ぶ浮き身ぞや……ほんにお前ゆゑならば……子の日の若菜君が爲、惜しからざりし命の中、我が世帶をも世話やかば……嬉しさは山々……二つには又母樣へ、及ばずながら朝顔の、夢ばかりなる御孝行……それさへ捨てゝ行かうとは。

ソ、そりや聞えぬわいなア。

五郎　成る程〳〵、その怨みは尤も。イヤモウ、おれもこの內の家督を繼ぐが、嫌ではなけれども、いま云ふ通りに手詰めとなり、恩知らずとお禮さまの、思し召しも氣の毒ながら、妾をよう合點して、侍ひになるからは、今日あつて明日ない命。死んだと思うて東國へ、お遣りなされて下されと、お執成し申してたも。其方は外によい聟取つて、おれが事はフッツリと……コレ、これが一生の暇乞ひにならうも知れぬ。母人へよいやうに、お組、其方を賴んだぞや。

〽云ひ捨て又も立出づる、夫の袂へお組は取りつき。

くみ　なう情なや、ホ、外の男と添ふ心なら、ナ、なんの斯うした固めをしませう……わしぢやとて、まんざら。

〽事を分けてのお詞を、惡う聞くではなけれども、如何に男の癖ぢやとて、あんまり酷いと夕顔の、花咲かせとは胴慾なと、泣き口說くこそわりなけれ、隱居の間より母お禮、襦袢姿に大小携へ、勘平が側に置き。

トこの文句のうち、お禮出て來る。五郎太、是非なくとまる。

れい　イヤ、ナウ、聟どの、こなたも浪人の果。近頃侮りがましけれど、親子の印、聟引手……サ、斯う緣を結んで置いて、改めて賴まにやならぬ樣子がある。よもや違背はあるまいの。

五郎　何がさて母のお詞、殊更大恩の義理あるお方、お賴みとは勿體ない。此方よりも折入つて、お願ひ申す仔細もござれば、先づあなたのお賴みから。

れい　イヤ、輕々しくは云はれぬ事〻なんであらうと云ひ出す事、背かぬと云ふキッとした、サヽ、誓言がマア、聞きたい。
五郎　ムウ。
ト思ひ入れ。
〽勘平づんと立ち、澁紙包みの古大小携へ出で〻柄糸は切れたれど、武士の魂ひ、變ぜぬと云ふ證據は斯くの通り。
ト金打する。お禮見て思ひ入れあつて
れい　オヽ、心底見えました。その心を見る上は、何をか隱さう、その賴みの仔細と云ふは、敵が討つてもらひたい。
五郎　ヤ。
れい　サヽ助太刀がして欲しい。
五郎　ムウ。して敵とは、主の仇か、但しは親の敵なるか。
れい　オヽ、娘が爲には親の敵、母が爲には夫の仇。
五郎　して、その敵は、いづくの誰れと
れい　知れてあるとも。敵とは、播州鹽谷判官の家來、大星由良之助ぢやわいなう。
五郎　エヽ。

ト恟り思ひ入れあつて
ムウ、由良之助を敵と覗ふ、人々の御由緒はな。
れい　サア、その由良之助と膝を並べし、斧九太夫が後家でござるわいの。
五郎　ナニ、九太夫どの〻。オヽ。
トぎよつとする。
れい　殿御生害の後、一筋に忠義の夫、城を枕に討死せんと、云ひ募つたを根に持つて、卑怯未練な由良之助が、詰め腹を切らせしと、家來が屋敷へ歸つて注進、その時の口惜しさ、直ぐに斯うとは思へども、悴定九郎めは行くへ知れず、なまなか女の刃向ひだて、犬死をせんよりと、すご〳〵國を立退く日より、哀れ力となる人がなと、朝夕祈る甲斐あつて、見所あるこなたの人柄。この人こそといたづらを、娘に敎へて仕掛ける戀。あの用立つた百兩は、即ち夫九太夫どの〻形見の金。今日五十日の時に當り、成就したあの石塔。連合ひの石碑の前で、聟舅の契約すれば、こなたの爲にも舅の敵、大星討つて未來の妄執、晴らして進ぜて下されいの。
〽金の出所娘の由緒、ぐわらりと知れて胸ぎつちり、賴みの先を打ち掛けられ、たゞ恍惚りと呆るゝばかり。

ト五郎太、途方に暮れし思ひ入れ。

コレ、聟どの、返答ないは、後れが付いたか。聟となり子となりて、今更ちつとも引かしはせぬ。得心なければ三人とも、刺し違へて死ぬ覺悟。サア〳〵〳〵、返答はどうぢや。ナヽなんと。

ト刀へ手を掛け、五郎太へ詰め寄る。

五郎　アヽ、コレ、お急きなさるゝな。ハテ、餘り御念が入り過ぎる。武士たる者が金打して、變替へ致す法があらうか。

トお禮、刀を置いて

れい　如何にも、聟どの、あやまりました。娘、喜びやれ。わしやモウ、敵を討つた心がするわいの。

トお禮お組、喜ぶ思ひ入れ。

〽いそ〳〵勇む折も折、表に足音、とん〳〵と戸を打ち叩き。

トこの文句のうち、向うより若黨、絹羽織、袴大小にて目錄臺に百兩包みを載せ、足早に出て來り、門口を叩き

若黨　ちと御案内を頼みませう。

五郎　ナニ、御案内とは。

ト云ひながら、門口を明け、若黨を見て、

して、いづ方よりのお使ひな。

ト若黨、兩手を突き

若黨　ハツ、早野勘平さまへ、主人由良之助申しまする。兼ねて亡君御石碑、京都の御菩提所へ建てたき念願、幸ひ貴公樣、只今の御稼業と承はり、勘平さまより御調進下されなば、且は忠義の一つとも成り申さんか。些少なれども石碑料進上仕る。委細の儀は由良之助、追つ付けそれへ參上いたし、申し上げんとの儀でございまする。

〽聞きも終らず急き立つ母。

トお禮、身構へする。

五郎　アヽコレ、由良之助どのゝ見えらるゝは、後刻とあるに、御馳走はまだ早い。女の出向ひ、無禮の至り。ママ、鎭まつてござりませ。

ト思ひ入れにてお禮を留める。お禮、チツと扣へる。

イヤ、お使ひの旨、承知仕つた。御返答は、後刻お出での砌り、御面談にて申し上げんと、よろしくこの段、賴み入りまする。

〽後刻々々と挨拶に、使ひは別れ歸りける。

ト若黨は引返し、直ぐに向うへ入る。
れい　ア、有り難い〳〵、時こそあれ、今日敵が爰へ來るとは、佛神三寶力を添へさせ給ふる印し。コレ〳〵娘、其方もちやつと支度して、佛檀へお燈明上げ、位牌の父御に斯くと云ひ、お喜ばせ申しやいの。
〽早う〳〵とつかはと、娘は佛間へ走り入る。
トこれにてお組、奥へ入る。
さうして、聞けば本名早野勘平どのと、今始めて知つたこなたの身の上、氏と云ひ武邊と云ひ、確かな助太刀あるからは、本望遂げるは今この時、おのれ大星。
ト急き立つ。
五郎　ヤレ、お急きなされな、大事の場所。
れい　イカサマ、敵討は恥ある者。
五郎　流石名におふ由良之助。
れい　千變萬化と働らくとも
五郎　本意を遂ぐるは
れい　親子が一心。
五郎　拙者が聲を掛けるまで
れい　麁忽は致さぬこの上に
五郎　勝負の指圖は
れい　こなたに任せて
五郎　靜かに御用意。
れい　そんなら聟どの。
五郎　姑御。
れい　キッと詞を
兩人　番ひましたぞ。
〽我れも用意と打ち連れて、隱居の間へと入りにける。
ト急き立つゝお禮を押へながら、五郎太思ひ入れあつて奥へ入る。
〽大星由良之助義兼、本意にあらぬ天を戴き、月日に恥づる義の一字、いかで此まゝ山科より、蔦の細道門の口。
トこの文句にて由良之助、向うより出て來り、門口へ來り
由良　早野勘平、この家にと聞く。義兼これへ推參いたした。
〽斯くと案内に勘平は、兼ねて嗜なむ麻上下、腰に重代相州物、さしも立派に出で迎ひ。
トこの文句のうち五郎太、麻上下にて奥より出て來り門口に出迎ひ
五郎　これは〳〵、御苦勞の御入來。先づ〳〵これへ、お



文政元年九月　中村座所演



三世坂東三津五郎の由良之助　　七世市川團十郎の五郎太

由良　通り下され。
　　上座御免。
〽と上がり口、玄關なけれど式臺は、武士の禮儀の書院向き、勘平下座に手をつかへ。
五郎　今更申すも詮なけれど、拙者十一歳の時、童喧嘩に誤まつて、朋輩の忰を手に掛けし科に依り、お慈悲を以て殿の御勘氣、市町に生ひ立てども、昔を忘れぬこの二腰お石碑の役目仰せ付けられ下さる段、身に叶ひし事なから、この上とてもお情には、貴君思し召し立たれたる、大望の連判にお加へ下され、東國のお供に召連れられ下されなば、この上の大慶、武士の冥加。
由良　ア、、コレ〳〵勘平、由良之助に覺えなき、大望などとはなんの事。貴殿とくと面體拜見いたさう。これへこれへ。
　ト五郎太、にじり寄り、由良之助、五郎太が顏をよくよく見て
イカサマ、幼な顏覺えあり。ハテ、親子とて三左衞門どのにも、よう似申した事わいの。何かは知らず、由良之助が東國の供したいとあるが其許には又、どの命を以て供は召さるゝぞ。
五郎　エ、。
　トぎつくり驚ろく。
由良　イヤサ、眼中どみて息遣ひ、音聲五音の調子を外れし、死人を供には連れられまい。但しは命に掛替へあつてか。
五郎　ハ、ア、御尤もなる其お詞、如何にも拙者が命の掛替へ。
〽これ御覽ぜと取出だす、位牌に記す逆朱の文字。
　俗名早野勘平光興、生年積つて廿六歳、討死の魁仕る。
〽兩肌ぐわらりと血汐の紅ゐ、頼み切つたる勘平が、自害を立聞くお禮が悔り、迂濶に切つても出られぬ仕儀、樣子如何と窺ひ居る。
　トよき程にお禮、障子屋體より出かゝり思ひ入れ。
〽由良之助立寄つて。
　ト由良之助、五郎太を見て
由良　チエ、死なしたり、勘平、義臣の中に加はりたく、御邊より調進せし、百兩の金子こそ、鹽谷家の極印あるは、これ正しく九太夫が、掠め取りし千兩の内の金子。不義の手より出でたる金、御用には立てられず、それを

云はゞ勘平が、志を無にする道理と、石碑料に准らへ返還せしは、斯様の最期をさせまい爲。さりながら、討死を常として、我が身の位牌を刻み置く、斯程の魂ひ。生きよと云うても、よも生きまじ。エヽ、あつたら惜しき侍ひを。

〽せめて鎗一本の主になさゞる殘念さ。

　ホヽウ、見事。

〽見事々々と一言が、百萬石より身に應へ。

五郎　親三左衛門切腹も、用金を九太夫に盗まれたるゆゑなれば、我が爲にも親の敵、その敵の娘とも知らず、非道不忠の九太夫が、一家となつた業曝し、位牌に血汐のこの逆朱、勘平と云ふ名ばかりは、敵討のお供を御赦免願ひ奉る。

〽云へど主人の御勘氣は、心一つに宥されず、只默然としたる後の方、我れと貫くお組が覺悟。

　トこの時、障子の内には、パツと血煙り立つて、バタバタ。お禮驚ろき、障子を明けると、お組、自害して居る。お禮これを見て思ひ入れ。

〽母も流石は武士の妻、騷がず由良が側に寄り。

れい　お久しや大星さま、常の氣質は知りながら、死んだ夫に贔屓が付き、正しく道ある由良之助さまを、九太夫どのゝ敵ぞと、今の今まで思うたは、みんな女の淺墓ゆゑ。ひよんな聟にならしやつた、勘平どのがいとほしい。娘が死んだで不忠者の、縁はこれまで。何卒血判のその中へ、お記しなされて下されかし。コレ〳〵娘、其方も共に、お願ひ申しや。

〽抱き起せば手を合せ、思ひ入つたる親子の嘆き。

由良　ヤア、斧九太夫が女房娘、縁ある者の願ひでは、いよ〳〵以て、叶はぬ〳〵。

れい　すりや、我れ〳〵が願ひでは。

由良　女房母は縁者でないか。

れい　ムウ、成る程。

　ト思ひ入れ。

〽側に有り合ふ琴引寄せ、刀押取り十三の、糸筋さつと切り放し。

娘も聟も勘當ぢや。

　ト五郎太、お組、思ひ入れにて

敵の緣に絡まれし、血筋糸筋、先づ此やうに切つて捨つれば、今よりは赤の他人の二人の者。他人よ、さらば。

〽一言に、誠立てる理りを、割つて云はれぬ母の慈悲。

由良　オヽ、他人とは出かされたり。併し二人が臨終の際、暫しの名殘は苦しかるまじ。

れい　イヤ／＼／＼、娘でもない聟でもない。先立つ夫九太夫どのには、仇敵の勘平夫婦。罰が當つて氣味よい最期。ハヽヽヽ。

〽と顏外向け、笑ふも泣くも眞實の、一つに落ちる蓮の露、刀を杖によろめく手負ひ。

五郎　思へば九太夫、父の仇。

〽思ひ知れやと石の面、念力凝つて拜み打ち、石の片側切り割つたる、刃は正宗、忠義の手の内。

ト五郎太、石塔を切り割る。

〽大星思はず聲を上げ。

由良　稀代の忠臣早野勘平、敵討の一番鎗、血判慥かに受取つた。

〽哀れ果敢なや。

ト此うち由良之助、門口へ出る。五郎太よろしくあつて、お組も一度に落入る。お禮「ハヽアーと泣かうとして袖を顏へ當て、裏身になる。由良之助、顏を外ける。兩人よろしく。

送り三重にて幕

六幕目　揚屋の場

役名――太鼓持ち、近江屋次郎左衛門、石堂縫之助。傾城、浮橋。大星力彌。山名次郎左衛門。斧定九郎。渡邊作太夫。太鼓持ち、一八。同、九八。亭主、才兵衛。

本舞臺、三間の間、筋塀。舞臺前へ出して、人形手摺。上の方に九尺の二階家、下手に竹田の紋付けたる面幕の臆病口、日覆より櫻の吊り枝、釣り鐘等、誂らへの通り、よろしく飾り付け、大小、トヒヨにて幕明く。

ト才兵衛、袴の形、黒具の頭巾をかむり、口上人形を持ち、眞中へ出て

才兵　東西々々、この所にて相勤めまする所作事、名題をちよつとお耳に觸れまするやうにござりまする……「道行拙振袖一淨瑠璃太夫常磐津兼太夫、三味線岸澤式佐、上調子岸澤萬藏相勤めまする。役人白拍子糸遊、近江屋次郎右衛門、出使ひに仕り、御覽に入れ奉りまする。いよ

いよこの所、浄瑠璃始まり、其ため口上わけまして左様。

ト次第になり、二階家の簾上がると、爰に太夫連中居並び、直ぐに浄瑠璃、次郎右衛門、上下にて人形の出使ひ、誂らへの通りあつて〽日高ならねど着きにけり、御寺にこそは着きにけり」と納まると、知らせに付いて太夫連中を消し、欄は引上げ、手摺はセリ下げ、正面の塀は切つて落す。

向う一面長暖簾、茶屋の道具、誂らへの通りに飾り付け、直ぐに踊り地になる。

ト奥より縫之助、羽織衣裳、傾城浮橋、仲居二人、亭主才兵衛、藝子、三味線を持ち出て來り、

皆々　やんや／＼。

藝子　ほんに、次郎さんの隠し藝、けうといものでござんした。

縫之　けうといともなんとも、賞め盡くされぬ。加賀屋もどきの振りで、大出來々々、近年の大當りぢや。ナウ浮橋。

浮橋　さうでござんす。いつの間にやら、次郎さんの隠し藝、面白い事でござんした。

才兵　面白い段か、古への文三文五はいざ知らず、近代の彌市冠子は、なか／＼おそろ、感心々々。

仲一　次郎さんの出使ひは、見事でござんしたが。

仲二　左と足は、誰れさんでござんすえ。

ト此うち次郎右衛門、肩衣を取り、扇子遣ひして居る、奥より一八、九八、黒具の儘、頭巾を持ち出て來る。次郎右衛門汗を拭きながら

次郎　イヤモウ、さう褒められては、顔に紅葉。イヤ又、春野主が上調子、藝子の時とは生れ替つてきついぞ。一八、九八が左と足も、えらいぞ／＼。

才兵　イヤア、左と足は一八九八か。どれも／＼隅には置かれぬ。旦那、この二人も出かしましたなア。

縫之　オヽ、出かしたとも／＼。仲居ども、サア、酒ぢや酒ぢや。

仲居　アイ／＼。

ト銚子、杯、肴、いろ／＼持ち出る。縫之助、杯を取り上げる。仲居注ぐ。

縫之　サア／＼、次郎右、一八。九八も近う來やれ。サアサア、一つ／＼。

トさす。次郎右衛門取上げ

次郎　これは有り難うござります。

縫之　ト呑んで下に置く。
ソレ、肴ぢや。
ト小判を二枚、扇に載せて遣る。
次郎　イヤ、お肴とは、これは有り難
一八　山吹とは、古いぞ〳〵。
次郎　ドツコイ、さうは立合ぬワ。有り難草履を脱いで、編笠の中のオ、、、。
ト浄瑠璃を語る。
才兵　こりやえらいワ。
縫之　サア、一八、九八、肴せう〳〵。
トまた小判を一兩づゝ遣る。
一八　イヤア、これは存じよらざるお肴とは有り難の草履は古いぞ。
次郎　サア、存じよらざる自筆の狀、有り難に取添へ
一八　賜はつて候ふ。
九八　ト兩人、懷中へ入れる。
才兵　イヤ、これもえらいワ。
縫之　面白い〳〵、次郎右衛門、まだ何ぞあるか。
仲居　次郎さんの頓作が見たいわいな。
次郎　あるぞ〳〵。モシ旦那。

トそこにある以前の人形を出し
これをさいて見やしやんせ。
ト人形の手を握り出す。縫之助見て
縫之　なんだ、握り拳を出したは。ハ、ア、榮螺の壺燒が喰ひたいと云ふ事か。
次郎　イエ、違うた〳〵。
縫之　そんなら、空腹によつて、握り飯がしてやりたいと云ふのか。
次郎　それも違うた。
浮橋　忍び路の妻戸を叩く鍵わらびとやら云ふ句の心で、戀しいお方に逢ひたいと云はしやんすか。
次郎　イ、エ、この手の內は雀ぢやわいな。
縫之　ハ、ア、聞えた。雀百になつても踊を忘れぬと、お布施をくれいか。呑み込んだ〳〵。
ト手箱より百兩包みを出し
ソレ、お布施の百兩、そもじへ進上仕るワ。
次郎　エ、。
ト悄りして
アノ、これを私しにかえ。
縫之　ぞつこん惚れて惚れぬいた白拍子、身請けせう。

次郎　そりや、御眞實でござんすか。
縫之　なんの嘘を云はうぞ。
藝子　それでは、浮橋さんか。
縫之　大事ない／＼。浮橋は本妻、そもじは手かけ、梅と櫻の根曳きして、獨り樂しむ縫之助、奥でわつさり酒にせう。
次郎　エヽ、嬉しう存じまする。なんとお禮を申さうやら……有り難い百兩の金供養、一八、九八、どんなものぢや。
一九　ほんに、思へばその金恨めしやとて、次郎右に取り付き、取るよと見えしが。
　ト唄ひながら立ち騷ぐ。
次郎　ひつたくりてぞ失せにける。
才兵　ハヽヽヽ、旦那、また奥で大酒盛り。
縫之　よからう／＼。サア、太夫、皆もおぢや。
皆々　サア、お出でなされませ。
　ト踊り地になり、皆々騷ぎ立ち、暖簾口へ入ると、直ぐに向うより山名次郎左衛門、羽織大小。定九郎、紺看板の形、草履取りにて出て來り、花道にて
定九　お旦那、お聞きなされましたか。大馬鹿ものゝ縫之助がほたへ遊び、由良之助親子は未だ參らぬ體、鹽谷が弟縫之助に、心を寄する大星親子、拙者が爲には親の敵、今宵の内に討つ放して。
山名　コリヤ、聲が高い。道々も申す如く、この度京都へ罷り登りしその仔細は、師直どのを付け覗ふも計り難く、その目付には參つたれど、面體知らぬ鹽谷浪人。それゆゑ定九郎どのを家來に仕立て、事の樣子を窺ふところ、呆れ果てたる馬鹿者ども、この上は用心には及びますまい。只心憎きは浮橋め、縫之助に心中立て、某が座敷へ寄り付かず、剰へ身請け致すとの事。いよ／＼以て身が武士道が相立たぬ。先へ廻り、此方へ身請けして、縫之助に鼻明かす分別。また都にて大馬鹿を盡す事、鎌倉へ一々告げ知らさば、物堅い石堂、勘當いたすは定のもの。さすれば身が望みも叶ふと云ふもの。
定九　左やう／＼、彼奴さへぼいまくれば、浮橋は其許のお手に入る。
山名　何かの手番ひ。
二人　うまい／＼。
山名　サヽ、斯うお來やれ。
　ト兩人舞臺へ來り

定九　コリヤ、誰ぞ頼まうぞ〳〵。
　ト奥より才兵衛出て
才兵　ハイ〳〵、どなたでござりまする。イヤア、これは山名さま、御來臨とは有り難い。今宵は縫大盡の御趣向で、歌舞伎の操りやら、堪つたものぢやござりませぬ。それゆゑに奥座敷はあの通り、先づ〳〵二階へ入らつしやりませ。
山名　なんぢや二階へ行け。又例の
才兵　蜘蛛の巣だらけと仰しやりますか。
山名　ハテ、才はじけた奴ぢやな……コリヤ、定平、其方は勝手に殘り、歌舞伎狂言とやら、餘り見た事もあるまい。ナ、ソレ、とつくりと見物いたせ。亭主、彼れめに見せてやつておくりやれ。
才兵　ハイ〳〵、よい時分にお知らせ申しませう。
山名　然らば亭主。
才兵　サア、お出でなされませ。
　ト踊り地になり、山名、二階へ入る。定九郎は亭主案内して奥へ入る。向うバタ〳〵にて若い者一人、走り出て來り、花道にて見事に返る。これをキツカケに、男伊達の鳴り物になり、力彌、壹本差し、腰に尺八を差し、下駄にて、若い者の手を捻ち上げたまゝ出て來り、花道にてほぐれ、ちよつと立廻り。
力彌　こりや、わいらは何とする。
若一　コレ、前髮、毎晩々々この里へ、精も氣根に通ひ詰め。
若二　爰らに若い者も無いやうに、マア、その尺八を借りてえワ。
若一　その草履下駄を貰はうかい。
力彌　成る程、望みなら、貸してもやらうが、どうして借りる。
兩人　オヽ、斯うして、
　トかゝる。
力彌　ハテ、性懲りもない、慮外な奴の。
〽慮外者めと投げ付ける、透かさず眞向眼潰し、開いて捻る小手返し、また起上がるを蹈み据ゑ蹴据ゑる早速の力彌。こりや堪らぬとほう〳〵に、口は達者に足腰は、撫でつ擦りつ逃げ歸る、始終見濟まし次郎右衞門。
　トこの文句のうち若い者二人を相手に立廻り、トヾ二人は向うへ逃げて入る。力彌追つて行かうとする所へ、次郎右衞門出て來り



文化九年七月中村座上演　尾上松助の力彌

次郎　オツト待つたり、力彌さま、その手の内を見るからは、今夜の狂言、曾我物語、五郎の役に角鬘、旦那は殊ないお待兼ね。サヽ、力彌さま、お早うお出でなされませ。

力彌　さう云ふこなたは次郎右衛門……すりや、若旦那には最早お出でか……今の奴等を。

　トまた行かうとする。

次郎　これはしたり、短氣な所が打つて付けだ。時宗さま、我れらは直ぐに朝比奈か、留めた〳〵おッ留めた。一晩泊つてくんさるなら、忝け茶の葉に蝶々蜻蛉やきりぎりすだアもサ。

力彌　エ、コレ、命冥加な。

次郎　ハテマア、お出でなされませ。

　ト踊り地になり無理に連れて奥へ入る、

〽花と見紛ふ浮橋が、後に付添ふ亭主才兵衛。

　ト暖簾口より浮橋、才兵衛出て來り

才兵　コレサ、太夫主、今も云ふ通り、二階の客がお前にきつい執心。この間から度々の平頼みゆゑ、お前にも亂ツつ口說いつ申しても、ちつともお貸しなされぬは、あんまりきついなされやう。是非に今宵は。

浮橋　ア、コレ、才兵衛さん、もう云うても下さんすな。知つての通り身請けの相談、殊に揚詰めの內外の客に、貸しに行ては、どうも縫さんへ立ちやんせぬ程に、もう重ねて云うてもおくれな。

才兵　小夜嵐とは胴慾。お隙は取らぬ。ツイちよつと。

浮橋　嫌ぢやわいなア。

才兵　そんなら、どのやうに申しても、

浮橋　オヽくど。

　トこの時、二階屋體の簾を上げ、內に山名、莨盆を下げ、肴を扣へ

山名　亭主〳〵。

才兵　ハイ〳〵、只今それへ參ります〳〵。

山名　いま聞けば、日柄の內は貸す事ならぬとや。こりや尤もぢや。そんなら直ぐに身請けせう。

才兵　それは、身請けと仰しやりますれば、つい埒の明く事なれど、外より先達て貳百兩、手附けに受取り居りますれば。

山名　何にも云ふな、此方は手附けのなんのと面倒な。直ぐに身請けの相談。如何程なりと耳を揃へて渡さうが、それでも身請けは出來まいか。

才兵　何がさて、金子さへお渡しあらば、浮橋さんはあなたの奥様。
山名　然らば萬事は其方が働らき。金と證文引換へに、親方を呼びにやれ。
才兵　畏まりました。追ッ付け吉左右、お聞かせ申しませう。
山名　キッと詞を番うたぞ。
ト簾下りる。
才兵　こりや、忙しくなつて來たわえ。
ト一散に向うへ走り入る。
浮橋　樣子を聞く程、この身の難儀、身請けの事を殿樣へ云ふに云はれぬ後金の四百兩、今宵の內に調はねば、是非とも身請けは、あの山名へ、行かねばならぬこの身の上。どう思ひ廻しても、いとしい殿樣に、この世で添はれぬ。身の云ひ譯。未來で待つのが、オヽさうぢや。
ト獨吟やうの唄。
〽後朝に明けの睦言今更に。
トこの文句にて鏡臺より剃刀を出し、いろ〳〵ある。この後へ次郎右衛門出かゝり、窺ひ居る。
浮橋　さうぢや。
ト死なうとする。次郎右衛門、慌てゝ留め
次郎　待つた〳〵。そりや悪い料簡ぢや。
浮橋　イヤ〳〵、放して殺して下さんせ。
トもぎ放さうとする、次郎右衛門、剃刀を取上げ
次郎　サア、尤もぢや、道理ぢや。可愛いと思ふ男ゆゑ、死ぬる覺悟は世間にある格ぢやが、よう思うても見やしやれや、
ト合ひ方。
なんぼ好いた男でも、なんの事もなう請出されて、添うては結句面白味はない。逢はれず術ない所で、戀も色も樂しみがある。その辛抱せずに、得てはお前のやうな不料簡を出すか、又は心中して先の世で樂しまうと云ふが、無分別の天上、と云ふ譯を云うて聞かさうか。いま死んで逢ふと云ふ極樂へは、道がなんぼ程あると思はんす。十萬億土と云ふぢやないか。一日に十里宛として、日數に積つて見ると、日本の始まり神武天皇の時分から歩いて、今に行き着くか着かぬぢや。さて、この道中の入用が、宿賃から中食から、凡そ百十萬八千貫目程、草鞋代ばかりが錢で十五萬五千六百貫、通し駕籠にすると千百六十一萬九千五百八十貫目、これだけ金がなけりや極樂

へは行かれぬ。この十分一があれば、この世で結構な世帯が出來る。必らずそんな不料簡は、マア〳〵よしにさんせ。人にも相談と云ふ事がある。死なうとさへ思ひ詰めたら、どのやうにしても縫之助さまに添はれる程に、今のやうな無分別、フツツリ云はぬがようごんす。

〽諄うは云はぬ粋の意見。

浮橋　段々の御意見、お志しは嬉しいけれど、知つての通り、二階の客が身請けの相談。

次郎　サア〳〵、何も云ふまい。まだ揚詰めのお前の體、それを彼方へやつては、この所の掟が濟まぬ。氣遣ひさんすな、泣く事はない。次郎右衞門は男ぢや。二百兩の手附けの上、最前わしが貰うた百兩、これを渡して廿日の日延べして見せう。酒でも呑んで氣を慥かに持たんせ。斯う云ううちも心が急く。旦那の側へ早う行かんせ。わしも親方に逢つて、何かの埒を。

浮橋　そんなら、必らず次郎右さん。

次郎　氣遣ひさんすな。ドレ、行てかうか。

〽一散に飛ぶが如くにかけり行く、後見送りし浮橋が、泪の顔を振り上げて。

浮橋　人の心はさま〴〵の、中にも厚い志し、死んでも忘れぬ。エヽ、嬉しうござんす。

ト思ひ入れ、踊り地になり、縫之助、力彌、曾我の形にて、仲居三人、小道具を持ちながら出て來り

仲一　力彌さん、五郎の役は打つて付け、よい見もの。

仲二　申し、小道具も揃ひました。

仲三　もう幕が明きませうぞえ。

三人　サア、お支度なされませい。

〽銘々勸むる眞最中、鎌倉より早使ひ渡邊作太夫、息吐き敢へずすつと入り。

ト向うより作太夫、羽織野袴、中間付いて出て來り

作太　石堂右馬之丞さまの御子息縫之助さまへ、御對面申したい。お取次下されい。

仲一　オ、笑止、人物らしいお侍ひさん。

仲二　縫さんに逢ひたいとは、芝居見にござんしたのか。

仲三　但し、御一座でお馴染みでもござんすかえ。

作太　イヤ〳〵、左樣な儀ではござらぬ。急にお目見得いたしたい。早く〳〵。

仲一　申し、縫さんは爰にぢやわいな。御用あらば、直々に。

ト作太夫、縫之助を見て

作太　ヤ、成る程、若殿縫之助さま、端近う、ハッハッ。
縫之　そちや作太夫、何ゆゑあつてこの所へ。
作太　ハ、ツ、大殿右馬之丞さまより急ぎのお使ひ。この文箱。
〽差出せば手に取上げ、聞きもやらずにこ〳〵笑ひ。
縫之　さて其方は仕合せ者、結構な所へお出でなされた。我れ〳〵が狂言お目に掛ける。これに居るは大星力彌、器量はよいが初心者。エ、、由良之助が病氣でなくば、見せたいなア。
作太　ア、イヤ〳〵若殿、見ますれば、御酒機嫌と相見えます。先づお心を鎭められ。その御狀、とくと御覽あられませう。
縫之　オ、、見なと云うても親仁も同然。さらば對面いたさうか。
〽封じ目切つて押披らき。
「勘當の事」讀むに及ばぬ。しまひ〳〵。こんな事であらうと思うた。イヤ、其許ははる〳〵の所、御苦勞千萬。熬燗にして一つきこし召せ。ドレ、銚子持て〳〵。
ト縫之助寢る。
作太　アイヤ、暫らくお待ち下されい。まだ申し上げたき仔細もあり。イヤナニ、其許が大星力彌どのとな。密々お話しもござれば、女中方を暫らく遠ざけられて下されい。
力彌　他聞を憚るは大切の儀、浮橋どのを伴うて、皆奧へござれ。
浮橋　お國元より急のお使ひ、殊に殿樣の今のお文、どうも心にかゝります。わたしばかりは。
力彌　何事も後で知れる。マア〳〵奧へ。
女三　ほんに、氣がゝりなお侍ひさん。
作太　ハテ、ござれと云はゞ、先づ奧へ。
〽叱り付けられ浮橋も、心殘して奧の間へ、皆ばら〳〵と立つてゆく、作太夫膝摺り寄せ。
イヤナニ力彌どの、この度若殿の御身持ち、山名次郎左衛門より内通を以て、悪しざまに申し越し、聞捨てならぬ大殿の御立腹。それゆゑにこそこの大事。何卒お心改められ、御勘氣御赦免あるやうに、取計らひは力彌どの、若殿を主君と思ひ、再び家を接ぎ木の梅、花も實もある大星どの、心の曇りも晴れ渡る、鎌倉山の星月夜、香を尋ねてや人も來ん。
力彌　氣遣ひあるな渡邊氏。やがて吉左右。

作太　相待ち申す。早おさらば。

〽早おさらばと一言の、詞を殘す胸の内、思ひ殘して歸りける。

ト作太夫、こなしあつて供を連れ、向うへ入る。縫之助起き上がり

縫之　ヤレ／＼退屈な。これでさつぱり喜び酒。奥で一献呑み直さん。力彌參れ。

〽立ち上がる袖を扣へて。

力彌　若殿縫之助さま、御念願の通り、御勘當受けられ、定めて御本望でござりませう。

縫之　天晴れ力彌、流石由良之助が忰、賢しき一言。我れこの年月、兄の鬱憤晴らさんと思ふ心より、親人の勘當請けたるこの身の上、養父の恩は須彌大海、深き計略、大星が、一味徒黨にかたまる武士、その姓名は知らねども、我れも人數に加はりなば、九牛が一毛、義兼が力になり、無念を散ずる我が所存。力彌、如何に。

力彌　その計略と存ぜしゆゑ、我れを付け置き忍びの守護、今ぞ本望さりながら、徒黨の人數の其うちに、あつたしき侍ひは早野勘平、連判には加へしかど、是非も及ばず無慘の殉死、この姓名を其まゝに早野勘平光興と、今より御名を改められ、一味連判疑ひなし。

〽水を流せる辯舌は、實に大星が子なりけり。木蔭に立ち聞く定九郎、見合す力彌が顏と顏。

ト定九郎、下の柴垣より窺ひ居て、ちよつと隱れる。

〽奥へと知らする此方の目遣ひ、呑込む若殿縫之助。

縫之　そんなら力彌、曾我物語の夜討曾我。サ、奥へ來やれ。

ト踊り地になり、縫之助、奥へ入る。力彌續いて行かうとする。定九郎出て

定九　イヤ、力彌どの、お待ちなされい、一別以來、見忘れもさつしやるまい。定九郎でござる。

力彌　これは／＼、珍らしい定九郎どの、なんと思うてこの所へ、御遊興はお羨やましい儀でござる。

定九　イヤ、とぼけさつしやるな。ハテサテ、貴殿には座興千萬、草摺曳の夜討のと、徒黨の人數を狩り集め、面白い狂言事。この定九郎もその人數に入り、似合ひの名に改め、親の敵の討ちやうは、先ツ此やうに。

〽先ツ此やうにと切り付けるを、飛びしさつてしつかと受け留め。

力彌　お尋ねなうても此方より、御傳授申さうと存ぜしと

ころ。

定九　なにを。

ト立廻り。これより誂らへの鳴り物になり。兩人のタテ、いろ〱あつて、よき程に次郎右衞門出て來り、この體を見て

次郎　ヤア、力彌さま、こりや何事でござります。

力彌　オヽ、次郎右衞門か。あたりに氣を付け、物音紛らせ、合點か。

次郎　合點ぢや。

〽ハッとは云へど膝わな〱、心得たりと有り合ふ太鼓、打てどひやいの拍子拔け。

ト次郎右衞門、有り合ふ太鼓、狂言の拍子木にて舞臺を叩くヿあり、トヾ側なる燭臺を吹き消す。これより忍び三重のやうな合ひ方、闇の立廻り。三人探り合ひ、拍子木にて定九郎が頭を强かに喰らはせる。定九郎「アッ」と云ふ聲をしるべに力彌、定九郎を切り倒す。この時、奥より山名、手燭を持ち出て來り

山名　今のに慥かに。

ト差出す。力彌「エイ」と礫を打つて打ち落す。山名刀へ手をかける。次郎右衞門また山名が頭の上にてチヨンと木を打つ。これを頭に力彌、定九郎に止めを刺す。山名、ヒラリと拔くと、次郎右衞門、ひいやりと下に慄へる思ひ入れにて、拍子のキザミよろしく、

ひやうし幕

七幕目　七條河原の場

役名――傾城、浮橋。惣嫁、お百、同、おきみ。禪門、辨秀。萬歲、栃右衞門。いさみ、三吉。町人、角助、乳貰ひ、門兵衞。矢間重太郎、同女房、おりゑ。傾城、浮橋、亭主、才兵衞。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて練り塀、此うちより、植込みを見せ、それより、材木小屋の普請場。一面に、雪積り居る。よき所に、これ土舞臺前、雪板、すべて、七條河原、山名屋敷の體。爰に、おきみ、振り袖の夜鷹。お百、年增の夜鷹にて、下駄を穿き、傘をさして、糸立てを持ち、立ち身、時の鐘、てんつゝにて、幕明く。

ト下座と向うより、夜蕎麥賣り、按摩、町人、中間、

　いろ／＼の、仕出し、出て行き違ひ入る。

お百　なんとマア、剛勢に寒いぢやアねえかの。

きみ　さうさなう、いつそ水ツ洟が、氷柱のやうに下がるはナ。

お百　わつちやア今日は、手水にばつかり掛つて居たよ。そこが寒さと何とやら、名代床だわな。

きみ　ア、、どうぞ今夜は、あぶれないやうにしたいものだ。昨夜は、お茶を引いたと云つて、親方が錢箱を、引ツ裂くの、なんのかんのと、やう／＼内儀さんが詫び言で、夜食を食つた、その辛さ。お百さん、お前は、商ひをよくするが、なんぞ傳授とやらでもあるかえ。

お百　なんの夜鷹にお前、傳授も糸瓜もないがの、ハテ暗闇でする商賣、器量の、よいには構はないのサ。男と云ふやつは、鈍いものだから、床へ入れて、念佛を申すにも、鼻で、ぶつ／＼云ふと、無性によいか／＼と云つて、毎晩來るものよ。

きみ　成る程、年の功より、龜の甲だの。

　トこの時、奥にて、謠の聲、太鼓のあしらひ。兩人、恟りして

お百　オヤ／＼、山名さまのお屋敷で、謠が始まつた。

きみ　この寒いのに、いゝ氣だなう。

　ト、捨ぜりふ云うて、兩人小屋へ入る。非人一人出て來り、これ土の中へ、狀箱を埋め、竹を取つて、印しを附け、走り、向うへ入る。時の鐘になり、仕出し、また三四人出て來る。お百、おきみ、出て引ッ張る。

仕出　ハア、、もう姐え達、出かけたの。

同　錢が有るなら、一杯吞んだと思つて遊ぶになア。

お百　よしねえ／＼。内へ歸つて、錢の出ねえ内儀さんでも抱いて寐なせえ。

仕出　成る程、口の強い姐えだ。からかつて居るうち、雪が積るぞ。

同　サア／＼、行きませう／＼。

　ト時の鐘、皆々、向うへ入る。下座より辨秀、禪門の形にて、出て來る。

モシ／＼。

　ト引ッ張る。辨秀立どまり。

辨秀　な／＼ぢや／＼、用でもござるか。

お百　オヤ／＼、どうせうの。

きみ　口明けだ。遊んでおくれな。

辨秀　ハ、ア、こなた衆は、色達ぢやの。



文化九年七月中村座上演　三世中村歌右衛門の萬歳

兩人　知れたことといな。
辨秀　イヤ〳〵、おれは隱居して、莚破りも過ぎました。見りやア、振り袖を着て、小さい娘。ア丶、如何にすぎはひなればとて、突つけ賣りで錢儲けせうとは、此方が宗旨の、お文さまに書いてある、穴かしこ〳〵。
お百　これな、そんな事云はずと、遊びねえな。
辨秀　イヤ、茄子のないが、聞いて呆れますワ。
ト振り切つて
ア丶丶南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト、急ぎ足に、向うへ入る。てんつ丶になり栃右衞門田舍萬歲、ツカ〳〵出て來る。
兩人　コレ、萬歲さん〳〵。
ト萬歲、立ちどまり
栃右　ハイ〳〵、お呼び、なさる丶は、舞へとでござりますか。日は暮れたれど、商賣づく、ドレ、舞ひますでござりませう。
トこれより、下座へ取り、萬歲の所作よろしくあつて
兩人　ア丶、コレ〳〵、舞はんせぢやない、買はんせぢやわいな。

栃右　ヤア、舞はんせぢやない、買はんせぢや。……ハ、ア、こなた衆は、惣嫁ぢやの。
お百　アイ、江戸で夜鷹、此方で惣嫁。
きみ　水澤山な、新造でも
お百　仕事上手な、年增でも
きみ　情の切賣り、掛け値なし。
お百　萬歲さん、買はんせいなア。
栃右　なんのこつちや。おりや、旦那衆ぢやと思うて、息勢張つて。ア丶、見た所が、惣嫁でも、愛嬌のない面付き。一日アタフタ舞もうて、儲け貯めた、この錢を、その面で、せしめうとは、誠に野太うさむらひける。
トまた下座へ取り、所作よろしくあつて、栃右衞門、トツカワ、向うへ走り入る。
きみ　エ丶、いま〳〵しい。けち萬歲だ。
お百　ほんに、吝つたれな奴ばかり來る晚だなう。
ト捨ぜりふ、云うて居ると、下座より三吉、勇みにて、そ丶り節を唄ひながら來り
三吉　どうだお百、今夜はひまか。
お百　見ねえ、まだ口明けもしないよ。
三吉　緣起直しに遊んでやらうか。

お百　なんの、よい口な、お前、勤めがあるかえ。

三吉　わりやア剛勢に、おれを見縊つたな。夜鷹を買ふ、勤め位は、菰入れの隅にもあるぞ。

お百　夜鷹々々と、あんまり安く云つてくんなんな。これでも昔は、歴とした、貧乏人のお孃さんだ。

三吉　ナニ、九十三だ。道理で、面が皺だらけだ。

お百　カウ、洒落ずに遊ばゝ遊んでくれねえな。

三吉　そんなら遊んでやらうかい。

お百　サア、來なさい。

　ト お百、三吉を連れて小屋へ入る。おきみ殘り

きみ　どう云ふ者だなう。自分の口から云ふのは、をかしいが、器量も相應で、人が蛸だ／＼と云ひなさるが、鳶凧かしら。いつでもあぶれ通し。これぢやア築地へ歸られぬわいの。

　ト また時の鐘になり、仕出し出て來り、いろ／＼あつて向うへ入る。小屋の内にて

お百　イエ／＼、さうはならぬわいの。

　ト 三吉、下駄を持つて逃げて出るを、お百追ひ出て引ッ捕へる。

三吉　これサ／＼、明日の晩、一緒にやるよ。

お百　いゝ加減にやアしない。手拭でも置いて行きな。

　ト 取りにかゝる。

三吉　ニ、べら坊め、放しやアがれ……、廿四文の代りに、百の手拭を取られて堪るものか。

　ト 云ひながら、お百を踏み倒し、向うへ逃げて入る。おきみ、お百を起しやる。

お百　エヽ、この野郎め、親にしてもいゝ者を。

きみ　これサ、お百さん、疾に逃げてしまつたよ。

お百　エヽ、足の早い、はツコけめだ。

きみ　錢が無くば、五人組でも賴めばよいに。

お百　盜人やアい。

きみ　泥坊やアい。

　ト 怒鳴りちらし

兩人　ハヽヽヽヽ。間の惡い晩だなう。

　ト 思ひ入れ。時の鐘、鳴る。

〽 夜もはや五ツ、いつもの自分、宵は人目を忍びの勤め、形と勤めは黒白の、雪の上着の黒木綿、惣嫁に惜しき器量なり。

　ト この淨瑠璃のうち、おりゑ、惣嫁の拵らへにて、傘を差し、安下駄を履き、出て來る。

若百　オヤ、いま出て來なんしたか。

りゑ　ほんに、お前方、早うござんしたな。

きみ　サア、此方は親方持ちゆゑ、仕方なしに、早う出たが、この雪降りで、寒いのに。

お百　ほんに今夜は、內に居て、坊に乳でも呑まして、休んだがよからう。

りゑ　サア、わたしもさうは思へども、冷えると云つて、內に居れば、何やらかやら足らぬ勝ち。

お百　ヤレ／＼、さうかえ、氣の毒らしい。

きみ　併し今夜の間も、大概知れた。わつちやア、口明けもしないよ。

お百　イエ、わつちやア、紙だけ、地切りを切らした。

きみ　ほんに、さうだなう。

りゑ　そんなら、緣喜直しとやらに、一服のんでござんせいな。

お百　成る程、それもよからう。そんならお前さん、お前は出かけゆゑ、そこでお稼ぎ。

きみ　サアお百さん、行きなさんせい。

ト獨吟のかゝり。おきみ、お百、小屋の內へ入る。この獨吟のうち、おりゑ、衣裳を着替へる事、よろしく唄切れる。おりゑ思ひ入れ。

りゑ　如何に、計に迫ればとて、假にも勤めの、其うちでも、辻君と身をやつすのも、便り訪づれない夫の、どうぞ戻つて見えるまで、舅御達の養育がしたさ、心一つに合點して、よう諦めては居るものゝ、百五十石頂戴した、武士の女房とこれがマア、どう云はれた形かいの……ほんに、こんな事、人に聞かれたら、それこそ恥の恥と云ふもの。ドレ、いつものやうに客を待ちませう。

ト入るさの月も雪空に、駒下駄履いて來る足音。よい客さうなと立寄つて

ト、此うち、下座より角助、羽織ぱつち一本差しにて傘をさして出て來る。

りゑ　モシ、お遊びなされて下さいませ。

角助　こりや情ない……カウ／＼、おらアこなさん方を買つて、遊ぶ者ぢやアない、……と云ふは、不躾だが、ちつと用のある者だ。放して下さい／＼。

りゑ　サア、さう見掛けましたゆゑ、御仁體をお見かけ申して、ちつとお頼み申したい事が。

ト恥かしさうに云ふ、角助、よく／＼見て

角助　ハテナ、斯う云ふ勤めを、しさうな器量でもないが、

ハア、なんだの。こりやアこなさんは、内證が廻らぬゆゑ、忍んで勤めをするのだの。

トおりゑ思ひ入れ。

どうか島原の哥町に、似たやうだ、……ア、、そりやア笑止な事だ、惣嫁は初物だ。何も修業、遊んで行きませうか。

りゑ　それはマア、お嬉しう、ござります……、穢けれど此方へ。

角助　サア〳〵……、イヤ、とんだ掘出し物だ。

〽伴なひ入る番屋の内、大鼓枕の起き外しも、これも世に住む憂き身かや。

マ、、綺麗なお座敷だの、……ハ、ア、糸立での三つ布團か、氣が變つて面白いの。

ト云ひながら、羽織を脱いで、袖だゝみにして寝ようとする。

りゑ　ア、モシ、マア、お待ちなされて下さりませ。

角助　なぜ〳〵。

ト起き直る。合ひ方。

りゑ　サア、ちとお頼み申したいと云ふは爰の事。何をお隱し申しませう、私しには夫の有る身、稼ぎの爲に、旅行せられまして、後には年の寄られた親達、殊に、その男親が、長々の煩らひに、獨り子が重い疱瘡、貧しい暮らしの二人の介抱、それゆゑ是非なうこの勤め。モウ、申しかねた御無心ながら、どうぞ枕を交さずと、さもしい事ぢやが、親子四人助かるやうのお情を、お頼み申し上げますわいな。

〽お情頼み上げますと、顔を持上げず、しやくり上げ、涙と共に頼むにぞ、客もおろ〳〵目を擂りて。

角助　ア、、ヤレ〳〵、そりやアこなさん、苦勞な事だの。女の手一つで、大抵な事ぢやない。ようごんす。聞き届けました。

ト紙入れの中より金を出して、

コレ、もつと進ぜたいが、折ふし爰に遣ひ殘りの南鐐が二つ。なんとか思はつしやらうが、どうぞこれで、その病人に肴でも買つて、喰はさつしやい。また疱瘡も、山をあげかねるなら、内に一角もあつたによつて、明日の晩、持つて來てやりませう。

りゑ　有り難うござります。ついにお目にもかゝらぬあなたへ、無理な願ひを聞分けあつて、お金と云ひ、御深

切に仰つしやつて下さりまする、御恩は忘れは置きませぬ。お嬉しうござりまする。
角助　これサ〳〵、なんのそれしきに禮には及びませぬ。わしも小さいがあるゆゑ、身につまされて、そこでの事サ。今夜も雪も降りますから、早く歸つて、疱瘡子に、乳でも呑ましてやるがよい。
ト云ひながら、身拵らへをする。
りゑ　もうお出でなされまするか。
ト下駄を直してやると
角助　マヽ、よし〳〵……、ちつと行く所もあれど、ひよんな話しで、氣が滅入つた。どこぞで、一杯やらずばなるまい……そんなら又、明日の晩。
りゑ　有り難うござります。
角助　ハテ、おつな晩があるものだわい。
〽金遣りながら手も握らず、涙こぼして立歸る。
トおりゑ送つて出て、よろしく捨ぜりふにて、角助、向うへ入る。
りゑ　有り難うござります、有り難う
ト金を見て、
世につれる人心と、僅かな金を、……イヤ〳〵、勿體ない。近づきでもない者に、話しを聞いてこの惠み。まだその上に疱瘡子に、一角まで遣らうと、奇特なお人。これを思へば世の中の、人に鬼も無いものぢやわいなう。
〽喞ち涙の折からに、向うへとぼ〳〵來る親仁、懐中すつしりよい客と、側へ立寄り。
トこの文句のうち、門兵衛、親仁の拵らへ、抱子を懐中へ入れ、下座より出て來る。おりゑ、見て引止め
りゑ　モシ、ちつと遊んで下さりませ。
門兵　アヽ、こなたはよい氣な人ぢやなう。年にこそよれ、色どころぢやござらぬわいの。懐中に入れたのは、錢や金ではない、これ見さつしやい、……乳の無い子だからぢやわいの、……マア、聞いて下され、この坊主は、おれが孫で、この月が誕生日、父親めは疾に死ぬる、去年の産後に此奴めが母も、彼方へ行きおつて、それからわしが、貰ひ乳で、やう〳〵と育て上げ、今も貰ひに行きますわいの。
〽泣く〳〵話せば聞くよりも、身につまされて。
りゑ　ほんにマア、それはお年寄の、さぞ御難儀でござんせう。幸ひ私しが、乳が張つて困つて居る所、お前を留

めにも、なんぞ、縁、大事なくば、呑まして上げう。

門兵　フム、アノ惣嫁……樣にも、お子がありますか。大事ないどころぢやござりませぬ、……ヤレ〳〵、それは有り難い、コリヤ、泣くな、乳を呑ますと仰しやるぞ。オヽ、よい子ぢやの。

ト すかしながら、懷中を明けろ。おりゑ、立寄つて

りゑ　オヽ、男の子ぢやさうな、……ドレ、小母が、うまう吞ましませう。

〽乳にさわれば喜ぶ子、いづくの人の乳ぞとも、知らで吞みつく嬉しさに。

門兵　アヽ、結構なお惣嫁さまに逢うて、ほんに孫めは仕合せ者。でかした〳〵。アイ、モウ、たんと吞みましたでござりませう程に、お前の御商賣の肌をあらはによさるゝは、いかいお慈悲。アヽコレ、私しがもう十歳わくば、お禮の申しやうもあれど、それも云うて叶はぬ事。せめて冥加の爲、廿四文上げませう。

ト 腰の貫入れから錢を出して遣る。

りゑ　アヽ、なんのそれには及びませぬわいな。ドレ、次手に

ト 抱子に小便をやる。

門兵　オヽ、これはマア、何から何まで。アイ〳〵、憚りでござります。

りゑ　丁度よい時分であつたわいな。

門兵　ヤレ〳〵嬉しや。サア〳〵、此方へ下さりませ。さぞ今夜は、よう寐るでござりませう。

ト 取つて

そんなら、もう、お暇申しませう。

りゑ　必らず又御遠慮なう。

門兵　ハイ〳〵。

りゑ　ほんにお年寄の、お危ない雪道で、必らず怪我なさるなえ。

門兵　ハイ〳〵、よう云うて下さりました。丁度この孫めが母が、其やうに氣をつけてくれましたて。

〽何につけても思ひ出す、他生の緣の憂き別れ。

ねんねこせい〳〵。

〽ねんね子、ねゝ子と立歸る。

ト 門兵衞、向うへ入る。おりゑ、見送り思ひ入れあつて小屋の内へ入る。

〽御手洗の、水の流れと人の身は、浮き沈みはさまざまに、下あれ〳〵下あれましと、河原傳ひに來る非人、人

絶え待ちて、そろ〳〵と、紙の印は爰こそと、これ土に埋んだる、以前の狀箱掘り出し、面桶の底へ手早くも、鍬取つて掘りかへす、河原の砂も身にかゝらぬ、おりゑが見るとも仕組んだる菰包み、埋み隱すを金と見るおりゑ、小屋の內より出る惣嫁に、驚ろく、非人は素知らぬ振り。

トこの文句のうち、重太郎、非人の拵らへにて出て來り、文句の通りある。おりゑ、小屋より出かゝり見て、思ひ入れ、重太郎、菰包みを埋むと、小屋の內よりお百、おきみ、出て來る。

百君　サア〳〵、ござんせ〳〵。

トこれにて重太郎、驚ろく。おりゑ、ちやつと隱れる。

重太　下ありませう。

〽面桶かたげてのつさ〳〵、河原を上へと、行き過ぎる。

ト重太郎思ひ入れあつて、下座へ入る。おきみお百出て來り。

〽また一頻り降る雪に、濡れしほたれて浮橋も、轉けつまろびつ、走り付き。

トこの文句のうち、おきみ、お百、捨ぜりふ云ひて立つて居ると、向うより、浮橋、傾城の形にて走り出て來り

浮橋　モシ〳〵、見れば皆さんもこの河原で、勤めなさんすお方さうな。わたしは祇園町の邊で、浮橋とて勤めの者。樣子あつて、內を拔け出で、後から追手のかゝる者。見つけられたら直ぐに死なうと、覺悟はして居りますが、どうぞならう事ならば、お前方のお情で、體を隱して下さんせ、アレ〳〵……あの提灯が、誰かわたしを尋ねる追手の者。お二人さん、賴みますわいな〳〵。

〽おろ〳〵賴めば。

お百　ようござんす。其やうに賴ましやんすもの、氣遣ひさんすな。ナウ、おきみさん。

きみ　それ〳〵、勤めする身は相互ひ。わたしらが隱まうて上げう。

兩人　ハテ、どこぞよい所が。

〽どこがよからう、どうせうと、云ふ間程なく、追ひ追ひに、驅け來る祇園の茶屋男。

ト、お百、おきみ、捨ぜりふにて、浮橋を材木の陰へ隱す。向うより亭主才兵衞・若い者兩人、弓張りを持ち足早に出て來り、兩人を見て

才兵　コレ〳〵、君達、ちつと聞きたい事がある。いま爰

へ年頃は十八九な、美しい女郎が一人來なんだか。
きみ　イヽエ、わつちらは、宵から爰に居たが、そんな女は見かけやせぬ。
お百　大方、大佛の方か、松が崎の方へだらう。あつちを尋ねなさい。
才兵　イヤ〳〵、あつちの方へ行く事ではないて。ハテ、面妖な。なんでも爰へ、いま來た筈だが。
若者　マア、よく、そこらを、尋ねて見よう。
才兵　コリヤ、この普請小屋が氣ぶさいな。探して見ろ見ろ。
若者　オイ〳〵。
ト、皆々小屋へ入る。そこらを。尋ねて出て來り
才兵　不思議の事だ。これから石垣の方へ、尋ねに行きませう。
若者　それがよからう。サア〳〵、行きませう〳〵。
ト皆々下座へ行きにかゝる。
お百　これな〳〵、マア待ちな、お前方は、あの小屋を探がして、居ねえからいゝぢや濟まないよ。ありやア、わつちらが寐所・家探しをしても、濟みやすか。なんぼ祇園町からの衆だと云つて、勤めに高い低いはないよ。
きみ　それサ、粋な商賣をしながら、苦界をする身も潰すのかえ。それでは立たぬ。
兩人　アイ〳〵立たぬ〳〵、立たぬぞえ。
才兵　イヤ、成る程、これは、こなさん方の云ふのが尤もだ。氣の急くに、斷わらぬが此方の麁相。腹も立たうが、料簡さつしやい。
ト懐中より、錢を出だし
とばかりでも濟まない。爰に錢が一本足らずあるが、酒でも買つて進せるのだが、後で二人で、勝手に呑んで下さい。
お百　そんなら、これが、あやまり代かえ。
才兵　サア、どうぞ料簡して下さい。
きみ　お百さん、あんなに云ふに、堪忍してやんねえな。
兩人　サア〳〵、早く行きなさい。
才兵　オイ〳〵、それは有り難い。サア〳〵、これから高瀬の方へ、尋ねて見よう。
若者　それがようごんせう。
才兵　サア〳〵、來やれ〳〵。
〽尋ねて見ようと打連れて、河原を西へ駈けり行く。
ト才兵衛、若い者、下座へ入る。

兩人　サア、もうよい、女中さん。
浮橋　ほんにマア、ひやいな所を、お前方のお庇で、モウ
モウ〳〵、なんとお禮を云はうやら。
お百　なんのお前。ほんに、あのべら坊めら、後に隠れて居るも知らず、とんだ所を尋ね廻つて。
きみ　揚句の果にあやまり賃、ほんに宵から錢の顔を見なんだに、わつちらも仕合せ。お前も仕合せ。
兩人　もう、怖い事はないわいな。
ト浮橋、始終慄へて居る。
きみ　オヽ、大分慄へてサ。雪風で寒いかえ。
お百　さうでもあらう。わつちらが仕つけた勤めでさへ、堪らぬものを。
兩人　待ちなさい〳〵。
〽小屋の木屑を取出だし、火打かち〳〵吹つけて、砍梅ならぬ、伯人に、焚火を當てる深切を、喜ぶ浮橋、番屋より。
ト、此うちおきみ、お百、火を焚いて浮橋にあたらせる。
きみ　おりゑさんは、どうしたなう。
お百　ほんにおりゑさん、お前も爰へ來てあたんなせえ。

兩人　おりゑさん〳〵。
りゑ　アイ〳〵。
ト番小屋より、出て來る。
兩人　サア〳〵、あたんなせえ〳〵。
ト捨ぜりふ云うて、火にあたる。おりゑ、浮橋、フッと顔を見合せ
浮橋　ヤア、お前は。
りゑ　エ。
ト恟り有り合ふ雪の塊を火鉢へ打ち込み、消す。これにて、おきみ、お百、恟りして立退き
きみ　アヽ、何をしなさるか。
お百　ハア、お前方は、近付きかえ。
りゑ　アイ……、久しう逢はぬお方、幸ひちつと話したい事もあれば、お前方は待たずとも、先へ行て下さんせ。
お百　アイ〳〵、そんなら、わつちらは、先へ歸つて休みやせう。
きみ　おりゑさん、お前は後から。
りゑ　そんなら又、明日の晩。
兩人　おさらばえ。
〽鼻唄うたうて歸りける。

ト兩人、向うへ入る。

〽人絶えすれば浮橋は、おりゑが側へ差寄つて。

ト合ひ方になり、浮橋、おりゑが側へ來り。

浮橋　變つた所でおりゑさん、マア、何から云はうやら。早速お聞き申したいは、父さんの御病氣、母さんにも長長のお氣あつかひ。モシ、お疲れは出やさんせぬか。さうして、あの太市は、定めて惡ささしやつて、お前も大抵ぢやござんすまい。マア〳〵、お變りなうて此やうな。

りゑ　アイモウ、皆さんにお變りはないが、變つたはお前の身の上、お屋敷方へ御奉公と、思ふに違ふその姿は、どうした事でござんすえ。

浮橋　サイナア、こりやアノ父さんが長の御病氣。兄重太郎さまには、お國元の騷動より、お歸りもなされず、お前も知つておいでの通り、常から不自由なその上に、藥代のなんのとて、廻らぬ世帶を見る悲しさ。それでアノ父さんには噓云うて、母さんとの相談で、祇園町へ勤め奉公。マア、それもわたしは、獨り身ゆゑ。お前は現在、兄御さんと云ふ、殿御のある身を持ちながら、見ればさもしい……河原の勤め。そしてアノ、父さんや母さんは、知つてお出でなさるのかえ。

〽問はれておりゑは差俯向き、恥かしいと悲しさと、暫し詞もなかりしが、やう〳〵に顏を上げ。

りゑ　お前に問はれて、面目も、ない〳〵のわたしが氣苦勞。云はねば聞えぬこの場の仕儀、今に於て舅御さまは、長の煩らひ、搗てゝ加へてその中へ、太市郎が重い疱瘡、母さん一人ウロ〳〵と、お世話なさるがおいとしさ。モシ、母さまもわたしもナ、毎晩々々帶〆めて、寐た夜は數もござんせぬ。わたしは兎もあれ、お年寄の、あんまり見る目のいぢらしさ、せめてものお手助けに、夫へ立たぬ思ひながらも、帶を解かぬがわたしの潔白。太市が疱瘡の願籠めに、祇園さまへ參ると、お二人樣を僞はつて、毎晩々々この河原へ……決して客と寐やせぬぞえ。身は穢さねど心を穢し、僅かなおあしを貰ひ溜め、貧苦を凌ぐ其うちにも、如何に時世と云ひながら、武士の女房が此やうなと、口惜しい辛いわたしが心。おむつさん、マア、推量して下さんせ。

〽聲をも立てず忍び泣き、嘆けば共に浮橋も、身の悲しさを數へ立て、手に手を取つて諸ともに、泪の袖は加茂川に、猶も流れの身とならん、浮橋やう〳〵涙をとゞめ。

浮橋　サア、わたしも不思議に殿樣の弟御樣、縫之助さま

にフト馴れ染め、云ひ交した事までも、反古になつて逢はれぬ品。それゆゑに縫之助さまの、跡を慕うて今宵の駈落ち。

りゑ　エヽ、そりや聞捨てにならぬお前の身。斯うせうわいな、爰は往還、五條にわたしの知るべもあれば、何かはそこへ行て、斯うして居るうち、もし追手が戻つて來たらむづかしからう。

浮橋　サア、わたしもそれゆゑ、心急かれて。

りゑ　そんなら、ちやつと。

浮橋　アイ〳〵。

〽互ひに帶を締め括り、非人が埋めし砂の中、心憎しと目印しして、五條わたりの軒のつま。

トこの文句のうち兩人よろしくあつて、行きかゝる。おりゑ、思ひ入れあつて、頭の物をこれ土の所へ抛り、見て置く事。

浮橋　おりゑさん、何をさしやんす。

トおりゑ思ひ入れ。

りゑ　サア、ござんせ。

〽裾もほら〳〵走り行く。

ト兩人、足早に、向うへ走り入る。所々にて拍子木の音、割り竹の音聞える。

〽時々廻る番人の、屋敷をめぐる拍子木の、音も冴え渡る夜嵐に、つれて降り來る雪日和。

ト此うち以前の蕎麥賣り、按摩、番人など仕出し交つて、行き違うて入る。トばた〳〵にて、おりゑ、頬かむりして出て來り、直ぐに舞臺へ來り、あたりを窺ひ目印しの簪を拾ひ取り、雪明りにあたりを探し、竹切れにて、これ土を掘りにかゝる事。よき程に又、割り竹の音する。おりゑ、恟りして控となる。そこに最前の鍬捨てある。これに手の當るこなし。割り竹は次第に遠くなる。これより、鍬にて掘り返す。始終、床の合ひ方。時の鐘。又よき、程に

〽有り合ふ鍬にて掘り返す、猶降りしきる雪あられ、念力通つて掘り當てる。

ト藁包みを出す。

〽それと見るより以前の非人。

ト下座より非人、出て來り、これより、兩人タテ。矢張り床の合ひ方。非人、包みを楯にタテあつて、よき見得に

〽互ひに見合す顏と顏。



文化九年七月中村座上演

三世中村歌右衛門の三役（重太郎と萬歳と鎌腹の彌作）

ト兩人、顔見合せ
りゑ　ヤア、こちの人。
非人　女房か。
〽闇はあやなし。
トおりゑ、悯り逃げんとする。非人、その帯を捕へる。振り切り、下の落ちたる絲立てを取る。非人、撞と尻居に居る。おりゑ、絲立てをかむる。拍子木の頭、非人、包みを引ッ抱へ、見得よろしく。　ひやうし幕

八幕目

矢間浪宅の場

役名——矢間喜内。同女房、おはし。猿廻し、丹兵衞。傾城、浮橋。奴、關内。矢間重太郎。同女おりゑ。同一子、太市。

本舞臺、三間の間、赤壁の世話場。上の方に反古貼りの障子屋體、門口、よろしく、爰におはし、やつし婆の形にて、持遊びを持ち、すかして居る。丹兵衞、やつし、太鼓を足に挾み、叩き立て、此方に内儀七輪へ土鍋をかけ、反古團扇にて煽ぎ居る。鞍馬口喜内貧家の體。猿廻しの鳴り物にて、幕明く。

はし　どうぢや太市、面白いか。ほんに丹兵衞さまは、太鼓がお上手ぢや。
丹兵　そりや知れた事サ、年が年中、太鼓を叩いて猿を廻すが、わしが商賣、素人のやうぢやアござらぬのサ。
内儀　サア、喜内さんの、藥も煎じ上げた程に、あげなされや。坊が藥は、此方にあるぞえ。
はし　オヽ、コレ、茜屋のお内儀さん、どなたも、お長屋同士とて、毎日〳〵いかいお世話。神樣さへ、お立たせ申せば、もう太市には、手も入りませぬ。有り難うござりまする。
丹兵　オヽ、婆さん、嬉しからう。イヤ初めのうちは、松皮とやら云ふ疱瘡ゆゑ、皆案じもしましたが、もう此方のものだ。ほんに神樣も、今日でお出でござるの。
内儀　イヤ又、どんな、疱瘡神でも、此やうな不自由な所にいつまでも、長居はなるまい。アノ喜内さまも長い病氣、次手に、あれも貧乏神の送りでもすりやよいなう。なんぼ、元が知行取りの果てぢやとて、いつまでも此やうに、無商賣でも濟みますまいぞえ。

丹兵　それサ、いつその事、この疱瘡子を連れて、人通りの多い、橋の上へござればよいに。元手のいらぬ、よい商賣でござんすぞい。

内儀　これはしたり、丹兵衞、それも入らぬ世話かいな。アノ、おりゑさんと云ふ、剛勢なよい嫁が、扣へてありや、此方がなんの無駄な事。

丹兵　イカサマ、それもさうかいの。時に、もう歸りませう。

内儀　ほんに、それもようござんせう。又なんぞ、用があるなら、必らずともに、遠慮はせずとも。

はし　アイ／＼、これはモウ莨さへ、ろく／＼に。

内儀　なんのいな。

丹兵　そんなら、また明日、來ませうぞ。

ト兩人、前へ出て

内儀　イヤ、あ　疱瘡見舞ひの持遊びは、必らず捨てずと人形屋へ安うと賣つて、小遣ひの足しにするがよいぞえ。

丹兵　ハテ、こなたが、いらぬ世話な。

内儀　オホヽヽヽ。

丹兵　サア、行きませう。

〽念頃ぶりに氣を附けて、皆々打連れ立歸る。

はし　よう見舞うて下さりました……ほんにマア、心に掛けて、あのやうに、深切な衆ではある。親切と云やこの嫁御には、昨夜から今以て……これはしたり、また眠るか。ドレ、そんなら奧へ連れて行て、喜内どのへ、藥でも進ぜませう。

〽藥片手に疱瘡子を、抱いて納戸へ入りにける。

トおはし、太市を抱き、藥土瓶を持ち、奧へ入る。

〽加茂川も、市の小川も月宿る、流れは同じ二人連れ、おりゑは、門口さし覗き。

トこの文句のうち、向うより、おりゑ、浮橋、出て來り、直ぐに舞臺へ來り、門口を覗いて

りゑ　嬉しや、誰れも遠慮はござんせぬ。サア、ちやつと内へ。

ト入らうとして、思ひ入れあつて

ほんに、おむつさん、頼む事があるわいな。昨夜お前も云ふ通り、祇園さまへ參ると云うて出た程に、あの七條の河原に居たといふ事は、舅御樣や母樣へは、必らず云うて下さんすなえ。

浮橋　アイ／＼、合點ぢやわいな。わたしも、三文字屋へ

賣られて、浮橋と云ふ事は、母樣一人合點ゆゑ、父さんには、矢ッ張り、屋敷奉公と云うてある程に、その積りぢやぞえ。

りゑ　サア、そりや承知して居るわいな。シタガ、お前の風俗なら詞つき、そのびらりしやらりでは、つい、尾の出さうな事ぢやぞえ。

浮橋　イエ〳〵、そりや屋敷者ぢやござんせぬ。父さんに逢うたなら、隨分と三ッ指で、堅うやらうとは思うて居るが、もしひよつと、里の癖が出たならば、堪忍しいえ。

りゑ　それ〳〵、その堪忍しいえが、もう惡いわいな。

浮橋　ほんに、嗜なむと云ふ下から、口が辷つて。

兩人　オヽ、せうし。

〽笑ひ綻ぶ梅花の口、堅く閉ぢたる障子の內。

ト兩人、內へ入る。

〽しわぶきの聲、諸ともに、父の喜內枕を上げ。

ト反古貼り障子明ける。內に喜內、机に蒲團を掛け、これに凭れて居る。兩人、思ひ入れあつて、扣へて居る。

喜內　オヽ、嫁が戻りやつたか。孫めが待つて居おらるる早く歸りはせいで。

りゑ　イエモウ、わたしも、さう思うて、心急く道、このおむつさんに逢ひまして、何やかやと積る話しで。

喜內　ナニ、娘むつが戻つたとか。

りゑ　アイ、連れて歸りました。

喜內　ヤレ〳〵久しや、どこに居るぞ。

浮橋　ハイ〳〵、お父さん、これに居ります。御氣もじ如何と、お伺ひに參じまして、ござりまするでござんす。

〽聲聞き咎め、母は立ち出で。

トおはし、太市を抱いて來り

ヤア、おむつか。なんとして。てもマア、ようおぢやつたなう。

浮橋　オヽ、母さん、あんまりお前が懷かしさに、勤めの內を、やう〳〵と。

りゑ　アヽ、コレ。

はし　エヘン〳〵。

浮橋　イエサ、お屋敷の勤めの內を、お暇貰うて參じましたは。

はし　オヽ、成る程〳〵、其方の勤めて居る屋敷は、堅い屋敷ぢやと聞いたが、つい其やうに來られたの。髷形も美くしい、その立派なを見るにつけても、さぞや心の苦

勞かと
〽勤めの、辛さ、辛氣さを、思ひやつての父の側。
オヽ、太市が、眼がさめたか。アレ、母様が戻つてぢや。
ト下へ下ろす。太市、おりゑを見て、
太市　母様いなう。
りゑ　オヽ、温なしう待つて居やつた。
ト乳を呑ませる。
はし　さうして嫁御、連れ立つて戻つたさうなが、なにか道で今逢つたのか。
浮橋　イヽエ、昨夜、河原でナ。
りゑ　アヽモシ……ホヽヽヽ、イエモウ、變らぬ無事な顏見たのも、毎晩わたしが日參する、祇園さまのお引合せ。
浮橋　ソレイナ、祇園さまのお社で、それは〳〵難儀な事がござんしてナ。
はし　ムウ、難儀な事とは、アノ惡者にでも追はれたか。
りゑ　イヽエイナ、母様、ありやおむつさんの云ひやうが
浮橋　悪いゆゑ、難儀な事とは、アノ道で俄雨。
はし　ヤ。
りゑ　イヤ、雨ではござりませぬ、俄雪でな。

浮橋　それ〳〵、モウその雪に逢うてはならず、隠れたうても勝手は知れず、アノ幸ひの、材木……でもない、鳥居の影にな、おりゑさんが日參してお出でたゆゑ、モウいかいお世話で、どうやら斯うやら、モウ〳〵〳〵ほッと、御恩は忘れぬぞえ。
りゑ　アヽ、コレイナ、わたしの挨拶より、マア父さんのお側へ行て、ソレ、行儀ナ、お屋敷の式作法のお話しでも……、ナ。
浮橋　アイ〳〵、覺えて居るわいな。ドレ、そんなら側へ行て。
ト喜内が側へ來り
誠に、久々のお煩ひに、事なうお窶れも遊ばさず、御機嫌よいお顏を拜し、誓文々々、喜ばしう存じます。
〽折目高なる武家の挨拶。
喜内　オヽ、其方も無事で何よりか。エヽ、コレ、同じ屋敷奉公なら先君のお側仕へもさせんずもの。お家は沒落、我れは長病にて歩行も叶はず、悴、重太郎はその砌り、遠國して、何國にさまよひ居る事やら、またしも老いの樂しみは、あの孫の太市郎め、疱瘡も山あげしまうたれば、大役もしてとり、氣遣ひない、見やれ、なんと賢い

目元ではないか。その上、聞きやれ、侍ひの子とて、疱瘡のうちでさへ、浦島や女人形の、ぬかつた物は大嫌ひ。金平の顏の赤いは、出ものの藥、天晴れ功の者になりかねぬ。なんと悧巧な奴ではないか。

〽子よりも孫に餘念なき。

浮橋　オヽ、さうでござんすかいな。シタガ、今年は世なみとやらがよいとの事。ほんによい時、美しい事しやつたなう。マア、おりゑさん、此やうな疱瘡子のあるのによく毎晩々々、日參をさんすの。

りゑ　アレ又……もう云はずとよいわいの。

浮橋　ドレ、ちつとわたしが、抱いてやらう。

ト太市を抱き取り

オヽ、嬉しいか。コレ／＼、叔母さんは、着物も赤ぢやわいの。

りゑ　アヽモ、赤いはよいが、體裁ないのに困つたわいの。マア、お前は、ちつと奧へ行て。

はし　それ／＼、太市が伽をしがてらに、ちつと横にでもなりやいなう。

浮橋　アイ、そんならさうも致しませう。モウ、昨夜からいろ／＼と……ほんに、おりゑさん、お前もちつと。

りゑ　エヽ、わたしに構はずと。

浮橋　ドレ、そんなら、わたしは……父さん、母さん、後程え。

〽疱瘡の禁句くろめ兼ね、是非なく奧へ連れて入る。

ト浮橋、太市を抱いて奧へ入る。

〽弓矢は家に傳へても、今は仕へん君知らず、羽なき矢間重太郎、羽織野袴大小も、昔に返る立派な骨柄。

トこの文句のうち、重太郎、奴關内を連れて出で來る。喜内、咳をせく……おはし、介抱する。おりゑ、七輪の藥を溫めて居る。重太郎、舞臺へ來り、案内せいと、關内へ思ひ入れ。

關内　賴みませう／＼。

〽賴みませうと家來が案内。

はし　ソレ、おりゑ、どなたやら見えたぞや。

りゑ　アイ。

〽あいと何氣も懷かしい、夫の顏にハッとばかり。

トおりゑ、門口を明け、重太郎を見て悄り思ひ入れ。

〽出て逢ひたさも面目涙、胸につかへの上がり口。

はし　これはしたり、何をウヂ／＼。

ト云ひながら、門口へ出て

ハイ、どなたぢや、これへ……ヤア、わが身は重太郎か。
重太　母樣、先づは御健勝で。
はし　オヽマア、その挨拶は、ゆるりと後で。マア〳〵、内へ入りや入りや。
重太　然らば御免下されませう。
ト重太郎、内へ入る。
はし　なんのマア、堅くろしい。サア〳〵。よう戻つてたもつたなう。モウ何やかや話す事、ほんにアノ太市が、痘瘡しての。コレ嫁御、ちやつと抱いて來て、顏見しやいの。エヽ、何をうつとり。ムウ、こりや、あんまり嬉しさに、氣上がりがしたの。ソレ、マア……茶でも酌んでおぢやいなう。
重太　イヤ〳〵、お構ひ下されな。ヤイ關内、さのみ隙は取らねども、暫らくのうち其方は、旅宿へ行て、待つて居れ。
關内　ネイ〳〵。
重太　行け〳〵。
ト關内、向うへ走り入る。
して、親人には。
はし　オヽ、たつた今まで起きてゞあつたが……モシ、喜内どの、重太郎が戻りましたわいの。
喜内　ナニ、重太郎が。
重太　ハツ、親人どの、重太郎久々にて。して、御機嫌は如何にござりまする。
〽喜内、にこ〳〵打ほゝ笑み。
喜内　浪々の尾羽を枯らし、旅やつれもさぞあらんと、思ひの外に顏色も健か。衣服の美くしさ、變らぬ體にオヽ、先づは安堵。
重太　ハツ、成る程、その御案じも御尤も。拙者も所々方方とさまよひ、此まゝに朽ち果てんかと存ぜしに、未だ武運に盡きぬところか。よろしき主取り仕り、御覽の如く身の廻りも、主人より拜領いたし、即ち旦那の御供にて、鎌倉へ罷り下る折から、親人御病氣の樣子、承つて心ならず、出立ながら、ちよつとお暇乞ひ……イヤナニ女房、兩親を預け、長の年月、女の身にて心遣ひ、過分過分。
〽常に變らぬ夫の顏色、機嫌よいのも疵持つ足の、裏ではないかと案じ居る、喜内いざりし膝立て直し。
喜内　ムウ、何と云ふ。奉公の口あつて知行にありついたとな……、ヤイ悴、女は二人の夫を持たず、侍ひは二人

の主に仕ゆるを、人非人と卑しむ事、母の胎内を出づるより、よく腸に沁み込んである事、コリヤ。おのれ忘れたな。その性根を知らずして、妻子を捨て、再び親の家にも歸らぬは、天晴れ、悴は武士なりと、心の自慢もなんの事。親の病氣の見舞ひに來たさへ、不覺者と思ひしに、二君に仕へて、その腐つた魂ひの、大小をひけらかしに來たのか。コリヤヤイ、この喜内はナ、貧苦には迫れども、重代の具足は質にも入れず、おのれやれ、歩行自由ならば、古主の御無念晴らさんものと、牙を噛んで日を送る。躄に劣つた大腰抜け、顔見合すのもこれ限り。女ならば間男同然、身の穢れた大畜生、長居せば、うぬ、ぶち放すぞ。

〽老の怒りの一筋も、もし我が事を知つてかと、女房が胸も二つ玉。はたと立て切る一間のうち、思案をきはめ重太郎。

重太　お暇申す。

はし　ア、コレ、重太郎、待つてたも。マア、なんぼ親でも今の悪口、腹の立つは道理々々。沒義道なは日頃の氣質。其方の有りつきしやつたも、孝行の爲ぢやもの、あゝ云はしやつても底心に、なんの悪う思はつしやらうぞ。コレ、何事も料簡を。

重太　ア、、イヤ拙者も急の御用、隙取つては、主人へ不忠、最早お暇、この後は、モウお目にもかゝるまい。

はし　ハテ氣の短かい。急の用なら留めもせまい。が、重太郎、ちつとわりない無心がある。マ、、下に居てたも。

ト合ひ方。

其方が他國しやつた後は、何を活計に世を渡らう。道具諸式も賣り拂ひ、やう／＼嫁御の賃仕事や、乳呑み子抱へて人に雇はれ、それは／＼憂き艱難、モウ／＼、口で云ふやうな事かいの。喜内どのゝ病氣の上に、孫が疱瘡、人參と熊の膽で、仕立てにやならぬ煩らひに、常の藥の才覺さへ、石で手詰めた貧の病ひ、旅の費へは有り合せとやら、親子の中でも金銀の無心は、どうやら云ひ憎けれど、ナウ嫁御。

りゑ　アイ／＼、左様でござります。モウ、餘所外の事ではなし、主ぢやとて、なんの否が。

重太　コリヤ／＼、そりや何を申す。最前御老人のお詞を、なんと聞いた。親子の縁は、もう切れてあるわい。尤も路銀は貯へたれども、こりや主人より頂戴の金子。私し事には、一錢も貢ぐ事、罷り成らぬ。……へ、、、。嬉

しや、今日と云ふ今日、厄介を拂うて心がさつぱり。義理も糸瓜も一本立ち、女房、其方にも暇くれたぞ。

りゑ　エ、、。

重太　イヤサ、驚ろく事ではない。科の仔細を云ひ聞かさば、却つて身共の武士が立たぬ。さすれば他人になに合力。聊かも罷り成らぬ。

〽ちりはいつかねば、母親は、窗打眺め。

はし　これは又、きつい思ひ切り。尤も父御へ、不足はあらうが、嫁女にはなんの科。コレ、さう云はずと機嫌直して、どうぞ今日一日逗留してたも、……これはしたり、嫁女にも留めやいの。エ、、氣の付かぬ。どうしたもの。

〽樣子、白髮の氣を酌んで、涙片手に、夫の側へ、水の出花へ茶の花香、そつと差出す追從も、身を捻ぢ向けて澁面顔、取りつく島もないじやくり、詮方なさに幼な子を、抱いて出しても見たばかり、愛想なければ怨めしげに。

〽ト此うち茶を出す事あつて、また、太市を抱いて來て見せる事あつて、

りゑ　コレ、太市、アレ、父さんが戻つてぢやわいの。オオ、抱かれたかろ〳〵。なんぼ其方が抱かれたうても、父さんは抱きやさんせぬ。侍ひの立たぬと云はしやんすも、成る程、無理とは思はねど、云ひ甲斐ない女の手一つで、お年寄りのお二人に、御不自由な目もさしともなさ、いろ〳〵さま〴〵身を碎くは、大概お前の心にも、推量してくれたがよい。身に曇りない云ひ譯は、……サア、したうても、どうもならぬ。モシ、腹が立つなら堪忍して。コレ、太市は可愛うはないかいな。お前ばつかり出世して、子はどうなつても構はすか。辛い辛苦をちつとでも、思ひやりがあるならば、三つ四つの重ね着を。

〽一重は脱いで朝夕の。

煙り代と云うたとて、さのみ惜しうはありそもないもの。あんまり酷ひ愛想づかし。サ、それ程つれない前でも、この子が親と思へばこそ、疱瘡の初病から、毎晩熱の囈言にも、父さん呼んでと。

〽泣きますわいな。

コレ、ちやつと胴慾な父さんの側へ行て、母さんの詫び言してたもや。

〽押しやれば這ひ下りて。

太市　父樣いなう。

〽父様ならと縋りつく、恩愛血筋の一聲は、名作の切尖に、切りつけらるゝ如くにて、鐵石のやうなる重太郎、涙を堪え兼ねけるが、氣を取り直し、突き退けて。

重太　親の事さへ思はねば、ましてやなんの悴が事。緣切つてしまうたれば、孤冠らうが、渇えやうが、此方に構はぬ事、くどいワ。

〽くどう云ふなと睨めつける、母は興さめ。

はし　コリヤヤイ、重太郎。さても〳〵今までは、又とない孝行者と思うたが、こりやなんちやな貧しい親を見限りて、獨り榮華をする氣ぢやな。エヽ、我が子ながらも見違へた。あの茲な道知らずめ、浪人すれば其やうに、さもしい心になるものかいの。望みの通り親でない。勝手次第に出て行きおれ。コリヤ、子と思はねば、怨みはないが、天道のお憎しみで、身の行く末が思はるゝ。エヽ、淺ましい、人でなしめが……サヽ、嫁御、あの畜生に構はずと、此方へおぢや。エヽ、おのれはな　。

〽煙管打ちつけ母親は、怨みなく〳〵立つて行く。

　トおはし、奥へ入る。重太郎物を云はず歸らうとする。

りゑ　待たしやんせ。

重太　去つた女房に用は無いわい。

りゑ　イエ、去られた夫、留めはせぬが、お前、出て行かしやんすなら、この子を連れて行かしやんせ。

重太　ヤア、たわけ者。おのれを去れば、子ではないわい。

りゑ　イエ〳〵、わたしが去られゝば、男の子は男に附くが慣ひ。水仕奉公してなりと、お二人を養ふに、この子があつては足手纏ひ。せめて疱瘡子の介抱は、親の不肖ぢや、連れてござんせ。

　ト太市を重太郎へ突き付ける。

〽門へ突き出し、ぴつしやりと、さすが氣強う云ひながら、戸の透間より差覗き。

モシお前、それが迷惑なら、ま一度思案し直して、お二人さんへ詫び言して、立歸る氣はござんせぬか……ニヽエヽ、モシ重太郎どの、わたしは兎もあれ親達や、その子に科は、有るまいがな。エヽ、エヽ、。

〽心强やと、かつぱと伏し、聲も得上げず忍び音の、心奥より父の聲。

　ト障子の內にて

喜内　おりゑ〳〵。

りゑ　アイ〳〵、只今、そこへ。

〽と云ひながら、我が子に名殘り、うしろ髮。

りゑ　もし、矢ツ張りお前。
はし　嫁女々々。
りゑ　アイ……アイ。
〽せはし泣く間も姑ゑ。
はし　嫁女々々。
〽是非もなく、思ひ切つてぞ奥へ行く。
トおりゑ、これにて奥へ入る。重太郎、太市を見て思ひ入れ。
〽さしも義強き重太郎も、我が子の枷に縛られて、行きも、得やらず抱きしめ、氣は暗闇となりにけり、折からすた／＼急きに關內。
ト向うより、關內、走り出て來り
關內　お旦那、餘り時刻が延びますゆゑ、大鷲さま、小寺さまには、粟田口まではや御立ち。
重太　ヤ、。
關內　拙者も御兩人さまのお供いたし、不躾ながら、お先へ、參上いたしまする。
〽云ひ捨てゝ引返す。
重太　南無三、遲れしと朋輩の嘲けり。ハテ、なんとせう。
〽轉動散亂納戶口、病の床を立ち出づる、父の喜內が探り足、隔てぬ中の內と外、太市郎が肌おし寛ろげ。
トこの文句のうち障子を明け喜內窺ふ。重太郎、よろしくあつて
〽口に稱名、手に小柄、胸を極めて眼を閉ぢ、突つ込む切尖幼な子の、只一聲に息絕ゆる、死骸と共に撞と坐し泣く聲一度に父喜內。
喜內　オ、、重太郎、出かしたなア。
〽わつとばかりにむせかへる、ハッと驚ろき立ち上がる。
ト重太郎、內へ入つて、喜內を介抱し、太市郎が死骸も入れる。
古主の仇を報ぜん爲、親を捨て、現在の子を手に掛くる、その大丈夫な魂ひでは、敵高の師直を、討ち損じる事、よもあらじ、それでこそ我が子なり、天晴れ忠臣。
〽出かしたり。
忠義の旅の、餞けせん。
〽懷中より金子取り出し。
コリヤ、この金はナ、主君の御生害と聞くよりも、直ぐに彼の地へ駈けつけんと、旅の用意に貯へしが、計らず老病さし發り、空しく引込みありながら、この年月の貧

苦とて、例へ渇えて死ぬるとも、忠義の金には手はかけまじと、た房、嫁にも隠した路銀、今こそ其方が、御用に立てやれ。

〽投げ出せば、重太郎。

重太　ハ、ア、割り符を合はす忠義は一體。拙者も爰に五十兩。

ト懐中より包みし金を出し

この金は、大星どのより、配分の用金、私し事には遣はれずと、母にもつれなくもてなせしが、父の心を籠められし、この金子を申し受け、肌身に附ければ親人も、敵討の御供同然。

ト喜内が金を取上げ、懐中して、

又この金子を御老體へ、拙者が寸志の置き土産。悴が追善、佛果の爲、よろしう頼み上げまする。

ト金を喜内が、前へ置く。

ア、思へば〳〵武士の、義理ほど辛きものはなし、連判の武士小寺大鷲拙者なんど、彼の師直のよしみある、山名が屋敷へ、或ひは大工日備に身をやつし、鎌倉の様子を聞きつくろひ、大星どのへ日毎の内通。親妻子にも語らじと、誓紙の手前、母人にも包みし段は、眞平御免。大事を抱へて故郷へ歸る、不覺者と最前の、御意見膽に銘ぜしゆゑ、手にかけし悴は主君へ、追ひ腹、未來の先陣、よく死んだなア。追ッつけ敵を討ちおほせ、直さま切腹仕り、冥途より吉左右、お知らせ申さん、親人様。

喜内　オ、、必らず待つて居申すぞよ。

〽親子手に手を取り交し、思はず知らずはら〳〵と、嬉し涙の暇乞ひ、障子の内にもわつと泣く、聲に恟り立退けば。

ト障子の内よりおはし走り出て

はし　ナウ、重太郎、女房にも隠す大事、母も出まいと思うたれど、おりゑが自害しやつたわいの。

喜内　ナニ、嫁が自害とか。

ト重太郎思ひ入れ。

はし　サア、死顔に一目、暇乞ひしてやつても。それ程の事は不忠とも、わしやなるまいと思ひまする。サ、、おむつ爰へ。

〽おむつ爰へと二人して、抱いて出でたる亡骸に、書き殘したる藻鹽草。

トこの文句のうち、おはし、障子の内より浮橋と二人して、おりゑが死骸を抱いて出て來り、浮橋、書置を

見つけて

浮橋　モシ〳〵、母さん、おりゑさんの、懷中に、書置があるわいな。

はし　ヤ、書置ぢや。ちやつと讀んで聞かしてたも。

浮橋　アイ〳〵。

ト取り上げて

「父樣樣へ、申し殘しまゐらせ、先立ち候ふは不孝に候へども、夫の心底立聞き致し、恨みは晴れてこの身の申し譯立ち難く、これもお二人お貢ぎの爲、淺ましい辻君の世渡り。

はし　ヤア、可哀や。そんなら祇園さまへ、日參と云うて卑しい辻君の勤めまでしやつたかいなう、……さうしてさうして。

浮橋　アイ〳〵……「往來の人の合力を受け、肌身は穢さず候へども、夫の疑ひ受け候うて、これのみ、迷ひの種になりまゐらせ、分けて悲しきは太市郎、疱瘡もかせ口になり、喜ぶ甲斐もなき別れ。

ト讀みかねる思ひ入れ。

はし　オヽ、道理ぢや〳〵。生先ある子を殺して、なんの生きて居る心あらうぞ。尤もぢや〳〵……、さうしてさうして。

浮橋　「一つ、今朝ほど買つて歸り候ふ田麩の曲物、膳棚に御座候ふ、父樣御膳の折、お上げなされ下さるべく候ふ。一つ、裾の切れし私しが袷、坊が餘所行に縫ひ掛けおき候ふが、心懸りに候ふまゝ、死骸に着せてお葬むり願ひ上げまゐらせ、御介抱申す者なく、さぞかし御不自由の程、如何ばかり悲しく候へども、一時も早う冥土の殿樣へ、夫の心底申し上ぐるを樂しみに、相果て候ふ、重太郎へは、面目なさに何事も、書き殘し申さず候ふ、めでたくかしく。

はし　なんのこれが、めでたい事。夫に立つる貞實の、又と類ひもない貞女、一日安堵の思ひもなう、辻君とまで身を落して、朽ち果てさせしが、可哀やなア。

〽空しき死骸に抱きつき、前後不覺に取亂す、喜内も淚押拭ひ。

喜内　主人の爲なればこそ、傾城となり、立君となる心遣ひ。斯程の忠臣重太郎を、子に持つたこの親仁には、我れもちつとも悲しうない。死んでの後の

〽名こそ惜しけれ。

祝うてめでたう、別れの杯、早う〳〵。

ト床の合ひ方にて、浮橋、おはし、銚子、杯を持ち出る。

サ、お婆。

〽つぎやれと取上げて、奥歯嚙み割る謡ひ聲。

實に名を惜しむ弓取りは、誰れも斯くこそあるべけれ。

〽あら、優しの我が子や。

健氣やなア。

〽泣かぬ顔する父親の、にこ／＼顔もこの世の名残り。

重太　ハ、ツ、仰せにや及ぶべき。我が子のほだしを切つたれば、心の鐵石十倍まし、主君に敵のその上に、妻の敵、子の敵、一時に討つ門出と、思へば心に勇みあり、例へ天地を翔るとも、念力通つて師直が、首引ッ提げんは瞬くうち。親人おさらば。

〽早おさらばと立ち上がる。

喜内　もう、お行きやるか。

重太　やがて、めでたう。

喜内　吉左右々々。

はし　その吉左右とは、いとし子が

浮橋　命を捨てに行く旅路。

喜内　冥土の案内は爺と孫。

重太　三途の川を

四人　急ぐらん。

ト重太郎、外へ出る。

〽可哀と見やる野邊送り。

はし　今朝は、祝ひの神送り。

重太　門に捨てたる猩々も

浮橋　涙の種の

喜内　笑ひ顔。

十太　フヽヽヽヽ。

喜内　ハヽヽヽヽヽ。

〽しをれ。

行け。

重太　ハッ。

〽勇んで。

ト、三重になり、重太郎、一散に向うへ走り入る。

舞臺よろしく　幕

大詰　山科閑居の場

役名――飾磨宅兵衛實ハ寺岡平右衛門。同女房、お

北。同一子、平吉。大星大三郎。大星力彌。左官。
三平。大星由良之助。

本舞臺、三間の間、高足、見付け高等なる襖、上の方へ寄せて障子屋體。下の方、土藏、これに、足代をかけ、藏普請の模樣。いつもの所に切り戸、屋體に掛け硯、算盤、大册の帳面あり、藏の前に由良之助、着流しにて、左官の土舟の土をこなし居る。足代に、三平、左官の拵らへ、股引にて、鏝を持ち、藏を塗つて居る。床の合ひ方になり、幕明く。

〽藏の內の財は朽ちる事あり、朽ちる事なき身の內の、才を在所に引籠み由良之助が身の置き所、都離れし山科に世間構はぬ我まゝ暮らし、只儉約を第一に、石に枕をつく藏普請、自身手傳ふ壁塗りの、左官が小手へ指付ける土によごれし仁體は、始末なりける物好きなり、折から戻る力彌が弟、大三郎、父が前へ手を支へ。

ト向うより、大三郎、着流しにて出て來り

大三　これは親人樣、日の暮れるまで御精だされ、さぞお草臥れ、最早、お休みなされませ。

由良　日暮れ前の仕事はちつとなりと、遣り過して置くが、明日の爲、今時分に休むと、今日の仕事は、ついこれぎり、今日一坪仕殘すと、せん繰りにそれが延びて、末になると一日の手間が違ふ。そこらへ心が付かぬと、物事に費えが多い。イヤ、斯うは云ふものゝ、左官どの、これで措いて、明日は早うから、精出してもらひませう。

三平　ハイ／＼、左樣なら、明日に致しませう。

〽足代とんと飛び下りれば。

由良　アヽコレ、腹のへつた上、其やうに飛ばれては、一倍減る分は構はぬが、大喰ひが術ないてや。

三平　これは又、吝い旦那樣、明日から、此方飯に致しませう。

由良　イカサマ、其方飯も、よからうが、願はくは作料も、其方作料にしてもらひたい。

三平　イヤ、これは又、かゝらぬ事を云はうより、壁下地ほど空いた腹、白壁を塗り込めて、もう御暇いたしませう。

〽左官は勝手へ由良之助、大三も共に落ち散る道具、取片付けて入る日影、七光りある御主人の、在す時さへ足輕の輕い身分は浪々の、今は足より身の輕き、寺岡平右衞門が女房おきた、我が子の手を引き、おづ／＼と、切

り戸開いて庭の内、願ひありげに手を仕へ。
トこの文句のうち、三平は奥へ入る。あと由良之助、大三郎、そこらを片付けるうち、向うより、おきた、やつし女房、平吉の手を引き、おづ〳〵出て、切り戸の内へ入る。
きた　お許しなされて下さりませ。あなた様が、大星由良之助さまでござりまするか。ついにお目見得を致した事はござりませぬが、お聞きもござりませう、私しは、鎌倉のお屋敷に、勤め居りました、足輕寺岡平右衛門と申す者の、女房伜でござりまする。
〽聞くも不審と思ひながら。
由良　ふウ、足輕平右衛門。エヽ、そりやずつと前方、北國へお飛脚に、行かれたその足輕の、平右衛門どのか。
きた　ハイ〳〵、左様でござります。
由良　ムウ。その又、内儀や子供が、なんの用で我れらが宅へ。
きた　參じましたは、お願ひの筋。夫平右衛門、參られまして、御訴訟申さるゝ筈ではござりますれど、長々の病氣、それゆゑ、女房の私しが、名代のお願ひ。
由良　アヽ、ヤレ〳〵、今日も草臥れた。さてと、今日の大工が、ドレ大三、算盤。
〽取寄せて、斜に構へ。
左官が二人、大工が一人、この作料が此方飯で、三匁づア、これが三人で、三々が九匁よ。あい等が三人して、一日何ほど喰ふぞ。これを八十匁の半日して、二升の代が二八一匁六分。また晝に炊く味噌の代が十八文、菜が八文、鮪五切れにして一切れが一文六分によつて、これも九文よ。焚く物から香の物醤茶、あら積りにして、一日、廿六文いらうが、マア、廿七文とせい。その上、味噌の代が十五文、鮪が五文、〆めて四拾七文、これを拾五匁の相場にして、銀に直せば、五七三十五、一七ヶ七、四五二十、一四が一、と銀にして七分一厘、爰へ又、一匁六分の米代と、九匁の作料と、合して見れば、アヽ、都合拾壹匁二分一厘。儲ける事は無しに、今日もこれ程の物入り。
きた　お取込みの中へ、心もない事ながら、申さねば叶はぬ事。どうぞお聞きなされて。
由良　コリヤ大三郎、其方に云ひ付けた下京の家質の相談、いよ〳〵調うたか。
大三　イヤ、、その儀に付いて今朝より段々と、相談仕り

ましたところ、あの方で申しまするのは、壹貫目の銀に壹ヶ月卅匁め宛の利を出して、家質に入れて、金を借る者は、京中にあるまいと、なか／＼相手になりませぬ。

由良　なんぢや、月に三十匁の歩を、高いと云ふが、ア、高うはないがなア。壹貫目の銀を錢に直せば、あら積りにして、六十二貫、これを日錢廻しにして、一貫貸して一日に元利とも十五文ヅヽの崩しにして、百日の間に取り切れば、壹貫の錢が百日すると壹貫五百六十になる。これを六十二貫貸して見れば、カウト、二六の十二、六六三十六、五六三十、四貫七百二十となる。これを銀にすれば、五百拾貳匁五分、百日にこれ程の歩ぢやによつて、壹ヶ月に割れば凡そ壹貫目に百八十匁程、それを家質なりやこそ、三十匁にして貸さうと云ふを、高いと云ふは、根から算用知らずといふものぢや。

〽高利貸　算盤に、武士の業作は埃もなく、庭にはとつてつく鳥も、ほにへる我が子を制するより、外に詞もなき折から、召使が慌しく。

ト　お北、下にて思ひ入れ。紺看板の中間花道にて

中間　鎌倉よりの御上使として、飾間宅兵衛さまとやら、只今、お出でゞござりまする。

ト引返へして入る。

大三　コリヤ女中、聞かるゝ通りお客もあり、萬事は後程。先づ／＼勝手へ立たつしやれ。

きた　左樣ならば、暫しのうちお勝手へ、兎角よろしうお執成し、お賴み申し上げまする。

〽我が子の手を引き立つて行く。

ト子役の手を取り、スゴ／＼下座へ入る。

由良　ハテ心得ぬ。鎌倉よりの上使。もし事によらば。

ト大三郎に囁く。

大三　左樣ならば、兄者人に申し上げ

由良　用意いたせ。

〽衣紋繕ろひ待つ間程なく、押し開く、切り戸口、間中狹しと肩肱張り、のさばつて來る飾間宅兵衛、此方は禮儀のおそれも、面であしらひ上座に座せば、由良之助慇懃に。

トこの文句のうち、向うより宅兵衛、衣裳大小、赤面の拵らへにて出て來り、ズッと上座に通る。由良之助下手へ手を仕へ

由良　先づ以て、遠路の御上使、御苦勞の御入來。

宅兵　イヤ、千里萬里も主命なれば、太儀にもなけれど、

使者の苦勞を思ひ遣つて、格別の挨拶があらば滿足なれど、そこらあたりに氣の附かぬ奴がござるサ。承れば、由良之助どのには、主人師直公へ、奉公がしたいとやら、又お出入りがしたいとやら、先達て、京都にござる、山名どのより申し越されしが、いつぞや腹切つて、くたばつた鹽谷判官、家國ともに滅亡したを、主人が仕業などと云うて、付け覗ふ奴もある由。畢竟、由良之助どのは判官の家老職、如何にしても誠しからず、この實否を糺せよと、主人の云ひ付け、いよいよその儀に相違なきや。返答如何に、承らん。

〽肱張りかけし上使の權柄。

由良　これはこれは、御尤もなる御上使の一通り。山名さまへ申せし通り、判官どのの短氣より、我れ我れまでが斯く浪人、この通り引籠つて罷り在るは、朋友等が折ふし參り、敵を討つて亡君へ備へやうと、師直の屋敷へ押寄せやうのと、なんぞ命に掛替へもあるやうに、それはそれはとんと返答に困り入り、山名さまへ右を話し、侍ひをやめ、少々の貯へもござれば、その利徳を持つて渡世いたしたい。また師直さま、京都のお買ひ物、何に寄らず、我れらに仰せ下さらば、隨分下直に買ひ廻して差上げん、さすれば御奉公、お出入りも同然なれば、敵討つ性根の無い事、自ら世間へも知らるる道理。

〽聞いていよいよのさばり聲。

宅兵　すりや、なんと云はるる。敵討つ所存はないか。その筈筈。敵討と云ふは、誠の武士のする業だ。金銀を貯へ、田地田畑を買ひ求め、藏なぞを根強う立てる、腰拔けの叶はぬ事、サ、其やうな家來を持つた、主人も腰拔け、殿中を憚らず、おらが主人に敵たふは、イヤハヤ片腹いたい詮索、罰が當つて忽ち痛い腹、イヤ、まだしも切腹は、味やられたげな。ア、その日は一昨年三月十五日、檢使を引受け鹽谷判官、麻上下のしほしほと、最期の場所に押直り、上使檢使へおれそれも、時刻や過ぎんと肩衣刎ねのけ、三方取つて押頂き、九寸五分を逆手に取り、弓手へがぼと突き立て、右手へキリ、と引廻し、息も苦しく、せぐるしげに、返すがへすも師直を、討ち洩らせし口惜しさ、骨髓に通つて忘られず、楠判官は湊川にて、人は最期の一念によつて、生を引くと云ひし如く、生々替り死替り、怨みを晴らさで置かうかと、それからは狂ひ死。なんと、これでも敵討つ氣はないか。口惜しうも、無念にも思はぬか。エ、、張合ひのない腰

抜け。何にもせよ、判官が家來、師直公へ奉公出入り、思ひもよらぬ、叶はぬ事だ。
〽膠なき堅地、煙草盆、前に引寄せ空うそぶく、此方はわざと素知らぬ風情。
由良　御上使さまのおもてなし。誰ぞ、お茶持て參れ。
大三　ハア、、、。
〽ハッと大三が持ち出る、濃いと薄いの井戸茶碗、上使の前に差置いて、その身は次へ立つて行く。
由良　不調法な悴が手前。澁くと一服、お氣晴らし。
〽澁茶の挨拶、しぶ〳〵面。
宅兵　否でござる、拙者、茶は嫌ひだ。其方へ遣りやれ。
〽突き遣る茶碗、拍子に零れる一歩の山吹、憫りしながら、そつと取上げ。
イヤハヤ、結構なお茶でござる。由良之助どのゝお好み。御子息のお手前、イヤモウ、どうとも斯うとも、拙者元來、茶が好きでござる。その好きを知つての御馳走、御發明、さて〳〵結構なお茶、銘はなんと申す。大方雁金、宇治の名物、これを山吹と申すのか。ハ、、、。
由良　イヤモ、ずんと粗茶でござれど、お好きならば、何服なりと。

宅兵　アノ、これを何服も替へまするか。これは〳〵、忝ない。
〽手早に包む山吹の、雁金よりは鷹の爪、摑み面張る鷲侍ひ。
イヤナニ由良之助どの。主人師直、京都よりの用事萬端、御苦勞ながら只今より、貴公、お世話下されぬか。
由良　これは〳〵、忝ない。前以て望む某し、早速望み叶ふといふも、御上使の御料簡。
宅兵　なんの〳〵、拙者はる〳〵參つたも、貴公の所存を試し、いよ〳〵異變なきに於ては、京都の用事、何かと貴公に、謀し合せよとの云ひ付け。併し、元は判官の御家來なれば、これぞと申す功をお立てなされ。その功さへ立つならば、貴公の望みも叶ふといふもの。ナ、御得心が參つたか。
由良　ハテ、抜け目なき御料簡。さりながら、差當つて當惑。その功の立てようが。
宅兵　ないと云ふのか、討たつしやれ。
由良　ヤ。
宅兵　イヤサ、判官が後家、顏世の一子爲若、この邊に隱れ住む由。この兩人が首、身共が目通りで打たつしやい

否とあれば、古主の恩を忘れざる汝、生け置いては師直公の後日の仇。返答次第、この場は立たせぬ。サア〳〵どうぢや。

へ詰め寄つて、詞鋭き中の間より、うづ高蒔繪の厚蓋物、目八分に持ち出づる、大三を見るより居住居も、くわらりと變るからくり的。

由良　麁末なる菓子ではござれど、お慰みに召上がられ下さりませう。

宅兵　ナニ、お茶菓子。これも彼の山吹菓子でがな。ドレドレ、ほんにお菓子だ。これを喰べいでなんと致さう。拙者元來下戸でござる。菓子が大好物、何から何までお心の付いた由良之助どのゝやうな御家來が、鹽谷どのに附いて鎌倉に居らば、判官も切腹には及ばぬもの。手前の主人も拙者と同じ事で、大の茶好きなり菓子好きなりその好きた物を一服も、盛らなんだゆゑ、この成行き。それには違ふなされ方。こりや其許の御子息、力彌どのの御舍弟な、父御に似て御器用肌。なんでござらうがい。只今のやうに申したものの、なにサ、あの顔世を、討たつしやるにも及ぶまいかえ。斯うなされい。判官の一子爲若ばかり、お討ちなされい。それに、この家に居ぬ者を、今とも申されまい。夜半の鐘を合圖。拙者それまで、奥で休みませう。その間に、たつた一討ち、其うち御子息のお手前、何杯も〳〵御馳走にあづからん。それは格別、いま申し渡した通り、夜半の鐘をゴオンと撞くと、爲若が首ぶち切つて渡せ。キツと申し渡したぞ。大三どの、御案内。由良之助どの、後刻。

へ後刻々々と一人して、呑み込む慾は井戸茶碗、菓子の器と兩の手に、金次第では主の首、討ち兼ねまじき大忠臣、いかつがましく奥に入る。始終の相手口先で、云うて居られぬ爲若が、噂にさすが由良の戸の、ふさがる一間そつと明け、おづ〳〵出づる以前の女房、遙か此方に手を仕へ。

トこの文句のうち宅兵衞、大三郎、入る。奥より、子役の手を引き、お北出て、下手へ來り、

きた　何やらお事多い中へ、また申し上げますも、お氣の毒さまながら、最前も申し上げまする通り、夫平右衞門、長々の病氣ゆゑ、憚りも顧みず、足輕風情の女房子が、おしつけてのお願ひ。お聞きなされて下さらば、有り難う存じまする。

由良　ムウ、合點の參らぬ。ついに逢うた事もない、平右

衛門どのゝお內儀。わざ〳〵この山科を尋ね、由良之助に願ひとは、エ、聞えた。夫の病氣とあれば、人參代なぞにと云ふ、合力の願ひか。イヤ、有り合せさへ致さうなら、用立てゝ進ぜたけれど、今では我れら逼迫の身の上。少々貸した金は取れず、利銀はおこさず、この間は天川屋の義平が一子を、養子に貰うたなれど、喰はす事が大儀なゆゑ、これも堺へ戻す程の身代。イヤモウ、なか〳〵如才には存ぜねど、長居せうより、いづれへなりと、お賴みなされい。

〽挨拶そこ〳〵立ち上がれば。

きた　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。さもしい御奉公は致せども、左樣なお願ひに參るやうな、私しどもではござりませぬ。夫があなたへお願ひは、鎌倉のお供敵討の御人數に。

由良　アヽ、コレ〳〵、如何に女子ぢやとて、大それた事云ふ人ぢや。その敵討に懲り果てたもの。コレ、よう物を、合點なされ。敵討と云ふものは、銘々の命を捨てねばならぬ事、今の世界に我が命を捨て、主の仇を討たうと云ふ、白痴者が。とは云へ我れもその時は、討つても見んかと存じ附いたか、イヤ〳〵、どうぞ敵討つて死なぬやうな、分別はあるまいかと、さる學問者に問うたところが、唐の晉の豫讓と云ふ者、敵の衣を切つて、主の仇を報じたとある。なんでもこれがよい手本と、それから手を入れやう〳〵と、師直が定紋の付いた着物を其まゝ、主の敵思ひ知れと、ヅタ〳〵に切りちぎつたれば、敵討の帳面は、さつぱりと消えたといふもの。どうでも唐の者のする事は悧巧な事。千五百石取る由良之助でさへその通り。まして、報謝米ほどお取りなさるゝ足輕どの。師直は大名、その身は下司。お氣さへられな。下として上を計るは。ナ、そりや天狗風に傘を取られたやうなもの。跪いても埒は明かぬ。よしになされい〳〵。

〽相手にならねば猶も摺り寄り。

きた　これは、由良之助さまとも存じませぬお詞。千五百石、お取りなさるゝあなた樣でも、僅かの切り米頂く夫でも、今日女房子を養ひました所は一つ。その恩ある御主人樣、師直ゆゑにやみ〳〵と御生害。お憤り御無念を御家老のあなた樣、よもやおめ〳〵なされてはござるまい。侍ひ分の身でもあらば、お呼び出しにも預からうが何を云ふにも足輕風情、お願ひも御訴訟も、足腰の叶はぬ大煩らひ、此まゝ死ぬるはいとはねど、御主人樣の御

用にも立たず、やみ〳〵と犬死いたす、心の内の口惜しさを、推量して此お願ひ。由良之助さまへ申し上げてくれと、現在女房へ手を合せての夫の頼み。病は薬が頼みにて、本腹もござりませうが、敵討のお供は、生きて歸らぬ死出の旅。それ知りつゝも女房の身で、この願ひに參る親子、憚りながら、御推量遊ばされ、夫の願ひをお叶へなされて下さりませ。コレ〳〵、平吉、其方もともども、お願ひ申しやいなう。

〽親子額を疊につけ、涙と共に願ひける。

由良　コレ〳〵、其やうに額を附けると、新らしい疊が油だらけになるわいの。エヽ、始末を知らぬお内儀。コレ、始末なされ。始末して小金を貯めると、きつう命が大切になるて。敵討たうなぞと云ふ、無分別は出ぬものぢや。其方もマア見る所が、美しい御面像。そもじのやうな女房を捨て、死なうと云ふは、第一不心中。其やうな水臭い、男に一生連れ添ふより、なんと思し召す、我れら今ではやもめの身。なんと、心に隨うてくれる氣はないか。どうぢや〳〵。

〽どうぢや〳〵と差寄つて、ぴつたり濡るゝ俄雨、雨宿りなき女房が、身を縮めてぞ居たりしが。

きた　ホヽヽヽ。あなた樣とした事が、如何にお戯りあればとて、わたしら風情をお相手に、御酒興でもなさゝうな。座興も事によりまする。

由良　イヤ、座興でない、大眞實、女房はあつたれど國に置き、今ではモウ、朝夕難所の上げ下ろし、誰れがしてくれる者もない仕合せ。そもじさへ得心し給へば、今から爰のお内儀樣、金もある、田地もある。應とさへ云やその子も跡取り、なんと憎うはあるまいが。

〽しなだれかゝれば、取つて突き退け。

きた　否でござります。渇しても盗泉の水を呑まず、どれ程榮華は致すとも、大恩ある御主人樣を、忘れ果てたるお侍ひ。エヽ、さう云ふ心と露知らず、爰まで來たが口惜しいわいなう。斯う云ふ所に、長居する程身の穢れ、平吉、おぢやいなう。

〽立ちあがれば。

由良　マヽ、コレ〳〵、なんぼ去なうと思うても、入り口には宵からピンと錠卸ろし、鍵は我れらが所持いたせば、滅多には、去なれぬ〳〵。コレ、其やうに腹立てずと、また分別もしたがよい。ア、今夜はまだ宵、色事は寐る時分から。夜が更けると、自然と淋しうなつて來て、

どこやら味な氣になるもの。それまで我れらは奥の間で、寐所さして寐て待たう。色よい返事、夜半まで、待つて居るぞや。

〽待つて居るぞとゆふ月の、淸きを濁る池水に、うつす底意は奥深き、襖押し明け入りにける。後見送つて女房が、出るにも出られぬ籠の鳥、途方に暮れて居たりしが。

トこの文句にて、由良之助、思ひ入れあつて、奥へ入る。お北、いろ〳〵こなしあつて

きた　エヽ、ほんに、こなたばかりは、さう云ふ心であらうとは思はなんだに、見下げ果てたと云はうか。御運拙き判官さま、あのやうな家來をお持ち遊ばし、さぞや御無念。草葉の蔭からも、腑甲斐なしとも思されん。アヽおいとしやなう……イヤ〳〵、泣いて居ては濟まぬ。斯ういふ所に居たら、どんなうるさい目見やうもしれぬ。サア〳〵、平吉、おぢや。

〽立ち上がる、足にぐわらりと刀の鞘音。

コレ〳〵、刀まで忘れて行く。ほんに他愛なしと云はうか。なんの斯ういふ性根ぢやもの、敵を討つ氣のないは道理。

〽手に取上げて打守り。

ムウ、侍ひの刀といふは、拔き放すは一生懸命。殊に心後れし由良之助どの、この刀の鯉口を拔きかけ、其まゝに、差置かれたには、心あつてか。

〽不思議なと、目を放さず、刀の鯉口、思案の小口、塞がる胸は幾せの思ひ。

ほんにさうぢや。最前の上使、心許なく忍んで樣子を立ち聞けば、判官さまの忘れがたみ、爲若さまの首打てとある上使の難題。退引きならぬ手詰めの場所、爲若さまの年恰好、似たる我が子をお身替りに、立てる所存か、さりながら、それとも云はず色で仕掛け、色よい返事、夜半まで、夜半の鐘は上使の刻限。拔きさしならぬ鯉口寛ろげしは、この子を打つてお身替りに、立ていと云ふ心であつたか。ハア。

〽ハツと、刀の判じ物、解けて涙の種となる。

斯くまで御主人を大切に、思し召す由良之助さま、敵討つ御所存がなうて、なんとせう。足輕風情の我れ〳〵なれば、疑ひあるは尤も。さうぢや、この平吉をお身替りに立てるならば、夫の願ひも叶ふといふもの。オヽ、さうぢや。

〽さうぢやと刀拔きあげて、見れば頑是もない者の、幼

な遊びに餘念なき。
顏見て、なんの殺されう。
〽案じた疱瘡もしたものを。
如何に夫の爲ぢやとて、親の手に掛け、殺すとは。
〽さても如何なる因果ぞと、忍び泪に暮れけるが、やうやうに涙を押へ。
コリヤ、平吉、爰へおぢや。
〽云ふ事ありと、何氣なう。
コレ喜びや。父様の病氣も直り、願ひも叶ふ程に、なんであらうと、わしがするやうになつて居やるとの、さても出かした、愛い奴と、父様が譽めてぢや程に、わしが敎へる通りになつて居や。
平吉　アイ、そんなら、父様が譽めてかや。
きた　オヽ、譽めてぢや〳〵。サア〳〵、母様がするやうに、これから西の方に向つて斯う兩手を合せて、目を塞いでの、南無阿彌陀佛々々々々々々。お主様のお爲ぢや程にの、どうぞ佛さま、賴み上げまするとの、それは〳〵有り難い、結構な所へ行く程に、ようお念佛申しや。
平吉　おりや、一人は嫌ぢや、母様と一緒に行かう。

きた　オヽ、なんの〳〵、わが身一人遣らうぞいの。父様も追つけ行かつしやる。母様も後から行く程に、何にも云うてくれな。聞く程、胸が張り裂けるわいなう。
〽しやくり上げ〳〵、泪の限り鳴る鐘の、數に哀れを打ち交ぜし、母はハッと心づき。
ヤ、今打つ鐘は、もう九ツ。
〽時や過ぎんと、胸撫で下ろし、我が子の後に立ち廻り。
南無阿彌陀佛。
〽振り上げる、光は稻妻、由良之助、その手を取つて。
ト由良之助、ツカ〳〵出て來り、お北が手を押へ
由良　色よい返事、滿足々々。得心ならば、此方へ渡せ。
〽小脇に掻い込み、駈け入れば、覺悟はしながら今更に如何と案じる、一間を開き。
ト宅兵衞、襖を開き出て
宅兵　ヤア〳〵、九ツの鐘が合圖。爲若が首、受取らう。
〽早く、渡せと大音あげ。
由良　ホウ、その首上使へ、お渡し申さう。
〽威儀を改め由良之助、首の器を差置けば、ハッと驚ろき駈け寄る母、制して此方へ扣ゆれば。
宅兵　オヽ、首打つたか。まだ黴の生えた。身替り首ぢや

ないか。いで實檢。
〽立寄つて、器の蓋を引明くれば、首にはあらで、百兩包み、見るより宅兵衛、高笑ひ。
ハヽヽヽ、こりや最前の格で、また賄賂で面張るのか。イヤモウ、その手ぢやゆかぬ。百兩の目腐れ金、欲しくばやらうワ。
ト首桶の儘、蹴返し
判官胤を殺さぬからは、問ふまでもない、主人へ敵たふ汝が性根。イデこの通り、注進せう。
〽駈け出す宅兵衛遣り過し、丁と打つたる手練の手裏劍、眉間に發矢と流るゝ血汐、ひるまず引き拔き、打ち返す小柄を片手にしつかと請け留め。
由良　ホヽウ、寺岡平右衛門、天晴れ忠心、心底見えた。
宅兵　何がなんと。
由良　この山科に引籠り、長久を計る某、敵を討つや討たざるや、誠の性根を糺さん爲、現在我が子を投げ出したる心の誠、高知を頂く我れ〳〵が、及ばざる忠臣義士、出かされたり、賴もしゝ。この上は、何をか憚り申すべき、徒黨の人數、一味の連判、これ見られよ。
〽懷中より手早く取出す連判狀、小柄の血汐をしつかと摺りつけ。
由良　足輕、寺岡平右衛門、一味同心の血判濟んだ。
宅兵　ハヽハア、ヽヽヽ、有り難い〳〵。女房喜べ、敵討のお供が叶つた。
きた　オヽ、嬉しうござんせう。こちの人。
宅兵　エヽヽ、有り難うござりまする。
〽手の舞ひ、足の踏む所、衣裳かなぐり〳〵、今ぞ寺岡平右衛門と、遙か下がつてかつつくばふ、由良之助、大三に平吉誘なはせ。
ト大三郎、平吉を連れて出る。
由良　亡君御存世の砌りは、國鎌倉と隔たれば、一度の對面せざる其許。あつたらしき忠臣を足輕風情になし置きしは、眼あつて眼あらざる我が誤まり。御主君が手を取つて、お引合はせ下されしか、今日の參會、祝着とも、滿足とも、如何でこの上あるべきぞ。祿を申さば某しとは、九牛が一毛なれども、忠義は拔群、勝りし其許、由良之助、上座は憚り。イザ先づこれへ。
〽いざ先づこれへと誠ある、武士の詞に平右衛門、猶も白洲に身を掘り埋め。
宅兵　こは有り難きお詞。仰せられまする通り、國鎌倉と

隔たれば、御目見得も致さぬ拙者め、殊に殿樣御切腹の折からは、北國へ參り、道にて樣子を承り、愕り仰天、直ぐに夜を日に次ぎ、馳け戻つたれば、はや明き屋敷。御家來中も散り／＼ばら／＼。これは又なんたる事かと、御門前にて腰も膝も、どつかり拔け、直ぐにどん腹かつさばき、死なんとは存じましたれど、イヤ／＼／＼、お國に御家老由良之助さまも、ある事なれば、よろしい御相談もありさうなものだと、それを樂しみに、やう／＼宿まで歸りましたれど、たかゞ足輕風情の拙者め、これぞと云ふ功でもなくば、なか／＼御評議にも加へられまい。どうぞよい仕樣もと、存ずる折から、師直が所替へ新たに建てる屋敷の結構、この案内を知るならば、それが功になりさうなものと、傳手に傳手を求め、やう／＼師直公へ奉公には出ましたれど、新參者ゆゑ心を許さず、安閑と勤めるうち、此方さまの御身の上、田地を求め、藏を建て、なか／＼敵を討つ所存はない。剰へ、師直公へ出入りまで、願はうとの風聞、誠か噓か心ならず、萬一誠ならば、師直より先へ仕舞ふが主君へ追善と存じ、及ばずながら、あなた樣の御所存を探らん爲、直ぐに屋敷の暇乞ひ捨て、妻子と共に上京いたし、今日の體裁。

悴め一人投げ出したばかりに、大切な御人數に加へらるるといひ、由良之助さまの御褒美のお詞、千石萬石の知行より、身に餘り、冥加ないやら、熱い淚が胸先へ、突ツ張り返つて、なんとお禮の申さうやうもござりませぬ。

ト、躍りあぐれば、女房お北。

きた　これまでついに、お目見得も致さぬ我が夫、平右衞門と御存じありしは。

由良　オヽ、尤もの不審。師直よりの上使と僞はり、主君の切腹、その座の模樣、次第の逐一聞く我れより、語る上使の目の中の怨み、顏に憤怒の現はれしは、これ敵にあらず、味方の何某、面體知らぬ忠臣と感ずるうち、ハテその平吉と上使の顏、隱しても隱されぬ其まゝの生寫し、さては寺岡平右衞門と、ナ、コレ、某が、目の附けしところ。

宅兵　ハヽア、天晴れなる御眼力。また平右衞門と御存じの上、多くの金子を賜はりしは。

由良　それこそ一味の輩へ、銘々遣はす支度の入用。即ち亡君の、割符の用金。

宅兵　然らば首の器の中に、入れたる一包み。これも割符

の中でござりまするか。

由良　ホヽウ、その金あたりに落ち散らん。尋ね出して見られよ。

〽詞に夫婦、尋ね探す一包み・爰にと女房差出すを、夫が取つて打守り。

宅兵　ナニ、俗名平右衛門・佛果の爲と書かれしは、

由良　一味の人數四十餘人、首尾よう敵を討ちおほせば、一人も殘らず皆追ひ腹・其許とてもその通り、亡き跡のとひ弔ひ、この平吉が飢えぬやうにと。御內證、しつかりと、御受納あれ。

〽ほろりとこぼす一雫、夫婦目と目を見合せて。

宅兵　殘る方なき、御厚恩。

〽有り難涙、身に餘り、ハッと大地に倒れ伏し、たゞ伏し拜むばかりなり。

由良　イヤ、暫時の憂ひに、勇氣を挫く我が誤まり。この山科にあつては、何かの心に任せず、これより直ぐに鎌倉へ發足し。萬事の手配り、彼の地で致さん。ヤア〳〵力彌、諸士の面々、用意よくば、出立いたさん。

〽ハッと答へて立出づる、大工左官にやつせし銘々、堀部、大鷲、矢頭、柘植、平岡、岡、梅林、門口、奧野、杉野、間瀨、小野寺、力彌と共に旅裝束、寺岡、見るより氣もぞく〳〵。

トこの文句のうち力彌先に、義士の面々、殘らず誂らへの形にて出る。

宅兵　アッ、何れも、お賴もしいと申さうか、勇ましいと申さうか。申し、お煙管やお莨入れはござりませぬか。お荷物がござりまするなら、一つに致して、拙者が引担へて參りませう。イヤモウ、どなたも、お草鞋を打つて上げませう。得て足を喰ふものでござります……モシ、力彌さま、お召し物に埃が。

〽塵打ち拂ひ襟直し、人を賴みの追從は、哀れにも又いぢらしゝ、由良之助、心を察し。

由良　ナニ、平右衛門。

宅兵　ハッハッ。

由良　只今より、百石の御加增。

宅兵　エヽ、。

由良　役儀も改め、御近習方、何れも方と同列同格。

宅兵　すりや、百石の御知行下され、侍ひ分に、お引上げ下されまするか。

由良　如何にも。誰れ憚らず、發足あれ。

〽ハッとばかりに寺岡が、天へも上がる心地して、勇み立つたる門出の喜び、妻は名殘をかねてより、惜しめど今更目に洩るゝ、涙の種の平吉が、手を引き共に立つか弓、矢竹心の弦しめす、諸士の心も一樣に、泪を隱す折からに、大三郎、立出でゝ。

大三　親人さまへお願ひ、何卒、私しも皆樣と一緒に、鎌倉のお供が、致したうござりまする。

由良　成る程、健氣なる願ひなれど、十五に滿たざる其方が小腕、何れも方の足手纏ひ。其方はこれより直ぐに、北嵯峨にまします顏世の御方に付添ひ申し、女房お石にこの趣き、具さに演舌。やがて本意を達しなば、彼の地より吉左右申し送らん。くれ〴〵も、忠孝全く成長いたせ。

大三　そんなら、これより私しも。

由良　この世の對面。

大三　エ、、なんと仰しやります。

由良　サア、堅固で居れ。

〽我が子に殘す形見の忠義、心勵みの聲高く。

トこの以前より星現はれろ。由良之助、見て

由良　あれ見られよ、方々、太白星、晨前に現はれ、衆星の光を奪ふ時は、味方に利ありと、孫呉が詞。

〽今の天さいその氣に當るは、時の吉左右、幸先よし。勇んで門出。

〽大星が、智略は實にも合ひ詞。山。

皆々　川。

〽萬里に廣まりし、いろはの文字は四十七、その字頭と今の世に、譽れを殘し名を殘し、名殘を殘して。

ト皆々引張りよろしく三重

頭取　先づ今日は、これぎり。

めでたく打出し。

幕

太平記忠臣講釋（終り）


菊宴月白浪
きくのえんつきのしらなみ

菊宴月白浪（きくのえんつきのしらなみ）

文政四年九月の河原崎座に上演した、忠臣藏の後日物語で、作者は鶴屋南北である。後日物語といふと眞面目な狂言のやうだが、全體は化政度特產の洒落氣分の固まりである。盜賊曉星五郎實は斧定九郎を中心にした、後日狂言に違ひはないのだが、各幕每に變つた形で、原作忠臣藏の各段の特色を見せて行かうといふ、惡く云へば茶番式の脚色法である。卽ち序幕の「禪覺寺の場」は鶴ケ岡を墓所に直したまでの事。二幕目の「斧閑居の場」は判官切腹場の當込み。三幕目の「山名館の場」は勿論、十一段目の討入をソツクリ見せたので、四幕目の「新鳥越の場」は六段目の代り。五幕目の「花屋敷の場」は七段目の茶屋場で、返しの「兩國橋の場」は五段目の穴である。二つ玉を花火で利かせたり、猪の代りに角兵衞を出すなぞは少し藥が强い。「本所石原女夫石の場」は九段目の書替へである。小名木川の場と「所作事」には流石に當込みはないが、それにしても殆んど全部を、斯うした茶番式に脚色しながら、その間に怪談もあり踊もあり、直助といふ黑黨は割によく書けてゐるし、まんざら捨てられもせぬ味のある所は、流石に南北といふべきであらう。何しろ斯うした、病的な、變態的な洒落氣分が化政度の觀客には受けたのだから仕樣がない。今では馬鹿々々しいと苦笑ひをする茶番の幕でも、當時は非常に喜ばれて、素晴らしい大入を取つてゐたのだから、むづかしい理窟は云へない。

この時の役割は――加古川（中村大吉）九郎兵衞、直助（嵐冠十郎）縫之助（尾上多見藏）浮橋（市川瀧三郎）六太夫、平內（坂東善次）源四郎、五郎三（松本錦吾）勘九郎、丑兵衞（松本染五郎）次郎左衞門、おとら、與一兵衞（大谷門藏）右馬之丞、宅兵衞（市川門三郎）數馬之助（尾上松助）おかる、おりん（市川門之助）權兵衞、伊吾（關三十郎）定九郎（尾上菊五郎）等であつた。

扉に入れた凸版は、初演當時の櫓下番附の一部である。

菊宴月白浪

初　段　　甘縄禪覺寺の段

役名——鹽谷縫之助、高野島五郎師泰。石堂數馬之助。山名次郎左衞門。種ヶ島六太夫。北村傳次。杉森伊太八。禪覺寺住職。腰元、浮橋。下部、與五郎。斧定九郎。

本舞臺、三間の間、向う淺黄幕、眞中に誂らへ大きなる鹽谷判官の石塔。この左これより低き大星の石塔この左右義士四十六の石塔並べ、何れも樒の生花立てあり、下手に假番小屋、これに鹽谷の定紋の付きし幕を張り、すべて甘縄禪覺寺墓場、義士一周忌法事の體。爰に次郎左衞門、老けたる拵らへ、麻上下、大小にて、床几にかゝり居る。その後に上下の侍ひ二人扣へ、次に島五郎、ふつゝり前髪、麻上下大小、この側に傳次、麻上下大小、介添にて扣へ居る。住僧、紫衣七條の袈裟、柄香爐を持ち、黒衣の番僧二人附添ひ居る。鐃鉢、木魚の音にてよろしく幕明く。

住僧　これは〳〵、山名次郎左衞門どの、高野島五郎どの、今日は鹽谷判官どのゝ家臣、四十七人の義士一周忌、追福の御參詣でござりまするか。

島五　アイヤ〳〵、鹽谷家の奴等が法事などに、父次郎左衞門や、この島五郎が、何のよしみに構ふものか、聞くも穢らはしい。

傳次　御主人がこれへお出でたは、高野島五郎さまの、御家督の事についてのお出。

次郎　まだそればかりぢやない。浪人者の縫之助が、家來の法事をすると聞き、不相應な事でもしをらうかと、御用の次手に來て見りやア。

高野　案に違はぬこの結構。假番家を立てた上に、鹽谷の紋の幕を張り、事仰々しきこの體は

次郎　上を恐れぬ致し方、上聞に達したら、お咎めあるは知れた事。

住僧　アイヤ、山名公。この幕の儀は、縫之助どのが張られたのではござりませぬ。

傳次　さうして、何者が此やうに、仰山な事はしましたな。
住僧　されば、この禪覺寺の儀は、鹽谷家代々の菩提所にて、未だ家繁昌の砌り、當寺へ寄附の幕にござれば、愚僧が申しつけ、張らせましてござれば、縫之助どのにお咎めはござるまいと存じまする。
次郎　さすれば、その儀にお咎めはない。して、縫之助は參つて居るかな。
住僧　ハッ、家來の者は、先ほど相見え、御饗應の用意いたし居ります。して、山名公には、何ゆゑこれまで御入來でござりまする。
次郎　この山名がこれへ參つたは、去る曆應元年鎌倉中を騷がして、一旦御改易と相成りし、高野ならびに鹽谷の兩家。然るにこの度高野の家寶、菅家の正筆、鹽谷の重器花筐の短刀、右の品々足利家へ差上げるに於ては、その恩賞として改めて、五千貫づゝの所領をば、兩家へ下し賜はるとの、御内意に依つて右の寶、内見の爲罷り越したのだ。
傳次　御主人島五郎さまには、山名公の御次男にて、師直公へ御養子にお出でなされ、その後高野家退轉にて、御實家へ暫くお預けのうち
次郎　悴が養家の高野なれば、この山名が身に替へて、家再興を願ひしに、お聞濟みあつて、寶内見となつたるも、我が子不便の親の情。
島五　さはさりながら、心憎きは鹽谷の家督、石堂どのが取持ちにて、これも所領は五千貫、さすれば敵同士の鹽谷家と同高。何とやら、心よからぬ儀ではござらぬか。
次郎　それも案じる事はない。次郎左衞門は其方が親だワ。何も申すな。仕樣はさま〴〵胸にあるわえ。
　トこなし。この時向うにて
呼び　石堂數馬之助さまお入り。
　ト三味線入りの音樂になり、向うより石堂數馬之助、鹽谷縫之助、麻上下、大小にて、白木の箱入りの短刀を三方に載せ、持ち出る。跡より上下、侍ひ草履取り附添ひ出て、花道にとまる。住僧出迎ひ
住僧　これは〳〵、石堂右馬之丞どのゝ御子息數馬之助どの、山名公を始めとして
島五　高野島五郎師泰、先刻よりこれに
傳次　お待ち申しあげまする。
數馬　遲刻の段は眞平御容赦。
住僧　先づ〳〵これへ。

三人　お通りなされませう。
數馬　然らば御免。
ト矢張り右の鳴り物にて、殘らず舞臺へ來り、數馬之助、次郎左衞門の次へ床几にかゝる。上下の侍ひは數馬之助の後に扣へ、縫之助は下手に皆々よろしく住ふ。
次郎　數馬どの、御親父には如何なされて、御出席はござらぬな。
數馬　父右馬之丞今日は、細川家へ上使の役目。それゆゑ若輩の某に罷り越し、兩家の寶內見いたせとの儀。萬事よろしくお指圖を。
次郎　して、同道召されたその仁は。
數馬　あれなるは、家の重器を差上げて、家督相續の願ひ人、鹽谷縫之助どの。
縫之　兄判官存生の砌りは、いまだ部屋住みにて、お見知りなき縫之助、かねて石堂どのを以て願ひ置きし、家再興の儀、何卒よろしくお執成しの儀を。
島五　石堂どのにも高野再興、お取計らひの儀を幾重にも
兩人　願ひ上げ奉りまする。
數馬　イヤモ、兩家とも勳功のお家柄、なか／＼以て某が、お取持ちと申す儀ではござらぬ。再興なすは、天下の規模と申すものでござる。
島五　御兩家さまへ、何がなおもてなしと存ぜしかど。
縫之　長々流浪の我れ／＼ゆゑ、心ばかりの用意の品……急いでこれへ。
兩人　持參いたせ。
ト下座と下手の奧にて
六伊　ハアヽ。
ト音樂になり、下座より種ヶ島六太夫、麻上下、大小にて、上下侍ひと兩人して、菓子の折を一ツづゝ持つて出る。下手より杉森伊太八、同じく麻上下大小にて、上下侍ひと兩人して、白木の臺に丁銀を載せしを一ツづゝ持つて出で來り、双方とも石堂山名の前へ一ツづつ直し置き、はるか下がつて
六太　高野島五郎が家臣、種ヶ島六太夫。
伊太　鹽谷縫之助家來、杉森伊太八、
六太　主人申しつけに依つて、何がな饗應と存ぜしかど、葷酒制禁の寺院にござれば
伊太　心に任せぬ不調法の品、何卒
兩人　御受納下されませう。

數馬　これは御厨所より、痛み入つたるこの音物。父右馬之丞へ吹聽いたすでござらう。

次郎　高野の音物は、見事な折、受納いたすでござらうが、縫之助どのゝ音物は、この山名は受取れぬ。

縫之　そりや又何ゆゑ。

次郎　さればサ。音物の贈答は、へつらひに非ず。金銀の音物は、まひなひ賄賂、人におもねり、へつらひて、家を立てんなんぞとは、誠の武士のせぬ事だ。心の穢れた侍ひの物は、目に見るも穢れだ。キリ／＼持つて下がらつしやい。

ト目錄臺を足にて蹴飛ばす。縫之助ヂッと無念のこなし。

縫之　まひなひ賄賂にあらねども、尊敬なさん心より、身に不相應の音物が、却つてお氣に違へばとて、土足を以て蹴返すとは、餘りといへば。

次郎　何がどうした。

トきつと云ふ。縫之助こたへかね、ズッと立つて既に斬うよと見える。伊太八驚ろき「モシ」と押へる。

六太　ヤア、兄判官に憖りもせず、柄に手をかけ亂心同然。殊に上使に等しき山名公に向ひ、詞を返す無禮の高矩。

傳次　イデ、我れ／＼が。

ト立上がらうとするを

佳僧　アイヤ、各々方、暫らくお待ちなされい。

兩人　なぜ留めさつしやる。

佳僧　さればでござる、縫之助どのゝ音物が、お心に叶ひませぬゆゑ、無禮とのお咎めは、御尤もにはござれども、これもその例なきにもござりませぬ、去ぬる鹽谷桃の井が、饗應のその折から

伊太　高貞の家來どもは、不骨者にて賄賂を知らず、若狹之助どのよりは、師直公へ品を盡した、音物を差上げられしが、鹽谷の難儀。

佳僧　かゝる事には手數り致した、縫之助どのゝ御家來と同じやうに心得ましたは、全くこれに居ります伊太八が不調法。

伊太　幾重にも御高免、偏へに願ひ上げまする。

數馬　イカサマ、こりゃ縫之助どのゝ存じた儀ではござるまい。家來の者の心得違ひと見えますれば、御容赦なされて遣はされい。

次郎　何かにつけて鹽谷どのを、取持ち召さるゝ數馬どの

數馬　御承知とあれば何より大慶。然る上は兩家とも、願のお詞、承知いたしてござる。

島五　書中に認めござりますれば、何卒よろしく。ひの趣きを。

縫之　御披露を

ト島五郎は數馬、縫之助は次郎左衛門へ、懐中の願書を差出す。兩人取つて披き見て

數馬　島五郎どのゝ願書の趣き、父へ申し達して、よろしく取計らひ致すでござらう。

島五　有り難う存じます。

次郎　縫之助どのゝ願書。こりや取次は相成らぬ。

縫之　イヤ、憚りながら山名さま、何ゆゑあつて縫之助の願書。お取次は成りませぬな。

次郎　この訴狀の文言では、押して所領を願ふも同然。一體兩家お取立ては、まだ表向きの沙汰ではないワ。石堂どのゝ取持ち召された、鹽谷の寶は身が內見し、また身共が取持ちの、高野の寶は石堂どのが內見召され、我れ吾れより上聞に達した上、お取立てはお上の御慈悲だ。それにこの願書の表では、上を恐れぬ先くぐり文言、斯樣な書附け差上ぐる時は、取次いたす某等が、不念と相成る。この文面で承知する人があらば、その人を頼まつしやい。この山名はマア成らぬ。

島五　この島五郎なぞは逐一に、山名どのへ問ひ合せて認めたれば、一字一點非太刀は請けぬ。御發明なお方は、また格別なものだ。

縫之　今日內見の今となり、願書のお取次下されぬ時は、鹽谷の家名花咲く期なし。文面不案の縫之助、麁文もあらば、お指圖下さりませ。認め直して差上げませう程に、何卒山名公のお情をもつて、お取次の儀を幾重にも

次郎　それが卽ち輕はずみだ。いま差當つて聞いたとて、それで事が濟まうと思ふか。不案內なら不案內の樣に、なぜ石堂どのへでも聞合せぬのだ。

數馬　アイヤ、その心付かざるも、先祖の家名が立てたいと、思ふ一圖で無理ならず、他から物事見受ける時は、仕損じ仕落はあるならひ。既に智者と呼ばれたる、御自分にも、一失がござりますれば

次郎　これサ、數馬どの、何が身共が一失でござる。

數馬　貴殿の御次男島五郎どのを、一旦高野へ養子に遣はされたとは申しながら、實心高野の再興をお取持ちなら、師直が妾腹にも、男子一人あるよし。尤も母は產後に歿

りて、當時行き方知れずとは申せども、草を分つて詮議なさば、知れぬと申す儀もござりますまい。

次郎　ヤア。

數馬　正しく高野師直が、血筋の一子を打捨てゝ、貴殿の實子に高野の家督は、近頃以て智者の一失と、父右馬之丞が申されました。

次郎　サ、それは。

數馬　そこを陽に申さぬも、俗にいふ浮世の義理。さすれば共々鹽谷の再興を、お取持ち遣はされたがよくござらうと、憚かりながら存じます。

次郎　イヤ、お若いに似ぬ御辯舌。年取つた次郎左衞門なぞは及ばぬ事。この上は共々に、お取持ち仕らう。

數馬　お聞届けあつて拙者も大慶。

住僧　先刻より餘程の間、氣鬱を晴らす爲、愚僧が不束なる手前を、一服差上げたうござれば、客殿にて暫らく御休息。

次郎　そりやようござらう。數馬どのも御一緒に。

島五　然らば持參の一軸は。

數馬　後ほど內見仕らう。

六伊　この上ともに主人の身の上。

島縫　何卒よろしく。

次郎　石堂どの

數馬　山名どの。

住僧　御案內仕りませう。

ト唄になり、住僧先に次郎左衞門、數馬之助、島五郎六太夫、伊太八、めい／＼思ひ入れあつて、住僧、上下の侍ひ、皆々附いて下座へ入る。縫之助殘り、こなしあつて。

縫之　ア、めぐる月日に關守なく、早一周忌の今月今日、石堂どのゝ情にて、再び花咲く鹽谷の家名。これも忠死の四十七人、その靈魂の守護ならん。それにつけても兄君の御靈前へ、家の重器花筐の短刀を、手向けて追善回向せん。

ト短刀の箱を眞中の石塔の前へ直し

冷光院殿前朝散太夫吹毛玄利大居士。莊嚴淨土、南無阿彌陀佛々々々々々々。

トよろしく拜禮あつて

大星始め忠死の者へも、心ばかりの水を手向けて。それそれ。

ト三味線入りの禪のツトメになり、そこに有る閼迦手

桶を持ち來り、柄杓にて、めい〳〵の墓へ水を手向けて居る。向うより浮橋、屋敷女中の拵らへ、跡より與五郎、ポツトかづら、石持の布子、一本差しにて、包みを脊負ひ、墓手桶と樒の花を持ち、供をして出て來り

與五　モシ〳〵、浮橋さま、お前はいつもと違つて、剛氣と足早でござりますが、どうしても彼のお方の顔を見ようと思つて、それで其やうに。

浮橋　なんの。さうではなけれど。

與五　ヨウ〳〵、お樂しみ樣〳〵。

トおだてる。浮橋恥かしさうに顔を隱す。與五郎、舞臺を見て

モシ、あそこに墓掃除してござるは、どなたでござりませうな。

ト舞臺へ思ひ入れ。浮橋見て嬉しきこなし。

浮橋　エヽ、この人とした事が、人を弄るやうなこと云はしやんせずと、早うござんせ。

トいそ〳〵と本舞臺へ來る。與五郎も付いて來り

モシ、縫之助さま。

縫之　ヤア、其方は浮橋。

浮橋　おなつかしうござりまする。

ト縫之助に寄り添ふ。

縫之　其方はマア、どうして爰へはおぢやつたのぢや。

浮橋　ハイ、今日は大星さまや皆さんの、御一周忌にござりますれば、お墓參りに。

與五　それは付けたり有やうは、あなたのお顔を、久しう御覽じやらぬゆゑでござりまする。

縫之　ほんに、久しう逢はぬうち、どうか少しやつれたやうな。

浮橋　少しはやつれもござりませうかいなア。お家離散の前方よりあなたに、附添ひ御流浪のうち、お側離れぬ私しが

與五　どういふはずみか浮橋さまの、お腹に云ひ分が出來たとやらで、慥か今月が、丁度五月とやらでござりますとサ。

縫之　ヤヽ。すりや、身共が胤を浮橋が

浮橋　アイ。

ト恥かしき思ひ入れ。

縫之　それはマア、めでたいわいなう。

ト喜ぶ。

浮橋　斯うした仲とは知りもせず、あの兄樣の胴慾な、つ

いした色か何ぞのやうに、わしは高野のお出入りにて、御恩になつた權兵衞が妹に、敵同士の鹽谷の血筋、縫之助と不義あつては、なき師直さまへ立たぬと云うて

與五　たつた一人の妹御を、可哀さうに勘當なされて、行き所に困らつしやるところを、淺草邊に頼もしい女中があつて、そこに世話になつてござるうち、フトわしがお目にかゝり、樣子を聞けばあなた樣の、お胤を宿したとある事を、加古川さまへお話し申したところが、鹽谷家に由緣のあるお方なら、打捨てにはならぬから、どうぞ共々お世話申してくれいとのお頼みなれば、その日の煙りを立てかねる私しなれど、及ばずながら時々の、御樣子を伺つて居りますばかりでござります。

縫之　それはマア、其方のいかい世話ではある。して、その加古川といふは何者ぢや。

浮橋　アイ、加古川さまといふは、定九郎さまの女房さま、以前は桃の井さまの奧勤めさしやんしたうち云ひ交してやゝさんまで產ましやんしたところが、其うちにお家の騷動にて、ちり／＼ばら／＼。

與五　其お二人の中のお子は、加古川さまの親里、播州の飾間宅兵衞さまに預け置き、加古川さまは定九郎さまの、跡を追うてござつたゆゑ、親御の所へ入れようとなされたれど、固意地な九郎兵衞さま、親の許さぬ轉び合ひ、內へは足踏みならぬと、以ての外の不機嫌ゆゑ、以前は九郎兵衞さまに勤めた小者のこの與五郎、その緣でお預かり申すうち、定九郎さまは親御の手前を憚りて、それより一向お便りもござりませぬ。

縫之　ハテ、定九郎は、見かけは堅藏らしいが、色事師ぢやなア。

與五　イヤ、色事師の段でか、加古川さまが不斷云はつしやるには、此やうに定九郎さまが便りして下さんせぬは、まだ伯州にござる時、瑜迦山へ御代參の、ざこ寐の夜に、何國の誰れか知りもせぬ、女中を捕へて戲れに、又の證據と割り笄を、その女中に遣らつしやつたとあれば、大方その女中に逢はしやつて、それでこの加古川が事は、思うても下さらぬのかと、愚痴を云はつしやるも無理ではござりませぬ。その御案じやらこの頃は、加古川さまは、ぶら／＼病ひ、御看病申さうにも、何をいふにも手一つにて。

浮橋　ほんに女子も及ばぬ介抱と、加古川さんも喜んでござんすわいな。

縫之　ハテ、下々に似合はぬ深切な者ぢやなア。

與五　なんの、今日一周忌の義士方に比ぶれば、何でもない事でござります。

縫之　して、其方の、今のすぎはひは。

與五　ハイ、朝は疾から、飯焚いたり、晝は古骨買ひませう、夜は御家來のこの與五郎、お世話と申すも屆かぬ程。今日は浮橋さまのお供ゆゑ、モシ、柳原を一本きめて參りました。卽ち內は山谷の新鳥越でござります。

縫之　ほんに氣輕な男ではあるぞ。

與五　モシ、浮橋さま、わしが時々あなたの所へ參りますると、わしでも知つた事のやうに、剛氣に恨みつらみを仰しやつたが、爰へ來ると、モヂついてばかり。

浮橋　ぢやというて。

與五　アヽ、爰らが潮來節に云ふ、まさか顏見りやといふところであらう。

浮橋　與五郎どのゝ、何云うてぢややら、云ひたい事は山山なれど

與五　そんなら、早く胸づくしでもお取りなされ。

浮橋　それぢやというて、お前方に見られるのが恥かしいわいな。

縫五　その斟酌なら斯うして居ります。

ト着物をすつぽり冠つて後向きになる。

サア、ずつと張込んで、仰しやりませ〳〵。

浮橋　なんの、其やうにせいでもよいわいなア。

與五　エヽ、そんな事ではいかない。張込んで〳〵。

ト着物を冠つたまゝ後向きに浮橋を縫之助の方へ段々に押しやる。浮橋、もぢついて居る。

浮橋　モシ、殿樣、お前樣は、お恨みでござりまする。

縫之　アヽ、コレ〳〵浮橋、わしや何にも其方に恨まれる覺えはない。

浮橋　エヽ、お前樣はなア。

ト合ひ方になり

聞えませぬ、胴慾な。わたしが兄さん權兵衞どのゝ固意地から、あなたのお側を遠ざけられ、以前鹽谷さまのお末を勤めた、賴もしい女中さんに、三月越しも世話になるうちに、訪ひ音信もして下さんせぬは、あんまりでござんすわいな。

縫之　成る程、さう云やれば皆尤もぢやが、今まで便りをせぬ譯を、よう聞いてたも……今度家の重寶、花筐の短刀を、足利家へ差上げれば、その恩賞として五千貫の所

領頂戴するまでは、愼み守る身なるゆゑ、なか／＼便りどころではないわいなう。さりながら、家中離散のその時も、宿へも下がらず附添うて、身共が不自由の其うちを、介抱してたもつた其方、家再興のその時は、奥にもしようと思うて居る。便りせざるは悪かつたが、必らず恨んでばしたもんなや。

浮橋　ほんにマア、さうしたおめでたい事のあるとは、露ほども存じませず、女子の淺い心から、恨み云うたは勿體ない。御免なされて下さりませ。

縫之　なんの其やうに謝る事があつて。

浮橋　イエ／＼、今更何と申しやうがござりませぬわいなア。

　ト此うち下座より六太夫出かゝり、窺ひ居る。與五郎、顔を上げ、

與五　エヽ、もどかしい。そこで云ひ合つて居ちやア人が聞くと悪い。

　トあたりを見て

幸ひなあの假番屋。

浮橋　サア、殿様。

縫之　わつけもない、判官さまの墓前で

與五　その判官さまも奥方の、顔を眺めてござつたから起つた事。

縫之　ぢやというて

與五　エヽ、ござりませぬ

　トもぢ／＼する兩人を無理に下手へ押しやる。兩人下手の番屋へ入る。與五郎ホッと溜め息をつき

シタガ、爰に斯うして立つても居られまい。

　トあたりを見廻し

成る程、殿様と大星さまとのお墓ばかり、綺麗に掃除してあつて、外の義士の墓の穢ない事わえ。武家方といふものは物ぐさい者だ。斯うして居るうち、ドレ、お墓の掃除をしてあげようか。

　ト誂らへ禪のツトメやうな鳴り物になり、腕まくりして

エヽ、脇差が邪魔だ。

　トよき所へ抜いて置き、水を掛け／＼、石塔を皆々掃除してこなし。

ホイ、水が無くなつた。

　ト始終右の鳴り物にて、手桶を提げ下座へ入る。六太夫ソッと窺ひ出て、眞中の墓に手向けある箱を盗み、

中より短刀を取出し、目釘を拔き、中心を取つて、これをどうしようといふ思ひ入れにて、あたり見廻し、與五郎が置きし脇差を見つけ、寸尺を合せ、うまいといふ思ひ入れにて、短刀と中心を摺りかへ、箱を元の通りにして、三方の上へ直して

六太　先づこれでよし。併し、この脇差を、今の奴が見たなら、おれがのだと持つて行くであらう。ア、コレ、どこぞへ隱して置きたいものだが。

トあたりを見て、下の方草井戸の脇へ隱し

斯うして置いて、日が暮れたらば直ぐにこれを……よしよし。

ト頷づき、下座へ入る。木魚入りの合ひ方になり、向うより斧定九郎、深編笠、好みの形にて出て來り

定九　夢によく似たる夢かな墓參り。光陰既に一周り、世に羨やましき義士の人々、黄泉までも君の御側、並ぶ石碑は四十七士、せめて手向けを、さうぢや〱。

ト右の鳴り物にて本舞臺へ來り

さるにても、この定九郎は、宿世いかなる業因にや、鹽谷代々の家老職、斧九郎兵衛が悴と生れ、十五の年より御近習勤め、若氣の至り奥勤めの、加古川と不義の科ゆゑ、改易なりしその跡にて、思ひがけなきお家沒落。大星どのを始めとして、四十七人譽の仇討、その忠心に似もやらず、父九郎兵衛は不義士と呼ばれ、我れは殊更勘當の、身の上ながら心底は、親と一つでない事を、せめて草葉の亡君へ、申し譯いたさん爲め、今日御命日のお墓參り、手向けの水はこの傍りに

ト井戸の側へ行き、立て札を見て

ムウ、首洗ひ井と記したるは、さては師直が首級、この所にて洗ひしか。我れもその夜に在り合さば、一番鎗の高名して、敵師直が首引提げ、御墓前に手向けんもの。思へば〱殘念な。

ト思はず井戸を見込む思ひ入れあつて

さうだ。返らぬ此くり言、思はぬ怒りも廁所へ恐れ。

ト繩釣瓶にて水を汲まうとする。この時下座より與五郎、ウロ〱傍を探しながら出る。定九郎は六太夫の隱したる脇差を、フッと見付け、取上げ

この草叢に一腰が。

ト不思議さうに見る。

與五　アモシ、それはわしのでござりまする。方々探して居ました。此方へ下さりませ。

ト取らうとする。與五郎を見て
定九　ヤ、其方は以前の下部、與五郎でないか。
與五　あなたは若旦那定九郎さま、思ひがけない、この所で。
定九　義士の面々一周忌ゆゑ、餘所ながら今日の佛參。
與五　左樣でござりまするか。さぞあなたもこの人々が、お羨やましうござりませう。
定九　誠に腸を斷つ思ひ。推量しやれ。
與五　御尤もでござります。さりながらお前樣は、只今はどれにお出でなされます。
定九　この定九郎が今の住所は、親の家を出てより、いづくにそれと定めなく
與五　左樣でござりますか。あなたや御子息の芳松さまの事を、加古川さまがお案じなされて、久しい間、御病氣でお出でなされます。
定九　その事も風の便りに聞いたなれど、今まで音信は致さぬのも、親の手前を憚りて、それゆゑの事なれば、必らず無情の者と思うて呉れな。加古川にも云うて聞かせてくれ。それは格別、何ゆゑこの所に腰の物を
與五　ハイ、それは

ト浮橋の供をして來た事を云ひかれる思ひ入れ。
定九　以前は武家の家來の與五郎。ハテ、麁相千萬。
與五　これは何でござります、お墓の掃除を致します時、ツイ爰へ置きました。
ト脇差を取る。この時六太夫出て來り、恟りして
六太　コレ〱、その脇差を、どこへ持つて行くのだ。
與五　これは異な事を云ふお侍ひだ。わしが脇差を、わしが持つて行くのに、大きにお世話だ。
六太　これがお世話を燒かずに居られるものか。その脇差は、どうも遣らぬ〱。
定九　これはしたり。見受けますればお歷々の御身分さまが、なんで下部の脇差を、遣られぬとは云はつしやるぞ。
六太　サア、遣られぬといふのは。オヽ。この脇差は、これはおれがのだ。
與五　ヤ。途方もない事を云ふ。こんながた〱丸を、ナニ立派なお侍ひが。こりやアわしのでござります。
六太　イヤ、世の中に似た脇差は、いくらもある。しかも印がある。
與五　その印は何でござります。
六太　その印は、中身が錆か鐵だ。

与五　ハヽヽヽ、他愛も無い事。この人は狂人ださうだ。
六太　イヤ、狂人ではない、間違ひだ〳〵。
　ト脇差を争ふ。与五郎引ッたくり
与五　この侍ひは、何だか不氣味で、相手になるも馬鹿馬鹿しい、といつたところがお二人樣を、爰へ置き申しては……イヤ、あなた樣には　まだいろ〳〵お話しもござりますけれど、爰にまご付いて居たら。着物まで剝がれるも知れぬ。門前の矢大臣で、ちよつと引かけて參ります……モシ、私しは、ちよつと行つて直ぐに參ります。
　ト假番屋へ思ひ入れして
イエ、若旦那、直ぐに行つて參ります。
　ト禪のツトめになり、ツイと向うへ入る。
六太　コリヤ〳〵、それはおれがのだ。
　ト追ひかける。定九郎留めて
定九　わづか下部の腰の物、あの見苦しい一腰を、それほど所望のお侍ひ。何か仔細の
六太　ヤ。
定九　ハテ、御仁體がそこねまする。
六太　それでもあれを
　ト行きにかゝる。定九郎留める。この時下手の番屋より、縫之助浮橋出かゝるを定九郎ちよつと見て
定九　コレ。
　ト目で知らせる。これにて兩人引込む。
六太　二人は慥か
　ト定九郎へだてる。
定九　ハヽア、爰らが花に
　ト六太夫また寄るを、扇にて額をピッシヤリ。
嵐ぢやなア。
　トよろしくこなし。道具廻る
本舞臺三間の間、中足の二重、大欄間を下ろし、正面瓦燈口、左右金襖、上下塗り骨障子屋體、すべて禪覺寺書院の掛り、爰に次郎左衞門、數馬之助、以前の形にて居並び、緣先に以前の侍ひ、二人扣へ居る。時の太鼓の頭に黃ばくの鳴り物にて、よろしくこの道具納まる。
次郎　ソレ、呼び出せ、
侍ひ　ハッ。
　ト上下へ向ひ
侍ひ　高野の養子島五郎どの

同　鹽谷の舍弟縫之助どの

同　家々の寶內見の時刻

兩人　急いでこれへ。

島縫　ハア。

ト三味線入り黃ばくの鳴り物になり、下手より島五郎一軸を三方に載せ持つて、六太夫、傳次付いて出る。上手より縫之助、短刀の箱を三方に載せ持ち、伊太八付いて出で來り、双方とも山名石堂に會釋して左右に扣へる。

島五　お召しに隨ひ、高野島五郎師泰。

縫之　鹽谷縫之助高矩

六太　臣下の者ども附添ひ

五人　罷り出ましてござりまする。

侍ひ　イザ、內見の品を

縫島　ハツ。

ト兩人こなしあつて

島五　卽ち師直が家の寶、菅家の正筆。

縫之　高貞の重器、花筐の短刀。

兩人　御檢分下さりませう。

ト島五郎は數馬之助の前、縫之助は次郎左衞門の前へ双方の寶を据ゑ置き、引下がつて平伏して居る。數馬之助、ちり手水を遣ひ、箱より出し、よく／＼見て

數馬　イカサマ、高野の家寶菅家の一軸、若輩の我れ／＼が、眞僞はしかと分らねども、兼ねて父より聞き傳へたる道眞公の墨蹟、ハヽア見事。高野氏には流石お家柄、結構な寶を相傳あられたなア。

島五　お譽めのお詞、家の面目でござります。

次郎　イヤ又、鹽谷どのゝ重器、花筐の短刀は、その上を越すお寶ゆゑ、今日の內見いたすのも、我れ／＼が譽でござる。

ト箱の紐を解き、中身を拔きかけ、愕りしてこなし。

縫之助どの、これが鹽谷の重寶、花筐の短刀でござるかな。

縫之　ハツ、如何にも左樣にござりまする。

次郎　ハヽア、錆びたりな赤いわし。アノ爰な、縫之助の大騙りめが。

縫之　ナニ、拙者を騙りとは。

次郎　斯樣な品を差上げ、我れ／＼を一ぱい嵌めようとは大騙りであらうがな。

ト短刀の箱ぐるみ縫之助へ投げつける。縫之助、愕り

して取上げ見て
縫之　ヤヽ、最前持參の折までは、念に念入れ改めて、所持なしたる短刀が、コや此やうな似せ物とは、ホヽホイ
ト驚ろき、當惑のこなし。
數馬　アヽ、イヤ／＼、縫之助どの、內見のその席で、似せ物とは如何なる仔細で
縫之　サヽその申し譯は。
次郎　なんのあるものか。これといふも、うつそりから起つた事だ。一體鹽谷の再興を取持らさつしやる石堂どの、これにお嫡子數馬之助どのがござるが、貴殿の御親父右馬之丞どのは、人を知らぬお方と見えて、折角お取持ちなされた鹽谷の家督が、此やうな呆痴の侍ひと聞き知つたら、如何な鹽谷贔屓でも、少しは呆れさつしやらう。
傳次　誠に蛙の子は蛙に似ると、兄判官に劣りなき、縫之助の大だわけ。
敵役　ムヽ、ハヽヽヽヽ。
數馬　あれ聞かれたか縫之助どの、執成し致した親人まで後指をさゝれるぞや。何ゆゑ似せ物の短刀を
六太　その短刀も、折角拙者がものしたを、又ものされて
數馬　エヽ。
六太　イエサ、似せ物だから、何でも人に物されたのでござらうわい。
傳次　六太夫どの、知れた事を云はつしやるな。
次郎　ヤイ、縫之助、この次郎左衞門を盲目だと思ふのかそんな炭掻き同然な品を、花筐の短刀、候ふなどと、まじめで人をたぶらかす、アノ爰な祿盜人めが。
縫之　こりやあんまりな惡口雜言。
ト次郎左衞門の側へツカ／＼と來て、擬勢する。
次郎　何があんまりだ。次郎左衞門は上使同然だぞ。うぬがやうな生盜人は、以後の見せしめだ。カウ／＼／＼。
ト二重へ縫之助を引付け、扇にて打ち据ゑ、突き放す。縫之助、ヨロ／＼として、ヂッと無念のこなし。
縫之　身の誤りに是非なくも、ヂッと蟄して居ればとて、あまりといへば
次郎　なんだ／＼。打ち据ゑられて口惜しいか。それほど口惜しく思ふなら、五千貫の所領に有付く、誠の短刀をそこへ出せ。
縫之　サ、それは。
次郎　出さねば矢ツ張り祿盜人か。
縫之　サア。

次郎　云ひ譯あるか。
縫之　サア。
次郎　サア。
兩人　サア／＼／＼。
次郎　寶を出ざねば、鹽谷の家は、一生涯埋れ木だぞ。
浮之　この身に覺えなき事ながら、なくて叶はぬ寶、紛失今まで願ひし再興も、執成し賴みし石堂どのへ、申し譯には、この場に於て。
ト腹切らうとする。この以前より定九郎、下手より出て窺ひ居たりしが、この時前へ、ツカ／＼と出て縫之助を留めて
定九　こりや短慮な。マア／＼、お待ちなされませ。
縫之　ヤア、其方は定九郎。縫之助がこの場の切端、その申し譯に
定九　その申し譯はござりまする。
縫之　なんと。
定九　あなたの御身の御難儀を、拵らへた者がござりまする。
縫之　ヤヽ、身が越度を拵らへた者が。そりやいづくに、名は何と。

定九　外でもござりませぬ、この定九郎でござりまする。
皆々　ヤア。
ト驚ろく。
縫之　イヤ、そりや僞りぢや。これへ參るまでは正眞の品、殊に今日只今まで、勘當同然の其方が、仕業であらう筈がない。
定九　例へ何と仰せあつても、家來を庇ふお慈悲の一言、取換へたる似せ物に拙者が誤り……憚りながら山名さま、科人は定九郎めでござります。
次郎　イヤ、その手は喰はぬ。誠其方が失なつたにもしろ陪臣の定九郎、お取上げはないワ。家來の越度は主人の越度だ。なぜ我れ／＼へ、似せ物を突きつけた。
縫之　似せ物と存じて、何しに御內見に入れませうや。
次郎　たとへ御身が知らぬにしても、似せ物で濟まうと思ふか。ア、こりやア聞えた。鹽谷高野の遺恨の元は、師直が判官をば、井の內の鮒の譬へ、それを根に持ち殿中を騷がした、その二の舞が徒黨の奴ら、四十七人世の人が、忠臣々々と云ひはやすも、主人の呆痴が家來の名聞。その弟の縫之助、家の寶を摺り換へられ、迂濶にこれへ持つて出たは、鮒に劣つた大腰拔け。

定九　そりやあんまりな御雑言。毛頭縫之助が存ぜぬ事。科人はこの定九郎。

次郎　エヽやかましい。陪臣の其方に詮議はせぬ。すッ込んで居ろう。

島五　アヽこれを思へば養父たる、師直は仕合せ者。我れらがやうな子を貰つたお庇には、寶内見も首尾よく濟んで、明日からは五千貫の知行取り。これに付けてもお氣の毒なは、縫之助どのでござるて。寶紛失の申し譯は、腹でも切らずばなるまいかい。

六太　その腹も切る術を、どうして〳〵知るものか。いつその事に松の木で、首でも縊るが相應だ。

傳次　それも出來ずば破れ扇で、四海波でも謳ふがいゝ。侍ひの風上に置くも穢れ。

島五　近頃以て笑止千萬。

三人　ハヽヽヽ。

ト笑ふ。縫之助ヂッとこなしあつて、數馬之助を見て氣を替へ

縫之　何れも方のお下げすみ、骨身に通つて無念とは、存じながらも身の誤り、申し譯には、この場に於て。

トまた腹を切らうとするを

數馬　ソレ留めい。

定九　ハッ……數馬之助さまのお詞、マア〳〵、お待ち下さりませう。

縫之　ぢやというて。

數馬　うろたへてか縫之助どの、判官どのゝ血筋といふは、貴殿一人より外にはあるまいが。おてまへが死んで何者が、寶の詮議仕出して、鹽谷の家は立てうと思ふぞ。先祖へ不幸といふところへ、心付かぬか鹽谷どの、逆上せてか縫之助どの。

縫之　ハアヽ。

次郎　アヽコレ數馬どの、流石はお若い。勿論自身の寶とはいひながら、お上の御用の品ゆゑに、差上げようとある短刀を、紛失させた科人なりや、縛り首は當り前。それを切腹させるのは、この山名が情でござる。それに留立ておしやつて、お上への申し譯は、何としようと思はつしやる。

數馬　ハテサ、その科人は定九郎と、自身の白狀。

次郎　イヽヤ、ありや陪臣者、家來の越度は主人の越度だ。

數馬　イヽヤ、そりやそつが言。君恥かしめを請くる時は臣死すの本文。まこと縫之助が越度でも、家來が代つて切

腹なすに、御批判はござるまい。

次郎　サ、それは。

數馬　若輩者の差出口、眞平御容赦下されい。

次郎　イヤモ、どうとも御勝手々々。

ト面ふくらしてゐる。

數馬　コリヤ、定九郎、實内見の我れ〳〵へ、似せ物をさし付けた、その科に依つて切腹申しつくるぞ。

定九　ハツ……古主に代つて切腹なさば、親九郎兵衛が不義士の汚名、少しは削る爲もござれば、この場に於て

ト脇差へ手を掛ける。

數馬　イヤ、この場では相成らぬ。

定九　とは又何ゆゑ。

數馬　不義士と呼ばれし九郎兵衛が悴、古主の菩提所といひ、佛地を穢すは畏れであらう。

定九　實に御尤もたる御仰せ。然らば親九郎兵衛が、浪宅は伊皿子町、それへ引取り切腹の

數馬　檢使は跡より遣はさん。

定九　ハツ……數ならぬ身も侍ひの、數に入つてか有り難い、足利家より御檢使とは、死期の本望、この身の本懷。

次郎　その檢使こそ島五郎、介添は六太夫。

數馬　アイヤ山名どの、陪臣づれの定九郎へ、天下の諸侯の島五郎どのを、檢使とは筋違ひ。

島五　憚りながら數馬之助どの、この島五郎を天下の諸侯と、仰せではござれども、當時お預けの身分なれば、矢張り陪臣同然なりや、檢使に罷り越したりとも、さのみ筋違ひとは申されますまい。

次郎　さうだ〳〵。臆病未練の不義士の悴、もし身替りも計られず。

傳次　その狂言をさせぬ爲、島五郎さまに六太夫どのとは、さすが山名公の御發明。

島五　檢使首尾よく相勤め、菅家の一軸差上げれば、五千貫の知行取り。

六太　高野家再興なす時は、お預けのうち長々と、お附き申した忠臣の、我れ〳〵までも元の立身。

次郎　まだその上に鹽谷家へ、下されんとある五千貫も、縫之助が紛失の、寶詮議を仕出だすまでは、高野家へお預け地。

島五　ヤ、すりや合して所領は一萬貫。

敵役　エヽ、有り難い。

ト喜ぶ。
縫之　エヽ、聞けば聞く程片落ちな
定九　強慾非道の衒計らひ。
トきつとなる。
數馬　コリヤ、何事も父に任せて。
縫之　ハツ。これより直ぐに寶詮議。
定九　我れは冥途へ。
次郎　急ぐ使ひは。
敵役　檢使の我れ〳〵。
ト次郎左衞門縫之助こなし。六太夫、傳次兩人、定九郎にかゝるを、左右の利腕を捕へて
定九　然らば後刻。
次郎　首を洗つて
ト立上がるを數馬之助、扇にて抑へる。定九郎は傳次を見事に返す。双方とたん木の頭。
定九　相待ち申す。
ト目禮する。縫之助、島五郎ちよつと氣味の立廻り。舞臺の皆々よろしく、　ひやうし幕

二段目　斧閑居の段

三段目　山名館の段

役名――斧定九郎。斧九郎兵衞。山名次郎左衞門。入間丑兵衞。近藤源四郎。奥野左仲太。小山田源吾。磯上鄕助。川村傳藏　望月雲八。玉蟲市平。外村源内。大沼郡右衞門。岡村杢平。伊藤五平太。大熊官藏。北村傳次。種ヶ島六太夫。高野島五郎師泰。中間、伴助。山伏、萬象院海山。出前持ち、仁八。質屋手代、嘉助。召仕、おりん。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、向う襖、上の方に稻荷の祠、鈴提げてあり、正面錠卸ろせし鎧櫃を直し、いつもの所に丸木柱の竹簀戸、斧九郎兵衞と書きし表札、寒竹の垣根、すべて伊皿子町浪宅の體。爰に近藤源四郎、浪人の拵らへ。丑兵衞、廣袖、道樂者の形、海山、法印の拵らへ。仁八、蕎麥屋のかつぎ。膳を取ちらし、嘉助、質屋の手代にて、風呂敷に破れ

麻上下三具包みたるを持ち、嘉助源四郎立ちかゝり居る。皆々とめて居る體。かん〳〵の合ひ方にて引返して幕明く。

嘉助　コレ、源四郎さま、ぶたしつたの〳〵。濟まぬぞ濟まぬぞ。

源四　ぶつたがどうした。うぬ、叩ッ挫いて

トまた立ちかゝる。

海山　コレサ、もうよいではないか。あんな奴は打ッちやつて置かつしやい。

丑兵　ぶつたところが、手にも足らぬよい〳〵だ。死ぬと惡い。ぶち放しにするがいゝ。

嘉助　ナニよい〳〵だ。どこにおれがよい〳〵だ。そんな男ぢやアないぞ。とつけもない。

仁八　コレサ〳〵、とつけもない。貴樣には頭にも毛がないワ。ハヽヽヽ。

三人　ほんに若いやうな爺イだ。ハヽヽヽ。

嘉助　ナニ爺イだ。おらア二才だワ。爺イで質屋がなるものか。この耄碌めら。

三人　このよい〳〵め。どうした。

ト嘉助を捕へ、さいなむ。又かん〳〵の合ひ方、向うより斧九郎兵衞、古袴大小、老けたる拵へにて、ゆで蛸を提げ籠へ入れ、その中へ樒の花を一ッにして、これを提げ出て來り、内の樣子を見つけ、足早に來り、これを留めて

九郎　これはしたり〳〵、主の留守に、何を其やうに喧嘩をするのぢや。おとなしくもない衆ぢや。

海丑　これは主人、歸らつしやりましたか。

源四　九郎兵衞どの、お聞き下され。其許の留主に、我が先祖から傳はつた、上下を遣はして、二分貸せと申せば、この質屋めが上下三具で、三百文しか貸せぬと申して、返しに來ました。餘りな奴ゆゑ、打擲いたしました。

嘉助　モシ〳〵、九郎兵衞さま、お前の通でこの上下を、二分付けろとは、あんまりな無理ゆゑ、斷りを云ひに來たこの嘉助を、この人がぶちました〳〵。

トわめくを九郎兵衞制して

九郎　コレ〳〵、質屋の手代、其やうに聲高に云やるな。浪人こそ致せ、身も斧九郎兵衞、貴樣達も又留主をしながら、此やうに跡を取散らして、みだら千萬。鎭まらつしやい〳〵。

皆々　アイ〳〵、これはわしらが惡うござつた。

九郎　ナニ近藤氏、おてまへも又惡いぞや。此やうな上下で、誰れが又貳百疋用足す者があらう。その上に身が方の通を遣はして、この九郎兵衞までに外聞をかゝすやうな事、以後を嗜なまつしやれ。

源四　成る程、さう云はれては一言もござらぬ。誤り入つてござりまする。

九郎　コリヤ質屋、お身も九郎兵衞が挨拶ぢや。料簡しやれ〳〵。

嘉助　ハイ〳〵、お前樣がさう仰しやれば、私しも立つと申すもの。モシ近藤さま、大きに不調法申しました。

丑兵　イカサマ、この男は質屋だけ解つた男だ。その代り今度から、おいらが置く質は、よく貸してもらふぞ。

海山　本尊の不動樣も、二朱の通用だが、おれも壹分付けてもらふぞよ。

丑兵　サア、仲直りだ。〆めろ〳〵。

ト皆々捨せりふにて手を打つ事。

九郎　それでよい〳〵。町人ぢやというて、無理な事云うては跡の爲に惡い。然し、跡の爲といへば、今日は腹切つて忠義を立てた。古傍輩の命日ゆゑ、佛へ手向けようと、コレ〳〵、樒を買つて來たぞ。

ト提げ籠を差出す。

源四　アヽ、九郎兵衞どのは芝の濱へ、肴を買ひにござつたではないか。

九郎　されば、今ゆで立の蛸があつたゆゑ、一杯買つて歸りがけ、次手に樒も買つて戻つたわい。

仁八　ナニ、ゆで蛸と佛へ上げる樒と一緒に。イヤ、物に構はぬお方だわえ。

丑兵　して、九郎兵衞さまは、今日精進かえ。

九郎　エヽ、馬鹿な事を。身共精進はきつい嫌ひ。それぢやによつて、今日も自分に蛸を買うて來た。酢蛸にして飲まうではあるまいか。

海山　コレ〳〵、肴はあつても

皆々　酒はないワ〳〵。

仁八　酒は斯うしやせう。わしが持つて來た蕎麥の道具を、古鐵買ひにくらはして、一升取つて來やせう。

九郎　この男としたことが、そりやアおぬしが主人の道具ぢやないか。

仁八　ハテ、どうでお前の內へ貸した蕎麥の代は、未來だと思つたから、內の前をしくじり次手に、この道具を酒

にして、お龍の內の居候ふサ。

九郎　ハテ、てめえは諦めのよい男だ。

源四　コレ／＼、ぬし達は解らぬ手合ひだ。その酒は源四郎が、內中探して、古兜が有つたから、ぼろ買ひに賣つて、これ／＼、一升取つて置いた。

ト片脇より一升德利を出す。

九郎　これはしたり、あの兜は大事な品。おてまへ、見附けて賣つたか。ア、、折角嗜なんで置いたのに、ア、、身の上の一大事とはなりにけるぢや。ハ、、、、。

丑五　ナニお前、兜がいるものか。主の敵は大星が討つてしまふし、軍はなし。賣つてもいゝわな。

九郎　イヤ／＼、軍の爲ではない。鍋燒の時分に、鍋の代りに不自由だ。

皆々　ハテ、とんだお侍ひだ。

源四　時に質屋、今の上下に何ぞ添へようが、もちつと貸さねえか。

嘉助　添へ物があれば隨分貸しますて。

源四　そんなら何ぞ添へて遣りたいものだが。

トあたりを見廻し

ある／＼。あの松の木にかゝつて居る、あの蜂の巢を添へて借りよう。

ト松の枝にある蜂の巢を取りに行く。九郎兵衞へだてて

九郎　これはしたり、身共さへ取らずに置く蜂の巢、惡冗談も程がある。ア、、手もつけてもらふまい。馬鹿々々しい。

嘉助　左やう／＼。蜂の巢を質に取る質屋がナニあるものか。

源四　それなら、お馬を自身に乘り出して、番頭を口說いて見よう。

嘉助　それがようござります。ハイ旦那、お暇申します。

ト兩人門口へ出る。

九郎　エ、、折角酒の工面をして。ア、、歸つてから飮むがよい。

皆々　待つて居るぞえ。早く歸りねえ。

源四　さうしよう。ドリヤ、行つて來よう。

ト四ツ竹になり、源四郎嘉助向うへ入る。皆々殘り

丑兵　サア／＼、跡は酒だ／＼。

仁八　何ぞ買ひ物があらば行つて來ようかえ。

海山　マア、何にしろ法印が、降魔の利劍で蛸を捺らへよ

うか。

ト指して居る劍で爼板を引寄せ、蛸を拵らへにかゝる。

九郎　ア、法印だけに劍で蛸を拵らへるか。イヤ、呆れた不動だ。ハヽヽヽ。

ト唄、時の鐘になり、皆々捨ぜりふよろしく、向うより定九郎、前幕の形にて、思案の體にて出て來り、花道にて表札を見つけ、思ひ入れあつて

定九　すりや、この家が親人の隱れ家。絶えて久しき音信さへも。

ト門口へ來り、内を窺ひ

親仁樣、お宅にござりまするか。

仁八　誰れだ〳〵……モシ、掛取りが來たさうだ。

丑兵　歸してしまへ〳〵。

九郎　イヤ〳〵、歸す事はない。掛取りならば、斷り云うて歸すまでの事。此方へ通しやれ。

仁八　サ、此方へ入りなさい。

定九　御免なされまし。

ト内へ入り、思ひ入れあつて

親仁さま、定九郎めでござります。その後は打絶えました。御堅固の體、喜ばしう存じます。

九郎　ア、悴か。久しう便りもせぬが、何と思うて來たのぢや……コレ、あの者がこの九郎兵衞が悴、常から話す定九郎といふ、親とは違うて實體者。誠に鳶が鷹とやら。ア、不意氣な生れサ。

海山　エヽ、此お人が、お話しの御子息どのかえ。

丑兵　モシ、いゝ所へお出でだ。憚り申しやせう。

ト茶碗を出す。定九郎樣子を見て

定九　噂に違はぬ、無法暮しの親仁さま。さりながら、御浪人なされても、昔を忘れぬ御氣質は、海老錠おりた鎧櫃の、お嗜なみは又格別。

九郎　アヽ、この鎧櫃か。櫃はとうに具足屋へ賣つて、殘りの鎧櫃は有つても調法。こりや米櫃にして使ふ。ハヽハヽ。コレ悴、わりや放蕩にはならぬか。其やうに偏屈では世渡りがならうか。おりや段々と寄る年、氣儘に暮らさいでは樂みもないといふもの。さればこそ、殿の家斷絶の頃も、あの物堅い大星が、心を盡した亡君の敵、師直どのを討つたところが、忠義の武士と云はれたばかりで、命助けようといふ者もなく、四十七人が殘らず切腹。なんとマア、べら坊な話しではないか。

丑兵　そんなものサ。
九郎　サ、さう思うたゆゑに、その相談に一味もせず、不忠者と云はれても、命延はり、人を騙つても飲食するのが、人間の一徳ぢや。これはいつそ貴様達、待遠でござらう。サ、さしませうか。
海山　マア／＼、おてまへより／＼、コレ、この蛸は新場かして、素敵に旨いの。
九郎　それは有り難い。併し、おれが歯に合へばよいが。
ト茶碗を受け、酒を飲み、鉢を引寄せ、蛸を喰はうとする。定九郎留めて
定九　イヤモシ、親仁さま、今日は忠死を遂げし大星どのはじめ、忠臣義士の面々が、切腹いたせし即ち命日、せめて今日ばかりでも、精進なさるゝお心はござりませぬか。
九郎　古傍輩の命日ゆゑ、この蛸を喰ふなとは、コリヤヤイ、そちや若いが、愚痴な事云ふものぢや。昔平家の侍ひは、壇の浦の海中で、蟹になつた例があつて、目鼻の付いた平家蟹。鹽谷の家中が蛸になつたか、ならぬか知らぬが、鹽谷蛸といふは今まで聞かぬワ。八本足のこの蛸に、鹽谷の家中がなるならば、八ツ頭のありといふ、山田の大蛇は何にならうか。
海山　左さう／＼、八ツ頭なら芋にならう。
丑兵　七面さまは頭が七ツ。
仁八　近江の百足は足が百本。
九郎　親を睨めて鮃になるな。なるなら江戸前。ハヽヽヽ。いかいたわけな。
ト大鉢を引寄せ、蛸を喰ひ、茶碗酒を引かけ
イヤ、又これが何より樂しみ。
ト思ひ入れ。定九郎キッとなつて
定九　その邪まな親仁樣、大恩請けし御主人を、何とも思はぬ傍若無人、それゆゑ世上の口の端に、不義士といへは鹽谷家の、斧九郎兵衛と小兒まで、噂いたすを親仁樣、あなたは御存じござらぬのか。エヽ、見下げ果てた、お前樣はなう。
九郎　なんだ、不義士だ。コリヤ、その不義士とはわれが事。殿の盛んな其うちに、桃の井どのゝ奥勤め、加古川といふ中老と、親の許さぬ不義をはたらき、子までおのれは產ましたと、噂は聞けど今日まで、その女めに逢ひもせず、よし逢ひたりとも他人向き。それでもおのれは親ばかり、不義士とばかり思ひ居るか。エヽ、爰な不孝者

めが。
定九　その加古川と不義の科、折を見合せ親人へ、お詫の程と存じ居つたが、もう今日は是非々々に、お願ひ申して嫁か孫かと、お許し請けんと參りし私し。御立腹は尤もながら、その儀ばかりを今日只今、お許し請けに參りました。親仁樣、定九郎めがお願ひ、聞分けあつて偏に御免を
九郎　エヽ、知らぬわえ。一旦ならぬと云ひ出しては、心の解けぬこの九郎兵衞、重ねて云ふな。聞く耳持たぬぞ。
定九　左樣ござらば是非がない。然らば重ねてこれ程も、申しませぬと云ひたいが、理を非に枉げてお願ひ申す。お聞濟みのないうちは、動かず去らず親の內、貧乏ゆるぎも仕らぬ。是非ともお願ひ申さにやならぬ。不孝の私しこの家に、お置きなされて下さりませ。
九郎　そりやモウわれが氣根次第。居しかつてなりと詫び事いたせ。おれも一旦云ひ出すからは。どう願うても承引せぬ。
定九　然らばこの上親と子が、勿體ないが根くらべ、是非とも叶へてもらひまする。親仁樣、御不請ながらお宅の端に、さし置かれて下さりませ。
九郎　女は內へ呼ばねども、勘當もせぬ悴の其方、願ひとあらばいつまでも、この家にあつて詫び言いたせ。心に叶はぬ其うちは、いつまでなりと
定九　お邪魔いとはず
九郎　親がこの家に
定九　悴の私し
九郎　氣根つよくも
定九　願ひ叶はにや歸りませぬ。
九郎　ハテ、根のよい
定九　親仁さま
九郎　悴。
定九　お邪魔ながらもお宅を暫らく。
九郎　ヤア
定九　御拜借願ひまする。
ト唄になり、思ひ入れあつて定九郎奥へ入る。皆々こなしあつて
九郎　見さしつたか。悴ながらも、ハテ、偏屈な。
丑兵　折角工面のこの酒も
海山　滅入つたせゐか

三人　しらけました。
九郎　さうとも〳〵。堅い忰を追ひ退けて、これから酒ぢや。
仁八　酌をしませう。
九郎　ドリヤ、飲み直して
ト茶碗を差出す。この時向うにて
伴助　上使。
ト呼ぶ。皆々恟りして
三人　なんだ上使だ……モシ、酒でも賣りに來たのかな。
九郎　待ちやれ。上使といふは武家の玄關へ來る筈ぢやが、以前は武士でも陪臣の、殊に浪人斧九郎兵衛、町家住居へ上使の知らせ。マア、何にしろ支度いたして。コレ、貴様達も、上使なら出迎ひを。
三人　モシ〳〵、こんな形でもよからうかの。
九郎　それには今の古上下、質屋の貸さぬ代物なれども、いはゞ上下、腐つても鯛、それなりと引かけて
三人　呑みこみました。この上下で
九郎　出迎ひ頼む。ドリヤ、支度して來ようか。
ト唄になり、九郎兵衛奥へ入る。三人めい〳〵上下を取つて付ける。

丑兵　なんだ。こりやア誠に布巾にもならぬ麻上下。
海山　この形には相應だ。
仁八　擔ぎは誠に初めて着る、とんだ袴着だ。
三人　ハヽヽヽ。
ト入相の鐘になり、三人上下を着る事。仁八、暖簾口より行燈を出して灯す。また向うにて
伴助　上使。
ト呼ぶ。太鼓謠になり、向うより島五郎、六太夫、前幕の形にて出で來り、跡より伴助、草履を摑み出で來り、花道にて六太夫指圖する。伴助心得、先へ拔けて門口へ來り
上使。
トまた呼ぶ。内の三人恟りして
海山　エヽ、やかましい。また上使か。
仁八　先刻からその支度をして居るワ。騷々しい。
丑兵　コレ、さう云つては物に間違ひが出來る。おれがいいやうに、こぢつけるから退いて居さつし。
ト先へ出て門口の簀戸を明け
御上使これへ。
三人　お通りあられませう……芝居のやうだ。

島五　上使でござれば罷り通る。

ト笑ふ。島五郎、六太夫へ囁く。よろしくあつて

ト太鼓謠の切れにて三人内へ入り、皆々の形を見て肝を潰し、小氣味わろく、ウヂ〳〵して居る。

丑兵　コレ〳〵、御上使、上使といふものは、ズツと上座へ通るものだ。それにマゴ〳〵して居るは、上使馴れぬのか。なぜ上座へ通らぬ。

海山　サア〳〵、上座へ通つてもらはう〳〵。上座とは、ズツと向うの事だ。

仁八　行かずばおいら達が、引摺つて連れて行かうか。

三人　挨拶をさつしやいな〳〵。

ト立ちかゝる。上使の三人悄りして

六太　ア、コレ〳〵、上座いたす〳〵。サ、若殿、上座なされませ。

島五　致さいで。上座は存じ居るが、餘り出迎ひが

三人　出迎ひがどうしました。

島五　イヤ〳〵、どうも致さぬ。上使でござれば上座いたすぞ。

六太　拙者も上座いたしまするぞ。

伴助　旦那、わしも上座いたしませうか。

六太　たわけづらめ。折助が上座になるものか。そこらに居ろ。

伴助　ハイ〳〵。

ト兩人上座へ通り、思ひ入れあつて

島五　コレ、出迎ひの衆、床几を借用いたさう。

三人　よくいろ〳〵な事を云ふ。

トそこらを尋ねて、踏臺と酒の空樽を見付け、持つて來り

サア、ズツと低いが、これでもなされ。

二人　承知々々、然らばこれへ。

ト腰を掛ける。

丑兵　モシ〳〵、御上使樣とやら、用があらばあるやうに云ひ出して下さりませ。

三人　サ、その上使の趣きは。

六太　この家の主、斧九郞兵衞へ申し聞かしたいが、その

島五　九郞兵衞は他行かな。

三人　イヽヤ、主は奧に。

トこの時奧にて

九郞　その御請けは九郞兵衞め、それへ參つてお目見得仕まりませう。

ト合ひ方になり、九郎兵衞、麻上下に着替へ出で來り、
よき所に住ひ、思ひ入れあつて

これは〳〵、存じよりませぬ。陪臣と申し、殊に浪人、町家住居の斧九郎兵衞、見苦しきこの閑居へ、お越しなされし御兩所さま・憚りながら御家名が、承はりたう存じまする。

島五 ムウ、鹽谷浪人斧九郎兵衞と申すは其方か。コリヤ、山名家より高野家へ、養子に罷り越したる島五郎と申す者。親師直存生で居られなば、なんの陪臣風情……と申すところぢやが、何を申すも手前どもも浪人同然、それゆゑ罷り越した。且は物事早く解るやうにと、親の山名どのとも口談の上參つた。ハテ、其方が斧九郎兵衞か。初めて逢うたな。

六太 イヤサ、斧氏、身共ことは、若殿島五郎どの、近習役を勤める種ケ島六太夫と申す者。主人はいまだ若年ゆゑ、介添に參つた。以後は見知つて下されいサ。

九郎 これは〳〵、あなたが高野家へ、御養子にお出でなされし島五郎さま、其許は種ケ島六太夫どの、ようぞや御入來、して陪臣の拙者が宅へ、畏れ多くも上使とはな。

島五 申し渡す一條、餘の儀でない。今朝未明禪覺寺に於て、高野鹽谷兩家の寶、持參いたしたその上にて、家名再興ある條、武將よりの御下知。然るところ鹽谷縫之助家の寶花筐の短刀、持參のところ、其方が伜定九郎・その時禪覺寺にあつて、今日その短刀を失ひしとの事。家來の越度は主人の科、縫之助へ掛りしところ、石堂數馬之助が計らひにて、その科は定九郎と事極り、直さま切腹のところなれども、寺院と申し據ろなく、親九郎兵衞がこの宅へ罷り越させたは、親山名が情の計らひ。

六太 科の次第は右の通り、短刀失ひし斧定九郎、この家に於て切腹いたさせ、見屆け歸れと主人の指圖、わざわざ參つた。斧氏、上使の趣き斯くの通り、急ぎ伜の定九郎。腹を切らせる用意をさつしやい。

九郎 すりや伜めが鹽谷家の、短刀紛失をその身に引受け

島五 切腹の願ひ聞屆けたる上は

六太 キリ〳〵腹を切らさつしやい。九郎兵衞どの。

九郎 成る程、左樣ござらば伜めに、この所にて親九郎兵衞、勸めて腹を切らせませう、と申したらよからうが、そりや罷り成らぬ。アヽ、九郎兵衞め、不承知でござる

島六 ナニ不承知だ。そりや又なぜ〳〵。

九郎 ハテ、よく考へて見さつしやい。主人鹽谷の家は退

転、その敵を討たんが爲、師直どのを夜討にせんと、企てた由良之助、その義士の中へさへ、一味せぬ九郎兵衞は、主人は格別、親の跡が立てたいゆゑ、不義士となつたばつかりに、拙者も倅もお祟りなく、浪人しても命を全う、それに今更主人の弟、縫之助どのが科を引請け切腹も凄まじい。倅は何と申さうとも、實の親の九郎兵衞は罷り成らぬ、一人の倅に腹切れと、上使に來る呆痴の始り。身共は今では浪人の、鹽谷の家から知行も取らぬ。親がそれなら倅とてその通り。此よしを山名どのへ、キリ／＼歸つて返答さつしやい。イケ馬鹿々々しい。たわけた事を。

島五　ヤア、云はせて置けば過言な老ぼれ。

六太　役目の某し、其まゝにして歸らうか。

伴助　親仁が承引いたさずば、踏ん込んであの定九郎を、この下郎めが。

海山　折助め、ヂタバタするなッ

ト一腰をひねくり、思ひ入れある。

丑兵　おいらも近所で念頃の、内の息子に腹を切らせるものか。

仁八　大きな間抜けだ。ハヽヽヽヽ。

侍五　ヤア、過言な奴の。彼奴らに構はず、九郎兵衞を

六太　主人の屋敷へ引立て、この場の雜言、御前に於て。

ト九郎兵衞へかゝる立廻り、伴助寄るを三人引付け居る。この時奥より定九郎、塗り三方の上へ腹切り刀をのせ持ち、ツカ／＼と出てこの中へ入る。九郎兵衞見て思ひ入れ。定九郎留めて

定九　親人、無禮なさるゝな。

九郎　ヤア、倅が身は主なしの素浪人、どなたこなたの容赦はない。上使の二人を追ひ歸して

ト立ちかゝる。

島六　ヤア、無禮千萬、

ト寄るを定九郎留める。皆々立ちかゝるを定九郎へだてゝ、持つたる三方を下へ置き、皆々を留めるはずみに上着袴ぬけて白の形、水上下になる。皆々見て

島五　ヤ、定九郎が

皆々　この形は。

九郎　さては倅は疾よりも、覺悟極めて參つたか。

定九　先程主人の身に代ると、詞つがうて參りしも、末期に及んで今一目、親人さまに逢ひたい願ひ。其うち着込み白小袖、無紋の上下死裝束、御上使さま、親どもが何

と申さうとも、死ぬる拙者が承知の上は、お氣遣ひなう、切腹の御見届け下さらば、有り難う存じまする。

島五　その筈の事。用意がよくば

定九　ハッ。

九郎　すりや伜にはこの親が、彼ほど云ふをも聞分けなく

定九　主人の御舍弟縫之助さま、あなたの越度を身に引受け、切腹いたして鹽谷のお家を、再び立てたい拙者が存念。親仁さま、先立ちまするも主人のお爲と、御容赦の程、偏へに願ひあげまする。

ト思ひ入れ。九郎兵衞こなしあつて

九郎　是非がない。これ程まで云ひ聞かすに聞分けなく、現在一人の親を捨て、呆痴な主に見返る伜め、日本一の阿房の鏡。親の心を無にするたわけ、腹を切るとも、くたばるとも勝手にしをれ。おのれが腹の切やうを、親がこれにて見物する。コレ、皆の者。其うち酒だ。サ、爰へ來い／＼。

海山　そんなら爰で、腹切り見物いたすのか。

丑兵　見る者多きその中に、腹切りを見物。

三人　始めていたす。

九郎　コリヤ伜、未練の死ざま働いて、笑ひ草になるな。

ト九郎兵衞始め三人付いて二重へ上がり、酒盛りする。

定九　聞分けあつて拙者も滿足、只この上は御兩所へ、一つのお願ひ。何卒失せし短刀の、縫之助さま尋ね出さば、御沙汰ござつて五千貫の、その御知行は何卒異議なく、下し置かれて鹽谷のお家を

ト思ひ入れ。島五郎聞いて後を向く。定九郎こなしあつて

ア丶、彼樣申すも未練の至り。たとへ死んでも魂魄殘り彼の楠木が云ひし如く、生替り死替り、お主のお家を引起さいで

ト思ひ入れあつて、キッと氣を替へ

南無阿彌陀佛。

ト腹切り刀へ手をかける。

九郎　コリヤ、伜、待て／＼。

定九　なぜお留めなされまする。

九郎　疊が血になる。

定九　エ丶。

九郎　表替へして間のない疊、血で穢されては跡で迷惑。コレ／＼貴樣達、奥の疊を取出して、腹切る下へ敷いて

下さい。

三人　心得ました。

ト諾らへの合ひ方になり、捨ぜりふにて奥より疊一疊釣つて來り、よき所へ裏返して敷く。此うち向うより女乘り物一挺、中間一人付いて來り、門口へ乘り物を置き、中間陸尺は下手へ入る。九郎兵衛以前の樒を取つて

九郎　幸ひ貰つて來た樒、忰が腹切る一才花。コレ、必らず古疊の上で切りませうぞ。血に穢されて堪るものか。

ト疊の四方へ樒をさし込む。定九郎この上へ坐り

定九　親仁樣のお手づから、下さる花は、あの世へ土産、有り難う存じまする。

島六　いらざるくり言、キリ〳〵腹を

定九　承知いたした。

ト定九郎短刀を取上げ、九郎兵衛の樣子に目を付ける。心引見てスワと云はゞ檢死を切らん樣子。九郎兵衛は、定九郎が誠腹切るか偽りならんとこの體を見屆け、これも同じく檢死を切つて定九郎を助けんといふ心にて目を付ける。定九郎短刀を持ちかへる。この時駕籠の内よりおりん、かゝへ帶、丸綿の形にて出て門口に窺つて居る。

お見屆け下さりませう。

ト腹へ突き立てようとする。

りん　待つた〳〵、こちの人、御生害、暫らくお止まり下さりませ。モシ、私しでござりまする。

ト門口の外より云ひながら内へ入る。定九郎見て

定九　ヤヽ、そちや加古川が召仕ひの……イヤ、身が女房の加古川、定めて樣子は聞いたであらう。

りん　ハイ、樣子承りまして、お許しもなき此お宅へ、加古川さまの……アイヤ、あなたと深う云ひ交し、子供まであるわたしは加古川、ナ、モシ、親御さまのお氣に叶はぬわたしが、顔押拭うて參りましたも、あなたの樣子を聞くと其まゝ、驚ろきまして、召仕ひの……イヤ、召仕ひも連れる隙なく、走り來る間の足も定めず。モシ、わたしやアノお前の女房でござりまする。今際のきはに、どうぞ別れを。

トいろ〳〵と云ひ廻して思ひ入れ。定九郎呑みこむこなし。九郎兵衛これに心を付ける事。

定九　申すに違はず、そちや某と親の許さぬ不義の科、これまで親人お逢ひなされぬ加古川、未練なる願ひなが

ら、彼れめをあなたの嫁なるぞと、お詞下したまはらば、相果てまする末期に及び、心の安堵。この儀をひたすら願はしう存じまする。

九郎　イカサマ、今日まではこの親も、固意地を云うて居たが、今死際に倅が願ひ、聞届けて遣はさうが、併し其方が死んだ跡で、あの女や出來た餓鬼まで厄介は御免ぢや。その世話はせぬぞ。それ承知なら逢うて遣らうワ。

定九　有り難う存じまする……聞いたか加古川、親仁さまのお心もほぐれ、身共も滿足。サヽ、これへ參つて。

りん　アイ／＼、わたしが爲には舅御樣、お側へ參つて心置きなう。

ト内へ通る。と、兩人思ひ入れあつて

島五　コリヤ、待て／＼。たとへ由緣の者なりとも、今切腹のこの席へ、緣ある者は猶以て、叶はぬ事だ……といふ所だが、六太夫、女の事だ、苦しうあるまい。

六太　左やう／＼。男は決してなりませぬが、女はお通しなされても、苦しうはござりませぬ。拙者などは至つて女が……アイヤ、嫌ひでござるが、腹切りの節は、まゝある慣ひでござりまする。

島五　さうぢや／＼、ズツと、近う參れ。身が側へ參れ參れ。

九郎　こりや、御上使には情のお詞。コリヤ女、倅も必ず疎かに思ふな。今まではこの親は、隱し妻に子まである事聞いたばかりで七年あまり、打捨て置いたが、いはゞ今日が暇乞ひぢや。嫁舅ぢやと申してくれう。また親が見る前、今際の祝言いたさせくれうぞ。

定九　すりや、親人の見らるゝ前にて

りん　夫婦の杯いたさすとは、エヽ、有り難うござりまする。

九郎　それにつけても御檢使の手前……ハテ、お聞きの通りこの所にて、未來の土產、夫婦の杯、何卒御兩所のお情にて、杯の間暫時御容赦。

島五　こりやよからう。杯事とは羨ましい。酒よからう、この山名……サ、今は高野の島五郎、お合ひ致さうと云ひたいが、そりやアならぬ。上を恐れぬ何のたは言。

六太　祝言などとは以ての外。ならぬぞ／＼。

九郎　ならぬとあれば是非がない。老の願ひの叶はぬ上は刀にかけてもこの儀を只管、眞劍づくにてお願ひ申す。

ト刀を引提げ立ちかゝる。兩人驚ろき、思ひ入れあつて

兩人　ア、コレ、そんなら勝手に杯させやれ。

九郎　それにて安堵。コレ、貴様達、酌を頼むぞ。

丑兵　呑みこみました。ドリヤ、わしが酌を

ト茶碗徳利を持ちゆき、定九郎の前へ置く。

九郎　ア、コレ、祝言の杯は、女の方からさすが格式、さりながら、この杯は暇乞ひと祝言を、一つに交ぜた事なれば、こりや逆にして忰の方から、女へさゝずば誠の加古川。

定九　エ。

ト目を付ける。九郎兵衛、似せ加古川と察し

九郎　サ、誠の加古川ナ、親が眞の嫁の加古川、取持つ杯、其方始めて。

定九　然らば拙者が。

ト茶碗を取る。

丑兵　一ツつぎやす。

ト酌をする。定九郎飲んで

定九　逆さに廻すも今際の祝言。

トおりんへさす。おりん取上げて思ひ入れあり

りん　有り難うござりまする。ならう事ならこの祝言、病氣でお出での加古川さまに

定九　アコレ、それゆゑ逆さに男の方から、さす杯も心あつての、ナ、コレ、めでたう一つ。

トおりん取上げる。丑兵衛酌して、おりん飲んで

りん　して、この杯は。

九郎　矢張り忰へ。

りん　ハイ。

ト定九郎へ戻す。

定九　これが納めの

トまた取つて一ツ受け、グッと飲む。九郎兵衛思ひ入れ

九郎　今際の際の忰が杯、この親が貰はう。

定九　それは憚り。然らば親人。

トさす。九郎兵衛とつて

九郎　子を先立てるも、これも浮世の

ト丑兵衛酌をする。グッと飲み

これは忰へ返杯いたす。

定九　有り難うござりまする。

六太　杯濟めば、キリ／＼腹を

兩人　切つてしまへ

定九　お見屆け下さりませう。

六太　然らば介錯。

九郎　用意はよいか。
定九　云ふにや及ぶ。
ト短刀を腹へ突き立てようとして、側へ詰め寄つて居る、六太夫の足を掻いてのめらす。
島五　おのれ、手向ひか。
ト入れ替つて定九郎へ切つて行くを、定九郎持つたる短刀を島五郎へ投げつける。これにて「アッ」と倒れる。また來る六太夫の刀を拔いて兩人を切り倒す。この體を見て丑兵衛、海山「ヲッ」と云うて奥へ走り入る。伴助驚ろき、驅け寄るを、おりん支ゆる。立廻りにて、おりんの衣裳、綿ぼうし脱げて、下女の形になる。定九郎、伴助を見事に切つて捨てる。九郎兵衛思ひ入れあつて
九郎　悴、出かした。
ト寄るを三方へ短刀を載せ、九郎兵衛が目先へ突付け
定九　親仁樣、御用意よくば。
九郎　上使を切つたその上にて、親が目先へこの短刀。
定九　お腹なされて下さりませ。
九郎　ヤヽ、なんと。
ト替つた合ひ方になり、兩人キッとなり
親に生害すゝむるは、酒興なしたか定九郎。
定九　イヽヤ酒興も仕らぬ。
りん　酒興なされぬお心にて、なぜ父親御へ
九郎　腹切り刀はさしつけた。
定九　その申し譯は後しての事。御生害なき前方に、あなたに望む一品あり、外でもござらぬ、斧家の秘書。
九郎　すりやこいさふきの忍びの一卷。
定九　如何にも左やう。
九郎　望みとあらば、肌身離さぬ品ながら
ト懷より袱紗包みの一卷を差出す。定九郎取つて開き見て、ズタ／＼に引裂き捨てる。
ヤヽ、大切なる家の秘書を、何ゆゑ引裂き捨てたのだ。
定九　似せ物ゆゑに。
九郎　なんと。
定九　誠の一卷、お讓りなされて下さりませ。
九郎　似せも眞も、他にはないわい。
定九　イヽヤござる。誠忍術記せし一卷。悴にまでお包みあるは、身狀知れざるあぶれ者の、入込むこの家は一人住み。それゆゑ人の心付かざるやう、お隱しある所は正しく、目附け置きたる



初演の番附

ト杯に使ひし有り合ふ茶碗を蜂の巣へ打ちつける。
蜂の巣割れて一巻落ちる。蜂は飛び去る。

りん　落ちたは正しくこれ一巻。
ト取つて定九郎へ渡す。

定九　案に違はぬこの一巻、親仁さま、お譲りなされて下さりませ。

九郎　眼力違はぬ身が悴、譲り與へん、受取れよ。

定九　ハヽア、有り難や。忍術記せしこの一巻、只今受取る上からは、御身の存念、一時に晴らさせ申さん。親仁様、悴に代つていさぎよく、お腹なされて下さりませ。

りん　すりや、あなたには疾よりも

九郎　身が心底を

定九　實の悴の私しまでに、お隱しあるか、お情ない。
トきつと云ふ。これより替つた合ひ方になり
去々年大星親子を始め、四十餘人の義士の輩、亡君の仇敵、師直を討ち亡せしその後は、心惰弱の親人さま、胸中お明しなされぬは、逸物あらんと家を退き、近しき鹽谷の古傍輩、この家の内へ入込ませ、父の胸中探らせしに、拙者が心と一致の心底。さこそあらんと存ぜしところ、俄に山名が計らひにて、高野の寶を武將へ差上げ、家再興を願ふの樣子。おのれ仇ある師直の、國家を立させまじき妨げは、菅家の正筆奪ひ取らんと、存じきつたろその日より、鹽谷の浪人狩り催し、山名の館へ盗賊となつて込入るその手段、今日とても兩家の寶、禪覺寺にて御内見はこれ屈竟、奪ひ取らんと心掛けしが、内見の役目といふは、鹽谷に縁者の石堂どのと、聞いて本意なく其まゝに、期を延せしに情なや、縫之助さまの誤りにて、お家の短刀紛失も、これ皆山名が仕業ならんと、同心なしたる近藤氏、忍びに入つて窺ふところ、心得がたき事どもあり、斯る時こそ忍びの術、、、こさふきの一巻を申し請けんと存するゆゑ、絶えて久しき親人に、切腹などゝの僞り表裏。この一巻の手に入つたるは、孫吳が秘書、六韜三略、一時に山名へ亂入して、高野の寶その上に、正しくお家の短刀も、隱しあらんと存するゆゑ、その詮議なさんが爲。それゆゑ斯くの次第でござりまする。

九郎　すりや、悴には疾よりも

定九　心にもなき事ながら、お主の爲と、高野の寶、手に入れん其ために

りん　さてはあなたは侍ひの

定九　切取り強盜、武士の常

九郎　この加古川も似せ物と、目を付け置きしに下ざまの、水仕の姿は、して又素姓は。

りん　お察しありしに違ひなう、私しことは加古川さまのお部屋に勤めし水仕の女、りんと申せし蓮葉者。加古川さまは御病氣、その名代は親御樣の、御存生のうち祝言の、杯事して嫁舅の、名乘り合ひが濟むならば、今にも知れぬ加古川さま、斯やう〳〵と申しなば、御病氣御快氣あらうかと、御子息さまにお願ひ申し、加古川さまのお名を騙り、山出し下女が猿智慧に、僞り申したそのあらまし。旦那樣、御免なされて下さりませ。

九郎　さこそと推察なしたる某、まつた悴は菩提所にて、縫之助さま寶の越度、滿座の中にて山名が我まゝ、殊には主人の身の科を、其方引受け切腹の願ひを立て、家に歸つて來りしは、敵の緣者の鳥五郎を、打捨てたその後で、この親に自殺させ、不義士の汚名を消させんと、又二つには親と別れの杯を願はん爲、二道掛けた其方が心底、なんと違ひはあるまいがな。

定九　流石は親人、驚ろき入つたる御眼力、殊に御身は大星に、一味なされぬ不忠の武士、人の嘲り譏りをも、おいとひなきも忠義の一つ。

九郎　義士の面々かたらうて、高野の館へ込入ると、身は鐵石とかたまれど、先も名におふ高野の家、手だれの者もあらんは治定、萬一仕損じ討死なすか、又は本望とげざる以前、搦め捕らるゝものならば、それまで盡す千辛萬苦も、一時に空しく水の泡、それゆゑ我れは卑怯にも命延はり、義士の成行き見屆けて、すは師直を討ち洩らせしと聞くならば、後詰めに扣へて本望をと、思ひの外、世に類ひなき立派なる仇討、武士の鏡と世上の風聞。我れは空しくこの年月、本意にあらぬ不義士の汚名。

りん　不忠が卽ち忠義に増る親人のお心、その御方とも知らずして、不義士といへば世の人が、九郎兵衛ならでなきやうに、お噂を申しますのが、おいとしう存じます。

九郎　悴が心底見屆ける上からは、其方に遣はす一品あり

ト合ひ方になり、九郎兵衛立つて古鏡を取つて來り、懷より短册を出し、定九郎の前へ置き

この鏡こそ其方が、產の母の筐にて、いはゞ女の魂が、賣り殘つたも今日爰で、盡せぬ緣の親子三人、今こそ揃うて對面なせ。

ト定九郎、鏡を取上げ

定九　すりや、これが母人のお筐でござりまするか。おなつかしう存じまする。

ト鏡の面をキッと見て

子は親に似るなるものを松山の、戀しき時は鏡をぞ見る

九郎　さほど兩親戀しくば、今日あつて明日なき九郎兵衞、我が亡き後にて短册の、長短二句を連續させよ。

定九　ナニ、この短册を……「いとかく今日をしまらざらまじ」

九郎　その上の句の短册は、高野の家中垣坂氏へ、養子に遣はす其方が兄、二人は双子の兄弟なるワ。

定九　すりや、高野の家中に拙者が實の

九郎　兄は不通に高野の家中、伴左衞門へ遣はす砌り、後して兄弟めぐり逢ふ、證據にならんと今の詠歌、上下分けて劍に添へ、養子に遣はす兄三平。また幼年のその砌り、子供喧嘩に相手を殺め、國を拂はれ追放と、聞いたばかりに今日まで、行くへ知れざる悴が親、垣坂氏にも妹誕生、養父は程なく病死と聞き、いま改めてこの親が、兄弟證據のその爲に、汝にくるゝその短册

定九　お心ありげなこの短册、歌を證據に、別れし兄に

九郎　巡り逢ひなばこの親が、成行き語れよ定九郎。さはさりながら、大家の屋敷、込入る人數の手當はありや。

定九　それぞれ親人常々に、招ぎ置かれし不義士の輩。

九郎　その數およそ四十六人。

定九　皆某が手下に隨ひ

りん　さては世にいふ盜賊の、その名も矢張り斧氏と

定九　イヤ鹽谷の素浪人、非義非道ぞと沙汰あらば、これ亡君の御恥辱。それゆゑ暫らく假名して、賊と義士とは稱れども

九郎　忠死なしたる大星が、その名を揚げし例にならひ

定九　今よりしては

トきつと空を見る。この時誂らへの鳴り物になり、空より星大分顯るゝ。

ハテ心得ぬ。大星天に渡るは、急兵のしるし、天下にとつては兵火の凶瑞。さりながら、この身にとつては即ち吉瑞。星の一字を名によんで

九郎　曉かけて寶の詮議。

ト定九郎思ひ入れあつて

定九　その曉とは好き吉事、傳へ聞く漢の名將起りし時、

りん　五星、國に現はれ、忽ち楚國を亡ぼすと聞く。

定九　然らば五星を我が名に呼び、曉星五郎と改名して、

富貴の家々大小名、寶詮義は差當る、山名の館へ亂入の
今より賊の張本人、寶取り得し鹽谷の家國、引起さんは
目の當り。アラ／＼／＼、喜ばしやたア。

九郎　嬉しやそれにて身も安堵、心置きなう寶の詮議。後
に心を殘させぬ、門出は即ち

ト三方引寄せ、白刃を腹へ突き立てる。

りん　ヤ、親御さまには御切腹。

ト驅寄つて介抱する。

定九　跡は拙者がこの身に引受け

九郎　不義士の汚名を斷ち切る切腹。

定九　使者の兩人手にかければ、猶豫ならざる今宵のうち
山名の館へ直さま亂入。

九郎　併し相手は大家の山名。

りん　もしや手だれの者あつて

九郎　手に剩るその時は

定九　鹽の枝葉を絕すには

ト思ひ入れあつて、下の松の木をキツと見て、拔打ち
に枝を切り落し

まツこの通り。

ト切り枝を九郎兵衛の目先へ差出す。

九郎　見事。

ト辛ふ思ひ入れ。

定九　一挺の弓の勢ひたり、東南西北の敵を安く

九郎　亡ぼせ悴。

定九　云ふにや及ぶ。

トきつとなる。この時祠の鈴、ガラ／＼と鳴る。

りん　小宮にかけし鈴の音は

ト宮の内より源四郎、忍びの形にて出て

源四　首尾は上首尾。

ト藪の内物音して

皆々　お頭、めでたう。

ト龕燈を差出す。おりん門口を明け、表を窺ふ。雀大
分飛ぶ。

定九　ヤレ音高し。

ト左右を制す。おりんは門口をしめる。九郎兵衛は前
へへたる。此とたん木の頭。

秘すべし／＼。

トこなし。皆々よろしく合ひ方、時の鐘にて

ひやうし幕

本舞臺、正面朱塗りの門先、左右白壁の塀、見越しの松。すべて山名屋敷の體。時の鐘にて幕明く。

ト下手と向うより吉例の仕出し、夜蕎麥賣り按摩、玉子賣り、いろ〳〵の仕出し行き違ひ、捨ぜりふにて下手と向うへ入る。本釣り鐘誂らへの合ひ方になり、向うより定九郎、黒の忍び頭巾、野袴ぶッ裂き羽織重れ草鞋、大小にて、誂らへの龕燈を照らし、後より源四郎、奥野、小山田、磯上、川村、望月、玉蟲、外村、大沼、岡村、伊藤、大熊、入間丑兵衛、外に四人ほど何れも忍び頭巾、黒具、丸括け、黒股引、手甲、重れ草鞋、盗人の拵らへにて、鋸もじりの類を腰に差し、一本差し、龕燈を持ち並よく出で來り、花道に居並び

定九　如何に方々、我れ持ち傳へたることぶきの一卷、手に入りし上からは、例へ堅固の城郭にても、忍び込むこと心の儘、自然さゝゆる者あるとも、人命斷たざる一味の心體、斯く申す曉星五郎を始めとして、我れに隨ふ賊徒の面々、必ず麁忽なきやうに、我が采配に從はれよ。

源四　如何にも仰せの如く、不義士と沙汰させ身をやつし事を計る某は、近藤源四郎兼次。

奥野　奥野左仲太。

小山　小山田源吾。

磯上　磯上郷助。

川村　川村傳藏。

望月　望月雲八。

玉蟲　玉蟲市平。

外村　外村源内。

大沼　大沼郡右衛門

岡村　岡村李平。

伊藤　伊藤五平太。

大熊　大熊官藏。

丑兵　入間丑兵衛、みな大星由良之助が、後詰めに殘りし

皆々　鹽谷の浪人。

定九　この星五郎に一味の輩、その勢四十餘人の賊、金銀衣服に目なかけそ。取得る品は一軸、短刀。必らずともに。

皆々　心得ました。

ト矢張り鳴り物にて皆々舞臺へ來り、殘らず裏向きになり、龕燈にて屋敷の樣子を見る事。門内にては夜廻

りの拍子木、八ツを打つ。岡村、伊藤、誂らへの繩梯子をば塀へ掛ける。川村、大熊、梯子を傳ひ内へ入る。内には夜廻りの聲にて

夜廻　浪藉もの。泥坊々々。

ト呼び立て、夜廻りの音する。直ぐに呼子の笛を吹く、内より門を開き、番の侍ひを縛り、大熊、川村、忍び入れといふ思ひ入れ。皆々心得門内へ入る。内にて早拍子木を打つ。

侍ひ　盗人入りしぞ。方々油斷あるな。泥坊々々。

ト呼び立て、アリヤ〳〵の聲、門内より侍ひ中間走り出て

大勢　盗賊でござるぞ〳〵。

ト立騒いで入る。これより早太鼓になり、源四郎走り出る。跡より侍ひ二人、槍を持ち、源四郎へ突いてかかる。立廻りあつて一人を見事に切る。これを見て一人は逃げて入る。源四郎追ひ駈け入る。知らせにつき道具廻る。

本舞臺、正面、緣側付きの二重、障子立て切り、奥座敷の體。上の方、柴垣、石の手水鉢、石燈籠、植込み、右の道具納まる。

ト矢張り早太鼓「アリヤ〳〵」の聲にて傳次、大わらは、拔刀。大熊、川村、外村、大沼、四人を相手にして立廻りながら出で來り

傳次　ヤア、心得ざる盗賊ども。何ゆゑあつてかゝる狼藉

大熊　鹽谷家の失せたる短刀。

川村　正しく當家へ持ち來らん。

大沼　それのみならず高野の寶。

外村　菅家の正筆すみやかに

四人　渡した〳〵。

傳次　その二品を盗みにうせたは、合點のゆかぬ盗賊ども悪く寄つたら撫切りだぞ。

四人　何を小癪な。

トこれより四人を相手に大立廻り、さま〴〵あつて下手へ入る。正面の障子を蹴飛ばし、岡村、伊藤、玉蟲小山田走り出る。次郎左衛門、寢卷の形、一軸の箱を持ち四人を追つて出で來り、立廻りあつて

次郎　ヤア、合點のゆかぬ盗人ども、金銀衣類に目をかけず、高野の重寶菅家の正筆、預かり居るを存じた奴ら、何ゆゑあつてこの品に、心を掛けるは心得ず。

小山　さてこそ高野が菅家の一軸、それ奪ひ取つて

三人　合點だ。

トかゝるを次郎左衛門、切り立て／＼立廻りよろしくあつて、四人を追ひ散らし、上の方柴垣の前にて箱を持つて、手水鉢の水を飲み、息をする。この時垣の内より白刃出て、次郎左衛門を貫く。これにて苦み倒るる。誂らへの鳴り物になり、垣を押分けて定九郎、白刃を引提げ窺ひ出て、箱を奪ひ取り、一軸を見る。この時奥より源四郎、丑兵衛、黑裝束の人數殘らず出で來り

皆々　お頭。

定九　して、紛失せし鹽谷家の短刀は。

皆々　探しますれど、かいくれ在所は

定九　ハテ殘念な。正しく當家と思ひの外、さては外手へ渡りしか。さはいへ高野の菅家の一軸

皆々　手に入りましたか。

定九　灯をこれへ。

皆々　心得ました。

ト龕燈を見せる。定九郎改め見て

定九　疑ひもなき菅家の正筆。

ト次郎左衛門よろぼひながら

次郎　おのれ盜賊、その一軸を

トかゝるを定九郎見事に切り捨てる、

定九　主人の御無念、これで少しは

皆々　出來ました。

定九　コレ。

ト思ひ入れ。これを木の頭。定九郎、ニツコリとして白刃を庭先の手拭にて拭ふ。キザミにてよろしく。　幕

四段目　淺草新鳥越の段

役名――下部、與五郎。家主、杢右衛門。鹽谷縫之助。腰元、浮橋。奧女中、加古川。雇ひ婆、おとら。芋賣り、源六。稽古娘、おたき。同、おせん。長屋の女、おろく。佛權兵衛。

本舞臺、正面鼠壁、暖簾口、上の方押入、この上手反古貼りの障子屋體、下の方竈のかゝり、鍋釜手桶水瓶勝手道具一式、いつもの所に門口、誂らへの

井戸あり、すべて、新鳥越借家の體。幕の内よりおとら、雇ひ婆アの拵らへにて、七輪に向ひ、薬を煎じて居る。おたき、おせん、小娘にて、塗り桶にて綿を紬ぎ、この側に合長屋のおろく、莨のんで居る。時の鐘、てんつゝにてよろしく幕明く。

ろく　ハテサテ、お長家に居ますから、毎日遊びに參ります。必らず構うて下さりますするな。

とら　取込んで居りますから、お構ひ申しませぬ。一服お上がりなされませ。

たき　モシ、おせんさん、あの鐘は七ツでござりますかえ。

せん　爰の與五郎さんは、いつもよりか遲うござんすな。

とら　ほんに、もう日の暮れるに間もあるまい。稽古はそれでしまうて、また明日お出で。

ろく　この子供衆は、よう精が出ますな。それにつけお前は、毎日御苦勞でござりますすな。

とら　ハイ、わたしも爰の内に、病人がござりますゆゑ、與五郎さんに賴まれて、參りました雇ひ婆ア、御病人の介抱さへすれば、外に用がないゆゑ、弟子衆を連れて、綿の稽古して居りますわいの。

ろく　それは御苦勞でござります。爰の御病人も、見ますれば屋敷風の、女中のやうでござりますが、與五郎さんの爲には、何でござりますえ。

とら　サア、わたしも詳しい事は存じませぬが、慥か與五郎さんの爲には、大事の主筋、鹽谷家の浪人定九郎さまとやらのお内儀との事。仔細あつて夫婦別れして、與五郎さんの内へ來てござるとの事でござります。

ろく　與五郎さんも貧苦の中で、病人を介抱するとは、奇特な事でござります……ほんに、もう日が暮れるさうなお暇申しませう。

たき　小母さん、わたしも一緒に參じませう。

せん　左樣なら、お師匠さん、また明日。

とら　そんなら又お出で。

三人　御病人を大事に。

とら　どなたも、ようお出でなされました。

トてんつゝ、時の鐘にて三人向うへ入る。下の路地口より源六、古半纏の形にて、芋賣りながら出て來り

源六　芋、芋……モシ、芋のしまひはようござりますか。

とら　今日は皆留守ぢやから、明日の朝來ておくれ。

源六　ハイ／＼。芋、芋。

トてんつゝ花道へかゝる。向うより與五郎、古浴衣、

三尺帶の拵らへにて、傘の古骨買ひの荷物の内へ目籠子供の手遊び、竹細工の蛇、その外いろ〳〵入れて、擔ぎ出て來り、源六に行合ひ

與五　芋屋さん、今お歸りなされますか。

源六　モシ、古骨屋さん、芋がしまひだ、廉くして買つて下さりませ。

與五　しまひなら買はうが、一升いくらだ。

源六　値切りなさんな。グツと負けて八十八文サ。

與五　イヤア、そりやア高い〳〵。五十に買はう。

源六　ちつと廉いが負けて置く。何升あげます。

與五　一升五十の割で十六文下さい。

源六　どうも十六文は賣り憎い。五合買つて下さりまし。

與五　五合買つては奢りぢやが、グツとはずんで五合買ひませう。その代りに、よく量つて下さいよ。

源六　ハイ〳〵、畏まりました。

ト芋を量る。與五郎、ヂロ〳〵見て

與五　アヽ、コレ〳〵、それでは量りが惡い〳〵……。それ〳〵、其やうに親芋は、御免ぢや〳〵……此方の方に腐つたのがある。取替へて下され。

ト兩人此うち捨ぜりふよろしく、五合升に芋を量り出して

源六　サア、入れ物を出して下されまし。

與五　その入れ物は、どうしたものであらう。

ト荷の中より笊を出し

芋屋さん、爰へ下さりませ……ソリヤ、錢よ。

ト錢を渡す

源六　ハイ、有り難うございます。又お願ひ申します。

與五　ドリヤ、これから芋で樂しみませう。

トてんつゝにて、源六は芋を呼びながら向うへ入る。與五郎舞臺へ來り

おとらどの、いま戻りました。

とら　オヽ、與五郎さま、今お歸りか。嘸お草臥れでござりませう。

與五　イヤモウ、わしは馴れた商賣ゆゑ、さのみ苦勞にもなりませぬが、時に御病人樣は、今日はどうでござりました。

とら　御病人樣も、今日はいつもよりは、鹽梅がよいかして、今もスヤ〳〵と寢てござる樣子。

與五　それは重疊々々。お起し申すも如何。矢張り其まま寢かして

ト云ひながら荷物を內へ取入れ、件の芋を桶へ打明ける。

とら　お前も時分であらう、夜食になされませぬか。

與五　わしは今歸りがけに、芋を買つて來たれば、ゆるりと煮て喰ひます。お前は早う歸つて休息さつしやりませ。

とら　お前が戻れば、御病人も心強いといふもの。そんならわしは歸りまして、また明日參じませう。

與五　モシ／＼お前、歸るなら、わしが着て居る浴衣を、洗濯しては下さるまいか。

とら　ハイ／＼、畏まりました。

ト與五郎着て居る浴衣を脫いで、おとらに渡し、有り合ふ古き襦袢を着て

與五　モシ、裸虫の洗濯、今から洗うて、明日商賣に出られるやうに賴みます。

とら　合點でござんす。左樣なら與五郎さま、また明日參りませう。

ト時の鐘、合ひ方になり、おとら、單物を持ち、向うへ入る。與五郎あと見送つて

與五　モシ、どうぞ明日の朝までに賴みますぞや。まだ袷にも有りつかぬ。早く賴みますぞ……こりやモウ暮れかかつて來た。油があつたかしらぬ。

ト行燈を出し、火打ち箱にて火を打ち、行燈へ移し

さて、これから芋を拵らへようか。庖丁は慥か爰らに

ト尋ね見て

人に留主を賴めば、我が內ながら勝手が知れぬ。庖丁が見えぬか。よし／＼、爰に好いものがある。

トあたりを見廻し、序幕の脇差を取つて來り

災ひも三年とやら、こりや以前の勤め道具。ドリヤ、芋の料理にかゝりませう。

ト唄になる。時の鐘、與五郎、芋を拵らへにかゝる。此うち向うより縫之助、絹やつし、着流し、一本差しにて前幕の浮橋の手をとつて出で來り

縫之　コレ／＼浮橋、其方と此やうにして步くが嬉しさにウカ／＼とこれまで來たが、爰は何といふ所ぢや。

浮橋　爰は山谷の新鳥越と申す所でござります。定九郎さまの御內室、仔細あつて疾から居られます、桃の井家の御中老、加古川さまの隱れ家でござります。

縫之　聞き及んで居る加古川が事。定九郎と二人が仲に、芳松といふ子まで生したとの事。いよ／＼左樣かな。

浮橋　サア、互ひに思ひ合うた仲なれども、お家の騒動より引別れ、今にては召使ひの與五郎方にて、御病氣との事。
縫之　それを思へば、定めがたなき人の身の上。某とても鹽谷の家を、相續なさんと思へども、家の重器・花筐の短刀を、失ひしゆゑ願ひは叶はず、この身は一生埋れ木同然。縫之助は腰抜け武士と云はれうより、いつそ切腹なして、未來に於て申し譯。
浮橋　その寶の紛失も、元の起りはわたしから。それゆゑあなたのお胤をば、宿せしとあつて兄さまに勘當請けしこの身の上、あなたが其お心なら、わたしも長らへては居りませぬ。どうぞ一緒に未來へ旅立ち。
縫之　そんなら二人、今宵のうちに。
浮橋　さりながら、お世話になつた加古川さまや、與五郎どのにも逢うた上、餘所ながらの暇乞ひ。
縫之　わしも一緒に行きたいが、加古川や與五郎に、逢うてはどうも面目ない、其方が暇乞ひしやる間、跡へ戻つて待つて居るぞや。
浮橋　そんなら少しの間、お待ち遊ばして下さりませ。
縫之　オヽ、よい時分に來て合圖しよう。その時必らず、コレ浮橋。
浮橋　畏まりました。左樣なれば殿樣。
縫之　早う行ておぢや。
ト唄になり、縫之助引返して向うへ入る。浮橋舞臺へ來り
浮橋　ハイ、ちよつとお頼み申しまする〳〵。
與五　誰れか知らぬが、用なら内へ入らつしやりませ。
浮橋　左樣ならお許しなされませ。
ト内へ入る。
與五　女の聲ぢや。誰れぢや知らん。
浮橋　ハイ、浮橋でござります。
與五　ヤレ〳〵、ようござらつしやりました。サ、一服お上がりなされまし。
ト茶、莨盆など出す。
浮橋　モシ〳〵、必らずお構ひなされますな。
與五　時に一人で今時分、どこへござりました。
浮橋　ハイ、そこまで縫之助さまと……イエサ、縫之助さまの御苦勞遊ばすお家の寶、早う知れますやう、又は加古川さまの御本腹願ひがてら、觀音樣へ參詣に參じました。

與五　それはお奇特な事でござりまする。お前様も、その深切、あるならば、なんと物は相談ぢやが、思ひ切つては下さるまいか。

浮橋　思ひ切れとは、そりや何を。

與五　縫之助さまを。

浮橋　エヽ、そりや又なぜでござんすえ。

與五　ハテ知れた事、お前とお二人の仲は、よもや此やうになるまいと思ひの外、縫之助さまはお前の色香に迷ひ、お家の事もどこへやら、その上花筐の短刀まで失うたも皆お前から起つた事……イヤサ、さうではないが、みな縫之助さまが心得違ひ。大事の寶を紛失させ、今ではあの通りの御身の上。お前もお若いが、女は氏なくて玉の輿とやら、今のうち御料簡なされませ。

浮橋　それぢやというて、あれ程まで深く云ひ交して、もしや寶の出ぬ時は、二人一緒に死なうとまで

與五　ヤア。

浮橋　サア、どうもその事ばかりは。

與五　ならぬと云はつしやりますか。そりやお心が狹いといふもの。ハテ、縫之助さまばかり男ぢやあるまいし、一旦お二人の仲を遠ざかれば、お世話になつた定九郎さまや、加古川さまへも義理も立つ。爰の道理を聞き分けて、どうぞ思ひ切つて下さりますまいか。

浮橋　事を分けてのお詞なれど、所詮寶の知れぬ時は、生長らへぬわたしら二人……サア、二人が仲を遠ざかり、それでお心が濟む事なら、どうなりと致しますわいなア。

與五　よう云うて下さりました。一旦退いて下さらば、縫之助さまを放埓者と云はせぬやう、世間の譏りを防ぐ道理。又二つには加古川さまも、御病氣ながら、これをお聞きなされたら、さぞお喜びでござりませう。併しながら、お前様が思ひ切つても、向うが思ひ切らぬ時は、益ない事。とても事に縫之助さまが、御得心なさるやう、切れ文書いては下さるまいか。

浮橋　サアそれはな。

與五　ハテ、その位に致さぬと、一向譯が立ちませぬ。幸ひ硯箱も爰にあり、ちよつと一筆、お書きなされまし。

ト有り合ふ硯箱を無理に突つける。浮橋これを幸ひに、死ぬる覺悟ゆゑ書置をするといふ思ひ入れにて

浮橋　それならわたしがツイ一筆。

與五　サア／＼、行燈をよく掻き立つて、其うち、わしは一服下さらうか。

ト時の鐘、合ひ方になり、浮橋、文を書く。與五郎、莨をのみ、捨ぜりふあつて

ヤレ〳〵嬉しや。これで縫之助さまは、女にかゝつて現をぬかし、大切な寶を失うたなどゝ、世の人口を除くといふもの。追ッつけ寶手に入りなば、鹽谷のお家相續。さすれば若旦那定九郎さま御夫婦の忠義も立つといふもの……モシ〳〵、其やうに長たらしく書くには及びませぬ。ツイ一筆、切れますと、書いてやらつしやりませ。

浮橋　イエ〳〵、さうぢやござんせぬ。あなたにも、よう御得心のゆくやうに。

與五　イカサマ、それもさうかえ。そんならとつくり解るやうに、お書きなされませ。

ト此うち浮橋、文を書きしまひ、よく封じて

浮橋　この文を縫之助さまに上げさへすれば、サラリと解るわたしが切れ文。與五郎さん、お前からあなたへ、お上げなされて下さりませ。

與五　オット、よし〳〵。併し、この切れ文を、縫之助さまが御覽じたら、寶は失ふその上に、女には見放され、やけむちやになつて、お前を殺さうと云はうも知れぬ。お前は奥の納戸へ行つて、隠れてござりませ。

浮橋　左樣ならわたしは。

與五　加古川さまのお床へ行つて

浮橋　お見舞がてらの暇乞ひ。

與五　エ。

浮橋　左樣なら御免なされませ。

ト唄になり、ツイと暖簾口へ入る。

與五　ヤレ〳〵、芋を煮て夜食にしようと思へば、さまざまの用が出來た。ドリヤ、これから芋を煮て飯に致さうか。

ト捨ぜりふにて芋を鍋へ入れ、竈焚きつける。よき時分、てんつゝになり、向うより杢右衛門、家主にて出で來り、直ぐに舞臺へ來て

杢右　與五郎どの、内に居るか。爰明けて下さい〳〵。

ト無性に叩く。

與五　ハイ〳〵、いま明けます〳〵。

ト竈をくべながら戸を明ける。これにて杢右衛門、ヒヨロ〳〵と内へこけ込み

杢右　オヽ、痛い〳〵。明けるなら明けると、斷つて明けるがよい。すんでの事、怪我をするところであつた。

與五　これはどなたかと思つたら、お家主の杢右衛門さま、

何の御用でお出でなされました。

杢右　何の用とは、コレ與五郎、こなた正直者と思つたら、思ひの外に太い人ぢやな。尤も引越して來た月は、家賃も拂うたが、その後は一向寄越さぬ。催促すれば留主ばかり遣つて、逢うた事がない。そこで今夜は仕掛けて來ました。是非とも家賃の勘定、して下さい／＼。

與五　成る程、御尤もではござりまするが、今晩と申しては、此方も難澁。今一兩日、どうぞお待ちなされて下さりませ。

杢右　イヤ／＼、その云ひ譯も、もう喰はぬ／＼。もうこの上は家財かざい、見倒しに賣つて腹癒せをせにやなりませぬ。先づ奥から先へ引立てゝ參りませう。

ト立ちかゝる。與五郎とめて

與五　御尤もでござります。さりながら、一言申し上げたい儀がござります。マア／＼、お待ちなされて下さりませ。

杢右　ア、コレ／＼與五郎、こなたの主人が煩らへば、家主に損を掛けても大事ないか。

與五　全くさういふ譯ではござりませぬが。

杢右　そんなら、雨露を凌いだ家賃を、いま拂ふか。

與五　サア、それは。

杢右　但し家財を賣り拂ふか。

與五　サア、それは。

杢右　與五郎、返事はどうするのだ。

與五　モシ、お家主さま、成る程、御立腹は御尤もでござりまするが、御存じの通り、わしが大恩受けた御主人が、御病氣で御難儀。今は誰れ一人として世話をする者もなければ、私し方へ引取つて、看病はして居ますものゝ、何をいふにも貧乏暮らし、紙屑や傘の古骨買ひ歩き、わづか百か百五十の、儲けの中から藥代。わしはこの頃は、米の飯といふものは、喰つた事もござりませぬ。これもお主が大切さ。爰の道理を聞き分けて、一兩日のところ、お待ちなされて下さりませ。

トこの長ぜりふのうち杢右衛門、ホロ／＼泣き出し、愁ひの思ひ入れにて

杢右　コレ與五郎、さても／＼、こなたは忠義な者ぢやなア。今の詞を聞いては、家賃を取る氣は毛頭ござらぬ。この上は、家賃の通はこの通り。

ト帳面を矢立にて消す。

與五　ヤア／＼、左樣ならお聞濟み下さりますか。有う難

うござります。

杢右　ヤレ〳〵、正直な人でござる。此やうな心でなければ、忠心者とは云はれますまい。そんなら與五郎どの、御病人にもよく云つて下さい。こなたの忠義な事も地主へ話して、御褒美を貰うて進ぜませう。

ト云ひ〳〵門口へ出る。

與五　イエ〳〵、それでは冥加が恐ろしうござりまする。

杢右　イヤ〳〵、こなたの様な忠心者を、此まゝ置いては家主の役が濟まぬ。

與五　左様なら、よろしうお願ひ申しまする。

杢右　ドリヤ、お暇申しませう。

ト時の鐘、合ひ方になり、杢右衛門向うへ入る。

與五　ヤレ〳〵、世間に人鬼はないと、よく云うたもの。これといふも、お主様を大事にかけるお庇。エヽ、有り難い〳〵。何かに取紛れ、加古川さまの御病氣もお尋ね申さぬ。

ト障子の内を窺ひ

スヤ〳〵寢てござるさうな。お起し申すも如何。何かはお目が覺めての事。ドリヤ、夜食に致さうか。

ト膳椀を出して、以前の芋を盛り、飯を喰ふ事よろしくあつて

ヤア〳〵、この芋はまだ煮えぬらしい。中には石のやうなもあり、焦げ臭いのもある。折角の芋を玉なしにしたわい。

ト捨ぜりふあつて飯を喰ひしまひ、あたり片附け、行燈を拵らへ

先づ、これで腹は大丈夫だ……ヤ、忘れて居た。加古川さまのお藥を、まだ煎じずにあつた。ドリヤ、お藥を煎じようか。

ト七輪へ藥鍋をかけ煎じ居る。時の鐘になり、向うより縫之助、以前の形にて出て來り、あたりへ思ひ入れあつて、窺ひ〳〵門口へ來て

縫之　浮橋は居ぬか〳〵。

ト門口を叩く。與五郎聞耳立て

與五　さういふ聲は、縫之助さまではござりませぬか。

ト門口を明ける。

縫之　オヽ、わがみは與五郎。浮橋はどうした〳〵。

與五　縫之助さま、あなたさまの所へ、いま參らうと思つてゐますところでござります。

縫之　そりや何でいの。

與五　マア〳〵、お入りなされませ。

　トこれにて縫之助、内へ入る。上手障子屋體より加古川、病ひ鉢卷、病氣の體にて、障子を明け、縫之助を見て

加古　ナニ、御次男縫之助さま。思ひがけない、爰へはどうして。

縫之　ヤア、其方は加古川。

與五　モシ、加古川さま、縫之助さまは病犬同然、滅多に側へ寄らつしやりまするな。

縫之　イヤモウ、わしが放埓ゆゑ寶の紛失、今更二人の者に、顔を合すも面目ない。

加古　サア、その御放埓にさせまい爲、及ばずながら私しども〳〵、心を痛めて居りまするが、世間の人の口の端にかゝるあなたの御身持、最前より一間にて、樣子を承はり居りますれば、與五郎が實意にて、一度あなたと浮橋さまの仲を裂き、人の噂を除かん爲に、浮橋さまに退き狀書かせ、與五郎が慥かに持つて居ります筈。

縫之　ナニ、浮橋が退き狀書いたとは、ほんまの事か。

與五　お家の爲には換へられませぬ。退き狀書かせ置きましたれども、相手の女中は、疾にあなたを思ひ切つて居りますゆゑ、あなたもスツパリ思ひ切つてしまはつしやりませ。

縫之　ムウ、すりや今の間に心變りぢやよな。さういふ事とは露知らず、情ある女と思ひ、今までウカ〳〵騙されたが、腹が立つわいの〳〵。

與五　御尤もでござります。

縫之　サヽ、その退き狀、見せい〳〵。

與五　文はこれでござります。

縫之　そんならこれが

加古　早う御覽じませ。

　ト縫之助、書面を見て

縫之　何ぢや「書置の事」

與五　モシ、書置なぞと讀み違へずと、心を鎭めてとつくりと、讀んで御覽じませ。

縫之　ドレ。

　ト封を切り

「誠にこれまで加古川さま御夫婦、與五郎どのゝお世話は、海山にも譬へがたなく、有り難く存じ上げ參らせ候。縫之助さまがこの度の御難儀、元は私しより起りし事なれば、今更御見捨て申し候うては、女子の義理立ち申さず

候、それゆゑ道ならぬ事ながら共々覺悟極めまゐらせ候」
加古　ヤ、、そりや退き狀の文體ではない。してその後は
縫之　「せめて餘所ながら御暇乞ひと存じ、參り候ふところ、事を分けての御意見ゆゑ、是非に及ばず退き狀と僞り斯く認めまゐらせ候。何事も浮世の約束事と思し召しお許し下され候やう願ひ上げまゐらせ候」
加與　ヤ、、、。
縫之　日頃の心知りながら、疑つたは惡かつた。この縫之助こそ、大切なる家の寶を失ひ、何面目に存命でゐられう。この場に於て。
ト刀の柄に手をかける。
加古　ソレ、留めや。
與五　モシ、早まつた事なされますな。
ト與五郎、縫之助を留めろ。この時奥より浮橋出で來り、この體を見て思ひ入れあつて、與五郎が芋を剝いたる刀を取り
浮橋　わしも一緒に、南無阿彌陀佛。
縫之　ヤ、其方は浮橋、マア待ちや。
ト縫之助は浮橋を留め、刀を取つて見て
ヤ、、こりや正しく家の重寶、花筐の短刀。どうしてこれに。
與五　何と仰しやります。私しの刀が、花筐のお短刀とは
加古　お家の重寶所持する與五郎、さては其方が惡心にて
與五　ア、申し、滅相な。その刀は私しのがらくた丸、この間禪覺寺へお供の時、差して參つてそれからは、たつた今、芋を切るに拔いたばかり、毛頭私しは存じませぬ
縫之　さてはこの間禪覺寺にて、何者の僞にやら奪ひ取られしを、廻り〳〵てこの所へ來りしも、全く佛神の加護與五郎が存じた事ではない。皆わしが惡いゆゑの事、必らず與五郎を疑うてたもるなや。
加古　すりや、何者やら摺替へしを、與五郎も心付かず、持ち歸りしとや。それなれば、女子の淺い心から、疑うたはわしが惡かつな。堪忍しや〳〵。
與五　すりや、お疑ひは晴れましたか。有り難う存じまする。何は兎もあれお家の重寶、花筐のお短刀。
加古　これぞ花咲く前表ならん。
皆々　エ、、忝ない。
ト皆々嬉しきこなし。與五郎思ひ入れあつて
與五　お短刀の知れる上は、お二人さまには、もう死ぬには及びませぬ。

縫之　この上はこの重寶、某が持參なし
與浮　片時も早くお上へ言上。
加古　寶の在所知れたる上は、急くには及びませぬ。殊には夜分と申し、大切な品所持なし、お步行も如何。今宵は爰に御一宿、明けなばお上へ訴へ。
與五　鹽谷の家名御相續。
縫之　然らば今宵は、この所に一宿いたさん。それまでは大切なる品、加古川、しかと預け置くぞ。
加古　ハヽ、お家の重器、慥かに守護いたすでござりませう。
ト件の短刀を鞘に納めて思ひ入れ。
與五　イヤ、めでたい〳〵、今にお家は萬々歳。そのお喜び次手に、申し加古川さま。
ト兩人に思ひ入れ。加古川呑みこみ
加古　オヽ、それ〳〵、今宵は爰に御一宿、お二人さまは奥へござつて。
與五　積る話しを花嫁花聟、誰れに遠慮もござりませぬ。むさくろしくとも、奥へござつてしつぽりと。
二人　それぢやといふて。
ト恥かしき思ひ入れ。
加古　ハテ、御遠慮も事に依る。明日はお家へ歸參の門出
與五　町の住居も今宵が限り。
浮橋　そんなら殿樣。
縫之　造作にならうか。
加與　御ゆつくりと。
縫之　浮橋、來やれ。
ト縫之助浮橋こなしあつて奥へ入る。
加古　先づこれで一つの安堵。明日はわたしも夫にお目にかゝり、この短刀をお手渡し。其方もさぞ草臥れたであらう。早う休息しや。
與五　有り難うござります。あなたには御病中、夜風が浸みましては如何。その品を御大切に、ゆるりと御休息なされませ。
加古　さうしませうわいなう。
與五　ドレ、お手を取りませう。
ト加古川を障子屋體の內へ入れて、よろしく此方へ來り
さて〳〵、今夜は怪しからぬ晩だわえ。芋を煮れば邪魔が入つて焦げつく、寢ようとすれば邪魔が入り、今度はもう何事もあるまい。ドリヤ、一寢入りやらかしませう

か。

ト與五郎、押入れより天德寺と箱枕を出して寢る。時の鐘になり、向うより以前のおとら出て來り

とら　與五郎さんは寢てであらうが、ちよつと起して、さうぢや〳〵。

ト本舞臺へ來り

ハイ、お賴み申します〳〵。

ト門口を叩く與五郎思ひ入れあつて

與五　イヤ、怪しからぬ晩だわえ。また誰れか來たさうな誰れだ〳〵。

ト云ひながら起きて門口を明ける。

とら　ハイ、わたしでござります。雇ひ婆アのおとらでござんす。

與五　いま時分何しにござつた。

とら　お前の浴衣を洗濯しようと思つたら、袂から桐唐草の錦の守り袋。こりやお前のでござんせうな

ト懐より守を出す。

與五　成る程、これは、おれが子供の時から持つて居る、桐唐草の守り袋。

とら　この桐唐草の守り袋を、子供の時より持つてござるとあれば、そんならお前は、高野家の惣領御さま。

ト與五郎、思ひ入れあつて

與五　この婆アは寢ぼけたさうな。とんだ事を云はつしやる。

とら　成る程、御存じないは御尤も。お前は過ぎゆかれし師直さまの、お胤に相違ござりませぬ。

與五　この婆ア樣は、いよ〳〵寢ぼけて居るわえ。

とら　ハテ、證據はこの守袋。桐唐草の錦の裂れ、この織物は高野家より外にない錦。中には誕生の書付け、延慶元年四月四日誕生の男子とござります。數へて見れば今年までは三十二年、お前の年も三十二歳、年恰好といひ高頬の黒子まで、父御によう似たその面ざし、疑ひもなき高野の御惣領。

與五　成る程、お前の樣子を聞けば、割符の合つた今の話し。さりながら、どうしてこなたは、それをば詳しく。

とら　サア、もと私しは高野のお家に腰元奉公、その頃親御師直さま、手廻りの女にお手を付けられ、程なく懷妊奥方の御嫉妬強く、是非に及ばずお暇下され、月日重り、お前を產み落して、七夜の內に母御は御病死。わたしもその後お暇もらひ、年月送る其うちに、師直さまには

去年の騒動。お家も沒落。お前の爲には弟御の島五郎さまも、鹽谷の浪人斧九郎兵衞が爲に、御最期なされたとの事、血筋が絶えるのみならず、高野のお家の重寶紛失その品の無い時は、高野のお家は一生埋れ木。血筋といふはお前一人、その紛失の正筆を尋ね出して、高野のお家を引起す、御所存はござりませぬか。

與五　ハテ、それはとんだ話しがあるもの。例へおれが高野の胤にもせよ、その正筆とやらがあるにもせよ、古骨買ひの與五郎が、どうして其やうな事がなりませう。

とら　エ、腑甲斐ないそのお心、併しそれも尤も。この間から見て居れば、現在親御の仇敵、鹽谷の家來の定九郎が女房、加古川とやらを隱まひ、忠義を盡すは第一に親御へ不孝でござりませう。お前樣も、武士の胤ではござりませぬか。口惜しくはござりませぬか。コレサ、物を云はつしやりませ／＼。人にばかり口を利かせ、エエ、張合ひのない與五郎さん。去年までは出頭第一、師直さまのお胤でありながら、これ程云つても無念には思し召さぬか。併し、以前は武士の胤でも今では貧しい町人の暮し、氏より育ちとはいふものゝ、サア、此やうに申しまするも、お前を思ふゆゑの事。どうぞ心を取り直し、高野のお家を引起す、お心はござりませぬか。

ト云つても與五郎、默つてゐるゆゑ

エ、、これ程云つて聞かせても、物をも云はぬ腰抜け男この上は、わしが爲にも古主の仇、奥の病人は鹽谷の家來、斧定九郎が女房。あの加古川とやらも敵の身寄り、早う追ひ出すのが、親御へ孝行ではござりませぬか。

與五　成る程、こなたの話しを聞いては、尤ものやうではござるが。

とら　追ひ出す外ござりませぬが、出來ませぬか。

與五　勿體ない、どうしてマア大事のお主樣を。

とら　その大事のお主樣が氣にくはぬ。お前さんがその心では、よう追ひ出すまい。わしが行つて、あの女中を

ト立ちかゝるを、與五郎留めて

與五　コレ、待たつしやい。わしを其やうに思うて下さる事なら

とら　敵の身寄りを叩き出し、菅家の正筆手に入れて、親御の家名を引起す、御所存でござりますか。

與五　サア、マア、どうなりとしませうが、その時こなたも共々に、ナ……コレ

トおとらに囁く。

とら　オヽ、承知ぢや〳〵。其お心なら、草葉の蔭にござる師直さまも、さぞお喜び。そんなら何かは今宵の内に
與五　吉左右知らせるそれまでに、わしが身許の割れぬやうに。
とら　それも承知、古骨買ひの與五郎と、上べを包む寶の詮議。
與五　そんならおとら。
とら　必らず和子樣。
與五　コレ。
　ト押へる。おとら氣を變へ
ませ　與五郎さん、明日お目にかゝりませう。
　ト時の鐘にて、おとら向うへ入る。與五郎跡見送り
與五　あの婆アめ、明いた儘の出放題に、いろ〳〵な事を吐かし居るゆゑ、騙しては歸したが、又うしやアがらねばよいが。これからもう一遍寢直さうか。ほんに忘れて居た。その前に旦那さまへお藥を上げませう。
　ト與五郎、思ひ入れあつて門口を締め、上手の一間を明け、件の短刀へ手をかけるを、この時加古川その手をヂツと取る。與五郎ギヨツと思ひ入れある。
加古　何者ぢや〳〵。この短刀を何と致す。
與五　サ。これは。
　ト詰まる。加古川薄明りゆゑ、思ひ入れあつて、よくよく見て
加古　ヤア、その聲は與五郎ぢやないか。
　ト云ひながら短刀を持つた儘、ツカ〳〵と出て
コレ與五郎、わが身はこの短刀を何としやるのぢや。
與五　サ、これはな。
　トもぢ〳〵する。
加古　アヽ聞えた。今までそれとは知らざれども、最前誠の短刀と、聞いて朝夕の活計に迫り、こりや慾心が兆したのぢやな。
與五　サ、それは。
加古　チエヽ、おのれはな。幼ない時より舅御の、九郎兵衞さまのお屋敷にて、人となつたる下部の與五郎。そのお主の難儀となるべき、寶に目をかけるとは、恩を知らぬ人非人めが。
　トこれにて與五郎思ひ入れあつて
與五　成る程、その思し召しは御尤もではござりまするが貧乏すれば、現在のお主樣にも、其やうに思はれるが、口惜しうござりますわいの。

加古　でも、この品に心をかけるではないか。

與五　サア、御料簡違ひでござります。それも物の間違ひとは又なぜに。

加古　とは又なぜに。

與五　サア、その短刀がお手に入りましても、柔弱の縫之助さま、いつぞや禪覺寺にて、浮橋さまと戯むれのうち、佞人の者に摺替へられた程の御氣性。又ぞろ大切な品、遲疇があつては如何と存じ、今宵密かに定九郎さまへ、お手渡し致さうとした、我が存念でござります。

加古　成る程、お身持墮落の縫之助さま、迂濶にお手渡し致せぬ一腰。それは格別、そんなら其方は定九郎さまのお在所を存じて居るか。

與五　サア、若旦那のお出でなさるゝ所を

加古　存じて居るなら、なぜわたしにも知らせ、同道しては行きやらぬぞいの。

與五　其やうに仰しやるのは御尤もなれど、あなたとお別れなされし後は、お家の騒動、それゆゑにこそ若旦那には、御大望の事あつて、多くの手下を語らひ、富家を見込んで切取り强盜、以前に變る只今の御身の上。

加古　ヤヽ、すりや夫には切取り强盜とは。ハテ、思ひがけない。ホイ

ト加古川思ひ入れ。

與五　サヽ、あなたがお聞きなされたら、この通り御病氣中と申し、張詰めたお心も弱らうかと、それゆゑ只今まで、あなた樣へは御沙汰なく、この短刀を持つて行かうと致しましたわたしが誤り。爰の道理をお聞濟みあつてお免しなされて下さりませ。

加古　成る程、其やうに云やれば、尤ものやうにはあれど、その申し譯はまだ立たぬ。

與五　そりや又なぜでござりまする。

加古　ハテ、仔細あつて別れてござる、夫定九郎どの。わしも久しうお目にかゝらぬゆゑ、戀しう思うて居る夫の在所を、わしに云つて聞かさぬは、其方の不深切といふもの。それぢやに依つて、この申し譯は。

與五　立たぬと仰しやれば是非に及びませぬ。併し殘念なは、今まで盡した忠義も水の泡。この上は下郎が腹わた、忠か不忠かお目に掛けませう。南無阿彌陀佛。

ト短刀の鞘を拔き拂ひ、腹切らんとする手を留め

加古　コレ、滅多な事をしまいぞ。

與五　イヽヤ、下郎がどん腹を

加古　ハテマア、待ちやいなう。

與五　すりや、お疑ひは晴れましたか。
加古　如何にも。その心なら我が夫の、お出でなされし所を云うて聞かしや。
與五　あなたがお案じなさるゝと察し、今までは申し上げませぬ。困難にお暮らし遊ばず若旦那、今は葛飾のあたり、密かにお暮らしでござりまする。
加古　嬉しや、それ聞いて一つの安堵。この上は、短刀手に入るこそ幸ひ、この品を持参いたし、鹽谷の家名引起し、夫の忠義立てるが肝要。今より直さま隠れ家へ。サヽ、與五郎、供しや。
與五　御貞節なるあなた様、その思し召しは御尤もなれども、未だ御病中と申し、殊に夜風が身に障りましては
加古　又ぞろ障りのなきうちに、夫に逢うて慥かに手渡し
與五　さほどに思し召すなら、今宵のうちに縫之助さまのお供いたしては如何でござります。
加古　イヤ／＼、最前其方が云やつた通り、色に耽り、柔弱の縫之助さま、折角手に入つた品、迂闊には渡されぬ。併し短刀手に入れし事を、片時も早うお知らせ申し、あなたにもお喜ばせ申したいもの。大儀ながら其方、今から定九郎どのへこの事を、お知らせ申して来てたも。

與五　左様なれば、若旦那様へこの事を。
加古　大儀ながら。
　ト此うち與五郎、ウヂ／＼して
與五　左様なら一走り行つて參じます。モシ、奥のお二人様、あなたにも、お風を召されぬやうになされませ。
加古　その事は必らず案じやるな。
與五　モシ、藥はあれに煎じてござります……左様なら、留守をお頼み申します。
加古　オヽ、合點ぢや。そんなら與五郎、大儀ながら。
與五　モシ、大切な品もござりますれば、戸締りをよくお心付けて。
　ト云ひ／＼門口へ出る。
加古　夜更けぬうちに。
與五　ドリヤ、行つて參じませうか。
　ト時の鐘になり、與五郎、花道よき所まで行き、思ひ入れあつて取つて返し、下の方へさし足して入る。合ひ方になり、加古川、思ひ入れあつて
加古　見かけによらぬ與五郎が深切、天も憐れみたまひてや、思はず手に入るこの一品。一旦お家は御改易、その以前六年跡、この身が桃の井家に腰元奉公するうち、夫

定九郎どのと忍び合ひ、二人が仲に芳松といふ子まで儲け、如何にわしが辰の年月揃ひとして、その子の芳松が辰の年月揃ひしも、不思議の一つ。それより二人が家出なし、その後鹽谷の家沒落。殿の御無念を散ぜんと、大星どの始め家中の人々は、亡君の仇討なし、その節夫は家出ゆゑ、一味徒黨に洩れたるを、不義士との世の嘲り、恥辱を雪がん其ために、縫之助さまを以て、お家相續を願ふと雖も、御次男さまには柔弱の御身の上。この品お手渡し致したけれども、又ぞろ遲疇あつてはお家の名折れ。どうぞ夫にこの品をお渡し申し、忠義の道を立てさせたいものぢやなア。

ト思ひ入れ。時の鐘になり、路地口より紺看板らしき物を着たる一本差しの若い者、弓張り提灯を持ち出て來り、花道まで行き、足音高く取つて返し、門口へ來て

若者　お賴み申します〳〵。

ト戸を叩く。

加古　ハイ〳〵、どなた樣でござります。此方へお入りなされませ。

若者　左樣なら御免下さりませ。

ト內へ入る。加古川見て

加古　何れからのお使ひでござります。

若者　私しは大星大三郎方より、使ひの者てござります。こなたに縫之助さま、浮橋どのござるとの事。主人申しますは、夜中ながら密かに申し談じたき事ござりますゆゑ、お二人さまもろとも、お出で下さりますやう、申しつけましてござります。

加古　これは〳〵、夜中に御苦勞に存じます。御家老の御子息樣が、何か密々とは氣遣はしい。……モシ、縫之助さま、浮橋どの。

ト呼ぶ。奧にて

縫之　オイ〳〵、今そこへ。浮橋も一緒に。

ト合ひ方にて、縫之助浮橋出で來り

浮橋　これは〳〵加古川さま、御病氣中と申し、まだこれにお出でなされまするか。

縫之　して、身共に用といふは。

加古　別儀でもござりませぬが、只今火急に大三郎どのより、あなた方お二人に密々の用事がござりまして。

縫之　そりや大方縫之助に、家相續いたせよと、御內意あつたゆゑ、その事であらう。

浮橋　殊には紛失の品も手に入り、此やうな喜ばしい事は
　ございませぬ。
縫之　そんなら、ちつとも早く大三郎方へ。
浮橋　見ますれば、與五郎どのが居りませぬが、どちらへ
　か參じましたかえ。
加古　只今短刀の手に入りし事を、夫定九郎方へ。
縫之　知らせに參つたか。それもよし〱。サヽ、浮橋。
　おぢや。
浮橋　左樣ではございますが、御病中の加古川さま、只お
　一人置きましては。
加古　お案じ下さりますは、有り難う存じますが、今晩は
　大分心ようござります。私しよりは浮橋さま、あなたは
　御胤を宿せし大事の御身、心を付けてお出でなされませ
浮橋　有り難う存じまする。左樣なら縫之助さま。
縫之　然らば短刀は其方に。
加古　お氣遣ひ遊ばしまするな。明朝まで私しが
縫之　そんなら加古川
浮橋　お大事になされませ。
　ト若者先に兩人付いて向うへ入ろ。加古川跡を見送り
　思ひ入れあつて

加古　隨分道を氣をつけて……嬉しや〱。お家の跡目、
　大三郎どのまで御內意の上は、御運の開くは今のうち。
　お家相續あらば、夫の念願も叶ふといふもの。嬉しや嬉
　しや。餘り嬉しい事の重なりしやら、どうか癪へが
　トよき所へ住ひ、癪の痛む思ひ入れ。この時バツタリ
　音して、下家より出刃庖丁を突き出し、加古川を貫く
　これにて加古川「アツ」と苦しむ。時の鐘、凄き合ひ方
　になり、疊を刎ね上げ、下家より與五郎、以前の形に
　て、出刃を持ち出る。加古川苦しみながら見て
　ヤヽ、其方は與五郎。
　ト立上がるを又一刀切り下げ、加古川が持つたる短刀
　へ手を掛ける。加古川やるまいと、ちよつと立廻つて
　與五郎に縋り付く。
　チエヽ、茲な人でなしめが。かよわい女を騙し打とは卑
　怯な奴。最前といひ、今といひ、こりや慾に迷うたのぢ
　やなア。
與五　如何にもこなたの推量の通り、今まで盡せし忠義の
　道も、乳母が話しに我が素性、明かして見ればこの與五
　郎は、師直公の落胤と、聞いたる時は五體の惱亂、知ら
　ぬ事とて今日までも、現在敵に膝を屈し、月日を送つた

無念さゆゑ、縫之助浮橋めも、おびき出して途中にて、殺らしてしまふ手つがひして、寶を隱せば鹽谷は埋れ木、其うち菅家の正筆手に入れて、父の家名はおれが相續するのだワ。何は兎もあれ、あの品渡せ。

加古　すりや其方は高野の血筋とや。思ひがけないその素性。この事夫に知らせたい。おなつかしいは我が夫。死する今際に芳松が顏、一目見たい。夫子に名殘が、惜しいわいなう〳〵。

與五　もがくワ〳〵。それ程二人に逢ひたくば、未來で逢はしてやる程に、おとぼね立てずと、くたばり居らう。

加古　主人に刃向ふ極重惡人。例へこの身はひしほになるとても、この短刀はお上へ差上げ、鹽谷の家を引起す、夫の忠義には換へられぬ。

與五　役にも立たぬ忠義呼はり。その繰り言は未來で吐かせ。

加古　ヤア、いはれざるその一言。人に報いがあるものか、無いものか。おのれ此まゝ安穩で置くべきや。

　トきつとなり、思ひ入れ。

與五　こま言いはずと、くたばつてしまへ。

加古　何をおのれが

　ト立廻りあつて、加古川を切り倒す。この時薄ドロドロになり、陰火燃え出る。與五郎見て

與五　さては加古川、迷うたな。

加古　例へ此まゝ殺されても

與五　オヽ、勝手に恨みを

　ト古古川に止めを刺し、こなしあつて

病みほうけても流石は加古川、なか〳〵手強い奴だ……併し死骸は、此まゝ置いては事の破れ。ハテ、どうしたものだ……よし〳〵、何ぞにくるんで宮戸川へ。

　ト件の短刀を腰に差し、有り合ふ蒲團へ加古川の死骸をくるんで居る。此うち向うより以前の杢右衛門、小錢を三貫、袋に入れ肩に載せ、氷砂糖の袋入りを持ち出で來り、門口へ來て

杢右　與五郎どの、寐さしやりましたか〳〵。

　ト戸を叩く。これにて與五郎うろたへ、蒲團にくるみし死骸に枕をさせ、二枚折りの屛風を立て廻し、加古川の寢て居る體に見せ、自分も天德寺を引かけ、寢て居たる思ひ入れにて、現のやうに

與五　出たのがない、通らつしやい〳〵。

杢右　コレサ〳〵、物貰ひではない。家主の杢右衛門でご

ざる。明けて下さい〳〵。
與五　ナニ家主だ。そいつは大變〳〵。
ト思ひ入れあつて
杢右　モシ、大家さん、印形なら明日にして下さりませ。
與五　ナニいゝ話しだ。そいつは耳より。サア、此方へお入りなされませ。
ト門口を明ける。杢右衞門內へ入る。與五郎見て
モシ、よい話しとは何でございます。
杢右　外の事でもない、こなたが貧窮の中で、お主へ忠義を盡す事を、地主へ話したら、それは奇特な事とあつて、錢三貫文を下された。有り難く頂戴さつしやれ。
與五　それは有り難うございます。御病人に申し聞かせましたら、嘸お喜びでございませう。
杢右　この氷砂糖はわしが志し。御病人に進ぜて下さい。
與五　何から何まで、有り難う存じまする。
杢右　時に病人はどうでござるな。
與五　たつた今コロリと……イヤサ、コロリとゆきさうなところでございましたが、大分ようございまする。
杢右　それは重疊々々。早くこの事を話して喜ばして下さい。
與五　ハイ〳〵、畏りました。
ト件の品を枕頭へ持ち行き、加古川と話しをするやうにて
モシ、加古川さま、只今お家主さまが見えられまして、あなたの御病氣御介抱申し上げた事を、地主樣へお話し申したら、わしが忠義を御感心なされ、御褒美のお救ひ錢と、三貫文下されました……ヘイ〳〵、成る程〳〵、左樣でございまする……ヘイ〳〵、左樣でございます。イヤモウ、世間に人鬼はないと、よく云つたものでござりまする……成る程〳〵。ヘイ〳〵。畏まりました。
ト加古川と話しするやうに捨ぜりふよろしくあつて、また此方へ來て
只今の事を申しましたら、御病人も殊の外喜び、お前樣へよろしくと申しました。
杢右　それでも、こなたと話しが出來るやうで、大きにようござる。
與五　ハイ、今晩なぞは、大分よろしうございます。
杢右　ドレ、ちよつと御病人に、わしも逢うて歸りませう
ト立ち上がる。與五郎悔りして

與五　ア、モシ、病人の見舞ひに行くとは、怪しからぬ事を。
杢右　見舞ひに行つては惡うござるか。
與五　惡い段ではござりませぬ。
杢右　そりや又なぜでござる。
與五　サア、それは……オヽ、それ〳〵、病人に家主は大碌でござりまする。
杢右　何を云はつしやる。ドレ、ちよつと病人に
與五　ア、申し、それはどうでも
杢右　ハテ、わしが志しを話して行きませう。
トさゝへる與五郎を押へのけ、屛風を明け、加古川の死骸を見て
イヤア、病人が切られて居る〳〵。
トぶる〳〵しながら
コレ與五郎どの、あの病人を何者が
ト思ひ入れ。與五郎、出刃庖丁をヒラリと見せて
與五　默つて居ろ。
トぢつと思ひ入れ。杢右衛門ブル〳〵して居る。與五郎我が形を見て、杢右衛門に物着を脱げといふ思ひ入れ。これにて逃げようとするを引ツ捕へ、衣類を剝ぎ取り、その着物を着て、逃げにかゝる杢右衛門に猿轡をかけ、三尺帯にて後ろ手に縛り、暖簾口へポンと蹴込む。短刀は腰に差し、今の錢を懐へ入れ、蒲團にくるみし死骸を見て
ちつとも早くこの死骸。
ト九ツの拍子木、時の鐘に成り、與五郎、件の死骸を抱き起す。此うち向うより權兵衛、町人形、一本差しにて、千住宿と記したる火の消えし小提灯を持ち出て來り
權兵　今打つのは九ツだな。提灯を消したら、犬が吠えてならぬ。どうぞ火を一つ借りたいものだが……向うに燈が見える。あれへ便つて
ト本舞臺へ來り
モシ、提灯が消えて難儀いたします。火を一つ貸して下さりませ。
ト與五郎この聲を聞き、行燈を吹き消す。忍び三重になり、權兵衛思ひ入れあつて門口を明け、内を見て
ヤア、今まであつた燈が消えたは。
ト合點のゆかぬ思ひ入れにて
モシ、お頼み申します〳〵。

ト内へ入り、暗き思ひ入れ。與五郎、死骸を抱へ、門口へ出ようとして、思はず兩人行き當る。權兵衞何心なく死骸に手をかけ、生血したゝりしといふ心にて、恟りして透し見て、取らうとする。與五郎振り切つて死骸を抱へしまゝ門口へ出かける。此うち與五郎、以前の守り袋を落す。權兵衞、跡へタヂ〳〵とする時、守り袋手にさはるゆゑ、取上げ透かし見て

今のは慥か

ト思ひ入れ。與五郎この聲を聞いて、外より門口をピツシヤリ〆める。木の頭。與五郎死骸を擔ぎあげる。權兵衞、守り袋へ思ひ入れ。兩人ともこの仕組みよろしくキザミにて、

ひやうし幕

五　段　目

隅田川花屋鋪の段

役名――石切り、佛權兵衞。箱持ち、佐助實ハ鹽谷縫之助。北村傳次。一力升屋の勘九郎。花屋鋪の菊塢。口入れ、上野屋五郎三。致信寺の雲哲實ハ百姓與一兵衞。中間、角助。藝者、お京 實ハ腰元浮橋。女達、金笄のおかる。越後獅子、飾間の宅兵衞。獅子舞ひ、粂松。同、鶴松。定九郎一子、芳松。

本舞臺、三間の間、眞中九尺の亭屋體。この柱に御茶と書いたる掛け行燈、左右萩の植込み、四ツ目垣上下ともに秋の七草の盛り。上の方枝折り門、すべて隅田川花屋鋪正寫しの飾りつけ、よき所に床几二脚並べ、爰に菊塢、坊主にて道行振を着たる形、馬盥に花を活けて居る。下女のお露、茶をはこび、勘九郎、吉原女郎屋の亭主の形。内藝者のお民、お鐵供の若い衆喜助、皆々床几へかゝり居る。粂松、鶴松、外に子役の芳松、角兵衞獅子にて舞つて居る。宅兵衞、親仁の形、太鼓打つてゐる。角兵衞獅子の鳴り物、流行り唄を冠せ、よろしく賑やかに幕明く

ト粂松等よろしく曲をする。芳松、只ウロ〳〵する。

粂松　コレ〳〵、この餓鬼は、おらにばかり曲をさせて、なぜマゴ〳〵して居るのだ。

宅兵　其やうに叱らずとも、まだ馴れぬ事ゆゑ、よう致へてやるがよいわいの。

鶴松　全體貴様の太鼓の打やうが惡い。斯ういふ拍子に叩きなせえ。

ト太鼓を取り、こなしあつて

これは野中の一本杉、ムツ〳〵しやんと突ッ立つた。御方便だナハレヤ……と云ふ振りで叩かにやア、曲が出來るものか……コレ〳〵、この拍子の時は、斯う逆立ちをして

トして見せる。芳松出來ぬゆゑ、ウロ〳〵する。

エヽ、不器用な餓鬼だ。斯う逆さになるのだ。

ト芳松を捕へ、逆さにするとて抛り出す。宅兵衛あわてゝ

宅兵　コレ〳〵、滅相な。大事の預かり物、この子を、其やうにむがうせずと、敎へたがよいわいの。

粂松　口で敎へても、覺えないゆゑ折檻するのだ。こなたもよくこの餓鬼を庇ふが、そんな生ぬるい事でいけるのか。馬鹿な親仁だ。

ト宅兵衛ムッとして

宅兵　まだ馴れぬ事ゆゑ、不器用は知れた事ぢや。馬鹿な親仁と云はいでもの事ぢや。

粂松　云つたらどうする。

ト立ちかゝる。菊塢、喜助とめて

菊塢　コレ〳〵、どうしたものだ。旦那方の前で獅子と親仁の、喧嘩をするといふ事があるものか。靜かにさつしやい〳〵。

粂松　イエ、しやすめえ。なぜ親仁と獅子と喧嘩をしねえものかえ。とんだ馬鹿な坊主だ。

菊塢　なんだ坊主だ……坊主丸儲けといふ事がある。こいつは餘ッぽど緣起がいゝわえ。

喜助　成る程、お前も餘ッぽど慾張り團扇だ。

粂松　うちわでも外輪でも、留めやうが氣にくはねえ。

菊塢　これサ、そんなに強情云はずと、おれに免じて、坊主料簡して下さい、和尙だから。

喜助　ひどい所で洒落るの。

粂松　否だ〳〵。合點しねえ〳〵。

トまた宅兵衛にくつてかゝる。流行り唄になり、向うより北村傳次、羽織袴大小、角內、中間の形、五郎三袴羽織、人足の口入れの拵らへ。佛權兵衛、羽織袴、石屋の亭主にて出る。跡より雲哲、木綿頭巾、麻の衣同心者の拵らへにて、播州加古川敎信寺石塔建立と書きし幟、外箱を脊負ひ出て來る。權兵衛、花道より先

へ駈け拔け、この喧嘩の中へ入り

權兵　コレ〱、年寄と子供を捕へて、どういふ間違ひか知らぬが、料簡さつしやい〱。

鶴松　モシ〱旦那、お前さん方の知つた事ぢやアござりやせん。打ッちやつて置いて下さい〱。

權兵　サア、知らぬは當り前だが、爰にお屋敷の旦那もござるものだ。譯は知らねど、わしがちよつと挨拶だ。

ト懐より一分出して

これで酒でも飲んで濟ますがよいわサ。

宅兵　モシ〱、それではわしが、お氣の毒でござります

權兵　ハテ、大事ござらぬ〱……サア、野暮を云はずと濟ました〱。

粂松　こんな事をしなすつちやアお氣の毒だが、折角の御挨拶だから、料簡いたしやせう。

ト一分を取る。

菊塢　イヤア「角兵衛獅子一分貰つて目を廻し」と言ふ前句があるが、目も廻さずに金百疋。

喜助　お前、羨やましからうな。

菊塢　馬鹿を云はつしやい。

五郎　モシ、權兵衛さん、とんだ所で自腹を切つたね。

權兵　そこが異名の佛權兵衛、どうも見ても居られませぬ……コレ、若い衆、隨分年寄りと子供だ、いたはつてやらつしやいよ。

粂松　ハイ〱、そんなら父さん、また先へ行きやせう。

宅兵　こりやアあなた、有り難うござりまする。どなたもおやかましうござりました。

ト宅兵衛、粂松、鶴松、芳松附いて入る。

菊塢　餘ッぽど根生の惡い男だな。

つゆ　ほんに憎てらしい人ぢやわいな。モシ、どなたもこれへお掛けなされませ。

ト茶を汲んで出す。傳次初め皆々床几へかける。

勘九　あなたは山名の御家中　北村傳次さまではござりませぬか。

傳次　これは一力升屋の亭主勘九郎、大分派手やかな。

勘九　今日は内の藝者を連れまして、七草見物に參りました。上野屋の親方と、石屋の權兵衛さんもお供かえ。

五郎　ハイ、今日は權兵衛さんのお招きで、旦那方のもてなし、お取持ちに參りました。

角内　お供に參りました私しも、誠に腹いつぱい。併し、殘念なは、屋根船へ玉子燒を殘して參りました。

五郎　意地の穢ない事を云ふ男だ。
勘九　穢ないと云へば、跡から參つた坊主は、何でござりまする。
雲哲　ハイ〳〵、わしは播州教信寺の所化。當國へは始めての旅僧。石塔の建立でござりまする。御合力をお願ひ申しまする。
菊塢　なんだ、石塔の建立だ……本堂の建立は聞いたが
角内　石塔の建立とは、こいつは珍らしい。
權兵　加古川の教信寺は、鹽谷の菩提所。それに石塔建立とは、ハテ變つた
雲哲　イヤ、これには段々譯のござりまする事
勘九　兎も角も、旦那方の前で穢ならしい。奉加にも附いてやらう程に、マア、奥庭の方へ廻つて來さつし。
雲哲　ハイ〳〵、有り難うござります。左様なら後程お頼み申します。
勘九　もう付込みか。早く行け〳〵。
雲哲　ドリヤ、御近所を修行して來ようか。
ト雲哲下手へ入る。
五郎　時に吉原の親方、俄はどうでござりますね。
勘九　イヤモ、相變らず賑やかでござります……それはさうと、モシ旦那、今日の御趣向は、マア、どういふものでござりまする。
傳次　此やうに毎日遊山に出るも、一つには殿御病氣と云ひしは僞り、誠は
ト少し小聲になり
お屋舗へ夜盗込入り、その夜に敢へなく殿は闇討。高野家へ御養子の、島五郎さまも打たれし上、菅家の一軸その時紛失。それゆゑにこそ跡目なければ、先づ高野家は滅亡。然れども先年師直公、奥女中にお手をつけられ、懐妊してお暇出でたる者ある由、跡にて聞けば御男子誕生、これは全く高野の血筋、その女は産後に病死と聞く。身は當殿よりのお指圖にて、高野の血筋たるその御男子を尋ねる爲、且は一軸詮議せんと、今日は上野、明日は木母寺、毎日々々遊山はしながら、甚だ心を痛め居るて。
五郎　それゆゑに、人入れの私しも、共々御詮議いたしませうと、お供を致して歩きまする。
權兵　先年師直さまへお出入りの石屋、佛一體彫みあげましたが、殊の外お氣に入り、直さま異名を佛權兵衞、御恩を請けたる高野のお石碑、その御用をば私しへ、仰せつけられ下さるやう、山名さまの御家中、北村傳次さま、

あなたを只管お願ひ申します。

勘九　ハヽア、それで今日のお振舞ひか。併し旦那、外の詮議と違ひ、此やうに遊びながらのお役目は、兼帯で御遊山をなされますやうなものでござります。

權兵　わしは八百善の仕出しを申し付け置きましたが、まだ埒が明きませぬが、人を走らせまする。モシ、先生、お杯の支度をお頼み申します。

菊塢　承知いたしました。まづ其うちに、櫻の湯でも召上がり、十草をば御覧下さりませう。

　ト杯の用意をする。

權兵　わしは、ちよつと云ひつけて參りまする。御免下さりませう。

　ト權兵衛、下手へ入る。

傳次　コレ、五郎三、町人どもが取持ちにて、藝者が參ると申したが、あの者か。

五郎　イエ／＼、あれは升屋の內藝者でござりまする。

角內　ナニ間違ひがある。何が間違ひだえ／＼。

喜助　お供さん、お前も交ぜツ返しな。間違ひぢやねえ、江戸藝者の事だよ。

角內　井戸替へをするのかえ。

勘九　ハヽヽヽ。こいつは困りものだ。

　ト流行り唄になり、向うより浮橋、藝者の拵らへ、縫之助、箱廻しの形にて、風呂敷に包みし三味線箱を持ち、跡よりお絹、花屋舗の下女にて、案內して出で來り

縫之　モシ、今日から初出の新子でござりまする。よろしく御贔屓お願ひ申しまする。

きぬ　なんのマア、御挨拶わいなア。お客は私しどもへ、お出でなされてゞござりまする。ちつとも早う

浮橋　モシ、よろしうお頼み申しまする。

きぬ　サア、お出でなされませ。

　ト三人、本舞臺へ來て

やう／＼只今參りました。

浮橋　どなたも御免なされませ。

傳次　イヤア、ソリヤ、藝者が來たぞ／＼。

勘九　成る程、傳次さまのお連れなされた町藝者は、格別妙々。

傳次　コリヤ／＼、箱持ちの男は、勝手へ參つて、休息いたせ／＼。

縫之　ハイ／＼、畏まりました。

ト三味線箱をそこへ出し、奥へ行かうとする。浮橋思ひ入れ。

浮橋　アヽモシ、お前は爰に居て下さんせ。

勘九　これはどうしたものだ。お客の座敷に箱持ちが居ては見苦しい。勝手へ行かつしやい。

傳次　それ〳〵、第一遊びの邪魔だ。早く勝手へ行つて、休息いたせ〳〵。

トこの時縫之助、顏見合せ

縫之　ヤ、其方は。

傳次　あなたは鹽谷の御次男、縫之助さま。ハア、變つた形で

縫之　面目次第もござらぬ。

勘九　ハヽア、そんなら鹽谷さまの御次男が、町藝者の箱持ち、とんだ世の中だ。それから見ればこちとらは旦那株だ。なんぼ以前は大名の子でも、今は藝者の箱廻しだ。カウ、一つ飲まつしやい。

ト杯をさす。

縫之　イヤモウ、何を云ふも時世時節、この身になつては八方旦那、左樣なら一つ下さりませう。

傳次　成る程、以前は兎も角も、今は藝者の箱廻し、近附きの爲、持ち合せたこの杯。

ト投げてやる。縫之助、ムッとして氣を取り直し

縫之　ハイ、有り難うござりますが、わしは一向に

勘九　杯が小さくば、爰に好い物が

ト花活の馬盥を出し

これで一つ飲まつしやい。

縫之　ヤ……アノこれで

傳次　以前は大名、鹽谷の御次男、女狂ひの世に落ちて、女犬の跡に付きまとふ、小胸の惡い畜生侍ひ。この馬盥が相應だ。

縫之　如何に時世といひながら、滿座の中でこの惡口。この身の不幸を侮つて、厄病神で敵とは、武士に似合はぬ卑怯な心體。

勘九　藝者の箱持ち、男もよければ、女も綺麗な、あぢな目付も仕なしぶりも、來ると其まヽ睨んだ色事。

浮橋　アヽモシ、どうしてわたしと主に限つて

傳次　うぬが廻しのその男を、主と吐かすが矢ツ張り戀路

角内　その色男にあやかる爲

喜助　その馬盥をグッと干し

兩人　後はおいらが相伴しようワ。

縫之　こりや又あんまりな。
　ト無念のこなし。
浮橋　アヽコレ、爰でお客の御機嫌を、そこねぬうちに、酒は飲まずと、この場を早う。
菊塢　逃げるが勝だ〳〵。
　ト目で知らせる。
傳次　イヽヤ逃がさぬ。但し、おれがさした杯が穢ないといふのか。
角内　お旦那の杯を嫌つた箱持ち。
喜助　イケ生しらけたこの野郎め。
兩人　飲まにやア、おいらが腕づくで、
　ト縫之助にかゝる。よろしく立廻つて兩人を投げのける。
傳次　身共が家來を手籠めにした、憎くい箱持ち。
勘九　うぬはおれが、
　ト立ちかゝる。浮橋これを留める。女形皆々傳次を留めて
きぬ　今日初出の此お方、麁相があらば、わたしどもがお詫ごと。
女皆　お前は少つとも早う、この場をば

縫之　成る程、何を云ふにも堪忍が第一。
角内　うぬ、よくおれを
　ト又かゝるを突きのけ、縫之助向うへ走り入る。
勘九　相手の野郎を追ツ駈けろ。
喜角　うぬ、待ちやアがれ。
　ト兩人同じく追ツ駈けて揚幕へ入る。直ぐに向うより角内引返し出て、花道よき所にて見事に返る。摺り鉦入り、出の唄になり、おかる、派手なる衣裳、女達、好みの形、尺八を差し、帶の結び目へ錠を卸ろした誂らへの拵らへ。喜助の手を捻ぢあげ、醉ひたるこなしにて、よろしく出で來る。跡より縫之助付いて出で、角内また起上がつてかゝる。立廻つて、しやんととまる。
喜角　アイタヽヽヽ。こりやア女め、どうするのだ。
かる　ハテ、どうと云ふのは三味線に、付添ふ廻しの絲よりも、細いお方を皆寄つて、引いて見ようと思ふのは、ほんにいらざる左平次と、醉つて云ふのぢやなけれども主は浮世を忍び駒、そこへ付込む野呂馬さん、撥のあたりがちよつとなと、さわりと聞けば忽ちに、破れかぶれの猫の皮、にやんと皆さん、そんなものではないかいな

ア。
　トよろしく思ひ入れ。
角内　三味線盡しの達引なら
喜助　われから先へ引〆めてくれう。
かる　醉つてよろつく足許に、丁度氣轉な杖柱、さらば一緒に行かうわいなア。
　トこれにて皆々舞臺へ來る。
つゆ　おかるさん、よい所へ
女皆　ようござんしたなア。
傳次　身共が家來へ無禮の女め。
勘九　わりやア一體何といふ
かる　名を問はれては恥ながら、男嫌ひとこの帶の、結び目ピンと錠前の、看板打つた金簪の、名はかると云ひやんす。
勘九　そんなら噂の女達
傳次　其かるならば猶の事、なんで身共が家來をば
かる　何にも樣子は知らねども、わたしが世話して藝者に仕込んだこの子の事。それに付き添ふ廻しの男、今日が初出の町藝者、何が遺恨で出面早々、お前方は苛めなさんす。
勘九　お客がさしたこの杯、飲まぬと吐かした野郎ゆゑ。
かる　そりやこの器で飲まぬゆゑ、若い男を手籠めにするこりや尤もと云ひたいが、ちつと無理でござんせう。ハテ、下戸なら飲むまいと云ふぢやござんせぬか。あの人の名代に、わたしが飲めばお前方の心も濟むでござんせう。なんの造作もない事を。
　ト右の馬盥に一ぱいつぎ、飲まうとする。
浮橋　ア、コレ、其やうに酒を過しては
縫之　跡でどのやうな事を引出さうやら
　ト留める。おかる、その手を拂ひ
かる　ハテ、大事ござんせぬ。なんのこれに一つや二つ、醉ふやうなわたしぢやござんせぬ。
　トぐつと飲み干して
サア、これで杯の名代は、サラリと濟んだ。まだこの外に、何ぞ云ひ分あるならば、何なと云ひなさんせいなア
傳次　イヤ、云ひ分は外にはないが、あの野郎が名代ならば、女のわれをちよつと相手に
　ト傳次、おかるにかゝるを
かる　こりや面白いお侍ひさん、男の代りに女のわしを、

名乘つて取つたこの腕を、ヂッとしても居られますまい
お望みならば、ちつとはお手が
ト傳次も捻上げ、投げのけて
サア、女に投げられ、お腹が立つなら、サア、切らしやんせ〳〵。
ト舞臺へ横に寢る。勘九郎呆れて
勘九　コレ、おかる、相手は侍ひ。なんぼわれが女でも、麁相があらば身の上だぞ。
かる　身の上合點、出入りはわたしが引受けた。その代りにはこの二人、わたしが預かる。サア、二人とも、愛構はずとも、ちつとも早う
浮橋　それぢやというて此まゝに
縫之　其やうに酒に醉うては危ないもの。
かる　ハテ、酒に醉つたら千人力の、マア、兎も角もわたしに任せて
きぬ　おかるさんなら大丈夫。サア、お前方もマア奥へ。
女皆　わたしらも御一緒に
浮橋　そんなら、おかるさん
ト　おかるうなづく。
縫之　必らずともに
かる　ハテ、ようござんす
ト　おかるこなし。
つゆ　サア、ござんせいなア。
ト流行り唄になり、皆々奥へ入る。
角喜　あの野郎を遣つては
ト行きにかゝる。おかる留めて
かる　相手はこれから此おかる。サア、存分にしなさんせ
ト　また横に寢る。皆々思ひ入れ。
サア、切りしやんせ。切らぬのかえ……憚りながら交りなし、金簪のおかるが體、思ひの儘に切らしやんせ、切つて血が出ざアをかしかろ。
ト醉ひたるこなしにて、そこへ寢る。皆々思ひ入れあつて
勘九　イヤハヤ、呆れた女だ。
傳次　女と思ひ、容赦いたせば附上がる。憎くい下素女め
皆々　この上は四人がゝりで
ト四人立ちかゝる。權兵衞、ツカ〳〵と出で
權兵　先づ〳〵、暫らくお待ち下さりませう。
傳次　そちや石屋の權兵衞、なんで身共を
勘九　留めに出たのは、ア、聞えた。この女に氣がある噂

それでこなたは庇ふのか。

權兵　イエ、左様ではござりませぬが、最前から見請けましたるところ、取り所もない女の生酔ひ、お相手になつては却つて人の物笑ひ。帶の結び目に錠卸し、女のざいに意地を張り、喧嘩好みの暴れ者、無理な酒でも飲ませずば、人も除けては通しますまい。町人ながら少しばかりは、小口もきゝまする佛權兵衞、酔が醒めてのその上で、とつくり申し聞かせませう。あなたの御恥辱にならぬやう、私しが計らひまする程に、何卒この女を私しにお預け下さりませうならば、有り難うござりまする。

五郎　權兵衞どのゝ申さるゝも一理ござります。

菊塢　これは只管、權兵衞どのへ。

傳次　成る程、酔ひどれを相手にしては武士が立たぬ。酔の醒めたるその上で

權兵　とつくり申し聞かせまする。

傳次　とは云ふものゝ、おかるめ。

權兵　ハテ、かるならば、かるにして置け呼子鳥。

菊塢　これは秀逸。

傳次　然らば權兵衞。

權兵　キツとお待ちなされませ。

ト唄になり、皆々奥へ入る。權兵衞残り思ひ入れあつて

此マア酔どれの形はいの。

ト合ひ方になり權兵衞、おかるに見惚れし思ひ入れにて、だん／＼側へ寄らうとして、又あたりを見て氣を替へ

お誂らへの石碑の註文は、カウツト

ト懐より註文書を出し

玉垣から、先づちよつと當つて、この恰好では、餘程脊が高くなるが

ト此やうな事云ひながら、又おかるへ目を付け、側へ寄り

ハテ、餘ツぽど酔つて居るさうだ。

ト手を叩く。奥よりお露出て來る。これにて囁く。呑みこんで枕を持つて來る。權兵衞、枕をおかるにあてがふ。おかる、現にて枕をする。權兵衞、枕紙を見て又お露に囁く。呑みこみ、硯箱を出して奥へ入る。權兵衞、鼻紙を出し、何やら書いて思ひ入れ。この時おかる寝返りして手を延す。權兵衞、書いたる文をその手に握らせる。おかる、現にて文を捨てる。權兵衞、

文を取上げ、本意なき思ひ入れにて、奥へ行かうとして、又おかるの額を、よく／＼見て寄りかゝる。おかる心付いても、矢張り眠りながら

かる　誰れぢや／＼。

ト現のやうに云ふ。權兵衞飛び退き、知らぬ顔して居る。おかる、目を覺まして

お前は權兵衞さん、わたしや爰へ、どうして寢て居たのぢやえ。

權兵　どうしてどころか、權兵衞が、大事のお客へ無禮たらだら。それゆゑに詫び言して、おぬしの命はおれが貰うた。

かる　さうかえ。ちつともわたしや知らなんだ。忝なうござんす。ドリヤ、奥へ行つて

ト行きさうにする。權兵衞留めて

權兵　これはしたり、おかる坊、いはゞ大事の命をば、助けた佛權兵衞、ちつとも知らなんだ忝なうござんす、ドリヤ奥へ行つてと、ツイと行かうとは、そりやあんまりであらう。

かる　それでは禮の云ひやうが、少ないと云はしやんすのかえ。

權兵　さうではないが、ちつとはどうかおれが深切、命を助けた恩返しに

かる　おいて下さんせ。お前に命を助けて下さんせと、わたしが頼んだかいなア。よし又命の瀬戸になるとても、人を頼むほど命が惜しくば、金簪のおかるとは云はれぬわいなア。まだ命を助けた程の恩があれば、どういふ禮をすればいゝのぢやえ。

權兵　サア、さう立派に出られては、甚だ挨拶に困るが、大概おれが心の内を

かる　知つて居やんす。知れて居るゆゑ、わたしや奥へ。

權兵　そりや又なぜ。

かる　わたしや男と差向ひになるのさへ、大嫌ひ。

權兵　どういふ譯で男は嫌ひだ。

かる　そりやわたしも知らぬが、男嫌ひと看板は、帶に付けたるこの錠前。

權兵　それはあんまり氣强いぞよ。常からおぬしに心のあるこの權兵衞、男の口から恥かしい。云ふに云はれぬ心の丈。いま書いたこの文、これをばどうぞ。

トおかるへ渡す。

かる　權兵衞さん、お前も餘ッぽど昔者、今時こんな野暮

らしい、文とはあんまり呆れるわいな。

ト投げ返す。

權兵　これはどうしたものだ。いよ〳〵おぬしは、どうあつても

かる　お氣の毒だが否でござんす。

權兵　ハテサテ根強い……併し、おれが文でも捨てゝも置かれず

ト文を取上げ

コレ、おかる、おぬしがあくまで其やうに、强情を云ひ通せば、おれも權兵衞、出入り屋敷のお侍ひさまへ、無禮のおぬし、一番相手にせねば。

かる　こりや面白い。得心せぬを腹立つて、先刻の衆の肩を持つ、異名は佛權兵衞さんが

權兵　鬼にもなつて、この場でちよつと。

トおかるの後より抱く。

かる　なんぼわたしがお前をば、嫌うて居ればとて、後抱きのほてゝんごう、よしてもおくれ。

ト振り切る。この時權兵衞、懐より文を落す。これを知らず。

權兵　ところを斯うして

ト又かゝるを氣味合ひの立廻り。トゞおかる、有り合ふ莨盆を取つて打ちつける。

かる　アタしつこい。知らぬわいなア。

トついと奥へ入る。權兵衞、呆れし思ひ入れ、續いて奥へ入らうとする。奥より傳次、角內出で來り權兵衞を見て

傳次　其方は石屋の權兵衞、何を其やうに、ウロ〳〵致す

角內　大方あの女と、角力でも取つたのでござりませう。

ト此うち傳次、權兵衞の落せし文をソツと拾ひ、袂へ入れ行きかける。

權兵　あなた樣は、何れへお越しなされまする。

傳次　今日は格別のもてなし、過分。最前の女めが、無禮の扱ひも聞きたけれども、まづ今日は此まゝに歸宅いたす。

角內　左樣ならば、直さまお歸りでござりまするか。

傳次　如何にも。角內供いたせ。

ト行きさうにする。

權兵　ア、イヤ〳〵、傳次さま、暫らくお待ち下さりませう。

傳次　何ぞ身共に用でもあるか。

権兵　ちとあなた様へお願ひの筋が。

傳次　願ひがあらば、早く申せ。

権兵　別儀でもござりませぬが、私しも以前は高野の家中、垣坂伴左衛門が悴、三平と申しました者。幼年の砌り聊かの口論より、傍輩の子供に手を負はせ、既にお仕置にもあふべきところ、師直公のお聞きに達し、命助かり町家を便り、人となりましたる其うち、跡にて親どもに娘一人儲けし沙汰。即ち私しが爲には妹、この者は武家方へ御奉公、親どもは病死、殊に大恩のお家は、大星が手立にて、夜討の騒動、只今に沒落、血筋の絶えたる高野のお家、ほのかに聞けば師直公の落胤、そのお方を尋ね出し、且はいつぞや强盜込入り、紛失なしたる當家の一軸、詮議仕出してお家の再興、町人ながらも私しが願ひ、その所へあなた様より、石塔の御註文下され、誂らへとのお頼み、大恩ある師直公の御石碑、身を粉に碎きましても、私しが一心に仕上げたうござりまする。何分この度の御用、私しめに仰せ付けられ下さりませうなれば、有り難い仕合せにござりまする。

傳次　ナニサマ、一通り、願ひ尤もなれども、その用を申しつける事體り成らぬ。

権兵　エ……そりや又なぜでござります。

傳次　其方が妹といふは、只今參つたあの藝者、以前は鹽谷の腰元、浮橋と申した女、縫之助と乳繰り合ひ、身ごもつて居るとの事。さすれば高野の家中の娘が、敵同士の鹽谷の弟、その胤をはらんで居て濟むと思ふか。その腹の子が、若し男子であらば、ます〳〵鹽谷家には跡目が出來、高野の家は血筋が絶え、いよ〳〵家は立たぬに極まるわえ。

権兵　サア、それゆゑにこそ妹は、疾より勘當いたし、縁は切つてござりまする。

傳次　妹を勘當いたせしとて、いまだ縁の切れぬ證據はコレこの文。

トいま拾ひし文を出す。

権兵　その文は

傳次　爰で拾つたコレこの文、こりやア其方が手跡、女へ遣はす濡れ文、此かるめは、あの藝者と縫之助を、隱まつて世話するといふ事。その女に心を掛ける其方、高野の家の血筋を立てたいとは、出る儘の僞り表裏。それゆゑこの役目は云ひつけられぬワ。

権兵　すりや、どのやうに願ひましても

傳次　いつかな叶はぬ。ならぬ事だワ。

ト權兵衞思ひ入れあつて

權兵　御尤も。

ト合ひ方になり、脇差を拔き、有り合ふ八寸の上にて左の小指を切り

町人ながらも私しが心底。縫之助浮橋を世話するあのおかるに、付け文いたせし私しゆゑ、お疑ひは御尤も。この上は女にも、心を寄せませぬといふ私しが潔白、どうぞお聞き屆け下されませ。

ト傳次思ひ入れあつて

傳次　イカサマ、男氣な其方、心底とつくり見屆けた。役目申しつけう。

權兵　すりや、私しが願ひの通り

傳次　その代りにはわれが妹の、浮橋が腹にある、鹽谷の血筋の根葉を斷て。それを見屆けたその上にて、其方が願ひを

權兵　すりや妹が胎内を

傳次　鹽谷の血筋も絶える道理。

ト權兵衞こなしあつて

權兵　承知いたしましてござりまする。

傳次　まだその上にこの程は、所々に盗賊はびこる噂。彼奴らも正しく鹽谷浪人、これらが詮議二つには、紛失の一軸も

權兵　尋ね出してお家の榮え。先づそれまでは

傳次　石切り權兵衞。

權兵　傳次さま。

傳次　右の一儀を、ぬからぬやうに。

權兵　心得ました。

傳次　角内、參れ。

ト時の鐘になり、傳次、角内向うへ入る、あと合ひ方

權兵　御恩送りの石碑の御用、只管願ひを種にして、現在妹の胎内を……それにしても、心の知れぬはあのおかる。文を拾はれ、これも矢ツ張り妹が運の盡き。どうでも戀は

トこの時奥にて

大勢　泥坊々々。

トこの聲にて、權兵衞愕り、思ひ入れあつて奥へ入る、下手より勘九郎、雲哲を捕へ、跡より五郎三、菊塢、女皆々、浮橋縫之助も出てくる。

五郎　升屋の親方、こりやどうしたのでござりまする。

女皆　マア〱、お靜かになされませ。
勘九　この坊主は、大盜人だ〱。
雲哲　御免なされませ〱。
勘九　御免なされも凄まじい。今日爰で秋葉講の、無盡の寄り金五十兩。それを知つてこの坊主めが、座敷へうせて、奉加を頼む顏で、その金をちよろまかした、太え坊主め。
五郎　この坊主は、先刻慥か鹽谷のお國の、菩提所と聞いたが
勘九　その國の殿が大だはけで、家は潰れたから、旦那寺の坊主は、泥坊でもせずば喰はれまい。大方鹽谷の浪人も、その上前でも取るであらう。イケ太え奴等だ。
ト　これを聞き、縫之助思ひ入れあつて
縫之　コレ、出家の身で大それた、金の盜人。今こそ我れも町人なれ、以前は鹽谷縫之助、菩提所の名を云ひ立ておのれが心一ッにて、兄上といひ義士の人々まで、名を穢す不屆き者。出家に似合はぬ、見下げ果てたる所存ぢやなア。
雲哲　すりや、あなた樣が鹽谷さまの御次男、縫之助さまでござりまするか。ア、面目次第もござりませぬ。云ひ譯ならねど一通り、お聞きなされて下さりませ。
ト　合ひ方になり
愚僧が寺は鹽谷家代々の御菩提所、判官さま御切腹のその後は、一人として御跡を弔ふ者もなく、四十七人最期の後は、猶以て無縁となり、當地は知らずお國の墓は、水一滴花一本、手向ける者なく、せめて印の石なりと建てたう思へども、貧寺の事ゆゑ、此お江戸へ勸化に出て、今日とても此お方が、持つたる金、取る氣はなけれど、せめてあの金が有つたなら、石碑も成就いたすであらうと、その願ひが叶うたら、跡ではその金拵らへて、此お方へ戻したらば、罪にもなるまいと、思ひがけない出來心から、判官さまの御名まで穢せし愚僧が科、御免なされて下さりませ。
縫之　すりや、私慾にあらぬ善根の、その心底世にあるならば、祠堂金納むるとても不足なき、我れさへ今は浪人の
雲哲　外にあだても情なや、例し少なき人々の
縫之　斯うも浮世にうとまれて
雲哲　願ひも叶はぬその上に
縫之　よしなき人の口の端に

雲哲　かゝる無念さ、旦那様

縫之　是非もなき世の成行きぢやなア。

勘九　ハヽヽヽヽ、人の金を只してやらうといふ氣で、どうして願ひが叶ふものか。大名の子が藝者の箱持ちになるからは、旦那寺は橋本町、願人坊主の仲間へでも入るが近道　揃ひも揃つた大べら坊め。

トこの時浮橋こなしあつて

浮橋　モシ、御出家さま、その願ひ、わたしが叶へて上げませう。

縫之　ヤ、この願ひを叶へやうとは。

浮橋　サア、わたしが思案は

ト合ひ方になり、思ひ入れあつて

モシ、吉原の親方さん、御覽の通りのこの場の難儀　かうなる上は隱すに及ばぬ　わたしも鹽谷のお家には、御恩を受けたこの身の上、餘所に見ても居られませぬ　どうぞわたしが身を御相談なされて、五十兩の抵當に、お買ひなされて下さりませ。

勘九　ムウ、大分面白いわえ。最前から見たところが、隨分此方も商賣づく、蟲のあるのを合點で、奉公する氣なら、五十兩で買つてやらう。幸ひ無盡の金も丁度五拾兩

縫之　すりや、その身を賣つて

浮橋　あの世にござる義士の方々、どうぞ未來を、お助け申す其ために

雲哲　アヽ、出來ました〳〵。女に似合はぬ忠義の心　長者の捧ぐる萬燈より、貧の一燈、佛達もさぞや感應　愚僧が願ひも叶ふといふもの。矢ツ張りこなたの忠義から

縫之　忝ない、浮橋、何にも云はぬ。

ト拜む事ある。

浮橋　なんのお禮に及びませう。これがわたしの望むところ。

勘九　得心ならば、相談は早いがよい。金は直さま渡します。證文の事、ザツと假の受取を。

縫之　志ざしのこの金、ちつとも早う

ト有り合ふ硯箱引寄せ、サラ〳〵と受取を書き、勘九郎へ渡す。

勘九　これでよし。サア、金を渡せば女は此方へ。

ト金を出す。

雲哲　金は愚僧へ。

ト縫之助金を取る。雲哲懐より縮緬の財布を出し、右の金を入れる。

勘九　これで双方。

雲哲　願ひも成就。

浮橋　モシ。

ト縫之助と顔見合せ、泣き落す。

雲哲　ア、南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト回向して金を懐へ入れ、行きにかゝる。この以前よりおかる出かゝり居て

かる　御出家待つた。

雲哲　愚僧に何ぞ用でもござるか。

かる　用がありやこそ留めました。不肖ながら、ちよつと待つておくれ。

ト合ひ方になり、雲哲舞臺へ戻り

雲哲　わしに用とは

ト思はず顔見合せ

ヤ、われは

かる　おまへは父さん。

ト云ふを雲哲、云ふなといふ思ひ入れ。

アイ、云ふなゝら云ひますまいが、ちよつと聞きたい事がござんす。いよ／＼お前は、播州の御出家ならば、その教信寺のお宗旨はえ。

雲哲　ヤア……そりやアなにサ、その宗旨は法華・イヤ門徒、イヤ、當時は八宗兼學でござる。

かる　その御出家なら、大枚の金の受取、いま爰で書いて行かしやんせ。

雲哲　その受取は。

ト頭を掻き、無筆の思ひ入れ。

かる　モシ、親方さんとやら、今の受取、ちよつと貸して下さんせ。

勘九　アノ、この受取を

かる　ちよつと貸して下さんせ。

ト勘九郎・雲哲と顔見合せ、不請々々に出す。おかる取つて

かる　御出家さん、受取が書けずば、この受取を、この通り云ひなさんせ。

雲哲　なんだ、この受取を讀めと云ふのか。

かる　そこで高々と讀みなさんせ。

雲哲　讀まいでは。出家が無筆で勤まるものか。

かる　サア、早う讀みなさんせ。

雲哲　今讀むワ。讀まうと思つて居る所ぢや。思つたり讀んだり、兩方出來るものか……エヽ、何だ、一ツ。讀み

憎い手だなア……金五十兩、慥かに受取り申しゝ、以上、月日、めでたくかしく。

ト出たらめに讀む。

かる　成る程、御出家だけあつて、詳らかな讀やうでござんす。モシ……まだ直らぬな。わたしの爲にもお主ならお前にも矢ツ張りお主、其お方に勸めをさせ、それでお前は

雲哲　ハテ、賣つてやるのも佛の爲。

かる　佛を思へばその金を

雲哲　どうして金は

かる　そんなら爰で金の受取り

雲哲　サア、それは。

かる　サア

兩人　サア／＼／＼。

かる　その金戻して下さんせ。

雲哲　こりや堪らぬ。

ト逃げ出す。五郎三捕へる、立廻りのうち雲哲の衣裳脫げて、百姓の形になる。

縫浮　さては坊主は騙りであつたか。

菊塢　太い奴もあればあるものだ。

ト此うち雲哲、右の財布の中の金を出し、ソツと袂へ入れ、懐より別の金包みを出し、財布の中へ入れる事。

つゆ　すんでの事にお京さん、深い所へ

浮橋　身を沈めやうとしたわいなア。

女皆　これといふのもおかるさん

きぬ　きついお手柄でござんすわいなア。

かる　この相摺りもまだ外に。

ト勘九郎へ目をつける。

勘九　コレ／＼、おれは何にも知らぬぞ／＼。その證文を返すからは、五十兩の金を、此方へ返せ／＼。

かる　直ぐにお前に返します……サア、今の金を戻しなさんせ。

雲哲　この金は

トしぶ／＼する。

かる　もう斯うなつては叶はぬ程に、サア出しなさんせ。

ト無理に懐へ手を入れ、財布を引出す。

雲哲　コレ／＼、その財布は、おれがのぢや／＼

トおかる、財布の中より金包みを出し、財布は雲哲へ返し、金を取つて

かる　ソレ、親方さん、五十兩の金……元へ戻れば双方とも、これで安堵。

ト證文を裂く事。

雲哲　此方はこれで中安堵。

勘九　おれはさつぱり消え安堵。

菊塢　地口あんども云はれまい。

五郎　騙りの坊主は此まゝ爰で

菊塢　引摺り出して

ト兩人、雲哲にかゝる。

かる　何事も金さへ戻れば、外に科もないこの人、わたしに免じて、この場は無難に。

勘九　エ、コレ、折角首尾ようやらかしたを、いらざる女が

かる　どなたも〳〵、足許の明るいうちに、キリ〳〵爰を

雲哲　歸ります、歸ればまゝの四つ紅葉、狂歌でもあるまい……うまくかゝつた五十兩の、金はさそくに見顯はされ、一旦騙りはしくぢつても、これから向うは山谷町、淺茅ヶ原へ飛び行かん。ソレ。

ト宙乘りのやうに向ふへ入る。勘九郎、五郎三、菊塢女形皆々奥へ入る。縫之助浮橋おかる思ひ入れあつて

縫之　危ふい所を、おかるどの

浮橋　わたしが身の上、事なら濟んだも、お前のお庇、エエ、有り難うござんす。

縫之　それにつけてもおかるどの、若い身空で帶〆めの、その錠前は何か仔細の

かる　サア、これには段々樣子のある事。わたしが赤穗に勤めた時、兪迦山への御代參、行きあうたは晦日のざこ寢、その一村は闇がりで、緣を定める妹脊の祭。わたしもその夜についした戲れ、暗がりながら云ひ交した、後の證據の割り笄。夜が明けたら、互ひに顏を見ようと、樂むうちに、その男は、武家方の人と見えて、御家來が急飛脚、鎌倉の騷動と、聞くと其まゝ押ッ取り刀、暇乞ひもそこ〳〵に、聲を知るべの果敢ない別れ。それより男は持つまいと、思ひついての女達、證據の笄知れるやう、この通り頭へ差し、盛り場遊里を歩くのも、男を尋ねるばつかりに、いつ云ふとなう異名して、金笄のおかると呼ばれ、されども尋ぬる其お人は、正しく鹽谷家身寄りのお方。

縫之　道理こそ、わしらが身の上

浮橋　身に引受けて世話して下さんすも

かる　以前の古主二つには、男の縁に繋がりし、あなた方ゆゑどこまでも、身に引受けて致すが願ひ。……爰から直ぐにお二人は、先へ歸つて幸ひと、今夜は八月二十八日、兩國夜店の花火の名殘り、雁木から屋根船で

二人　そんならお前は

かる　追ツつけ跡から。お二人さん、お先へ早う。どうやら雲も雨氣づく。曇らぬ其うち

　トそこらにある番傘を取つてやる。其うち權兵衛後に出かゝり窺ふ。

二人　そんならお先へ。

かる　サア、お出でなされませ。

　ト時の鐘にて二人向うへ入る。これを見て權兵衛うなづき、尻をからげ、同じく向うへ入る。奥より勘九郎出て來り、おかるを見て

勘九　おかる、爰に居たか。いま渡した五十兩の金、改め見れば皆胴脈。本當の金を、サア渡せ。

かる　エヽ、そんならその金は似せ金とは……すりや父さんが

勘九　なんだ、父さんと吐かしたからは、あの坊主はわれの親だな。親の代りに、われを連れて行く。

かる　それぢやというて、それをわたしが知ろかいなア。

勘九　知らぬとは云はさぬ。先刻金を受取る時、われが懐の中で摺替へたか。

かる　どうしてそんな

勘九　さうでなくば、おれと一緒に。

かる　金はわたしが父さんに、逢うたその上詮議して、お前に返しませう。

　ト向うへ行きかゝる。

勘九　イヤ、金よりは、てめえを連れて行くのだわえ。

かる　イヽエ爰を。

　トせり合ふうち、奥より五郎三、菊塢、花屋鋪と書きたるぶら提灯を提げて出で來り、勘九郎をさゝへる。

五郎　日が暮れたれば眞の闇、これを持つて、ちツとも早く。

　ト提灯を渡す。

かる　嬉しうございます。遠くは行くまい。

勘九　邪魔な野郎め。

　ト舞臺にて勘九郎、五郎三、菊塢、立廻り。おかる向うへ走り入る。時の鐘の送りにて、よろしく禪のツトメのツナギにて直ぐに引返し。

六段目　三囲堤の段

七段目　両國柳橋の段

役名――斧定九郎。飾間宅兵衛。一子、芳松。獅子舞ひ、笹松。石切り、佛權兵衛。奉公人、直助實ハ與五郎。縣谷縫之助。腰元、浮橋。百姓、與一兵衛。女達、金笄のおかる。加古川の亡靈。

本舞臺。三間の間、向う高足の土堤、前に石の鳥居稻村、榎の大樹、出茶屋の片附けし床几あり、すべて三囲の土手下、夜の模様。雨車、かすめたる雷の音、屋根船の騷ぎ唄、時の鐘にて幕明く。ト榎の下茶屋の床几に直助、古簑を着て、竹笠かざし、腰をかけ、雨やみして居る。直ぐに向うより與一兵衛糸立をかぶり、俄雨にあひし體にて、捨ぜりふにて出て來る。下座の方にて

人聲　竹屋ア〳〵、向う越しだア。

ト呼ぶ聲する。與一兵衛舞臺へ來て

與一　さて〳〵暗い晩だ。その上に俄の夕立。づぶ濡れになつた。併し、少しやんだな。

トこの聲を聞き、直助笠を取り、空を見て

直助　成る程、小降りになつた。

與一　ア、、暗いに誰れかござるの。

直助　ハイ、わしは夕立にあうて、雨やみを待つて居ますよ。

與一　ア、、さうか。それにしても、簑笠でござるではないか。

直助　左樣サ、簑笠を着て居ても、こりやア向うの畑にあつた、鳥おどしの破れ笠、簑だといつて案山子の簑サ。

與一　ア、さうか。併しさう云ふ聲は、どうやら聞いたやうな。

直助　ほんに、こなたは與一兵衛どのぢやアないか。

與一　ムウ、さういふ貴樣は與五郎か。ヤレ〳〵久しいの、して、貴樣は、矢ッぱり鳥越に居るか。

直助　イヤ〳〵、あそこは居られない破目で、石原町の石屋の内にごろついて居るが、亭主が屋敷の衆と、花屋舖へ行つたから、迎ひがてら來て、夕立にあつたのよ。コレ、今ぢやアわしは直助といふから、さう思つて下さい

與一　ハア、直助と名が變つたか。わしも今日は花屋敷へ用があつて行つたが、貴樣とは久しぶりだ。伯州から役に當つて、鹽谷の屋敷へお國中間、大部屋で付合つた儘だ。貴樣は商賣も出來たが、おれはまだよい年をして、まごついて居るが、併し今日は少つとばかり儲け事にかかつて、コレ〳〵、よんどころなく後生願ひになつたやつサ。見さつしやい、ソレ袈裟よ。こりやア珠數よ。なんと後生願ひであらうがの。

ト懷から珠數と袈裟を出し、探らせ見せる。

直助　ほんに年はよらうものだ。貴樣は後生願ひになつたの。ハヽヽヽ。今聞けば、儲け事にかゝつたと云ふが隨分と稼いで儲けるがよい。

與一　イヤモウ、いくら稼いでも、稼ぐに追ひつく貧乏神があるから、一向内に金が居付かぬ。併し、今日は餘ツぽどな儲け口よ。

直助　そりやアめでたいの。いくらほど儲かつた。

與一　聞いて下さい。貴樣だから話すが、五拾兩儲けた。

直助　ヤア、ナニアノ五拾兩。イヤ、とつけもない儲けやうだの。併し、貴樣の人體で、何をしたとて……ア、そりやア嘘だ〳〵。どうして〳〵、三分か五匁。ナニ五十兩、嘘だ〳〵。

與一　これサ〳〵、嘘ぢやアない、五拾兩。しかも小判でコレ、嘘ならば探つて見さつしやい〳〵。

ト首に掛けたる財布を見せる。

直助　ドレ〳〵、どうして貴樣が五拾兩といふ金。

ト財布を探つて見て、思ひ入れあつて

イヤ、こりやア小判だ〳〵。イヤ、素敵に儲けたな。

與一　なんと違ひはあるまいが。働らきのある親仁であらうが。どうして〳〵今時の若い者に出來るものか。

ト自慢する。

直助　成る程、貴樣は働らき者だ。財布も慥かに縮緬と、探つたが、さうか〳〵。

與一　その通り〳〵、縞縮緬の財布へ入れてある。こりやア娘が單物の裂れだ。どうだ、働らき者か、働らき者か

ト此うち直助、惡心きざしたる思ひ入れあつて

直助　働らき者だ　めでたい〳〵。コレ、與一兵衞どの、そのめでたい次手に、わしもめでたい話しがある。それにつけても金が先だから、有りやうはその才覺に出た歸りコレ、物は相談だが、その金へ高利を附けて返さうが、なんと、わしに貸してはくれまいか。

與一　ヤ、。
　ト悔りして
　コレ〳〵、おれも命がけに働らいたこの金を、利を付けようといつたとても、居候ふ同然な貴様に、大枚五拾兩どうして〳〵。
直助　これサ〳〵。そこが今云つた、おれが方にもめでたい話し。外でもないが、おれは今に、大名になるワ。なんとめでたい話しか。
　トこれを聞き、與一兵衛、大笑ひに笑ひ出し
與一　ハ、、、、ハ、、、、イヤ、滅法界な事を云ふ男だ。猿廻しの與五郎が、なんで大名になるものだ。あんまりな嘘を云ふ男だ。
直助　成る程、嘘だと思ふも尤もだが、それにはキツとした證據がある。その證據といふは、鎌倉錦木唐草の織り出してある、高野の屋敷の留裂れで、拵らへた守り袋。外にない裂れだ。この内に産れ年月記しあるを、今までは知らずに居たが、わしはこれでも師直さまの落胤で、この頃俄に親類方の屋敷で、わしを尋ねる最中。併し家の寶、菅家の正筆、今にもおれが手に入れば、それを以て跡目の願ひ。直ぐにわしは大名になれる。なんと人の身の上は、知れぬものでござらうの。
與一　成る程、さう聞けば嘘でもあるまいが、して、その守を持つてござるか。
直助　サア、そこだて。ちよつとした事で、烏越を立退きの時、ツイ落した。
與一　ナニ落した。アノその證據を落したか。ハ、、、、それ見たか。其やうな大事の物を落したと云うて、貴様はそれでも大名になる、イヤ、大笑ひだわい。
直助　サ、そこが相談ものだ。その證據があれば、いくらでも金は出來るが、肝心の書き物がないゆゑに、金に手づかへて居る。コレ、心安くした貴様の事だ。間違ひはない。その守を尋ね出しさへすれば、直ぐに大名だ。それまでのところを呑みこんで、どうぞ貸して下さい〳〵
與一　イヤ〳〵、貸されないの。ハテ、證據があつたところが、何だかおれにも解らねえ書付け。殊にこれといふ物を持たずに居る貴様に、何の當途に貸すものだ。そりやア外で工面をさつしやい。又その内に逢ひませう。ヤレ嬉しや、小降りになつた。
　ト行かうとする。直助引戻して、向うへ立ち、キツとなつて

直助　そんなら貴様はこれ程に。云はれぬ大事を口外するも、その金が借りたいばつかり、聞分けなけりやアこれからは、腕づくでも借りるからさう思へ。

與一　ナニ腕づくで借りる。コレ、年こそ寄つたれ與一兵衞、悪い事なら仕抜いた親仁だ。そりやアおぬし、人を見そこなつたか。さう強面に出かけりやア、いらぬ金でも貸しはしねえワ。

直助　イヽヤ、借りるワ。

與一　どうして借りる。

直助　斯うして借りるワ。

ト懐へ手を入れ、立廻り。これより船の内の鳴り物になり、兩人よろしく立廻り、茶屋の床几莨盆など使ひ、立廻りのうち與一兵衞、直助の左の小指を喰ひ切る仕組み、トヾ直助、稲村の縄を取つて與一兵衞を絞め殺す事。この時與一兵衞の死骸は殘し、持つて居たる珠數と袈裟を落す。直助、財布のまゝ金を取つて

ア、コレ、金は取つたが小指をば、與一兵衞めが喰ひ切り居つた。アイタヽヽ。

ト思ひ入れ。この時向うより人音するゆゑ、思ひ入れあつて、探り／＼下手へ入る。雨車、船の騒ぎ、時の鐘にて、向うより浮橋、縫之助、寺島花屋しきといふ番傘を相合にさし、安下駄を履き、花屋しきの貸提灯を灯し出て來り、直ぐに舞臺へ來て

縫之　ア、コレ、爰らあたりは取分けて道が悪い程に、氣を付けて歩きや。

浮橋　アイ／＼、隨分と氣を付けて歩くわいなア。それにしても、アノおかるさんが、もう來なさんす筈ぢやが、なぜにマア遲い事ぢややら。

縫之　さればいの。今夜は八月二十八日、兩國の夜店の終り、連立つて行くと云やつたが、爰で船を呼ぶか。但し大川橋まで行つて待たうか。

浮橋　マア、そろ／＼と云つて見ようわいなア。

ト禪のツトメになり、兩人下手の方へかゝる。この時向うより權兵衞、裾をからげ、一本ざし、頬冠りにて傘をさし

權兵　オヽイ／＼、その提灯、待つてもらはう／＼。

ト呼びかけながら足早に出て來り、舞臺へ來り

コレ、その提灯は、妹ぢやないか／＼。

浮橋　ヤ、お前は兄さんぢやござんせぬかえ。

縫之　ふウ、そんなら勘當して今日まで逢はぬ、其方の兄

の

權兵　ハイ、權兵衞めでござりますが、して、お前は

縫之　アイ、わしは藝者の箱持ち、佐助というて

浮橋　わたしが使ふ廻しの男。モシ、兄さん、わたしやお前の氣に違ふとて、思はぬ勘當。今日まで逢つても下さんせぬが、思ひがけなう今宵はどうして、呼びかけて來なさんしたえ。

權兵　成る程、仔細あつて勘當した妹、てめえに聞きてえ事があるゆゑに、跡追うて來た。外でもない、てめえは慥か

ト云はうとして、縫之助を見て思ひ入れあり

あのお人が聞く手前、ちつと遠慮が

ト云ひ兼ねる樣子。縫之助思ひ入れあつて

縫之　どうやら兄御さまは、わしへ遠慮の樣子。ドリヤ、わしは雨も晴れたゆゑ、向うの船を呼んで待たせませう。

ト行かうとするを

浮橋　ア、、矢ツ張り爰に居て下さんせいなア。

縫之　アイ／＼、船を呼んで直ぐに參ります。ア、、嗜い事ぢや。

ト提灯を榎木の枝へ引掛け置き

竹屋ア／＼。

ト呼びながら正面の石段を上り、土手へ入る。此うち捨て鐘、合ひ方になり

浮橋　ア、モシ、早う來て下さんせいなア。

權兵　コレ／＼妹、勘當したこの兄が、今更詞かはすも、云ひ憎いものながら、聞きたい事があるわいの。

浮橋　改まつた其お詞。して、兄さんの聞きたいと云はしやんすは。

權兵　外でもない。今爰に居た若いのは、ありやわれが勤めて居た、鹽谷の御次男、縫之助どのであらうがな。

浮橋　アイ、さう御存じの上からは、兄さんに隱す事はござんせぬ。成る程、あなたは鹽谷の御次男、縫之助さまぢやわいなア。

權兵　さうであらう／＼。して、われが懷妊して居るは、いよ／＼アノ縫之助さまのお胤か。

浮橋　アイ、兄さん、叱つて下さんすな。お屋敷に勤めた時より、お情を受けしあなた樣。今はお家も斷絶して、御浪人の其うちも、わたしが覺えた三味線の、三筋の糸にあなたをば、御養育の其うち、宿せしあなたの御胤、それがお前のお心に、違うたと思ふから、勘當受けても

今日まで、お詫もせぬのでござんすわいなア。
權兵　すりや、いよ〳〵縫之助どのゝ胤に、相違ないと云ふか。
浮橋　アイ、兄さん、堪忍して下さんせ。
ト權兵衛愁ひのこなしあつて
權兵　鹽谷の胤を高野の家中、垣坂氏の妹が、宿せし胤は、あの世の御主人師直さまへ
浮橋　エヽ。
權兵　イヤサ、妹、ちつと頼みがある。
浮橋　わたしへ頼みとはえ。
權兵　マア、此方へ來い。
ト浮橋、權兵衛の側へ寄るを、抜打ちに切りつける。
浮橋　ヤア、何でわたしを……モシ、惡い事があるならばあやまりませう。どうぞ助けて下さんせ〳〵。
ト逃げるを權兵衛また切りつける。立廻り。トゞ浮橋權兵衛の刀持つ手に縋り付くを
權兵　われを殺さにやア、古主へ立たぬ。不便ながらも死んでくれ。
浮橋　兄さん、お前も知る通り、大事のお主のお胤をば、宿せしわたし、死なで叶はぬ事ならば、身二つになるまで待つて下さんせ。コレ、拜みますわいの〳〵。
ト思ひ入れ。權兵衛こなしあつて
權兵　オヽ、尤もぢや〳〵。がコレ、おれが云ふ事、よう聞けよ。
ト誂らへの合ひ方になり
この兄も妹も、御恩になつた師直さま、あなたの御家中高祿頂戴いたしたる、垣坂件左衞門が二人の兄弟、おれは丁度十四の年、傍輩の子供を殺め、直ぐに屋敷を御追放。その後町家で、人となり、今は石屋の權兵衛と、人に知られた石切り職人。緣でがな高野家師直さまの石碑の御用、これぞ死なれた親人が、お引合せと思ふから値段に構はず落札にと、思ふに相違の疑ひは、石屋が妹は鹽谷の腰元、殊に次男の縫之助が、胤を宿せしが兄・石碑の御用は叶はぬと、云はれて見れば皆尤も。それゆゑわれを殺した上、未來の親にも云ひ譯して、高野の屋敷へ内々にて、斯くと語れば行く〳〵は、お家も立たばそれにつれ、親仁の家名を引起すにもよい傳手と、それで其方を殺さにやならぬ。いらざる鹽谷の血筋の胤、懐妊したがわれが因果、妹、コレ、諦らめて死んでくれ。親の爲、家の爲、兄に命をくれいやい。

ト いろ〳〵思ひ入れ。浮橋これを聞いて

浮橋 事を分けてのお頼み。深手を負うたわたしぢやゆゑどうで助かる心はなけれど、只悲しいはお腹の嬰兒……今はの際に一目逢ひたい、縫之助さま。縫之助さまいなう。

縫之 ヤ、浮橋を

ト呼ぶゆゑ權兵衛、縫之助に聞かすまいといふ思ひ入れ、この時縫之助出て來り、この體を見て

浮橋 縫之助さま。

縫之 なんで其方を

ト權兵衛を留めて立廻りうち、土手へ上がり、權兵衛へ組みつく。誤つて權兵衛、縫之助の右の肩先より腕へ掛けて切る。これにて縫之助、タヂ〳〵として思はず土手より川へ落ちる。水音する。浮橋は權兵衛の裾にとりつき

浮橋 ヤ、お前は御主人縫之助さまを

權兵 サア、川端にてさゝへしゆゑ、肩先切りしと手ごたへして、思はず川へ

浮橋 ア、情ない。あのお方こそ、わたしが深う云ひ交せし縫之助さま。お果てなさるゝその時は、お前はお主殺しぢやぞえ。そればつかりが悲しうござんす。

權兵 ヤ、何と云ふ。この兄が主殺しとは。

ト合ひ方、蟲の音。

浮橋 この譯これまでは申さぬが、お前は幼ないその時に屋敷を追放、町家の住居、お果てなされた父さまが、枕の許へわたしを招き、其方は身共が實の娘、兄三平は他家より養子、彼れが實の親といふは、鹽谷家の家中斧九郎兵衛、彼れが女房双子を出產、某が兄の男子を養子として、九郎兵衛には弟の男子、定九郎といふ悴こそ兄三平が双子の兄弟、證據は實親九郎兵衛が、後の印と添へたる短册「花だにも散らで別るゝ春ならば、いとかく今日ををしまざらまし。」この詠歌の上の句は、兄が守に入れ置きて、また下の句は弟へと、九郎兵衛さまより父さまへ、詳しいお話し。いはば兄は鹽谷の御家中、それを高野の身共が養子、さすれば兄の三平が、代りに鹽谷家へ奉公さすは、女ながらも其方ばかり。この事必らず口外すな、とわたしへ遺言。この仕儀ゆゑお知らせ申しまする。モシ兄さん、お前は鹽谷家の御家來筋、ひよんな事して下さんしたなア。

權兵 ヤ、、、心覺えの妹が詞。守の中の短册は、親件

左衛門が詠歌と存じ居りしが、さては鹽谷の家中にも、斧九郎兵衛どのは實の親であつたか。さすれば妹を手にかけて、主人の鹽谷家血筋のお胤。殊に思はず手を負はせし、縫之助さまといひ、申し譯なき身の誤り。ホ、ホイ。

ト捨て鐘、提灯の灯消える事。懷中の守より短册を出し、當惑の思ひ入れ。浮橋すがり寄つて

浮橋　死ぬるわたしはいとはねども、案じらるゝは縫之助さま。どうぞあなたのお行くへ尋ね、命全う。モシ、兄さん、こればつかりが、わたしが願ひ。

トいろ〳〵あつて絆切れて落入る。權兵衛すがり寄つて

權兵　コレ、妹、宥してくれ。堪忍せい。料簡してくれいやい……妹が死骸も胎内の、お主の胤も直ぐに水葬。そうぢや〳〵。

ト權兵衛、死骸を抱上げ、石段より土手へ上がり、向うの川へ死骸を流し、立戻つて鞘を探し、無きゆゑ鞘を拵らへ。

ト鞘を尋ねる思ひ入れ。替つた合ひ方、蟲の音、捨て鐘。向うより、おかる、花屋舖の貸し傘をさし提灯を提げ、下駄がけにて出て來り

かる　ほんに思はぬ隙入り。さぞマアお二人は

ト此せりふにて舞臺へ來る。權兵衛見て

權兵　モシ〳〵、どなたか存じませぬが、ちと尋ねます物がござります。少しの間提灯の灯を、お借り申したうござりまする。

トこの聲を聞き、おかる、よく〳〵見て

かる　さう云ひなさんすは、先刻に逢うた權兵衛さんぢやアござんせぬか。

權兵　ほんにさう、云ふはおかるぢやの。

かる　アイ、かるぢやわいなア。

權兵　ハテ、悪い所で

かる　エ、

權兵　イヤ、ちよつと灯を。

かる　使ひなさんせ。

ト提灯を渡す。權兵衛これを取つて側を尋ね、鞘を見つけ

權兵　ヤレ嬉しや。これで安堵の

ト提灯をおかるへ返し、白刃を拭ひ、鞘へ納める。此うち、おかるこの様子を窺ひ見て

かる　權兵衛さん、こりやお前、どうやら人を。
權兵　よんどころなく男の意地づく、仕留めた樣子を、コレおかる、必らず口外してくれるな。
かる　アイ、女でこそあれ金輪際、他言せぬのが
權兵　男勝りの其方の氣性、知つたは權兵衛。
かる　この上お前も、心置きなう行きなさんせ。
權兵　ア、女に稀れな。
　ト思ひ入れ。思はず灯にて與一兵衛の死骸を見つけ、悄りして
かる　ヤ。こりや父さんの死骸、こりや何者がむごたらしう。コレ父さん。こりやモウ絆が切れたわいの。
　ト泣き落す。權兵衛思ひ入れあつて、立寄り見て
權兵　そんならこれがこなたの父親、ハテ、今までに見ぬ死骸、こりや何者が……ハテ氣の毒な
　ト合點のゆかぬ思ひ入れ。おかる此うち與一兵衛が死骸の懐中尋ね見る事あつて、口に殘りし小指を見附け
かる　花屋舗での樣子といひ、正しく摺替へ渡したる、誠の金は父さんの、懐中にと思ひの外、見えぬばかりか、口に殘りしこの小指。そんなら敵の手がゝりは
權兵　ナニ、死骸の口に小指が殘つて
　ト右の手に提灯を持ち、左の手にて與一兵衛の死骸を改め、口に小指のあるを見て
成る程、喰ひ切りし小指を含みし樣子。
　ト此時おかる、權兵衛の指なきを見つけ、こなしあつて
かる　死骸の口に殘りし小指、いま灯にて窺ひ見るに、左の小指の切れたるお前、こりやこなさんが、父さんを
權兵　ヤ。
かる　親の敵の權兵衛さん、爰一寸も動かしやんすな。
　トきつと詰め寄る。權兵衛思ひ入れあつて
權兵　ヤレ待ておかる。成る程、人は殺めた。現在の妹ながらも
かる。ヤ。
權兵　アイヤ、云ふに云はれぬ譯あつて、成る程人を殺めたれど、おぬしが親は毛頭切らぬ。證據はおれが白刃を其方に
　ト一腰を拔いて、おかるが前へ差出す。
かる　この一腰をアノわたしへ、渡す心は討たるゝ覺悟か
權兵　イ、ヤ、白刃を改め見やれ。
かる　エ、。

トおかる一腰を取つて鼻紙にて拭ふ。この紙へ薄く血のつく樣子。此うち權兵衞、提灯を差出し居る。おかる、拭ひし紙を、よく〳〵見て

矢張り白刃に血汐の殘り、紙にあり〳〵

權兵　殘る血汐が殺さぬ證據。

かる　ヤ。

權兵　横死なしたる與一兵衞、襟に殘りしこの繩ば、絞め殺したるこの死骸、惣身に疵もなく、おれが白刃に殘るは生血。さすれば餘人を切りたりとも、親仁を殺さぬコレ潔白。これで疑ひ晴らしやれ、おかる。

ト思ひ入れ。おかるこなしあつて

かる　さう云はしやんすりや父さんに、疵のないのは、こりや外に殺せし者のあるにもせよ、死骸の口に殘りし小指、お前の左の小指の無いは、割符を合すわたしが疑ひ

權兵　それも尤も、この上は、其方の親を殺したる、その曲者を詮議して、討たせにやならぬ男の面晴れ。されども失ひしその金の

かる　數は慥かに五十兩、財布の裂れはわたしが差替へ、縞縮緬の浴衣の裂れ。

權兵　それぞ證據のよき手懸り。助太刀せねばこの身の疑ひ、晴るゝそれまで不肖でも、女房氣のない權兵衞が、内へ連れ行き表向き、女房というて側放さぬ、それがこなたへこの身の潔白。

かる　成る程わたしも疑ふ小指、誠討つたる外の敵の判るまで、こなさんの側は離れぬ。さりながら、もしこの事がわたしが尋ねる、男へ聞えりや不心中。

權兵　疑ひ受くるもそりや尤も。それには何ぞ仕やう樣やうも

ト思ひ入れ。この時おかる、灯にて落ちてある袈裟と珠數を取上げ見て

かる　こりや父さんが、先刻に出家と僞りし、その時かけし袈裟と珠數。

權兵　それぞ幸ひ身の潔白。世間の人の噂する、佛權兵衞相應に、この珠數朝々放さぬは、女房は持てど一つ寢をせぬのがこなたの尋ねる男へ

かる　その心中はわたしも共々。男持つともなか〳〵に、枕交さぬ誓ひには、心は尼も同然に、肌にかけたる五條袈裟。これでは帶へ卸ろしたる、錠前よりも慥かな心中

トおかるは袈裟をかける。權兵衞は珠數を襟へかけ、思ひ入れ。此うち直助後へ窺ひ出て立聞きする。

權兵　それでは堅い石原の、石切り商賣權兵衛が
かる　女房といふは表向き。
權兵　敵の手懸り求るゝまで
かる　いはゞ女の掛り人。
權兵　其うち夫が知れたなら
かる　必らずその時
權兵　おれが仲人。
かる　思ふお方と
權兵　添はせてやるワ。
かる　エヽ、嬉しうござんす。
直助　ヽの嬉しさうな
　ト思はずいふ。この時權兵衛振返り見て
權兵　慥か目見得の
かる　エ。
　ト思ひ入れ。直助提灯を打ち落す。これを木の頭。權兵衛おかるを圍ふ。
權兵　降らねばよいが。
　トよろしく、キザミにて拍子　幕
　引付けると船の鳴り物、祇園囃子、賑やかなる鳴り物にてツナギ。返し。

本舞臺、三間の間、向う一面に黑幕、眞中に柳の大樹、ふつさりとしたる同く吊り枝。上の方川岸端に盆提灯を吊し、柳の下に非人三人、蚊をいぶし居る舞臺前浪板、爰に加古川の死骸、前幕の形にて菰を掛け、繩にて留めて居る。非人これを番して居る體、尤も八月二十八日夜、藥研堀不動の緣日、鰐口の音回向院の一ッ鉦聞え、雨車、かすめし雷の音、すべて元柳橋川岸通りの模樣よろしく幕明く。

非一　さて／＼きつい蚊だぞ、誠に暴れ蚊だ。
非三　時に今夜は八月二十八日、不動樣の緣日といひ、夜涼みの終り、人の出る晩だのに、今の夕立に涼み船も、橋の下へつけたと見えた。
非二　これでも今夜は花火があらうか。
非一　無くつてどうするものか。是非花火は後にはあるであらう。
非二　早く花火が上がればよい。さもないと、あの女の浮死骸が目について、氣味が惡い。
非三　エヽ、けちな奴だ。浮死骸とは云ふものゝ、色も變らず生々と、生きたやうな女の死骸。もし化けて出ると

おいらは抱いて寢るのに。
廣一　成る程、その氣でなくちやア死骸の番はならねえ。
ト話し合つて居る。一ツ鉦、時の鐘、さんげ／＼の聲する。向うより前幕の宅兵衞、芳松を負ひ出る。獅子を冠りし兼松、捨ぜりふにて出て來り
兼松　ハテ、しつこい親仁だ。モウ／＼、おいらが仲間へは置かぬ。貸した物を、サア／＼、返せ／＼。
宅兵　ハテ、其やうに云はつしやるな。何と云つても、まだ子供ぢやわいの。
兼松　子供でなくつて。角兵衞獅子は皆子供だワ。其うちにもあんまり不器用な餓鬼だ。
ト云ひ／＼、舞臺へ來て
サア／＼、獅子も太鼓も寄越せ／＼。
宅兵　これはしたり、とつくりとマア、勘辨して見さつしやい。子供の事ぢやわいの。
トこの爭ひを非人の皆々見て
非一　ア、なんだ、角兵衞獅子の雨に逢つたのか。何かごたつきを始めたな。
非二　コレ／＼、獅子舞ひさん、暗闇で
非三　何をごたつくのだ。

宅兵　モシ／＼、聞いて下さりませ。わしらは播州の者でござるが、この孫を連れて尋ねる人がござるゆゑ、この江戸へ參つたところ、この間あの人が見て、越後獅子の仲間へ入れと云ふから、マア幸ひとその仲間入りしましたを、この子が覺えぬ不器用ぢやのと、今から外へ行けと云ひます。あんまりな無理ゆゑ、その爭ひでござりまする。
兼松　コレ、聞いて下さい。わしも又、これ程不器用ではあるまいと、あの餓鬼を見込んで世話もして見たが、逆立ちは勿論、とんぼう返りも出來ぬから、そこで思ひ切つてお暇を遣るのだ。
非一　こりやア尤もだ。角兵衞獅子の身の重いは、よいよいを飛脚に使ふやうなものだ。
非皆　こいつア尤もだ／＼。
兼松　コレ／＼、誰れが聞かしやつてもあの通りだ。サアサア、道具を返して、外へ行きやれ／＼。
宅兵　其やうに云ふ事なら、よいワ、皆返します／＼。サア／＼、われも脱げ／＼。
ト芳松の獅子も太鼓を取つて出す。
芳松　コレ、祖父さま、今夜はどこへ寢るのぢやえ。

宅兵　オヽ、どこと云つたら、橋の下か、人さまの軒の下へ。
　トほろりとする。三人これを見て
非一　成る程、小僧に親仁、厄介ものだ。併しこの雨では軒の下にも寢られまい。コレ、斯うさつしやい、爰から四五丁ゆくと、橋本町といふ所がある。そこへ行くと、隨分泊める。さうさつしやい、さうさつしやい。
宅兵　ハイ〳〵。そんならその橋本町とやらを尋ねて參りませう。コレ、獅子舞どの、道具は皆返しましたぞ。これはどなたもお世話でござりました。
三人　隨分急いで行かつしやい。
宅兵　ハイ〳〵。サ、孫よ、しつかりと取附いてゐろよ。ドリヤ、橋本町を尋ねませう。
　ト矢張り件の鳴り物にて宅兵衞、芳松を負ひ、下手へ入る。
非一　ハテ、遠國者だに
三人　可哀さうに。
兼松　なアに、あんな奴に油斷はなりませぬ。併し、この雨は止まうかな。
三人　イヤ〳〵、どうか又降りさうだ。
兼松　そいつア惡い噂だ。わしは板橋の商人宿から出ましたのだが、それぢやア今夜は歸られますまい。お前方は何だえ。
非一　おいらは爰へ流れ寄つた、浮死骸の番をして居るのよ。
兼松　それは幸ひ、モシ〳〵、どうぞわし一人を、お前方の番小屋へ寢かして下さるまいか。
非二　そりやア寢かしてもやらうが、今のやうに降ると、漏つてならぬ。爰よりは兩國の見せ物小屋がよい。
兼松　どこでもようござります。寢られさへすればよいのサ。
非三　寢かしてはやらうが、貴樣一升買はせるが、合點か
兼松　そいつは高い旅籠だが、濡れるにはましだ。一升買ひませう。泊めて下さりますか〳〵。
非一　合點だ〳〵。貴樣に酒屋を教へるから、一升買つて來るがいゝ。
　ト此うち雨の音烈しく、かすめて雷聞える。
三人　アヽ、また降つて來た〳〵。
非二　サア〳〵、見世物小屋へ行かう。コレ、角兵衞どの貴樣は仕合せだ。今夜は納めの花火を見せるワ。

兼松　そいつア有り難い。降つてもあらうかの。

非三　あれ見さつしやい。玉屋の船が出て居らア。

三人　サヽ來さつしやい〳〵。

ト矢張り一ツ鐘、時の鐘、變りし合ひ方。皆々下手へ入る。この鳴り物にて向うより星五郎、新らしき小袖裾をからげ、濡れたる體。大小にて裏付き草履を帶に挾み、新しき蛇の目の傘、少し破れたるをさし、出て來り、花道にて

星五　アヽ、少し小降りになつたが、思ひがけない夕立に誠に難儀いたした。これにつけても御主人縫之助さまの御事。この邊にと聞いたゆゑ、尋ねて來たが、お行くへとても

ト思ひ入れあつて

ドリヤ、小雨のうちに、兩國あたりを尋ねませう。

ト舞臺へ來る。この時かすめて雷の音して、吊せし提灯のあかり、ほの闇くなり、消える。これにて寢鳥、薄ドロ〳〵、凄き合ひ方。前の流れへ燒酎火立のぼる。星五郎キツと目をつける。此とたんに上の方へ、髮を亂し、物凄き拵らへの幽靈の加古川をセリ上げる。星五郎行合ひ、キツと見つけ、摺れ違うて加古川下手へ來り、星五郎は上の方へかゝり、怖毛立ちし思ひ入れにて立ちどまり、加古川不氣味なる振りにて跡を見返る。星五郎も見返り、ギヨツとして刀を拔かうとする。加古川、忽ち消える。星五郎思ひ入れあつて

心の迷ひか知らねども、どうやら今のは加古川に。

ト思ひ入れ。この時本雨サツと降り來り。星五郎こなしあつて

また降り出したか。ハテ、うるさい雨だ。

トこの時下手、バタ〳〵にて、兼松、件の獅子を冠り一升德利を提げ、捨ぜりふ云ひながら一散に向うへ走り入る。此うち星五郎、柳の方へ片寄り居て、向うをよく〳〵窺ひ見て

なんだ、彼奴は。アヽ、夕立に逢つた角兵衛獅子だな。

トこれをキツカケに下手にて、本鐵砲の音する。

大勢　玉屋ア。

ト譽める聲と一時に知らせあつて黑幕落ちる。向うは東兩國の方。一ツ目橋、お船藏、川の面には屋形船かゝり居る體。正面玉屋の船より、流星上がりしあかり、これにてよき所へ柳橋の袂を見せたる道具になり、この途端によき所へ加古川　御守殿女中の拵らへにて

薄ドロ／＼にて現はれる。星五郎フッと見付けて、窺ひ寄つて

星五　ヤ、こなたは加古川。

トこれにて加古川、持つたる扇をサッと開く。これを木の頭、川面より流星、だん／＼と落ちて消える　玉屋の提灯、船の内にて振る。これにて又黒幕落ちて暗闇の景色となる。加古川、扇にて顔を隠すを、星五郎さし覗き窺ふ。これをキザミ、よろしく拍子。

幕

八段目　小名木川隠れ家の段

役名——盗賊、曉星五郎　俗名斧田松月　實ハ斧定九郎。醫者、太田了竹。鷺谷縫之助。茶屋の女房、お勝　若い者、喜六。飾間の宅兵衛。一子、芳松。入間丑兵衛。林平内。町抱へ、亥之助。加古川の亡靈。

本舞臺、三間の間、中足の屋體、上の方九尺の障子屋體、一面に大和葺き、櫛形欄間、茶壁、正面更紗暖簾口、床の間違ひ棚飾りつけ、至つて美麗に、栗丸太簀の門口、斧田松月と記せし表札、舞臺先に柵附きの浪板、すべて本所小名木澤邊寮のかゝり。爰に丑兵衛、平内、浪人者。了竹、醫者にて、尺八の稽古して居る、茶屋女房お勝、若い者喜六、揖取りの體。亥之助、町抱へ、半纏股引、鐵棒持ち、門口に立ちかゝり居る。誂らへの唄、尺八の附け笛にて幕明く。

亥之　お頼み申しやす／＼。

平内　どうれ。

ト花を活けさし、門口へ來り

こなたは町抱への亥之助どの。何の用だか、此方へ入らつしやい。

亥之　御免なさいまし……ア、菊が威勢よく活かりやしたね。モシ、わつちも先生の弟子になつて、祭の宵宮なぞには、おツ立つて見たいね。

平内　よからう、身共が下稽古をして遣はさう。

亥之　併し、尺八にしようか。

丑兵　ハテ、貴様は見掛けに寄らぬ、風流な男でござるわい。

了竹　町拙へのこなたが、尺八を稽古して、何にさつしやる。

亥之　モシ、ひよつとこの囃子を、尺八でいつたら新らしからうと思つてサ。

喜六　それぢやア面の代りに、天蓋を冠つて踊らざアなりますまい。

かつ　とんだ俄でござりますよ。

平内　ほんに、俄と申せば、久しく町へも推參いたさぬて

丑兵　どうぢやな。この頃は北國は全盛かな。

喜六　モシ、お遊びは何でもこれからの事でござります。

かつ　道理で每晩、小格子へ行くさうでござんすなう。

喜六　南無三、色の在所を悟られしか。

かつ　なんの厚かましい……モシ、客人のお迎ひに參りましても、おいらんの次の間で、寢言にまで小格子の女郎をのろけるといふ評判でござりまする。

平丑　それは又きつい逆上せやうぢやな。

了竹　ちと三黃瀉心湯でも調合して進ぜはさうか。

喜六　モシ、どうぞ其お藥をお願ひ申しまする。私しは喰べませぬが、女に服ませする。

亥之　おきやアがれ。

かつ　お聞きなされませ。ちよつとしたところが、あの位なものでござりまする。ほんに、それはさうと、あなた方も、きついお遠々しい事でござりまする。是非今晩などは、裏に行かしやつておあげなされませ。

平内　行きたい事は行きたいが、入間氏、先生は思し召しがあるかしらん。

丑兵　左やうサ、傾城買ひまでが先生の御指南をうけるてな。

かち　ほんに旦那は、今日はお屋敷へでも行かつしやりましたかいなア。

亥之　お内なら、わつちもお目にかゝりたうござりやす、

平内　昨夕夜を更かしたせゐか、あそこで寢てござるが、ちよつとお起し申さうか。

ト平内、上の方障子屋體を明け、二枚折り屏風の傍へ行き

モシ、先生、ちよつとお目にかゝりたうござります。先生。

ト呼び起す。この時屏風の內より平内を投げのける。星五郎、現の樣に枕刀を取つて、立上がる。丑兵衞了竹驅け寄つて

丑了　モシ／＼、先生。これはマア、如何いたした事でござる。

ト星五郎心付きたる思ひ入れあつて

星五　オヽ、そんなら今のは夢であつたか……思はず知らず。ハテサテひやいな。

皆々　ハテ、きつい魘はれやうな。

平内　すんでの事に、危ない目にあふ所でござつた。

星五　ハヽヽ、平内どの、お宥しなされい。

ト合ひ方になり、平舞臺へ來り

これは了竹老、毎日御苦勞でござりまする。時に病人は少しはよい方でござるかな。

了竹　まだ今日は伺ひませぬが、何を申すも、昨日お話し申す通り、彼の高直な藥種を用ゐねばならず、それには又種々の

星五　その價の高直な儀も、隨分承知いたしてござる。

かつ　モシ旦那、あなた、御病人と仰しやりますは、御新造さまでござりますか。

平丑　ナニ、先生は當時獨身者でござる。

かつ　左樣かいなア。イエモウ、女のない内と申しまするものは、いつそ體裁のないもの。それに致しては、よう綺麗に風雅なお住居でござりまするなア。

星五　イヤモウ、風雅でもなく洒落でもないが、浪人のせう事なしに、松月と表札打つて、碁双六尺八活花、或ひは劍術指南と申すも烏滸がましいが、習ひ覺えし遊藝の役に立つたも、廣いお江戸の有り難さ。日々殖え來る門弟中、その庇ゆゑに晝日中、足を延して高鼾、冥利に盡きたる悪い夢……イヤ、ビツショリと汗になりました。定めて昨夜などは、どこぞへコツソリと、入らつしやつたでござりませうわいなア。

喜六　但し盜人の晝寢も、當がなければとやらでござりませう。

ト何心なく云ふを、平内、丑兵衛、我れを忘れて

平内　ヤ、それをどこから聞き出して

丑兵　もしや、づきでも

星五　コレ……エ、氣の付かない

平丑　エ。

星五　酒でも出して下さればよいに。

かつ　イエモウ、お構ひなされますな。此方へ參りがけに厩橋の旦那の所で、過しました。モシあなた、今晩は是

非々お連れ申しまするぞえ。

喜六　直ぐにこれからお供いたしませう。

星五　イヤ、今夜はよんどころない用事があるで、いづれ近々に參らう。ほんにいつやらの勘定をせなんだ。附は何程ぢやな。

かつ　ナニ、お次手でよろしうござりまするが、喜六どん先頃の附はいくらであつたか。

喜六　慥か九兩と二朱でござりました。

ト紙入れより出さうとする。

星五　よし〳〵、附は見ずともよい。

ト手箱より十兩出して

先づ、これを取つて置いてくりやれ。

かつ　あなた、お次手でもよろしうござりますに。

ト小判を見て

モシ、十枚でござりまするね。左樣なら、七ツお剩錢を上げませう。

ト紙入れを出さうとする。

星五　なにサ、剩錢には及ばない。船にでも乘つて歸らつしやい。

かつ　これは有り難うござります。

了竹　さてよい船賃な。愚老、こなた衆を乘せる船頭になりたいわい。ハヽヽヽ。

喜六　時におかみ、もうお暇申さうではござりませぬか。

かつ　この人も、お拂ひを戴くと直ぐに歸ると云ふは、あんまり現金な。

喜六　さうではござりますが、この頃は日が暮れると、殊の外物騷で、方々へ押込みが入るといふ噂でござりまする。

亥之　イヤ、その物騷について、モシ先生、わしやア町役人から云ひつけられて、お觸れがあつて參りました。

星五　町役人の觸れとは何事ぢや。

亥之　この頃慥か曉の星五郎といふ盜賊が、手下を連れて方々へ押込みに入るとの事、お上より嚴しい御詮議。もし少しも心當りがあるなら、早々代官所へ訴へ出るやうにと、お觸れでござります。

ト此うち平内、丑兵衛、ハッと顏見合せ、思ひ入れある。

星五　ムウ。その曉の星五郎とやらは、聞いたやうな名ぢやなア。

了竹　ハヽア、先生にはお心當りでもござるかな。

星五　心當りがあると申すでもござらぬが……コレ、其お觸れは、身共が宅へばかりか。
亥之　イエ、門並でござりやす。訴へて出れば、ソシ、褒美になる樣子でござります。
星五　ハ、、、。褒美は所望でないが、もし目當つたなら訴へ出るまでもなく、その曉の星五郎といふ奴、直さま召捕つて遣はさうて。
ト莨のみながら空うそふいて居る。平内、丑兵衞、氣味の悪い思ひ入れ。
勝喜　イヤモウ、怖い事でござります。
星五　ほんに其方衆は、日の暮れぬうち歸るがよからう。
かつ　ハイ、左樣なら、どうでも今晩はお出ではござりませぬか。
了竹　先生、ちよつと御病人をお見舞ひ申しませうかな。
星五　何分お頼み申します。
亥之　ドレ、これから、隣町へ觸れて來やせう。
かつ　これは旦那、有り難うござります。ハイ、あなた方
喜六　左樣ならお近いうちに。
星五　内方へよろしくお頼み申す。
ト唄になり、お勝、喜六、亥之助、捨ぜりふにて向うへ入る。了竹は暖簾口へ入る。星五郎、平内、丑兵衞殘り
平内　頭、どこからどう觸れが廻つたやら
丑兵　嫌な噂を聞くものでござるな。
平内　こりやモウ、この小名木川を
兩人　ふけざアなるめえ。
星五　ハテ、性根の据らねえ。そんなにピク／＼する事はねえ。……誰れが爲、武士の身よりも名をば惜しまん。
ト謠をうたひながら立つて、あたりを見廻し、ちり手水を遣ひ、正面の神棚に隱しある菅家の一軸を取出し思ひ入れあつて
世に羨ましきは、大星氏を始めとして、四十餘人の人々は、武士たるものゝ道を守り、末世に殘る忠の一字。忠といふ字は、變らねど、その行き方は雪と墨、黒白も分かぬ闇の夜に、山名の館へ込入りて、奪ひ取つたる菅家の正筆。
平内　それゆゑ今もあの如く、盗賊曉星五郎。
丑兵　嚴しい詮議とあるならば
星五　コレ、氣遣ひせずとも、奥の一間で
兩人　でも、もう爰には

星五　ハテ、御病人の介抱を
兩人　エヽ。
星五　お頼み申す。
ト奧へ思ひ入れ。これにて兩人こなしあつて奧へ入る
星五郎思ひ入れあつて
主人の爲とはいひながら、世に淺ましき取沙汰を、聞くにつけても、この間柳橋にてその以前、云ひ交したる女房の、加古川に巡り逢ひ、少しの知べに山谷町、與五郎方に掛り人と、聞いたばかりにその後は、訪ひ音信も絶えてなく、殊に加古川が親里に、預け置きたる悴芳松、これとても息災なるか。何を云ふにも今日あつて、明日は無き身と思ふゆゑ、今も今とて夢見の惡さ、思はず刀に手をかけて。ア、破るまじきは天下の掟、兎にも角にも世の中の、人と莨の善惡は
ト灰吹を叩き、思ひ入れあつて
煙とならねば、知れぬものぢやなア。
ト思ひ入れ。合ひ方、時の鐘にて、向うより宅兵衛、前幕の親仁にて、芳松の手を曳き、奉加帳を持ち出で來り
宅兵　ハイ／＼、段々の不仕合せにつきまして、剃髮いたしまする者。どうぞ衣の奉加を、お願ひ申しまする。
トこの聲を聞き星五郎、錢入れより錢を出し、手の内を入れようとして、宅兵衛と芳松を見て思ひ入れあつて
星五　見れば足弱を連れて袖乞ひの老人、ハテ、氣の毒な此方へ入つて、茶でも飲んで行きやれ。
宅兵　ハイ／＼、それは有り難うござりまする。サア／＼芳松よ、旦那がぶう飲ませようと仰しやる、サ、入りや入りや。
ト内へ入り、星五郎手づから茶を汲んで出す。これを戴き、宅兵衛、芳松にも飲ませ、自分も飲んで
坊主めが殊の外かわきまするさうにござりまする。もう一つお願ひ申しまする。
星五　サア／＼、いくらでも飲まつしやい……ア、老人は上方筋の人と見えるが、さぞ難儀であらう。その幼な子は、こなたの孫と申すやうな事かな。
宅兵　ハイ、坊主めは、この親仁が孫でござります。
星五　ムウ。して、國は何國ぢや。
宅兵　ハイ、播州室の津で、宅兵衛と申す、水呑み百姓でござります。

星五　ムウ、すりやアノ其許が

ト思ひ入れ。宅兵衞こなしあつて

宅兵　モシ、旦那さま、ちよつとお見受け申しますから、お情深いにあまへまして、お話し申します私しと、この坊主めが身の上を

星五　ヤ。

宅兵　モシ、お聞きなされて下さりませ。

ト合ひ方になり

私しには一人の娘がございまして、桃の井さまへ御奉公に上げて置くうち、鹽谷家の御家中、斧定九郎とやらいふ侍ひと馴染めて、儲けたは即ちこの子。人に隱して產み落し、國へおこして丁度七年。祖父や祖母が手鹽にかけ、此やうに育てあげまするうちも、申さば聟の定九郎どの、どうぞ一度は逢はうと思ふうちに、鹽谷さまのお家は騷動。ほのかに聞けばお主の爲に、盜賊をするとやら惡い噂も耳に入り、また娘は不義の科ゆゑ、お暇のみか播州は、殿樣のお國ゆゑ、現在親の內へも歸れず、この東にさまよひ居るとの事。彼れこれを氣病にして、たうとう婆は去年の春、死んでのけましてござりますわいの。

ト思ひ入れ。星五郎こなしあつて

星五　ヤ、すりや、連合ひには……南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

宅兵　ハ、ア、勿體ない。見ず知らずの旦那さまが、其やうに御回向なされて、有り難うござりまする……そこでこの孫めが、友達の腕白を見るにつけ、おれにはなぜ父樣も母樣もない。あるなら逢はせて可愛がつてもらひたいとせがみまする。そこで國の家財を賣り拂ひ、兩親に逢はせませうと、永の道中、野に臥し山に寢て、とんと乞食の境界。何をしても仲間にはこづき廻され、この上は出家などして、上方筋を尋ねようと思ひますが、先のない私し、ひよつと今にでも死んでのけたなら、この孫めはどう致すでござりませうかと、それが悲しうござります。

芳松　旦那さま、祖父さまがあのやうに泣いてぢやゆゑ、坊が父樣や母樣を知つてござるなら、教へて下され。

星五　オ、、尤もぢや／＼。尋ねる親は現在爰に。

トふつと氣を更へ

サ、尋ねる親は盜賊すると、いま老人の物語り。親の惡事は子に報ふ、天下の掟。譬へば身共を尋ねるその子の

親として、現在爰で逢うたりとも、ヤレ男どのか我が子かと、名乘りたうても名乘りはせぬ。親子互ひに知らぬ同士、それがまだしも天の助けぢやによつて、向後その子の兩親の事は思ひ切り、國へ歸つてその孫の、成人するのを樂みに暮らすがよからう。コレ、よい子ぢや。小父が云ふ事よう聞きやれ。其方が逢ひたがる親といふはな、盜賊する邪慳な心。例へ其方に逢うたりとも、さのみは可愛がりもせまい程に、祖父さまと連れだつて國へ歸り、おとなしう成人しやれ。

芳松　イエ／＼、わしは叩かれやうが殺されやうが、父樣に逢ひたうござります／＼。

宅兵　オヽ、よう云うた。それ程までに逢ひたがる孫めが一心でも、その聟どのに

星五　逢はれぬも宿世の因縁。敵同士と諦らめて、國へ歸るが上分別。ドレ、草鞋錢なと合力いたさう。

ト手箱の内より小判一枚出してやる、宅兵衛、悄りして

宅兵　こりやマア、草鞋錢と仰しやつて下されたは、大まい小判で一兩。旦那さま。こりやどうした譯でござります。

星五　サア、餘りといへば痛はしさ……ハテ　大事ない。路銀にさつしやれ。

宅兵　イエ、これはお貰ひ申しますまい。

星五　そりや又なぜに。

宅兵　勿體ない御深切な旦那さまゆゑ、あまへましての親仁めがお願ひ。どうぞ私しを、あなたの所の飯焚になとお使ひなされては下さりますまいか。

芳松　コレ、旦那さま、わしをも置いて下さりませ。

星五　オヽ、よう云うてくれた。身共も何卒左樣いたしたいが、兎角儘ならぬが浮世、どうも其方衆の願ひは

宅兵　叶ひませぬか……エヽ、成る程なア。門々へ立つても打ち擲きこそすれ、意地の悪い者ばかりで、情らしき詞をかけられませぬ袖乞ひが、始めて甘いお詞を聞きまして、ほたへ過ぎた事云ひました。御免なされて下さりませ……モシ、旦那さま、娘も孫も、不思議な事には、辰の年月揃ひし生れ、運がよいと聞きましたが。エヽ、年寄りの愚痴ばかり申しまして、さぞ御退屈でござりませう。もうお暇申しませう、

トしを／＼と立つて、門口へ出ようとする。芳松の帶解けかゝりあるを、星五郎見付けて

星五　オヽ、それ〳〵、帶がほどけさうで
宅兵　ハイ〳〵、ドレ、祖父が直して
　ト帶をほどき締め直さうとする。この時守り袋落ちる事。星五郎駈け寄つて
星五　イヤ〳〵、小父が締め直してやりませう。
宅兵　これは勿體ない。どうしてマア
星五　ハテ、大事ない。
　ト星五郎、芳松の帶を締めながら、チツと顔を見て、帶を締める振りにて、抱きしめて、思はず抱きあげる
芳松　アレ、祖父さま、小父さまが、坊を抱いて下されたわいの。
宅兵　ヤア。
　ト振り返る。星五郎ちやつと振り放し
星五　コレ、必らず怪我などしてたもるな。
宅兵　そのお優しいお詞が、聟や娘に云はれたなら、何ぼう嬉しうござりませう。何につけても、思ひ出しまする
星五　思へば薄き親と子の
宅兵　エ。
星五　縁があるなら、また重ねて
宅兵　旦那さま。
星五　親仁どの。
宅兵　おさらばでござりまする。
　ト時の鐘になり、宅兵衛、芳松の手を引き、小判を戴き〳〵、心を殘して向うへ入る。星五郎跡見送り
星五　燒野の雉子・夜の鶴、鳥類さへも血筋の恩愛、初めて逢うた舅どの、我が子と知りつゝ名乘らぬは、後難を思ふがゆゑに、足弱二人が路頭に迷ふを、見捨てゝ歸すも又恩愛。アヽ、これを思へば世の人の、子を捨てるのも子が可愛さ。とはいふものゝ不便な奴。日本國中尋ねたとて、現在親はコレ爰に……許して下され、舅どの。
　ト思ひ入れ。この時フツと足許に落ちてある守り袋を見付け
ヤヽ、こりや守り袋を忘れて行つたか。まだ遠くは行くまい。
　トとつかはと門口へ出て
コレ〳〵、舅どの、親仁どの。
　ト呼び返す。この時奥より了竹出て來り
了竹　これは御主人には、どこへお出でなされた。先生先生。
　ト呼ぶ聲に星五郎心付き、戻り來て

星五　イヤ、これは了竹老、時に今日の御容態は、如何でござるな。

了竹　矢張り同様と見えるが、さてあの金瘡は、根が餘ほど深い疵ゆゑに、まづ難治の症と見えまする。併し、法の立つ事も隨分ござりまするが、それには至つて高直な藥種が一味入用でござるが、いよ／＼左樣御承知かな。

星五　拙者が爲には大切なる病人、例へいか程高直な藥種なりとも、調へねばなりませぬ。して、その價は何程でござるな。

了竹　サ、蘭名はバルサンと申して、これが則ち廿金の價でござる。

星五　よろしうござります。直さま代金は差上げまするでござりませう。

　トまた手箱の内より小判廿兩出し

左樣なら、右の藥種を、此方へお貰ひ申しまする。

了竹　これは／＼、世の中に拂底な金子を、斯樣にお手近く御所持なさるといふは

星五　エ、。

了竹　ハテ、お羨ましき儀でござる。ハ、、、時に先生、一つ叶へば又二つとやら、あの御病症を、愚老がキツと請合ひまして、全快させる法の立て方がござるが、これは至つて得難い品で、辰の年月揃ひし者の生血があれば、いま目の前で全快させてお目にかけるが、これはなかなか我れ人ともに、得がたい品でござれば。

星五　ムウ、金銀にては調ひがたき、辰の年月揃ひし血汐その儀ばかりは、ハテナア。

　ト思ひ入れ。

了竹　大切な御病人とござるゆゑ、お心ゆかせ、その一藥とても、調へ下さるやうにとは申すものゝ、實は彼の生血がなければ、七分三分全快は覚束なうござる。さう致して見れば、大金の藥種を調へられたところが、萬一の事のござつた節は、愚老、何とも氣の毒に存じまする。ちやに依つて、これはとくと御勘考なさるがよろしうござらう。

　トそこに有る金を押戻してこなし。星五郎思ひ入れあつて

星五　イヤ／＼、その血汐も得がたき品とは申すものゝ、心を盡しますれば、フト手に入るまいものでもござらぬ。先づ／＼、何は兎もあれ、右の藥種は調へるでござりませう。

了竹　左樣御意なされる事なら、右の良藥、お渡し申すでございませう、

ト藥の包みを懷中より出し、星五郎に渡す。

星五　良藥は慥かに受取りました……この上は、辰の年月揃ひし血汐。

ト了竹、金を懷中して

了竹　イヤ、然らば愚老はお暇申しまする。

星五　左樣ならば又明日。

了竹　お見舞ひ申すでござりませう。

星五　これは毎度御苦勞でござります。

ト唄、時の鐘になり、奥にて尺八の稽古聞える。了竹は向うへ入る。星五郎、跡見送り思ひ入れあつて

いま了竹より受取りし、この良藥はありながら、辰の年月揃ひし生血。ハテ、如何いたしたものであらうな。

ト思ひ入れ。フッと又守り袋を見付け、思ひ入れあつて

こりや悴が忘れて行つた守り袋。エヽ、また思ひ出させ居るわい。アヽ、今頃はどこにさまよひ居る事やら、今宵はいづこへ宿るやら。

ト云ひながら守り袋の迷子札を見て

播州室の津宅兵衛孫芳松、辰の七才。

トこれを思ひ入れにて見て、守の中より臍の緒の書付けを出し

「伯州鹽谷家の家中、斧定九郎悴芳松、辰の年辰の日辰の刻の誕生」誠に悴芳松こそ、年月揃ひ生れであつたか。これぞ全く天の與へ。未だ主人の御武運に盡きざる印か。エヽ忝ない……程は行くまい。跡追ッ駈けて、不便ながらも、オヽ、さうぢや。

ト門口へツカ〳〵と出かける。この時風の音烈しく、樹木の枯れ葉、バラ〳〵と散る。奥の尺八寐鳥と聞え蟲の音、時の鐘、凄き合ひ方にて、門口よき所へ加古川、怪しげなる奥女中の形にて、芳松の手を引き、すつくと立ち身にて顯はれる。星五郎窺ひ見て

暗うて黑白は分らねど、慥か女の

加古　こちの人、定九郎どの。

星五　ヤ、さう云ふ聲は女房の

加古　加古川でござりまする。打絶えました。お前も堅固で

星五　ヤヽ、思ひがけなう其方には、ようマアおれが隱れ家を。して、病氣と聞いたが、すりや快氣して

加古　アイ、お前の在所を風の便りに、聞くと其まゝ飛び立つやうに思うて、やう〳〵爰へ、たどりたどりて。
星五　オヽ、おれも其方に逢ひたう思うて居たところ。サア〳〵、爰へ入つて。身共はちつと行かねばならぬ、急な用事で。
ト向うへ思ひ入れあつて行かうとする。
加古　お前の用は悴の芳松。
星五　ヤ、それをどうして。
加古　コレ、あの子も爰へ連れて來たぞえ、
星五　ナニ、今爰へ來たアノ悴を。
加古　コレ、父さんぢや、逢つて堪能。
ト芳松を側へやる。
芳松　父樣、なつかしいわいなう。
ト縋り付く。
星五　ヤヽ、今來た悴が妻と連立ち……オヽ、安堵した安堵した。入りや〳〵。
トこれにて風の音、捨て鐘、淒き合ひ方、蟲の音にて加古川、芳松を連れ内へ入り、よき所へ住ふ。
思ひがけなう、病氣と聞いた加古川が、悴を連れて、ようマア尋ねて來やつたの。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。加古川こなしあつて
加古　來らるゝ身ではなけれども、やう〳〵尋ね參りしもお前に逢うて云ひたい事が。コレ、こちの人、わしに隱して、エヽ、お前は
ト顏を見詰め
恨めしいお方ぢやなう。
トきつと云ふ。
星五　コレ〳〵女房、おれに逢うて恨めしいとは……アヽ聞えた。こりや其方には隱して云はぬが、いつぞやお國にて、瑜伽山へ御代參のその砌り、顏は知らねど闇りのついした事から假枕、一度契りし女の事を、其方どこかで聞いて來たかや。その事を恨めしいと云ふのか。
加古　男の癖にて女房と、定まる女子のある上に、仇し枕を交す事、浮世にまゝある慣ひ。わたしが恨むはそれではない。
尾五　それではなうて何の恨みが
加古　お前の心が邪まに、なつたが恨みその上に、この子までも末々には、難儀さすると思ふから、それが恨みの種となり、淺はかな女子の心も、少しは推して今の世渡り、どうぞ止めて下さんせ。

星五　コレ、加古川、てまへは變つた事を云ふが、恨まれるは今云つた女の事、その外に覺えはないが、聞けばてまへは、身共が方に、以前奉公いたしたる、與五郎といふ小者の一人、彼れが住家に掛り人、殊には病氣、これを聞いても此方から、便りのならぬ今の身の上、世上を忍ぶ……サ、忍び暮らしの素浪人、世間を恐れて、それゆゑに音信せずに居たが、そんなら大方あの家來與五郎が、てまへを勸めて、恨みを云はせに寄越したか。さるにても、どうして伜を

ト合點のゆかぬこなし。此うち芳、居眠り、横になる

加古　連れて來るのも今日が日まで、子仲まであるお前が事、今さら云ふではなけれども、世間へ晴れて女房とも云へぬばかりがわたしの迷ひ、舅御樣も草の露、今はこの世になき人の、すればお前も今の身は、兩親もなし、血筋はこの子。今日參つたは改めて、女夫の杯。夫婦のかため、親子三人顔合す、これぞめでたい吉日と、モシこちの人、杯して下さんせ。

トこれにて星五郎、思案の思ひ入れ

星五　イヽヤ、そりやなるまい。ハテ、心さへ變らねば、いづれに住ひ暮らしても、夫婦親子の縁は切れぬ。殊には以前と違うたる、いま云ふ通りの身は浪人、今更かためを改めて、するにも及ばぬ。斯樣にこ身榮えても、もしもの事のある時は、天下の科人、天の網……サ、天の助けで主人のお家、跡目相續その時は、めでたう杯し

ト盗人を隱す思ひ入れ。

加古　そりや情ない、つれない心底。コレ、わたしに隱すお前の心に、今の世渡り道ならぬ。もし露顯する時は、夫婦我が子でないといふ、難儀を掛けまいお前の胸中、それと悟つて猶更に

星五　ヤ。

加古　どうぞ縁を結んで下さんせ。

星五　尤もの其方、願ひ、其やうに云やる事ならば、今日よりして誠の女房。

加古　死なば諸とも二世三世。

星五　未來永々。

加古　エヽ、嬉しうござんす。

星五　ドリヤ、杯を

ト合ひ方變つて、ずんと立ち、神棚より神酒徳利を取り、供物の入りし土器を持ち來り、盆の上に乗せて加古川が前へ差置く。この時上の屋體より縫之助、窺ひ

居る。
サア、加古川、幸ひ神に供へたこの酒、其方が飲んで

加古　エ、、アノ、神へ供へし
ト悧りして、タナ〳〵する。

星五　この神酒飲んでさしてくりやれ。

加古　サア、この神酒ばかりは、どうもわたしは

星五　飲まぬは女房にならぬ心か。

加古　アモシ、どうしてマア其やうな。

星五　そんなら酒を

加古　サア

星五　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

星五　神のこの酒飲まれぬか。
トきつと云ふ。加古川思ひ入れあつて、土器を取上げる。星五郎徳利を取つて酒をつぐ。薄ドロ〳〵にて加古川、受けたる酒に恐れ、苦しき思ひ入れ。星五郎、目をつける。縫之助、障子より窺ふ。加古川酒を飲まうとして、いろ〳〵あつて、持つたる土器取落し、微塵に砕ける。縫之助、目を付ける。

縫之　聞きし噂に事變り、この家へ來る加古川が

星五　殊に受けたるあの神酒を、取落したる樣子といひ何とも以て心得す。
ト加古川心付き、キツとなり、縫之助、障子をさす。

加古　ドレ、寢させてやりませうか。
ト唄、時の鐘になり、加古川、芳松を抱上げ、ツイと奥へ入る。星五郎殘り

星五　合點のゆかぬ、ひよんな噂に加古川が、身の上案じるその中へ、思ひもよらず來りし女、今の素振りに何とも以て
ト此うち又そろ障子を明け、縫之助出て來り

縫之　コレ、今の樣子に其方も定めし

星五　縫之助さま、あなたもあれにて

縫之　窺ひ居たが、どうも合點の……ア、、あの顏色ではまだ病氣も、心ようないと見えるわいの。

星五　左樣でござります。病後と申し、夜道をこれまで……加古川は格別、あなたの手疵も、最前の了竹老より受取りし彼の一藥は手に入つても

縫之　藥に用ゆるその生血、辰の年月揃ひし者の、血汐がなうては心に任せず、この手疵はいとはねど、可哀や我れに仕へたる、あの浮橋が思はぬ横死。殺せし者は彼れが

兄、あの石原の

星五　いよ／＼それに極まらば、あなたのお胤を宿せし浮橋、女が命は輕くとも、重き熈谷のお血筋を、絶せし奴もお家の敵、正しく高野に

縫之　もしや由緣の

星五　アヽモシ。お氣遣ひなされまするな。

ト思ひ入れ。唄、時の鐘にて此まゝ道具廻る。

本舞臺二重の屋體、上の方にも障子屋體、よき所に柴垣、萩の盛り、松の立ち樹、この枝、釣燈籠を提げ、所々に飛石、軒口より手水手桶を提げ、上の方より舞臺前まで、汐入り、流れ濵板を取附け、下の方枝折り門、正面は座敷の體。爰に絹蒲團を敷き、母衣蚊屋の内に、搔巻を掛け、加古川芳松と添ひ寢して居る。よき所に六枚屛風、短檠をとぼしあり、彈流しの唄、蟲の音、かすめたる禪のツトメにて道具納まる。

ト本釣り鐘の音、加古川フッと目を覺ます。蚊屋はパラ／＼開く。加古川思ひ入れあつて

加古　ありや寺々の後夜の鐘、添ひ寢にいとし可愛子の、側離れじと思うても、冥途の鐘の聞えては、捨てゝあの世へ

ト芳松の顏を、よく／＼見て

父親とても明日知れぬ、惡い世渡り日蔭の身、母は日蔭のその上に、月影さへも恐ろしい、この身に受けては……千種にすだく蟲の音も、我れを迎ひの

ト芳松を見詰め、ホロリとする。合ひ方、蟲の音。奥より星五郎、一腰を持ちて、蚊遣り火を片手に持ち出て來り、加古川を見て

星五　オヽ加古川、爰へ寢やつたか。今年はいつより暑さが長うて、此やうに九月蚊幬。殊に爰は川端近うて、取分けて蚊が多い。コレ、蚊遣りを持つて來た。枕許へ置いて燻すがよからう。

加古　アイ／＼、蚊も澤山でござんすが、取分けてあの蟲の音。なんと、マア面白う、よく鳴くぢやござんせぬか

星五　イヤモウ、蟲の音にも聞き飽いた。コレ、加古川、思へば去年お家斷絶のその砌り、互ひに別れて近頃は、わしも浪人、其方も家來の掛り人、誠に久しう音信も。コレ、今日からは親子夫婦が、此やうに一つに寄れば、もう／＼外へはやらぬぞや。

加古　そりやモウなんで參りませう。わたしは行かぬ心でも、お前は外に深い女中が
星五　これはしたり、愚痴な事を云はぬものぢや。コレ、夫婦仲といふものは、相性が惡いと口舌が絶えぬといふが、聞けばてまへの年は、慥か辰の年とやらぢやの。
加古　アイ、わたしが生れは辰の年月、日時揃うた替つた誕生。その母にあやかつたか、この子の生れも
星五　辰の年月揃うた生れ、ハテ親子とも……年度の揃ふは又と無いもの……ドレ、おれも親子の添ひ寢をしようか。

トこの時火鉢の蚊遣り、パツと燃え上がる。そのあかり後の壁へ映る、星五郎の影ばかり映るを、これに目を付け

加古川ばかりが、影の見えぬは。

蚊遣りの燃え立つその火影、うつるは我が影、側に居る

加古　エ、。

トあたりを見て、短檠のあかりを吹き消す。星五郎心得、團扇を以て蚊遣りの火を押へ消す、影は消える。加古川思ひ入れ。星五郎氣を變へ

星五　イヤ、蚊には恐れるなア。

ト六枚屛風引廻す。唄、時の鐘になり、奥より平内窺ひ出る。門口より丑兵衞、窺ひ〳〵出で、向うより喜六、頰冠り尻からげ、前幕の非人二人付いて出で來り門口へ皆々こそり寄つて

喜六　お二人樣。
平内　われは先刻の
丑兵　喜六だな。
平内　賴みに任せて早速來たか。
喜六　合點の參らぬこの家の主。
非一　お尋ね者と沙汰のある
非二　曉星五郎といふ大盜人の頭分。
平内　縛つて出すその時は、おいらが細つた首を繼ぐ、その繼ぐ品はコレ爰に。

ト菅家の一軸を出す。

丑兵　そりやア正しく曉が、大事に守護する高野家の
平内　菅家の正筆、あの神棚に隱しあるを、盜んでくるは仲間を裏切り、高野家へ持參して、盜人仲間の足を洗ふワ。なんと、盜賊の頭の物を盜むとは、また上々があるであらうがな。
丑兵　そいつは出來た。この上は掛り人の縫之助、彼奴も

片付け、高野家へ。
平内　それも合點。おれは殘つて事の樣子を
喜六　おいらも殘つて。
非人　不捕る仕やうは。
平内　コレ。
ト囁き、喜六呑みこみ、段々に囁き合ひ
丑兵　庭に隱れて、必らずともに
平内　合點だ。ござれ。
ト思ひ入れ。合ひ方、時の鐘、三人は門口へ忍ぶ。平內は窺ひ奧へ、丑兵衞は向うへ入る。矢張り合ひ方にて屛風をソツと明け、星五郎、一腰を提げて、窺ひ窺ひ出て來る、思ひ入れあつて
星五　ア、、道理こそ蚊が多い。いぶしが消えて
ト火鉢を脇へ寄せる。母衣蚊屋へ障り、カラ〳〵と開く。加古川、搔卷を着て、顏を隱し寢て居る體。芳松仰向きに寢て居る　星五郎、暗がりゆゑ、探り〳〵芳松の顏か探り當て、思ひ入れあつて、ソロ〳〵上の方の松の枝に掛けし釣り燈籠を取つて來り、我が子の顏を見て
絕えて久しきこの伜、今日來てくれたもこの親に、忠義を立てさす孝行を、その幼な子を親の身で
ト側へ寄り抱かうとして、キツと氣を變へ、拾ひし守を咬へ、裾をからげる。本釣り鐘、これより獨吟になり、窺ひ寄り、飛石を取つて來り、門口の外へ置き、釣り手柄を取つて來り、白刃を拔き、寢刃を合せる。屛風の內にては加古川、芳松に向ひ、よろしく思ひ入れ。唄一くさり切れると
加古　この子が目覺まし慕ひなば、又ぞろや重る迷ひ。修羅道の苦患のほど、思へば果敢ない淺ましい。
星五　邪慳な心も忠義と節義、思へば〳〵苦の娑婆と
加古　我れはあの世へ
星五　二道かけて
加古　夫の心は
星五　我が子の生血。
加古　妾も同じ年月の
星五　思へば不便な
加古　この子が生立ち。
星五　可愛の者の
加古　寢顏ぢやなア。
ト兩人心々の思ひ入れ。また獨吟になり、いつぱい

に切れる。本釣り鐘、合ひ方、星五郎思ひ入れあつて一腰提げ、門口へ入り

星五　あの加古川が目覺めぬうち。さうぢや。

ト持つたる釣り燈籠の灯を消す。窺ひ〳〵芳松の方へかゝる。加古川、足音するゆゑ、寢た振りして居る。星五郎窺ひ寄るを

加古　誰れぢや〳〵。

星五　女房か。

加古　こちの人、この子をお前

星五　ヤ。

加古　どうなさんすぞいなア。

星五　サア、悴が傍へ探り寄つたは……オヽ、それ〳〵、久し振りで親の內へ來やつたその子、ちよつと抱いて見ようと思うて。

トまた寄る。加古川、芳松を圍ひ

加古　アヽ、モシ、そりや嘘ぢや。なんでお前は門口で、白刃を研いで、寢間へはござんしたえ。

星五　サ、それは。

加古　エヽ、胴慾なこちの人。コレ、わたしに隱して、お前の心は、我が子を手に掛け殺さうといふ、その胴慾と見たゆゑに、寢た振りして窺ふところ、案に違はぬこちの人。コレ、お前はこの子が可愛くはないかいなア。

星五　コリヤ〳〵加古川、聲立てゝ御主人の、お聞きあつては妨げ。其方が推量に違ひなく、現在我が子を手に掛けるも、年月揃ふ悴が年度、主人の難病直したさ。そこ退け加古川。

加古　イエ〳〵、なんぼお主のお爲、お前の忠義の種なりとも、外の事なら留めはせぬ。我が子の命はなんぼでも殺させぬ〳〵。

星五　ヤア、聞分けのないその詞。わりや現在連れ添ふ男に、忠義の二字をば取らせぬのか。

加古　それぢやというて、この子はどうも

星五　妨げするな。女房、そこ退け。

ト切つて行くを

加古　コレ待つた。

星五　エヽ、面倒な。

ト切りつける。加古川、芳松を抱き、立廻りながら逃げ廻り、有あふ母衣蚊帳をかせによろしくあつて、蚊帳廣がり邪魔になる仕組み。星五郎これにてあちこちするうち、加古川、芳松を抱き、上の方の流れへ飛

び込む。此とたんに火鉢の蚊遣りパッと燃え立つ。この灯にて星五郎、加古川の様子を見る。この時前の流れへ加古川の浮死骸流れ寄る。星五郎、これを見てキッとなり、一ッ鉦、誂らへ早めの念佛になり、門口の脇より宅兵衛、髮をおろし、坊主かづら、前へ鉦をかけ、花手桶を提げ、千日參りの形になり、小提灯を持ち出て窺ふ。星五郎思ひ入れあつて

今まで爰に居合せし、あの加古川がその形に、寸分違はぬ浮死骸。悴と共に入水なしたか。さすれば悴は水底へ沈めばお主のお役にも。ホヽホイ。

トこの聲を聞き、宅兵衛、内へ入り

宅兵　すりや、最前逢うた其許こそ、いよ〳〵違はぬ、娘か連れ添ふ。

星五　さう云はるゝは先刻の老人。如何にも拙者は定九郎様子ござつて只今は、その名を隱して最前も、知つて居ながら他人向き、これと申すも人々へ、後の難儀を掛けまい爲。して、貴殿には最前と、事變つたる出家の姿は

宅兵　最前歸る川續き、揚げくる汐に女の死骸。立寄り見れば娘の加古川、見ると心も狂氣の如く、嘆きのうちに孫の芳松、行くへ知れぬは、迷ひ子になり居つたかと、思うても、娘は死ぬる、孫めは失ふ。それゆゑ聟の其許へ、云ひ譯の爲め捨て坊主。コレ、聟どの、こりやマア、何としませうぞいなう。

星五　すりや、舅どのには加古川か、菩提の爲のその姿。さては今まで有明の、月の名殘と女房が、我れにまみえしものならん。さるにても、悴の芳松、死靈の女が連れ行きしか、子を助くるは聞えしが、なぜに夫に武士道を立てさせぬぞよ。女房加古川。

トきつと云ふ。この時ドロ〳〵寢鳥になり、開きし母衣蚊帳、バラ〳〵と返る。この内に芳松、茫然と俯向き居る。後へ加古川、死靈の姿にて顯れる。兩人芳松を見て

宅兵　ヤ、孫めはあれなる蚊帳の内に。

星五　居合すからはお主のお爲、不便ながらも年月揃ふ

宅兵　ア、コレ待つた定九郎、頑是もない子を　相な。

ト星五郎に縋がり、留めようとするを振り拂ひ、走り寄つて白刃を振り上げる。薄ドロ〳〵にて加古川、腕を留める思ひ入れ。星五郎、タヂ〳〵となり、芳松、顏を見上げ

芳松　この子の命を取らんより、同じ年度の姿か生れ、悴

が身替り、母が五臓を
ト加古川の死靈、乗り移りし體にて云ふ。星五郎思ひ入れあつて

星五　年もゆかざる悴が一言、さては死したる加古川が、我か子に附いて詞かはすか。

加古　こちの人。
ト星五郎の胸盡しを取つて

エヽ、聞えぬわいなア。
ト凄き合ひ方。一つ鉦、薄ドロ〱、思ひ入れあつて

二人が仲に儲けたる、たつた一人のこの悴、如何にお主の爲おやとて、逢ふと其まゝ殺さうとは、ヱヽ胴慾なこちの人。さはさりながら殺すも忠義、我が子も助け我が夫の、忠義も立てんと思ふより流れ寄つたる浮死骸、無念の最期も一念殘り、夫の我が子に逢ふまでは、生けるが如きこの屍。五臓も矢張り其まゝに、ほぐれぬ内に胎内あばき、血汐取り得てお主のお爲。サヽ、少しも早う

星五　さては女房が一念殘つて、血汐のお役に立つまでも色も變せず生けるが如く。して、加古川には定業なるか、又は非業の死を遂げしか。

加古　定業ならぬ非業の横死。下部の與五郎惡心きざし、我れに渡せと露谷の重寳、花筐の短刀を、彼れが奪うて殺害なし、殊に彼れこそ高野の血筋、素性の書き物、守の裂れ、他家にて用ひぬ鎌倉錦、疑ひもなき高野の長男。お家の短刀彼れが手にあり、たとへ何國に祕め置くとも、詮議の手蔓は時ならぬ、花の盛りの所こそ、寳の在所と思されよ。我れ亡靈にて告げ知らさん。サヽ、少しも早う、五臓をあばき、我が子を助け、成佛させてたまはれよ。

星五　すりや、加古川を殺したは、以前の下部與五郎め。殊に高野の血筋とあらば、尋ね出して女房が敵。さるにても、無くて叶はぬ年庚の生血、是非に及ばず亡き妻の死骸の五臓を腑分けして

宅兵　あばく其うちこの親は、あの世を助くる鐘撞木に

星五　亡き我が妻の
ト誂らへ早めやうの鳴り物。流れへかゝり死骸を引揚げる。これより下手にて念佛、好みの合ひ方、宅兵衛鉦打ち居ろ。星五郎、手拭にて白刃を巻き、死骸の胸先を貫く。薄ドロ〱、加古川、後にて苦しむ。芳松加古川を見て

芳松　アレ、怖いわいなう。

ト宅兵衛に縋る。星五郎思ひ入れあつて

星五　目にこそ見えぬ苦痛の程も

加古　未練な我が夫、この胸許を

星五　忠義の血汐を

ト胸許より臓腑を掴み出し、手水桶の柄杓に入れ、薬と共に一つに混じて思ひ入れ。

加古　片時も早うお主へ進めて、お前の忠義を

星五　妻の血汐の薬と共に

トこの時平内先に喜六、非人二人窺ひ出て

平内　それくらはしては事面倒。

三人　その良薬を。

星五　おのれは手下の

平内　ソリヤ。

三人　合點だ。

トかゝるを星五郎、見事に投げのけ

星五　舅どのには、お主へ進めて

宅兵　オヽ、合點ぢや。

平内　それを。

トかゝるを星五郎引付ける。薄ドロ／＼、殘りの三人立廻り、加古川後にて思ひ入れ。芳松に乘り移りし體にて、三人を取つて投げちらす。これにて三人奥へ逃げ込む。加古川思ひ入れ。星五郎芳松を見て

星五　さては我が悴の働らきも、死靈の業にてありけるか。

加古　血汐のお役に立つ上は、今ぞあの世へ。

芳松　母樣いなう／＼。

ト縋る。加古川振り切り、薄ドロ／＼、掛け煙硝にて消える。芳松「ワッ」と泣き落す。

星五　さては女房が死靈も去つて

平内　觀念ひろげ。

ト拔いて切りつける。星五郎立廻つて白刃をもぎ取り平内を見事に切り倒す。この時空にて大雷、雨車の音、上の障子を蹴破り、喜六投げられ出る。跡より縫之助に宅兵衛付いて、ツカ／＼と出て、星五郎縫之助空を見てキッとなり、これより早めの合ひ方。

星五　こりや御主人には手疵の惱みも

縫之　いま老人が與へし一葉、血汐は辰の年月日時揃ふ、妻加古川が生血にて、本腹なせしも其方が、悴までも殺さんと、その忠信の志し。

宅兵　さりながら、俄の雷霆はたゝがみ。

星五　正しく奪うて隱し置く、高野の重寶菅家の正筆、

血汐に穢せし咎めなるか。
平内　そんなら肩先切られし血汐、奪ひ取つたる一軸に
ト懐中の一軸を取出す。
星五　さてこそおのれが菅家の正筆。裏返つたる人非人、觀念なせ。
平内　この品持つて
ト駈出すを捕へ、一軸を奪ひとり、見事に平内を切つて捨てる。これにてポンと返る。此とたん縫之助、タヂタヂとして萩垣に行き當り、撞となる。宅兵衛、介抱して
宅兵　娘が貞女に、あなたの手疵も
星五　平癒あれば只今より、主従左右へ
縫之　別れ〳〵に
喜六　うぬをやつては
ト縫之助にかゝる。非人二人、星五郎へかゝるを引付ける。縫之助、花道の方へ行く。喜六、組み付く。宅兵衛、芳松の介抱して
宅兵　お家の短刀
星五　手に入るまでは
縫之　人目にそれと
ト行くを喜六かゝる。見事に振り切り、縫之助をさゝへる非人を星五郎見事に切り倒し、見得。縫之助向うへ入る。星五郎一軸を持ち、刀を拭うて跡見送り、矢張り右の鳴り物にてよろしく
ひやうし幕

九段目　本所石原女夫石の段

役名——盗賊、曉星五郎實ハ斧定九郎。權兵衛女房、おかる。下男、直助實ハ寢廻し與五郎。丁稚、與茂太。一力升屋の勘九郎。植木屋、源次。同、松六。山名家中。北村傳次。大熊官藏。石切り、佛權兵衛實ハ垣坂三平。

本舞臺、三間の間、二重の世話屋體、軒口に伊豫簾の上げ下ろし、牛の御前の祭り提灯。正面、眞中に暖簾、上の方、障子。下の方、鼠壁。門口の外は路地の入り口、上の方へ寄せて一間の二階家。この下には石屋の物置。すべてこの道具、本所石原町石屋の體、上の方に垣を結ひ、櫻の花咲いてゐる。よき

所に德本の畫像を掛け、爰に講坊主、大鉦を打ち鳴らし、町人大勢、德本念佛を申してゐる。おかる、前帶、世話女房の拵らへ。與茂太、前髪にて講中へ茶を運び居る。勘九郞、前幕の女郞屋にて催促に來て居る體。源次、松六、植木屋の拵らへにて、鍬を持ち、門口に立ちかゝり居る。屋體囃子、責め念佛にてよろしく幕明く。

皆々　なまいだ／＼／＼。

　　ト講坊主、鉦を打ち鳴らし

坊主　願以志功德平等一切發菩提心往生安樂國、南無彌阿陀佛々々々々々々々。

　　トよろしくしまふ。

かる　これは、どなたも御苦勞でござりました。サア／＼、お茶上がりませ／＼。

皆々　イヤ／＼、構はつしやりますな。

坊主　時に皆の衆、爰の內の櫻は、とんだ時分に咲いたではござらぬか。

講一　さうサ、不思議な事も

皆々　あるものでござるて。

與茂　モシ／＼、越後には七不思議とやらがあるさうだが、爰の內にも三不思議あるが、お前方は知らつしやるまい

皆々　そりやア聞きたいな／＼。

與茂　先づ一つはあの櫻サ。一つはこの宿親方が、俄に後生願ひになつて、此やうに每日々々念佛講サ、もう一つは旦那さまと、おかみさまが、一所寢をせぬくせに、おかみさまが大燒餠で、旦那が外へ出ると。

かる　エヽ、また阿房云ふのかいの。

源次　コレ、小僧どの、誂らへた燈籠は出來たかな。

松六　燈籠はどうだ／＼。

與茂　エヽ、小やかましい。通らつしやい。

源次　この丁稚め、おいらを

松六　乞食のやうにしやアがる。

與茂　それでも無性に、とうらう／＼と云ふから、通らつしやいと云つたのだ。

かる　これはしたり、モウ、どなたにもてんごうばつかり申します。モシ、植木屋さん、お前方はアノ原庭の寮から、石燈籠を取りにござんしたのかいな。

源次　旦那が今日中に出來る約束だから、取つて來いと云はつしやるゆゑ

松六　わしどもが持ち運びに來ました。

かる　さうでござんすか。追ツつけ權兵衞どのが歸られませうほどに、待つて居て下さんせ。

與茂　待つて居たところが、この頃は、親方が毎日々々念佛で、牛の御前の祭りの世話にばかりかまけて、仕事はおだぶつ……ねぶつと祭のちやんぽんに。これは葱と鮪のすつぽん煮といふ洒落だが、なんと吉原の親方、これでは太皷持ちになれませうか。

勘九　やかましいわい、此てうがふ野郎め……コレ、おかる、先刻から來て居るこの勘九郎には、さつぱり構ひつけないが、この閙花屋敷で、おぬしが親の與一兵衞に、騙られた五十兩、直ぐにその場で取返したところが、いつの間に掏替へたか、みんな似せ金。それから探したところが、親仁の行くへが知れない。跡で聞けば、おかしな噂もあるし、この上は娘のおぬしが、正眞の五十兩は辨まへずばなるまい。それとも否と云ふならば、親仁とぐるになつて、この勘九郎を一杯はめたのだ。さうでなくば、たつた今、正金の五十兩返してもらはう。

かる　ホヽヽヽヽ、ぬしも異な事を云はしやんす。そりや、品によつたらその金は、娘のわたしが返すまいものでもござんせぬが、父さんとぐるになつて、お前をはめるといふやうな、そんな女子ぢやと思うて居やしやんすか。

勘九　サ、さうでなくば五十兩、たつた今返してもらはう。

かる　ぢやというて金は今は

勘九　出來ずばよいワ、おれも吉原で一力升屋の勘九郎、五十兩といふ金を、玉なしにはしない……サア、おかる、おれと一緒に來てもらはう。

トおかるの手を取るを振り放し

かる　モシ、わしに來いとは、そりや、どこへ行くのでござんすえ。

勘九　知れた事だワ。五十兩の金の代りに、勤め奉公に出すのだ。四の五の云はずに來いといふに。

トまた手を取る。おかる、勘九郎の手先を直ぐに持ちかへて、しめ上げる。

アイタ、こりやアどうするのだ。

かる　どうと云うたら勘九郎さん、以前と違ひ主のある、わたしを捕へて厚かましい。例へ女郎にしたところが、それこそお客の此やうに、振つて〳〵振り廻す。

ト勘九郎を振りまはして

手のある女郎と見込んでか、投げたり踏んだりする足のとつくりと洗ひもせず、餘ツぽど惡い

　ト勘九郎を見事に投げる。
目利ぢやわいなア。
　トこなし。勘九郎起上がり
勘九　アイタヽヽ。うぬ投げたな／＼。コレ、どうする
　か見やアがれ。
　ト鉢巻をして立ちかゝる。源次、松六、皆々中へ入り
皆々　マア／＼、待たつしやい／＼。
勘九　否だ／＼。濟まないぞ／＼／＼。
　ト無性にわめく。皆々留める。與茂太「オヽシキ／＼」
　とけしかける。屋體囃子になり、暖簾口より直助、飯焚
　き男にて、米かし桶を持ち出で來り、この中へ入る。
　勘九郎を留めて
直助　これは親方、どうしたものでござります。マア／＼、
　お靜かになされまし／＼。
勘九　否だ／＼。女に投げられては、男が立たない／＼。
直助　ハテマア、其やうに立騒がずと、下にお出でなされ
　まし／＼。
　ト勘九郎を押しすくめて下に置く。勘九郎、直助を見
　て
勘九　コレ、おれを無性に押すくめるが、こなたはマアど
　この人だ。
直助　ハイ、わしはこの間奉公に参りました、爰の内の飯
　焚きでござります。
勘九　ムウ。飯焚きであらうが、何であらうが、こなたは
　どうか物の解りさうな男ぢやによつて、云つて聞かせる
　が、一體此おかるといふ奴が、女のくせに
かゝる、モシ、何と云はしやんす。
直助　ハテマア、よろしうござりまする……モシ、勘九
　郎さまとやら、只今のわつぱさつぱも、臺所であらまし
　聞いて居りましたが、例へ、あなたの方に十分の利はご
　ざりますとも、御亭主の留主に來て、おかみ樣を相手に
　して、もし何事ぞ出來た時には、理を以て非に落つると
　やら、なんと、どなたも、左樣なものぢやござりませぬ
　か。
源次　それ／＼、女を相手に兎やかう云はうより
松六　御亭主が歸らしやつてから
皆々　詰め開きをするがよい／＼。
勘九　そんなら何と云はつしやる。この間まで女達と、暴
　れ歩いた此おかるが
かる　アイ、ちよつとした譯で、權兵衞どのを亭主に持つ

たわいなア。

勘九　何の事だ。そんなら何も女を捕へて、筋を出すでもない、權兵衞どのが歸つた上で、五十兩の金のしらちを附けるとも附けぬとも、勝手にしやんせ。

かる　勝手にしないでどうするものか。

勘九　ハテ、それが悪うございます。マア、あなたは奥へござつて、親方の歸りをば、待つてお出でなされまし。

源次　コレ、松公、横町の六が所へ行つて、祭りのお神酒でも馳走になつて行かうか。

松六　さうすべい〳〵、道具は爰の内へ預けて置いて。

坊主　時に講中の衆、お暇申さうではござらぬか。

講中　お内儀、權兵衞どのが歸られたら

皆々　よろしくお頼み申しまする。

かる　もうお歸りでござりますか。いつもながらお粗末で

與茂　なんのお前、あの位牡丹餅を振舞へば澤山だ。

勘九　コレ内儀、おれにはとんだ手の骨法を振舞つたな。

かる　ホヽヽもう一ツ上げようかえ。

勘九　イヤモウ、たべたも同然。

皆々　サア〳〵、行きませう。

ト屋體囃子になり、皆々は向うへ、源次松六はよき所へ鍬を置きて路地口、勘九郎與茂太は暖簾口へ入る。

おかる直助殘り

かる　直助、聞いてたも。わたしや知りませぬ事を、あぢに搦んで困らせるわいの。

直助　それが彼方の付け目でござります。旦那がお歸りなされたら、とつくりと洗つて、片をつけておしまひなされるがようござりまする。

かる　さうしようわいの。ほんに洗ふといへば、夏中着た單物に染が出たゆゑ、先刻洗濯して置いたが、爰へ干して置かう。

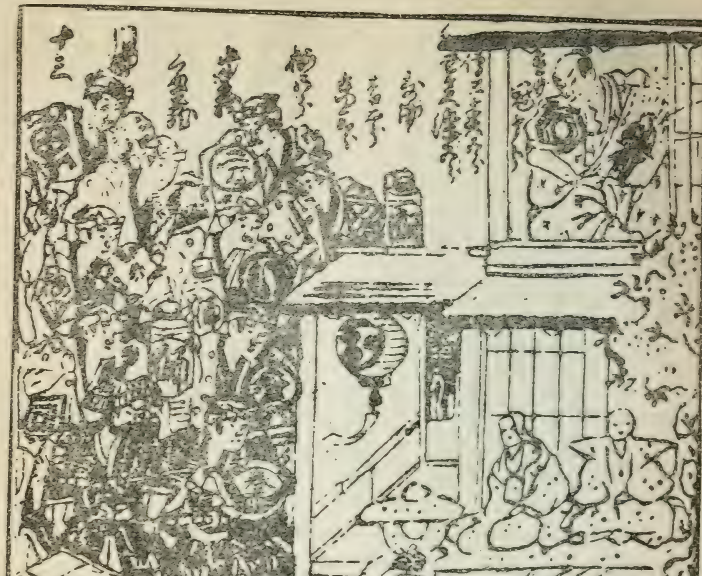
トそこにある衣紋竹へ、縞縮緬の單物を干す。此うち直助、おかるをヂロ〳〵見て

直助　モシ、おかみさんえ。いつやらお話し申しましたが、以前わたしが鳥越に居る時分から、お前樣を見知り越しに知つて居まして、アヽ、さつぱりとしておつな女だと思つたばかり、それからわたしは廻り〳〵て、爰の内へ奉公に、住むと間もなくお前さまに嫁入り。蟻の思ひが天とやら、お前の召上がるお飯を焚くといふは、まんざら御縁のないとも云はれませぬが、おかみさんは、災難と思はつしやりますか。

かる　ホヽヽヽ、直助がじやら〳〵と、何を云うてぢややら。ほんに云やれば、わしも折々、見掛けた事もあつたわいの……それはさうと、こちの人が歸らしやんす筈ぢやが。
直助　モシ、おかみさん、爰の旦那は、よい日の下で生れましたわえ。
かる　そりや、なぜにえ。
直助　なぜと云うたら、片時も、内にお出でなされぬと、お前に其やうに悋氣されるといふは、ほんに男の名聞、あやかり者でござります。
かる　直助が何を云やるやら、悋氣するといふ譯ではなけれど
直助　エヽ、嘘ばつかり、その旦那にあやかる為、わしもちよつと
　ト抱きつく。おかる、こなしあつて
かる　これはしたり、其方、わしをどうしやるぞいの。
　ト振り放すを
直助　サア、抱きつきましたは、お前さまは女のくせに、劔術がお上手と聞きましたゆゑ、御指南を受けやうと存じまして。
　トまた行く手先を捕へ
かる　それほど執心なら
　ト緊めあげようとして、直助の小指にフツと目を付けて
コレ直助、其方、小指をこりや、どうしやつたのぢや。
直助　エ。
かる　何か樣子の
直助　モシ、例へ嫌な男でも、斯う抱きつかれたら、まんざらほぐされも致されますまいな。
かる　ホヽ、嫌らしい取つてのかゝり、其やうに來るとな。
　ト兩人面白き立廻りあつて、おかる、直助を投げて
此やうに投げてしまふわいなア。
　トこなし。直助、顔をしかめ起上がり
直助　アイタヽヽ。ようひどい目に
かる　エ。
直助　イヤ、感心いたしました。
　ト思ひ入れ。摺り鉦入り、祭の鳴り物になり、向うより、權兵衛、前幕の珠數を首に掛け、祭の世話人の形にて出で來り、直ぐに内へ入り
權兵　ヤレ〳〵、忙しない事だ。モウ〳〵、再び祭の世話

なぞするものではない。コレ。おかる、もう講中の衆は
歸られたか。
かる　わたしや知らんわいなア。
トつんとする。
直助　そりや始まつた。
權兵　何かに取紛れて、今日はまだ日課も繰らなんだ……
ドレ、お念佛を
ト徳本の畫像に向ひ、鉦打ち鳴らし
南無阿彌だんぶつ〳〵〳〵〳〵。
かる　モシ、こちの人、お前、其やうに外歩きする約束で
はござんすまいがな。
ト權兵衞ちよつと此方を向いて
權兵　それだと云うて、今日は祭の宵宮ゆゑ、いろ〳〵さ
まざまな用があつて……南無阿彌だんぶつ〳〵〳〵。
かる　エヽ、おかしやんせ。その祭の世話役をかこつけて
直助　左やう〳〵、どこへお出でなされて、どのやうなお
祭を渡つしやる事が知れませぬて。
かる　ツイ半時が一時、一時が夜泊り、日泊りにならうも
知れぬわいな。
直助　それ〳〵、夜泊りが日泊り、一月が二月、二月が三
月、三月が四月、四月が五月、こりやアどこまで云つて
もこの通りだ。
かる　それではモシ、こちの人、此やうに夫婦になつた甲
斐があるまいぞえ。
權兵　ハテ、一旦詞を番うた上は、たとへ夜泊り日泊りを
しやうが、其方の疑ひの晴れるまでは、なか〳〵側を離
れる事では……南無阿彌だんぶつ〳〵〳〵。
かる　さう云はしやんすが、女子の狹い心ではナ。
權兵　コレ、それはおぬしが、愚痴といふものだ。南無阿
彌だん佛〳〵。
かる　エヽ、モウ、念佛もおかしやんせいなア。
權兵　其方の愚痴もおきにしやれ……南無阿彌だんぶつ
〳〵〳〵。
かる　お前の念佛もおかしやんせ。
權兵　エヽ、やかましいて、めえの念佛もおきにしやれ。
かる　お前の愚痴もおきにしやんやんせ……南無阿彌だん
ぶつ〳〵〳〵。
トおかる、烟管を撞木にして煙草盆を叩き立て、あち
こちになる。
直助　モシ〳〵、こりやア燒餅喧嘩へ念佛が移つたのか

念佛へ燒餠喧嘩が移つたのか。さつぱり分りませぬ。
兩人 ヤア。
直助 憚りながら、お若いとは申しながら、ちつとお前さま方も、お嗜なみなされまし。
かる ほんに、さう思やるも尤もぢやが、主と夫婦になつたのはな。
權兵 コレ……モウ〱、この後遠出もせまいほどに、勘忍しやれな。
直助 そりやこそ旦那の方から折れて來た。晩の御膳は斯うヤワ〱と、味く焚いて上げませうよ。ドリヤ、お相伴に、白水を流して來ようか。
ト屋體囃子かすめて直助、米かし桶を持ち、門口路地の内へ入る。兩人殘り、こなしあつて
かる モシ、こちの人。お前はこの頃は、間がな隙がなお念佛を唱へなさんすが、どうした譯でござんすぞいなア。
權兵 これには段々譯のある事……兎角有り難いは德本樣の御名號、時ならぬ庭の櫻、あのやうに咲くといふも、佛の功力、なんと有り難い事ではないか。
かる 成る程、さう云はしやんすりや、さういふ事もあらうわいなア。
權兵 時ならぬといへば、あの單物は誰れのぢや。
かる あれはわたしのぢやがな、夏中人に貸したら染が出たほどに、摘み洗ひをしたのぢやわいなア。
權兵 ア、好い縞縮緬ぢやわい。
トこの時七ッの鐘鳴る。
かる ありやモウ七ツ。ドリヤ、仕掛けた仕事してしまはうかいなア。
ト唄になり、おかる、奥へ入る。跡合ひ方、權兵衞殘り、思ひ入れあつて
權兵 高野の爲とて殺したる、妹の浮橋、忠義が却つて不忠となり、この身の素性、現在主人を……南無阿彌だんぶつ〱。
ト念佛唱へて居る。聖天になり、向うより北村傳次、前幕の侍ひにて、中間一人付き出で來り、門口へ來て
傳次 石屋權兵衞は在宿いたすか。
ト權兵衞、門口へ來り見て
權兵 これは〱北村傳次さま。サア〱、見苦しくとも此方へ入らつしやりませ。
傳次 然らば許しやれ。
ト内へ入り、上の方へ住ひ



初演の絵番附

時に早速、承はるは、おてまへ、申しつけたる大殿の石碑は、出來いたしてござるかな。
權兵　御覽の通り五輪は出來仕りましたが、巡りの玉垣が少し殘つて居りますが、いづれ近々のうち出來上がりまするでござります。
傳次　一日も早う石碑成就いたすやう、賴み存ずる。
權兵　ハイ〳〵、隨分出精いたすでござりませう。
傳次　それにつき、密かにおてまへへ賴み置いた、彼の高野の御血筋、又二つには一軸の詮議、手掛りてもござるかな。
權兵　私しも內々詮議仕りまするが、今以て一軸は相知れませぬが、血筋のお方は、少々心當りもござりますゆゑ、追ツつけ尋ね出し、お知らせ申すでござりませう。
傳次　それは重疊々々。身共もこの節、彼の淺草邊にて、與五郎と申す者、主人加古川を殺し立退きしゆゑ、この如く人相書にてお尋ね者。又一つは、この程世上に噂のある、盜賊曉星五郎といふ者、四十餘人の手下を從へ武家屋敷へ亂入する由。主人山名の館へ這入りしも、正しく彼れらが仕業、即ち星五郎が人相書。この二枚を渡す間、おてまへ、古傍輩のよしみを以て、密かに詮議してくりやるまいか。
ト人相書二枚渡す。權兵衞、思ひ入れあつて
權兵　折角のお賴み、見當るか見當りませぬか、何れ心懸けて見ませう。
傳次　イヤ、承はれば鹽谷の次男縫之助、狂氣いたしたと申す噂。彼れめも御主人島五郎さまを討たせたる、盜賊どもと一つ穴、見つけ次第に容赦なく、片附けてしまふが、何かの近道、古主へ忠義。
權兵　左樣なら私しも……思はず不忠の
傳次　エ。
權兵　承知仕りましてござります。
傳次　萬事其許をお賴み申す。身共はお暇申さう。
權兵　これは餘りお麁末でござりました。
ト門口へ傳次出て
傳次　然らばくれ〳〵も、右の詮議をお賴み申す。併し、骨折はおてまへの手柄で、褒美は身共が申し請けるて。ハヽヽヽ。
權兵　これはようお出でなされました。
ト入相の鐘、かすめたる屋體囃子にて、傳次に中間付いて向うへ入る。跡合ひ方、捨て鐘、權兵衞思ひ入れ

あつて
この人相書に記したる、曉星五郎といふ盜賊も、妹浮橋が末期の一言。世上の噂、彼れこれ思ひ合すれば、これが慥かに……南無阿彌だんぶつ／＼……ア、コレ、もう日暮れになるに、行燈でも灯さぬか。

ト行燈へ灯をつける。合ひ方にて暖簾口より、勘九郎出で來り

勘九　權兵衞か。おらア貴樣の歸りを待つて、奧で一寢入りやつて居たが、もう日が暮れたな。

權兵　お前は勘九郎どの、わしが歸りを待つて居たとは、何ぞ用でもござりますかえ。

勘九　用といふは外でもない。聞けば女達のおかるを、こなたが女房に持つて居るといふ事だが、して見れば、あれが親の與一兵衞は、貴樣の爲には舅だの。

權兵　知れた事サ。女房の親なら舅に違ひないが、それがどうしましたえ。

勘九　サア、其こなたの舅親の與一兵衞が、この間惡い事をした上に、この勘九郎に似せ金を、五十兩掴替へて掴ませ、かいくれ行くへが知れない。この頃聞けば、死んだといふ噂もあり、さすれば掛る所は娘のおかる、其おかるを、女房に持つて居るこなた、差詰め相手にして、この筋道を分けてもらはねばならぬ。

權兵　そりや、事と筋によつてなら、筋道を分けまいものでもないが、して、どうすればよいと云はつしやるのだ

勘九　どうといつたら、こなたが正眞の金を五十兩、耳を揃へて濟ますとも、それがならずば女房のおかるを、金のかたに勤め奉公に出すとも、二つ一つの返事を、たつた今聞かして下さい。

權兵　勘九郎どの、腹を立たつしやるな。おかるが親の與一兵衞、惡手な事を働らいて、こなたに似せ金を攫ませたにもしろ、今になつては死人に口なし。貴樣ほどの者が、胴脈を請取るといふも、ちつと不念であつたなア。それをこの權兵衞に、藪から棒にたつた今、五十兩償へとは、そりやア横であらう。

勘九　ナニ横なものか。こなたの爲には舅親、似せ金遣ひの親を持つたが不肖、嫌々ながらも出る所へ出ねばならぬ。それとも女房のおかるを、金の抵當に勤め奉公に出すか。

權兵　あのおかるは、ちつと義理のある女房。どうもさうはなりませぬ。

勘九　ならずば金で今返すか。

權兵　それだと云つて今が今、どうして金が

勘九　出來ずばよいワ。こなたの親は似せ金遣ひと訴人をしようか。金を寄越すか、女房渡すか。權兵衞どの、二つ一つの返事が聞きたい。

ト きつと云ふ。權兵衞當惑のこなし。よき時分、路地口より直助出て來り、門口にこの樣子を聞いて居て、この時ズッと內へ入り

直助　旦那樣、五十兩の金、わたしが貸して進ぜませう。濟ましておしまひなされまし。

ト縞縮緬の財布より五十兩を權兵衞が前へ置く。權兵衞思ひ入れあつて

權兵　ヤア、、直助、五十兩といふ大金、どうしてこなたが

直助　持つまいとも云はれませぬ。例へ一季半季の奉公人でも、人は心懸けさへよければ、五十兩はおろか、地面地屋敷でも持たれます。家來の私しが親方の、今の切端を見るに忍びず、御用立てまする。決してお心遣ひには及びませぬ。サア、お遣ひなされませ。

權兵　志しは忝ないが、どうも其方のこの金は

勘九　コレ、方を付けずば、これから直ぐに

權兵　ヤ。

勘九　似せ金遣ひの訴人をしようか。

ト 立ち上がるを權兵衞留めて

權兵　直助、この金借りたぞ。

直助　丁度員數も五十兩。御念には及びませぬ。

ト權兵衞、財布より金を出し、改めて

權兵　サア、勘九郎どの、正眞の五十兩。改めて受取らつしやい。

ト金を前へ出す。勘九郎取つて改め見て

勘九　ムウ、今度は正眞の五十兩。ヤレ／＼、これで落付いた……とは云ふものゝ、高が飯焚きの奉公人が、五十兩といふ大金を。

直助　どうしました。

勘九　イヤ、慥かに受取りました。

權兵　コレ、それで云ひ分はござるまいが。

勘九　云ひ分は隨分ある。

權兵　そりや何が

勘九　こなたの女房に最前、ひどい目にあつた。

直助　又おかみさんを呼んで來ようか。

勘九　イヤ〳〵、それには及ばぬ。お暇申す。

ト勘九郎は金を懐へ入れ、足早に向うへ入る。兩人跡見送り、思ひ入れ。

直助　旦那様、あれおやアうるさく、もう參りますまい。

權兵　思ひもよらぬ女房の、親の出入りのある金を、飯焚き男の直助が、濟ましてくれた五十兩　恩借の金の證文、主人から家來のおぬしへ、遣はさずばなるまい。

直助　成る程、あなたがそれ程に、思し召しまするなら、文言には、ちつと望みがござりまするて。

權兵　そりやモウ、恩借の五十兩、何とでも書かうほどに、サア、その望みを云つて見やれ。

直助　左樣なら申しませうが、證文お書きなされるなら、あのお內儀のおかるさまを、金が濟まずば私しに、遣らうと書いてあなたの印形、お捺しなされて下さりまし。

トきつと云ふ。權兵衛思ひ入れ。合ひ方になり

權兵　エ、アノ、女房をか。ハテ、捻つた望みの。併し、あの女は、ちつと譯があつて、外へというては手放し憎いが、そりやハヤてまへが望みなら、その通り書くまいものでもないが、あの女にも話した上で、證文も書かうが、其うちも念の爲、假手形でも遣つて置かうが、あれが印形は、この守の內に入れて置いた。

ト襟に掛けし先達ての財布と守り袋を出して置く、直助見て

直助　ヤ、その守は、どうして旦那が

權兵　こりやアこの頃拾つて來た。

直助　エ、。そりやどこで拾はつしやりました。

權兵　淺草の新鳥越で。

直助　エ、。

權兵　拾つて歸つたその跡は、何かモヤ〳〵した噂、何でもないが、これが廻つた。

ト件の與五郎の畫姿を出す。

直助　ヤ、それや猿廻しの與五郎。

權兵　人相畫いてのお尋ね者に、どうか似寄りの飯焚き直助、借金證文望みの通り、書きは書かうがその代り、此お尋ねの與五郎も、てめえに尋ねてもらはざアなるまい。

直助　主人の仰しやりつけなれば、如何にも御用は足しませうが、人の訴人は、こりやどうも致されますまい。

權兵　成る程、云やればそれも尤も。併し似寄りのおぬしゆゑ、

直助　ハテ、似た物は烏とやら、似たのはいくらも世間には

權兵　面體似寄りはまゝあるが、これもよく似た財布の縞柄。

直助　して、わしが財布の縞が、何に似ました。

權兵　女房が浴衣のあの縞に、よくも似寄りのこの財布。

直助　エ、浴衣の縞にその財布。

ト吊せし單物と財布を引合せ見て

成る程、お內儀おかるさま、あなたの召した、お浴衣の裂れに似寄つたこの財布。

權兵　縞の財布の五十兩、あの三圍の鳥居前。

直助　イ、エ、財布は昔から、持ち傳へたる古財布、またそれよりは旦那樣、疑ひ掛けるはその守、鎌倉錦の桐唐草、正しく內には年月日時。

權兵　覺えがあれば高野の血筋、それをてめえは詳しく知つてか。

直助　わしが落した守ゆゑ、內の書き物存じて居ります。違はぬところが持ち主の、證據の爲に私しが、申すを其方で旦那樣、引合せて御覽じまし。

權兵　覺えがあらば其方で云やれ。違はぬ時は返してやらう。

直助　有り難うござります。

ト權兵衞は行燈の側で守り袋を開き、見て居る。

延慶元年四月四日誕生の男子……外に一字も餘所事は、一切書いてはござりますまいがな。

ト權兵衞聞いて

權兵　成る程、てめえが云ふ通り、一字も違はぬ守の書附け。ムウ

直助　それが何より慥かな證據。サ、お返しなされて下さりまし。

權兵　して、この裂れの紋からは。

直助　鎌倉錦の桐唐草、師直さまのお物好き。

權兵　それを存じた直助は。

直助　下郎ながらも高野の血筋、今は飯焚き召使ひ、旦那ながらも石切り權兵衞、おれが屋敷へ出入りの町人。

權兵　そんならわれが……イヤ、飯焚きの直助さまが、お出入り屋敷の高野の血筋。

直助　外戚腹でも落し胤、家を起せば卽ち大殿、武藏守ともなるのはおれだ。さすれば旦那もその時は、わしに三拜するのは眼前。緣は異なもの、變つたものサ。

權兵　そんなら家來の直助は、養父の親の主家たる、高野の血筋じや。

直助　ヤ、養父の親とは、して又高野の家中にて

權兵　親どもの家名は垣坂氏、伴左衞門が悴なれど、實の親は他家の家中に。

直助　さう聞くからは、この直助は主筋にて、師直さまの若殿だワ。

權兵　その若殿のあなたでも、主を殺せば天下の科人。

直助　ナニ、この直助を主殺しとは。

權兵　主に連れそふ加古川どのは、云はばこなたの主人も同然、それを手に掛け變名して、惡者なれど與一兵衞を殺して取つた五十兩、財布の裂れも女房の、浴衣の共裂れこれ證據、それゆゑ廻るこの晝姿。これでも覺えがござらぬか。エヽ、こなたはなう。

トきつと云ふ。

直助　それも思はぬ出來心、親仁を殺して五十兩、元は男が摺替へた、金の代りで云はば五分々々。併し只今申したる、親が高野の家來なら、おぬしもおれと遁れぬ主從。鹽谷の家來が連れそふ加古川、父の敵の端くれと、殺して所持する短刀は、再び鹽谷の家國を、引起させぬ爲ばかり。

權兵　すりや、その短刀を所持してござるか。

直助　隱して置くとも迂濶に云はれぬ。それもいつぞや山名の館へ亂入なしたる盜賊ども、高野の重寶菅家の正筆、奪ひ立退く上からは、正しく彼れらは鹽谷の浪人、斧が悴の定九郎、今のその名は曉の、星五郎といふお尋ね者。

權兵　そんならあなたが短刀の、在所は知つてござりますね。

直助　サア、迂濶には云はれぬ。さりながら、いよ／＼家中の悴にて、主と思へば女房のおかるを、向後妾とも、お伽になされとおれにくれるか。

權兵　イヤ、おかるは譯あつて、外へ遣られぬ義理ござれば。

直助　そんなら今のその財布、證據の守も。

ト寄るを押へて

權兵　この守と財布も共に、主のわしが預かりませう。

直助　そんなら此方も今云つた、彼の短刀の在所も滅多に

權兵　云ふに云はれぬ難題の、女房の無心も當人に、話した上で

直助　相談極めて挨拶しやれ。
權兵　いづれ返事をするまでは、矢張りお前はこの內の
直助　飯炊き直助。
權兵　主人は權兵衞。
直助　長らくお內に
權兵　奉公しやれ。
直助　ハイ、致しませうが、證據の守も
ト立寄つて取らうとする。權兵衞その手を拂ふ。立廻りに兩人とも左の小指のなきを互ひに怪しみ、思ひ入れあつて
直助　旦那の小指も
權兵　下男の指も
直助　切つて間もなき
權兵　どうした怪我で
直助　こりやア薪割りで大きな怪我を
權兵　ヤ。
直助　ハイ、左でよろしうござりました。
ト唄になり、直助思ひ入れあつてツイと奧へ入る。權兵衞、書姿守り袋財布、三品を持つて跡見送り
權兵　この書姿に違はぬ面體。殊に小指の樣子といひ、疑ひもなく親仁を殺し、奪ひし今の五十兩、おかるに話さば親の敵。證據は卽ち縞の財布、守の素性は高野の血筋云はばお主のあの直助、妹が爲にもお主筋。さはさりながら塩谷の血筋、絕す心になつたるは、主人と知らぬ……ハテ、かんじ搦みなこの身の上。
ト思ひ入れ。唄、時の鐘、奧よりおかる、枕を持ち、跡より與茂太夜着蒲團を持ち出で來り權兵衞を見て
かる　旦那どの、爰にござんしたか。わたしや爰へ床を取る程に、お前も早く寢やしやんせ。
權兵　ア、何か、おれにも床へ入つて寢ろと云ふのか。
かる　イ、エイナア、一緒に寢ぬといふは、お前も承知の夫婦仲、いつもの通り、あの二階へ行つて寢やしやんせいなア。
與茂　モシ旦那え。あの二階へ、あちらから廻つて、お床も取つて置きました。早く行つてお寢なされませ。旦那から方を付けぬと、家來が寢られぬ。氣をきかして早く寢太郎としたいね。
權兵　たわけづらめ。われは臺所をよく片付けてから臥せれ。
與茂　なにサ、臺所は飯焚きの直助とのが、どうかしやす。

明日からはぶん流しても、葭町へは向かない若衆だね。

權兵　べら坊め、主の云ふ事を

與茂　オットいきみんたん。御用ならこの間に。

　ト與茂太は奥へ入る。

かる　イヤモウ、今日はお祭ぢやの、行者講ぢやのと、いかう草臥れたほどに、早う爰へ床を敷いて

　ト蒲團を敷き夜着を出し、六枚屏風を立て、行燈を直し、枕を二つ並べる。權兵衛、ヂロ／＼見て思ひ入れ。

權兵　コレ／＼女房、枕を二つ並べたは、今夜はわしを

かる　アイ、枕ばかりを此やうに、並べて二つ置いたのは、亭主を持つた女房の義理。寢なさんすなら寢所は別々。枕が一對並んだで、御祝儀は濟んだ。サア、これを持つてお前は二階へ。

　ト枕を取つて渡す。權兵衛取つてこなし。

權兵　アヽ、そんならどうでも、別れ／＼に寢るのか。

かる　アイ、それも隨分間を隔て、二階と下の天の川、淨瑠璃ならば妹脊山、離れ／＼の箱の內、思ひの絶えぬ女夫合ひ。

權兵　名代もないふられ客、これでは明日は早々に、晝の間は仲のよい、夫婦の仲で燒もち喧嘩、夜は他人に劣つた寢所。ハテ、ひよんな女房を

かる　エ、

權兵　ドリヤ、おしげりなされうか。

　ト唄になり、枕を持つて權兵衛二階へ上がり、障子しめる。おかる跡見送りて

かる　必らず明日の朝までは、爰へ來て下さんすなえ……ほんに門を締めて

　ト門口のかき金を掛け、いろ／＼思ひ入れあつて床の上へ上がり、横になつて、指して居る件の割り笄を取つて、よく／＼見て

わたしが立つる心中の、殿御といふはこの笄……モシ、なつかしうござんす。一度添ひ寢の男でも、二人枕は交さじと、心も帶も此やうに、しやんと錠前卸ろしても、思ひがけない父さんを、人手に討たれしその敵が、討ちたい願ひに疑ひを、掛けた男はこの家の主。それゆゑ爰へ縁づき、帶紐解かぬ女夫仲、それもお前に心中を、立つるわたしが心根を、いづくいづれにござんすとも、ちつとは推量なされませ。モシ、わたしやこれほど焦れまするが、女の念は屆かぬか。夢になりともお前のお顏を

どんな殿御ぢや拜みたい。逢ひたうござんす。モシ、なつかしいわいなア。

ト件の笄を持つて、よろしく思ひ入れあつて

それにつけてもこの程より、來て居る下男の直助が、小指が、慥か……ア、思ひは絶えぬものぢやなア。

ト本釣り鐘誂らへ凄き琴入りの合ひ方、所々蟲の音。九ツの拍子木打つ。おかる、枕許へ行燈を置き、夜着を掛けて寢る。この鳴り物にて、向うより星五郎、黑の頰冠り、前に隱しつきの誂らへ頭巾、黑絹股引、無紋の小袖、紫のしごきを腹帶に締め大小切わらぢ、腰に袋入りのもぢりを指し、鎖鑓繩帶に挾み、小さき龕燈を照らし、窺ひ／＼出て來り、花道にて件の龕燈にて舞臺の櫻をキッと見て

星五　往來の噂に違はざる、この家に咲いたる櫻の一木、秋の內より聞きしは、もしや死靈の加古川が、敎へ置いたる詞に違はず、花筐の短刀、この家に隱しあるといふ我れへ知らせの花の不思議か。さるにても心得ぬは、渡世は石切り、その町人の家に、尋ぬるその品が……我れもいつぞや山名家にて、奪ひ來りし高野の重寶、菅家の正筆、肌身離さず

ト一軸を取出し

さるにもて、心憎きはこの家の內。

ト一軸を懷中して、窺ひ／＼門口に立ちより、戸へ當り、思ひ入れあつて、この時もぢりを出し、戸をこぢる。內にはおかる、蟲の音の止みしに耳をそばだて、顏を上げて

かる　今まで鳴きし蟲の音の、一度にやみしは

ト思ひ入れ。この時戸をこぢる。音バッタリとする。おかる恟りして夜着をかぶる。此うち星五郎、戸をこぢて、ソッとかき金もたげ、戸を押明けて內へ忍び入る。櫻の方へ行かうとして、臥したるおかるの樣子を見て、行燈の明りにて、指したる笄に目を付け

星五　臥したる女が頭の笄。

トよく／＼見んと手を延し、取らうとすると、おかるその手をキッと取らへる。星五郎ギョッとする。

かる　女の寢間へ忍びしは、慥かに直助、證據の目印。

ト直助と心得、指したる笄を取つて、星五郎の腕へ突き立てる。星五郎タヂ／＼となる。おかる、逃がさじと引寄せ、あかりにて星五郎の顏を見て、恟りして

ヤ、直助ならぬ見馴れぬお人。さてはお前は

星五　東風吹かば、沖津白浪龍田山、唐土にては緑の林。
かる　エ、緑の林とあるからは、門から入りしこなさんは
星五　盗人ぢや。
かる　エ。
星五　女に稀れなる大丈夫、この手へ刺した笄の
かる　憎い男のいたづらは、後日の爲と突き立てし
星五　その笄の模様は確かに、後藤が細工の雪折れ笹、八重の象眼、覺えの一品。
かる　エ、それを詳しく知つたる盗人……イヤ、盗人さんは、よくマア御存じ。
星五　見覺えの笄を、所持して歩く盗賊も、云はば邪ま非道でない、金銀衣服に目も掛けぬ、仔細あつての今の身は、お主の爲の矢尻切り、忍べば臥したる女が笄。心覺えは此方にも、所持の笄、覺えがあるか。
ト差したる刀の割り笄を取つて見せる。
かる　ヤ、、寸分違はぬ割り笄。これを所持して居やしやんす、盗人さんは、もしやいつぞや播磨路にて、ざこ寝のありし御社の
星五　身もその節は御代參、瑜迦山より歸り道、立寄り窺ふ暗紛れ、男女の參詣入り亂れ、側なる女に戲むれの

かる　洒落が高じて恥かしい、ついした事の假枕、お情受けし殿御より、重ねてまみゆる印ぞと、下さんしたるこの笄の
星五　それを證據に逢はんぞと、東の白むを待つうちに、鎌倉表に御大事と、聞くより其まゝ氣も散亂。
かる　お別れ申せし事なれば、お顔も知らぬ戀人に、尋ぬる心中今日が日まで、外の男を持たぬのも、貞女とやらを思ふから、心に卸ろす錠前も
星五　身共に立てる女氣の、妻もある身を白浪の
かる　エ、
星五　サ、夜も白浪と露ほども
かる　知らで焦るゝ闇の内、窺ひ寄つた、さてはお前は
星五　鹽谷浪人、斧の伜、定九郎と云ひし者、いま變名して曉の、星五郎といふ、配符の廻りし
かる　すりやアノお前がお尋ねの
星五　コレ……して又其方は。
かる　わたしが親はお下の百姓、殊に鹽谷のお屋敷に、お末ながらも勤めたる、かると申した部屋方者。
星五　さては屋敷に勤めた其方。
かる　ゆかしいお方は窺ふ盗人。

星五　尋ぬる女の在所と知らず
かる　闇をたどりて暗き夜に
星五　忍び入りしも結ぶの神
かる　導きたもふ
星五　今日今宵。
かる　ようマア盗みにござんしたなア……モシ、女だてらに帶留へ、卸ろした錠もお前へ心中、お目にかゝつた上からは、わしが心は上の空錠。あなたの鍵にてしつかりと、モシ、必らず見捨てゝ下さんすなえ。
ト帶の鍵を取つて側へ捨て、星五郎へ縋つて思ひ入れよき時分權兵衞、二階の障子を明け、手燭を隱し、星五郎の畫姿を、この明りにて見くらべ、下家の方を窺ふ。
星五　我れも打捨て置かねども、願ひあつての今の身は、世上を憚る事あれば
かる　名乘り逢ふのが笄の、割符と知つてこの手疵。わたしもお前の笄にて
ト星五郎の笄にて左の腕を突く。
腕の疵も二人一緒に。モシ、これがお前へわたしが心中
ト笄を拔き、星五郎へ渡し、疵口を手拭にて結へる。

星五　星五郎、笄を取つて
星五　流石は武家へ奉公の、女が氣性を見るからは
かる　女房といふも不束な、わたしながらもお寢間のお伽
星五　隱さでいへば某も、妻子ある身でありけるが、それも女房は世を早う
かる　そんなら奧さま、加古川さま
星五　人手にかゝつて。
かる　エ、すりや、定業ならぬ
星五　横死を遂げし上からは、見やる通りの身が世渡り、鬼の女房になるのが承知か。
かる　アイ、鬼神と異名を取ればとて
星五　そんなら今から女房おかる。
かる　夫のその名は定九郎さん、嬉しうござんす。
星五　盜人冥利、見捨てはせぬが、そちやこの家の女房でないか。
かる　それには段々譯あつて、この家の主の側を離れぬ
星五　男に持つたか。
かる　イエ〳〵、敵と疑うて
星五　ナニ敵とは。
トこの時二階にて

権兵　間男見附けた。
星五　ヤ、なんと。
　ト二階を見上げる。
かる　そんなら、お前は何かの様子を
権兵　下家の話しで目が覺めた。晝の亭主が見附けた間男。
　そこへ行つて近付きになりませう。
　ト合ひ方變り、下りて來る。
星五　すりや此お方が、お内の御亭主。
権兵　佛権兵衛と申しまする石切り商賣、晝ばかりでも女房の、寝間にござつたこなさんは、云はずと間男。
星五　イ、ヤ、身共は盗人でござる。
権兵　エ、アノ、お前が。
星五　云ひ交したる女の行くへ、尋ねし所が此お内、迎ひがてらに忍びし庭先、今を盛りの櫻花、一荷に荷ふ花盗人、貰うて爰を開きませう。御亭主、盗みに來ました。
権兵　そんなら女房を、盗みにこなたが。
　さう心得てもらひたい。
かる　わたしもあなたに、盗まれて行きたうござんす。権兵衛さん、さう思うて下さんせ。
権兵　すりや、敵の手蔓が知れての事か。

かる　イ、エ、手蔓は知れねども
星五　身共が方へ引取つて、敵の手がゝりあるならば
権兵　お世話はさらば此方も苦抜け。この程三圍鳥居前、親仁のその名も與一兵衛、殺して取つた五十兩、死骸の口に喰ひ切る小指、わしもその日に誓ひの爲、切つた小指の間違ひで、よんどころなく引請け女房。
かる　亭主といふは表向き、肌身離さぬ五條袈裟、掛けて居るのがお前へ心中。
　ト肌を脱ぐ。袈裟を掛け居る。星五郎見て
星五　女はかゝる潔白な、證據があるが御亭主は。
権兵　わしも掛けたるこの珠數の、異名も佛権兵衛に、思はぬ敵と疑ひの、それさへ晴るゝものならば、直ぐに坊主と觀念して、女房は持てどしつかりと、帶へ挾みし錠前の
かる　情を立てたが、わたしが念願。
星五　その錠前を捻切つても、女は向後盗人の
権兵　連れてござらば女房の、男が譯ある五十兩。して、その金の出所は
星五　その金出しても連れ行く女。
権兵　イ、ヤ、金でも渡しませぬ。慥かにこなたの仕業ぞ

と、星をさしたる高野の重寶、菅家の正筆、女が手切れに。

星五　ハテ、町人に似合はぬ望み。身共が一軸所持なすを

權兵　目極めて云ふその無心、それを渡さば此方から、去り狀即ちこの畫姿。

ト件の畫姿を出す。星五郎見て

星五　これぞ當時のお尋ね者、その名も曉星五郎、その盜賊の人相書。

かる　すりや、その畫姿が正しくお前の

星五　さてはそれゆゑ身が方に、高野の一軸あらんの疑ひ。さほどに思ふものならば、此方も詮議は櫻の根許。

權兵　時を違へし歸り咲き、わしも怪しく思へども、外から來たる盜人どの。こなたも花の咲きたるを

星五　詮議は横死の加古川が、死靈の知らせにお家の短刀、正しくあれなる櫻の根許。

權兵　鹽谷の寶と聞くからは、此方もちつと心當り、主のわしが根許の詮議。

星五　イヤ込み入る盜賊に、是非に櫻の

かる　コレ待つた。

星五　エヽ、面倒な。

ト有りあふ鍬を持つて來り、立ちかゝる。權兵衞も鍬を取上げ、立寄るを、おかる留める。此うち二階へ直助出かゝり、下家を窺ひ、よきキッカケに鳴り物になり、兩人鍬にて櫻の根許を掘り返す。立廻り。おかる、この中へ來り、兩方を留める事。トヾ兩人、櫻の根許より白木の箱を掘り出し、おかる手早く取つて

かる　櫻の根許に白木の箱の

權兵　埋めありしは何者か

星五　これぞ正しく

ト箱を取つて打ち碎く。中より短刀出る。

さてこそお家のこの短刀。

トこの時懷より袱紗包みの一軸を落す。權兵衞手早く取つて

權兵　桐唐草のこの袱紗、これぞ正しく菅家の正筆。

直助　桐唐草とは高野の家に

星五　傳はるところのその一軸、山名の家にて奪ひしその品。

直助　それさへあれば、家を起して

かる　ありや直助が

權兵　この品持つて。

ト一軸を二階へ投げてやる。直助取つて

直助　こりやコレ一軸、菅家の正筆受取つた。

星五　ヤ、、一軸を

直助　彼奴ら夫婦を、殺らして後より

權兵　心得ました。

星五　怪しい曲者。

ト行かうとする。直助、障子ピツシヤリさす。權兵衞、星五郎を留める。この時件の財布、守り袋、權兵衞の懷より落ちる。星五郎は守、おかるは財布を拾ふ。兩人思ひ入れあつて

かる　こりやコレわたしが浴衣の裂れと、同じ財布は父さんを、殺した證據の慥かな手掛り。

星五　鎌倉錦の桐唐草、いま一軸を包みし袱紗と、同じ模樣の守の紋柄。

權兵　それぞ高野の血筋の證據。

星五　ヤ、なんと。

權兵　財布はおかるが父親を、殺せし科人、あの與五郎。

かる　すりやアノ下男の直助が

權兵　師直どのゝ落し胤、證據は即ちその守。わしも高野家出入の町人、その上鹽谷縫之助、尋ね出して失ふ心。それゆゑにこそ妹浮橋、懷胎せしは鹽谷の血筋、不便ながらもこの兄が

かる　さてはお前は、現在妹を

權兵　手に掛けたるも鹽谷の跡目、立てさせまじき我が存念。

星五　さすれば現在お家の仇。

權兵　此方も高野のお家の仇、胤を宿せし妹さへ、不便や兄が手に掛けたれば、打洩らしたる縫之助、尋ね出して命を貰ふ。

星五　お主に敵たふ石切り權兵衞、相手は町人不足でも、命は貰はにやならぬ仕儀、親の讓りの千壽院、刀の封切り、命の瀨戸。

ト封印切り、立ちかゝる。この時件の短册落ちる。權兵衞目を付ける。おかる、この中へ入り、兩方へ心遣ひあつて

かる　お二人待つた。

兩人　女房、なんで留立てする。

かる　サア、その女房とお二人の、詞は違はぬ二人の夫、肌は觸れねどお前も夫、お前は枕交せし夫、譬へて見れば車の輪、巡る兩輪のお二人さま、もしや一方凶事あつ

ては、あれこそ添ひ寢をした夫と、サア、世の人口はいとはねど、どちらをどちと分けられやう。留めねばならぬ二人の殿御・義理と情に搦まれて、中に立つ身のわたしが術なさ、思ひやつて下さんせいなア。

星五　イヽヤ、邪魔いたすな某は、女が色に引かされて、主へ刃向ふ町人は、見遁がし置かれぬ。

權兵　おれも女が留めればとて、敵の末は根を絶つて、葉を枯らすのは佛にあらぬ、爪ぐる珠數も古主の仇、切つてこの場で

　ト件の珠數を切つて棄てる。

相手にならう、汝入る盗人。

星五　斯くまで根強き佛權兵衛、佛の命も貰ふ盗賊、身共が刀の

　ト立ちかゝる。おかる隔てゝ

かる　そこを暫く、わたしに免じて

星五　エヽ、面倒な。

　ト立廻つて引敷き、有りあふ繩にて縛り

暫らくこれにて見物いたせ。

かる　こりや又あんまりな

　ト寄るを權兵衛引付けて

權兵　それでは互ひに、足手纏ひを拂ふといふもの。互ひに勝負に氣後れせぬ。サア抜け、盗人。

星五　われから

權兵　われから。

　ト兩方詰めかゝる。おかる又この中へ入り

かる　マア〳〵待つて

　ト縛られながら留めるを、兩人一度におかるを當てる。これにて「ウン」と倒れる。兩人手早く抜きかけ、キツと見得、花やかなる鳴り物になり、兩人よろしく立廻りあつて星五郎、權兵衛の肩先を一太刀切り込み、權兵衛、タヂ〳〵となる。星五郎また付け込むを、權兵衛立上がつて星五郎の刀を打ち落す。これにて星五郎タヂ〳〵となつて、手に障る掛竿を取つてあしらふ。權兵衛持つたる白刃にて竹の先を切り折る。この時おかる心付き、權兵衛を留める立廻りに、おかるの繩、程よく切れる。これにておかる留めるを、突きのけ突きのけ、星五郎、件の竹にて突いて行く、立廻りよろしく、權兵衛の脇腹へ突き立てる。これにて權兵衛、タヂ〳〵となつて、この時短册と書置を落す。おかる見て

かる　ヤヽ、手負ひの上にその竹の
星五　いでや止めを
　ト立ちかゝる。この時、落ちてある短冊と書置を見て
心覺えのこの上の句「花だにも散らで別るゝ春なれば
かる　いとかく今日を惜しまざらまし。」お前の刀に添へた
る短冊、その詠歌と連續せし、その上に添へたる書置。
星五　仔細ぞあらん……女房早く
　ト行燈差出す。おかる、よく／＼見て
かる　一筆書き殘し申し候、元某は鹽谷の家中、斧九郎
兵衞が双子の悴、藁の上より高野の家中、垣坂伴左衞門
の養子となり、音信不通の身ながらも、名乘り合ふべき
時節至らば、その時こそば疑ひもなき、兄弟の印ぞと、
父九郎兵衞どのゝ手蹟にて、上と下とを引分けて、證據
の短冊添へ置きたり、弟は斧定九郎、兄は他家にて垣坂
三平、妹を手に掛け胎内の、鹽谷の血筋御舍弟たる、縫
之助どのへ手疵を負せ、その時妹が物語り、養父の親が
末期に至り、妹ばかりは伴左衞門が實の胤。
　ト星五郎とつて見て
星五　兄は鹽谷の家中の悴、心得違ひの事あつては、忠義
の妨げそれゆゑに、必らず兄に語るなと、遺言守り居たり
しが、云はねばならぬこの仔細、お話し申すと云ひ死に、
跡にて見れば證據の短冊、さてこそこの身は切腹と、覺
悟極めて居り候ふ、心中推察たまはれかし、弟定九郎
どのへ、兄垣坂三平。」ヤヽ、すりや親人のお物語りに、
別れ程經し兄者人、知らぬ事とてこの深手。
　トあわてゝおかるも共々抱き起し、いろ／＼介抱して
コレ、兄者人、氣を慥かに持つて下さりませ。
　ト竹を拔く。
權兵　出かした弟、主人の御舍弟縫之助さまに手疵を負
せ、鹽谷の胤まで失なひしこの三平、切殺ぎ竹のこの成
敗、こりや斯うなうては叶はぬところ。
星五　すりや、疾より覺悟の心底。
權兵　弟に打たせて忠義を立てさせ、それを不忠のこの兄
が、未來のお主へ申し譯、科は遁がれぬ竹の切尖。これ
主殺しの天の御罰。
星五　親九郎兵衞も末期に至り、まッかう／＼との物語り、
それより尋ねし實の兄、三平どのにてありけるか。
權兵　其方は弟定九郎、敵同士の家柄にて
星五　お主は即ち高野と鹽谷。
かる　他家へ養子の兄御のお前。

權兵　廻り〳〵て思はずも
星五　兄弟二人が女房に
かる　なるも浮世に類ひなき
權兵　稀れなる夫婦兄弟の
星五　緣を結んだ
二人　事ぢやなア。
星五　されども二階に窺ひしは、以前の下部與五郎め、彼奴に女房加古川が、敵の上に高野の血筋。
權兵　それゆゑ一軸渡せしも、養父の親の主人の血筋、落しやつても天の網、こなたの親の與一兵衛、殺して取つた五十兩、敵も今のあの與五郎、財布の割り符その上に、小指の切れたに違はぬ證據。
かる　すりや、父さんを殺したる、敵は高野の血筋の與五郎。
權兵　敵ながらもこの家では、討たされぬのも養父の義理。
星五　養父の主の血筋を思ひ、誠の親なるお主の血筋、それを身ごもる浮橋を、妹ながらも手にかけて、古主の恩は御存じないか。
權兵　サ、その云ひ譯にはたつた今、弟に向つて非道の詞、わざと切られる身の覺悟、殊に古主といひながら、仇なろ高野の血筋の守、これ渡さぬが申し譯、直ぐにこなたへ。

ト件の守を星五郎へ渡す。

星五　鎌倉錦の守の書き物、これが高野の

ト以前より源次、松六、後へ窺ひ出かゝり、この時後より

兩人　それを。

ト星五郎へかゝる。立廻りながら皆々二階に上がる。權兵衛、ヨロ〳〵として緣先に撞と腰を掛け、おかる星五郎、二人と立廻つて見事に投げ退ける。此はずみに正面の障子へ當り、バタ〳〵と倒れる。向うの庭に上下の石像、裲襠の石像、二つ並べある。兩人見て

星五　庭に並べし石像こそ、正しく亡君判官公。
かる　顏世御前と二方を
權兵　石屋が殘す手細工も、お家の血筋を絶せし云ひ譯、行者のお掛け畫、念佛も、誠は二つの石像へ、申し譯なる佛の念佛。
星五　末世に殘す女夫石。
かる　五輪は則ち師直が
星五　すりや、あの五輪は

權兵　山名方より誂らへの、五輪は即ち師直が、時にとつての古主の敵。

ト有りあふ白刃を取つて、五輪の方へよろめき寄る。

星五　兄が末期に高野の血筋、證據の書き物、直さま門火。

權兵　武士の念力。

ト白刃を振り上ぐる。星五郎、守を火鉢へ打込む。權兵衞、石の角を切り缺ける。兩方とたん火鉢より煙硝火立ち、向うにてドンと太鼓の頭を打つ。星五郎思ひ入れ。

星五　圍む合圖か。

權兵　修羅の太鼓か。

か權　片時も爰を

ト權兵衞、竹の切尖を持ち、思ひ入れあつて落入る。おかる駈け寄る。星五郎愁ひの思ひ入れ。また向うにて獅子太鼓になり、大勢、木遣りの人聲。

星五　聞ゆる太鼓は祭りの人聲。

かる　願ひある身は姿を變へて

星五　然らば一旦

ト源次、松六、起上がりて

兩人　遣らぬワ。

ト星五郎にかゝるを、左右に留めて權兵衞の死骸へこなし。

星五　南無阿彌。

ト思ひ入れ。この見得にてチョンと軒口より簾いつぱいに下りる。直ぐに獅子の太鼓、木遣りの聲して、向うより、手古舞ひ大勢金棒を曳き、跡より家主、月行事の弓張りを持ち、窺ひ出て來り、門口より内を窺ひ、囁き合つて下手へ入る。矢張り八ッの鐘、拍子木の音、この時奥より與茂太、蒲團、寢呉蓙、木枕を持ち出て來り

與茂　なんだ、今夜は祭りの太鼓で、寢られるものではない。今から御輿を擔ぎに行かうか……イヤ〳〵、今夜は宵宮だ。そんなら表を締めて、明日思ひ入れ擔がう。先づ爰らへ床を取つて、下素の樂は寢樂十町としよう。なんと新らしい洒落か。

ト門口へかき金をかけ、蒲團をかむつて寢る。矢張り獅子の太鼓にて、向うより傳次、黑股引、襷、鉢卷きにて、跡より官藏、外に手古舞ひ五人、いづれもたるみの股引、誂らへの獅子の半纏、對の手拭を鉢卷きして、獅子といふ長張りの勇み提灯を持ち、十手を隱し、

窺ひ／＼出て來り、花道にて

傳次　然らばおてまへが、裏切りの手始めに、世にも手だれの星五郎、見事搦めて渡さつしやい、

宮藏　お氣遣ひなさるな。一旦手下と騙し寄つて、頭と賴みし星五郎、繩かけてお渡し申さう。

傳次　組子の人數も油斷なく

手一　逃がさぬ手配りそれゆゑに、牛の御前の宵宮を幸ひ

手二　勇み出立ちの手古舞ひも、獅子の半纏一樣の

手三　木遣り音頭で人集め、例へ逃げても走つても

手四　いざり屋臺の馬鹿囃子、聖天大間を合圖と定め

手五　ひよつとこ囃子のモシひよつと、取逃がしたら大がかり。

宮藏　寄つてたかつて大締めに、締める祭りのお定まり。必らず若い衆。

皆々　呑み込んだ。

ト矢張り獅子の囃子にて皆々囁き合ひ、手古舞ひ二人、門口に來り

二人　オイ／＼、明けてもらはう／＼。

ト戸を叩く。與茂太、顏を上げて

與茂　誰れだ／＼。もう寢たワ。明日來さつし。

手一　なんだ、今夜は宵宮だ。今から寢る事があるものか。

手二　さうだ／＼。ごたつきが出來たから、親方に相談があつて來た。起きてもらはう／＼。

與茂　エヽ、やかましい手合ひだ。明日でもいゝぢやアねえか。眠くつてたるものぢやアない。

ト門の戸を明ける。時の鐘。

二人　捕つた。

ト十手を構へる。與茂太恟りして門口へ逃げんとする。傳次、十手を構へ、ズッと入る。與茂太これを見て、「ワッ」と云うて奧へ逃げ込む。この時、簾上がる。內に屏風立てゝある。皆々見て

傳次　屏風の內か。

皆々　捕つた。

ト屏風を引返す。內に以前の星五郎の形にて、件の頭巾をかむりしおかる、顏を隱して一腰を拔き持ち、この人數と立廻り、よろしく見事にポン／＼と切る。傳次、有り合ふ蒲團をかむり、隱るゝ。この時、門口路地の內より星五郎、おかるの形に着替へ、前帶にて袖頭巾をかむり、草履下駄、風呂敷へ刀を包み、これを抱へ、與茂太先に小提灯を下げ、ツカ／＼と花道まで

行く。兩人顏見合せ

かる　アモシ

星五　怪我せぬやうに

かる　爰構はずと。

與茂　ヤ。

ト恟りする。

星五　コレ。

ト顏で知らせる。木の頭。與茂太、慄ふ。おかる、刀を拭ふ。これをキザミ、よろしく、ひやうし

幕

ト幕の外、時の鐘に謠らへの唄。與茂太先へ、慄へ慄へ、星五郎、女房なりにて向うへ入る。知らせにつき、シヤギリ。

十段目　押上堤の段

淨瑠璃　是は其頃山科の仇者
　　　　是は其頃堺湊の稀者
　　　　色盛松楓道　常磐津連中

十一段目　牛御前祭禮の段

役名……盜賊、曉星五郎實ハ斧定九郎。下男、直助實ハ猿廻し與五郎。熊谷縫之助。餅賣り・天川屋伊吾。伊吾餅の女房、おりん。

本舞臺、三間の間、正面、程よき草土手、秋草のあしらひ、うしろ淺黃幕、照葉にて紅葉の吊り枝、同じく立ち樹。よき所に普賢菩薩と記したる石の榜示杭。上の方に淨瑠璃臺、爰に常磐津連中居並び、すべて本所押上堤の體。牛の御前の祭禮、屋體囃子にて幕明く。

ト頭取出て、淨瑠璃の役觸れあつて入る。直ぐに前彈き。

〽草叢の露に螢火、戀とかや、されば浮世はさま〴〵に、かりほの庵の妹と脊は、離れぬ仲の跡や先、荷物かたげて女夫連れ。

ト謠らへの鳴り物になり、向うより伊吾、前垂れがけ、好みのやつし餅賣りの形、ぽつとせかつら。跡よりおりん、對の前垂れ、好みのやつし、女房の拵らへにて、伊吾餅と記したる商人屋體、この中に木鉢へ入れたる粟餅大分、竹の皮その外一式、尤も綺麗なる荷を、兩人して荷ひ出て來り、花道へとまる。

〽これは今年の出來秋に、實りも十分黄金色、栗の濡れ手も濡れによる。好いた同士のどれ合ひは、お江戸の水に洗ひ上げたる品物の、しかも色ある紅葉時、浪花の松に身を任せ、千歳重ぬる三つ重ね、三升はいつかしつぽりと、うまい仲ではないかいな、賣らうなら今ぢや、伊吾餅召しませ〳〵と、堤傳ひに來りける。

ト この文句にて兩人、舞臺へ來り、荷物をよき所へ下ろし、思ひ入れあつて

伊吾 コレ〳〵、嗅梁、なんと思やる。いつもより昨日今日は、商ひも大分あつた樣子。幾日でやらあつたな。

りん お前も嗜ましやんせ。今日は知れてある九月の十三夜、その上この近邊は、牛の御前樣のお祭り。昨日今日はお祖師樣の、御縁日でござんすわいな。

伊吾 オヽ、それ〳〵、昨日は御難の牡丹餅、今日は日蓮さまの御縁日、この押上のお蟠曼陀羅へ、御參詣も澤山あらう。

りん それぢやによつて、爰で一精出してはどうでござんす。

伊吾 ハヽア、流石はこちの嗅梁。この所にて商ひするとは、天晴れ高名々々。よくこそ心附かれたり。さらばこれより栗餅を、賣らばやと存じ候ふ。

〽そも〳〵この栗餅の始まりといへば、むかし〳〵安壽姫、對王丸と申す二人の同胞あり、姉の安壽姫は、栗畑の鳴子を曳き、群れ鳥を追ひ、丹精をしたるによつて、栗の出來十分といへり、これを佐野の源左衞門どの求められ、栗の飯を炊き、最明寺どのに與へらるゝ、また薩摩方にては泡盛となす、我れらは下戸ゆゑかちんとなし、一名を伊吾餅と名く、旨い事は痴話と手管で晒し立て、丸め〳〵て情で契る、こちが杵取り、嗅梁がこねる、わしが女房を褒めるぢやないが、一日三界飛びあるき、練れたところが、やつちや〳〵。

ト おりんにしなだれよる。

りん 阿房らしい。何しなさんすぞいなア。

伊吾 ハヽヽヽ。時におりん、こなたもさぞ草臥れたであらうなア。

りん なんのいなア、わたしも加古川さまに、御奉公いたして居つたれど、旦那方は散り〴〵におなりなされたゆゑ、お暇申してお前と女夫。しがない世帯も共稼ぎと思へば、さのみしんどうもござんせぬわいなア。

伊吾 イヤモウ、おれも前髮立ちの時分から、堺の天川屋

へ奉公に行たれど、廻り〳〵て結ぶの神、伊吾とおりんが夫婦とは、どうした事やら、いつしかに
〽あぢな緣のころび合ひ、樫齒かけたる山下駄の、鼻緒も破れし瘦せ世帶、蒲團一つが玉の床、外に男猫はあるまいと、思ひの外に性惡な、女猫は盛りがついたやら、長屋あるきは只ならぬ、隣のおぢいを見る目許、煮花の茶から洗濯の、綻びかゝる色仕掛け、なんと逢ひはあるまいと、商賣筋の燒き餅に、サア〳〵〳〵と寄り添へば
〽エ、おかしやんせ何ぢやいな、その當て言はお前より、わたしが方にたんとある、過ぎし初秋星合の、濡れて戻りし天の川、よそにしげりを內へ來て、見てくれがしの惡性と、思へどどうした因果やら、惚れたに噓はないものを、お前はどうか否さうな、外へ心を移し氣は、必らずやいのと取附いて、蝶は千草に戲むるゝ、花野に狂ふ風情なり。
卜兩人思ひ入れ。この時、寺の鐘鳴ろ、おりん、こなしあつて
りん　アレ〳〵、あの鐘は最敬寺さまの、お經が始まるさうな。
伊吾　そんなら搗きかけた今の餅を、臼と杵とを爰へ出して
兩人　ドリヤ、參詣を待ちませうか。
卜兩人、屋體の中より臼と杵を出し、伊吾は臼の中より餅を出し、木鉢の中へ入れる。おりんは黃名粉を附ける思ひ入れ。これに構はず
〽浮風に、萩にあふるゝ露ならで、野山も色の亂れ咲き。
卜かけりになり、向うより縫之助、絹やつし、片袖を脫ぎかけ、しどけなき體、絲かつらを亂し、狂亂の拵らへにて、紅葉の枝を持ち、出て、花道にて
〽罷り出でたる者は、このあたりに年を經し、炭の翁にて候ふ。
縫之　なんぢや、炭の翁ぢや。オ、久しや〳〵、思ひきや、我れを待つとは思はざりき。ハ、ア、冬を隣に待つ顏が。
〽月を待つとは草枕、戀しき人を夢に見て、我がうたゝ寢の袖しぼる、扇は露にしとゝんとん、乾く間もなき川添への、柳も今は散りて行く、空行く雁があれ〳〵あれ、人の見る目もいとひなく、離れ〳〵の友鳥を、慕うて爰へ現なく、
卜文句のうち、よろしく振りあつて舞臺へ來る。兩人、

縫之助を見て
兩人　名代の粟餅、お召しなされませ／＼。
縫之　コレ、このあたりに、わしが思ひ人は來はせぬか。
伊吾　なんぢや、思ひ人は來ぬか。思ひ人とは何であらう。
鐵を呑んだ閻魔、但しは石の地藏が化けたのか。
ト仕方して見せる。
りん　何を云はしやんすぞいな。斯う見たところが、お若い方の形かたちといひ、只ならぬ顔つき
伊吾　ハ、ア、此奴はおきちぢやな。モシ／＼、お前、此やうになつたも、色事でござりませうな。
縫之　オヽ、色とも／＼。その色里は初心の藝子、揚屋の座敷は又格別。
りん　そんならお前さんも、色の始まりは、吉原でござんすかえ。
縫之　オヽ、吉原々々、粹は身を喰ふ手管の魂膽、野暮と思へば日文の數々。
兩人　そんなら、いよ／＼色ゆゑに
縫之　オヽ、色とも／＼。それにつけても思ひの種、誰れ
ぬとしつぽり雨の夜に
兩人　濡れあふ仲の
縫之　痴話口舌。
兩人　して、その頃は、
縫之　いつやらであつた。オヽ、それよ。
祭文がかり〽更けたまふ、下は四天なり、いでその頃は正月二日の事なりしが、廓は跡着の着衣始め、船乗りぞめともやひ解く、柳橋から押出して、北へ／＼と急がるゝ、そも／＼その日の出立ちは、羽織は羽二重三つ所、紋日物日の嫌ひなく、通ひ馴れても衣紋坂、とつと云うて囃された、實にも賑はふ色里の、蹴出し歩みの八文字、くるわ／＼の三つの朝、吉例變らぬ鼓の音〽徳若に御全盛とは、御代も榮てましんます、愛嬌ありけるおいらんの、遣り手禿を引連れて、しやなら／＼と太夫振り、誠に婀娜にてさむらひける。
ト思ひ入れ。兩人も浮れるこなしあつて
〽まつちやらこや／＼〽かゝるめでたき馴染の君が、あそこや爰の格子先、堅いやうでもどこやらに、色氣があつて油斷がならぬ、女子たらしの仕掛けぶり、誠に婀娜にてさむらひけろ〽ホホヤレ／＼、まつちやらこや／＼斯樣に申す才藏なんぞも、ちつとんばかりに參る〽參ると申せば〽何かまた參る〽、廓見にくる椋鳥が、聲皺枯れ

て不拍子に。

ト おりん伊吾思ひ入れ。

〽心よゝ、もて追分女郎衆・淺間山から何が出る〽夜ばいさしよ〳〵、昨夜は夜ばいに仰山な。誠にまがら仰山な、水瓶にけつまづいて、鑵鑵壺へ飛び込んだ〽お月さんよお月さんよ、昨夜の晩げは雨ぐもり、誠にまがら暗いゆゑ、小溝をどんぶりこと踏みかいて、首たけ二人がそれから馴染み、今では實に〽澤行く水の面白や〳〵。

ト 振りよろしくあつて納まる。

縫之 面白い〳〵。サア〳〵、早う酒を持て〳〵。

伊吾 飾賣りに酒を持てとは、不淺慮千萬。早うどこへなと、行つたり〳〵。

縫之 オヽ、去ぬる〳〵。太夫が床はいつもの座敷、あの空炷きの香をしるべに、頼むぞや。

ト 兩人を招く。伊吾見て

伊吾 アレ〳〵、何やら用があるさうな。嗅、わが身行て、何ぢややら聞いてやりやれ。

りん イエ〳〵、わたしより、お前行て聞かしやんせ。

伊吾 イヽヤ、おぬし行きやれ。

りん イヽエお前が

ト 兩人爭ふ。

縫之 これは、どうしたものぢや。誰れにも致せ、早う來いよ〳〵。

ト 手を打つ。伊吾、これを聞いて、おりんに行けといふ思ひ入れ。おりん、ウヂ〳〵する。伊吾、見兼ねて前へ突き出す。これよりおりん若い者こなしにて

〽お手が鳴る〳〵銚子とは、かねて氣轉な若い者、小腰かゞめておだてのちよくら、大盡樣のお杯・我らも頂戴立て、冴えゆく月も櫺子から、見れば表に時雨り・もう何時と指折つて、ぴいちよん、ぎんちよ、ちよん〳〵、三々九つ、引四つなれば、ちとあちらへと押しやれば、灯影も暗き床の上〽待つ間に披帶とけかゝる、寢卷姿のつかいしよなく、間夫に逢ふ夜は氣が侍め・遣り手お部屋の鬼薊・つらい苦界ぢやないかいな〽わたしやお前にぶつつかり、女房にならにやならぬぞえ、あすが日傘になる身でも、男ゆゑなら年季を入れて、いつまで咲かうか〳〵と、酒も茶碗であはつきり〽流れ次第に捨小舟とても濡れたる四つの袖、こち寄らんせと引寄せて、口舌に取りし胸づくし、エヽ小自烈てえと振りあげる、手管ぞ戀の常ならん。

トこの文句のうち伊吾は傾城、おりんは若い者、縫之助は客の振り、三人よろしくあつて納まる。

縫之　コレ〳〵、太夫、わが身は其やうな事云やつても、外に深間があるとの事。その男は、誰れぢや誰れぢや。早う云うて聞かしや〳〵。

ト伊吾の胸づくしを取る。

伊吾　成る程、おきちどのは色氣たつぷり。こなたのやうな人にかゝつてゐると、こちの鼻の下が干上がる。商賣の邪魔をせずと、嬶アどの、早くぼいまくつて、去なせ去なせ。

りん　モシ〳〵、マア待ちなさんせ。見請けたところが、まんざら賤しくもないお方。して、お前樣は

縫之　ナニおれか。我れらは卽ち京音頭の、かけ聲〳〵。

兩人　ナニ、音頭のかけ聲とは。

縫之　ハテ、えんや〳〵といふ事。

伊吾　ハテ、むづかしい考へ物。これはおれには判じられぬ。

りん　待ちなさんせ。えんや〳〵と仰しやるからは、最前のとりなりといひ、もしやあなたは

縫之　鹽谷々々、縫之助ぢや〳〵。

りん　ヤ、そんならあなたが御次男の

伊吾　縫之助さまでござりましたか。

りん　私しども二人は、以前はお家に由緣のある者。さりながらあなた樣には、何ゆゑあつてこのお姿

縫之　サア、この姿も、廓の俄ぢや。それ〳〵、そこへ俄が來た。ヤ、こなた衆も俄の練り物か。

伊吾　イエ〳〵、私しどもは

縫之　イヤ〳〵、俄ぢや〳〵。その俄なりと見たなれば、氣欝を散じてよからうな。

伊吾　ハ、ア、聞えた。此方の商賣の屋體を見て、俄に思うてゐるさうな。

りん　今あなたのお詞には、氣欝を散じたならば、病氣も癒ると仰しやりましたが、狂氣の鎭まる事なれば

伊吾　眞似事なりとして

りん　それぢやというて。

伊吾　古主の由緣のあなた樣へ、一つの忠義。

りん　そんなら、てんぽの皮の間を合せ

縫之　廓の俄の全盛を

兩人　そんなら眞似事いたしませうか。

トこなしあつて

〽先づ吉原に鎮座ある、通ふ神とは大神祇、その大盡の末社には、男女の藝者打交へ、思ひ思ひの趣向ある、數〻多きその中に　〽朝な〳〵の田作りを、しやんとかたげた花聟どのは、妾の在所に思惑樣が、ありとは見えて頻かむり、寒の師走も日の六月も、通ひ詰めたる畔道傳ひ、脊丈の稻に袖濡らす、しよんがえ　〽さても見事な布晒す、ぢよん〳〵女郎衆の美しや、月雪花の唐錦、布つく振りを見せ參らせん、打つや砧の拍子よく、

ト これより謠らへ、砧、晒しの合ひ方になり、件の杵と臼を出し、おりん伊吾、よろしく振りあつて

〽散るや紅葉を手染めにしよな〳〵、繻子や朱繻子や縞繻子を、ちりめん〳〵ちんちりめん、打つたる衣は唐衣、唐衣々々、しつとん〳〵しつとん〳〵、あの谷川の〳〵水より清き人に我れ、戀ぞつもりて名を流す。

ト三人こなしあつて

〽山は色づくなア、なん〳〵中に、ひりひぞるは、われ木香、浮氣の露に濡れかゝる、男郎花とは白萩の、せめて一夜は藍の花、たより桔梗と鹿名草、筆に云はせて思ひ草、晴れし心の花すゝき、可愛らしさの女郎花。

ト三人こなし。この時うしろより百姓二人、窺ひ寄つて

二人　縫之助、動きやアがるな。

りん伊吾　こりやお前方、何となされます、

百一　何とするとは知れた事、鹽谷の重寶、花筐の短刀紛失、本地へ歸參も叶はぬところ

百二　斧定九郎の忠義によつて、寶は元へ戻る上は、高野家に何かの妨げ、それゆゑうぬを引立てるワ。

縫之　ヤ、すりや花筐の短刀は、定九郎が手に入りしとや。さすれば鹽谷の家名も開く瑞相。チエ、忝ない。

りん　ヤヽ、今まで狂氣のあなた樣

伊吾　どうした事で、この體に。

縫之　寶の行くへの知れるまでは、まツ斯うせいと定九郎が教へに任せ、狂氣と見せしは皆僞はり、短刀出づる上からは、片時も早く本地へ歸參。

百姓　うぬをやつては

トかゝるを伊吾、隔てゝ

伊吾　女房おりんは、縫之助さまのお供なし、知るべの方までお見送り。

りん　心得ました。左樣なら縫之助さま。

縫之　然らば此まゝ

百姓　南無三、うぬを

　ト振り切つてかゝる。皆々立廻り、伊吾は百姓二人を見事に引敷く。おりん縫之助、この體を見て

り縫　これは。

伊吾　構はずと、ござりませ。

　〽さそくの氣轉かひ〴〵しく、裾端折つて身づくろひ、姿やさしき柳島、跡に見なして。

　トこの文句にて縫之助先におりん附いて向うに入る。此うち二人は起上がつて伊吾を突き廻し

百一　折角捕へた縫之助、うぬが支へたばつかりに、褒美の金を取り逃がした。

百二　破れかぶれとこの上は、栗餅賣りの甘口と、思ひの外の馬鹿力。

二人　咎め立てせず、退きやアがれ。

伊吾　イヽヤ退くまい、おれとても、昔は堺の天川屋に、年季奉公した時に、丁度捕り手がこの通り。旦那を見習ふ長持の、代りは屋體で間に合せ、上でひらりと大あぐら、男でごんすとこの伊吾も、一番達引して見せうか。

百姓　面倒な。疊んでしまへ。

伊吾　何を小癪な。

百姓　どつこい。

　〽しや面倒なと二人の手だれ、打つてかゝるを身をかはし、有りあふ臼をころ〳〵〳〵、南無三寶、桑原と、武者ぶりつくをづでんだう、あはやと見ゆる尻餅に、杵押取つて搗く曲は、今ぞ最中の玉兎、影も曇らぬ操の花道、實りの秋とぞ興じける。

　ト三人この文句のうち立廻りあつて、トゞ伊吾は二人を臼の中へ打込み、杵にてヂッと押へる。この見得よろしく、太夫連中をあふりにて隱し、屋體囃子にて道具廻る。

　本舞臺、平舞臺、見附牛の御前の社を書きし遠見上下松の立ち樹、所々に神事の提灯、地口行燈など立派に建て、この前一面紅白の段幕を張り、すべて祭禮の模様。爰に祭りの揃ひを着たる若い衆五人、紅紐の菅笠をかむり、紅絹をかむりし長柄の傘を持ち並よく居並ぶ、この見得、渡り拍子にて道具とまる。

若一　ヤア、どなたも御苦勞でござりました。これでお祭も無事に納まり



初　演　の　繪　番　附

若二　跡は御輿を待つばかり、日和續きの仕合せに
若三　世間に事なく氏子も繁昌
若四　町も出舍もおしなべて、五穀成就の踊りも住吉。
若五　祝ひに一つ
皆々　締めようか。
若一　それもよからう。
皆々　よい〳〵〳〵
　ト手打ちをする。この時うしろ段幕の内にて
直助　神事の役人を、わりやア何とするのだ。
星五　怪しい曲者、動きやアがるな。
　ト渡り拍子になり、段幕を切つて落す。祭の人數は左右へ別れると、眞中に直助、裝束立派に足駄を穿き、右の手に鉾を突き、左に天狗面を脱ぎ持ち、猿田彦の拵らへにて立ちかゝる。星五郎、着流し、肌脱ぎ、大小凜々しき拵らへにて、直助をさゝへて居る。兩人ちよつとほぐれる。
直助　いつも神事はお定まり、御輿の先へ猿田彦、それを支へる野郎を見れば、づきの廻つた定九郎、變名なして星五郎。例へ以前は主人でも。見遁がしならぬ天の網、召捕つて手柄にする。尋常に腕廻せ。
星五　小癪な。人の難より我が七難、その身に覺えあればこそ、姿を變へて面を隱し、窺ふ曲者、腕まはせ。
直助　何をおのれが。
　ト振り切り行かうとするを、星五郎さゝへる。これにて祭の人數兩人を隔て、星五郎を取卷き、キツとなり
皆々　動くな。
　ト直助見て
直助　これは。
若一　爰はおいらに任せて置き
皆々　神事を早く。
直助　心得ました。
　ト直助は向うへ走り入る。星五郎見て
星五　彼れをやつては
　ト行かうとするを
皆々　盜賊、動くな。
　ト皆々さゝへる。
星五　ムウ。さてはうぬらは某を、召捕らんとする廻し者だな。
若一　知れた事だワ。練り子と見せしは討手の者。
若二　盜賊の張本、曉星五郎。

若三　誠は鹽谷の扶持放され、斧定九郎。尋常に

皆々　澆まはせ。

星五　うぬら一々、觀念なせ

若一　面倒な。ソレ、

皆々　どつこい。

ト皆々住吉踊の形を取り、黑四天の捕り手となり、星五郎に打つてかゝる。星五郎は皆々を相手に立廻り、キッと見得、これより誂らへの鳴り物になり、よろしく立廻りあつて、トゞ皆々叶はず上手へ逃げて入るを星五郎は追ひ込み、こちらへ來る。これを渡り拍子、バタ〳〵になり、向うより以前の直助、木綿やつし肌脫ぎ、繩襷、大わらはの形。おかる、矢張り肌脫ぎ、褄ばし折り、兩人切り結びながら直ぐ本舞臺へ出て來り、星五郎見て

星五　ヤ、そちや女房おかる。この體は。

直助　何ゆゑおれに刃向ふのだ。

かる　ヤア、何ゆゑとはしら〳〵しい。いつぞや隅田堤にて、父與一兵衞を手に掛けしは、おのれが仕業であらうがな。

星五　まだその上に主人たる、加古川を殺害せし、大惡人の與五郎め、我が爲には妻の敵。

かる　父の敵と名乘つてしまや。

直助　ヤア、身に覺えなき、その一言。妨げひろがば二人の奴ら。

ト兩人に切つてかゝる。この時直助の懷より前幕の一軸を落す。星五郎は手早くこれを取上げる。おかるは直助の手先を捕へ、小指の無きに目を付けて

かる　ヤ、小指の無きこそ慥かな證據。現在それが親の敵

星五　この一軸は菅家の正筆。

直助　南無三それを

ト取らうとするを、おかる突き廻し、双方より詰めより

かる　一軸所持なす上からは、疑ひもなき高野の血筋。

星五　兄三平の義に依つて、鹽谷の寶戾りしゆゑ、一旦は見遁がしたれども、高野の血筋とあるからは、主君の敵、妻の仇。

かる　父が敵の直助與五郎。サア尋常に

二人　勝負々々。

直助　チエ、口惜しや、今まで包みし我が存念、一時に露顯の上からは、何も彼も云つて聞かせるワ。高野家を引

起さんと心を砕き、主の加古川ぶち殺し、花筐の短刀奪ひ取り、三囲堤で與一兵衛を手にかけたるは、如何にも斯く云ふ直助だ。

二人　さてこそなア。

直助　うぬら共々返り討だぞ。觀念ひろげ。

二人　小癪な事を。

トこれより三人立廻りになり、よろしくあつて星五郎おかる、双方より直助を一太刀切る。

星五　恨みの刃。

二人　思ひ知つたか。

直助　チエ、、殘念な。

ト思ひ入れ。左右より又切りつける。此うち後へ捕り手大勢、弓張り提灯、十手を持ち、立ちかゝり

皆々　星五郎、動くな。

星五　何がなんと。

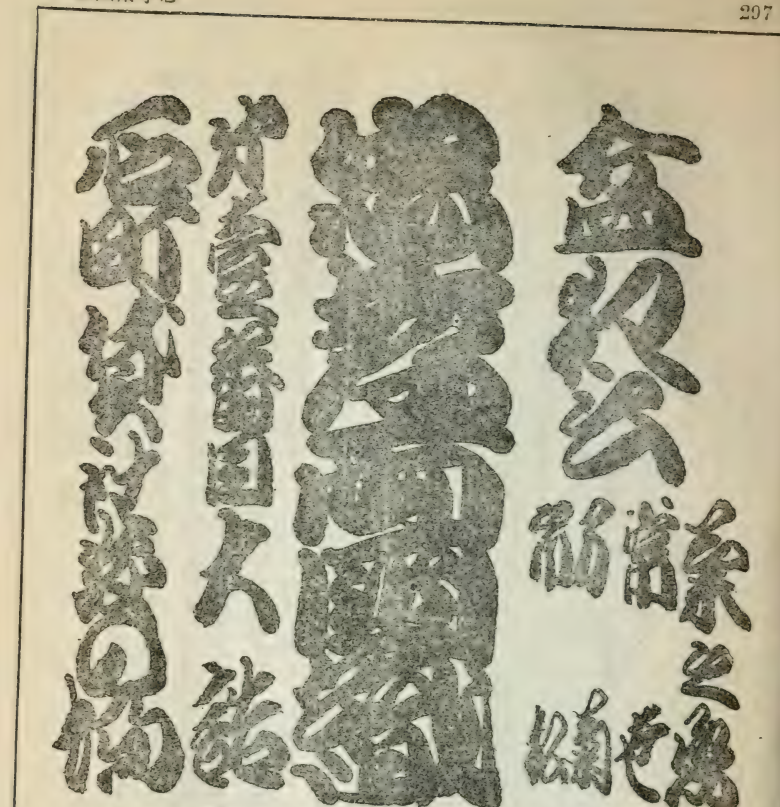
ト皆々よろしく立廻つて

皆々　どつこい。

星五　先づ今日はこれぎり

めでたく打出し

菊宴月白浪（終り）



忠孝兩國織（ちうかうりやうこくおり）

赤穗義士劇は澤山あるが、名狂言と稱されるものは、大抵は京坂地方に出たもので、それも歌舞伎よりは淨瑠璃の方に多いといふのが定説であるが、この狂言だけは、純歌舞伎で、しかも江戸で、なか／＼巧く出來てゐる。例外と云ふべしである。寛政二年七月に中村座で上演されたもので、初世櫻田治助の作である。流石に江戸で、しかも洒落本や黄表紙の全盛時代である所爲か、同じ義士劇でも理窟張らず、堅からず、至極のんびりしてゐる所が何よりの特徴である。セリフも、すつかり江戸式で嬉しい。「大崎村の場」なぞは五段目と六段目を茶番でゆきながら、流石に治助で、どこかにピリリとした所が出てゐる。顏世御前が娘でゐるのも面白い。一文字屋才兵衞を長兵衞のやうな俠（きほ）ひ肌にしてしまつたのも面白い。與市兵衞を惡黨にしたのも面白い。

本篇は最初豫定に入れてはなかつたが、最近發見されたので、江戸式の忠臣藏の代表作として收錄した。原本は五册物で、五幕になつてゐるが、この外に三建目や、後の狂言のあつた事は、年代記を見ても解る。第一、累與右衞門の交つてゐた事は本當らしいのだが、何しろこの五册だけしか見當らないので、其まゝに收錄して置いたのだが、筋だけはこれでも通つてゐるやうである。

この時の役割は――師直、吉五郎（尾上松助）與市兵衞、文吾（坂田半五郎）定九郎、若狹之助、彌五郎（市川高麗藏）顏世、おりう（佐野川万菊）おりん、侍從（佐野川市松）判官（森田勘彌）おいし（小佐川常世）播磨守（松本幾藏）八郎（澤村淀五郎）九太夫（松本小次郎）糸瀧（瀨川富三郎）彌次兵衞（中村勝五郎）段八（坂東善次）直義（中村七三郎）伴内（中島勘藏）勘平、右馬之丞（市川門之助）力彌（市川男女藏）おかる、お北（瀨川菊之丞）由良之助、才兵衞（松本幸四郎）であつた。

この狂言は、三都では再演されなかつたが、嘉永五年三月の中村座「宿花いろは本說」では「大崎村の場」や「石町貸座敷の場」が巧みに加へられてあつた。本文中に挿入の番附は、その時のものである。また扉に入れたのは、底本に使つた本脚本の表紙である。

忠孝兩國織

鹽冶判官館の場

役名——鹽冶判官高貞。織部彌兵衞。斧九太夫。眞壁八郎後ニ織部數馬。早野勘平。大崎の百姓、與市兵衞。平右衞門妹、おかる。鷺坂伴内。足輕、段八。織部娘、糸瀧。乳人、侍從。石堂妹、顔世御前。高武藏守師直。

本舞臺、三間の間、鹽冶判官館の體、誂らへの通りに飾り付け、下の方、枝折り戸、萩の盛り、上の方、青葉の楓、これに三尺ばかりなる蜂の巢かゝりあり。幕の内より、鹽冶判官、羽織衣裳の形にて、褥にのり、脇息にかゝり、煙草盆扣へ、下の方に、九太夫、扣へ、次に、織部彌兵衞、扣へ、次に、勘平、熨斗目、麻上下にて、判官の刀を持ち扣へ居る下の方に、眞壁八郎、上下衣裳、次に、糸瀧、襠衣裳にて扣へ居る。祝儀唄にて、幕明く。

彌兵　御前へ申し上げまする。今朝拙者へ仰せ付けられましたる、眞壁の八郎、只今御前へ召連れましてござりまする。

判官　昨日、若宮小路の馬場先にて、伯父の敵を討つたるは、あの者か。

彌兵　左樣でござりまする。

判官　これへ呼べ〳〵。

彌兵　ハツ、眞壁の八郎どの、お目通りへ近う〳〵。

八郎　ハツ……眞壁の八郎、御前へ罷り出ましてござりまする。

判官　其方が眞壁八郎と申す者か。この間の仔細を話して聞かせい。

彌兵　サア、御意ぢや程に、申し上げ召されい。

八郎　その儀は何とも。

糸瀧　コレイナア、お殿樣のお尋ね遊ばす事、お話し申すがようござりまするわいなア。

彌兵　早う〳〵。

八郎　ハツ、お前へ申し上げまするも、如何しうはござり

ますするが、お尋ねに任せ、敵討ちの仔細を申し上げまする。元來拙者が伯父、牧野の左衞門と申しまするは、赤松家の浪人、御厚恩の蒙むり名鏡まで下し置れましたる身の上。敵利根彈正、兼ねてその名鏡に心をかけ、再三無理所望仕り、承引いたさぬを遺恨に存じ、瀬戸の境内にて闇討に仕り、彼の御鏡を奪ひ取り、立退きましたる彈正信俊。三ヶ年が間、行くへも知れず、所に不思議にこの度巡り逢ひまして、牧野の左衞門が娘小萩、弟は小三郎、彼れらが爲には親の敵、拙者が爲には伯父の敵、利根信俊を念なう討取りましたる我れ／＼が喜び、憚りながら御賢察下さりませうたらば、有り難う存じまする

判官　よう討つた／＼。コリヤ／＼彌兵衞、三ヶ年が間、付け狙ひたる敵を討おしとは、さぞ喜ばしい事であらうな。

彌兵　伯父親の敵を討つて、本意を遂げしとは、天晴れなる儀ではござりませぬか。

判官　さぞ本望であらう。コリヤ／＼糸瀧、眞壁の八郎は手柄者であらうな。

糸瀧　左樣でござりまする。その節私しも通り合せて、女子のあられぬ事ながら、見物いたして居りましたが、それは／＼見事な働らき、ほんに天晴れな勝負でござりましたわいなア。

判官　然らば其方は、アノ敵討を見物いたしたか

糸瀧　ハツ、難なく仕留められましたる所まで、とう見屆けて居りましてござりまする

判官　流石に其方、身が家來織部彌兵衞が娘程あつて、出かした／＼。コリヤ／＼九太夫、なぜ其やうに押默つて居るのぢや。伯父の敵を討つたる眞壁八郎に、挨拶をせぬかいの。

九太　憚りながら、彼れが利根彈正を討ちましても、餘り手柄にはなりませぬ。

判官　なぜ／＼。

九太　彼れが討ちましたのではござりませぬ。

八郎　イヤ、斧九太夫どのとやら、我れ／＼が敵討は、石堂右馬之丞さままでお屆け申し上げましたる意趣の次第相違なく討つたればこそ、牧野の小太郎は本國へ立歸り牧野の家、再びお立て下されんとの御内意。まつた拙者が身の上は、當お館樣へ召出しにあづかりし眞壁の八郎如何なる事にて彈正を、我れ／＼が討たぬとはお云やるぞ。

九太　知るまいと思し召さるか。彈正が手練の太刀先、何かは以て堪るべき、兄弟の奴らに手疵を負せ半死半生、既に眞壁の八郎も危ふい所、助かつたは、彌兵衞が娘の糸瀧が、折よくかけたる襷の腰帶、女子どもの情にて、伯父の敵を討つたとは云はれまいがな。

八郎　サ、それは。

九太　危ふい所のあの襷は、腰帶であらうがな。あの折聲をかけられにやア、お身が命はその場でないもの。討たれたには彈正が不運、討つて手柄にやアならないのサ。

ト彌兵衞、糸瀧、氣の毒なる思ひ入れ。八郎、平伏して居る。

判官　ハヽヽヽ、勸平、なんと九太夫は、片意地な年寄りではないか。

勸兵　左樣でござりまする。利根彈正が討たれましたるは天命、伯父親の仇を報はれましたるは、この人々の手柄、武士の本意を達せられましたる八郎どのは、誠に我れ我れも、感心仕つてござりまする。

判官　其方なぞが氣性では、さうあらう／＼。コリヤ／＼彌兵衞、身が仲人ぢや程に、彼れと其方が娘糸瀧と、夫婦にして遣はしてはどうぢや。

彌兵　ハツ、日頃願ひ居りましたる幸ひの縁談、殊に御前のお詞が添ひましたれば、この上もなき拙者が大慶。眞壁の八郎どの、定めしおてまへのお氣には入るまいが、身が娘の糸瀧と、添うてやつてはおくりやるまいか。

八郎　何がさて、親子となりましても、恥かしからぬ織部彌兵衞どの、それのみならず、殿のお目鏡にて、召出されし拙者が身の上、判官さまの御家來となりまするからは、縁談の儀は兎も角も。

判官　して、糸瀧が心はどうぢや。

糸瀧　ハツ、御前の御意に親の詞、思ひ合せても今の身に縁を結ぶの腰帶が、斯うなる端かと存じますれば、ほんに此やうな嬉しい事はござりませぬわいなア。

判官　其方も得心なれば、幸ひ／＼、織部彌兵衞が苗字を繼ぎ、名も改めてよからう。コリヤ／＼、この印籠の蒔繪の望月の駒引、逢坂の關の淸水に影見えて、今ぞ引くらん望月の駒とあれば、なんと、織部數馬と名を改めて、忠義の心を專らに、奉公いたしてよからう。

ト印籠を彌兵衞へ渡す。彌兵衞、次いで八郎に渡す。

彌兵　イザ／＼、殿の御印籠を拜領召されい。

八郎　ハツ、今日より眞壁八郎を改めまして、織部彌兵衞

が伜、同苗數馬と名乘りまするでござりませう。

判官　彌兵衞に孝行を致せ。

三人　有り難うござりまする。

九太　申すまではござらねども、御家來となり召されたら忠義を忘れ召さるな。

八郎　畏まりましてござりまする。

九太　身共が伜定九郎なぞを、とんだ所へ引摺り込んで、不忠者の名を取らぬやう頼み申す。

彌兵　九太夫どのゝあの一言、必らず忘れまいぞよ。

八郎　キッと承知仕りました。

ト向う揚げ幕の内にて

かる　下がれ〳〵。

與市　逐さつしやれ。

トてんつゝになり。花道より、與市兵衞、田舍親仁の拵らへにて、脚絆の形にて、出て來る。後より、おかる、やつし着流しの形。菖蒲革、六尺棒を持ち、下がれ〳〵と云ひながら出て來て、花道の中にて。

かる　下がれ〳〵、下がらぬかいの。

與市　滅多無性に下がれ〳〵と……ヤ、わりやおれが娘のおかるぢやアないか。

かる　アイ、わたしやお前の娘のおかるでござんすが、兄さん寺岡平右衞門さんの人代りに、斯うした足輕奉公して居るも、みんなお前の慾心からぢやござんせぬかいなア。

與市　なんぞと云ふと、慾心々々と、この與市兵衞がイケ胴慾に、非道な錢金でも欲しがるやうに吐かすが、われをその態にして置いては、小判を土の中へ埋めて置くやうなものだ。よく聞きやアがれ、女郎に賣りやア、一角なつうくつにやアなるけれど、その勤め奉公を嫌がりやアがつて、兄の平右衞門が、御家中の小山田庄左衞門どのと喧嘩して、庄左衞門どのゝしやッ額を、合羽箱の棒でやらかした、その疵の癒えるうち、部屋頭へ預けられた身の上。其うちの人代りに、誰れ彼れと尋ねて居た所を、いつの間にかうぬが手に、原鄕右衞門さまへお願ひ申して、兄のお預けのうちは、私しを寺岡平右衞門になされて、お遣ひなされて下さりませと、願ふ奴も願ふ奴、そんなら其うちの代りに、女でも大事ないから、足輕になれと云ひ付けた、鄕右衞門どのも鄕右衞門どの。今日この與市兵衞が、この屋敷へ來たのは、われを下げに來た程に、さう思つて居るがいゝぞ。

かる　アレ又、其やうな事にござんしたかいなア。わたしや、どのやうな事があつても、今の身の上は、原郷右衛門さまの組の足輕・寺岡平右衛門ぢやわいなア。

與市　女の際に足輕奉公が勝手とは、これエヽ、われが親のこの與市兵衛までが、外聞が惡い程に、今日はなんでも、おれと一緒に、在所へ歸れ〳〵。

かる　わたしや否でござんすわいなア。

與市　否だと云つてござんすわいなア。

かる　其やうに云はしやんすと、父さんとは云はさぬぞえ。コレ、見やしやんせ、わたしや足輕の役目ぢやに依つて、御門の外へ出さねばおかぬ。下がらぬか。下がれ〳〵。

與市　おきやアがれ。うぬ下がれと云つたればとて下がるものか。なんでも御家老の斧九太夫さまにお目にかゝつて、われをこのお屋敷から下げて行くワ。

かる　そんなら、勝手にしたがようござんすわいなア。

與市　親の威光で勝手にするワ。

かる　そんならどうなりとも。

與市　下がれ〳〵。

かる　下がる事は否ぢやわいなア。

與市　おれも下がる事は否だ。

かる　そんなら、どつちへなりとも行たがよいわいなア。

與市　ドレ、九太夫さまにお目にかゝらうか。

かる　ドレ、お頭へ屆けて置かうか。

　トてんつゝになり、おかる、棒を持ち、花道へ入る。與市兵衛は舞臺へ來る。

彌兵　待て〳〵。其方は何者ぢや。

與市　ハイ〳〵、わしやア武藏の品川在郷の、大崎の與市兵衛と云ふ百姓でござりまするが、斧九太夫さまに逢ひに來ました者サ。

彌兵　そんなら其方が、アノ九太夫どのに逢ひに來たと申すか。

與市　どうぞ逢はせて下さりませ。

九太　ナニ、斧九太夫に逢ひたいと申すか。

　ト九太夫、立つて來て、與市兵衛が側へ寄り。

其方は大崎の與市兵衛か。

與市　オヤ〳〵、九太夫さまでござりまするか。

九太　コリヤ〳〵、あれに御前もお入りなさるゝ程に、靜かに申せ。

與市　なんぼ靜かに云はうと思つても、大きな聲になりますは、在郷者の生得。わしがこのお屋敷へ九太夫さまに

逢ひに來ましたは、ちつと願ひの筋で參りましたが、なんと、わしが願ひを聞いちやア下さりますまいか。

九太　其方が願ひとは、どのやうな願ひの筋だ。

與市　外の事ぢやアないのサ。ソレ、いつぞやからお賴みの女が事で來ました。

九太　そんなら、其方が娘のおかるが事で來たと云ふのか

與市　ハツ、どうぞあのおかるを、宿へ下げてやつて下さりますまいか。

九太　そりや、隨分下げてやらうが、この九太夫が詞を添へて、原鄕右衞門どのへ申し入れて、あのおかるを下げてやらう。

與市　そりやマア、ほんの事でござりまするか。

九太　お暇を願はゞ、早速お暇の出るやうに、九太夫が申しくれうが、この九太夫が料簡の通りにやア、あのおかるめが得心しまい。

與市　モシ／＼、わしが娘のあのおかる、得心せにやア叩きのめしてなりと、そびいて參ります程に、どうぞお屋敷をお下げなされて下さりませ。

九太　イヤ／＼、假へおかるが得心しても、また外に得心せぬ者があるから、どうもこゝ願ひばかりは叶ふまい。

與市　アノおかるが得心して、この親仁と一緒に參らうと申しても、まだ外に得心せぬ者があると仰しやるが、九太夫さま、そりやアマア誰れが得心せぬのでござりまするぞ。

九太　されば、誰れであらうか。

與市　その得心せぬ奴が、わしが相手でござります程に、九太夫さま、そりやマアどいつでござりますか。サアサア、早くあのおかるを在鄕へやるまいと云ふ奴を、云つて下さりませ。

九太　この九太夫が口からは云はれぬ。マア、何者か、誰れであらうか。これにお居やる、早野勘平に聞いて見やれ。

與市　そんなら、おかるを下げまいと云ふ奴を、アノ勘平さまとやらに聞きますのかえ。

九太　オ、サ、ソレ、お身も兼ね／＼知つて居る內證の魂膽、ちん／＼鴨の旨い仲やら、この九太夫は知らぬ事だ程に、與市兵衞、おかるが事なら、勘平に聞くがよい。

與市　成る程、さう云ふ事なら聞いて見よう。見かけからどうやら、女にかゝつちやア意氣地のなささうなお侍ひ樣。

ト勘平が側へ寄り

勘平さまとはお前の事かえ。大崎の百姓與市兵衞が、ちよつとお目にかゝりたうござりまする。

勘平　身共に逢ひたいとは何事ぢや。

與市　外の事ぢやァござりませぬが、いま歸かつしやる通りのおかるが事。なんと親の與市兵衞が願ひ通り、このお屋敷を下げてやつちやァ下さりませぬか。

勘平　コリヤ〱、そりや何事を申すのぢや。御前と云ひ彌兵衞どの親子もござるに、殊に數馬どのは御昨今の事粗忽な事を申さば、其方が爲にならぬぞ。

與市　そんなら、わりさまは、そのおかるが事は知らぬのかえ。

勘平　左樣申せば、それ〱、この間承つた、原郷右衞門どのゝ組足輕、寺岡平右衞門が人代りに參つた、女子の事でもあるか。

與市　ハヽヽヽ、あるかも凄まじい。コレナア、こなたに足を付けられて、この屋敷へ踊り込んだばつかりに、吉原へ賣つても、飯盛奉公に出しても、一包みと云ふ金にやアなる奴を、上げられたも同然。サア、詞の柔らかなうち、あの女を下げてくりやれば、無難に濟む。白を切つて挨拶なけりやァ

トぐつと尻を捲つて、勘平が側へぶッ坐る。

おかるをせごして、あの女の口から、臺座後光をしまはしてくれべい。サア、勘平とやら、勘平どのとやら、あの女を、どうするのだ〱。

ト怒鳴る。勘平、心遣ひあつて、思案して

勘平　コリヤ、おのれは一分で參つたのではないな。兼ねて身共に面皮をかゝさんと事を企んで、こりや恥辱を與へるのか。その分に差置かれぬ。與市兵衞とやら、それへ出おらう。

與市　なんだ、出ろ……出ませう。出ろと云ふ事なら、御家老樣の前へなりと殿樣の前へなりと、出兼ねるやうな與市兵衞ぢやァないよ。どこへ出るのだ〱。

判官　勘平。

勘平　ハツ。

判官　其方へ申し付ける役目は、師安へ讓らんと、時日約諾なしたるその安綱の刀、其まゝにては餘り麁末がましく思されんも氣の毒。師直どのゝ見えらるゝまで、其方へ預ける間、中心をとくと拭ひ、守護いたせ。

勘平　ハツ、畏まつてござりまする。

與市　コレ〳〵勘平どの、おかるが事をどうするのだ……
待ちやれ。
ト勘平を留めにかゝる。八郎、與市兵衛を退けて
八郎　御前の御用を仰せ付けられたる、勘平どのをなんと
するのぢや。慮外なさば爲にならぬぞ。
與市　モシ、九太夫さまえ。勘平どのへ慮外をしちやア、
爲にならぬとサ。
九太　其方が願ひは、この九太夫が聞き屆けた程に、氣遣
ひするな。
彌兵　コリヤ〳〵數馬、萬事九太夫どのゝお云やる事を、
御家中の鏡ぢやと、手本に致すがよい。
八郎　畏まりましてござりまする。
勘平　エヽ、おのれは。
判官　コリヤ、刀を持參いたさば、大切の賄り物、心を付
けよ。
勘平　ハツ。
判官　彌兵衞、數馬を奥へ連れ參れ。
彌兵　ハツ。
判官　今改めて主從の杯くれう。
彌兵　有り難うござります。

判官　糸瀧、酒を申し付けい。
糸瀧　ハツ、畏まりました。
九太　拙者も改めお近付きに。
判官　皆參れ。
皆々　殿のお入り。
ト唄になり、判官、先に立ち、九太夫、勘平刀を持ち
彌兵衞、八郎、糸瀧、障子の内へ入る。
與市　コレエ、勘平、挨拶をして行きやれ。おかるをお
れに渡せばよし、渡すまいと云やア、勘平、お身樣にやア
この與市兵衛が云ひ分があるぞよ。どうするのだ〳〵。
ト無理に怒鳴る。九太夫、あたりを見て、與市兵衛が
側へ寄り
九太　もうよい〳〵。與市兵衛、もうよい程に默るがよい
與市　そんなら、もうようござりますか。
九太　殿の御前で、あの勘平めに、おかるが事を聞かして
置けば、どこぞぢやアかゝらにやアならぬ彼奴が身の上。
あの勘平が事を思ひ切つて、この九太夫が妾にさへなれ
ば、たつた今でも支度金が百兩に、親與市兵衛へ扶持方
が五人扶持。一人の悴定九郎をかけて違ひはない事。ま
だその上に、この九太夫が貯への金銀は、殘らずお身に

打任せ、なんぼなりとも貸し付けて、利分は二人で半分分け。なんと、旨くして喰はせるぢやないか。

與市　それ合點でかゝつた仕事。あのおかるめをお前樣へ妾に上げりやア、お釜を起すこの親仁。爪の長いが敵役の商賣、今日中に叩き付けて、あの女を得心させて、そびいて歸ります程に、細工は流々、仕上げを見さつしやれ。

九太　その詞に相違なく、必らずおかるを。

與市　ハテサテ、與市兵衞でござります。

九太　いよ／＼おかるが妾になれば、與市兵衞にはこの九太夫が。

與市　これづくならばと、

ト手にて、小判の形なして見せる。

九太　頼まれてくれるか。

與市　劍の山を俵轉びでもする心サ。

九太　そんなら、與で。

與市　參りませうか。

九太　來やれ。

與市　ヤツトコナ。

ト唄になり、九太夫、與市兵衞、下座へ入る。この唄のうち、花道より、顔世御前、衣裳着流し、抱へ帯の形にて、扇子を持ち出て來る。後より、段八、甲斐絹の風呂敷包を持ち出て來る。直ぐに舞臺へ來て

段八　モシ／＼、顔世御前さま。

顔世　これいの。その名を云うてたもるないなう。

段八　憚りながら、拙者はどうも合點が參りませぬ。石堂右馬之丞さまのお妹御、顔世さまともあるお方が、お供の女中を一人もお連れなされず、如何にお忍びでこの鹽冶さまのお屋敷へお出でなさるゝと申して、餘り輕々しい事でござりまするが、こりやマア、どう云ふ事でござりまする。

顔世　其方達のやうな者まで、合點のゆかぬ事もあらうわいの。妾が此やうな形で、この高貞さまのお屋敷へ來たのは、お使ひに來たのぢやわいの。

段八　そりや又、どなたのお使ひにお出でなされました。

顔世　アノお使ひに來たのはな。

段八　殿樣石堂さまのお使ひでござりまするか。

顔世　なんのいなう、兄上樣へお隱し申して來たわいの。

段八　そんなら、どなたのお使ひでござりまする。

顔世　わしや顔世御前さまのお使ひぢやわいの。

段八　オヤ〳〵、そんならあなたのお使ひに、あなたがお出でなされましたか。そりやどう云ふ譯で。

顏世　その譯はこの扇……「一歲の一夜の星を契りにて、二つの星の二心なし。」高貞と此やうに、美しうお書きなされたは、あの判官さまの御手蹟。このお歌をあなたぢやと思うて、朝夕暫しも離さず持つて居る。この顏世が心の內を、兄上樣にもお察しなされてやら、末々は判官さまと、女夫にしてやりたいと思し召してか、桃の井播磨守さまへお話しなされて、云ひ號けもあるやうなお噂。ほんに嬉しい事ぢやと思へども、判官さまのお心が知れぬゆゑ、わしが直々、顏世御前のお使ひになつて、高貞さまにお目にかゝり、判官さまのお心を聞きたさに、このお館へ來たのぢやわいの。

段八　成る程、色事と云ふものは怖いものだ。何にも御存じないお方が、判官さまのお心をお聞きなされうと、あなたのお使ひに、あなたがお出でなさるゝとは、こりやどうも云へぬ思し召しつきでござりまする。そんなら今日の顏世さまは。

顏世　アノ腰元の靑柳ぢやわいの。

段八　それで樣子が知れました。左樣なら私しが、お取次の女中を、呼んで參りませうか。

顏世　そんなら早う判官さまに、お目にかゝるやうに。

段八　畏まりました。

ト合ひ方になり、段八、下座へ入る。顏世、あたりを見廻し

顏世　「一歲の一夜の星の契りにて、二つの星の二心なし」と遊ばしましたる高貞さまのお歌。此やうなお心なら、さぞ嬉しからう。お目にかゝつて、早う落ち付きたいものぢやわいの。

ト合ひ方のうち、奥より、以前の糸瀧、出て來り、直ぐに顏世が側へ行き、

糸瀧　顏世御前さまよりのお使ひは、お前でござりまするかいなア。

顏世　サイノ、妾は顏世御前さまのお使ひでござりますわいの。

糸瀧　そりや御苦勞に存じます。私し事は織部彌兵衞が娘糸瀧と申す者でござりまする。顏世御前さまよりのお使ひの御口上、仰せ聞けられ下さりませう。

顏世　サア、その御口上は、ほんに何やらであつたわいのオヽ、それ〳〵、顏世……さまの仰しやりまするは、鹽

冶判官高貞さまには、お歌をよう遊ばしますとの事、ならう事なら、自らを、お弟子になされて下さりませいとのお使ひぢやわいなう……御口上でござりまする。

糸瀧　お使ひの趣きは、委細承知仕りましてござりまする。判官へも申しまするでござりませう。して、お使ひの名は何とやら。

顏世　アノ自らが……私しが名は、何とやら。九重でもなし、櫻木でもなし、小浪でもなし、オヽ、それ〳〵、慥か靑柳であつたものを……ハイ、靑柳と申しまする。

糸瀧　そんなら、お使ひの名は、靑柳どのでござりまするな

顏世　アイ、靑柳どのでござりまする。

ト此うち、糸瀧、扇子を見付けて

糸瀧　モシ〳〵、お前の持つてお出でなさんす、その扇子の御手蹟は、慥かこなたの殿樣、判官さまのお書き遊ばした、お歌ではござりませぬかえ。

顏世　よう覺えてぢやわいなう。

糸瀧　ドレ〳〵、拜見いたしませう。

顏世　判官さまのお手に違ひはないかいの。

ト扇を渡す。糸瀧、よく〳〵見て

糸瀧　「一歳の一夜を星の契りにて、二つの星の二心なし高貞」モシ〳〵、この御手蹟は、判官さまのお書きなされたのに違ひござりませぬ。

顏世　そんなら、ほんまにあなたのお書きなされたのかいの。

糸瀧　時に合點が參りませぬは、このお歌は七夕の兼題、この扇へお書きなされて遣はされた所は、それ〳〵、石堂さまのお屋敷へ、奧方へ遣はされたと存じましたが。

顏世　サア、不思議な御緣で、高貞さまのお書き遊ばしましたこの扇を、肌身離さず持つて居るわいの。

糸瀧　すりや、あなた樣には、顏世御前さまでござりませうかな。

顏世　エヽ、どうして自らが。

糸瀧　イエ、顏世御前さまでござりませぬ者が、自らと仰しやりましたは。

顏世　そんなら、わしが自らと云つたかいの。

糸瀧　先刻にからの御樣子、ちよつと見ましても、やるものぢやござりませぬ。

顏世　オヽ、恥かしい。

ト扇にて、顏を隱す。

糸瀧　なんの恥かしい事がござりませう。判官さまをお慕

ひ遊ばし、使ひの女中にまでおなりなされて、お出で遊はしまするとは、よく／＼な事ぢやと存じますれば、ほんにあなたのお心根が、おいとしう存じますわいなア。

顔世　よう其やうに、しをらしう云うてたもつたなう。斯うした形で、あなたにお目にかゝる事は、恥かしうてなるまい程に、せめて判官さまのお手でお書きなされたお文ならば、どのやうなお心強い事お書きなされて下されても大事ない程に、あなたのお文なりと、わしや見たいわいなア。

糸瀧　御尤もでござります。折がようござりましたならば、あなた様を殿様へ、お引合せ申し上げませう。それがならずば、御挨拶のお文でも參りまするやうに、私しがお取持ち申し上げませう。

顔世　そりやマア、ほんまの事かいな。

糸瀧　嬉しいお文を、お目にかけませうわいなア。

ト　ばた／＼にて、花道より、足輕一人、走り出て、花道にて

足輕　申し上げまする。

糸瀧　何事ぢや。

足輕　只今、高の師直さま、お入り遊ばしましてござりまする。

糸瀧　殿様には、師直さまのお出でをお待兼ね。早うお通し申すがよい。

足輕　ハツ。

ト引返して入る

糸瀧　顔世さまには、爰は端近、イザ御案内。

顔世　そんなら、改めて逢ひませうか。

ト唄になり、顔世、しとやかに障子の内へ入る。糸瀧、付いて入る。この時、向うにて「高の師直さまお入り」と呼ぶ。直ぐに所作の切れになり、花道より師直、上下衣裳の形。乳人侍從、裲襠衣裳。伴内、熨斗目麻上下、中股立ちの形にて、いづれも出で來り、直ぐに舞臺へ來る。下座より、判官、數馬、出で來り師直を出迎ふ。

師直　判官どのでござるか。

判官　師直どのには、ようこそお出で下されました。先づ先づあれへ。

師直　然らば御免下されい。

ト師直、上の方へ通る。

判官　早速ながら、いよ／＼明日は、若君直義公へ、徽宗

皇帝の鶏の一軸を、差上げまする程に、何分よろしう御披露頼み上げまするな。
師直　ナニサ、兼ねて其許さまの事は、師直外ならず存じて居れば、如何やうな儀がござりましても、お氣遣ひ召さるな。
判官　それは千萬忝なう存じます。
師直　時に、今日は倅師安へ、其許様のお差料、安綱のお刀を、いよ／＼お讓り下さるか。
判官　今朝より勘平へ申し付け置きましてござれば、後方改め進上いたすでござらう。其方は師安どのゝ乳人、侍從でないか。
侍從　ハツ、師安方へ安綱のお刀を、お讓り下されんとの事ゆゑ、名代と致しまして、お禮に上がりました。
判官　相變らず伴内、お供を致したか。
伴内　ハツ、主人師直儀は明日の御用にて、殊の外取込みますれども、御懇意の判官さまゆゑ、參上仕りましてござりまする。
判官　それは別して忝ない。折角お招き申して、さしたる事もないが、其方達も打寛ろいで、お伽を申してよからう。

伴内　畏まりましてござりまする。
師直　時に判官どの、あれに扣へたる御家來は、見馴れぬ者でござるか。
判官　左樣でござらう。彼れは少し見所ござつて、今日召抱へましたる、數馬と申す者でござりまする。
師直　よい折柄逢ひ申す。
數馬　ハツ、織部數馬と申す不調法者、お目通り仕りまして、有り難う存じまする。
師直　織部と申すからは、彌兵衛が聟ぢやな。
數馬　左樣でござりまする。
師直　なか／＼發明さうに見ゆる。糸瀧は仕合せ者ぢや。
判官　彌兵衛も先つ安堵仕りました。
師直　その筈／＼。伴内、數馬に挨拶いたせ。
伴内　畏まりました。其許が、織部數馬どのでござるか。拙者は鷺坂伴内でござる。お知る人になりませう。
ト數馬を見て、恟りして
ヤ、ヽ、お主は鱒賣り長次郎ぢやないか。わりやよくこの伴内を抛り出したな。うぬにやア云ひ分が……あらう筈もない數馬どの、以後は抛り出さぬやうお心安う。
數馬　これは／＼、伯父の敵利根彈正を……お匿まひなさ

れしは、お武家方にはござる習ひ、拙者、運に叶ひまして、討ち負ふせましたる心の内、御推量下さりませ。さてさてその節は……何事もこの上は、御別懇に申し談じませう。

師直　コレ〳〵、數馬とやら、外の屋敷なれば、其方には身が申し分もあれども、大星由良之助親子、九太夫親子ともに、身共が家來も同然に思うて居る師直ゆゑ、その分にして差措けども、伯父の敵を討つたりとも、我れ獨りの手柄だと思ふな。武士の身の上には、誰れしも左樣な事はある習ひぢやぞ。

數馬　ハッ、兎角この上は、奉公のみ大切に勤めまするやうにござりまする。

師直　奉公を大切に勤めると云へば、侍從、其方に申し付けた艶書……折よくば合點か。

侍從　畏まりました。

師直　判官どの、まだ顔世御前は見えませぬか。

判官　如何ござりまするやら、最早見えましたでござりませう。

師直　左樣なら、早う逢ひまして、何とか話しませうではござらぬか。

判官　ようござりませう。暫らくのうちなりと、一獻差上げませうか。

師直　御酒ようござらう。

判官　然らば、此方へお出で下されい。

師直　御案内なされい。

判官　イザ〳〵。

ト唄になり、師直、判官、數馬、伴内、目禮して、伴内を先に立て、數馬、入る。この唄のうちに、顔世、裲襠衣裳の形にて、扇を持ち出て來る。侍從、顔世を見て、橋がゝりの方に扣へ居る。

顔世　判官さまは、いづれにお入りなされまするぞ。高貞さま……高貞さまは、どれにお出でなされます。

ト方々尋ねる。侍從、顔世が側にソロ〳〵寄り

侍從　モシ〳〵、憚りながらあなたは、顔世御前さまではござりませぬか。

顔世　成る程、自らは顔世ぢやわいの。

侍從　ア、紅ゐは園生に植ゑても。

ト思ひ入れ。

顔世　其やうに云うてたもる其方は。

侍從　ハイ、私しは侍從と申しまして、さるお方にお宮仕

へ致して居りまする者でござりまするが、あなた様へ折入つて。

額世　何事かば知らねども、云ひ寄る事もあるならば。

侍從　そんなら、私しが申し上げまする事を、お聞きなされて下さりまするか。

額世　マア、なんの事ぞいなう。

侍從　あなた様へ、お目にかけたい物がござりまするわいなア。

額世　自らに。

侍從　ハツ、……憚りながら、これを御覽なされて下さりませう。

ト懷中より文を出して、額世へ渡す。額世、取つて上書を見て、合點のゆかぬ思ひ入れあつて、直ぐに返さうとして、よく〱見て

額世　思ふ君樣へ高より……高より……この高と云ふ字は覺えのある高と云ふ字は、慥かこれ〱、この扇にお書きなされた。

ト扇と文の上書きを引合せ見て

高と云ふ字、そしてマア、此やうにも似るものか。こりやコレ、このお文も、矢張りあなたのお書きなされた文ぢやわいなう。

侍從　サア、そのお文の參りました所は。

額世　其方が云やらいでも、よう知つて居るわいの。

侍從　御存じとは額世御前さま、ほんに油斷のならぬお方でござりますわいなア。

額世　オヽ、恥かし。

侍從　とても事に御覽なされて、ちよつとなりとお返事を、お上げなされて下さりませうならば。

額世　そんなら、ドレ〱。

ト封を切り、中を繰り返し〱讀み、嬉しき思ひ入れあつて

ほんに此やうにもお心盡され、お書きなされしこの水莖、あしがきの障りなくば、笹の小笹の一節なりとも、枕交さんとの、お情厚きお文の文體。この日頃から思うて居りまする、戀しいお方から、斯うしたお文來るからは、願うてもない今日の首尾。そんなら返事を上げうかいな

侍從　そりや、有り難うござりまする。

額世　ドレ、お返事を申し上げうか。

ト唄になり、額世、有り合ふ料紙にて、サラ〱と書いて結んで直ぐに侍從へ渡し

侍從　星も逢ふ夜の天の川、結ぶ契りは今宵のうち。
顏世　そんなら、お逢ひなされて下さりまするか。
侍從　此方から焦れて居たものを。
顏世　さぞお喜びなされませう。
侍從　此やうな嬉しい事はないわいの。
顏世　そんなら首尾して
侍從　今宵のうちに
顏世　君が合圖を
侍從　待つて居るぞや。

ト唄になり、顏世、恥かしき思ひ入れにて、侍從、顏世が返事を取つて喜ぶ思ひ入れあつて、顏世は障子の内へ、侍從は下座へ入る。

ト下座より、勘平、以前の刀を袱紗に包み、持ち出で來る。後より、おかる、以前の形にて、付いて出て來り

勘平　ハテサテ悪い合點。今も奥で云ふ通り、マアあの與市兵衞と、なんでも一緒に、この屋敷を下がりさへすりや、何事も浪風なしに納まると云ふのに、聞分けのない
かる　イエ〳〵、それではお前の心に、なんぞ樣子がなけりや叶はぬ。その譯を云うて下さんせ。聞かねばわたしの胸が晴れぬわいなア。
勘平　アレ、まだ執拗う云やる程にの。なんの、この勘平に樣子があらう。其方を歸さねば、却つて其方やわしが身に、不義の名を取らにやアならぬ。最前も其方の親・與市兵衞が、御前に於ていろ〳〵との悪口。ほんに思へば有り難い御前樣のお情、コレ、このお刀に仰せ紛らせてその座はそれで遁がれたれども、又もや左樣な恥辱を受けては、もうその時は云ひ譯がない。さすれば其方の爲にもならぬ。爰をよう聞分けて、どうぞ與市兵衞と一緒に歸つてたも。斯う云ふうちも人が見れば悪い。コレコレ、悪い事は云はぬ、得心して歸つてたも。頼んだぞや

ト おかる、恨めしさうに勘平を見て

かる　勘平さん、さう云はしやんすりや、わしや有やうに申します。わたしがこのお屋敷を下がると、あの父さんが、直ぐにわたしを、嫌な所へ遣らうと云ふ心でござんすわいなア。
勘平　さすれば其方を、賤しい奉公でもさゝうと云ふのか
かる　イエ〳〵、そんな事ぢやござんせぬ。まだそれよりは嫌な事ぢやわいなア。
勘平　それでなくて嫌な事とは。

かる　サア、お前は知らしやんすまいけれど、アノ九太夫面の所へ、手かけ奉公に遣ると云ふわいなア。

勘平　ヤ、すりや、アノ九太夫が。

かる　サア、常からわたしに、いろ／＼な事を云ふけれどなんの、そんな事には相手になる氣はござんせぬが、今日このお屋敷を下がると、慥かにその事を云はるゝは知れてある。わたしやそれが身を切らるゝより嫌で／＼、なんぼうでもお前の側を離れる事は嫌でござんす。よう思うても見て下さんせ。わたしが兄さん平右衞門は、不慮のお咎めにて、その人代りに女子のわたしを、父さんがこのお屋敷へ御奉公に上げさしやんして、ほんに初めのうちは、嫌な事ぢや、辛い事ぢやと思うてばつかり居たうち、どうした縁か、フッとお前と、斯うした仲になつてから、これはマアよい所へ御奉公に來た事ぢや、神佛のお指圖ぢやあらうと、モウ／＼、ほんに今では、隨分御奉公を大事、お主樣を大切にして、いつまでもこのお屋敷に居たいと思うて暮らすは、みんなお前のお側が離れともないばかりでござんすわいなア。それにマア心もない親と一緒に、屋敷を下がれのなんのとは、そりや胴慾な、聞えませぬ。例へ父さんは、どう云はしやんせうとも、わたしや矢ッ張り斯うして居て、お前のお顔を見て居たいと思ふ、わたしが心は知らいで、屋敷を下がれの歸れのとは、そりや聞えませぬ勘平さん、わたしが心にも、ちつとはなつて見てくれたがよい。酷いわいなう。聞えませぬわいなア。

ト此うち、始終合ひ方。勘平あたりに氣を付ける思ひ入れ。

勘平　サア／＼、その志しは、キッと承知して居る。今の九太夫が事を聞いては、猶更こなたをこの館には置かれまい。

かる　そりや、なぜでござんすえ。

勘平　さればサ、今ので讀めた事がある。この頃御前にて九太夫が付けつ添へつ詞の端。ムウ、イヤ／＼、どうしても其方は、屋敷を出るがよいわえ。

かる　それでは矢ッ張り父さんが、九太夫の所へ行けと云はしやんすもの。

勘平　サア、そこは與市兵衞が慾に迷うた親の威光。それさへ得心さすならば、どのやうにもなる事ぢやぞよ。

かる　そんなら父さんにその譯を。

勘平　サア、おれが話す間がなくば、其方が先へ話して置

いて、よく得心させて置きやれ。
かる　それでもお前が云はしやんせねば、あの片意地な父さんが。
勘平　ハテ、何を云うても金事にして濟ませば、得心させぬと云ふ事はない。おれがちよつと逢ひたけれども、今日はこの刀の御用で、御前は滅多に離れ難い。折を見合せ後方にでも、與市兵衞に逢ふ程に、マア其方が逢うて、よいやうに云うて置きやれ。
かる　そりやモウ、父さんの事ぢやに依つて、よいやうに云ふは云はうが、そしてお前は、もう奥へ行かしやんすのかえ。
勘平　サア、いま云ふ通り、今日はこのお刀の御用が大切
かる　なんぼこの御用が大切でも、わたしが御用も大切ぢやあらうぞえ。
ト おかる、恥かしき思ひ入れにて、俯向くこなし。
勘平　さう云やれば、それも大切なものぢやけれど。
かる　けれどなら、ちよつと大切がつてくれたがよいわいなア。
勘平　ぢやと云うて、今はどうも。
かる　大切がられんかえ。
勘平　さうではなけれど……有やうはこのお刀より、其方の切れ味を、大切がらいでなんとせう。
ト おかるが側へ寄る。兩人、顔を見て
かる　オヽ、嬉し。
ト 抱き付く。奥より、侍ひ一人出て
侍ひ　勘平どの、これにお出でなされましたか。
ト 兩人、恟りして、何喰はぬ顔の思ひ入れ。よろしくあつて
勘平　オヽ〳〵、慌しい、なんの用だ。
侍ひ　只今奥にて糸瀧さまが、急にお目にかゝりたい儀がございまするとの事。お早うお出でなされませ。
勘平　糸瀧どのが、お目にかゝりたいとか
侍ひ　左樣でございまする。只今お出であられませう。
ト 引返す。
勘平　ハテ、何事であらうぞ。
ト 勘平、刀を持ち立つを、おかる、刀を持つて
かる　モシ、その糸瀧さまとは、織部さまのお娘御ぢやないかえ。
勘平　彌兵衞どのゝ御息女サ。
かる　その糸瀧さんが、お前に用とは、どうやら合點がゆ

かぬわいなア。

勘平　ハテサテ、いろ／＼な所へ氣を廻す者ぢやなア。

かる　イエ／＼、あんな美しいお娘御の側へは、滅多に油斷がなりませぬわいなア。

勘平　なんの、そんな事があるもので。急に逢はうとあるは、何か御用の筋でがなあらう。マア／＼、そこ離しやれ。ツイ行て來う。

ト行かうとするをキツと捕へ

かる　イエ／＼、わたしが折角話ししようと思ふ所へ、呼びにおこしやしやんしたに依つて、この刀はわたしに預けて置いて、さうして糸瀧さんにお逢ひなされたら、また爰へこの刀を取りに、ちよつと來て下さんせえ。

勘平　ハテ、なんのさうせいでも、折さへよくば、おれに如才があるものか。マア、そんなら其方の心休めに、この刀は預けて置く。外へ行かずとも、爰にチツと待つて居や。

かる　必らず早う來て下さんせえ。

勘平　そりや合點ぢやが、コレ、九太夫は御免だによ。

かる　知らんわいなア。

ト唄になり、勘平、奥へ入る。おかる、思ひ入れあつて

なんぢややら、人が折角好い折ぢやと思うて居る所へ、いろ／＼な邪魔が入つてから。これを思へば、お宮仕へ程、辛氣な事はないものぢやぞ。

ト此うち、後より段八出て、おかるに抱き付かうとする思ひ入れ。

なんでも、この刀が爰にあるから、ツイ來やしやんすであらうけれど、あの糸瀧さまも糸瀧さまぢや。人の大事の殿御に、御用のないやうに生れて來たがようござんすアタ好かぬ。エヽ、モウ、待たるゝとも待つ身の譬へぢやわいなア。

トいろ／＼氣の揉める思ひ入れ、後より段八、おかるに抱き付く。おかる、悄り。

これはしたり、誰れぢやぞいなア。

段八　コレ、聲高し、おれぢや／＼。

ト　おかる、見て

かる　こなたは石堂さまの段八どの。

段八　段サ／＼、だんじない者サ。

かる　アタ嫌らしい。てんがうさんすと、奥へ聞えるやうに、大きな聲をするぞえ。放さぬかいなう。

トいろ〳〵あつて振り放し、こなし。
段八　ハテ、野暮な聲ぢやぞ。これが奥へ聞えて堪るものか。コレ、おかるぱう、お主はおれが事を云ふと云ふが、たつた今爰で勘平どのと二人、樂しんで居た事を奥へ云はうか。
かる　コレ滅相な。どこにマアそんな事、わしや覺えは。オヽ、證據にはしかも勘平さんは、糸瀧さまの御用で、奥に居やしやんす。それが噓なら、ちよつと行て見てござんせいなア。
段八　ハヽヽ、そんなら糸瀧さんの御用で、勘平どのが奥へ行たのは、ほんの事だと思つて居るか。
かる　ほんの事でなうてわいなア。
段八　ハテ、巧く參つたな。
かる　なんの事ぢやいなう。
段八　コレサ、ありやアおれが、あんまり二人が旨く話しかけて居るから、業腹になつて、糸瀧さまの御用だと云つて、使ひの者を寄越して、勘平を奥へやつたは、この段八さまが計略ぢや。なんときついか。その後へ廻つて今のほとぼりの冷めぬ所を、我れらが賞翫いたさにやアならぬ。

トまた抱き付くを振り放し
かる　エヽ、〳〵〳〵、アタ穢らはしい、寄るまいぞ〳〵。うるさいわいなう。汚ならしいわいなう。
段八　ハテ、酷く云ひ放つの。コレ、おれだと云つて、中位な男だものを、あんまり勘平どのとは押しも押されもする男でもないぢやアないか。それを、さうつれなう平潰しにするは、あんまりだぞえ〳〵。
かる　エヽ、知らぬわいなア。
段八　さうつれなくすれば、おれもまた意地づく、この段八が命一つ投げ出して、其方は勿論、あの勘平めも安穩では置かぬ。サアおかる、それが怖くば、キリ〳〵と、この段八に色よい返事を早くしろ。
かる　面白い。返事しやんせう。
段八　その返事は。
かる　知れた事、嫌でござんす。
段八　なんと。
かる　ハテ、こなさんが命を捨てゝ、わたしら二人へ仇するると云はしやんすりや、わたしも意地づく。こなさんと刺し違へて死ぬる覺悟、お前も尋常に覺悟して待つて居やんせ。

段八　ハテ、太々しう出かけたな。よいワ、それ程に思ひ詰めた事なら、おぬしが事は思ひ切つて、おりやこの刀を

　ト有り合ふ刀を取らうとする。おかる、押へて

かる　待つた。こりや、この刀を何とさしやんす。

段八　知れた事。こりや勘平めが預かつた安綱のお刀。師安さまへ差上げうと云ふ、大切なこのお道具を、女風情の手に置くからは、早野勘平は上を侮る不屆き者。この通りを九太夫さまへ申し上げ、實否を糺すが腹癒せだワそこ放せ。

　ト段八、刀の鞘の方を持つて引取る。おかる、柄を捕へて

かる　コレ、滅相な事を云はしやんすな。

段八　サア、それが嫌なら、思ひ直して、おれが心に隨ふか。

かる　さうぢやと云うて。

段八　嫌と吐かしやアこの刀で、勘平が身の上だぞ。

かる　サア、それは。

段八　返事をする氣か。

かる　サア。

段八　放さぬか。

かる　サア。

段八　サア〳〵〳〵。面倒な。

　ト刀を引上げる。立廻りよろしくあつて、トヾおかるを下に引付け、無理に口を吸はうとする。これを振り放す拍子に、段八は鞘、おかるは抜き身を持つて引分かれる途端に、段八が胸先を切る。

段八　ヤア〳〵、切つたな〳〵。

かる　コレ〳〵、わたしは切らぬが、お前が無理に取らうとさしやんした拍子に

段八　イヽヤ、わざと切りやアがつたな。

かる　コレ、聲立てゝ下さんすな。

段八　聲立てないでどうするものだ。大切な安綱の刀で、おかるが段八を切つたぞ〳〵。モシ、九太夫さま、伴内さま。

　トこれにて、是非なく、おかる、段八ないろ〳〵立廻りあつて、トヾ刺し殺し、慄へながら止めを刺し、奥へ氣を付けるこなしあつて、死骸を縁の下へ隱し、段八が羽織にて、こぼれし糊を拭く所へ、與市兵衞、奥より出て

與市　いま九太夫さまを呼んだは誰れだ。
かる　エヽ、そりやアノ何サ。
ト顏見合せ
與市　わりや娘のおかるぢやないか。
かる　お前は父さん。
與市　おかる、われに逢ひたかつた／＼。もう樣子は諄く云ふにや及ばぬ。親も許さぬいたづらかわいて、粒三文の足しにもならぬ上に、この後どんな事仕出さうも知れぬ女郎め。サア、一緒に失せい。連れて行くのだ。歩め
ト與市兵衞、おかるを引立てにかゝる。おかる、いろいろ樣子を隱すこなしあつて
かる　待たしやんせ父さん、なんぼお前が、わたしの親ぢやと云うて、まだ殿樣からお暇の出ぬ身。さう自由にはなりますまいわいなア。
與市　何をちよべこべ。そこに如才があるものか。もう九太夫さまへ何も角もお願ひ申して、連れて歸る筈だ。細言吐かさず、キリ／＼來いと云ふに。
かる　イエ／＼、なんぼ歸るやうになつたとて、わしが身にも、朋輩づからに義理もあり、恩もあり、掛合ふ事もござんすれば、その譯立てもせず、滅多に内へは歸られぬわいなア。
與市　エヽ、吐かしやアがるな。その掛合ひと云ふは、大方勘平が事であらうがな。それで先刻、殿樣の御前で、めつきしやつきして置いたから、これから又われを賣つて、大金にせにやア、この與市兵衞が今日は續かぬワ。うぬは今までしたい事ひろいだ代り、野垂るまで賣つて喰ふぢや。覺悟してキリ／＼うせう。
かる　サア／＼。成る程、そりやモウ、親のお前の云はしやんす事ぢやによつて、なんの背きはせぬけれど、金で事の濟む事なら、わたしが外へ行かいでも、どうなと仕樣は。
與市　なんと云ふ。そんなら、金づくなら、外へ賣らいでも仕樣があるとや。
かる　サア、先刻にも勘平さんの云はしやんすには、どうなりと金の事なりやならうと云ふ相談を、お前に云へと云ひ付けて置かしやんしたわいなア。
與市　ムウ、先刻おれにも、ちよつと其やうな事云うたがマア、何にしろ、勘平に逢うての上にしよう。そして、勘平はどこに居る。早う爰へ呼んで來い。
かる　先刻奥へ御用で行かしやんしたが、もう爰へ見える

筈ぢや程に、ちつとの間、待つて居て下さんせ。

與市　イヤ〳〵、さうぺん〳〵と待つちやア居られん

かる　ハテ、隙取る事ぢやござんせぬ。このお刀をわたしに預けて行かしやんしたからは、もう今に見える筈ぢやわいなア。

與市　オヽ、成る程、結構な刀と見えるが、ドレ。

ト刀を取つて、いろ〳〵見て、拔かうとする。おかる留めて

かる　アヽコレ、滅相な、拔いては惡い。

與市　なぜ〳〵。

かる　サア、これは大切な殿樣のお差料、勘平さまのお預かりなされたお刀、迂濶に中を拔いて見る事はなりませぬわいなア。

與市　ハア、そんならこりや、先刻の時持つて居られた刀ぢやな。なんでも結構な物と見える。よいワ、この刀を金の代りに持つて去ぬる程に、いつでも金持つて取りに寄越しやれよ。

ト刀を持つて行かうとする。おかる、慌てゝ與市兵衞に縋り

かる　アヽコレ、それをお前が持つて行てよいものかいな

與市　そんなら今、金を受取つて行きたいものぢや。

かる　もそつと待つて居て下さんせ。

與市　勘平は埒は明かず、此奴を持つて行く方が、用心の爲にもいゝがや。

トまた行かうとするを留めて

かる　それをお前に渡してはならぬわいなア。

與市　そんなら金を寄越せやい。

ト兩人、せり合ふうち、勘平、ツヽと出て

勘平　おかる、そこに居るか。

かる　勘平さんか。待つて居ました。今アノ父さんが。

勘平　ハテ、そこ所か、只今この勘平をお召しなさるゝは慥かにお刀の御用。その預けた刀、此方へ渡しやれ。

與市　コレ、勘平どの、最前貴樣が云はつしやる、おかるが身の上の金。サア、受取らうか。

勘平　ハテサテ、今日はお館のお取込み。一兩日にはキッと此方より沙汰いたさう。ドレ、その刀。

トおかるは刀の血を案じて渡し兼ねる思ひ入れ。勘平引ツたくる。與市兵衞、矢張り渡し兼ね、刀に取付いて

與市　待たつしやれ、それぢやアおかるは自由にはさせぬ

この刀を金の代りに、

ト取らうとするを突き放し

勘平　大切な殿のお差料へ手をかけて。

かる　それでもその刀は。

トおかる、寄るを、勘平、キツと睨め付けて

勘平　ヤア、慮外者めが。

ト刀を持ち、ツイと駈けて入る。

與市　なんだ、べら坊め、うぬらが侍ひ風吹せたと云つて絲瓜とも思やアせんぞよ。おらは百姓だ。お百姓だぞえ。おれが娘を、よくうぬ、くりやアがつたな。土龍に泥鼈侍ひめ、コリヤ、娘、サア、うしやアがれ。

かる　サア、行きは行きますが、ちよつとアノ刀の事が。

ト行かうとする。おかるを引廻して、花道へ突き倒し

與市　なんの、うぬが構ふ事がある。キリ〳〵在所へ歩びやアがれ。

トおかる、泪ながらに

かる　そんなら、これが暫しのお別れでござんす。必らず約束の違はぬやうに。

與市　エ、、やかましいわえ。

ト無理に追ひ立てる。この拍子に一通を落す。おかる、取つて見て

かる　與市兵衞どのへ九太夫より。

ト與市兵衞、ちやつと取つて懷中し、おかると入れ替り、首筋を捉へて

與市　女め、キリ〳〵うせやアがれ。

トおかる、萎れながら一通に心を付けて、しを〳〵と與市兵衞に付いて向うへ入る。あと管絃になり、師直煙草盆を提げ、出て來る。後より、侍從、付いて出て來り

侍從　お喜び遊ばしませ。顏世御前さまより、お返事が參りましたわいなア。

師直　ヤ、、そんなら身共が送りたる、アノ艶書の返事が

侍從　アイ、參りましたわいなア。

師直　それは誠に夢ではないか。ドレ〳〵。

侍從　サア〳〵、御覽遊ばしませ。

ト文を出して師直に渡す。師直、押戴き、披き見て、ぞく〳〵喜ぶ思ひ入れあつて

師直　コレ〳〵侍從、コレ、この通りに、星の逢ふ夜の天の川、結ぶ契りは今宵のうちと、これ此やうに顏世御前が、返事に書いておこしたわいの。

侍從　さぞお嬉しうござりませう。

師直　これが嬉しうなうて何とせう。

侍從　お喜びでござりませうな。

師直　喜ばいで何とせう。

侍從　仲人は宵の程と申せば、これにお待ち遊ばしませ。後程お目にかゝりませう。

ト管絃になり、侍從、下座へ入る。

師直　今日は如何なる吉日か。これまで焦れし顔世御前、打解けて逢はるゝ首尾になつたと思へば、命があればおやたア。

ト文を取つて、ウツカリと見て居る、奥にて

糸瀧　顔世御前さま、いざ〳〵お出であられませう。

ト唄になり、奥より、顔世、糸瀧、出て來る。師直、これを聞いて、衝立の影に隱れて、扇をかざし居る。

顔世　其方の世話にて、思ひ思うたお方に、今日と云ふ今日逢はれると云ふは、此やうな嬉しい事はない。

糸瀧　モシ〳〵、慥かアノ衝立の影にお出でなされまするが、彼のお方でござりませう程に、サア、これからあなた樣お一人でお出でなされて、積るお話しを、しつぽりと遊ばしませい。後方お目にかゝりませう。

ト管絃になり、糸瀧、下座へ入る。これより顔世、幾度も側へ行き兼ねる思ひ入れあつて、やう〳〵衝立に手をかけて

顔世　新玉の年の一夜を待ち侘びて

師直　只今宵こそ新枕すれ。

ト一度に衝立を後へ引いて、互ひに顔見合せ、師直は嬉しき思ひ入れ。顔世は恟りして

顔世　ヤ、あなたは師直さま。

師直　顔世御前、其方に焦れて居ましたわいの。

顔世　ひよんな所へ來た事ではある。師直さまには、これに緩りと。

ト逃げて行かうとする。師直、顔世が袖を扣へて

師直　コレ〳〵〳〵、顔世御前、この師直が送りたる、定めて文は見たであらう。さればこそ、星も逢ふ夜の天の川、結ぶ契りは今宵のうちと、そもじの返事を師直は、それと思つて、爰に心嬉しく待つて居たわいの。

顔世　エヽ、そんなら先刻に、思ふ君樣へ高よりと、アノ上書きの消息は。

師直　高階氏のこの師直、高とばかりの師直が文。

顔世　エヽ、そんならアノ高の字は、師直さまの御苗字の

高と云ふ字でござりましたか。さう云ふ事とは露知らず高貞さまのお文ぢやと、嬉しう思うてこの顔世が、心の丈のお返事は、すりや間違ひであつたかいなう。ハヽヽハハア。

師直　なんとお云やる。高階師直が上書きの、高と云ふ字と、高貞が名乘りの高と云ふ文字を、高貞と思うて返事をしたるか。

顔世　必らず〳〵師直さま、お腹をお立てなされて下さりまするな。自らは鹽冶判官高貞さまを、疾から思うて居りまするわいなア。

師直　ヤヽヽ、なんと。

顔世　コレ、この扇や御覽なされて下さりませ。一歳の一夜を星の契りにて、二つの星の二心なし、高貞と、これにもお書きなされて下されましたわいな。

ト扇を見せる。師直、その扇を引ッたくつて、よくよく見て

師直　一歳の一夜を星の契りにて、二つの星の二心なし、高貞と、この扇へも記せしは恨みなれ。鹽冶判官高貞と顔世御前打語らひ、かゝる纐路があるならば、それと明かして師直に、思ひ切らせてあるならば、かゝる恥辱はあるまいもの。其方の手前も面目ない。

ト扇を顔世へ投げ返し、バッタリと下に居る。顔世、氣の毒なる思ひ入れあつて、怖々扇を取上げる。

顔世　此やうなお氣の毒な事はござりませぬ。くれ〳〵も師直さま、お腹をお立てなされて下さりまするな。判官さまの御存じの事ではござりませぬわいなア。

師直　返す〳〵も鹽冶判官、この師直に、よく面恥を與へたな。

ト奥を見て、口惜しき思ひ入れ。此うちに侍從、いそいそ出て來り

侍從　顔世御前さまこれに。師直さま、さぞお嬉しうござりませう。お取持ち申しました私しまでが、ほんに此やうな喜ばしい事はござりませぬわいなア。

ト師直が顔を見る。師直、侍從が顔を睨み付ける。侍從、これに愕りして、氣の毒なる思ひ入れあつて

こりやマア、どうした事でござりまするぞ。定めて顔世御前さまには。

ト側へ寄る。顔世、立ちも立たれず、侍從に身を背ける。侍從、モヂ〳〵して居ると、奥より、糸瀧、イソイソ出て來て

糸瀧　顔世御前さま、さぞお嬉しうございませうな。もうお取持ち申しました私しまでが、此やうた喜ばしい事はございませぬわいなア。

ト顔世が顔を見る。顔世、氣の毒なる思ひ入れ。糸瀧おぢ〳〵して、師直を見付けて、悄りして

ヤア、あなたは師直さま。こりやマア、ひよんな所へ參りました。

ト氣の毒なる思ひ入れあつて、扣へ居る。ト下座より伴内、喜び勇んで出て來て

伴内　どうでございまする、師直さま。日頃戀しいと思し召したる顔世御前さまを、今晩と云ふ今晩、お手にお入れたされ、あやかり者め、なぜ其やうに浮かぬ顔をなされまするぞ。ちつと大冴えにお冴えなされて。

ト師直の顔を見る。師直、伴内を睨み付ける。これにて、伴内、悄りして

こりやマア、どう云ふ事であるべいぞ。こんな解せねえ事はない。

ト氣の毒なる思ひ入れあつて、橋がゝりに扣へ居る。障子の内より、判官、出て來る。後より勘平、以前の刀を持つて出る。勘平は下の方へ扣へて居る。判官、師直が側へ寄つて

判官　さて〳〵今日は、なんの風情もなうお話し下されたこれから斯樣仕らう。幸ひこれに石堂どのゝお妹御顔世御前も見えられたれば、わつさりと御酒に致さう。師直どの、イヤサ、武州公、顔世御前と打寛ろいで、御酒になされてはどうでござらう。

ト何心なく云ふ程、師直、ムッとして顔を背ける。判官、氣の毒なる思ひ入れあつて

コリヤ〳〵伴内、師直どのには如何なされた。其方は知つて居るであらう。

伴内　どう云ふ事でございまするか。この伴内も……イヤ讀めました。大方斯樣でございませう。判官さまのお約束なされましたる、彼の安綱のお刀を、ナ、師安さまへお上げなさるゝ筈で、ナ、定めてお土産になさるゝお心でございませう。

判官　成る程〳〵、判官その儀は失念仕つた。コリヤ〳〵勘平、その刀、これへ〳〵。

勘平　ハッ。

ト刀を判官へ渡し、勘平は下の方へ扣へる。判官、この刀を取つて

判官　昨日師安どのへお讓り申さんと、お約束いたした安綱のこの刀、改めまして進上いたしませう。

ト刀を抜いて見て、よく〳〵改め、慚りして鞘へ納める。

師直　ドレ、師直が所望の刀、受取りませうか。

判官　サア、この刀は。

師直　なんと致した。

判官　改めましたところ、思ひもよらぬ刀の血汐。

師直　ヤ。

判官　何ともハヤ。

師直　判官どの、その刀も悴師安へ讓る事はなりませぬかな。

判官　サア、その儀は。

師直　身共が屋敷へ匿まひ置いたる、利根の彈正を討つたる眞壁の八郎も、判官どの、當殿の家來に召されたな。

判官　サア、その儀は。

師直　まだその上に、この師直に面恥與へしあの艶書……判官どの、重ね〳〵の御馳走、忝ない。重ねて禮を申すでござらう。

判官　最早お歸りなさるゝか。

師直　侍從、伴内、參れ。

兩人　ハッ。

ト唄になり、師直、無念の思ひ入れにて、侍從と伴内を連れ、向うへ入る。判官、後を見送つて居る。

顏世　モシ〳〵、大抵や大方、鹽冶判官さま、妾はアノ師直どのに逢ひまして、心配を致しましたわいなア。

糸瀧　どう云ふ事でアノ師直さまが……此やうなお氣の毒な事はござりませぬわいなア。

判官　氣の毒と云ふは、差當つたるこの刀、勘平、その刀改め見い。

ト投げて渡す。勘平、取上げ、改め見て驚ろき

勘平　ヤヽ、こりやこのお刀に夥しく糊がしたうて。

判官　其方が預かり置いたるその刀に、その如く生々しき血がしたうてある事を知らいでならうが。不調法千萬な

ト此うちに勘平、當惑のこなし。直ぐに刀の柄へ手をかける。

コリヤ勘平、早まるな。かゝる不調法なる事あつては、よもや腹切らずばなるまいが、暇くれた。

勘平　エヽ。

判官　師直どのへの申し譯、其方へは暇遣はした程に、こ

れより直ぐに何方へなりと立越えて、師直どのへこの刀の、云ひ譯さへ立つたならば、不興は赦し遣はしてくれう。必らず命が物種ぢやぞ。

勘平　エヽ、有り難うござりまする。

ト ばた／＼にて、花道より、伴内、走り出て來り、花道にて

伴内　ハツ、判官さまへ申し上げまする。一軸獻上の御衣服は、長上下との仰せ出されでござりまする。

判官　すりや、一軸獻上の衣服は、長上下との師直どののお指圖とな。

伴内　その趣き申し上げるやう、師直申し付けでござりまする。

判官　大儀々々。

伴内　ハツ。

ト 伴内、取つて返し、向うへ入る。

判官　顔世どのへは石堂どのへ、判官が言傳いたさん。此方へお來やれ。

顔世　畏まりました。氣の毒なるはあの勘平。

判官　コレ、詞をかけては、勘平が爲にならぬ。

顔世　ぢやと申しましても。

判官、糸瀧、顔世御前を奥へ伴へ。

糸瀧　先づお入りあられませう。

ト 唄になり、判官、心を殘し、顔世、糸瀧を連れて奥へ入る。勘平、やう／＼顔を上げ

勘平　御主人鹽冶判官さまより、預かり奉りし安綱のあのお刀、おかるへ預け置いたる所に、思ひも依らず刀の血汐。正しく人を手にかけしか。何とも心得ぬ。有り難きは判官さまのお志し、師直どのへ刀の云ひ譯立つならば、不興を赦して召返さんとの情のお詞。死ぬに死なれぬ勘平がこの命。是非に及ばぬ身の上ぢやなア。

ト 思ひ入れ。この途端に、ドロ／＼になり、上の方の蜂の巣へ山蜂數多群がり、小蜂と喰ひ合ふ。勘平、これをキッと見て

ハテ、心得ぬ山蜂の有樣。山蜂の花の姿に咲き出でて、匂ひはとふく人をおふらん。國家正に亡びんとする時、必らず妖兆ありとの本文。もしやお家の大事とも、なるべき蜂の前表なるか。アラ心得ぬ、蜂の爭ひぢやなア。

ト 思ひ入れ。下座より、おかる、走り出て來て、勘平が側へ寄り

かる　あれにて樣子は聞きましたが、あのお刀に血がした

ふて居たばつかりで、師直さまへお上げなされぬ越度と云ふは、勘平さん、あの血汐は、このおかるが、今更云ふに云はれぬ仕儀、只何事も殿様の御恩。

勘平　この身に替へても御恩は送らん。これより直ぐに。

かる　わたしも一緒に。

勘平　このお館を立退かうか。おかる、おぢや。

かる　サ、ござんせ。

ト後より、與市兵衛出て

與市　おかる、動くな。

トおかるを手籠めにする。これより、舞働らきになりおかるを連れて行かうとするを、勘平、これを隔てる立廻りよろしくあつて、トヾ二重舞臺へ三人上がり、與市兵衛はおかるを引立てる。勘平は與市兵衛を引留める見得になり、早下がり葉にて

幕

足利御殿の場

役名＝＝足利直義公。鹽冶判官高貞。桃の井播磨守。桃の井若狭之助。竹澤太郎。荒川平太。仁木三郎。大星力彌。織部彌兵衛。織部數馬。早野勘平。腰元、おかる。一文字屋才兵衛。狸の角兵衛めつぽう彌八。種ヶ島六藏。高武藏守師直。

本舞臺、三間の間、結構なる御殿の體。鍍金かな物煌きたる塗り高欄、本翠簾を半れんに巻き上げ、二疊臺を直し、これに、直義、烏帽子長絹の形にて、刺貫を穿き、中啓を持ち、座して居る。この側に、小姓、振り袖、上下の形にて、扣へ居る。師直、烏帽子、大紋の形。播磨守、若狭之助、素袍、かけ烏帽子の形にて、三方に一軸の箱を載せ、皆々並よく並び、天王立にて、幕明く。

直義　直義苟くも、この度當國へ下向なし、鎌倉鶴ヶ岡の造營に會へる事、源家長久の基、喜ばしう思ふわい。

播磨　我れ〳〵までも御機嫌よい體を拜し、斯樣な有り難い儀はござりませぬ。

直義　萬事は高武藏守師直へ、申し付け置いたれば、何事もよきに計らうてよからう。

師直　ハツ、尊氏公のお覺えめでたく、足利のお家へ對し奉り、政事に私しなき武藏守師直、今日差上げました

る大小名の唐畫の一軸、改めまして御前へ献覽に備へまするでござりませう。それに扣へられたるは、桃の井播磨守どの、御持參の一軸を、直義公へ差上げられて然るべし。

播磨　ハツ、御幼君なれども尊氏公の若君、尊まずんばあるべからず。君を蠶龍の蟠まるに譬へ奉り、即ち差上げまするは、玉燗が墨畫の雲龍、桃の井播磨守が献上、師直どの、よろしく御披露頼み入りまする。

師直　流石は直常どのゝ思し召し付き。若君樣にも、さぞお喜びでござらう。コリヤ、お小姓衆、御献覽に備へてよからう。

小姓　畏まりました。

ト管絃になり、小姓、箱より掛け物を出して、正面へかける。

師直　シタリ　誠に雲をも起し、雨をも降らさん、玉燗が筆勢、さて〳〵見事な儀でござる。

播磨　御挨拶にあづかりまして、拙者も大慶に存じまする從ひまして拙者が弟、若狹之助が差上げまする所の、牧溪が達磨の一軸　この儀は如何仕りました。

若狹　いよ〳〵献上相成りませぬか。師直どの、若狹之助承りたう存じまする。

師直　どうでござる、若狹之助どの、在鎌倉の大小名、その數數多ござる中に、尊氏公禪學に入り給ふ、宗祖の達磨の一軸は、萬事に心を用ひられたる貴殿の物好き、この師直も驚き入つてござる。何者が故障を申さうとも、身共が御前へ御披露申せば、ちつとも氣遣ひな儀はござらぬ程に、サヽ、御遠慮なう若狹どの、一軸を差上げられい。

若狹　僞はつて若狹之助を計るのか。師直、和殿が心腹承知いたさう。

播磨　コリヤ〳〵、そりや何事を申すのぢや。大切なる役目蒙むられし師直どの、御挨拶に虚言があらうか。直義公の御前に於て、率爾な事申し出さば、我れ〳〵が爲にならぬぞ。

若狹　イカサマ、日頃に變りし今日の樣子。かゝる表裏の人物と知らず、我が身を忘れて相手とすべきやうもなし。この上は牧溪の一軸、若狹之助献上と、よろしう御披露頼み存ずる。

師直　何がさて。コリヤ〳〵、御献覽に供へてよからう。

小姓　畏まりました。

師直　ト小姓、若狹之助が持つて來たる一軸を正面へかける
誠に、牧溪が名畫の筆意を顯はしたる達磨の一軸、これなぞが尊氏公へは第一のお土產でござらうか。イヤハヤ、感心いたしてござる。

播磨　御挨拶承つて、拙者も安心仕つてござりまする

若狹　面目を失なはゞ、我が身の上と思ひの外、師直どのの御賞美にあづかり、若狹之助も大慶に存じまする。

師直　老體の師直、何事も御容赦にあづかりたい。

播磨　これは〳〵。若狹之助、重ねて過言を申すまいぞ。

若狹　畏まつてござりまする。

ト向うにて、鹽冶判官出仕と呼ぶ。直ぐに下がり葉になり向うより、判官、熨斗目麻上下、小さ刀の形にて三方に一軸をのせ、持つて出て來る。直ぐに、舞臺へ來て、師直、播磨守、若狹之助が素袍、大紋の體を見て、驚ろき立ちどまつて

判官　昨日伴內どのを以て、師直どのゝ仰せには、長上下との指圖なりしが、只今御前に扣へられたる各々を見れば、素袍大紋。然らば判官も、衣服を改め御前へ出でん。ソレ。

トこの下がり葉のうち、取つて返す。向うより、竹澤太郞、荒川平太、仁木三郞、その外大名、いづれも烏帽子、素袍の形にて、てんでに三方に一軸を載せ、持つて出て來る。判官、一人々々に入れ替り、大名は殘らず、舞臺へ來て、居並ぶ。判官、向うへ行かうとする。

師直　コリヤ〳〵、判官どの、お待ちやれ。

判官　御用でござりまするか。

師直　暫らくそれに扣へ召されい。

判官　ハツ。

ト判官、花道へ扣へる。

師直　何れも、お早い御出仕でござる。御持參なされし一軸を、若君樣へ差上げられてよからう。

太郞　然らば竹澤太郞が差上げまするは、季安忠が虎の一軸、御披露よろしう賴み存ずる。

平太　まつた荒川平太が獻上は、東坡が竹のこの一軸、御前よろしう賴み存ずる。

三郞　さて又拙者が一軸は、玉元章が梅花の一軸、如何はしうはござれども、仁木三郞が差上げまする。

師直　何れも君を祝されて、物好かれたる唐畫の獻上。直義公にも、さぞ御滿足でござらう。

太郎　御披露よろしく
皆々　頼み存ずる。
播磨　それに扣へられたるは、鹽冶判官高貞どのではござらぬか。御覽の通り我れ〳〵兄弟を始め、何れも若君へ唐畫の一軸、獻上仕つてござる。其許さまには、何ゆゑ持參の一軸は差上げられぬ。判官どの、早う御前へ御獻上なされぬか。
師直　イヤ〳〵、直常どの、そのお取持ち御無用でござる。鹽冶判官、師直が御意得ませう。
判官　畏まつてござりまする。
　ト管絃になり、三方を持ち、舞臺へ來る。
師直どの、判官これまで罷り出ましてござりまする。
師直　この間仰せ渡された唐畫獻上、今日と申す事は、よもや忘れはおしやるまい。何ゆゑ遲刻仕るぞ、イヤサ、何ゆゑ一軸は差上げ召されぬ。
判官　恐れ入つたる師直とのゝお尋ね。判官持參仕つてはござれども、今日の衣服相違仕れば、不調法の段を恐れまして、暫らく延引いたしてござる。
師直　衣服相違とは不調法千萬な。御前をお見やれ、何れも素袍大紋着用とは、昨日申し渡してござる。その中に判官ばかり、長上下とは如何いたした儀でござる。ア、聞えた。こりやア直義公を、御幼君と侮つて、馬鹿におしやるのか。その輕卒なる取扱ひは、御自分の定めて存じよりあつての事でござらう。大紋を着用して、一軸を獻上あらばその通り。左樣なければ、尊氏公への上聞に達し、判官の家格を改めるでござらう。
判官　昨日までも入魂に致したる師直どの、打つて變つて只今の御挨拶、何とも合點が參らぬが、既に今日の衣服は伴内を以て、長上下との指圖に依つて、着用いたしたる判官高貞、拙者一人の不調法に罷りなる事、こりやこれ全く、師直どのゝお指圖では。
師直　コレ〳〵〳〵、大切なる今日の御儀式、何ゆゑ大紋素袍を、御自分一人長上下と指圖いたさう。何を申すも師直は老體、念に念を遣ひ申しても、判官、おてまへのやうな禮儀を知らぬ無法者、相手にやア申さぬ。どうとも勝手におしやれサ。
判官　如何なれば師直どの、日頃に似ぬ只今の挨拶、聞捨て置かれぬこの身の浮沈、判官宿意を承らう。
　ト急いたる思ひ入れ。
播磨　イヤ、コレ、判官どの、御前に於て不調法がござつ

ては、お家のお爲にもなるまい程に、早く衣服を改められ、若君樣へ一軸獻上あられてよからう。

判官　忝なうはござれども、心得ぬ師直どのゝ御挨拶。

ト詰め寄る。

師直　我が君直義公には、暫らく別殿へ入らせられ、然るべう存じ奉りまする。

直義　眺めに飽かぬ唐畫の一軸、千草丸、持ち參れ。

小姓　畏まりました。

師直　直義公のお入り。

直義　皆々こなたへ。

皆々　ハツ。

ト下がり葉になり、御簾を下ろす。師直、播磨守に續いて皆々下座へ入る。判官、無念の思ひ入れあつて、奧へ行かうとする、若狹之助、判官を留めて

若狹　待つた。こりや判官どの、何れへござりまするぞ。

判官　師直が挨拶、聞捨て置かれぬ今日の仕合せ。殿中深く推參して、鬱憤晴らさん。

若狹　そりや判官どの、御料簡が相違いたした。

判官　何がなんと。

若狹　武士に似合はぬ、そりやお詞が違ひました。

判官　判官の詞が相違せしとは、若狹之助、何を以て左樣お云やる。

若狹　既に近頃拙者が身の上、我が威に誇りしあの師直、討ち果さんと思ひ詰め、刀の柄へ手をかけしを、止められしは貴殿ならずや。判官どのゝ篤實に免じ、若狹之助が短氣を語り、その期を延ばせし拙者か堪忍、御存じではござらぬか。金銀に目をくれ、依怙に拘はる師直を、誠の武士の判官どの、よもや刀は穢されまい。千鈞の弩は鼷鼠の爲に發せずと、大國の主は萬士を養ひ給はずや。先づ／＼お急きなさるゝな。

判官　若狹之助どのゝ御教訓、謝すべきに詞なし。恥を恥と存せずば、かゝる憤りはあるまじき物を、この上は我が心を抱いて宥め、師直が挨拶、如何やうにあらうとも遺恨には存じませぬ。

若狹　すりや、若輩なる拙者が申したる事、聞き屆け下され、若狹之助も大慶、一朝の怒りに身を亡ぼし、親族の愁ひに及ぶ。必らず短慮を。急がずば濡れざらましを旅人の、後より晴るゝ野路の村雨。判官どの、衣服改め、御前へお越しあられませう。

ト唄になり、若狹之助、思ひ入れあつて、下座へ入る

し

判官、後を見送り

判官　朋友は信を以て交はるとは若狹之助の事。誠ある一言。判官が憤りを忍んで、衣服を改め御前へ出でん。次に扣へし大星力彌、烏帽子大紋を早う持て。

力彌　畏まつてござりまする。

ト向うより、力彌、廣蓋に烏帽子、大紋を載せ、廣蓋のまゝ持ち、走り出て來る。舞臺へ來て手を突き

仰せ付けられましたる御禮服、これまで持參仕りましてござりまする。

判官　早速持參なせしとは、出かした〳〵。力彌、身共に着せい。

力彌　畏まりました。御前樣、今日は御長上下との仰せ出されではござりませぬか。それに何ゆゑ、召し物を改められまするのでござりまするぞ。

判官　其方達も存じて居る通り、長上下との指圖なりしが御前へ詰めし各々は、何れも素袍大紋。師直が仕業、憎しと思へども、差かゝつたる今日の仕合せ。家を大事と思ふゆゑ、改めて御前へ罷り出るのぢや。

力彌　心得ざる師直公のお指圖、數刻延引仕りませぬうちに、イザ〳〵、お召替へあられませう。

判官　早う〳〵。

力彌　畏まりました。

ト管絃になり、判官、長上下を脱ぎ、烏帽子、大紋に着替へる。これを力彌、叮嚀に判官へ着せ替へ、烏帽子を着せ、小さ刀を取つて判官へ渡す。判官、この刀を差さうとする拍子に、思はず目釘走つて、柄前バラバラと落ちる。力彌、驚ろいてこれを取上げ、判官と顏見合せ

判官　衣服を改め、若君の御前へ罷り出でんと思ふ折柄、我が一腰の目釘走つて、たな心を失ひしは、何とも心得ぬさては今日、御前に於て、凶事あるべき知らせなるか。

力彌　こは情なき殿の仰せ。怪しみを見て怪しまざれば、怪しみ消ゆるとの本文を、君には思し召されずや。左樣な事にお心を惱まされずと、御機嫌よう。

ト力彌、我が差添の目釘を小柄にて拔き、判官の小さ刀の目釘に差し、手早く、判官へ渡し

御前へお上がりなされませ。

判官　心にかゝる一軸の獻上。力彌、其方に逢ふも、もしや主從。

力彌　エ。

判官　主用を大事に供待ち致せ。

力彌　めでたうお下がり遊ばされませう。

ト太鼓唄になり、判官、力彌と顔見合せ、思ひ入れあつて下座へ入る。力彌、判官が後を見送り、合點のゆかぬ思ひ入れあつて、思案しながら花道の方へ、長上下を廣蓋へ載せ、持つて來る。此うちに、下座より、播磨守、そろ／＼出て來る。力彌、思はず判官が事を案じて、ウカ／＼舞臺へ取つて返し、播磨守と顔見合せ

力彌　ハツ、あなた樣は、桃の井播磨守さま、御免遊ばされ下さりませう。

ト橋がゝりの方へ行かうとする。

播磨　コリヤ／＼、其方は鹽冶どのゝ御家來、大星由良之助が忰、力彌ではないか。

力彌　ハツ、左樣でござりまする。

播磨　其方はいかう苦勞して居る顔色ぢやが、如何いたしたのぢや。

力彌　ハツ、御賢察の通り、殊の外心勞仕つて居りまするやうござりまする。

播磨　さうであらう／＼。御身が眼中は生死の相にあづからず、主人の身の上につき、勞すると云ふやうな事か。

力彌　左樣でござりまする。主人鹽冶判官が儀に付きまして、當惑仕つて居りまする。

播磨　流石は由良之助が忰程あつて、若輩なれども主人を思ふ志し、末頼もしい。そりや如何やうなる事を案じて居るぞ。

力彌　お尋ね下されまするゆゑ申し上げまする。今日直義公の御前の樣子を、お察し申しまするに、師直さまの思し召しに、手前主人鹽冶判官、何とやらお憤りの儀もござりまするが、その儀をいろ／＼考へましたる所に、この間頻りに石堂右馬之丞さまのお妹御、顔世御前さまの儀を、鹽冶判官へお仲人いたしくれよとお頼みでござりましたとの事を承りましたが、右顔世御前さまの御縁談の儀が、未だ調ひませぬゆゑ、斯樣の事が師直さまのお心に違ひまして、今日の御前の樣子、日頃に相違いたしましたかと存じまして、甚だ拙者も心を痛め罷り在ります。

播磨　力彌、何と申す。然らは鹽冶どのを以て、石堂の妹御顔世御前を、アノ師直が貰ひたいと申すか。

力彌　左樣でござりまする。何卒師直さまと顔世御前さま

の、御縁談の儀が調ひまするやう、したいものでござります。

播磨　力彌、その縁談の儀は調ふまい。

力彌　へイ、そりや又如何やうな儀で、この御縁談は調ひませぬな。

播磨　兼ねて石堂右馬之丞どの方より、あの顏世御前を、何卒其方主人鹽冶どのへ、遣はしたいとの頼み、再三申し越されたゆゑ、判官どのへも右の段を話し置きたれば、內々縁談の儀も調ひ、直義公都へお登りなされたる後はそろ／＼その儀を取結ぶ筈。氣の毒ぢやが師直へあの顏世御前は。これぢやに依つて挨拶はあるまい。

力彌　エヽ、なんと御意遊ばしまする。アノ主人鹽冶判官が、師直公に頼まれましたる、顏世御前の御縁談の儀は石堂さまよりあなた様へ、再三お頼み遊ばされまして、鹽冶判官へ御縁組まれんと、顏世御前の儀は、御內々お云ひ號けでござりますとや。

播磨　石堂どのより、達て判官どのへ、顏世御前をやりたいとの頼みぢや。

力彌　左様な事とは我れ／＼も存ぜず、師直公へ御縁談の儀調ひませれば、差當つて主人のお身に係はる御難儀、ホヽホイ。

ト當惑する。九ツの時計鳴る。

播磨　あのお時計は最早九ツ。お杯頂戴の刻限。力彌、爰に居られまい。

力彌　ハツ、……今日の御前の儀、主人鹽冶判官、如何ござりまするか、恐れながら、よろしうお執成し願ひ上げ奉りまする。

播磨　師直が日頃の氣性、何とも心得ぬものぢやが、只佛神を。

ト力彌、胸に迫つたる思ひ入れあつて、廣蓋を持ち、花道へ走り入る。管絃になり、播磨守、下座へ入る。ト奥より、師直、出て來る。後より、判官、以前の一軸を持つて

判官　師直どの……武州公……鹽冶判官、ちと御意得たうござりまする。

師直　判官どのにござるか。おてまへにやア師直、逢はうと思つた。爰へござい／＼。

判官　然らば御免下されませう。

ト師直が側へ寄る。

師直　判官どの、先づ其許にはお禮から申さう。悴師安へ

安綱の刀を、ようお讓り下されたな。忝なうござる。

判官　サア、その儀は早速申し譯申しました通り、大切のその刀が。

師直　何といたした。刀は武士の魂ひ、錆びて居つたか、鈍刀でござるか。

判官　御懇意に存じて師安どのへ、お讓り申す安綱の刀。

師直　コレ〳〵、その御懇意が迷惑千萬でござる。さほどに惜しがられる刀なら、貰ひますまい、要り申さぬ。まだ禮を云ひませう。判官どの、この師直が屋敷へ匿まひ置いたる、利根の彈正を、伯父の敵と付け狙ひ、若宮小路の馬場先にて、切られましたは御存じでござらう。だが、切りました眞壁の八郎と申す者が、見事に討つてござる。その眞壁の八郎を、其許の屋敷へ家來に抱へ、剩さへ織部彌兵衞が娘の仲人まで召されて、織部數馬と名まで付けてやられたは、この師直への面當てでござるかイヤ〳〵、面當てでござらう〳〵。

判官　これは又、師直どのゝ仰せとも存じませぬ。眞壁の八郎儀は、兼ねて牧野右衞門に賴まれましたる儀もござれば、義貞の重寶橋姫の鏡

師直　コレ〳〵〳〵、その云ひ譯は聞き申さぬ。まだ〳〵キツとこなたにやア、禮の云ひたい事がござる。コレ、判官どの、今日の只今まで、身共が恥でござるゆゑ、一言の儀も申さねども、ようこなたは、アノ顏世御前と譯のある身でありながら、知らぬ顏でこの師直が文を書いて、よし〳〵とやらせて、この師直に恥辱を與へ召されたな。

判官　御尤もなるお腹立ちではござれども、全く以て其許さまが、顏世御前へ遣はされますると申す事は存ぜず、認めましたるあの艶書。元より拙者、此方より申し入れましたる緣談でなければ、桃の井播磨守を以て、石堂どのより顏世御前を。

師直　コレ〳〵、もう何もお云やるな。貴殿は立派な侍ひゆゑ、顏世どのに限らず、鎌倉中の女子供が惚れも致さう。口說きも致さう。其許の自惚れ話し、この師直聞く耳がござらぬ。斷わつて置きますが、第一が安綱の刀、それから家來の數馬が事、まだその上にこの師直に、赤恥をかゝせ召された、人にも云はぬ顏世御前へ付け文の事。コレ〳〵、この指を折つて見れば、この三つ目のこの指が、判官どのと愛想づかし。今日向お出合ひ申さぬぞ。若君直義公の御用の外は、文の取交しも致さぬ程に

さう思つておくりやれ。鹽冶判官高貞どの、高武藏守師直が、只今より絶交でござるぞ。

ト此うち、判官、俯向いて、當惑のこなし。師直・高笑ひに笑ひ

ハ、、、、斯樣申せども、只今までお心安う致した其許御用の筋もござらば、何なりとも仰せ聞けられい。

判官　段々仰せられたる判官へのお恨み、拙者毛頭求めましたる儀はござらねども、お腹立ちの段は御尤もに存じまする。平生の樣子、御推量にもござらうが、判官に於きまして、中々其許さまへ對しまして、左樣な不實不義がござらうやうがござりませぬ程に、何分御免下されて、只今までの通り、御懇意にお出合ひなされては下さるまいか……師直どの……武州公、矢張り只今までの通り、お心安う。左樣なら、最早御挨拶はござらぬか……ヘイ。

ト差俯向き、胸を定める思ひ入れあつて、三方を師直が前へ差置き

改めて師直公へ伺ひまするは、今日右君へ差上げまする拙者が獻上、徽宗皇帝が鶉の一軸、御内見なされて、御披露よろしく賴み上げまする。

師直　何とお云やる。判官どのゝ差上げ召さる一軸は、鶉の唐畫でござるとな。

判官　左樣。この儀はこの間中より師直どのへも、申し入れましたる、徽宗皇帝の鶉の一軸でござりまする。

師直　コレ〳〵、滅多な事をお云やるな。この師直、判官どのゝ差上げ召さるゝ、徽宗皇帝の鶉の一軸の事は、一向存ぜぬ事でござる。知らぬ事でござる。

ト沒義道に云ふ。判官、驚ろき

判官　師直どのには、拙者が差上げましたる鶉の一軸の儀は、御存じないとな。

師直　存じてよいものでござるか。

判官　然らば御存じござらぬか。

師直　師直存じて直義公へ、鶉の一軸を差上げては、尊氏公より如何なるお咎めにあづかりませうも知れぬ儀でござるに、滅多な事を云やるな。

判官　お待ちなされい、師直どの。我が君へ鶉の一軸は、何ゆゑ差上げられませぬぞ。

師直　其許は御存じござらぬか。足利のお家には、御先祖貞氏公より鶉をお忌みなさるゝ事、世上に隱れござらぬ。或る夜のお夢に鶉來つて、金銀を延べたる籠に飼はれんより、山野に住むこそ喜びなれと申せしを、貞氏公

のたまふには、汝が啼くゆゑにこそ寵愛もすれ、啼かざれば益なしと答へ給ふと思し召して、お夢は覺めたる由。それよりこの鶉一聲も啼かず、末世の今に至るまで、これを足利の啼かぬ鶉と申して、今以て當お家にては、不吉の鳥となされて、御寵愛はござらぬ。そのお忌みなさる物を……ア、聞えた、この鶉の一軸を、この師直に取次がせて、身共が越度におしやる心でござるか。何ゆゑ其やうにこの師直めを目の敵におしやる。拙者は高階の家が大切でござるに依つて、此やうな不埒千萬な獻上の內見いたす事は否でござる。

判官　師直どの、只今になりまして、左樣仰せられては、其許のお詞が相違いたした。昨日までもこの一軸の如きは、御存じではござらぬか。只今獻上いたすこの一軸が足利のお家に不吉な鶉でこざつては、判官が只今差上げまする一軸はござらぬぞや。是非もござらぬ、お咎めを受けます事ならば、判官が如何やうとも御不興を蒙むりませう程に、お取次ぎなされて、この一軸を差上げ下されい、

師直　默れ判官。これエ、、こなたのやうなうつけな侍ひに卷込まれて、この師直は鎌倉中の笑ひ者にやアなるまい。よく聞きやれ、鳥類でさへ足利家を重んじて啼く音を止めたに、鹽冶判官は足利のお家の高祿を貪りながら恩義を忘れて馬鹿を盡せば、鳥類に劣つた侍ひ。畜生四つ足だと云つても腹は立たれまい。鳥だと云つてもグッとも云はれるか。鳥類や……イヤ、お身はその鳥に劣つた人でなし、義理知らずの判官が持つて來た鶉の一軸、これが取次ぎがなるものか。

ト一軸を引裂いて

この一軸は、斯うして御身に渡す程に、キリ〳〵持つて下がり召されい。

ト直ぐに判官に打ちつける。判官、その寸々に裂けたる一軸を取つて、無念なる思ひ入れあつて、師直に詰め寄る。

判官　コリヤ師直、我が君へ差上げる大切なるこの一軸をようも寸々に引裂いたな。只今差上げる一軸なければ、この判官が身の上となつたるか。エ、、口惜しい。

ト無念なる思ひ入れ。

師直　口惜しくつても悔しくつても、この師直に刃が立つものか。エ、、馬鹿な面ぢやわえ。

判官　もう料簡がならぬわえ。

師直　師直を何とする。

判官　覺念。

ト判官、小さ刀を拔いて師直へ切り付ける。師直、眉間を切られてアッと倒れる。判官、直ぐに立ちかゝろ、下座より、若狹之助、走り出て來り、判官を抱きとめろ。

若狹　待つた〱。

判官　放した〱。

大勢　喧嘩々々。

ト下座より、荒川平太、竹澤太郎、仁木三郎、慌てゝ走り出て來て、こけつ轉びつ、花道へ逃げて入る。よきキッカケにて、チョン〱、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面に練り塀、正面に、裏門を取り付け、見越しの松を水引より折り返す。時の太皷打ち續け、道具納まる。

ト花道より、彌兵衛、數馬、走り出て來る。ウロ〱と立ち騷いで居る。ト裏門口より澤瀉の紋付いたる箱提灯を二張り。侍ひ大勢にて持ち出る。後より、播磨守大紋の裾を括り上げ出て來る。彌兵衛、數馬、立寄つて、

彌兵　憚りながら、御殿中の樣子は如何でござりまするな

數馬　我れ〱は鹽冶判官高貞が家來どもでござる。

兩人　主人の安否、承りたう存じまする。

播磨　何人の家來なりとも、囚人の側へは叶はぬぞ。鹽冶判官高貞、高師直を刃傷に及たる不屆きに依つて、石堂どのへお預け。只今網乘り物にて扇ゲ谷まで召連れ參る途中に於て、理不盡があらば、御主人のお爲にならぬぞ

數馬　さすれば御主人判官さまには。

彌兵　師直どのを刃傷に及ばれ、網乘り物にて石堂どのゝお屋敷へ。

數馬　はや囚人とおなりなされたか。

兩人　エヽ、情ない。

播磨　乘り物早え。

皆々　ハツ。

ト澤瀉の紋付けたる箱提灯二張り、侍ひ持つて出る。後より、誂らへの乘り物へ青網をかけ、侍ひこれを擔ぎ出る。續いて足輕二人出て、直ぐに向うへ乘り物を擔ぎ、入る。數馬、彌兵衛、見送り〱、しを〱花道へ入る。トばた〱になり、東の揚げ幕より、勘平

勘平 以前の形にて股立ちを取り、走り出て、ウロ〳〵して裏門口へ立ちかゝり、無理に門を叩く。此うちに、後へ、角兵衛・彌八・六藏、いづれも中間形にて窺ふ。拙者は鹽冶判官高貞が家來の、早野勘平と申しまする者でござりまする。イヤ〳〵、こりや滅多に御門は叩かれぬわえ。安綱の刀の事にて、御不興を受けたる我が身の上、滅多に御門は……勘平と云ふ名を云はゞ、いよ〳〵朋輩の憎しみを受け、お詫び申す事もなるまい。とは云へ御殿中の喧嘩の様子、もしも御主人の御身の上、如何おなりなされた事やら、どうぞ様子を聞きたいものぢやなア

角兵 聞きたくば聞かせべい。

六藏 早野勘平。

彌八 好い所へ。

三人 うしやアがつたな。

勘平 お身達は何れの小者と思つたれば、師直の家來どもか。

角兵 中間でも主人から、暇の出た早野勘平、われとは違ふ、この三人。おらが旦那をやらかした判官が家來なら、ぶツちめべいと待つて居たワ。

六藏 どうで屋敷へ歸り馬、あやまりましたと負けて出ろ。やだアと吐かしやア、命のから尻、首を酒手に取るべいか。

彌八 扶持放されの早野勘平、長居を爰にひろいだら、二一天作天窓割り、猪より先へ勘平を、この三人が括し上げるが

三人 どうだエヽ。

勘平 不興を受けたるこの身の上、主人の仇なる師直へ、手向ひこそはならずとも、家來のわいらを腹癒せに、この勘平が相手には、不足なれどもかゝつて見ろ。

彌八 ドレ、その口を忘れるな。

角兵 彌八、六藏、合點か。

六藏 疊んでしまへ。

兩人 合點だ。

ト三人、勘平へかゝり、立廻りあつて、ドツコイと誂らへの鳴り物になり、見事なるタテあつて、トゞ角兵衛、六藏兩人を切り殺し、彌八を追うて下座へ入る。鳴り物打上げる。時の鐘になり、東の棧敷より、一文字屋才兵衛、やつし着流し、ちよつと端折つた形にて萠黄眞岡の上帶締め、單羽織挾んだる、女衒の形にて

八幡黒の裏付きを穿き、中三度の笠を冠り、銀拵らへの一腰さし、小提灯を提げて出て來り、舞臺へ來て、直ぐに花道の方へ行かうとする。向うより、バタ〳〵にて、おかる、出て來るゆゑ、立どまつて後へ取つて返し、下座の方へ行かうとする。バタ〳〵にて、下座より、勘平、出て來る。これにて、才兵衛、提灯を隠し、橋がゝりへ小隠れして居る。おかる、勘平、舞臺にて行き合ひ、互ひに顔見合せ、驚ろいたる思ひ入れにて

かる　ヤア、お前は勘平どのか。

勘平　さう云やるは、おかるではないか。南無阿彌陀佛。

　ト死なうとする。

かる　モシ。

　ト取りつくおかるを突き退けて、直ぐに刀の柄へ手をかけ、腹切らうとする。おかる、取りついて、これを留める。勘平、振り放して

勘平　放せ〳〵。

かる　待つた〳〵、勘平さん、お前はこりや、なんで死ぬのぢや。何ゆゑに腹切るのぢや。譯を聞かせて下さんせ。

勘平　なんで死ぬとはおかる、勘平はどうして生きて居られうぞ。御厚恩受けし判官さまへ、不忠不義の御奉公申し上げたるこの身の上、安綱のあのお刀を、その座で直ぐに師直へ、殿のお手からお渡しなされたら、判官さまへ師直が、難題は申すまいと思へば、いよ〳〵勘平がこの身に迫りし誤りゆゑ。長らへて居て由良之助どのを始め、一家中にオメ〳〵と笑はれんよりも、いま自殺して申し譯に、南無。

　ト死なうとする勘平を留めて

かる　勘平さん、お前はきつううろたへさんしたの。

勘平　うろたへた。これがうろたへずに居られうか。主人の御身に拘はる御難儀、放して殺した〳〵。

かる　勘平さん、ソレその安綱のお刀は、誰れが穢して師直へ渡されぬやうにしたぞいな。このおかるが段八めを手にかけたはそのお刀、血汐に穢せしばつかりに、お前の身にも殿様にも、かゝりや繋がるわたしが悪縁。まだもお情深い御主人様ゆゑ、お暇の出たは勘平どの、お前を殺すまい、助けたいと思し召しての事ではないかいなそんなら云はゞ殿様から、お助けなされたその命を、お前の勝手に死なしやんしても大事ないかえ。

勘平　サ、それは。

かる　サア、お前の勝手に死んでよくば死なしやんせ。死なしやんして殿様へ、云ひ譯がある事なら、サア、死なしやんせ〳〵。わたしや留めはせぬわいなア。

勘平　誤まつた〳〵。成る程、其方が云やる通り、お手討にもなるべきこの勘平を、お暇下されしは、お慈悲深い判官さまのお情。そこを思うて見れば、こりや滅多には死なれぬわいの。

かる　サア、その死なうと思はしやんした、その命を長らへ、殿様へ申し譯の立つやうに、お前の身の上を大事にかけて下さんせ。死ねばならぬわたしが身の上。勘平さん、さらば。

ト勘平が刀に手をかける。勘平、慌てゝおかるを引寄せ

勘平　ヤイ〳〵、おかる、なんでおぬしや死ぬるのぢや。

かる　なんでとは、わたしが人を殺したゆゑ、お前の難儀となつたではござんせぬかいな。殿様よりお暇の出たも皆わたしが惡さから。思へばわたしはお前の仇。それぢやに依つて、さうぢや。

勘平　コリヤ〳〵、早まるまい〳〵。この勘平が長らゆるも、其方と云ふ云ひ交した者があればこそ。何事も時節ぢやと諦めて居るこの勘平。其方ゆゑぢやとは思はぬわいの。

かる　よう云うて下さんした。嬉しうござんす。もうお前さへその心なら、なんと斯うしては下さんせぬか。わたしと一緒に、この鎌倉を、立退いては下さんせぬか。

勘平　サア、御不興を御訴訟申し上げるまでは、何方へなりとも立退かんとは思へども、それぞと先に便りなければ、差當つたる當惑。

かる　モシ〳〵、そんならなんと、わたしが父さんの在所あの大崎の與市兵衛どのゝ所へ、一緒にござんせいなア

勘平　イヤ〳〵、ちよつと見てもアノむづかしい與市兵衛の氣質、親子一緒に居るならば、おかる、其方の心遣ひイヤイヤ、其方の在所へも行かれぬわいの。

かる　なんの、お前ぢやと云うて、わたしに縁があれば、父さんとは親子も同然。なんの憎いとは思はんすまい。

勘平　あの九太夫の妾にやれば、百兩といふ支度金を手取ると云つた事もあれば、どうあらうやら。と云うてこの勘平が、身を隠す所もないが。

かる　百兩と云ふ金がなければ、あの父さんの在所へも行

かれぬかえ。

勘平　おかる。

かる　勘平さん。

勘平　こりや。

かる　どうしたらよからうぞ。

ト勘平、おかる、途方に暮れる。

才兵　その思案、貸して進ぜませう。

勘平　ついぞ見馴れぬお人ぢやが

かる　お前はどなたでござんすえ。

才兵　わたしやア、一文字屋才兵衛と云ふ者でござります

兩人　一文字屋の才兵衛どの。

才兵　宿河原の者でござりまするが、爰へ來かゝつて承つたところが、お二人ながら、いかい御苦勞なされまするな。わたしが生れ付きで、人樣の難儀を見て居る事が、どうもならぬ氣性サ。雪の下から落りかゝつて、今のお話しを聞きましちやア、氣の毒な事でござりますが、なんでもわたしが惡い事は申しますまい程に、マア、その大崎の與市兵衛どのとやらの所へ、お二人ながら落ち付きなさるがようござります。そのうちにはわたしが、江戸の吉原へ用があるから、その大崎とやら云ふ所へ尋ねて行つて、なんでもお二人の難儀にならぬやう、また料簡がござりませう程に、マア〳〵、その與市兵衛どのとやら申す親御の所へ、落ち付きなさるがようござりまする。

勘平　それ程に賴もしう云うて下さる　才兵衛どのとやらの挨拶を、聞かいでも氣の毒なものぢやが、おかる、其方は何と思ひやるぞ。

かる　わたしが爲には眞實の父さんの所でござんすが、あのやうな慾の深い心ぢやに依つて、わたしが居ても、どうならうやら知れぬわいな。

才兵　その心遣ひのないのは、この才兵衛が所へ、二人ながら連れて行て、匿まひますればよけれど、それぢやアお世話にもする心でござりまするが、見ず知らずのわたしが所へ、ござります心もありさうもないもの。才兵衛が斯う申すからにやア、なんでもお二人の爲に、惡い事はござりませぬ程に、マア、大崎とやらへ落ち付かつしやれるがようござりまする。

勘兵　それ程に厚く云うて下さる、才兵衛どのは町家で申す、男達とやらでござるか。

才兵　イ、エ、そりや昔あつた事サ。

かる　そんなら大方両方で、人附合ひの好い、大通とやら云ふお人かいな。
才兵　そんな氣味の悪い。
勘平　そんならこなたさまはえ。
かる　なんぢやえ。
才兵　ぜげんサ。
兩人　ぜげんとはエヽ。
才兵　上方では肝煎り、此方の方ではぜげんと云ひ、中づきとも云ひ、判人とも申します。子供商賣をする者でござります。
勘平　そんなら、こなさんは、人の女を買ふ人かいな。
かる　怖いお人ぢやなア。
才兵　ぜげんと云つたら、定めて鬼か鬼神のやうにも思はつしやりませうが、人の涙を我が涙に、露の情のこぼれ物、濡れた同士の袖枕、手切れの勸め親の爲、また兄弟のその爲に、中年切つて五兩づめ、出店衆鞍替へ養子分なじまぬうちが憂き勤め。それから野暮の垢が抜け、酒が過ぎりやア内の世話、色が出來りやア外の世話、流行り風でも麻疹でも、大事にかけて養生させ、そんじよそこら、どこそこへ、片付くまでの結ぶの神。ほんに出雲の大社で、相談するは十月ばかり。わしらが内ぢやア年中年百、浮世の中の色事を、抱き込むのが商賣でござります。
勘平　成る程、それ程までに思ひやりのある商賣なれば、人の事を身に引受け、世話になさるゝも尤も。その詞に甘へまして、近頃申し兼ねてはござれども、貯へもなき我れ／＼が身の上。如何いたしたらようござらう。
ト才兵衛、懐中より胴巻を出し、金入れより、小判を出して、紙に包み、おかるに渡して、顎にて勘平へ渡せと教へる。おかる、取つて喜ぶ思ひ入れあつて、勘平へ渡す。取つて改め
こりや金子拾兩。
かる　この金はえ。
才兵　この才兵衛が尋ねて行くまでの、小遣ひにさつしやりませ。
勘平　そんなら、この金を借り受けて、おかるが在所へ参らうか。
かる　今の詞に違ひなく、必らず尋ねて來て下さんせえ。
才兵　その大崎と云ふ所は。
勘平　武藏國目黒在。

かる　百姓與市兵衞と聞いて、尋ねてござんせいなア。
才兵　大崎の與市兵衞、目黒在でござりますか。
かる　つい知れ易い百姓ぢやわいなア。
才兵　そんならお別れ申しませうか。
勘平　初めて逢うたる才兵衞どのに。
才兵　この提灯も貸しませう。
ト提灯を疊んで勘平の前へ置く。
勘平　アノ提灯まで。
才兵　道を氣を付けてござりませ。
兩人　そんなら御無事で。
才兵　待つてござりませ。
兩人　忝ない。
ト手を合せる。才兵衞、提灯の火で煙草を吸ひ付け、咥へ煙管にて、花道へ入る。三重にて、よろしく
幕。あとしやぎり。

石堂館の場

役名――鹽冶判官高貞。藥師寺次郎左衞門。桃の井播磨守。近習主水。同、要之助。鷺坂伴內。腰元、小浪。同、九重。同、紅梅。同、青柳。同、皐月。大星力彌。石堂右馬之丞。同妹、顏世御前

本舞臺、三間の間、一面の金襖。下座の方へ寄つて小座敷取りつけ、平舞臺より花道へかけて、緣付きの薄べりを一面に敷き詰め、揚げ幕の口へ襖を立て、高欄結構に仕立て、上の方に伴內、麻上下にて、莨盆を扣へ、下の方に主水、要之助、同じく麻上下にて扣へ居る。琴唄にて幕明く。

伴內　イヤナニ主水どの、石堂どのには、未だ館より退出召されぬかな。
主水　いつも八ツの時計と、諸侯に下がられますが、斯やうに延引いたしますは、大方お預けの鹽冶どのゝお問ひ合せで、隙取るでござりませう。
要之　イカサマ、御短慮とは申しながら、雜言過言を聞き捨てられぬが武士の意地。殊に相手の師直公には、薄手の事なり、御閉門で相濟みませうか、又は御隱居。
伴內　默り召されい、要之助、大切な役目を蒙むりながら當時出頭第一たる、主人師直公へ手疵を負はせ、館騷がせし科は重い。斯く云ふ鷺坂伴內、晝夜この家へ相詰め

るは何の爲、未だ婚禮は濟まずとも、石堂どのゝ妹御に、云ひ號けの鹽冶判官、緣に引かされ猶豫あるか、又はこの家を落す事もあらうかと、目付け役のお附き人、これ程重い科人が、閉門位で事が濟まうと思はつしやるか。痴けた事を。

主水　成る程、伴內どのゝお云やる通り、管領の御座間近く、刃傷に及ばれたる判官どの、さればこそ主人右馬之丞へお預け。例へ家內でござらうが、依估を致さぬ主人の氣質。お預かりの砌りより、僅かな座敷へ押籠め奉り、勤番いたす上からは、餘り御苦勞になされぬがようござります。

伴內　イヽヤ、苦勞でござる。これが苦勞になるまいか。師直公にもしもの事があれば、この伴內が爲には主人の敵、怨せにやアなり申さない。

主水　そりやお云やらいでも知れた事。元弘の戰國にさへ、喧嘩は是非に拘らず、双方成敗との軍令。斯く治國の砌りなれば、疵養生叶ひなば、お上に御如才はござるまい。

要之　イヽサマ、鹽冶公には連綿たる佐々木の末流。お家柄と申し、片落ちの御政道はござるまいかと存ずる。

伴內　なんぼ佐々木の末流にもせよ、執權職へ手向ひすりやア、縛り首は知れた事、可哀や吝嗇の心から、先祖の名まで汚す業ざらし。こんな痴け者を聟がねに召された右馬之丞どのまで、鼻の下が長く見えます。

主水　論は無益と捨て置けば、主人の執事を笠に着て、云はれざる法外。

要之　御主人までを蔑なす伴內。

主水　事に依つたら

兩人　手は見せぬぞ。

伴內　すりや、某を相手にする氣か。

兩人　舌頭返へさば許さぬぞ。

伴內　小積な事を。

三人　なにを。

ト三人キツとなる。揚げ幕にて

顏世　双方ともに爭ひ無用。

三人　なんと。

皆々　姬君のお入り。

トこれにて三人ほぐれ、主水、要之助、出迎ふ。出の唄になり、花道より顏世、振り袖、襠補にて、短册を持ち出て來る。後より紅梅、腰元の形にて、笹に色紙短册を附け、これを持ち、青柳、花活けに萩桔梗を入

れ、持つて出る。後より九重、同じく花活けに夕顔を入れ、これを持ち、皐月、女郎花を活けたる花入れを持ち、小浪、朝顔を活けたる花活けを持ち、付いて出て來り、直ぐに本舞臺へ通り、顔世、上の方に住ふ、皆々並よく並ぶ。

伴内　こは思ひがけなき顔世姫。

主水　このお表へは何御用あつて

要之　入らせられましたなア。

皐月　姫君のこの所へ入らせられては、お預かりの判官さま、聞くもいぶせき座敷のお住ひ。

九重　殊に今日は七夕の御祝儀、嘉例の儀式も其まゝに、行くへ定めぬお身の上。

青柳　せめてはお氣のむすぼれ、お慰みにもなれかしと、秋の千草の數々を、御覧に入れうと願ひの糸。

小浪　乞巧奠も立て琴も、上の聞えを憚つて、心ばかりの紅葉の褥。

紅梅　渡らば錦中絶えて、奥と表の天の川。

小浪　丁度向ひに妻迎へ船、星の祭りやら御馳走やら。

皐月　取揃へたるこの品々、御覧に入れて

皆々　下さんせいなア。

主水　イカサマ、花とはよい思し召しつき。判官どのには、さぞお氣むづかしう居らつしやるでござりませう。早速御覧に入れまするでござりませう。

伴内　イヤ、主水、待たつしやい。云はゞ大切な囚人、忽せにやアならないと云つた、舌も引かないうちに何だ。花で心は慰める。そりやア世の常の科人の事。逆磔刑にしても飽きのなき鹽冶どの、不自由な目に合はすのだ、あの人の爲でござる。それに何ぞや女中童を、嚴重の席へ入れる事はなり申さない。

顔世　いやとよ、伴内とやら、武に逞しい心柄は、さう思やるも無理ならねど、さほど大切な判官さま、おしつらへでも出やうかと、兄上のお指圖にて、この顔世がもてなし、あなたも一國一城の御主、地下の科人同然な、荒くれ武士の宿直をば、お氣詰まりにも思し召し、もしもの事があつたなら、其方衆の身の上であらうぞや。

伴内　サア、その儀は。

顔世　それに又、今も今とて私しの爭ひ。兄上のお耳へ入らば、其まゝには濟むまいと思ふゆゑ、留めたは其方へ寸志じやわいの。主水も要も、以後を嗜なみや。

兩人　ハツ、恐れ入り奉りました。

主水　伴內どの、只今の爭ひ水に致して、姬君お入りの樣子を、判官公へ。申し上げうではござらぬか。

伴內　どうとも勝手におしやれ。

主水　然らば要之助、お來やれ。

要之　心得てござる。

ト兩人立ち上がる。障子の內にて

判官　兩人ともに參るに及ばぬ。判官これにて承知いたした。

ト唄になり、障子を引きあける。此うちに判官、着流し、丸腰の形にて、机に向ひ、法華經を書き寫して居る。顏世、會釋して

顏世　判官さまには、さぞマアお氣詰まりにござりませう

判官　これは〳〵顏世姬、この度は不慮の事にて、思ひがけなき苦勞をかけ、如何ばかりか氣の毒に存ずる。心遣ひ無用々々。

顏世　ハツ。

ト顏世、思ひ入れ。

九重　判官どの、隔てがましい事を仰しやります。例へ御祝言は濟まずとも、君は正しく御聟がね、主人右馬之丞は、憚りながら小舅の事なり、なんのお心遣ひを遊ばしまする事がござりませう。

皐月　ソレイナア、不慮の事と仰せられますが、門を出づれば敵に向ふが武士の慣ひ。ちよつとも御短慮ではござりませぬ。ほんにこの度の騷動は、姬君樣のお爲には結ぶの神。

ト皆々氣の毒な思ひ入れ。青柳、消して

青柳　コレイナア、皐月どのとした事が。ホヽヽヽ、判官さまへ申し上げまする。見上げますれば、普門品を書き寫し遊ばされまするが、其やうなお氣詰まりな事は、遊ばさぬがようござりまする。

小浪　ソレイナア、この暑いのに立て込んで、机におかゝりなされたら、さぞお肩がつかへませう。それよりは七夕樣へ、手向けの連歌か七夕鞠。

紅梅　競馬香でも矢數でも、

皐月　相手になりませいと右馬之丞。

皆々　申しつけましてござりまする。

判官　何から何まで、殘る方なき石堂どのゝ深切、忝ない併しながら、茶番連歌より、この普門品を書寫なすが、何よりの樂しみ。外面から見るよりも、ずんど心は晴れやかぢや。

伴內　成る程、こりや御尤も。急に觀音信仰は、首の座へ直つた時の用心か。昔の盛久景淸が例を引いたら、當が違はう。笑止千萬な。

主水　又しても云はれざる雜言。

要之　慮外でござらうぞ。

判官　イヤ〱、何事を申さうとも打捨て置け。人の心は出入る時なく、その向ふ所を知らずと朱子の詞。ましてや柔愚の心柄は身より出る。この罪を遁がれん爲と思ふは理り、我れ常に大悲の文を誦するは、今生後生の爲にあらず、建武の楠、曆應の義貞、君命を重んじて、戰死を遂げし忠臣の面々、敵となりしは前世の宿業。來世は共に交はらんと、日夜薩陀の誓ひを祈る。いま斯く預けの身となれば、猶更書寫なす普門品、笑ふ人は笑ひもせよ愚人に向つて詞はないわやい。

顏世　誠に、存じなき思し召しはさる事なれど、殘る暑さにお心を籠められて、おしつらひでも出ましては、兄右馬之丞を初め皆の者が、如何ばかりかお案じ申しまする暫しはこれへお入りあつて、花に心をお慰め遊ばされませいなア。

判官　また春よりは眺めある、秋の野もせの鹿鳴草、桔梗苅萱指折れば、盛り短かき朝顏の、消えにし露の女郎花今宵あたりが夕顏の、元の雫とほの見ゆる、閨の扉も秋風を、恨みがちなる世の中ぢやなア。

九重　判官さまには、果敢ない事を御意遊ばします。この夕顏は、五條あたりの軒のつま、荒れにし宿に苔むせる瓦の院の昔を思ひ、瓦形を卑下せし九重が捧げ物。

青柳　また糸萩に桔梗を添へましたは、野路の玉川萩こえて、色なる浪におどる月を御前に譬へ、吉なる文字を壽きしこの一本。

皐月　これなるは女郎花、花の色はむせる粟の如し、名を聞いてさへ偕老を契るとあれば、姫君と早う御祝言あるやうにと、男山の爲にめでゝ、折れるばかりぞ女郎花。

小浪　小浪が持參の朝顏は、朝な〱に咲きかへて、久しき花にぞありける、朝に咲いてその日に萎む花なれど、盛り久しきと云ひかなへ、日々に新たなるを祝しましてござりまする。

判官　夕顏は光源氏の跡思ひ、萩は千載集の古歌を引き、女郎花は男山の昔を思ひ、何れを何れ異なる中に、脆くも萎む朝顏を、盛り久しと賀したる、年端もゆかぬ悧發な女子、末頼もしき名は誰か、小浪とやらんぢやな。

小浪　御意にございます。
顔世　兼ねてお聞き及びもございませう。あの小浪ことは若狹之助さまの御家來、加古川本藏が娘でございます。
判官　成る程、先達て聞き屆けた力彌が云ひ號け……小浪であつたか。
ト小浪、恥かしき思ひ入れ。
顔世　左樣でございまする。殊なう悧發と承り、桃の井さまへお願ひ申し、無理に呼び迎へ、いつも近う召し使ひまするわいな。
判官　ハテ、力彌は仕合せ者と云ひたけれど、折惡い某が短慮から、斯く預けの身となれば、末の程も計られず、定めて某を恨むであらう。秋風の吹くから返す葛の葉の
ト揚げ幕にて
右馬　恨みても猶恨めしきかな。
判官　なんと。
呼び　殿のお歸り。
ト呼ぶ。亂れになり、右馬之丞、上下衣裳にて、ほつと醉ひのこなし出て來る。後より茶道、坊主鬘に十德にて、刀を持ち付添ひ出て來り、直ぐに舞臺へ通る。判官、舞臺へ下り
判官　これは／＼石堂どの。
顔世　兄上樣。
皆々　お歸り遊ばしましたか。
右馬　皆打揃うて、華やかに出て居つたは、何か判官どのをもてなしの爲か。でも見事に咲いた。野に草花をおびて蜀錦をつらね、色香にめづる花心、目に見たばかり心が浮かぬ。なぜ酒を持たぬ。銚子持て／＼。
伴内　イヤ、お待ちなされい石堂どの、申さば大切な囚人、女童を側近く置かつしやるさへ、曲事と存ずるに、銚子を持ての酒を持てのと、悉皆揚屋同然の取扱ひ。日頃のお氣性に似合はない仕方。伴内附添ひ申すうちは、そんな猥らな事はなり申さない。
右馬　でも、野暮な事をのたまふものかな。この度京都より鎌倉へ御下向ありし、直義公の御座間近く、師直どのへ手疵を負はせたを越度とあつて、身が館へお預けなさ上たなれど、よく物を積つてお見やれ、ほんの喧嘩は時の拍子、殊に相手が、卽死と云ふではなし、疵養生さへ濟めば、直ぐに御赦免。何も其やうに顔を赤めて、伴内附添ひ申すうちは罷りならぬなどと、四角四面は取措いて御身も相手になるがよいわサ。

顔世　いつにない兄上の御機嫌、そんなら御前のお首尾はようござりますかいなア。

右馬　よい段ではない。某御訴訟申したれば、今日七夕の御祝儀を幸ひ、諸士評議の上にて、仰せ出されがあるであらう。

顔世　そんなら今日は、御赦免のお使者が來るでござりませう。判官さま、お聞き遊ばされましたか。

判官　右馬之丞どの、一人短慮なれば一國亂れを起すとの事を辨まへながら、無念重なる武士の意地、大切な役目を蒙むりながら、師直へ手疵を負はせ、急いたる儘に仕留めも致さず、抱き留められ、自殺も叶はぬ虜となつて、思ひ設けぬ貴殿のお世話、面目次第もござらぬ。

右馬　ナニ、それが面目ない事がござらう。武士の上には間々ある事、必らず苦勞にさつしやらぬがよい。此やうな話しは、氣が滅入つて惡い。斯う云ふ時は、兎角酒、愁ひを拂ふ玉箒、銚子を持て。

紅梅　畏まりました。

　ト立たうとするを引きとめ

右馬　コリヤ〳〵、女子どもは一人もやることはならない。イヤ〳〵斯うせう、爰はあまり窮屈な。判官どのを奥の座敷へ伴ひ、庭の千草を肴にして、一獻汲むがよい。身共が居ては心遣ひであらう。主水も要も相手になり、御酒をお勸め申せ。

兩人　ハツ。

右馬　サア、判官どの、お出でなされい。女子ども、參れ參れ。

皆々　成る程、これはよろしうござりませう。

判官　左樣ござらば、この程の憂さを晴らし、奥へ參つて一獻汲みませうか。

右馬　イヤモ、兎角酒がなければ鬱散いたさぬ。コリヤ顔世、大事の前ぢや、隨分御馳走申せ。伴内も一緒にお行きやれ。

伴内　拙者はお酒は嫌ひでござる。

右馬　ハテ、愛嬌のない。そんなら肴でも荒すがよい。

伴内　お肴なら頂戴いたさうか。

判官　石堂どの、後刻御意得ませう。

顔世　兄上樣、これにお出で遊ばしませ。

右馬　コリヤ〳〵顔世、身が一緒に行かいで嬉しいか。

　ト顔世、思ひ入れ。

兄が許す。どうなさらうとも御意を背かず、お相手にな

れ。女子ども、氣を通せ。

女形　隨分承知でござりまする。

右馬　承知なれば、早う參れ。

判官　然らばお先へ。

右馬　オヽ、お氣遣ひなう。

皆々　サア、お出で遊ばしませい。

ト唄になり、判官、先に顏世、紅梅、九重、青柳、皐月、小浪、伴内、主水、要之助、付いて奥へ入る。

茶道　殿樣へ申し上げます。私しは出ましたばかりで、まだ一つも口をきゝませぬ。ようござりますか。

右馬　成る程、其方が居つたを、とんと失念した。何ぞ用があるか。

茶道　されば、お當てなされて御覽じませ。

右馬　われが用は何であらうな。

茶道　何でござりませうか。

右馬　早う奥へ行きたいと云ふ事か。

茶道　マア、左樣なものでござりませう。

右馬　それ程奥へ行きたくば、やりはせうが、折角面白う醉うた酒が醒め際になつて、身が座敷へ行けば、皆の者が心遣ひであらう程に、其方參つて、銚子杯をこれへ持て。

茶道　畏まりました。

ト茶道、奥へ入る。揚げ幕より麻上下の侍ひ、出で來り

侍ひ　申し上げます。

右馬　何事ぢや。

侍ひ　鹽冶判官さまの御家來大星力彌どの、御機嫌伺ひとあつて、お次に扣へ居られますが、如何計らひませうか

右馬　大星力彌が參つた。これへ通せ。

侍ひ　ハツ。

ト侍ひ揚げ幕へ入る。力彌、上下衣裳にて出て來り、花道に扣へ

力彌　然らば御免下されませう。

ト管絃になり、思ひ入れあつて

憚りながら、右馬之丞さまへ申し上げまする。私し事は大星由良之助忰、同苗力彌でござります。先づは御機嫌の體を拜し、この上がござりませうか。まつたこの度は主人判官こと、不慮の儀につき、お館へお預けの身の上何か御厚情の段、一家中の者ども、殊なう有り難う存じまする。私しより右御禮申し上げまするやう、申しつけ

ましてござります。

右馬　力彌、久しうて逢ひました。其方も堅固で重疊々々ハテ、健かな生立ち。そこは餘り座が遠い。近う近う。

力彌　餘り畏れ多うござりまする。

右馬　判官どのとは內緣の某なれば、何も心置く事はないこれへ。

力彌　左樣ござりませうなら、お詞に甘へまして、それへ上がりましても苦しうはござりますまいか。

右馬　苦しうない。ズッと參れ。

力彌　御免なされませう。

ト力彌、本舞臺へ參り下に居る。小浪、莨盆を持つて來り、何心なく力彌が前へ直す。行かうとするを

右馬　コリヤ小浪、力彌ぢやぞ。

小浪　エ、。

ト悄りして、恥かしき思ひ入れ。顏を隱して奧へ入る合ひ方。

右馬　さて、この度の大變、さぞ〳〵苦勞であらう。

力彌　御意にござります。晴夜に灯火を失ひましたる心地ただ一家中打寄りまして、お上の御評議を相待ちまするでござります。

右馬　國元の諸家中承らば、さぞ驚ろくであらう。

力彌　主人判官刃傷に及ばれ、執事師直どのへ手疵を負はせ、此方へお預けと聞くと等しく、大館左馬之助、お召抱へに鞭打つて國元への早打ち。伯州までは餘程の行程、明日あたり着いたしませうか。併しながら國元へ相知れましても、由良之助居りますれば、爰元ほどは混雜いたしますまいかと存じまする。

右馬　國元は由良之助あるゆゑに、鎌倉ほど騷動はあるまいと自分の挨拶。年若なれど器量ある烏滸の者。親人が聞くなら喜ぶであらう、末頼もしき若者ぢや。

力彌　さまでもない事お譽めに預かり、恐れ入り奉りまする。改めて御前へお願ひ。

右馬　改めて願ひとは。

力彌　別儀でもござりませぬ。この度主人判官儀、管領御下向につき、諸家より唐繪獻上の仰せ出され、師直どのの御內見も首尾よう相濟み、いづくより刻限も早う登城仕りました所に、右の騷動ゆゑ、家中の者ども一人として、殿へ對面仕りませぬ。兼ねて覺悟の儀とは存じられませぬ。定めし國元へ申し遣はしたい儀もござりませう。何卒お慈悲を持ちまして、判官へ對面の儀、御高

免下されませうならば、有り難う存じ奉りまする。

右馬　成る程、尤もなる願ひなれど、預けの内は家中の者對面の儀は私しには計らはれぬ。

力彌　然らば對面の儀は。

右馬　折があらう。

ト最前より小浪、茶臺に茶を汲んで來り、いろ／＼恥かしき思ひ入れ。力彌が所へ行かうとしては立ち戻りいろ／＼あつて、トゞ茶を右馬之丞へ出す。

小浪　これはしたり、身共ではない。力彌へ遣はせサ。

ハイ、。

トうろ／＼して

お茶を上がりませ。

力彌　イヤ、構ひなされな。

右馬　力彌、その女子を存じて居るか。

力彌　見まするは只今が始めて。

右馬　存ぜぬか。

力彌　御意にござります。

右馬　コリヤ、其方が生れ姓を、そこで申せ。

小浪　その儀は。

右馬　身が申す事を背くか。

小浪　ハイ、私しは若狹之助が家來、加古川本藏が娘の小浪でござりまする。

力彌　さては其許が……初めて逢ひ申した。某事は大星力彌、以後は別懇に申し談ずるでござらう。

右馬　ハ、、、。堅いワ／＼。力彌、其方と小浪とは、云ひ號けではないか。

力彌　ハツ、イヤその儀は。

右馬　疾に承知いたして居る。密通でも致したと云ふではあるまいし、ナニそれが恥かしい事があらう。改めて某が仲立ちして、この所に於て祝言いたさせて遣はさう。

力彌　これは又、怪しからぬ御意を蒙りましてござります。主人預けの砌りと申し、かゝる時節に及びまして。

右馬　ハテ、かゝる時節ぢやに依つて、祝言せいと申すのぢや。

力彌　とは又、なぜでござりまするな。

右馬　其方主人判官、この度の越度、無調法に思し召し、片落ちの御成敗あらば何とする。

力彌　仰せにや及ぶべき。元の起りは高師直、豫讓に習つて主人の仇。

右馬　コリヤ、物云へば唇寒し秋の風、岩の物言ふ世の慣ひ。その心を聞く上は、いよ〳〵某仲人せう。幸ひ爰に銚子杯。
力彌　すりや、御主人の落着も相知れました上からは、對面の儀を。
右馬　願はずとも、石堂に如才はないわサ。サア、小浪御寮、飲んでさしやれ。
ト杯を出す。小浪、恥かしさうに杯を取り上げ
小浪　何にも申しませぬ。有り難う存じまする。
ト右馬之丞、ついでやる。小浪、飲んで下へ置く。右馬之丞、力彌が側へ杯をやり
右馬　サア、力彌。
力彌　恐れ入りました。申し上げやうもござりませぬ。
右馬　禮には後の事。マア、杯を取り上げい。
力彌　ハツ。
ト杯を取り上げ、右馬之丞、ついで
右馬　三々九度は追つての事。心ばかりの内祝言。
兩人　有り難う存じまする。
右馬　オヽ、めでたい〳〵。
ト揚げ幕にて「上使」と呼ぶ。

力彌　ナニ、御上使とや。
ト右馬之丞、引寄せ囁く。
すりや、この場に於て。
右馬　コリヤ、兩人。
力彌　ハツ。
ト兩人、一散に奥へ入る。また「上使」と呼ぶ。太鼓謠になり、主水・要之助、出て來り、右馬之丞に付添ひ出迎ふ。揚げ幕より藥師寺、上下衣裳にて出て來る。後より播磨守、上下衣裳にて出て來り、花道にとまり
主水　御上使とござつて、藥師寺次郎左衛門さま。
要之　まつた桃の井播磨守さま。
兩人　お入りでござりまする。
右馬　これは〳〵御兩所、御苦勞千萬。イザ先づこれへ。
三人　お通り下されませう。
藥師　役目の儀なれば、上座御免下されい。
右馬　イザ〳〵これへ。
ト太鼓謠の切れにて、兩人、本舞臺へ通り、床几にかかる。
殘暑の砌り、路次の暑氣を拂ふは杯。先づ御酒一つ差上げませう。

藥師　默り召され、右馬之丞どの。こなたは氣ばし違ひ召されたか。我れ〳〵上使に參つたは、私しならぬ直義公の嚴命。この家に預けある無法者の鹽冶判官に、科の次第を申し聞かせるが今日の役目、上使と聞かば早速に、判官を引摺り出さうとはしないで、酒を飮めとは何の痴言。我れ〳〵を馬鹿におしやるか。

播磨　アイヤ藥師寺どの、そりや其許の廻り氣と申すもの今日の役目は申さいでも知れた事。道の暑さを凌がせんと、心ついての右馬之丞どのゝ御挨拶、先づ此方より一禮を述べて後、上使の趣きを申し達すべき筈。餘りがさつに物を申さぬがようござらう。

右馬　如何にも、播磨守どのが仰せの通り、君の嚴命なればこそ、暑さのおいとひもなう、御苦勞に存ずるゆゑ、御酒を上げませうと申してござるが、お心に障りましたら、眞平御免下されい。日頃は日頃、お役目相濟むまでは直義公同然。いづれ仰せは背きませぬ。

藥師　それ程事知つたおてまへに似合はない。なぜ判官をそびき召されないのだ。

右馬　未だ上使の趣きを、とくと承知も致さず、大切な囚人を、迂濶にこれへは呼び出しますまい。

藥師　成る程、こりやアこなたのが尤も。直常どの、判官が落着を申し聞かせ、早く落ちつかせるがようござる。

播磨　如何にも左樣いたさう。ナニ右馬之丞どの、先達て其許にお預けの鹽冶判官どの儀、何卒助命あるやうと、度々御訴訟したれど、例へ理分のあるに致せ、喧嘩の次第は脇になり、管領の御座間近く、刃傷に及ばれし科輕からず、昔より喧嘩は互ひに理非を論ぜず、兩御刑罪の筈なれど、師直事太刀付きの節、御前を憚り刀をも拔き放さず、鞘にてあしらひ居られしゆゑ、年輩と申しながら、神妙に思し召し、疵養生申しつけ、平癒次第出勤との仰せ出され。まつた判官には切腹申しつけよとの嚴命もだし難く、兩人見屆けの爲、伺候いたした。

主水　すりや、判官さまには、御切腹の仰せ出されとな。

要之　ハテ、是非に及ばぬ。

右馬　コリヤ〳〵兩人、扣へて居らうぞ。播磨守どの、今朝ほど登城の折柄、御舍弟若狹之助どのゝ御内意ゆゑ、斯くあらんとは存ぜしが、判官も云はゞ一國一城の主、諸家中の嘆き、申さうやうもなき仕合せ。あつたらしき武士を先立てまするは、甚だ殘念に存じます。

播磨　御尤も。殊に其許は、御内縁の事なり、申して返ら

ぬ事ながら、ハテサテ氣の毒千萬。
藥師　播磨守どのも同樣に、大事の役目を打捨てゝ、役にも立たない世迷ひ事。時刻が移れば我れ〳〵が身の上。判官はいづくにある。早くこれへ呼び出し召されい。
判官　騷がれな御上使。伯州の城主鹽冶判官高貞、御諚の趣き、承るでござらう。
ト管絃になり、判官、白無垢に無紋の上下にて出て來り、眞中へ座す。
主要　これは。
判官　お役目とは申しながら、御上使、御苦勞に存じ奉ります。
藥師　判官がこの姿は。
判官　刃傷に及びしより、斯くあらんとは兼ねての覺悟。今更驚ろく高貞でござらぬ。御上使と承るより、奧で自殺と存ぜしかど、御法でござれば上使の趣き、仰せ聞けられ下されませう。
藥師　いゝ覺悟だ。併し、當時筆頭第一の、師直どのへ刃向へば、この位の覺悟はあるべき筈。さはさりながら、伯州城主で候ふの、佐々木の末流のと、肩で風を切つたこれが大名の態かえ。

播磨　流石は近江源氏の嫡流、佐々木の一族程あつて、天晴れの出立ち、驚ろき入つてござる。
ト懷中より御書を出し
管領足利直義公の上意。
兩人　ハツ。
ト判官、右馬之丞、平伏する。播磨守、御書を披き
播磨　この度鹽冶判官へ、御馳走お役儀を申しつけ候ふところ、私しの宿意を以て、高師直を刃傷に及び候ふ段、場所を辨まへざる致し方、不調法に思し召し、國郡を沒收し、切腹申しつくるものなり。
ト皆々思ひ入れ。
判官　有り難う存じまする。
ト右馬之丞に向ひ
右馬之丞どの、さて、この度は、何か御念入りし御厚志切腹いたす上からは、いつの世にかは謝し申さん。忝なう存ずる。
右馬　某とても、何卒助命あるやうにと、樣々心を碎きし甲斐もなき今日の仕儀。妹顏世めが、定めし愁傷いたすでござらう。
判官　かゝる不所存者に御緣を組まれ、其許のお名まで穢

すと存ずれば、面目次第もござらぬ。
薬師　判官、その態になつて、何が面目ない事があるものだ。元の起りは顔世姫。ナア、こなたの胸に覺えがござらう。それを承知さへすりやア、今の嘆きはないと云ふもの。それを今更愚圖々々と、一時遁がれに手間取るは命が惜しいか、血迷つたか。早く腹を切らつしやい。
播磨　これは又、如何な儀でござる。鹽冶判官は伯州の城主。平侍ひの切腹同様にはなり申すまい。右馬之丞どの定めし御用意でござらうな。
右馬　先刻申しつけ置きました。主水、要、用意。
主要　畏まりました。
ト主水、要之助、立ち上がり、白張りの屏風を立て、疊を一疊重れ、白布の袷蒲團を敷き、下へ下がる。右馬之丞、奥へ行けと思ひ入れにて云ふ。兩人平伏して奥へ入る。判官、靜かに疊の上へ座す。琴の合ひ方になり奥より力彌、三寶に九寸五分を載せて持つて來り、判官が前に置く。平伏して思ひ入れ。判官、見て恂りして、力彌かと云はうとして、兩人へ心遣ひあつて、下がれと云ふ思ひ入れ。力彌胸までせき來る涙を呑み込む思ひ入れ。右馬之丞、播磨守、共に心遣ひ。薬師寺、見て
薬師　わりやア由良之助が悴の力彌ぢやアないか。コレヤイ判官、預けの砌りより、一家中に對面叶はぬとの仰せ出され、殊に今端の際に望んで、誰れが指圖、誰れが許して爰へ出たのだ。推參とや云はん、尾籠とや云はん。キリ〳〵そこを下がれやい。
右馬　イヤ、力彌事は、この右馬之丞が指圖により、判官どのゝ切腹の用意を申しつけましてござる。申さば主從三世の緣の切れ目、疾く存生の目見得を願ひますれども上の仰せを重んじ、只今まで扣へさせましてござるが、餘り切なる心底ゆゑ、暇乞ひの儀、願はしう存じまする
薬師　そんならそれと、なぜ疾にも云ひ召されぬ。我れ我れが知らぬ顔でそれぎりと、高を括つて我意を振ふのか。そりやアならない。この度の越度は、縛り首にもなるべき所を、この薬師寺の執成しで、切腹仰せつけられたを有り難いとは思ひもせず、いろ〳〵との我まゝ氣儘。この場の對面叶はない。右馬之丞までの身の上でござらうぞ。
判官　下がれ、下がらぬか。
トきつと云ふ。力彌、ハツ〳〵と下座へ下がる。播磨

播磨　守、聲かけ力彌、待て。
力彌　ハツ。
播磨　高貞どのへの暇乞ひ。身が許す。
　ト力彌、思ひ入れ。
薬師　又しても〳〵、播磨守どのゝ差出口。これ程重い仰せ出されを、貴殿は背き召さるゝか。
播磨　これ計りは背きましても苦しうござりませぬ。
薬師　そりや又なぜ。
播磨　一家中多きが中に、若年の身を以て、存生の對面を願ひまする心底、聞き屆けまするが武士の情。判官末期に及んで、家中の者に對面させしを科とあつて、お咎めあらば、播磨守直常、腹掻き切つて申し譯仕る。
薬師　アノ貴殿が腹を。
播磨　おてまへに御苦勞はかけ申すまい。
薬師　そんならどうとも勝手におしやれ。
播磨　高貞どの、其許の成行きに、この直常にあるべきところ。先頃唐繪獻上の内見の折柄、高師直權威に誇り、早弟若狹之助へ無禮緩怠、既に討ち果さんと致せしを、早くも察し、餘所ながらの意見。その場は留まれど折を見て、恨みん吉左右、相手替つて其許の身の上。誰れしも覺えのある事ゆゑ、一命に替へて主從の暇乞ひは、播磨守が計らひ申す。仰せ置かるゝ儀がござらば遠慮なく、ナ、力彌、委細承れ。
力彌　ハツ。有り難う存じ奉ります。
　ト判官、思ひ入れにて、一禮をなし、飛び立つ程嬉しい心を押し鎭め
判官　力彌。
力彌　ハツ。
　ト側へ寄る。兩人キツと顏を見て思ひ入れ。
判官　堅固であつたか。
力彌　ハツ、未だ主從三世の縁盡きず、右馬之丞さま、直常さまのお情にて、御存生の御尊顏を拜し、この身の本望、さぞ誰れ〳〵も、羨やましう存ずるでござりませう。
判官　身共も滿足、早速國元へも申し遣はしたであらうな。
力彌　ハツ。
判官　由良之助に對面せぬが殘念。判官死後には屋敷の引取り、諸事萬事混雜いたさぬやうに申しつけい。諸家中の嘆き、我れ短才ゆゑ家を失ひ、身を失ふ不所存者と、評議いたすであらうが、師直が雜言過言、定めて噂にも

聞いたであらう。ア、無念にあつた、刀の手前もだし難く、眞ッ二つと思ひの外抱き留められ、師直は僅かの薄手、某は只今切腹、師直を打ち洩らせしが殘念なと、國元の由良之助へ申し達せ。云ひ置く事はこればかり。御上使、御檢分下されませう。

ト三方を引寄せる。寄らうとするを、力彌を右馬之丞隔てゝ思ひ入れ。判官、肩衣を刎ね、肌を脱ぎ、九寸五分を取り上げ

去取可否物是妄獨來獨去自偲然

ト思ひ入れあつて、腹へ突き立てる。竹笛の合ひ方になり、藥師寺、播磨守、キッと見て居る。右馬之丞、力彌、思ひ入れ。

湊川にて楠正成、正行に云つて曰く、人は最期の一念に依つて生を引き、遂には朝敵を亡ほさんと、刺し違へて死す。まつた護良親王は、淵部が太刀の切尖を、二三寸喰ひ折つて、口に含みし例しもあり、例へ師直打ち洩らすとも、この鬱憤を晴らさで置かうか。

右馬　コリヤ〳〵高貞どの、國元には由良之助あり……ナ後に心を殘さずとも、尋常に臨終おしやれ。

判官　仰せにや及ぶべき。力彌々々。

力彌　ハツ。

判官　この長光の九寸五分、由良之助へ屆け得させよ。

力彌　ハツ。

判官　何れも、おさらば。

ト短刀にて笛を刎ね、いろ〳〵思ひ入れあつて、バッタリ倒れる。力彌、平伏して思ひ入れ。右馬之丞、涙を拂ひ

右馬　御兩所、御檢分あられましたか。

藥師　とくと見屆け申した。播磨どの、判官がくたばる上は、この通り御前へ申し上げようではござらぬか。

播磨　如何にも左樣いたさう。右馬之丞どの、預かりの中は、何かと心遣ひでござらう。切腹相濟む上からは、死骸は貴殿の心任せ、知るべの方へ葬り召されい。

右馬　承知いたしてござる。

播磨　力彌、愁傷察し入つて居る。まだこの外に二世の別れを、惜しみたき仕儀もござらう。長居は無用、はやお暇申さう。

右馬　何かと御厚情、忝なう存じまする。

藥師　右馬之丞どの、世話になりました。

右馬　御兩所御苦勞。

兩人　その後逢ひ申さう。

右馬　御上使のお立ち。

ト愁ひの三重になり、藥師寺、先に播磨守、心を殘し思ひ入れあつて向うへ入る。バタ〳〵にて奥より顏世紅梅、九重、小浪、付いて出て來り

顏世　判官さまは、最早御最期お遂げなされたかいなう。

ト死骸に取りつき

憂き世の中に武士ほど、味氣ないものがあらうかいなう云ひ號けばかりにて、一つに居れどお預けのお身の上。祝言さへする事叶はず、剩へ果敢ない御最期、別れにお目にかゝりたけれど、出る事ならぬこの場の仕儀。例へ枕は交さずとも、云ひ號けのこの顏世、未來は必らず添うて下さんせいなア。

皆々　お道理でござります。御尤もでござりまするわいなア。

九重　お慰みにと差上げた、この夕顏も仇し野の、露は涙となりましたかいのう。

紅梅　この女郎花はお二人の、契りとこそは思ひしに、三世の佛に奉る、花となつたが悲しうござりますわいなア。

小浪　小浪は取分け朝顏の、朝日に萎むを久しいと、云へどもなんのこれがマア、久しい事がござんせう。露より果敢ないお別れでござりましたわいなア。

顏世　今日は取分け七夕の、願ひの糸も星合も、年に一度が羨やましい。例へ百年待つたとて、逢ふ事叶はぬこの身の因果。推量してたもいなう。

皆々　お道理でござりますわいなア。

トいろ〳〵と介抱する。

顏世　最前奥にて七夕は、幾世の數は少ないと仰しやつたのが卽ちお別れ。思ひ出せば身も世もあられぬ。兄上、お宥しなされて下さりませ。

ト側なる短刀を取上げ、自害せうとする。皆々慌てゝ留める。右馬之丞引ッたくり

右馬　コリヤ顏世、その嘆きはさる事なれど、云うて返らぬこの場の仕儀。其方が泣くよりこの兄が、最前より押默つて居る心の內は、どのやうにあらうと思ふぞ。云ひ號けの夫に別れ、共に死なんと云ふも尤もぢやが、コリヤ、相手は僅かなかすり疵、判官にはやみ〳〵生害。師直が成行きをとくと見、その上にては兎も角も。この場の自害は止まつて、判官が菩提を弔へ。

ト立ち上がつて、顔世が髪をフッツと切る。

皆々　これは。

右馬　形こそ深山隠れの朽木なれ、心は花になさばなりなん。

力彌　その詠み歌はげんけい法師、手足は深山のこけ猿と指さしせられて笑はれて、返答なせし秀歌と聞く。今この力彌が身の上も、主に別れて朽木なれども、心は花になさばなりなん。

右馬　判官が末期の詞、必らず共に忘るゝな。この長光の短刀は、由良之助へ形見とあれば、大事にかけて持參なせ。

ト力彌は受取り

力彌　御無念凝つたる九寸五分、父由良之助へ手渡しなし御遺言の一々を、具さに申し傳へまするでござりませう

ト判官が肩衣を取つて、短刀を包み、懐中して、死骸を屏風の内へ入れる。女形皆々以前の花を手向け

顔世　あたりを見れば烏羽玉の、我が黒髪は撫でずとも

力彌　うたかた人は息絶えて

右馬　歸らぬ水の泡とのみ

皆々　散り行く花を手向け草。

ト顔世、香を炷いて手向ける。

力彌　して、お遺骸は。

右馬　暮れを待つて、菩提所光明寺へ送り届けん。

力彌　然らば拙者はこれよりも、直ぐに出立仕らん。

ト奥より伴内、出かゝり様子を窺ひ出る。

隨分ともに御機嫌よう。

右馬　由良之助へこの場の様子。

力彌　とくと申し聞かせませう。

ト短刀を出して

思へば無念のこの短刀、いつか敵の師直を。

トきつと思ひ入れ。伴内、立ち寄り

伴内　師直公へ刃向ふ奴。この伴内が生けちやア置かない覺悟。

ト拔討ちに切りつける。力彌、掻い潜り、見事に投げる。起きる所を右馬之丞、ポンと首を切る。

力彌　これは。

右馬　敵の片割れ。判官どのへは好き手向け。

ト首を屏風の際へ直し

成佛得脱。

皆々　南無阿彌陀佛。

ト皆々手を合はせる。これをキツカケに

ひやうし幕

大崎村與市兵衞内の場

役名――大崎の百姓、與市兵衞。同娘、おかる。斧九太夫。斧定九郎。質屋手代、嘉七。近藤傳四郎。一文字屋才兵衞。早野勘平。織部彌兵衞。

本舞臺三間の間、世話場の道具建て。下の方に繩簾の門口、これに誂らへの螢籠吊るしてあり、上の方に梯子をかけある二階を取りつけ、正面暖簾口、押入れ、幕の内より勘平、本綿やつし、百姓の形にて、鉢卷をして鎌を持ち、嘉七を叩かうとして居る。おかる、やつし前垂れがけの形にて、勘平を留めて居る。上の方に嘉七、手代の形にて、袋に入りし刀を持ち、煙草をのんで居る、テンツヽにて幕明く。

勘平　放せ〳〵。

かる　コレイナア、如何に父さんが留守ぢやと云うて、世間もあるものぢや。マア、あられもない、刃物を振り上げ、どうするのぢやぞいな。

勘平　どうするものだ。あの男が、あんまり聞分けがないに依つて、その分ぢやア歸されぬ。

かる　マア〳〵、待つたがようござんす、わたしが挨拶して見ようわいなア。

勘平　男のおれが挨拶をしてさへ、聞分けのないあの質屋、打ッちやつて置いてくれろ。

かる　お前も嗜なましやんせいな。今でこそ百姓の身の上なれ、以前は何ぢやえ。如何に此やうなさもしい所に居やしやんすとて、あの町人風情……マアマア、わたしが挨拶して見やう程に、マア、お前に料簡して、下に居て下さんせいなア。

ト勘平を無理に下に置き

今にでも、ひよつと父さんが歸らしやんしたら。

ト嘉七の側へ寄り、團扇にて嘉七を煽ぎながら

まだお早うござんすな。主はあのやうに云はしやんしても、心には何もない人でござんすに依つて、必らず氣に留めて下さんすなえ。

嘉七　コレ勘平どの、今のやうに小むづかしく云つたればとて、何もわしを、その鎌で切るの突くのと云ふ事は、ありさうもないものだ。高がこの刀、元金が百兩で利息

が九ケ月ぶり、たつた今流しに出して手を打ちやア、百五十兩にやアなる代物。親方は鍔新へやるがいゝと云はれるを、ア、さうでもない、この刀は勘平どのが侍ひの時、殿様から拜領された刀だらうなが、流れに出しちやア氣の毒な事だと思つて、この嘉七が料簡で、利息の所は兎も角も、元金の百兩……と云つてからが、今の身の上ぢやア出來ない……と思ひながらも、深切に屆けに來たのを、切るの突くのと、どうするのだ〳〵。

かる　モシ〳〵、そこを料簡をして下さんせ。譯を聞けばみんなお前が尤も。渡してやるまいと深切に、來て下さんしたお前に、今のやうな挨拶。殊にあのお刀は御拜領物と云ひ、お形見のやうな物。どのやうな事があつても、外々へやつては主も立ちませぬ程に、どうぞ置いて下さんせいなア。

嘉七　どうぞと云つても高が金づく。これがわしの代物ぢやアなし、親方の物でござんすに依つて、今日中にその百兩が出來にや、氣の毒ながら脇で打たにやアならないと云ふものだが、おかるどの、その金が出來さうなものかな。

かる　サア、出來やうと思うても、矢ツ張り出來ぬものは金、僅かな金でもある事か、百兩と云ふ大枚の金、今日中と云うては。

嘉七　出來る事なら、わしも折角、刀まで持つて來た事だに依つて、渡したうごんすが、成たけ工面して見るがようごんす。

かる　それ程までに云うて下さんすもの、出來ぬとも云はれまい。モシ勘平さん、聞かしやんす通りの譯ぢやが、どうぞその金の出來る手當はない事かいな。

勘平　御不興受けたる砌りより、肌身離さぬお形見のその刀、金子拵らへ、舅與市兵衞どのへ渡さねば、身の置き所なき勘平、寶は身の差合せと、おかるが心遣ひを思ひやり、據ろなく質物に入れたる主人のお罰、今以て願ひ叶はぬこの身の上。今でこそ百姓なれ、以前は早野勘平、この身になつてもそればかりは、どうも人手へは渡されぬ。と云うて今爰へ百兩と云ふ金は出來ず、こりやアマア、どうしたものであらう。

ト當惑する。おかるも氣の毒なる思ひ入れあつて

かる　今のお前の艱難苦勞も、みんなわたしがさす事ぢやと思へば、此やうな切ない事はござんせぬ。

嘉七　夫婦ながら、其やうな事ばかり云つて居ちやア、百

兩はさて措き、二文も出來やう筈がない。斯うしませう、わしが八ッ時分まで、爰の奥で晝寢でもして居ませう程に、せめて利上げでもするがようごんす。ちつとでも金を見せりやア、親方も流れに出す心もごんすまい。其うちに金が出來たら重疊。奥で挨拶を待つて居ますぞえ。

ト唄になり、嘉七、刀を持ち、暖簾口に入る。トこの唄のうち、花道より彌兵衞、野袴、引はだの大小、旅の形、三度笠を持ち出で、直ぐに舞臺へ來て

彌兵　卒爾ながらこのあたりに、百姓與市兵衞と申す人はござらぬかな。

勘平　左樣仰しやるは、織部彌兵衞どのではござらぬか。

彌兵　さうお云やるは勘平どの。

兩人　これはしたり。

かる　そんならあなたが、彌兵衞さまでござりますかいな。

勘平　先づ〱、これへ〱。

ト合ひ方になる。

彌三　左樣ならば許さつしやい。

ト彌兵衞、内へ入つて、上の方へ通る。勘平、莨盆を持ち行き、彌兵衞が前へ置く。おかる、暖簾の内より茶を汲み持つて來り、彌兵衞へ差出す。

かる　お茶をおあがりなされませ。

彌兵　これは〱。オヽ、おかるどのではないか。

かる　ハイ、かるでござりまする。ようお出でなされましたなア。

彌兵　身共もこの度は、ちと内用ござつて參つてござるが、勘平どのにも、先づ〱堅固で、おかるどのにも、斯やうに一つにお居やるとは、先づ〱めでたうござるな。

勘平　彌兵衞どのへは、何とも御挨拶の致しやうもござらぬ。勘平が身の上、與市兵衞が世話に相成り、斯やう致すも本意でもござりませぬ。萬事御推量下されい。

彌兵　申さば何事も時節でござる。

かる　私しゆゑに、斯やうな身の上になられましたる勘平どの、あなた方へお目にかゝられますも、さぞ氣の毒でござりませう。

勘平　時に早速承りませうは、殿判官さま、御切腹遊ばされましてより、お家は斷絶、由良之助どのを始め、御家中の人々、散り〲ばら〱になられ、誰れあつて亡主の敵……高師直を恨みます者もござりませぬ事かと存じますれば、斯やうな心外な儀はござらぬ。由良之助どのには、如何なされてござりまするな。

彌兵　その儀につき、わざ〳〵尋ねて參つてござる。

勘平　それは忝なうござる。おかる儀は、一命にかへまして、お家の事を申して居りますれば、お心置かれず。

彌三　七人の子はなすとも、許されぬとは申すもの丶、また女子の手筋から、知れまいものでもござらぬに依つて、深く隱します事ではござれど、勘平どの、これへお來やれ。

勘平　おかる、あたりへ心を付けやれ。

かる　ハイ。

トおかる、方々を心をつけて居る。兩人、側へ寄り

彌兵　この彌兵衞が參つた趣意と申すは、早急ながら其許の手筋で、敵師直が屋敷の門切手はお手に入るまいか。殿樣切腹の砌りより、師直方にても、もしや由良之助を始め、主人の敵と狼藉に及ばんかと、用心嚴しく、印鑑据りし切手なければ、屋敷の出入はならぬとの事ゆゑ、何卒其許の手筋にて、その門切手さへ手に入るものならば、それを一つの功となし、亡君の御不興、由良之助どの成り代つて赦し、その上に又企ての人數にも加へんとの、由良之助どの丶傳言。なんと、その門切手の手がゝりはござるまいか。

勘平　差當つて、その門切手の手がゝりとてもござらねども、この勘平が御不興もゆり、敵師直を討つべき義士の人數へも差加へくれんとあれば、只今より身を粉に碎きましても、その門切手を……拙者が手に入れ、由良之助どのまでお渡し申すでござらう。

彌兵　成る程、頼もしき志し。由良之助どのにも、其許は外ならず思はるれば、必らず〳〵その門切手の、手に入るやうに心がけ召されい。

勘平　有り難うござる。して、その切手の手に入る節は、何方へ持參仕りませう。

彌兵　その所は、本石町四丁目の貸座敷にて、福島久右衞門と尋ね召されて持參召されい。

勘平　して、その福島久右衞門と申す人は。

彌兵　由良之助どの只今の替へ名でござる。

勘平　成る程、大事に大事を思はれまする由良之助どの丶儀でござれば、尤も千萬。左樣ござらば本石町四丁目、貸座敷福島久右衞門どのまで、持參仕つてござりませう。

彌兵　その切手さへ手に入れば、勘平どのは以前の武士にならるゝ程に、おかるどの、その門切手の手に入るやう

にナ、心がけ召されい。
かる　有り難うござりまする。イエモウ、主が以前の通りの身の上になられまする事ならば、どのやうに致しましてなりとも、その門切手とやらの手がゝりを、心がけまするでござりませう。
彌兵　頼もしい〳〵。然らば身共はお暇仕らうが、返す返すも勘平どの、その門切手を。
勘平　手に入れまして持參いたさう。
彌兵　おかるどのには、勘平どのを以前の武士に。
かる　それを願うて居りまする。
彌兵　然らば勘平どの。
勘平　彌兵衞どの。
かる　ようお出でなされました。
勘彌　重ねて御意得ませう。
ト合ひ方になり、彌兵衞、目禮して花道へ入る。勘平、おかる、後見送り、勘平、手を合せて拜みながら
勘平　有り難い〳〵。由良之助どのゝ企て、敵師直が門切手さへ手に入れば、それを一つの功となし、殿の御不興も赦され、企ての人數へも加へられんとは、未だこの勘平が武運にも盡きざるか。エヽ、有り難い事ぢやなア。

かる　さぞお前は嬉しうござんせう。女子のわたしでさへ、此やうな嬉しい事はござんせぬ。此やうな時が神佛のお力でなければ願ひは叶はぬ。隨分と信心するがようござんす。
勘平　それ〳〵、神佛の力でなければ。イヤ〳〵、神佛より差當つて、明日は殿樣の御命日、今宵がお逮夜ぢやに依つて、おかる、わしはアノ目黒の安養院へ、寺參りに行つて來ようわいの。
かる　お前も嗜なましやんせ。御菩提所でもあることか、わたしが母さんのお寺へ、此やうなめでたい事を聞いた時に、參らしやんすと云ふやうな、氣にかゝる事があるものかいな。
勘平　イヤ〳〵さうでない。其方の母御なれば、この勘平が爲にも親、どうでも參つて來ようわえ。
かる　どうやら氣にかゝるに依つて、そんなら先へ不動樣へ、お參りなさんせいな。
勘平　イカサマ、女と云ふものは。よし〳〵、そんなら不動樣から先へ參らう。
かる　早う行てござんせえ。
勘平　内を氣をつけやれ。

ト唄になり、勘平、木綿羽織を引ッかけて、花道へ入る。おかる、後見送り

かる　早う歸らしやんせえ。此やうな嬉しい事はないわいなア。どうぞ早うアノ師直が屋敷の門切手を、勘平どのの手の入れて、それを功に元の侍ひにして見たいものぢやわいな……それ〳〵、もう父さんが畑から歸らしやんすであらう。ドレ、晝飯の拵らへせうか。

ト てんつゝになり、おかる、俎板、庖丁を出して、茄子を盆に乘せ持ち來り、これを拵らへて居る。花道より與市兵衛、木綿やつし、袖なし羽織の形にて、脚絆をはき、鍬をかつぎ、咬へ煙管にて出て來る。後より駕籠舁き、四ッ手駕籠を擔ぎ出て來る。この駕籠に才兵衛、旅形やつしにて、雨がけの荷を付け、出て來る。

駕屋　モシ〳〵、爰らに與市兵衛どのと云ふ百姓衆はござりませぬか。

與市　なんと、與市兵衛を尋ねさつしやるか。

駕屋　アイ、大崎の與市兵衛どのを尋ねまする。

與市　その大崎の百姓與市兵衛と云ふは、わしでごんすが、何の用で尋ねてござつた。

才兵　そんなら、與市兵衛どのとは、主の事かえ。そりやよい所で逢ひました。サア、駕籠を下げてもらはう。

與市　イヤ、用があるなら、内へござるがよい。あの門口がこの與市兵衛が内。先へ行きます程に、後からござれ。

才兵　そんなら、あれまでやりや。

駕屋　アイ〳〵。

ト てんつゝになり、與市兵衛、舞臺へ來る。駕籠舁き、駕籠を舁いて、與市兵衛に續いて、舞臺へ來る。與市兵衛、直ぐに内へ入る。

かる　父さん、歸らしやんしたかえ。

與市　早く晝飯を食はせてくれないか。

かる　今おかずが出來るわいなア。

與市　其うち一服のむべいか。

ト 煙草盆を引寄せ、煙草をのんで居る。此うちに才兵衛、駕籠を下ろし出る。駕籠舁き、中拔き草履を直す。才兵衛、腰差しを差しながら、

才兵　樣子に依つたら、歸りにも乘るだらうから、この近所に待つて居たがよい。

駕屋　ハイ〳〵、いつまでも待つて居りませう。

ト 駕籠を下ろし、兩人、橋がゝりへ入る。

才兵　爰が大崎の與市兵衛どののでござるか。

與市　コレ〳〵おかる。おれを尋ねて、誰れたかござつた程に、何の用だか、聞いてくれ〳〵。

かる　與市兵衞は此方でござりまするが、どなたでござりまする。

ト才兵衞の顏を見て

ヤ、お前はいつぞや、始めてお目にかゝりました

才兵　一文字屋の才兵衞でござります。

かる　ほんに才兵衞さま、ようお出でなされました。

才兵　ちよつと逢ひに寄りました。

かる　お前には、段々お話し申したい事やら、お禮の申したい事やら、マア〳〵、此方へお入りなされませ。

才兵　そんなら御免なさい。

ト內へ入る。

かる　モシ〳〵父さん、主は一文字屋の才兵衞さまと申して、それは〳〵賴もしいお心ゆゑ、わたしも勘平どのも、いかうお世話になりましたに依つて、お前もお禮を云うて下さんせいなア。

與市　そんなら大方、此方の內へにぢり込むのか。內の味噌鹽の減る事なら、大槪にして歸せ。

かる　其やうな事ばかり。モシ〳〵、才兵衞さま、此方の內には、隨分遠慮はござんせぬ程に、ゆるりとお出でなさんせいなア。

才兵　成る程、遠慮はなささうに見える。見かけから與市兵衞どのが、むづかしくも何ともなささうで、さぞ居よからう。して、勘平どのは。

かる　ハイ、いま近所へ出られましたわいな。

才兵　隨分仲がよからうね。

かる　二人一緒に暮らすばかりの、樂しみでござんすわいなア。

才兵　有り難い。

ト煙草を吸ひつける。

かる　才兵衞さんには、なんとお禮を申してようござんせうやら。お前のお庇で、どうか斯うか、今日までは勘平どのも、わたしも、憂を凌いで居りましたわいなア。

才兵　サア、わたしもそれからどう云ふ事か、一向便りを聞きませなんだが、江戸へ出たのを幸ひに、勘平さんにも、こなさんにも、ちよつと逢つて話しの上で、また料簡もあらうと思ひまして、寄りましたのサ。

かる　ヤレ〳〵、それは御深切に、よう來て下さんした。さぞ主も喜ばれますでござりませうわいな。

ト此うちに紙入れの中より、紙に包んだ一分を出して

才兵　時に、土産に何ぞと思つたが、樣子が知れねえから、親仁樣へ持つても來ません。こりやア近頃不躾ぢやが、鰹でも買つて進ぜて下さい。

かる　才兵衛さんとした事が、こりや何でござんすぞいな。

才兵　年寄りと云ふ者は、物喜びなものだ程に、マア、親仁樣へ出して下さい。

かる　其やうに云はしやんす事なら。モシ〳〵、才兵衛さんが、これでお前に好きな物取つて上げてくれいと、云うてゞござんすわいな。

與市　それはヤレ〳〵忝ない。ハヽヽヽヽ、おかる、お主も氣の附かぬ者ぢやアないか。お世話になつたお人なら、マア、奥へでも連れ申して、酒でも飯でもなぜ進ぜぬ。早くマア、奥へござつたがよい。

かる　ほんにさうでござりました。モシ〳〵才兵衛さん、主の歸らるゝまで、どうぞ奥で話して居て下さんせ。

才兵　成る程、爰に斯うして居たら、また外にさした事もありませう程に、奥へ行きませう。

かる　サア、わたしと一緒に。

才兵　親仁樣、許さつしやりませ。

與市　五六日逗留してござりませ。

才兵　成る程、現金な……サ、行きませう。

かる　ござんせいなア。

ト唄になり、才兵衛、荷を持つて、おかるを連れ立ち、奥へ入る。ト花道より九太夫、浪人の形にて、深編笠を着て出て來る。後より定九郎、同じく浪人の形にて、朱鞘の大小を差し、深編笠にて出て來る。後より傳四郎、旅形、大小を差し、三度笠を着て、雨がけの挾み箱に下駄、提灯を附け、擔いで出て來り、直ぐに舞臺へ來て、内を覗いて

九太　與市兵衛どのゝお宅はこれかな。

與市　さう云はつしやりますは、斧九太夫さまではござりませぬか。

九太　其方は與市兵衛か。

與市　ヤレ〳〵、ようお出でなされました。サア〳〵、お入りなされませ〳〵。

九太　イヤ〳〵、同道いたした者もあれば、内に遠慮は。

與市　イヤ〳〵、誰れも居りませぬ。

九太　そんなら、悴も傳四郎も入りやれ。

定九　許し召されい。

ト定九郎、編笠を取つて内へ入る。與市兵衛、合點のゆかぬ思ひ入れあつて

與市　お前方のこの形は。

九太　どうで詳しく話さねばならぬ身共親子が身の上、この間までは扇ヶ谷の門前に、屋敷へ出入りの大津屋十兵衛方の、二階住居いたして居つたが、仔細あつてあの鎌倉を立退き、與市兵衛、我れ〳〵三人は、この内へ世話になりに參つた。

與市　エ、、鹽冶判官さまが腹を切らつしやりまして、九太夫さまには浪人なされたと聞きましたが、そんなら今ぢやア、その呉服屋の二階にござりましたか。

九太　これにも長くはどうも居られず、御身を便りにこの所へ參つた程に、與市兵衛、今までのよしみに、なんと匿まうてはくれまいか。と申したればとて、御身が世話にはなるまい。まだ金銀の貯へもあれば、二年や三年浪人したればとて、何一つ不自由な事はない程に、心遣ひなく、マア、相應な有付きのあるまで、世話にならずばなるまい。

與市　イカサマ、内證のしつかりと、コレ〳〵のある九太夫さま。お世話いたしたら、わしが爲にも惡い事もござりますまい程に、ようござります、この與市兵衛が所に、お三人ながらござりませ。

九太　以前を忘れず、我れ〳〵を世話にしてくれるとは、忝ない〳〵。ほんにまだ、悴定九郎に逢はなんだの。悴、挨拶召されい。

定九　兼ね〳〵同苗の噂で承つた、其許が與市兵衛どのでござるか。手前事は、定九郎と申す。よい折柄に逢ひましてござる。

與市　これは〳〵、定九郎さまでござりましたか。この親仁は九太夫さまには、だん〳〵お世話になりましたる、與市兵衛と申しまする水呑み百姓、お目かけられて下さりませ。シタガ、今までと違ひ、浪人のお身の上で、お屋敷にござりましたやうな、活計な事はござりますまい。殊にこの與市兵衛が内へ、三人ともにおり込んでござります程な事ぢやア、どうで今までのやうな、御家老樣の息子どのゝやうな挨拶にやア致しませぬぞえ。そんざいに申します程に、氣に障られうとも、堪忍さつしやりませ。

定九　それが却つて此方の頼み。御主人判官さま、直義公の御座近く、師直どのを刃傷に及ばれ、殿中を恐れぬ

とあつて御切腹。一家中は漂泊の身の上。殊に我れ〳〵親子の者は、大星どのを始め、原郷右衞門どの、矢間、小野寺、竹森、織部、何れも譜代の舊恩を忘れず、既に殉死をも遂げられんと、籠城必死の義士の輩に、不忠の心底と見限られ、身共は殘念に存ずれども、心に任せぬ身の行く末。是非もない儀でござるて。

傳四　コレ〳〵定九郎どの、まだ其やうな事を云つてござるか。殿の御用金、六萬四千六百兩の金を、九太夫どのは百石に付いて、五兩づゝ割り渡すがよいと云はれたを、あの大星由良之助、知行の高下に依らず、人一人に十兩宛に、十五以下の子供には五兩づゝと、如才のない配分に、面白くないは我れ〳〵、剩へこの九太夫どのと、一つ穴の狐だと云つて、晝中屋敷を叩き出され、アタ外聞の悪い。あの呉服屋の十兵衞が所から、夜々中、この挾み箱を擔ぎ出して、爰まで逃げて來ると云ふは、あらう事ぢやござるまいぢやアござらぬか。

九太　例へ大星始め、五十人や六十人かゝつて、どのやうな相談をすればとて、當時盛んの師直どの、手向ひがなるものだ。併し、それが師直どのゝ耳へも入つて、この間は用心嚴しく、門の出入りも、印鑑の据つた切手がなけりやアならぬとの事。其うちにやア師直どのは、直義公のお供にて、近く都へ上らるゝとの事。それを知らずに、義士だの忠臣だのと吐かして居ると思へば、なんとをかしいぢやないか。

傳四　それ〳〵、九太夫どのを兼ねて彼の師直どのが他事なく思はれ、屋敷へ來いと、その嚴しい門の切手が、九太夫どのの所にあるぢやアござらぬか。

九太　師直どのゝ印鑑据つた門切手、內々で送られたは、この九太夫を思はれての事サ。

定九　左樣ござらば、その師直どのゝ門切手は、あなたの方にござりまするか。

ト袱紗に包みし、門切手を出し

九太　これ見ろ、印鑑をベツタリ据ゑたこれが切手。

定九　ハテナア。

傳四　それさへあれば夜々中でも、師直さまのお屋敷へ、出入りがなると云ふもの。

定九　あなた樣は、その切手を持つて、身詰りになりやア師直どのへ駈け込む心か。エヽ、お情ない。御主人判官さまの御切腹も、皆師直がなす業。由良之助どのをも差措いて、我れ〳〵親子が一命にもかへ、おのれ師直主君

の仇と、及ばずながらも恨みませねばなりませぬ、主人の敵でござりまするぞや。その仇敵の師直が屋敷へ、例へ一命に及びましても、九太夫親子が參られませうか。そのお心ゆゑ、一家中に疎み果てられ、不忠者よ、恩知らずと、我れ〳〵親子は、お屋敷を追ひ拂はれましたではござらぬかいの。私し一人、親九太夫と親子の緣を切りましても、由良之助どのゝ思し召しに隨ひませうと申しましても、誰れ一人取上げくれまする者のないと申すも、皆親仁樣の平生より、お心にござる事ではござりませぬか。最早これまでお供申したれば、お憎しみはござるまい程に、拙者はこれより母方の寺へ參り、切腹仕つて、殿判官さまへ、親子一致仕らぬと申し譯を致さう。

九太　又しても〳〵、親に恥辱を與へる不孝者。末々どうで碌な者にはなるまい。疊の上で殺したいと云ふ親の心は知り居らいで、忠義々々と、コレヤイ、あの判官どのか、師直どのへ手向ひをしたばつかりで、おいら親子も、こんな態になつたぢやアないか。それ程に死にたくば、九太夫が手にかけてくれう。

ト刀を引寄せるを、傳四郎留めて

傳四　コレ〳〵、マア、早まらしやるな。拙者が定九郎どのへはよく聞かせて、あの馬鹿者の判官どのゝ事を、思ひ切らせませう程に、先づ〳〵待たつしやりませ。

九太　忠義を立てゝよければ、この九太夫に如才があらうか。當世は名を取らうより德を取れと、金銀に目をかけるが、みんなおのれが不便さ……ばかりでもない、この九太夫も、これから氣に入つた妾でも持つて、まだ〳〵五十年も七十年も樂をして、樂しまにやアならない。なんと與市兵衛、さうぢやアないか。

與市　それ〳〵、わし等も疾から心がけて、錢金を貯めにやア、死んでも冥途の障りになつて、よく死に兼ねるものサ。後生は叶はずとも、兎角小判ほど有り難いものはござりませぬな。

定九　情ない御所存。不忠不義の惡名は、末代も雪がれませぬ。

傳四　コレ〳〵、その片意地が惡いと云ふもの。なんであらうとマア二階へ、サヽ、ござれ。

ト無理に引立てる。

定九　亡君尊靈、何事も、御免なされて下さりませい。

ト唄になり、定九郎、俯向いて二階へ上がる。傳四郎、續いて二階へ上がる。あと合ひ方。

九太　あの偏屈な悴ゆゑ、九太夫が心遣ひ、察しておくりやれ。
與市　若いに似合はぬ定九郎どの、忠義だの云ひ譯に腹を切るのとは、云はゞ痴者の沙汰ぢやアござらぬか。
九太　それ〳〵、時に與市兵衞どの、お身には兼ね〳〵頼んで置いた通り、支度金はいくらでも手渡しせう程に、あのおかるを妾に貰はねばならぬぞや。
與市　そりやモウ、金にさへなる事なら、いま亭主があるおかるでも、娘の事なれば、どうとも致しませう。
九太　それにつけても、この九太夫が身の上、もしもの事があつた時にやア、何時なりとも屋敷へ來いと云うて、内々で送られたこの切手。
　ト切手を出して
これを持つて屋敷へ行けば、師直どのより迎ひが來る筈だに依つて、この切手は與市兵衞、お身に渡して置く程に、まさかの時にやアこれを持つて、師直どのゝ屋敷まで行つてはくれまいか。
與市　氣遣ひさつしやりますな。さう云ふ事を聞いて置けば大丈夫、切手は慥かに預かりました。
九太　随分大事に。

與市　合點でござります。
　ト切手を懐へ入れる。
九太　そんなら萬事は。
與市　奥で聞きませうか。
九太　與市兵衞。
與市　待つてござりませ。
　ト合ひ方になり、九太夫、刀を提げ、暖簾の内へ入る。下座よりおかる、盛り並べたる日光膳を持つて來る。
かる　父さん、御膳を、サア、お上がりなされませ。
與市　おかるか。飯も食はうが、おぬしやアよい所へ來た。
かる　父さん、何でござんすえ。
與市　定めてこの親が、胴慾な事を云ふものだと思はうが、なんと、アノ聟の勘平を、後とも云はずたつた今、爰の内を叩き出しちやアくれまいか。
かる　エヽ、そんならアノ勘平どのを。
與市　おれが斯う云ひ出しちやア、否であらうが應であらうが、もう片時もあの野郎を内にやア置かぬ程に、今にでも歸つたら、門口から直ぐに叩き出してしまへ。もうあの勘平、われが亭主ぢやアない程に、おかる、さう思つてくれろ。

ト膳を引寄せ、飯を食ひにかゝる。おかる、悔りして

かる　父さん、そりやマア何の事ぢやいな。昨日までも今日までも、親子仲ようして下さんした、あの勘平どのを、どう云ふ事で爰の内には、置かれぬと云はしやんすのでござんすぞいなア。わたしや呆れて、ほんに給仕も出來ぬわいなア。

與市　藪から棒を出したやうに、勘平を叩き出せと云つたら、定めて肝が潰れるであらうが、おかる、この與市兵衛はたつた今、鹽冶どのゝ浪人、斧九太夫どの親子を、據なく匿まつたに依つて、どうもあの勘平は内にやア置かれまい。

かる　エヽ、そんならアノ、不忠者ぢやと評判の、九太夫親子を。

與市　男づくで匿まやアせまいが、金づくで頼まれたに依つて、どうも匿まはにやアならぬ。

かる　エヽ、情ない事を云はしやんす。金づくならば勘平どのも、ならぬ中から大枚の、金を持つてござんした。ソレ、その金も取つて置いて、如何に又、金になればとて、義理の悪い、折角馴染んだ勘平どのを追ひ出して、あの九太夫どのを、金づくで匿まはねばならぬとは、父さん、そりやあんまり胴慾でござんす。エヽお前はな、お前はな。

與市　そんならアノ勘平が、敷金を持つて來たに依つて、金づくぢやア出されぬと吐かすのか。イヤサ、緣は切られぬと云やアがるか。

かる　ようマア、物を積つても見たがよゝござんすわいな。

與市　成る程、積つて見りやア、あの聟の勘平は出されぬ筈。こりやアわれが云ふ通り、勘平とは緣は切られまい。この與市兵衛が親ながらも、叩き出せと云つたは惡かつた。オヽ、おれが悪かつたに依つて、おかる、料簡しやれしやれ。

かる　さう云はしやんすりや、氣の毒でござんすが、世間でお前を悪う云はさぬ心でござりますわいなア。

與市　成る程、この與市兵衛を悪く云ひさうなもの。ドレおれが内に居て悪く云はれうより、さらばこの與市兵衛が、これから爰の内を駈落ちして、先で乞食にならうとも、のめり死に死なうやら、人に切られてくたばらうやら、頓着なしに内を出る程に、おかる、わりやア勘平と隨分仲よく後で暮して居るがよい。

ト食ひかけた膳を抛り出して、外へ出ようとする。お

かる、驚ろき、與市兵衞に取りついて

かる　モシ／＼父さん、マア／＼待つて下さんせ。

與市　イヤ／＼、爰の内に居ちやア、世間の奴等に胴慾な者だと云はれるに依つて、たつた今、内を出るのだ。もうこれから、おかる、われとも親子ぢやアない程に、さう思つて居やれ。さらば出て行くべいか。おれがのたれ死にするか、宿なしになるのを、勘平と二人で見物しやれ。さうしたら、われが本望であるべいぞ。ヤレ／＼、孝行な娘を持つた事だぞ。

ト行かうとする。おかる、與市兵衞に取りついて

かる　父さん、それ程までに云はしやんすが、わたしや合點がゆかぬ。マア／＼、待つて下さんせ。

與市　よく聞きやアがれよ。あの九太夫どのを匿まつて置いて、聟の勘平を内に置かにやアなりませぬから、親子の衆はどこぞへ行かつせいと云はれるものか　九太夫どのへの云ひ譯に、おれが出て行くのだ。おかる、留めずとおれを出してくれ。この與市兵衞は内にやア居ないわえ。

かる　尤もでござんす。あやまりました程に、父さん、わたしが云ふ事を聞いて下さんせ。

ト留める

與市　そんならアノ勘平を、叩き出さうと云ふのか。

かる　アイ、お前の云はしやんす通り、あの勘平どのとわたしや、緣を切らうわいなア。

與市　そんなら親のおれが云ふ事を聞いて、勘平と緣を切らうと云ふのか。

かる　アイ、さつぱりと緣を切らうわいなア。

與市　さう云ふ事ならよいワ。親の與市兵衞が胸の晴れるやうに、サア、勘平が事を思ひ切りましたと云ふ事を、たつた今書いて渡せ。

かる　サ、それは。

與市　その書き物は書かれぬか。

かる　サ、その書付けは。

與市　どうだエ、。

かる　成る程、勘平どのをさつぱりと、思ひ切りましたと云ふ事、書いてお前へ上げうわいなア。

與市　そんなら早く書いて渡せ。

かる　父さんの心の休まるやうに。

ト合ひ方になり、硯箱を出し、鼻紙へサラ／＼と書いて、與市兵衞へ渡す。受取つて

與市　ドレ〳〵、「勘平どのと申し交し候へども、さつぱりと緣切り候ふ上は、最早夫婦にては御座なく候ふ、如何やうな事御座候ふとも、少しも御苦勞になされまじく候ふ、おともじ樣へ、かる「……よい〳〵、この書付けを取つて置きやア、この書付けに物を云はせて、おかる、われを、匿まつて置いた九太夫の妾にせにやアならぬぞ

かる　エヽ。

ト悔りする。與市兵衞、おかるが手を取つて

與市　おれと一緒に奧へ來い。

ト唄になり、沒義道におかるを連れて、與市兵衞、奧へ入る。この唄のうちに、花道より勘平出て來る。二階より定九郎、刀を提げ、下りて來る。勘平、直ぐに舞臺へ來て內へ入る。

定九　貴殿は早野勘平ならずや。

勘平　さいふおてまへは斧定九郎。

定九　堅固でお居やつたか。

勘平　御無事でござつたか。

定九　ヤレ、思ひがけない。

勘平　變つた所で

兩人　逢ひましたなア。

勘平　先づ〳〵何から申さうか、積る話しは山々ござれど、面目ないはこの勘平が身の上。御大切なる安綱の刀預かり奉り、血汐に穢せしばつかりに、御不興受けて、その後お家の大事と聞きながら、あの鎌倉を立退きしに、返す〴〵も不忠は名は遁がれず。おめ〳〵斯やうに致して居る勘平が心の內、御推量下されい。

定九　オヽ、さうお云やれば、この定九郎が身の上も、御推量下されい。不忠不義の九太夫が悴と、人ならぬ人のやうに、人口にかゝつて、生れ甲斐もなき拙者が命。今日や申し譯に切腹いたさうか、明日は自殺いたさうかと存じ詰めてはござれども、承れば大星由良之助どの、亡君判官さまの仇敵、あの師直を…恨みんとの企てある由、ほのかに承つてござるゆゑ、何卒鄕右衞門との彌兵衞に尋ね逢ひ、親九太夫と一つでござらぬ心底をも明かし、その一味連判の人數へも加はらんと存ずるゆゑ惜しからぬ命ながらへ居りまする拙者が心中、勘平どのお察し下されい。

勘平　コリヤ〳〵定九郎どの、そりや何をお云やる。由良之助どのを始め、一味連判の義士、主君の敵師直を討たんなどゝの企てありとは、跡方もない其許の推量。決し

て、左樣な事はござらぬ程に、定九郎どの、埒もない事お云やるな。

定九　隱し召さるは至極尤も。拙者が不忠者の九太夫が悴ゆゑ、大事をムザと明かされぬは、朋輩ながらも勘平どのゝ胸中、察し入つてござれども、この定九郎に於て、殿の御恩の忘れまするやうな者でござらぬと、申したればとて、よもや誠にはおしやるまい。勘平どのでさへ、拙者に心を置かるれば、由良之助どのは元より、大望が本主なれば、疑はるゝは無理でござらぬ。然る上は是非がない儀でござる程に、勘平どの、不忠不義の九太夫の悴、定九郎でござれば、せめて御自分の手にかゝつて相果てますれば、殿のお手討ちになりましたも同然。武士の情、なんと勘平どの。

ト刀を投げ出し、勘平へ渡し、座を組んで襟を搔き撫で合掌して

お手にかけられて下されい。

勘平　こりや、さうありさうなもの。九太夫と心一つでないと云ふ申し譯に、この勘平が手にかゝりたいとの願ひ聞き屆けてござる。朋輩のよしみ、手にかけて進上いたさう。

ト勘平、刀を拔き放して、定九郎が襟に白刃を當て、試し見る事幾度もあつて、トゞ勘平、刀を納め、定九郎が側へ置き。

心底見屆けてござる。この勘平におき、おてまへに最早心は置かぬ程に、定九郎どの、兎角時節を待ち召されい

定九　すりや、この定九郎が心底は、勘平どのがお見やつたか。

勘平　親子一致せぬ、疑ひは晴れました。

定九　エヽ、忝ない。

勘平　折もござらば由良之助どのへは、拙者この通りを申すでござる。

定九　然らば其許には、その企ての人數でござるか。羨ましう存ずる。

勘平　未だ連判には加はりませぬが、御不興受けたる勘平が身の上ゆゑに、一つの功だに立つならば、その人數へも加へられんとの、由良之助どのゝ御內意でござる。

定九　して又、一つのその功には、勘平どの、何をお立てなさるゝぞ。

勘平　それとても指圖に任せ、用心嚴しき師直が、屋敷へ出入りの門切手を、何卒手に入れ渡すに於ては、それを

一つの功となし、殿の御不興赦されて、その連判にも加へんとの事。古朋輩の昔を忘れぬ由良之助どのゝ志し、なんと忝ない儀ではござらぬか。

定九　して、その門切手の手がゝりがござるか。

勘平　その儀は。

定九　喜び召されい。その門切手の

勘平　手がゝりがござるか。

定九　如何にも。

勘平　エ、、忝ない。して、その門切手は、いづ方にござるぞ。

定九　サ、その門切手の在所は。

勘平　拙者が一つの功さへ立てば、忠臣の數にも入りまする。この勘平が身の上、定九郎どのゝお志しを以て、その門切手の手がゝりが知れますれば、拙者が武士は立ちまするど申すもの。定九郎どの、その在所はいづくにござるぞ。サア、どうぞ早う申しておくりやれ。

定九　その門切手の在所は、この定九郎が口から申せば、道ならぬ儀でござれども、忠義には親をも討つ。現在の親ながらも、親と存ぜぬ九太夫が、その門切手を、勘平どの、肌身離さず所持してござる。

勘平　ヤ、、なんと。

定九　忠義には親をも討つとは申せども、血を分けたる親九太夫、如何に忠義の爲なればとて、この定九郎が手にかけて、何とて親が討たれませうぞ。親に替へても忠義を立てたき拙者が心底、ちやに依つて勘平どのへ、明かしましたる門切手の在所。親九太夫を……我が子の口から親の內通、御免なされて下さりませ。

トほろりとする。勘平、手を打ち

勘平　出かし召された、其許の心底、察し入つてござる。して、その九太夫どのは、どれにお居やる。

定九　しかも、この家に匿まはれて。

勘平　ヤ、何とお云やる。

定九　何卒手段を巡らして、無難に切手を、御合點か。

勘平　併しながら其許が、この場にあつては心が置かれる暫しの間。

定九　この所を。

勘平　遠ざかつては下さるまいか。

定九　イカサマ、御尤も。

ト定九郎、ズツと立つて門口へ出て

最前よりの物語り、勘當お詫びの手がゝりも、知れたる

上は
勘平　其許の身の上も命に替へて
定九　一味の人數へ。
勘平　コレ。
　ト思ひ入れあつて
勘平が取持ち致さう。
定九　忝い。さはさりながら忠義ゆゑ。
勘平　親の惡事を打明けて
定九　外へは出されぬ互ひの身の上。
勘平　命を捨て、義を立てる
定九　柴の戸ぼそも武門の門出。
勘平　孝を捨てゝも
定九　忠は全く
勘平　出入りの切手を奪ひ取る心底。
定九　もし、首尾ならぬその時は
勘平　九太夫どのを只一討ち。
　ト定九郎、門口をバッタリと締める。勘平思ひ入れ、唄になり、定九郎、花道へ入る、勘平あたりを見廻し
思ひも寄らず定九郎が情にて、門切手の在所知るれば、今日の中にも我が手に入れ、それを一つの功となし、以前の武士に立返り、忠義の數にも入るものなら、これに増したる本望はあるまい。由良之助どのゝお志し、返す返すも、エヽ、忝ない。
　ト此うち奧より嘉七、刀を提げて出て來り
嘉七　ヤレ〳〵、久しく待つた事かな。勘平どの、そこにござつたか。どうでごんす、利息の金が出來ましたか。どうやら一文も出來た樣子も見えない顏付き。いつまで云つても埒が明かざア。ドレ、お暇申さうか。
　ト行かうとする。勘平、嘉七を引き留めて
勘平　コレ〳〵、待つて下さい。今までは質に置いても大事がなかつたが、もう此方にお刀が、どうもなければならぬ事が出來たに依つて、人手に渡す事はさて置いて、直ぐに此方へ請け戻さねばならぬそのお刀、滅多にこなたを歸す事は、ならない〳〵。
嘉七　コレナ、モシ、それでも金が出來ないぢやアないか
勘平　サ、それは。
嘉七　それ見さつせい。元金の百兩は出來ずとも、せめて利息の內入りなりとも出來りやアよいが、その金も出來ないで、このお刀がなければどうもならぬとは、ほんに虫のよい。退かつせい。あんまりわしが料簡過ぎたと云



嘉永五年三月中村座所演番附

ふものだ。もう片時も待たれねえよ。

勘平　さうではあらうが、そのお刀を。

嘉七　そんなら金があるか。

勘平　サ、その金は。

嘉七　どうだ。

勘平　まちつと待つて下さるまいか。

嘉七　馬鹿な面ぢやアないか。

ト勘平を突き退けて、嘉七、刀を持つて行かうとする。おかる、奥より出て、嘉七が持つて居る刀を取つて、懐より財布に入りし金を出して投げて渡す。嘉七、財布を取り上げ、中を改めて

こりや、この金を改めて見れば丁度百兩。

かる　このお刀の元金百兩、受取つて置いたがよいわいなア。

嘉七　こりやア有り難い。道なしにならうと思ひの外、元金でも締めて置きやア、親方へ云ひ譯があると云ふものそんなら刀は渡しましたぞ。

かる　受取つたわいなア。

嘉七　勘平どのは、よいかみ樣を持たしつて仕合せな人だ、お内儀を頭の上へ戴いて居たがようごんす。さらばお暇申さうか。

ト嘉七、金財布を首にかけ、花道へ入る。

かる　サア、勘平どの、殿樣より御拜領のこのお刀、お前へ渡しましたぞえ。

勘平　合點のゆかぬ、おかる、其方はマア、どうして今の百兩の金を拵らへたのぢや。此やうな解せぬ事はないわいの。

かる　そんなら、あの金の出來た事が、合點がゆかぬかいな。

勘平　ありやマア、どうして出來た金ぢや。

かる　サア、今のアノ金はな。

勘平　合點がゆかぬわいなう。

かる　その譯はわたしが詳しう話すより、コレイナア、一文字屋の才兵衞さん、早う爰へ來て下さんせいなア。

才兵　オイ／＼、勘平さんはそこにござるかな。ドレ／＼逢つて挨拶しませう。

ト才兵衞、荷を持ち、奧より出て來る。

かる　サア、今の譯を、主へ話して下さんせいな。

才兵　これは勘平どの、ヤレ／＼、久し振りでお目にかゝりましたな。

勘平　これは其許は、才兵衞どのでござるか。さて／＼先達ては、いかいお世話になりましたな。早速ながら聞きませうは、今あのおかるが質屋へ遣はしたる刀の元金、百兩のあの金子は、あれはどうして出來ました。

才兵　必らずこの才兵衞を、惡く思つて下されまするな。據なくあのおかるどのに賴まれまして、二十三から七あけに、中年五年を百兩で、主を勤め奉公に、この才兵衞が抱へました。

かる　勘平どの、堪忍して下さんせ。

ト泣く。勘平、驚ろき

勘平　ヤ、、そんなら今の百兩の金は、おかる、其方の身の代であつたか。ホ、イ。

ト俯向く。

才兵　女衒商賣は斯う云ふ所で、いつでも嫌になりますが、勘平さん、定めてお前も、主を勤め奉公に出す事は否でござりませう。また否であらうか。昨夜までも一つ蚊帳に、枕を並べて寢てござつて、互ひに寢冷えでもせぬかと、目が明いて見れば、側に寢て居た可愛い女房、辛い苦界をさせる事でござりますに依つて、そりやア云はずとも、この才兵衞も承知サ。又おかるどのも、なんぼ亭主の爲になればとて、廓へ行つて、見ず知らずの者に、抱かれて寢る事だもの、こんな氣のない事はない筈サ。サア、それでも主達ばかりぢやアないわサ。今まで世間に、いくらも夫の爲に稼ぐ者はある慣ひ。其うちにもわたしも、一文字屋の才兵衞でごんすと、何も自惚れを云ふ事はなけれども、あんまりおかるどのゝ深切がもだし難ないから、あんまり志しがよいに依つて、勘平さん、お前の都合のよいまで、わしやア主をば遣ひませぬぞえ。可哀さうにこれ程、亭主に心中を立てゝ居る人を、心なく、なんぼ商賣だと云つて、ムザ／＼と勤めをさせる事はわしやア否サ。これが勘平さん、この才兵衞がお前に達引、いつでも金が出來たなら、元金を突かつしやりませ。その時は二文でも餘計を取つて、おかるどのを渡すやうな才兵衞ぢやアない程に、マアさう思つてござりませ。いつでもこの別れ際が、をかしくなるものサ。

ト手拭にて汗を拭くやうに涙を拭く。

かる　勘平さん、わたしもお前に別れて、一日なりとも廓へ行て、勤め奉公が、どうしてならうと思はしやんす。側へ死んでもならぬ事でござんすが、その辛い悲しい身の上になるも、皆お前の爲と思へば、わたしや涙一滴も

こぼさず、嬉しう思うて、あの才兵衛さんの所へ行く程に、必らず〳〵、憎い奴ぢやと腹立てて下さんすなえ。

才兵　わしがその心ゆゑ、お前から證文は取りませぬ。主の爪判で、頼み證文を取つたばかり、百兩の金は渡しました程に、さう思うて下さりませ。もしもの事があつて主を外へやると云ふ事なら、又わしが來て話しませう程に、さう思うて下さりませ。ドレ、駕籠を呼んで乘せうか

ト門口へ出て

先刻の駕籠の者は居ないか。駕籠屋々々々。

ト下座より以前の駕籠舁き二人出て來り

駕屋　ハイ〳〵、待つて居りました。

同　サア〳〵、お召しなされませ。

才兵　よし〳〵、サア、幸ひあすこの、わしが乘つて來た四つ手駕籠に乘つて、ちつとも早く行かうぢやアねえか

かる　アイ〳〵、勘平どの、なぜに其やうに俯向いて居やしやんして、物云うては下さんせぬぞ。そんならわたしが廓へ勤め奉公に行く事は、悪うござんすかいな。コレイナア、側へわたしは君傾城、辻君の身となつても、お前を元の侍ひにしたいと思ふが、女房の情。折角願ひが叶うても、まさかの時にお形見の、あのお刀がない時はお前の武士は立つまいぞえ。それぢやに依つて、わたしや勤めをする程に、可哀い事ぢやと思うてなら、早う以前の侍ひになつて、よい事聞かせて下さんせ。わたしやもう行くぞえ

ト立つて門口へ出ようとして立ちどまり、勘平に抱きつく。才兵衛、門口の柱を撫でゝ居る。奥より與市兵衛、傳四郎、出て、直ぐに與市兵衛は勘平を引寄せる傳四郎はおかるを引きつける。

與市　動きやアがるな。

傳四　斯うしてうしやアがれ。

勘平　こりや勘平を、どうさつしやる〳〵。

與市　どうするとは、うぬはマア野太い野郎ぢやアないかコレヤイ、いま奥で聞けば、おれが娘のアノおかるを、なんだ、廓へ勤め奉公にやると事か。コレヤイ、おれが娘を賣る事ア、うぬに賣られて堪るものか。賣つてよけりやア現在の、お父様のこの與市兵衛さまが、お娘御様をばお賣りなさるゝワ。ならないぞ、賣らせる事はならないぞ。うぬにやア云ひ分がある程に、そこにうしやアがれ

ト勘平を突き倒して

コレヤイ、一文字屋の才兵衛とやら、爰へうしやアがれ

才兵　わしが事かえ。

與市　うぬが事でなくつて、一文字屋才兵衛と云ふ女衒が二人あるものか。爰へ來い。

才兵　サア、爰へ參りましたが、女衒に何の用がござりますえ。

與市　われが才兵衛か。あのおかるを抱へて行くか。親も亭主も得心せぬ女を、廓へ買つて行きやア、わりやア引き切りになるが合點か。引き切りは引廻しだ程に、覺悟してけつかれ。

才兵　有やうはそれを、わしやア知りません。成る程、足なしの奉公人は引き切り、ほんに引き切りは引廻しになりましたものを、わしも身を知らぬ者でないか。

與市　百兩の金、勘平が所から取つて、おかるはおれに渡して行け。われに渡してやる事はならないぞ。

才兵　そりや又、どう云ふ筋でえ。

與市　知れた事だ。亭主も知らず、親も得心せぬ女だに依つて、それで渡す事はならないワ。

才兵　おきやアがれ、その位な事で重しをかけたればとてその手を喰ふやうな才兵衛ぢやないよ。この奉公人にやア譯があつて、男づくで抱へたおかるどん、この才兵衛が方へ、慥かな頼み證文を取つて置いたからは、どこへ出ても、グッとでも云はせるものか。おれが連れて行く女に、指でもつけると只は置かないぞ。サア、云ふ事があるなら云へ。聞くべいか。

與市　そんなら、この女には慥かな證文があるか。

才兵　書付けがなくつて、百兩と云ふ金を貸す親方があるものかな。

與市　エヽ、忌々しい。

才兵　けちをつけてくりやるな。

傳四　この女はやる事はならないぞ。

才兵　このぱつためは、何を吐かす。

傳四　金づくなら、金に明かして、九太夫どのゝ妾にせにやアならない。おかる來い。

トおかるを引立てる。才兵衛、傳四郎を見事に投げ出して、起き上がる所を煙管にて叩きのめし

才兵　此べら坊め、女を買ふのは、女衒の商賣だワ。素人の際に何を吐かすのだ。商賣の邪魔をしやアがると、直ぐに預けて代官所へそびき出すぞえ。默つてうしやア

がれ。

傳四　とんだ目に會はしやアがつたな。

才兵　サア、おかるどの、歩ばつせえ。

與市　待て。

才兵　まだ云ふ事があるのかえ。

與市　われが方に賴み證文があれば、おれが方にも一札がある。滅多にやる事はならねえぞ。

才兵　コレ〳〵、おかるどの、親御の與市兵衞どのゝ方にも、一札があると云ふ事だが、證文が二枚になつちやア吟味になるが、どう云ふ事でごんすぞ。

かる　ちつとも大事ない程に、わたしを早う連れて行て下さんせ。

與市　待ちやアがれ、太い女ぢやアないか。先刻おれに渡した書付けは何だ。

かる　サ、それはな。

與市　コレヤイ、才兵衞の、女房を勤め奉公に抱へるにやア、亭主の去り狀を取るが、お定まりぢやアないか。去り狀がなくつても、その女を抱へるのか。

才兵　サア、その去り狀は。

與市　うなア大方にた山の、女衒であるべい。親方へ取つて置いた、この書き物をよく聞きやアがれ。

ト懷より最前の書付けを出して

「勘平どのと申し交し候へども、さつぱりと緣切り候ふ上は、最早夫婦にては御座なく候ふ、如何やうな事御座候ふとも、少しも御苦勞なさるまじく候ふ、おともじ樣へかる」……この書付けがあつても、おかる、わりやア勤め奉公がなるか。滅多に廓へ行く事はなるまいぞ。

かる　その書付けがあればこそ、わたしが廓へ勤め奉公に行ても、勘平どのゝ耻にはならぬ書付けぢやわいなア。

與市　ヤ、さう吐かしやア、ドレ〳〵、勘平どのと申し交し候へども、夫婦の緣を切り候ふ上は、最早夫婦にては御座なく候ふ。そんなら夫婦の緣を切つたと云ふ、この書付けがあれば、勘平どのとは赤の他人か。

かる　連れ添ふ夫の手を切つて、わたしや勤めをするわいなア。

與市　おきやアがれ。まだその上に、如何やうな事御座候ふとも、少しも御苦勞なさるまじく候ふ。そんならこの與市兵衞にも、構づてくれるなと云ふ書付けを取つて置いたは、こりやア娘に、イカサマにかけられたか。エ、

かる　父さん、堪忍して下さんせ。才兵衞さん、あの書付

けが、父さんの方へ渡してござんす程に、氣遣ひなしに
わたしを連れて行て下さんせ。

才兵　成る程、如才のないあの書付け。ソシ、親仁さん、與市兵衞どの、その書付けを大事にかけて、いつまでも持つてござりませ。成る程、そりやア糙かた書付けだね
イヤ、恐れ入つたものサ。

與市　おきやアがれ

才兵　サア、駕籠に乘らつせえ、

かる　そんならモシ、勘平どの。

才兵　ハテサテ、又わしが所で逢はれますわな。

ト無理やりにおかるを駕籠に乘せる。駕籠舁き、駕籠を舁き上げる。

かる　勘平どの、必らず煩らうて下さんすなえ。

ト駕籠へ乘る。駕籠屋擔ぐ。傳四郎、立ちかゝつて、その駕籠をとかゝるを、才兵衞、傳四郎を投げ退け、駕籠の垂れを下ろし

才兵　サア、駕籠をやつて下つし。

ト三重になり、駕籠を先に立て、才兵衞、花道へ入る直ぐに與市兵衞、勘平を引寄せ

與市　コレヤイ、うぬゆゑに、たつた一人の娘を道なしにしてしまつたからは、うぬもモウ爰の内にやア片時も置かない筋骨を拔いて叩き出す奴なれども、奥に大事の話しがあるに依つて、その分で追ひ出してくれる程に、どつちへなりともうしやアがれ。

ト勘平を引立て、門口へ突き出し、直ぐに門口を締めて、傳四郎に目くばせ。

サア、これからは、わしが内は九太夫さまの内も同然。おつかい晴れて、なんと二階で酒でも飲むべいか。

傳四　それ／＼、これから百年も爰の内に、九太夫どのもわしも世話になるでござらう。

與市　そんなら早く、ソレ、合點か。

傳四　合點だ／＼。なめら三寶。こんなに日が暮れても、奥へ火を灯さぬに依つて、何だか知れるものぢやアない

與市　危ないぞ／＼。こなたは早く、ソレ、酒屋へ行て、酒五升と、蠟燭を二百が買つて來てな。合點か。

傳四　合點だ／＼。

ト暗闇の思ひ入れにて、暖簾口より傳四郎、九太夫を連れて出て來る。此うちに與市兵衞、探りながら奥へ入る。此うち門口に勘平、窺つて居る。傳四郎、門口をソツと明けて、九太夫を表へ出す。勘平、九太夫と

顔見合せ
勘平　九太夫か。
九太　わりや勘平か。
勘平　待つて居たワ。
ト直ぐに差して居る刀にて疊みかけて切りつける。立廻りにて難なく九太夫を切り殺し、止めを刺す。この物音に驚ろき傳四郎、門口へ出て、樣子を見て
傳四　ひと殺し〳〵
ト云ひながら逃げて下座へ入る。これより勘平、九太夫が死骸をいろ〳〵改めて、門切手を尋ねる事よろしくあつて
勘平　ヤ、、、こりや九太夫は手にかけたれども、所持せし師直が屋敷の、門切手がないと云ふは心得ぬ。そんなら早、人手に渡したるか。切手なければ、九太夫を手にかけたるこの勘平が、定九郎へ云ひ譯は立たざるか。ホ、、ホイ。
ト當惑して、持つたる刀を取り直し、我が腹へ突ッ込んで、直ぐに刀を引き廻す。此うちに與市兵衛、後よりソロ〳〵出て來り、苦しんで居る勘平を引寄せ
與市　動きやアがるな、大泥坊め。うなアよく師直どのゝ門切手を取らうとて、この與市兵衛が匿まつて置いた、九太夫が手にかけやアがつたな。コレヤイ、どうでくたばらうぬが命、よくおれが見せてやる。コレ、爰におれが斯うして持つて居るこの門切手。
ト切手を出して、勘平を見せる。勘平、跳ね起きて
勘平　ナニ、これが敵師直が門切手とや。
與市　これが欲しいか。
勘平　その門切手を。
ト苦しみながら、詰め寄る。
與市　なんぼ欲しがつても、もう叶はぬワ。サア、尋常にくたばつてしまへ。
ト勘平を蹴倒す。花道にてバタ〳〵の音するゆゑ、與市兵衛、驚ろき、頬冠りをして、直ぐに有り合せたる螢籠を持つて花道へかゝる。向うよりバタ〳〵にて定九郎、以前の形にて、走り出で來て、花道にて與市兵衛と行き合ひ、ちよつと思ひ入れあつて、與市兵衛は花道へソロ〳〵入る。定九郎、舞臺へ來て、勘平が死骸へ躓き、勘平が死骸を猪の心にて探り、恟りして
定九　こりやコレ、慥かに切られた死骸。何者なるか。コリヤ〳〵、氣をしつかり持つたり〳〵。

勘平　ト呼びかける。勘平、氣の附きたる思ひ入れ。
定九　貴殿は定九郎どのか。
勘平　ヤ、さうお云やるは早野勘平。
定九　遲かつた〳〵。
勘平　コリヤ、勘平には切腹をおしやつたか。
定九　九太夫ゞ手にかけたれども
勘平　して門切手は。
定九　その門切手は。
勘平　なんと〳〵。
定九　與市兵衞、奪ひ取り、今この所を立退いた。
勘平　ヤ、、すりやその門切手を與市兵衞が、奪ひ取つて立退きしか。ホイ。
定九　九太夫ゞ手にかけし云ひ譯に、勘平がこの切腹、
勘平　コリヤ。して、その與市兵衞は、いづくへ行きしぞ。
定九　その行く先は知らねども
勘平　その行く先を知らぬとか。
定九　道野邊の螢ばかりを知る邊にて
勘平　獨りぞ出づる夕闇の空。
定九　その目印は螢籠。
勘平　すりや、その螢の灯影を知る邊にて
定九　早う。
勘平　ソレ。

ト行かうとする。後より傳四郎、出て來り、やらぬワと、定九郎に組みつく。立廻りにて見事に投げ退ける。勘平、傳四郎が上に乘りかゝり、刀を右へ引き廻す。定九郎は尻をからげ、一散に花道へ走り入る。勘平、思ひ入れあつて、この見得にて道具廻る。大夕立・大雷の音する。

本舞臺、三間の間、松並木、方々に繩を引き渡して掛け稻かけてあり・方々へ据ゑ物の龍の髭を直し、これに螢數多群れて居る。五段目の飾りつけ、誂らへの通り、雨車の音にて道具納まる。

ト獵人の仕出し出て、何かせりふあつて入る。雨車になり花道より與市兵衞、尻端折り、傘をかつぎ、螢籠を持ち出て來る。揚げ幕の内にて

定九　オヽイ〳〵、親仁どの〳〵。

ト呼びながら、バタ〳〵にて定九郎、尻をからげ、破れ傘をさして出て來る。直ぐに與市兵衞が側へ來て

親仁どの、あれ程に呼ぶに、こんたの耳へは入らぬか。



嘉永五年三月中村座上演



坂東彦三郎の定九郎　　中山市藏の與市兵衞

連れになりませう程に待たつせい。
與市　此べら坊め、夜々中連れにならうと云つ　ればとて、どこの牛の骨か馬の骨か知れもせぬ奴、連れにされるものか。
定九　さう云ひなさんな、連れにして隨分大事ない者だに依つて、呼びかけたのサ。親仁さん、待つておくれ。
與市　ハテ、知れた奴ぢやアない。マア、うぬが面をよく見てやるべい。
　ト螢籠を上げて、定九郎をよく〳〵見て
ヤア、お身樣は九太夫どのゝ悴かぢり、定九郎どのぢやアござらぬか。
定九　マア、そんな者サ。連れにならう程に、與市兵衞、待ちやれ。
與市　イヽヤ、おらアお主達を、連れにする事は否だ。
定九　なぜこの定九郎が連れにならないのだ。
與市　マア、おぬしア鹽冶の浪人、今ぢやア宿なしも同然の身の上ぢやアないか。この與市兵衞は百姓でも、しつかりと持つて居れば身が重いゆゑ、胡散臭いお主達が、どうして連れになられるものか。一人で夜道が怖くば、おれが後から付いて來やれ。連れにする事は否だ。

定九　そんならどうでも。
與市　くどいわえ。
定九　待て、一緒に行くべい。
與市　さう吐かしやア、うぬをこの與市兵衞が斯うして置いて、連れにしべい。
　ト傘を摑んで、定九郎を花道へ叩き据ゑて、直ぐに傘を擔いで舞臺へ來る。定九郎、體の痛む思ひ入れあつて、やう〳〵起き上がつて與市兵衞が後を追ひかけ、舞臺へ來り、與市兵衞が襟を取つて引き戻す、與市兵衞、力にまかせて定九郎を捻ぢ倒し、直ぐに引寄せて
太い野郎めぢやアないか、誰れだと思ふ、大崎の與市兵衞だワ。うぬがその食ふや食はずにけつかる浪人の痩せ腕で、この與市兵衞をどうせうと思やアがる。うぬ等が相手になるやうな親仁ぢやアないぞ。サア、重ねてからこんなてんがうするな。
　ト定九郎を二三間抛り出す、定九郎、起き上がつて
定九　思ひの外、力の強いあの親仁め。よくこの定九郎をこづき廻したな。どこがどこまでも與市兵衞、われに付いて行つて、受取らにやアならぬ物がある程に、サア親仁、われが懷に隱して置いた物を早く出しやれ。

與市　ア、聞えた。そんならわりやア追ひ落しをするか。ヤレ、恐ろしい野郎だな。

定九　サア、この定九郎に渡さないと、たつた今、ぶッ放すぞ。

ト拔いて切りつける。與市兵衞、その手をしつかりと取つて、刀を引ッたくり、定九郎に突きつける。定九郎、驚ろいて後へ寄る。

與市　寄りやアがると、これだぞ。

定九　危ないワ／＼。

與市　サア、これが怖かア、爰か、直ぐに、どつちへなりともうしやアがれ。

定九　エヽ、口惜しいわえ／＼。何と云つても、うぬにやア、力があるし、おらア弱し、エヽ、うぬをなア。

與市　寄りやアがると、これだぞ／＼。

ト刀をピラ／＼して見せる。其うちに大雷鳴る。與市兵衞、これに恐れて刀を投げ出す。定九郎、その刀を取つて手ばしこく切りつける。與市兵衞、立廻りにて逃げ廻るうちに、懐より以前の切手を落す。定九郎、ちやつと取上げ

定九　ヤヽ、これこそ師直が屋敷の門切手。

與市　それを。

定九　ドツコイ、この切手が手に入るからは、死にさがりめ、觀念ひろげ。

與市　うぬ、その門切手を渡してよいものか。由良之助が企みを、師直どのへ注進する。先づその切手を渡しやアがれ。

定九　親九太夫に惡事を勸めし老ぼれめ、助け置かれぬ、くたばつてしまへ。

トこれより立廻りあつて、ドッコイと留まる。誂らへの鳴り物になり、見ごとなる立廻りあつて、トゞ定九郎、切手を咬へて、與市兵衞を扶り殺す。よきキッカケに早笛になり、ドンと鐵砲の音して、後の稻村パッと燃え上がる。定九郎、ホッと思ひ入れ、チヨンと木の頭、

危ない事の。

トよろしくこなし。切手を戴くを、キザミにて。

ひやうし　幕

鶴見一里塚の場
光明寺引揚の場

役名――大星由良之助。大館左馬之助。大鷲文吾。千崎彌五郎。大星力彌。羽生屋金五郎。石場甚藏。下女、おりん。平右衛門女房、お北。

本舞臺、三間の間、うしろ一面の松並木、大盡柱、見附け柱、松の立ち樹、眞中に草土手、これに、大榎を取りつけ、日覆より、同じく吊り枝、舞臺一面に枝葉茂り、この下に雲助二人、煙草をのんで居る。すべて、鶴見一里塚の景色。てんつゝにて、幕明く。

權　コレ、八、去年から今年へかけて、どこともに滿作と見えて、田舍同者が大分出たぢやアねえか。

八　併しいくら出ても、足が達者だから、おいらが爲にやア何にもならねえ。兎角江戸衆でなけりやア錢が取れないよ。

權　江戸衆と云やア、おいらが御領の殿師直さまが、鹽治判官さまとやらと喧嘩をなされて、疵が付いたと云つて、御領内までの騒ぎ。なんと難儀な事ぢやアないかの。

八　それに又、判官さまは切腹の上、お國までお取上げだに依つて、もし鹽治浪人が江戸へ出らるゝなら、氣を付けろと、お役人高仲太さまの云ひ付けで、今日はまた石場甚藏と云ふ人が、女中を連れて通る筈。この手拭を屆けてくれろとお頼みゆゑ、先刻から待つて居るが、もう見えさうなものだが。

トてんつゝになり、駕籠屋二人、四つ手駕籠を舁いて出て來る、この駕籠に、甚藏、股引、脚絆、三尺帶、旅形、侍ひの拵らへ、駕籠に鶴見の饅頭を吊し、乘つて出て

甚藏　コレ、駕籠の衆や、女中連れは大分後へ下がつたぢやアないか。

駕屋　あなた方は、浦島觀音へ御參詣なされましたから、ちつと間がござりませう。

甚藏　おれがこの饅頭を買つて居たうちも、餘ッぽど手間取つたから、もう見えさうなもの。時に、何時だの。

駕屋　生麥で八ツを聞きましたから、もう半になりませうか。

甚藏　道理で腹の虫が時計を打つやうだ。なんでも川崎へぼツ付いて、萬年屋か新田屋で、こつそりとやらかさうと思つて、先へ乘り拔けて來たが、所詮川端までは心元ない。マア、この土產の饅頭で補つて置かう。

ト駕籠より饅頭を出して喰ひながら

駕籠の衆、靜かにやつて下さい。

駕屋　棒組み、やらかすべい。

同　合點だ。

トてんつゝにて、本舞臺へ來る。

八　小安のせなア、精が出るの。

兩人　マア　のんで行きやれな。

駕屋　どうで連れ衆を待ち合すのだ。のんで行くべいか。

同　一服のむべい。下ろしやれ。

ト兩人、駕籠を下ろし

駕屋　どうだ、なんぞ好い登りでもあると云ふ噂はないか

八　二十人連れの太々講が來ると聞いたに依つて、そこでおいらは待ち合せて居るのだ。

權　川端まで、なんぞ旦那の荷はあるまいか。

駕屋　旦那の荷は、雨掛けの挾み箱があるが、神奈川臺の熊が來る筈だ。おぬし替つてやりやれ。

甚藏　そりや丁度よい。てまへ、迎ひながら、生麥あたりまで行つて見て來てくれ。女中駕籠が一挺、その駕籠に美なるものが付いて來る筈だ。早く行つて見てくりやれ。

權　畏まりました。

甚藏　コレ〳〵、例へ人が替つても、彼方で定めた通り、一錢も增しは出さないぞ。

權甚　それは承知でござります。

藏權　コレ〳〵、そして石見五郎太夫と云ふ繪符があるから、直に知れよう。早く行きやれ。

權　合點だ。

ト權、向うへ駈けて入る。

八　今日爰をお通りと承りまして、お待ち申して居りました。

甚藏　コレ、なんぼおれを待つて居ても、京三界から女を連れて、覺えがなくつて道中がなるものか。儘にしろ儘にしろ。

八　ハテ、氣の早いお侍ひ樣。わしはこの手紙を頼まれました。

ト煙草入れから手紙を出す。

甚藏　なんだ手紙を頼まれた。そんならそれを早く出せば

八　いゝに。あつたら肝を冷やさせた。師直さまの御家來、平林嘉仲太さまからの御狀。

甚藏　ドレ。

ト取つて

なんだ、清水逸學どのへ平林嘉仲太。この手紙を逸學へ屆けてくれいと云ふのか。

八　左樣でございます。私しどもは師直さまの御領の百姓どもでございますゆゑ、嘉仲太さまのお頼みで、あなたのお下りをお待ち申して居りました。わたしが持つて參りたいには先が知れず、もしお前を見逸くらうかと、思ひがけない苦勞を致しました。

甚藏　さうであらう。この清水逸學は、故あつて町人になつて居るゆゑ、知らないは道理、落ち付く所は石町の貸座敷。早速身共が屆けるであらうと、嘉仲太どのへ申せ。

八　畏まりました。

駕屋　サア、旦那、お乘りなされませ。

甚藏　おれは乘り付けない所爲か、駕籠で搖られると腹ばかり減つて、どうも切なくつてならない。これからアノ乘り物に付いて來る、女中を乘せてもらはう。

駕屋　そんなら、お連れの見えるまでは、この一里塚の後で投げべいぢやアないか。

同　ちつとの間にも、やらかしたがらア。

八　莨をのんで居ようより、五六文おッ付けべい。旦那、今のをお頼み申しましたぞえ。

甚藏　合點ぢや。

駕屋　サア、來やれ。

ト三人、一里塚の蔭へ入る。甚藏、花道の方を見て

甚藏　もうアノお石さまや、おりんは見えさうなものだ。待つ身になるなとは、よく云つたものだ。兎角ブラリとして居ると、口淋しくなつて來る。折角江戸土產にせうと思うて、買つて來た鶴見の饅頭、駕籠の中で段々喰つて、たつた二つ殘つて居る。これを土產に持つても行かれず、いつその事に喰つてしまつたがいゝ。それ〳〵。

ト駕籠より、饅頭を出して、捨ぜりふにて、無性に喰ひ、咽喉に詰つた思ひ入れ。てんつゝになり、花道より、役の者、紺の看板、脚絆、草鞋、竹笠にて、御兎駕籠を舁いて出る。後より、おりん、練りの甲がけ脚絆、草鞋にて、菅笠を持ち、浴衣の上へ上張りにて出て來る。供男、油單のかゝりし兩掛けの挾み箱を擔ぎ出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。

りん　ヤレ〳〵、しんどや〳〵。お前、大きに大儀であつたの。コレ、甚藏どの、大事のお主を捨て置いて、先へ來ると云ふやうな事があるものかいなア。

ト甚藏、いろ〳〵苦しむ思ひ入れ。

エヽ、氣味の悪い、なんの眞似ぢやぞいの。阿房も大概にさんせ。

ト突き飛ばす。これにて、甚藏、落ち付いた思ひ入れ。この時、以前の文を落す。

甚藏　コレ、おりんどの、よく突き飛ばして下さつた。おれが爲には命の親だ。

りん　なんのこつちやいな。

甚藏　なんのこつちやアどころか、米饅頭が咽喉に詰つて、既に斯うよと見えた所であつた。忝ない〳〵。

りん　甚藏この、嗜ましやんせ。折角お土産に買うたおまんを、喰うてしまふと云ふ事があるものかいな。御新造さまは旅疲れで、ようおよつて、お目が覺めたら告げるぞえ。

甚藏　コレ、おぬしはなぜそんなに野暮だ。ちつとの事も告げる〳〵と、山科から爰まで幾泊り、告げられたか數が知れない。又この饅頭の事を云はうとは、あんまりだ。

そしてマア、この饅頭が、どうして江戸へ土産になるものだ。おぬしは江戸は初めだから知るまいが、大久保鳥飼、鹽瀨名荷屋、今澤鯉屋、饅頭の名物はいくらもある。それに優つた饅頭は、おぬしのむつくりとしたこの米を。

ト抱き付きにかゝる。

りん　エヽ、おかしやんせ、泊り〳〵であのやうに恥しめても、聞分けのない。石町へ着いてなら、その時どうなとせう程に、早う御新造樣に追ひ付いて、氣を付けて下さんせ。

甚藏　そんなら石町へ着いたなら

りん　わしに如才はないわいな。

甚藏　必らずその口を忘れまいぞえ。駕籠に乘つて後から來やれ。今のを忘れまいよ。

ト此せりふを云ひながら下座へ入る。おりん、後を見送り

りん　アヽ、モウ、うとましい事ではあるぞ。好い、機嫌な人ぢや。殿樣不慮の御最期より、伯耆の國をそこ〳〵に、泣き別れしてやう〳〵と、馴染みの付いた山科を、また振捨てゝ名を聞きし、吾妻へ下ると云ふは、神でも御存じあるまい。これ程の事をさのみ苦にもなされぬ旦那方、

もしや内々の企てがある事やら。此やうな事云うて居る間に、お駕籠へ追ひつきませう。

ト云ひながら、笠を持つ。ト以前の手紙をちよつと見付け、取上げて

ハテ、此やうな書き物はない筈ぢやが。

トよく〳〵見て

「清水逸學どのへ平林嘉仲太」……清水逸學と云ふは、慥か師直どのゝ御家人、平林嘉仲太と云ふ名も、どうやら聞いたやうな。何にもせよ、中を見たなら、樣子が知れう。それ〳〵

ト封を切つて

何々「飛札を以て申し入れ候ふ、由良之助儀、内々師直公へ恨み奉る由、相聞き候ふ打捨て置き難く候ふ間、その儀企て候はゞ、急々御知らせ然るべく候ふ、左候へば近々屋敷替へ御座候ふ間、取急がせ申し候ふ」さては清水逸學と云ふ者が、姿を替へてしめ込みしか。それに又近々屋敷替へがあると知らせの狀。思ひがけなう拾つた手紙。この上もない敵の内通。お石さまへお目にかけうそれ〳〵。

ト行かうとする。最前より、雲助三人、出かゝり居て

この時、バラ〳〵と取卷き

三人　女中、待ちやれ。

りん　エ、恟りしたわいな。何の用でござんす。

八　何の用とは手の惡い。こなたを乘せろと、お侍ひのお頼みだワ。

駕屋　飛切り仕事を打捨てゝ、先刻から待つて居たのだ。

駕屋　駕籠に乘つて

三人　行かつしやい。

りん　イヤ、駕籠よりは歩く方が勝手。氣の毒ながら、これから去んで休みやいの。

八　オヽ、歸れなら歸らうが

三人　色を付けて貰ひたい。

りん　色を付けてと云やるは、酒でも呑みたいと云はんすのか。先の宿まで付いて來て、貰うてやらうわいなア。

八　酒手と云つて、錢金は要らぬワ。こなたの懷中にある物を

三人　置いて行け。

りん　わしが懷中にある物とは。

八　内は何か白紙に、ベツタリ書いた樣參る、嘉仲太さまから頼まれたこの狀を。

りん　ト取りにかゝろ。おりん、その手を取つて
八　この手紙を頼まれたと云やるからは、さては其方は師直さまの御領の百姓、お旦那方の密事の御狀、われに渡してなるものか。
三人　キリ〳〵そこへ置いて行け。
りん　女子と思うて嬲らんすか。思ひがけなう手に入つたこの手紙、渡してならうか。早う通しや。
八　さつても手強い京女郎。東男が新手を出して。
ト狀を引出す。
りん　さうはならぬ。
ト立廻りにて、引ッたくり、口へ啣へる。
ト二人、息杖にて打つてかゝる。おりん、八を枷に身を開くゆゑ、兩人、八を打ちのめす。八、ウンと倒れる。兩人、恟りするを、おりん、兩人を投げ退けて、キッと思ひ入れ。これより、摺り鉦入りの合ひ方になり、狀を枷に三人、いろ〳〵タテあつて、トゞおりん兩人を息杖にて當てる。兩人、見事に舞臺へ倒れる。おりん、狀を取上げ
りん　忝ない。
ト押戴き、ゴン〳〵になり、下座へ入る。この鳴り物にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、うしろ玉椿の垣。この前五輪の大石塔、石の玉垣、石の香爐、花瓶、兩方に白張りの高提灯、結構に仕立て、壇石に、師直の本首を出し、上の方に、由良之助、力彌、白鉢巻、摑き髪、羽織野袴、胸當にて、いろはの合ひ印を腰へ差し、座して居る。下の方に、左馬之助、彌五郎、文吾、白袢纏、黒羽織にて、股引、胸當、鉢巻を締め、忠の字の提灯を持ち、左馬之助は大きな掛矢を持ち、何れも合ひ印を腰へ差し、座して居る見得。谺の合ひ方にて道具納まる。
由良　今日は如何なる吉日にて、日夜忘れぬ亡主の怨敵、高武藏守どのゝ館へ、易々込み入つて、年來の粉骨一時に事成り
彌五　胸も晴れ行く有明の、月に面も白々と、笑を含みし惣人數。
力彌　伯州離散の砌りより、妻に放れ子に別れ
文吾　親兄弟もなんのその、岩をも通す桑の弓、矢竹に逸る一味の義士。

左馬　義は金鐵より猶重く、十八貫目のこの掛矢、御恩を頭に振り上げて、敵の門を打ち破り、高祖に見えし樊噲が、忠と孝との兩國橋、いろはによれど散りぬる命。

由良　あの世は誰れか常ならむ、うゐの奥山死出の山、今日ぞ越え行く人々は、ものゝ數にはあらねども、大星由良之助良金。

力彌　同苗力彌良種。

左馬　大館左馬之助正信。

文吾　大鷲文吾定景。

彌五　千崎彌五郎恒利を始めとして、笹野、小鹽田、不破岡部。

文吾　織部、竹森、館森、原、小寺を先として、一味の人數四十餘人。

左馬　この光明寺の庫裡めんぞう、本堂までも居並んで靈牌への燒香を相待ちまする。殘りの義士をこれへと申しませうか。如何計らひませうな。

由良　由良之助、存ずる胸ござれば、殘りの人數は矢張り其まゝ差置かれい。亡主の墳墓へ斯くの如く、敵の首級を手向ける上は、直ぐさま本堂へ佛參なし、燒香の儀は皆それ／＼に申さるゝでござらう。忠に秀る其許を始め千崎大鷲大星親子、亡主へ禮拜いたせし上にて、殘りの人數を、呼び出しまするでござらう。

ト平舞臺へ下り、平伏する。これに續いて、皆々下りて威儀を正す。由良之助、石塔に向ひ

淸光院殿へ申し上げ奉りまする。さる管領饗應の折柄師直が無禮緩怠、止む事を得ず刃傷に及ばれしに、敵はやう／＼擦り創、殿はやみ／＼御生害と、承りし時のその無念さ、いかで亡主の怨敵たる、師直を討取らんと、本意にあらぬ天を戴き、月日に恥づる義の一字を重んじ、人に笑はれ誹られて、伯州を離散なし、この年月の艱難も、この首級一つ取らん爲め。老いたるを捨て、若きも先立つ、心を碎きし甲斐あつて、今ぞ敵師直が首を供へ奉る。誠に御受納下し置かれませう。

左馬　由良之助どの、さぞ殿にもお喜びでござらう。併しながら、この忠義を殿御存生の御馬前にて盡しなば、如何ばかり御賞美あらんと存ずれば、其許の心中察し入る。親々先立て一滴も、涙をこぼさぬ左馬之助、この場の落涙留め兼ね、血汐に染みし兩袖を、絞りましてござりまする。

彌五　我れ／＼とてもその通り、かゝる大義を企つれば、

四十餘人の者どもが、遲れ先立つ者もなく、冥途の主人へ久々にて、お目見得を仕らうと存ずれば、思はずこぼす嬉し涙、必らず未練とお笑ひ下さるな。
文吾　彌五郎どのゝ云はれる通り、我れ人ともに寢食を忘れ、枕を泰山の安きにせず、艱難苦勞千辛萬苦も、この首一つに籠るぞかし。得難き首を得たると思へば、何れも。
左力　文吾どの。
文吾　斯樣な喜ばしい儀は
皆々　ござらぬわいの。
ト皆々泣き落す。力彌、立つて、師直が首を袖に包み其まゝ置く。
力彌　望み足りぬる上からは、功なり名遂げて身退く、臣等の習ひ、殘りの人數諸ともに、死出の旅路の用意いたさん。
文吾　尤もなる力彌どのゝ一言。一刻も早く本堂へ引取り一味の義士を呼び出し、燒香召さるがよろしくござらうサ、お立ち召され。
左馬　由良之助どの。
由良　イヤ／＼、一番の燒香は、大館左馬之助どの、先づ先づお先へ。
左馬　こは思ひがけなき由良どのゝお詞。其許こそは御家老職、殊に一味の惣大將。
由良　いやとよ、左馬之助どの、我れを始め、四十餘人の人人、目ざす敵は只一人、我れ討取れと床下天井、思ひ思ひに尋ぬれど、行くへ知れざる高師直、思ふ敵をば討ち洩らし、皆々切腹と存ぜし所を、探し出されし其許は、よくも故殿の御意に叶ひしと存ずれば、お羨やましく存ずる。さればこそ何れもが、本意を遂げしは其許がお庇、何れを何れ忠義に高下はござらねど、師直を突き留めしは、忠の內の誠忠、一番の燒香は左馬之助どの。千崎、大鷲、なんと左樣ではござらぬか。
文吾　御尤もに存ずる。
彌五　誠ある由良之助どのゝお詞。
左馬　四十餘人のその中にて、一番に選り出されしは、この身の冥加、恐れ入つてござれども、この儀ばかりは幾重にも、御容赦下されい。
由良　戰場ならば一番鎗、今日の燒香が、五百石の加增も同然ゆゑ、殿の口眞似をも致す、某が詞背かるゝか。
左馬　イヤ、全く持ちまして。

由良　然らば燒香召さるゝか。
左馬　さほどまで御意なさるゝ事ならば。
由良　承知召されたか。
左馬　有り難う存じまする。
由良　まつた二番の燒香は、これなる位牌。
　ト懷中より、位牌を出す。
皆々　その位牌とはな。
由良　戒名は刃樹院僧榮信士、俗名寺岡平右衞門。古殿切腹の折柄、事の急を告げしめんと、鎌倉より伯州まで、時限りの飛脚を勤め、五臟を揉み切り卽死なせしは、下部に似合はぬ忠義の心底、勘平始め先立ちし面々は、討死同然。皆それ／＼に燒香させ、足利の討手を引受け、繩かゝるとも切腹とも、某が下知を待たれよと、徒黨の人數へ觸れ召されい。
左馬　然らばこれより本堂にて、手向けの燒香相濟まば、庫裡方丈に屯ろなし、足利の討手を引受け申さん。
由良　某は師直が首級を携へ、心靜かに殿り致さん。方方は我れに先立ち、本堂へ引取り召されい。
皆々　心得てござる。
彌五　皆それ／＼に手配りなし。

文吾　足利の討手を待ち申さん。
力彌　猶も一味の生死は一緒。
左馬　何れもお來やれ。
皆々　合點だ。
　ト時の鐘になり、左馬之助、彌五郞、文吾、力彌、下座へ入る。由良之助、位牌を懷中なし、心靜かに立ち上がる。この時、石塔の蔭より、金五郞、つゞれの上に菰を着て、頰冠りをして出て來り、石塔の上の首を抱へ、花道の方へかゝる。由良之助、金五郞を見て、ツカ／＼と寄つて金五郞を引戾す。金五郞、菰を刎ね退け、行かうとするを引戾し、首を枷に、兩人、ちよつと立廻りあつて、トヾ首を引き合ひ、墓の上へ置くとこの首消えて、煙硝火パッと立つ。兩人石塔の兩方へ別れ、よろしく見得。
　謠〽眠りの夢は覺めにけり／＼。
　ト大ドロ／＼にて、心と云ふ字を日覆へ引上げる。この途端に、よろしく道具、ぶん廻す。
　本舞臺、三間の間、正面、荒れたる辻堂に、お北・朱鞘の大小に菖蒲革の羽織を結び付けて、地藏尊の

前に位牌を置き、この石壇に凭れ、眠つて居る。矢張りドロ／＼にて、日覆より、また心と云ふ字を引き下ろす。お北、目を覺まして恟りして平舞臺へ駈け下りあたりを見て、キツと思ひ入れ。ドロ／＼打上げる。よろしく道具納まる。

きた　ヤ、、所は御菩提所光明寺のお石碑の下、御家老由良之助どのを始め、四十餘人の一味の義士、この年月の仇敵、師直が首を取り、亡君の靈前へ供へ奉り、一番の燒香大館左馬之助、二番の燒香は夫平右衛門と、仁心深き由良之助さまのお詞、この上もない冥加ぢやと、喜んだる甲斐もなう、爰は戸塚の地藏堂、そんなら今のは夢であつたか。オ、／＼／＼……夢は五臟の煩らひとは云へども、夫平右衛門どのに別れてより、日夜忘れぬ亡君の仇敵、女でこそあれ夫の形見、斯う肌に引添ゆれば、取りも直さず足輕組、時限りの早打ちに、氣は張弓の弦切れて、空しくなりし夫の身の上、由良之助どのへお願ひ申し、せめて位牌をお供にと、心を盡すを神佛も感應あつて靈夢のお告げか、何にもせよ、稀代な事を見るものぢやなア。

トお北、位牌を持ちかへるを木の頭、キツと思ひ入れ

これをキザミ、　ひやうし、幕

石町貸座敷の場

役名――福島久右衛門實ハ大星由良之助。呉服屋、半助、道具屋、仲七、米蔵、時六。吉原の文藏、手代善九郎實ハ尾林六郎。石場甚藏實ハ横山伊藏。魚屋、吉五郎實ハ清水逸學。八百屋、五郎兵衛實ハ大鷲文吾。矢間妹、おりう、富森娘、おりん。由良之助女房、お石。平右衛門女房、お北。

本舞臺、三間の間、眞中より上の方、貸座敷床の間體、掛け物、花活けに白梅に赤玉椿をあしらひ、見附け好き所に、爐に釜を掛け、茶道具一式、旅簞笥飾り付け、炬燵に絹の蒲團かけてあり、下の方、まいら戸を建てたる玄關の體。橋がゝりの方に門口、この道具一面にどつさりと雪の降り積りたる體。幕の内より、掛取りにて、時六、やつし布子羽織の形にて、財布と帳面を持ち、半助、やつし半合羽の形

半帳面を持ち、仲七、半合羽、やつしの形。文藏、半合羽、股引の形にて、縄を岡持に入れ、前に置き、掛け硯と帳面扣へ、善九郎、布子羽織の形にて、革の金財布、束ね錢を二三把並べ、三百五百石五十七十二文一貫二百いち〳〵半紙の紙にて札を附け、拂ひの勘定をして居る。おりう、縞やつし、着流しの形にて、髪を結び、元結をかけて、風呂敷を前垂れにして、肩へ手拭をかけ、盆に茶碗を三つ四つ載せ持つて、茶を運んで居る。舞臺より花道へかけ、雪一面に降つて居る。合ひ方にて、幕明く。

りう　このマア雪に皆さん、ようござんしたなア。サアサア、お茶おあがりなされませ。

皆々　ハイ〳〵、有り難うござりまする。

りう　善九郎どのも、其やうに勘定ばかりして居ずと、ちつと手なりとあぶつたがようござんすわいなア。

善九　イエ〳〵、あの物堅い旦那の云ひ付けゆゑ、なんでも今日中に、殘らず買ひがゝりの拂ひをせねばなりませぬ。八百屋が七貫八百、肴屋が拾壹貫百六十四文。

ト算盤を置いて居る。

りう　成る程、此方の旦那様が、何事に依らず、お心置きなく御用を、善九郎々々々々と仰しやる程あつて、あなたがお堅い御氣性なれば、ほんに善九郎どのまで、其やうな堅くろしいとは、どうした事ぢやわいな。

善九　そりやアお前とてもその通りサ。アノ伏見の墨染とやらで、花をやられたその箱が、どう云ふ縁か、おれが旦那の福島久右衞門さまのお氣に入つて、今ぢやアお妾は、どうもならぬものでござります。

半助　左やう〳〵、ござりとは如才のない事でござりまする。御如才がないと申せば、善九郎さま、昨日のお使ひは、明日拂ひを致す程に、書付けを持つて參るやうにとの事でござります。いよ〳〵今日、お拂ひが出ますでござりまするか。

善九　左やう〳〵、何れも御存じの通り、おらが旦那は、この石町三丁目の貸座敷は借りてござれども、內證は金貸し。どうぞ年內に伊勢參宮の思し召しがあつて、急々にもお立ちなさるゝやうな事で、僅に今日、買がゝりの分は、端錢も殘らずお拂ひなさるゝ程に、銘々に書付けを持つてござつたら、サア〳〵、印形を出して、金子を

受取るがようござる。

仲七　これは／＼、有り難うございます。何れも、なんと思はつしやる。今月の晦日が大晦日、お留守の内でもよい事を、急にこの十四日に、お拂ひが出るとは、お堅い事ではござらぬか。

時六　それ／＼、よく／＼お勝手がよければこそ、お臺所は何時でも、米が山のやうに積んであり、澤庵漬の大根も、千四五百もお漬けなされたさうにござりますが、あれでは來年中お使ひなされても、大方三樽ばかり、再來年までござりませう。

半助　成る程、ある所へは滅多無理に好い事が參りまするものでござりまする。ほんに、内方の旦那は、吉原へお出でなされましても、先づ仲の町で御酒をお上がりなされまする と申しましても、女藝者が四組か五組、その上に太鼓持ち、山口巴屋の見世は、イヤハヤ藝者で坐る所もないやうでござりまする上に、お馴染の女郎衆へは、痒い所へ手の行き過ぎる程に、物日もお仕舞ひなされますれば、夜具も出來まする。敷初めもなされまする。なんと結構な事ではござりませぬか。

善九　左やう／＼、お金をお貸しなさるゝが御商賣で、お慰みが女郎買ひとお茶の湯。或る時は祭や俳諧。御酒は一滴も上がらねども、人にお振舞ひなさるゝ事がきついお好き。今日もお拂ひが濟めば、大方御酒が出やうから皆歸らずに、雪でも止めてござるがよい。

皆々　これは／＼、有り難うござりまする。

善九　サア／＼、書付けを出して、金を受取らつしやい。

半助　ハイ／＼、左樣ならば私しから、通ひをお目にかけませう。

ト通ひを善九郎が前に置き

ハイ／＼、呉服物が代金、〆め上げました所が十七兩三分二匁六分とござりまする。よろしうお願ひ申しまする

善九　ドレ／＼。

ト算盤を置いて

サア／＼、十七兩三分二百七十二文か。

半助　有り難うござりまする。

ト受取へ判を捺し、金を改めて受取る。

仲七　私し書付けをお目にかけまするでござりませう。

ト書付けを出し、おりうへ渡す。

りう　ドレ／＼、道具屋さんに書付けは、八百壹分と十二匁九步。

仲七　左樣でござります。二匁一歩の釣を持つて參りました。

善九　そんなら八兩三分渡しませう。この受取へ判を。

ト金を仲七に渡す。

仲七　有り難うござりまする。

時六　私しは昨日、お通ひを締めて上げましてござりまする。お米代金十四兩五匁四歩とござりまする。

善九　よし〳〵、五匁四歩とは五百三十五文。ソレ十四兩

ト金を渡す。

時六　有り難うござりまする。

ト受取へ判を捺す。

文藏　差詰め後は吉原のお拂ひ、二十五兩と御祝儀が五兩二分、お駕籠代が四貫六百にござりまするが、よろしくお賴ひ申しまする。

ト書付けを善九郎へ渡す。

善九　ドレ〳〵、三十兩二分に四貫八百、四貫五百の三分錢が三百。

ト金を錢を文藏へ渡す。

文藏　これは有り難うござりまする。

善九　モシ、その上に付落ちでもあるなら、大事ない程に後からなりと書付けを持つて來るがよい。

文藏　有り難うござりまする。この鯉は昨日、親方が榎戸へ網に參りまして、捕つて參りました鯉でござりまする。おりうさま、旦那樣へお目にかけなされて下さりませ。

りう　善九郎どの、見事な鯉ではござらぬかいなア。

善九　成る程、これはよい鯉だわえ。それ〳〵、鯉と云へば、まだ肴屋の吉五郎と、八百屋の五郎兵衞どのが書付けを持つて來ぬさうなが、さて〳〵埒の明かぬ事ではあるぞ。モシ〳〵、旦那樣はお留主でござりまするか。

りう　イエ〳〵、奥のお座敷に、お茶をお挽きなされてお出でなされますわいな。

仲七　成る程、旦那には、お茶がお好きでござりまするな。

時六　それ〳〵、時に先刻から又、餘ッぽど雪が積つて來ました程に、なんとモウ、歸らうではござらぬか。

りう　モシ、お前方には御酒を上げいと、アノ旦那が仰しやつた程に、マアちよつとお臺所へなりと、皆さん、一緒にござんせいなア。

半助　左樣ならば、お拂ひを下されました上に、アノ御酒まで下されまするかえ。

りう　この雪で寒からうと仰しやつて。

文蔵　それは有り難うござります。そんならお辭儀を申さずとも
仲七　お勝手へ行かうではござるまいか。
時六　成る程、それがようござらう。
善九　ドレ〱、この受取を、旦那へお目にかけうか。
りう　そんなら皆さん、お臺所へござんせいなア。
皆々　よろしう仰しやつて下さりませ。
りう　アレ、また降つて來たわいなア。

ト唄になり、善九郎、財布と帳面を持ち、おりう、岡持を提げ先に、殘らず奥へ入ると、直ぐに、てんつゝになり、花道より、吉五郎、肴屋の拵らへにて、木綿やつし、輕衫を穿き、腰に手拭を挾み、下駄を穿き、番傘をさして、提げ籠に小鯛、貝の柱生海苔を入れ、糸立をかけて提げて出て來る。後より、八百屋五郎兵衛、やつしの形にて、紺の股引を穿き、革足袋、下駄がけの形にて、紙半合羽を着て、ばつてう笠を冠り、御膳籠に大根、牛蒡、松露、柚子、人參を入れ、提げて出て來る。此うち、雪頻りに降つて居る、花道にて

吉五　おぬしやア八百屋の五郎兵衛ぢやアないか。
五郎　お身樣は魚屋の吉五郎か。とんだ雪ぢやアないか。
吉五　歩かれるものぢやない。時におぬしやア、どこへ行くのだ。
五郎　おらア青物を持つて、小山の店へ行くのよ。
吉五　小山の店とは、アノ石町の貸座敷にござる、福島さまへ行くのか。
五郎　その久右衛門さまへ行くのぢやが、して、お主はどこへ行くのぢや。
吉五　おれも、その久右衛門さまの所へ行くのよ。
五郎　そんなら、お主もアノ貸座敷へ行くのか。
吉五　お身樣も、アノ貸座敷へ行くのか。
五郎　丁度よい所で逢つた。
吉五　そんなら、一緒に行かうか。
五郎　吉五郎。
吉五　五郎兵衛。
五郎　サア、來やれ。
吉五　よく降るなア。
五郎　歩かれるものぢやない。

トてんつゝになり、兩人、舞臺へ來り、雪を振ひ

吉五　モシエ、魚屋が參りました。
五郎　八百屋の五郎兵衛が參りました。

吉五　ハイ、吉五郎が參りました。
兩人　お賴み申します〳〵。
ト合ひ方になり、奧より、由良之助、紙子仕立ての衣裳、羽織の形にて、莨盆を提げ、出て來り
由良　誰れも居ぬか。おりう。
吉五　お賴み申します。魚屋の吉五郎でござりまする。
五郎　八百屋の五郎兵衞が參りました。
由良　五郎兵衞、吉五郎なら、サア〳〵、大事ない〳〵、內へ入つたがよい。
吉五　旦那でござりまするか。左樣なら御免なされませ。
五郎　ドレ〳〵、合羽を脫がざアなるまい。お主、先へ行かれたがよい。
吉五　さて〳〵、きつい雪ではござりませぬか。
由良　往來は難儀でもあらうが、在宿して斯樣に降り積りたる所を見れば、イヤ又、雪と云ふものは、どうも云へるものではない。
吉五　左樣でござりまする。私しどものやうな何にも存じませぬ者でさへ、とんだ好い景色でござりまする。
ト五郎兵衞、內へ入り
五郎　旦那、お寒うござりまする。
ト內へ入り
昨日から後腐らしの物が降りまして、あの庭の態を御覽じませ。雪が降りまして喜びまする者は犬ばかり。炭を賣る品物ばつかり、雪は豐年の貢ぎ物とは申しまするが世の中に雪ほど忌々しい物はござりますまい。この雪を面白がつて見る奴がござりますが。
吉五　コレ〳〵五郎兵衞、お主もさりとは一國な者ぢやないか。お主ばつかりこの雪が惡くつても、マア、これにお出でなさる旦那始め、雪を賞翫なされて、屋根船で雪見に出ようか、この雪で茶の湯でもなされうかと、思し召すまいものでもないに、雪が忌々しいの、庭の態のと五郎兵衞、得意先で其やうに、ツカ〳〵物を惡く云はぬがよい。
五郎　云つても大事ない。此やうに雪が降つちやア、第一貧之人殺しよ。熱燗にして引ツかけるか、炭團を二ツも餘計に入れて、甘酒の一杯も吞まいで立ち切られるものか。マア、この寒さを見やれ、毛の穴が透いて、水ツ洟が出て、おらア今朝から二十四文湯へ三度入つたやつよ
吉五　コレ〳〵、そんな事を旦那方の前で、云ふ事があるものか。お主もさりとは不風流な者ぢやアないか。

由良　イヤ／＼、魚屋、さうでない。成る程、あの八百屋が申す通り、雪は難儀な物なればこそ、定家卿にも、駒止めて袖打拂ふ蔭もなしと、雪の出會、最明寺どのも、とく／＼寒かつたりして、後へも先へも參りがたしとの雪難澁。その中にも雪の明りで、書物を讀んだなぞとは、よく／＼怺へ情の好い人でなければならぬ事であらう。

五郎　左樣でございまする。葱雜炊や、きらず汁で見ちやア、雪もお庇がござるまい。

由良　酒も雪消しと云はれては、雪も迷惑な物ではないか

吉五　左樣でございませぬ。この魚屋の吉五郎は、何にも存じませぬが、雪も此やうに降ります時には、他愛もない物でございまするが、サア、一日も二日も降り積つて、固まつた日にやア大盤石、叩いても割つても碎けも致しませぬが、氷つた日には、雪も恐ろしい物でございますて。

ト此うち、五郎兵衛は火鉢を引寄せ、火を直して居る由良之助は炬燵を引寄せ、手をあぶつて居る。吉五郎は莨盆を引寄せ、灰吹を叩き

此やうに叩きましたならば、この灰吹は叩き割れまするで、雪と申す物は、マア、この位な事では割れも碎けも致しませぬとは、凝り固まると申すものは、ひどいものではございませぬか。

由良　イカサマ、魚屋が申せば其やうなものか。思へば雪は固いものぢやて。

吉五　すりや、雪ばかりでもございませぬ。この間、土手でちよつと承りましたが、アノ師直さまのお屋敷では、鹽冶判官さまの御家來、大星由良之助さまと申しまする御家老樣が、主人の敵をお討ちなされうとて、只今降りまする雪のやうに、段々御家中の衆をお集めなされまして、六十三人とやら四十七人とやら、凝り固まつた雪のやうになつて、お出でなされまするで、師直さまのお屋敷では、用心ばかりなされてお出でなされますると、承りましてございまするが、固まつた日には、なんと怖いものではございませぬか。

五郎　コレ／＼、今どき其やうな身を知らぬ武士があるものか。雪は水になつても岩になつても、うぬが三昧、人が雪のやうに凝り固まつたれば、第一が御法破り、その上徒黨した者は、どんな目に會ふやら知れもせぬ。怖い事を誰れが命に替へてする者があるものだ。魚屋、あん

まり馬鹿な事を云やるな。師匠さまのお屋敷には、相應に何の某と云ふ御家來があつて、滅多に由良之助どのとやらが、五十人や六十人徒黨をしたればとて、そんなに心安く師匠さまを討たせるものか。好い加減に聞いて居やれな。見かけに寄らぬ正直な男ぢやアないか。

由良　世間に左樣た取沙汰もあるか知らぬが、人は一日たりとも安樂に暮らしたいものではないか、斯樣申す久右衞門なぞは、近在に田地もあつて、その上に少々の貯へもあれば、只願はしいは長命ばかり。劍難は元より、病死は勿論、内すれば、思ひも依らぬ事、地黄や一粒金丹を味方に頼み、色事で討死して、潔よう終りを遂げたいと思ふ中に、主人の爲に命を失ふたいなぞとは、さりとは野暮な事ではないか。

五郎　左樣なれば旦那には、女の方が御好物でござりまするか。

由良　兎角世の中は、髭でなければ夜が明けぬぢや。それぢやに依つて、女とさへ名が付けば、女郎は勿論、藝者承知、地者ならござれ、年增中づめ後家娘、お針腰元茶屋女、飯炊きでも小女でも、相手に構はず賞翫するが、なんと好い物喰ひではないか。

五郎　呆れるワ。

由良　それなればこそ年内に、伊勢參宮に行き、飯盛おじやれを手始めに討取つて、泊り〳〵の色事を樂しみに、近々發足せんと思ひ立つたゆゑ、買がゝりの分は、殘らず今日中に皆濟を、善九郎へ申し付けたが、吉五郎も五郎兵衞も、書付けを早う出さぬか。どうぢや〳〵。

吉五　左樣ござりますれば、旦那には、近々のうちに伊勢へ御參詣なされまするに依つて、お拂ひを下されまするとかえ。こりや有り難い、左樣ならば善九郎さまへ、この書付けを上げますのでござりますのか。

由良　早う〳〵。

吉五　ハイ〳〵、私しの締め方は、十一貫百六十四文、それに今日の分が、小鴨が三羽、貝の柱、生海苔、これが五百五十文入りまするると、十壹貫七百十六文。左樣ならばお拂ひを、受取りまするでござりませう。サア、五郎兵衞、お主も書付けを持つて、お勝手に行きやれな。

五郎　イヤ、この八百屋は、拂ひを受取りにやア行くまい

吉五　おぬしやア、なぜそんな事を云ふのだ。

五郎　なぜと云ふ事があるものか。この三丁目の小山の貸座敷でも、福島久右衞門さまと云つちやア、歴としてご

ざる旦那衆に、青物貸しが七貫八百あつたればとて、何が心元なくつて、今日中に拂ひを受取りませうと云はれるものだ。旦那が伊勢へござつて、お留守ならいゝわサ、其うちも矢ッ張り青物を入れて、何時でもお歸りの時分に、御勘定はなさるであらうわサ、お貸し申しまして置きやア、内に置いたより丈夫な貸し物。それだに依つてこの五郎兵衛は、お拂ひを受取る心もないのサ。

吉五　さう云ふ事なら、この魚屋の吉五郎も、達引になつて來たに依つて、おれが方の魚の賣かけも取られない。おらア又、お拂ひを待つばかりぢやアない、この吉五郎は旦那へ願つて、いつその事に伊勢參宮のお供をする氣だがどうで、あらう。

五郎　お主がお供をする位なら、この五郎兵衛も伊勢の事はさておいて、大和巡りをなされうが、讃岐の金比羅へ御參詣なされうが、どこがどこまでも、おれもお供をせにやアなるまい。

吉五　おれもお供を願つてする氣に依つて、譬へわいらが供には連れられぬと仰しやらうが、もうそれからは、この魚屋の吉五郎が看板の、生舟を賣つてなりとも、お付き申して行かにやアならない。

五郎　お主ばかりに生舟を賣らせるものか。さう云ふ事なら、豆腐の丸船を賣つてなりと、旦那のお供をせにやアなるまい。

吉五　モシ旦那、この吉五郎を、お供にお連れなされて下されまするか。

五郎　この八百屋の五郎兵衛を、お供にお連れなされて下されまするか。

吉五　久右衛門さま。

五郎　旦那様。

兩人　どうなされて下されまする。

ト由良之助、吉五郎と五郎兵衛の顏を見て

由良　連れて行かう。

ト吉五郎、五郎兵衛、顏見合せ

兩人　エ。

由良　五郎兵衛も吉五郎も連れて行かう。

吉五　左樣なら、伊勢參宮のお供に。

五郎　二人ながら、お連れなされて下さりまするか。

由良　この方から頼んでも、連れても行きたい二人の恰幅先づ見かけから強さうで、護摩の灰に付かるゝ氣遣ひもあるまい。定めて吉五郎も、五郎兵衛も道中馴れて居る

であらうに依つて、泊り〳〵に世話もあるまい。どうで長旅をする心ゆゑ、伊勢で年を取つて、それから直ぐに大坂へ出て、天王寺の彼岸にも會ひ、二月の末から心がけて、今年は珍らしう吉野の花盛りも見物して、それから高野から和歌の浦や廻り見物して、四月の內に熊野で湯治をして、六月は一月京に居て、御輿洗ひや涼みを見て、七月になつたら直ぐに長崎へ行かうではないか。箱崎の八幡の祭禮にも會ひたいもの。十月は大坂へ來て、夜見世見物して、京の北野に知るべもあれば、これに暫らく逗留して、なんと四五年も上方に、數奇をしてはどうであらうぞ。

吉五　そりやアようござりませう。どうで願ひまして、お供を致して參りますからは、七年が八年でも、旦那のお側にくツ付いて居りまして、御厄介になりまするでござりませう。

五郎　おきアがれ、イケ馬鹿々々しい。てん〴〵も身上を持つて居ながら、如何に得意先の旦那のお供を願つてすればとて、三年四年どうして人にたかつて居られるものだ。さう云ふ事なら、この五郎兵衞は、斷わりを云ふ程に、吉五郎、お身樣ばかり一人、主に付いて行くがよい。おらアこれから師直さまのお屋敷へ、手筋を拵らへてお出入りの八百屋になつて、青物でも納めて、主が留守のうちに、歷とした旦那になつて見せべい程に、上方から歸つて、その時膽を潰したがよい。

吉五　コレ五郎兵衞、お身樣が如何に錢が欲しければとて、あの強慾非道な師直どのゝ屋敷へ、商ひがしたいとは、忌々しい根性な者ぢやアないか。そんな否な事を云はずとも、綺麗に錢を儲けやれな。

五郎　おれが師直さまのお屋敷へ、青物を入れようと云へば、なんで其やうなケチを付けるのだ。

吉五　師直に侍ひでも、武士でもないわえ。

五郎　師直さまの事を惡く吐かしやア、吉五郎、われを只は置かぬぞよ。

吉五　惡ざまに云やアどうする。

ト久右衞門、此うち、莨をのんで居る。

五郎　この五郎兵衞が、われをぶんのめすワ。

吉五　面白い。武士にあるまい、賄賂や袖の下を取るやうな、下卑た汚ない侍ひがあるものか。その上に、武士にも似合はぬ色事の意趣で、御勿體ない鹽冶判官さまを、とんだ目に合せたは、あの人の皆胸が惡さだ。その師直

どのゝ屋敷へ、十千萬兩儲ける事があつたればとて、商ひがなるものか。

五郎　さう吐かしやア、もう料簡がならねえわえ。

吉五　ならぬと云つて、どうするのだ。

五郎　引摺り出して踏みのめすのだ。

吉五　われがおれを引摺り出すうちに、コレ、この手が何をして居るものだ。其うちにやア吉五郎、われをおれがぶッ挫くワ。

五郎　そりや、どうして。

ト帯をしつかり締める。

吉五　どうするか、今に見やアがれ。

ト懐中の物を捻ち込む。

五郎　サア、外へそびき出すぞよ。

吉五　この野郎めが。

トかゝるを、その手を叩き落し

五郎　どうしやアがる。

トこれより、吉五郎、五郎兵衛、立ちかゝる。由良之助、炬燵へ足を入れて寢轉び

由良　コレ／＼、これはどうしたものだ。騒々しい。

吉五　旦那、御免なさりませ。五郎兵衛、われが相手だぞ

由良　サア／＼、五郎兵衛が相手であらうとも儘よ。マアサア、その持つて來た小鴨や貝の柱は、どうするのぢや

五郎　旦那、御免なされませ。吉五郎、われが相手だぞよ

由良　コレ／＼、八百屋々々、今朝ほど申し遣はした青物はどうぢや。

吉五　五郎兵衛、逃げたとて逃がしやアしないぞ。

ト尻を絡げる。

五郎　ハイ／＼、青物は練馬大根が二本、松露が二袋、柚子が五つ、人参も牛蒡も、この御膳籠にござりまする。どうするか見やアがれ。

ト云ひながら、尻を絡げて、鉢巻をする。

吉五　只今小鴨の毛を引いて、拵らへて上げませう。生海苔も洗つて上げますでござりませう。

ト云ひながら鉢巻をして肌を脱ぐ。此うち、由良之助硯箱の筆を出して、献立を書いて居る。

由良　コレ／＼、いま献立を案じて居る程に、ちつと靜かにせぬかいの。

吉五　御免なさりませ。サア、うしやアがれ。

五郎　もうこれからは死にくらだぞ。

吉五　どうしやアがる。

五郎　斯うするワ。

トこれより五郎兵衞、吉五郎、掴み合ひになり、此うち、由良之助、硯箱と煙草盆を提げて上の方へ廻り、直ぐに炬燵へ入つて、獻立を考へて居る、此うち奥より、おりう、以前の形にて出て來り、この中へ入り。

りう　モシ〱、吉五郎さん五郎兵衞さん、こりやアマアどうした事でござんすわいなア。

吉五　おりうさんかえ、退きなさい〱。

りう　マア〱、待たしやんせいなア。

五郎　危ない。退きなさい〱。

りう　コレイナア、今日は此方の内には、お茶の湯がござんすわいなア。それに何ぢやいな。吉五郎さんも五郎兵衞さんも、叩き合うたり、ちつとは旦那さんの前ぢやと思うて、遠慮する事はならぬ事かいなア。

五郎　吉五郎、あれを聞いたか。爰の内方には、茶の湯があるとの事。定めてそのお客は、五人か三人のお客であんべい。旦那が御亭主の事なれば、なんと、こりやア互ひの云ひ分は云ひ分にして、殘して置いて、お勝手の手傳ひをしようぢやないか。

吉五　お身様の方から、さう料簡して出りやア、この五郎兵衞も商賣が大事でないでもない。そんなら云ひ分は云ひ分にして置いて、マア、青物でも洗ふべいか。併し、勝手の事を仕舞うて、爰の内を出るが最期、その時はみじめを見せるぞよ。

五郎　その時には吠え面をかゝせる程に、歸りがけには、どうするか見やアがれ。

吉五　五郎兵衞、その口を忘れるなよ。

五郎　われも往生だ程に、覺悟してけつかれ。

りう　ハテサテ　もう料簡した事ならようござんす。マアマア、勝手へござんせいなア。

吉五　おりうさん、いかいお世話になりました。旦那、御免なされまし。

五郎　ひよんの事を申し募りまして、面目次第もござりませぬ。おりうさん、旦那へよろしうお頼み申します。

りう　サア、旦那へはよいやうに云ふ程に、必らず〱又今のやうに、聲高に物云はぬがようござんすぞい。

五郎　合點のゆかぬ吉五郎が身の上。

吉五　五郎兵衞、われにやア云ひ分があるぞよ。

りう　コレ、ハテ、よいわいなア。

吉五　そんなら、鳥を拵らへべいか。

五郎　さらば松露を振つて置かうか。
吉五　旦那、獻立を
兩人　待つて居りますぞえ。
ト唄になり、吉五郎、提げ籠を提げ、鍵を持つて振り上げて、五郎兵衞を叩かうとする。五郎兵衞、御膳籠を提げ、大根を取つて、吉五郎をくらはさうと振り上げる。この中へおりう入り、兩方を押へて、思ひ入れにて、五郎兵衞を下座へ入れる。吉五郎は奥へ入る。思ひ入れ直ぐに、合ひ方になり、おりう、後を見送り、由良之助が側へ來る。由良之助、いろ／＼考へて
由良　さて汁はならうぞ。合せ味噌に生海苔にして置かうか。膳付けは貝の柱に卸し大根、木耳の膾に山葵、茶碗盛りが松露、人參、小鴨のつぺい。それでは山葵が差合ふに依つて、ハテ、どうしたものであらう。小鴨と松露を蒸して、柚味噌をかけたがよからうか。
りう　モシ／＼、旦那樣、今宵のお茶には、どなたがお客でござりまずるえ。
由良　おりうか。好い所へおぢやつたの。
りう　ハイ、今宵のお茶には、どなたをお呼びなされまするえ。

由良　されば、今宵の茶には、誰れあらうぞ。
りう　お三客でござりまするか。
由良　イヤ／＼、三客ではない。
りう　して、お幾人でござりますか。
由良　今宵の客は、たつた一人ぢや。
りう　アノ、お一人でござりまするか。
由良　一人でなうては。
りう　そのお一人は、どなたでござりまするえ。
由良　その一人は、我れらが今宵の客になるのぢや。
りう　さうして、御亭主方はどなたがなされまするえ。
由良　亭主は誰れあらう、其方が亭主ぢや。
りう　あられもない事仰しやりまするわいな。どうしてマア、何にも存じませぬ私しが、あなたをお客に致しまして、アノお茶の湯がなるものでござりまするかいな。
由良　サア、其方が知らぬ事ぢやに依つて、會席も我れらが思ひ付いたる獻立。菓子もむつちりとした蒸し立ての饅頭に、砂糖蜜をかけた旨い盛りの餅菓子の御馳走にあづかりたい。
ト　おりうが手を取つて引寄せる。
りう　モシ／＼、これはしたり、旦那樣となされた事が、、

お勝手から見えまするわいな。マア、この手をお放しなされて下さりませ。

由良　アレ、あの雪が目にはかゝらぬか。しつぽりと降り積つた今日の初雪。このマア寒さに、どうして獨り寐られうか。あの白砂の景色と、そもじの襟足の綺麗な所を見ては、堪えられぬ程に、野暮を申さずとも、亭主になつて、我れを馳走してはくれまいか。

りう　それぢやと申しましても、私しは茶杓を持ちます事も存じませぬわいな。

由良　教へてやりませう。

りう　そんならわたしに。

由良　サア、茶の湯の指南いたすであらう。

　ト引寄せる。

りう　モシ〳〵、マア、この手をお放しなされて下さりませ。

由良　どうしてこの手が放されるものぢや。先づ茶を立てる初めが、茶碗を前に置いて、茶筌と柄杓を取つて、此方の方へ取り直して。

　トおりうを引寄せて、抱きつかうとする。

りう　モシ〳〵、惡い事なされまするな。

由良　これがなんの惡い事であらう。さう氣強では、茶と云ふものは覺えられぬ程に、隨分とどこもかしこも角のないやうに、袱紗裁きより男裁きが肝心ぢや。コレ、野暮な事を云ふまいぞ〳〵。

　ト無理やりに、おりうが裾へ手を入れる。おりう、由良之助を突き退けて

りう　モシ〳〵、これはしたり、其やうなお茶の御指南があるものでござりますかいな。

由良　わしが其方へ教へるは、其方のお茶が一服呑みたいに依つて、世間の流儀と、ちつとばかりは違うた事もあらう。コレ〳〵、今まで一度も帶紐解いて抱かれて寐た事はないではないか。今日ばかりは、アレ、あの雪の景色の好い所に免じて、御馳走にあづかりたい。

りう　アレ又、其やうな事を仰しやりまするかいなア。さうしてマア、お前樣には、お石さまと申しまする、キツとした御新造樣もござりまして、アノ山科のお屋敷でお目にかゝりまして、お近付きになりました時、あのやうにおいたいけに仰しやつて下さりましたものを、どう致しまして義理の惡い、あなたと其やうな事がなりますものでござりませうぞいなア。どのやうな事でも仰しやる

事は承りませぬ程に、御免なされて下さりませ。

由良　サア、それが其方の野暮堅いと云ふものぢや。アノこれから百二十里も隔てたる、山科に居る女房に、爰から義理を立てたればとて、どうして屆くものぢや。悪い事は云はぬ程に、お石が事は捨て置いて、サ、、この炬燵へ入つてたも／＼。

トおりうが手を取つて引寄せる。おりう、無理に放さうとして

りう　イエ／＼、なんと仰しやつても、御新造様のお石さまへ立ちませぬ程に、其やうな事は御免なされて下されませい。

ト振り切つて行かうとする。由良之助、おりうを追ひ廻し

由良　もう斯うなつたら堪えられぬものではない。嫌なら嫌にしようほどに、マ、、爰へおぢや／＼。

りう　イエ／＼、御免なされて下さりませ。

由良　そんなら、御免なされう程に、焼き物は何にしようぞ。

りう　存じませぬわいなア。

由良　鮭の鹽引に、玉子酒をかけようか。白酒にしようか。

りう　存じませぬわいなア。

由良　そんなら、白酒にも玉子酒にも、似たやうな物に致さうか。

トおりうを無理やりに引寄せ、抱き寄せ、ほぐれつして居ると、合ひ方になり、雪頻りに降つて來る。花道より、お石、合羽を着たる旅の形にて、菅笠をかざし出る。後より、おりん、前幕の形にて、付いて出て來る。後より、甚藏、前幕の形にて雨掛けの挾み箱を擔ぎ、出て來て、直ぐに舞臺へ來て

りん　ちと物が承りたうござりまする。福島久右衞門さまのお宅は、これでござりまするか。

由良　其やうな事は、先の辻番で聞かつしやい。

いし　アレ、あの聲は慥かに。

りう　モシ／＼、誰れやら參りましたわいなア。

トおりう、由良之助を突き退ける。

由良　もう誰れが來ても料簡がなるものか。

りん　さう仰しやるは、旦那様ではござりませぬか。

りう　アレ／＼、旦那様、誰れやら參りました。

甚藏　ものもう。

ト此うち、おりん、入る。

由良　ドウレ……ヤア、其方は。
りん　ハイ、おりんでござりまする。
いし　お前はこちの人かいな。
ト入る。
由良　其方はお石か
ト久右衛門、氣の毒なる思ひ入れあつて
何しに來た。
りう　エ、。
ト悄りする。
由良　ひよんな所へ。
甚藏　お供いたして參りました。
りう　それ御覽じませ。
由良　この雪の降るのに。
いし　遙々と參りましたわいな。
りう　御新造様、ようお出でなされましたなア。
りう　サア／＼、お入りなされませ。
ト合ひ方になり、お石、内へ入る。おりん、草鞋を脱いで内へ入り
りう　旦那様、あなたはまだお道樂が止みませぬな。ほんに呆れて御挨拶もなりませぬわいなア。

いし　コレ／＼、おりん、わしさへ何にも云はぬ事を、嗜んだがよいわいの。
りん　ぢやと申しましたとて、あんまりでござりますわいな。
甚藏　コレ／＼、おりんどの、一緒にお供して來た甚藏は、まだ門口に荷物を擔いで立つて居るに、もう燒餅を燒きかけるのか。
りん　サア、これはナ。
甚藏　サア、人の燒餅にしろ、マア、足でも洗つてゆつくりとしてから、燒きかけるがいゝぢやアないか。
いし　それ／＼、マア、わしに洗足の湯なりと取つてくれたがよいわいの。
りん　そんならお湯も取りませう。わたしも足でも洗ひましてから、燒餅を燒きまするでござりませう。
甚藏　ドレ／＼、それより前に、わしも内へ入りませう。
ト挾み箱を卸ろして、甚藏、内へ入る。此うちに由良之助は氣の毒なる思ひ入れにて、莨をのんで居る。おりうは奥より盥に湯を汲んで來る。
りう　サア／＼、お湯を取つて參りました程に、お御足をお洗ひなされませ。

ト　おりん、おりうを見て、ムッとしたる思ひ入れ、

いし　ドレ〳〵、足を洗ひませうか。

りう　私しが洗つてお上げ申しませう。

ト　おりん、おりうを突き退けて

りん　措いて下さんせ。此方の大事の御新造様のお御足を、こなさんに洗うてもらうてよいものかいなう。

りう　旦那様、あの通りでござんすわいの。

ト　おりう、氣の毒なる思ひ入れ。

由良　其やうな事もあらう。

りん　ドレ〳〵、御新造様のお御足を、わたしが洗うてお上げ申しませう。

ト　お石が足を洗ひ、手拭にて拭いて居る。

いし　もう〳〵よいわいの。サア〳〵、其方も早う洗うたがよいわいの。

りん　ハイ〳〵、冷たい事でござりまするな。

甚藏　コレ〳〵、とてもの事に、わしが足を洗つてもらひたい。

りん　何を阿房らしい。

ト　おりんも足を洗ひ、拭いて居る。甚藏、その盥を持つて來て、足を洗ふ。おりう、火鉢をお石が側へ持つて來る。おりん、引ツたくつてお石が側へ置く。おりう、氣の毒なる思ひ入れ。おりん、おりうに身を背けて、下の方に坐つて居る。

りう　お石さまには寒さの折柄、御機嫌ようお出でなされまして、此やうなお嬉しい事はござりませぬわいな。

いし　おりう、其方もまめであつたかいなう。

りう　旦那様にも、御機嫌ようお出でなされまする程に、お喜び遊ばされませい。

いし　何かと其方の、いかい世話であつたであらうの。

りう　ハイ、お側に居りまするから、御用は承りましても、お前様と申しまする御新造様がござりまするゆゑ、今日の只今まで、ついに一度、旦那様の無理な事を仰しやつても、御用を承りました事はござりませぬ程に、必らず〳〵、いたづらな者ぢやと思し召して下されませぬがようござりまするぞえ。

いし　なんのマア、其方の心を知らぬ者ではなし、殊に主の、アノじやら〳〵云はしやんす事を、誠の事ぢやとは思はぬわいの。

りん　モシ〳〵、御新造様、世の譬へにも、廂を貸して母家を取らるゝとやら申しまするではござりませぬか。あ

の悪性な旦那様のお側に、滅多な者は置かれませぬ程に、ほんに御油斷なされぬがようござりまする。

甚藏　モシ〳〵、旦那様、お里付きの燒餠燒きが付いて參りました程に、滅多に御油斷なされまするな。

りん　ハイ、私しの事は、お土產の燒餠でござりまする。

ト由良之助、甚藏を見て、俄に腹を立ち

由良　ヤイ〳〵、甚藏、おのれは不埒千萬な。どう云ふ事で案内もなく、此やうに押しかけて爰へ連れて參つた。一人ばかりか三人、おのれから先へこの家へは置かれぬ程に、勝手へ參つて支度でもして、早々山科へ立歸れ。長居いたすと免さぬぞ。

甚藏　ハイ〳〵、御免なされて下されませ　左様なお腹立ちがあらうとは存じませず、來なしに私しがお供を致して參りましたは不調法。コレ〳〵、おりんどの、旦那へお詫び言を申して、どうぞこの内方へ、只一夜雪の止むまで、置いて下さるまいか。

りん　知らぬわいなア。

甚藏　つれなくするな。モシ〳〵、旦那様、夜が明けましたら參りませう程に、今夜ばかりは、どうぞ置いて下さりませぬか。

由良　ならぬ〳〵。おのれがやうな奴が置かれるものか。キリ〳〵立つて勝手へうせう。

甚藏　ハイ〳〵、うせまするでござりませう。なんの事だ、たつた今來て、これから直ぐに山科へ取つて返すとは、おれを此まゝの力彌さまにやつたのだな。

由良　白痴者めが。

甚藏　ハツと逢ふ隙もなく、山科さして入りにける。

ト淨瑠璃を語りながら奥へ入る。直ぐに合ひ方になり、由良之助、あたり見廻し

由良　思ひも寄らぬ女房お石、どう云ふ事で爰へ尋ねて參つたのぢや。

いし　顏世御前さまの、お使ひに參りましたわいな。

由良　すりや、この由良之助が身の上を、御不審に思されてか。

いし　ハイ、町人となつたる、由良之助が實意を、とくと承り、歸るやうとの、お使ひに參りましたわいなア。

由良　まだこの由良之助を、武士の心もあるものかなんぞのやうに、思し召されて、其方を遣はされしとは情ないして、其方が道中は、由良之助が女房と申して參つたか但し何人の名を申して參つたぞ。

いし　ハイ、桃の井若狹之助さまの御家中、石見隼人と申しまする、若狹之助に御家來分の繪符で參りましたわいな。

由良　道中にて其方の事を、由良之助が女房と申す事を存じたる者もあらば、大星由良之助は、石見隼人と改名して、師直どのを窺ふ志しなるかと、人の噂も身の上の大事……ちつとも大事ない事なれども、なぜ其やうな大星由良之助と申す名を、隱し包んで參つたのぢや。其方が隱さいでも、知れて居る我れ〳〵が身の上。主人鹽冶判官どの、短慮に依つて御切腹なされてより、浪人に相違なき由良之助が身の上。何が遠慮に何を恐れて、世の中を隱れ忍ぶ事があるものぢや。今は、コレ〳〵、この算盤ぢや。

　ト算盤を出して

この算盤の高枕、町人となつたる由良之助が、女房お石へ願ひがあるが、なんと聞いてはくれまいか。

いし　アノ、私しへ願ひとはえ。

由良　其方の側で召使つた、あのおりんなりとも、また我れが腰元のおりうなりとも、取持つてはくれまいか。

いし　旦那どの、そりやお前、誠の事でござんすかいな。

由良　古臭い女房の其方を、抱いて寐ればとて、どこやらじみで面白うないに依つて、由良之助が願ひぢや程に、どちらぞ一人お願ひ申す。

いし　由良之助どの、アノおりんと云ふは、富森常右衞門どのの娘御。アノおりうと云ふは、矢間重太郎どのゝ妹御ではござんせぬか。

由良　イヤ、不埒な者ぢやと云はれても大事ない。義絶する分の事ぢや。

いし　ほんに、呆れて物が云はれぬわいなア。

由良　サア、おりう、得心してこの炬燵へ來て、抱かれて寐てたも。

りう　モシ〳〵、由良之助さま……ならぬ旦那樣、そりやマア何を仰しやりまするぞいな。お石さまへわたしが義理を立て通し、お前のお心に從ひまする事はなりませぬわいなア。

りん　わたしや何にも申しますまいと存じましたが、あんまりでござりまするに依つて、申さずばなりますまい。

　ト由良之助が側へ寄り

申し旦那樣、由良之助さま、お前樣は、これ程結構な御貞節な、お石さまと申しまする御新造樣のござりまする

のに、アノりうどのにお心をかけられやう。マア、厚かましう抱いて寐たいの、女房に持ちたいのとは仰しやりまするな。今こそ申しまするが、ソレ、覺えがござりませう。アノ山科のお屋敷にお出でなされた時、私しに仰しやつた事、その時わたしが淫奔な者か、惡性な者でござりませうならば、よいやうにお返事も致しませうが、私しも今でこそ下女のおりんになつて居りますれど、富森常右衛門が娘、常の女子のやうに媚られまするると存じましたれば、ほんに腹が立ちましたわいな。

由良　コリヤ、おりん、其方も甚藏と同罪に行はねばならぬわいの。サア、たつた今出てうしやアがれ…と云ふは其方の心にある事、ハテサテ、おりうを口說いて腹が立つならば、おりうは口說かぬ分にして、どうぢや、山科に於て

　トそろ／＼おりんが側へ寄り

山科に於て、由良之助が申したる事、露顯いたしては、いよ／＼それをほんとにせねばならぬ。由良之助が申す事を聞入れなければ、コレ、どうぢや。

　トおりんが膝へ手をかける。おりん、呆れてヂッと立つて、身を背ける。今度はおりうへ向ひ

驚ろき入つたる其方の志し、あの女房に義理が立たぬとは、こりや云ひさうなものぢや。誠由良之助が志しと云ふは、其方の心を引いて見ようばかり。有やうはお石と云ふ、歷とした女房があれば、

　ト火箸を取つて火鉢に書いて見せる。

斯う云ふ身共が心意氣、ぢやに依つて、嫌であらうと、ハテサテ、お石はお石で据ゑ物にして置いて、なんと、これではどうぢや。

　トおりう、久右衛門が書いて見せるを讀んで見て、呆れたる思ひ入れにて、ズッと立て、お石が脇へ身を背けて坐る。久右衛門、置炬燵を持つて來て

おりう、それ程にお石へ義理を立てるならば、この由良之助が內へ、片時も置かれぬ程に、たつた今出て行け。

兩人　エヽ。

由良　御臺所顏世御前へ、由良之助が返事はこの算盤。お石、おりん、おりうも一緒に同道して、山科へ立歸れ…

…ドリヤ、一睡催ふさう。

　ト炬燵へ入り、算盤を枕に寢轉ぶ。三人、顏見合せ、呆れる。唄になり、また雪降つて來る。花道よりお北やつしの形にて、大小を差し、蓑笠にて姿を隱し、下

駄を穿き、出て來て、門口に佇み、内の樣子を立ち聞いて居る。お石、由良之助が側へ寄り

いし　よもや〳〵と思うたが、由良之助どのゝ身の上の樣子。すりや、町人となつて一生を送り、殿の御恩を思はず、アノ敵師直を恨みる心はござんせぬなア。今のお前の身持ち放埓は、敵にそれと思はれぬやうにとの、深い思案があつての事と、わたしや思うて居たわいなア。御臺樣の御返事に、由良之助に逢ひましてござりまするが由良之助は只今町人となりまして、敵師直を中々討ちまする心底はござりませぬ。昔の刀はどこへやら捨て置きまして、その算盤がとなんとマア、御臺樣へお返事ぢやと云はれさうなものかいなア。ようござんす、其やうな忠義を忘れて、淺ましい町人に心までならしやんした由良之助どのに、片時なりと添うて居る心はござんせぬ。わたしが、御臺樣や父さん豐岡外記どのへの申し譯には、由良之助どのゝ枕元にて、一思ひに自害して。さうぢやさうぢや。

トお石、懐劍を出して、自害しようとする。おりう、おりん、取りつき

りう　モシ〳〵お石さま、必らず早まつて下されまするな

りん　アノ由良之助さまのお心も、まだ知れませぬ程に、マア〳〵、お待ちなされませ。

いし　イヤ〳〵、御臺樣への申し譯に。

兩人　マア〳〵、お待ちなされませ。

いし　放して殺して〳〵。

ト泣き落す。

きた　イヤ、お待ちなされて下されませう。

兩人　さう云ふ聲は。

いし　誰れやらであつたなア。

ト合ひ方になり、お北、蓑笠ぬぎ、足輕の形にて、内へ入る。

きた　ハイ、寺岡平右衞門めでござりまする。

いし　ヤ、其方はお北どのではないかいの。

きた　ハイ、只今あれにて承り居りましたが、御尤もなるお石さまの御自害ではござりまするが、死は一旦にして遂げ易しとやら申しますれば、私しが由良之助さまへお目にかゝりまして、御本心の所を承りませう程に、いよ〳〵お殿樣の仇敵、あの師直どのを……お恨みなさるゝお心もなく、町人とおなりなさるゝお心でござりませうならば、その時にはお石さまばかりではござりませ

ぬ、そりやその時はまだ外に、幾人も自害いたさうも知れぬ程に、先づ〳〵お待ち下されませう。

りう 由良之助さまのお心、知れまするまでは。

りん あゝお北どのにお任せなされて、滅多な事をなされまするな。

りう わたしら二人も兄親への云ひ譯に。

りん お前のお供を致しませう。

ト思ひ入れ。

きた 必らず〳〵お急きなされまするな。

トお石を納めて、お北、袱紗に包みし位牌を出して、由良之助が枕元へ置き、刀を取つて下に置き、手を突いて

きた 由良之助さま、お目覺まされて下さりませう。

由良 一睡に榮華を極めし由良之助が、夢を破りし其方は誰れぢや。

きた 刃樹後榮信士、俗名寺岡平右衛門めでござりまずる。

由良 さては其方が、平右衛門が妻のお北か。

きた 左樣でござりまする。由良之助さまの御機嫌のよい體を伺ひまして、斯樣な有り難い事はござりませぬ。私し夫平右衛門事は、お殿樣師直どのを御刃傷に及びましたる砌り、御本國へ飛脚に參りましてござりまする所に、生死不常は世の習ひ、急病に侵されまして、殘り多い死を致しましてござりまする。常々御奉公を、大切に存じ詰めたる心から、判官さまの御無念を晴らしたいと、思ひ詰めた平右衛門が心は、連れ添ひましたる私しゆゑ、よう存じて居りまする。承りますれば由良之助さまには、お殿樣の仇敵、あの師直を恨みなされんと、御家中に於きまして、必死のお方ばかりをお集めなされまするとの事。夫平右衛門が夢枕に立ちまして、私しへそれぞと申しましたやうにござりまする。何卒夫のこの位牌を平右衛門ぢやと思し召しまして、その御一列にお加へ遊ばして下されませうならば、生々世々の御厚恩と、有り難う存じまする。

由良 驚ろき入つたるお北が志し。夫平右衛門に成り替りこの由良之助と心を合せし義士の一列に、この位牌を加へたき今の願ひ。武士にも優りし女の貞節。平右衛門が死後までも、左程に眞實を盡さんとは、由良之助も感心いたした。

きた すりや、夫平右衛門に成り替りまして、私しが願ひを、お聞き届け下されましたか。エヽ、有り難うござり

ますると、女子でこそあれ、せめて忍びのお供を致しまして、お息つぎのお湯なりと、お上げ申したき私しが願ひお叶へなされて下されませうならば、有り難う存じまする。

由良　尤もなる願ひ、聞き屆けた。大星由良之助良兼ならば、挨拶する事もあらうが、今は

ト枕にしたる算盤を出して

コレ〳〵、昔の刀は今の算盤、由良之助が知行高千五百石、平右衛門がお充ひは、五兩に三人扶持を、一年に五石四斗、五兩を五石と見て十石四斗、千五百石の由良之助が命と、十石四斗の平右衛門が命を、算盤で見れば

ト算盤をパチ〳〵置いて

平右衛門が命百六七人と、由良之助一人の命なれば、こりやコレなんと死なれぬではないか。由良之助が名よりこの命が惜しさに、例へ犬畜生と云はれうと、人でなしと云はれうと、町人になつて、どうぞ長生きがしたいと思ふばかり。これより外に料簡のない福島久右衛門、由良之助が相談なら、マア、あかぬ事ぢや。

きた　成る程、左樣でござりませう。左程にまで大事をお隱しなされますは、このお願ひは叶ひますまいが、さりながら、由良之助さまの御用意をなさるゝ程は、敵の方にもそれ程の又、要害を致しまして、平林嘉仲太と申しまする軍學者とやらを抱へまして、アノ師直が屋敷の樣子、玄關、長家、侍ひ部屋、居間、炭部屋に至るまで、詰まり〳〵の戸鍵まで、用心嚴しく致しまするると申す事。さすれば、夜討朝駈けの、そのお心でござりましても、容易う敵は討たれますまい。先の油斷を幸ひに。

由良　コレ〳〵、其やうな四角な事は聞き飽きたに依つて今の放埒。近在に田地もあり、少々の貯へもあれば、これからが世の中。四十五年が間、野暮な刀を取合つて、ホツとして、町人になつたる由良之助。いま安樂に暮らすのも、殿の御恩なれども、また殿の短慮ゆゑ、浪人になつたれば、御恩に浪人をかけて見れば、これで算用は濟んだり。敵討なぞは思ひも依らぬと、云ふが久右衛門が其方への挨拶、又お石へは、この算盤が御臺所へのお返事。早う上方へ一ン二が二。お石とは思はぬ、御臺のお使ひ、二一天作の五大儀。このお返事を四五二十。七七四十九勞せぬやうに、一八が八を拂つて、町人がまし町人がまし。

いし　そんなら人の噂に違はず。

きた　いよ〳〵手段と思ひの外。
由良　ハテ、野暮云やんな。三五の十八、桁違ひぢやなア
　卜唄になり、算盤を投げ出し、由良之助、莨盆を提げ
　奥へ入る。
りう　由良之助さまのあのお心なれば、最早敵をお討ちなさるゝお心はござりませぬぞえ。それがあらうとて、兄さん重太郎どのへ、マア、なんと申しませうぞ。
りん　こりやマア困つた事でござりまするなア、お北さん
きた　私しは足輕平右衛門づれが、女房でござりまするゆゑ、申さば輕い身の上、深くお隱しなさるゝ事もござりませうが、合點の參りませぬは、お石さまをお隔てなさるゝ、由良之助さまの御樣子。これには何ぞお心當りでもござりまするか、お石さま。
いし　心當りと云つて、なんのあらうぞいの。十八年が間連れ添うて、力彌と云ふ子のあの女夫仲。父さんと云へば須藤次郎左衛門さまの御家老役をお勤めなさるゝ豊岡外記どの、顏世御前のお側に付添ひ申して居るも、由良之助どのゝ指圖ゆゑ。この上に於て露程も、心を置かれうやうはないが、それに、あのやうに由良之助どのが隔てさんすは、合點がゆかぬわいな。

きた　そんなら、お石さまの親御さまは、須藤次郎左衛門さまの御家中でござりまするか。
いし　須藤お家の御家老ぢやわいなア。
きた　それで樣子が知れました。大事に大事をお取りなさるゝ由良之助さま、須藤次郎左衛門さまは、アノ師直どのとは、御懇ではござりませぬか。もしやお石さまの親御さまより、敵の方へ大事も漏れんと思し召して、それゆゑの事でござりませうわいな。
いし　成る程、お北どのゝ推量の通り、須藤の家に緣のあるこのお石、もしも父さん外記どのより、敵師直へ大事も洩れんと思はしやんして、子まである女房に、さほどに心を置かしやんすか。そりや聞えぬわいな、由良之助どの。なんぼわたしが女子ぢやというて、我が子の力彌や夫のお前の、武士の忠義の立つ事ぢやもの、現在の親ぢやと云うて、なんと明かして云ひませうぞ。そのお心ゆゑ、あの力彌までが、親に似合はぬ子は鬼子と、心まで、父御に似て、血を分けた母親へ、この頃の愛想づかし。百姓になりたいの、どうぞ出家になりたいのと、侍ひらしい事のないも、そんならこれもこのお石に、心を置いての事であつたか。七人の子は生すとも、女に肌を

許すなとは、昔の誰れが云ひ始めたる事ぢややら、恥かしい事ぢやなア。

りう　さうぢや。

ト有り合せたるお石が懐劍にて、自害しようとする。おりん、留める。

りん　待つた〱、おりうさん、お前はなんで死なしやんすぞ。

りう　なんでとは、由良之助さまの様子を、側に居ながら知らぬと云うて、なんと兄さん重太郎どのへ立ちませうぞ。放して殺して下さんせ。

りん　待つた〱。いま死んでは犬死でござんす。

ト死なうとするおりうを留めるうちに、懐中より、序幕の一通を取落す。お北、手徹く取上げて

きた　清水逸學どのへ、平林嘉仲太。

りん　マア〱、おりうさん、早まらしやんすな。ソレ、その一通を、お石さまへ讀んで聞かして下さんせ。

きた　ナニ〱「一飛札を以て申し入れ候ふ、由良之助事、内々師直公を恨み奉る由、打捨て難く候ふ間、その事企てあらば、急々お知らせ申すべく候ふ。月日、清水逸學どのへ、平林嘉仲太」マア、どうしてお前がこの状を。

りん　不圖した事から手に入れました。仔細は後で申しませう。

りう　モシ〱、その逸學と云ふは、慥かに内の善九郎が事。

皆々　エ、。

いし　そんなら、その善九郎と云ふは、師直からの廻し者であつたか。

きた　モシ、斯う云ふ事もあるゆゑに、大事をお隱しなされまする、由良之助さまのお心、油斷のならぬ今の世の中。人の心の危ぶまれぬる。

いし　心と心の知れぬも無理では。

りん　人の心の

きた　奥の一間で

いし　お北どの。

きた　先づ〱、お入りなされませう。

ト唄になり、お石、おりう、おりん、お北、文を懐中へ入れ、刀を提げて何れも奥へ入る。ト奥より、善九郎、仲七、時六、半助、文藏、吉五郎、甚藏以前の形にてドヤ〱と出て來り

時六　さて〱今日は、有り難うござりまする。

善九　そんなら、この雪の小止みのうちに、何れもは歸らつしやるか。

仲七　左樣いたしませう。善九郎さま、旦那へよろしうお賴み申しまする。

時六　お拂ひをなされまする上に、御酒まで下されまするとは、此やうな有り難い事はござりませぬ。此やうな結構なお得意はあるものではない。

文藏　それ〳〵、その間は御奉公人衆のお暇が出まして、善九郎さまお一人で、さぞ御苦勞でござりませう。

半助　旦那が伊勢からお歸りなされましたら、相變らず又御用を仰せ付けられて下さりませ。私しは少し食べ醉ひました。

吉五　それ〳〵、この魚屋の吉五郎も、後の吸ひ物椀で餘ッぽど參りました。これぢやア雪の降つた所を歩きますが、有り難うござります。

善九　それは旦那もお喜びでござらう。そんなら何れも、お歸りなさるか。

半助　左樣いたしませう。サア、〳〵お暇申さうか。

文藏　機嫌になつて、お拂ひを落さつしやるなよ。

時六　どうして〳〵。旦那へよろしうお賴み申します。

仲七　さて〳〵今日は

皆々　有り難うござりまする。

善九　ようござりました。

ト合ひ方になり、仲七、先に立ち、皆々花道へ入る。吉五郎、後へ殘り、表に立ち聞きして居る。

善九　サア、これからは甚藏どの、こなたへも三兩、旦那から下さる程に、これを持つて、どつちへなりと行かつしやい。

甚藏　そんなら、この甚藏もこの三兩で。

善九　伊勢のお留主の內は人拂ひ。

甚藏　成る程、お拂ひ箱の譯が、これで知れた。

ト吉五郎、ソッと門口を明ける。

吉五　横山伊藏、コレ。

甚藏　こなたは淸水遞學どの。

吉五　やかましい。合點のゆかぬ由良之助が樣子。內の家來を殘らず出して、買がゝりの分を拂つてしまつて、伊勢參宮と云ふが曲事。あの女房のお石めがうせたに依つて、この道行が、なんでも感の付け所ぢや。伊藏、油斷をおしやるな。

甚藏　師直公のお指圖に、間者となつて入込んだる、我れ

我れ、怪しい事がござれば、早速その樣子を。

吉五　賴もしい。心得ぬは、あの八百屋の五郎兵衞、彼奴も慥かに。

甚藏　コレ〳〵、あの五郎兵衞は似たとこそ云へ、師直さまのお側去らずの、平林嘉仲太と云ふ軍學者に其まゝ。もし兄弟ぢやアあるまいか。

吉五　その嘉仲太の計らひに依つて、我れ〳〵までも心元なく思ひ、もし又犬に置いたも計られず。

善九　ハテ、如才のない事でござるな。

吉五　さりながら、あの由良之助が、どのやうにあつても師直公のお屋敷の樣子は知るまい。

善九　イヤ、知つて居る。

吉五　そりやどうして。

善九　先達て師直公のお部屋お蘭の方、千崎彌五郎が色香にほだされ、屋敷の樣子逐一に、繪圖に寫して彌五郎めに渡し、その身は自害、して見れば屋敷の樣子、知らぬとは云はれまい。

吉五　サ、それだに依つて、師直公も早速御普請にかゝられ、玄關長家侍ひ部屋、築山泉水物置雜藏に至るまで、以前とは變へし屋敷の繪圖面」

ト懷中より、吉五郎、繪圖を出し、甚藏に見せるうち奥より、お北、窺ひ居る。

善九　アノ、この繪圖がこの度の

吉五　コレ、この淸水逸學が、承つて、建てたる屋敷のこの繪圖」今までの事は由良之助も知つて居やうが、こればつかりは御存じはござるまい。

ト繪圖を疊んで內懷へ入れ」

もうこれからは、短兵急に師直公を、ヤツ付ける心でござらう程に、一杯喰つて伊藏、立退き召されい。

甚藏　心得でござる。

吉五　六郎は暇を出すまで、あの由良之助にくツ付いて、萬事の事を。

善九　心得てござる。

吉五　樣子に依つて、由良之助めをぶツ放して立退くは、この逸學が手のうちにござる程に、兩人ともに氣遣ひなく、早く。

善甚　合點だ。

吉五　早うお行きやれ。

甚藏　心得てござる。

ト吉五郎、甚藏、善九郎に囁く」甚藏は橋がゝりへ忍

ぶ。善九郎は下座へ入る。吉五郎も續いて行かうとする。お北、吉五郎と顏見合せ、恟りする。唄になり、お北は隱れる。吉五郎、思ひ入れあつて、下座へ入るこの唄のうち、お石、算盤と書き物を持つて出て來る、後より、五郎兵衞、出て、後に立聞きして居る。

いし　いま奧で由良之助どのゝ云はしやんすには、この算盤は御臺樣へのお返事。又この紙に書いたる法と云ふ字は、其方への謎ぢや程に、この算盤とこの法と云ふ字をよく考へて見るやうにとの事ぢやが、こりやマアどう判じたらよい事か、足らはぬ身では、ほんに合點がゆかぬわいな。

五郎　その判じ物は、八百屋の五郎兵衞が、考へて上げませう。

いし　其方は。

五郎　ハイ、私しは、この內方へお出入りの、八百屋でござりまする。承りますれば、今日アノ都の山科から、お出でなされました久右衞門さまの御新造樣は、お前樣でござりまするか。

いし　絕えて久しう便りも聞かぬ、夫の身の上を案じて、遙々爰へ尋ねて來た者ぢやわいなア。

五郎　お名はお石さまと申しまするか。

いし　ようその名を知つてぢやの。

五郎　存じませいでどう致しませう。朝晩、內のやうに致して居りまするから、何もかもよう承つて居りました

いし　さう云ふ事なら、何も遠慮はないと云ふもの。

五郎　お心安うお賴み申しまする。

いし　早速ながら、この算盤と紙に書いた法の字、これはマアどうした事であらうぞ。マア、考へて見て下さんせ

五郎　私しはこんな事がきつい好きで、判じ物をついぞ判ぜずにやつた事はござりませぬ。どう云ふ事でござりませうか、一つ考へて見ませうか。

いし　サア、これが夫の心の知れる事ぢやに依つて、早う考へて見て下さんせ。

五郎　畏まりました。算盤に法の字。そろ〳〵晩になつたら、女房に這ひかゝろうでもあるまいし。

いし　算盤に繼子立ちと云ふ事もあれば、あの力彌を、なぜ繼子のやうに後へ殘して來たと云ふ事でもあるまいし

五郎　お石さまの道中で、路銀があんまり要つたに依つて勘定して見ろと云ふ事でもあるまいし。

いし　法と云ふ字は、のりと云ふ字、出家になれと云ふ事

でもあるまいし。
五郎　見一無當作九の、胸算用でもあるまいし。
いし　こりやマア、どう云ふ事であらうぞいの。
五郎　したり。
ト膝を叩く。
いし　知れたかいなア。
五郎　お喜びなされませ。知れましてござるわえ。
いし　そりや嬉しいわいな。
五郎　モシ／＼、斯うでござります。この法の字を、この算盤で割つて見ろと云ふ事でござりませう程に、なんでも、この法の字を、この算盤で割つて見ませう。
いし　どう云ふ事か、早う考へて見たいわいなア。
五郎　ドレ／＼。
ト算盤を持つて
二一天作と、この法の字を二つに割つて見れば、オヤオヤ、三水に片しは、去ると云ふ字でござりまする。
いし　エヽ、そんならこの法の字を二つに割つて見れば、三水にアノ、去ると云ふ字かいなア。ほんに、こりや去ると云ふ字ぢやわいなア。
五郎　そんならお前は、去られたのでござりまするか。
いし　エヽ、そんならこのお石を、去らしやんしたのかいな。
五郎　法の字を二つに割つて見れば、去ると云ふ字サ。
いし　エヽ、づんと惡い考へやうぢやわいなア。何の越度があつて、去らるゝ覺えはないもせぬものを。氣にかゝる事を云ふ人ぢやわいの。其やうな事ではあるまい程に考へ直して見て下さんせいな。
五郎　それでも、これ程知れた事はござりませぬ。なんでもお前は去られたのサ。
いし　そんなら、外に考へやうはないのかいなう。
五郎　この法の字は直ぐに去り狀。南無妙法蓮華經の法の字でござります。
いし　エヽ、コレイナウ、わしやアノ久右衞門どのに去られたら、マア、どうせうぞいの／＼。
五郎　氣遣ひなされまするな。爰に算盤がござりまする。
いし　この算盤は何ぢやいな。
五郎　この算盤は、商人の飯の種サ。
いし　その商人が、どうしたのぢやえ。
五郎　その商人は、この八百屋の五郎兵衞、わしがお前をば引取りませうわサ。何も氣を揉む事はござりませぬ。

いし　いろ〳〵な事を云ふ人ぢやわいの。なんでわしを引取るのぢやえ。
五郎　その引取り申すと申しましたは。
いし　わしは合點がゆかぬわいな。
五郎　そんなら合點のゆくやうに。
　トお石が後から抱き付く。
これサ〳〵。
いし　慮外者めが。放さぬか〳〵。
五郎　御免なされませ〳〵。
いし　誰れぢやと思ふ。由良之助が女房ぢやぞ。
五郎　措かつしやい。こなたは去られた女房ならば、腕づくで、おれが抱いて寐るのだ。マア、この帶を解いてやるべい。
　トお石、振り切つて行かうとする。帶を引ッ張つて、グル〳〵と帶を解く。合ひ方になり、奥より、久右衛門、袱紗を挾み、水こぼし、柄杓を持つて出て來て、直ぐに坐る。お石、久右衛門を見て驚ろき
いし　エヽ、お前はこちの人かいな。
五郎　サア、もう斯うなつちやア、こなさんも往生だ程にさう思つて居さつしやい。

　ト此うち、お石、帶を締めて、由良之助が側へ來る。由良之助、茶を立てにかゝる。
いし　コレ、こちの人、アノ算盤と法の字は、ありや何でござんすえ。
由良　其方へ渡して置いた算盤と法の字は、今の由良之助が身の上。武士の法を破り、町人となつて朽ち果てる心ゆゑ、御臺所へも、其方が親の豐岡外記へも、この通り申してくれ。
いし　そんなら去り狀の謎ではござんせぬかいな。
由良　武家の法禁を守るとも、また去り狀にならうとも、そりや其方が心にある事。この由良之助は、今は町人となり果つれど、法と云ふ字は知らぬも同然。
　ト此うち、茶を立てる事よろしくあつて、五郎兵衛、スッと立つて、お石と入れ替り、由良之助へ詰め寄せ
五郎　貰ひましたぞ。おてまへ樣の女房は、この五郎兵衛が貰ひましたぞ。
由良　ハヽヽ、藪から棒を突き出したやうに、あのお石を貰ひたいとか。。
五郎　下さるまいと云はつしやれば、わしも男、得意先でも旦那場でも頓着はない。命にかけて貰はにやアなりま

せぬぞ。
由良　誰れも遣るまいと云ひもせぬものを。さりとは野卑な男ではないか。
五郎　そんなら、かみ様は去らつしやるか。
由良　去れと云ふ事なら、去りもしよう。
五郎　今日は兎もあれ、以前は武士、女房去つたら、こなたの武士は立ちますまいがな。
由良　女房と疊は、新らしくなければいかぬものぢや。
五郎　そんなら、お内儀は貰ひましたぞ。
由良　粗末ながら進上いたさう。
五郎　サア、あの通りだ。わしと一緒に行かつしやい。
いし　マア〳〵、待つて下さんせ。
ト五郎兵衛と入れ替り、由良之助が側へ寄り
なんぢやいなア、こちの人、如何に常から好きぢやと云うて、これがマア、なんぢやいな。茶の湯ところかいなア。わたしやお前に去られては、立たぬわいな〳〵。
由良　それ程に思ふ女房お石が、その帶は、なぜ其やうに解けてある。
いし　エ、、この帶は。
由良　不義者めが。
いし　ハア、、此やうな情ない事があらうか。なんの、この身に覺えもない不義の惡名。とても去らるゝ位なら、なぜ疵付けずに去つては下さんせぬぞ。わしや去られても、お前の側を離るゝ事ではないわいな。
ト帶を締め直し、由良之助が側へ行かうとする。五郎兵衛、お石を留め
五郎　この算盤の法の字が、直ぐに去り狀まで付いて居れば、どこにかけ構ひもない、この五郎兵衛が女房。そんなら御亭主、貰ひましたぞ。
ト無理やりに、お石を引ッ抱へて、五郎兵衛、門口へ出て、下手へ入る。合ひ方になり、由良之助、茶を立て、呑んで居る。お北、下座より出て來り、思ひ入れあつて、下の方へ來て、懷より、以前の一通を出して、由良之助が前へ差出す。由良之助、茶を呑んでしまひ、茶碗を片付け、その一通を取つて思ひ入れ。
由良　「飛札を以て申し入れ候ふ、由良之助事、内々師直公を恨み奉る由相聞え候ふ、打捨て難く候ふ間、その事企て候はゞ、急々にお知らせ申すべく候ふ、月日、清水逸學どのへ、平林嘉仲太。」
ト讀んで、寸々に引裂いて捨てる。お北、驚ろき

きた　モシ〳〵、由良之助さま、その證據となるべき一通を。

由良　反古にしても大事ない。跡形もない今の文體、露顯なしては、却つてこの身の名の出る事ぢや。

きた　こりや、由良之助さまのお詞とも存じませぬ。只今の一通に、如何やうな事が書いてござりませうとも、御主人の敵、師直どのをお討ちなさるゝお心がござりませずば、反古になされいでも、よい事ではござりませぬか。

由良　サ、引裂いたは。

きた　さてはあなたのお心は。

由良　コリヤ〳〵、最前とても、役にも立たぬ事を申す女子ぢや。爰に用はない程に、サア〳〵、何方へなりともお行きやれ〳〵。ドレ、一寢入り致さうか。

ト寢轉ぶ。お北、枕を持つて行き、由良之助にあてがふ。

きた　憚りながら、由良之助さまへ申し上げまする。先程仰せられましたる、平右衛門が事。譬へ由良之助さまと御知行の高は違ひましても、繋ぎましたる命は一つ。御恩に高下はござりませぬ。何卒夫平右衛門が願ひの通り。

由良　コレ〳〵、姦ましい、枕元で何を云ふ事ぢや。幾度云うても、この由良之助は今は町人、福島久右衛門が、鹽冶どのゝ御家來に、挨拶する事はない程に、その平右衛門々々々々と、平右衛門の名を云はぬがよい。聞く耳が大儀ぢや、御挨拶なら御免〳〵。

きた　寺岡平右衛門と申しまして、お側に居りまする事が、おうるさうござりませうならば、それ〳〵。

ト大小を取つて、羽織を脱ぎ、由良之助が前に置き、帶を締め直して

ハイ、私しはこの雪に、殊なう難儀を致しまして、降り込められました女でござりますれば、どうぞ暫しの間、このお家にお置きなされて下されませうならば、お有り難うござりまする。

由良　この雪に降り込められたとは、幸ひ〳〵。我れら有やうは、たつた今女房を去つて、まだ獨り者。サア〳〵、この火鉢の側へ來て、雪の止むまで話してはどうぢや。

きた　そりやモウ、私しどものやうな者でも、お伽になりまする事ならば。

由良　それは有り難い。時に、大分寒うなつて來たが、なんと、茶は一服どうであらう。

きた　ハイ、お有り難うござりまするが、私しはなりまするわいな。

由良　成る程、左の事か。

きた　ハイ、あなたはお上がりなされまするかえ。

由良　イヤ／＼、酒と聞いてはきつい物。神酒を頂戴してさへ

きた　お酔ひなされまするか。

由良　お神酒でも御免々々。

きた　それはマア、きついものでござりまするな。

由良　さりながら、そもじがなると聞けば、そこは又、讀みと謡、勝手に銚子杯があらう程に、ちよつと持つて來て、なんとこの火鉢で、燗なぞはどうであらう。

きた　それはようござりませう。そんならあなたは上がらずとも、お慰みに私しが、獨りでたべてお目にかけませう。

由良　それは、どうも云へぬ／＼。さて／＼今まで氣をふさいで居たゆゑ、其やうな事で鬱散したい。サア／＼、早う／＼。

きた　ハイ／＼、ドレ／＼、御酒を取つて參りませうか。

由良　さらば其うち、火鉢へ、炭を致さうか。

ト炭を取出し、火鉢へ炭をつぐ。お北、奥より、銚子杯を火鉢の脇へかけ

きた　あなたは、さつぱり上がりませいで、ほんにお氣の毒でござりまするわいなア。

由良　なんの／＼。併しながら、酒は少しは飲みたいものぢや。雪月花の花の眺めも、雪の夕暮れも、兎角酒でなければ樂みが薄いものぢや。

ト鼻紙にて、火を煽いで居る。

きた　モシ／＼、其やうに火が強うなりましては、沸え燗になりまするわいなア。

由良　下戸の性を現はしたか。

きた　マア、一つ下されませうか。

由良　ドレ／＼、我れらお酌を仕らう。

きた　これは有り難うござりまする。

由良　ドレ／＼。

きた　そんなら一つたべませうか。

ト由良之助、酌をする。お北、杯に一つ受け、グツと呑み乾す。

丁度好い加減でござりまするわいなア。

由良　見事々々。

きた　なんと、あなたもお一つお上がりなさりませぬか。
由良　イカサマ、珍らしい杯事。そんなら少しやつて見ようか。
きた　お上がりなされて御覧じませ。ドレ〳〵、お酌いたしませう。
　ト お北、酌をする。由良之助、杯に少し受け、呑み憎さうに怖々呑んで、杯を下に置く。
由良　さて〳〵、呑めるものではない。
　トお北、をかしがる思ひ入れあつて
きた　ほんに、きついものでござりまするな。
由良　然らばこの杯は。
きた　お頂き申しませう。
由良　サア〳〵、杯が前にあると
きた　お困りなされまするかえ。
由良　そんならそもじへ。
きた　お頂き申しませうか。
由良　ドレ〳〵、酌を致さうか。
きた　これは度々。
由良　酌には我れら困りは致さぬ。
きた　憚りでござりまする。

　ト由良之助、また酌をする。お北、一つ受けてグッと呑み乾し、杯をしたむ。
由良　コレ〳〵、その杯を押へる事は承知であらう。
きた　なんの、あなたに上げませう。わたしやいつその事に、この茶碗で獨り切りに致しませう。
　ト茶の湯茶碗を取上げる。
由良　アノ、この茶碗で。
きた　もう杯では、御面倒でござりませう。
由良　成る程、酒は好きと見える。
きた　憚りながら、お注ぎなされて下さりませ。
由良　これは、注がぬ先へ、どうやら醉うたやうな心になつた。
きた　これでめでたう、お納めまするでござりませう。
由良　納めとあらば、一つ注がうか。
きた　左樣ならば。
　ト由良之助、酌をする。お北、茶碗に酒を一つ受けて
また斯う一つ受けました所は、どうも云へましたものではござりませぬ。雪の寒さもとんと忘れて、木毎に花のお庭の景色は、眺めは飽かぬ事ではござりませぬかいなア。

　トこれより、少し醉うたろ思ひ入れ。

由良　花と云へば櫻の事、寺とは三井寺、山とは叡山、祭と云へば加茂に限るやうなもので、後家と云へばどうやら色のあるやうに思はれるものぢやが、定めて面白い樂しみがあらうな。

きた　なんの、私しのやうな賤しい身の上、誰れがなんと申して下されませうぞ。キッと後家を立てゝ居りますれば、夫平右衞門が菩提を、懇ろに弔ひまする心から、ほんに坊さんも同じ事でござりまするわいなア。

由良　コレ〳〵、それが惡い譬へ。夫の平右衞門が死んだればとて、後に殘つて、この世に居もせぬ者に、心中を立て、後懇ろに弔らふなぞとは、さりとは當世に合はぬぞや。この由良之助なぞは、主人鹽冶判官どのゝ御存生の時は、累代の御家老、職と心も立派に持つたなれど、あの短慮ゆゑ死なれたと思へば、却つて殿が恨めしく、おのれやれ主人の敵師直、遁がさぬと云ふ所なれども、斯うなつて見れば、恩もなく義理もなく、どうぞ一生を安樂に暮らしたいと思ふばかり。侍ひの由良之助でさへ斯くの通り、まして況んや、そもじなぞは女の事、殊にさほどの貯へもあるまいに依つて、もし袖褄を引く者もあらば、なんと可愛がゝ亭主を持つか、氣に入つた男と色事でもするか、お家の舞臺を飾り替へて見せる心はないか。

きた　成る程、さう仰しやれば、先づこの酒をグッと一つ下されまして、

　ト茶碗の酒をグッと呑み乾して、これより、段々醉ひたるこなし。

わたしもあなたの仰しやる通り、どのやうな男でも、持つて見とうござりまする。マア、その男はどこにござりませう。

由良　そりや、男を持つ氣なら世間は廣い。先づ八日十二日は茅場所の藥師樣へ參つて、その男を見立てるがよい。

きた　そんなら、その茅場町の藥師樣には、好い男がござりまするかえ。

由良　そりや茅場町ばかりでもない、十七日から二十三日までは七觀音、その七觀音のうちは、この橫丁から行けば、白銀町のいろ觀音の燒餅地藏、二十八日は鍛冶町の不動詣り、藥研堀の緣日なぞには、水茶屋の見世には、それは〳〵好い男が幾人も並んで居るを、見せたい〳〵。

ト　お北、頭を振つて

きた　イエ〳〵、わたしやその、若い男や好い男は、嫌ひでござりますわいなア。

由良　なぜ〳〵。

きた　どうしてマア、わたしのやうな者を、其やうな男が構ふものでござりまする。ぢやに依つて、わたしは見かけから人柄の好い、立派な侍ひらしいお人がござりませうならば、わたしや色事になりたうござりまするわいな。

ト由良之助に寄りかゝる。由良之助思ひ入れあつて

由良　そりやア其やうな男が、どこにあるか知らぬが、そもじのやうな者に思はれたら、さぞその男は喜ぶであらう。

きた　アイタ。

ト癪の發つたる思ひ入れ。

由良　どうした〳〵。

きた　ハイ、この雪に癪が發りましたわいなア。

由良　ナニ癪が發つた。それは困つたものぢや。本町三丁目の鰯屋庄右衞門の、反魂丹があるが、やりませうか。

きた　イエ〳〵、わたしが癪は、藥ではござりませぬ。憚りながら、ちよつと爰を押へておくれなされませ。

ト由良之助が手を取つて、懐へ入れ、ヂッと押へる。

由良　癪に依つて、滅多に押へ憎いものもあるものぢやが、爰は冷える。

きた　モシ〳〵、サア、寐ようではないかいな。

ト由良之助が手を取つて、無理やりに二重舞臺へ連れて上がる。

由良　酒の醉ひ本性違はず、そんならそもじは、この由良之助に

きた　どうもならぬ程

由良　そりや嘘であらう。

きた　嘘から出た誠でなければ、根が遂げぬではござりませぬか。

由良　イヤ、そもじのは、誠から出た嘘であらう。

きた　そんなら爰で、しつぽりと、帶紐解いて寐るわいなア。

由良　こりや有り難い、と云はせて置いて笑ふ氣か。

きた　そんなら心中見せませう。

由良　ナニ、心中を、この由良之助に見せようと云ふか。

きた　アイ、わたしが心中を、お目にかけようかいな。

由良　その心中は。
ト有り合せたる刀を取上げて
きた　その心中は。
由良　なんとするのぢや。
きた　指を切らうかいな。
由良　指を切つては不具者になる。平右衞門へ立つまいがな。
きた　そんなら髮を。
由良　髮を切つては尼法師、人に嫁入りがなるものか。
きた　そんならあなたと二世かけて、替らぬと云ふ。
由良　起證か。
きた　小指を切つて血を絞り
ト由良之助、懷中より、連判狀を出して
由良　コレ、この誓詞が書きたいのか。
きた　エ…御免候へ、他愛々々。
ト有り合せたる煙草盆を枕にて寢る。
由良　コレ〳〵、其方は寐るか。これはしたり、これへ寐ると云ふ事があるものかいの。サア、我れと一緒に奧へ行くまいか。これはしたり、よく他愛もなく寐入つたさうな……イカサマ、夫平右衞門に別れてより、甲斐ない女の心一つで、平右衞門が志しを繼ぎ、せめて一列の數に入り、及ばずながら忠義をと、せめて明暮れ思ひ込んだる平右衞門が女房、酒でも無理に呑まぬなら、これまで命は續くまい。誠の志しを見ぬうちは、一列には入れられぬ。一つの功さへ立つならば、其方が願ひ叶へてやらう。とは云ふものゝ、不便なる女の志し、醉ひが醒めたら、奧へおぢや。
ト唄になり、由良之助、羽織を脫いで、お北が裾へかけ、奧へ入る。下座より、吉五郎、橋がゝりより、五郎兵衞、出て來て、兩方より門口を明け
吉五　お身樣は五郎兵衞か。
五郎　おぬしは吉五郎か。
吉五　よい所で
兩人　逢つたなア。
ト兩人、一緒に尻を絡げる。直ぐに、吉五郎、出ようとする。五郎兵衞、吉五郎を押し返して内へ入り
五郎　待て吉五郎、われにやア云ひ分があるぞ。
吉五　さう吐かすわれにやア詮議があるぞ。
五郎　この五郎兵衞に詮議があるとは。
吉五　隱すな五郎兵衞、お身樣は師直どのゝ犬であらう

な。
五郎　なんだ。この五郎兵衞を犬だと吐かすか。
吉五　犬は雪を喜ぶもの。われが足跡梅の花、内の樣子を嗅ぎに來たのであらうがな。
ト五郎兵衞、呑み込んで
五郎　成る程、お身樣が感付いた通り、おらァ師直さまからの廻し者だワ。
吉五　さてこそ、平林嘉仲太どのゝ弟であらうがな。
五郎　コレ、滅多にそれを云つてくれるな。
吉五　合點がゆかぬと推量したに違ひのない、嘉仲太どのの廻し者か。
五郎　兄嘉仲太に頼まれて、入込んだ八百屋の五郎兵衞。まんまと由良之助が女房お石めを、人質に取つて置いたれば、この上は奥へ踏み込んで、師直公を敵と狙ふ由良之助を。
ト行かうとする。立廻りにて
吉五　ヤレ待て五郎兵衞。
五郎　なぜ留める。
吉五　あのお石さへ人質に取つて置きやァ、師直公を敵と討つ事はならない程に、早くお石を逃がさぬやうに。
五郎　合點がゆかない。どう云ふ事で師直公を、討つ事はならぬのだ。
吉五　大切なものなれど、お石めを手籠めにした上は、これをお主に見せてやるべい。
ト吉五郎、繪圖を出して見せる。
五郎　こりやァなんだ。
吉五　これこそ師直さまの屋敷の繪圖面。
五郎　アノこれが。
吉五　なんと嚴しい要害ぢやァないか。
五郎　ドレ、見せやれ。
吉五　ソレ。
ト五郎兵衞へ渡す。五郎兵衞、取つて頂き
五郎　エヽ、有り難い。
ト懐中して行かうとする。吉五郎、引留めて
吉五　待て。こりやァ五郎兵衞、その繪圖を持つて、どこへ行くのだ。
五郎　この繪圖面は、おれが方に入用だから、由良之助どのへ渡すのだ。
吉五　そんなら、うぬは。
五郎　由良之助の廻し者だワ。

吉五　一杯喰つたか。
五郎　この繪圖面を。
吉五　やる事はならない。
五郎　退きやアがれ。
　ト行かうとする。立廻りにて
兩人　ドツコイ。
　トこれより、立廻りの鳴り物になり、雪充分に降つて來る。五郎兵衛、吉五郎、立廻りあつて、トヾ、吉五郎、五郎兵衛を當て、繪圖を引ッたくり、緣の下へ隱れる。五郎兵衛、やう／＼氣の付きたる思ひ入れあつて、吉五郎が後を追ひかけ、門口へ出ようとする。奥より、由良之助、出て來り
由良　ヤレ待たれよ大鷲文吾。
五郎　由良之助どの。
由良　女房お石を離緣いたし
五郎　御本望でござらうなア。
由良　其許の働らき、忝ない。
五郎　あの師直の繪圖面を、只今奪ひ取り、お渡し申さう。
由良　コレ、その繪圖面なければ、我れ／＼が大望は成就いたさぬ。

五郎　すりや、あの繪圖なければ敵討は。
由良　叶ひ申さぬ。
五郎　エヽ、殘念な。
きた　その繪圖面は、ソレ爰に。
　トお北、起きて刀を拔き放し、直ぐに緣の上より刀を突き通して、吉五郎を抉り殺す。吉五郎、苦しむ思ひ入れ。
きた　平右衛門が筐の刀、淸水逸學、思ひ知つたか。
由良　早くも覺りしお北が働らき。ソレ、大鷲文吾。引出し召されい。
五郎　心得てござる。
　ト平舞臺へ飛んで降り、吉五郎を引出す。苦しみながら出て、直ぐに五郎兵衛に切り附ける。五郎兵衛、吉五郎を取つて押へて、懷より、繪圖面を引出す。
由良　その繪圖これへ。
　ト由良之助、受取る。
吉五　それを。
五郎　ドツコイ、動くな。
由良　敵の案内知れざれば、亂入せん事延引せり。この繪圖面が手に入るからは、由良之助が大願成就、これを

功に平右衞門は味方に付けたぞ。
きた　エヽ、有り難うござりまする。
ト此うちに、お石、おりう、おりん、出て來て
いし　由良之助どの。
三人　だん／＼あやまり入りました。
ト善九郎、後へ出て
善九　由良之助觀念
ト切つてかゝる。お北、善九郎を取つて押へる。
良由　出かした。
先づ今日はこれぎり。打出し。

忠孝兩國織（終り）


いろは假名四十七訓

いろは假名(がな)四十七訓(もじ)

寛政三年九月、大坂角の芝居に上場された十幕續きの通し狂言で、作者は奈河七五三助である。大序は「鶴ヶ岡の場」で、これは忠臣藏の大序と大同小異。二段目「足利殿中の場」は、本藏の代りに戸名瀬が師直へ進物をする。お輕勘平が色模樣になる。それへ師直が若狹之助に切られた夢を見るといふ趣向が加へられてある。三段目は「高田の馬場の場」で、田代安兵衞が叔父の仇を討ち、掘部の聟になる。廻つて「加村屋敷の場」では、判官の切腹に安兵衞のお目見得。五段目は「祇園一力の場」で、由良之助の遊興に、茅野和助が伴內となつて心底を試す筋が加へられ、すべて忠臣藏を逆にゆく趣向。六段目は本卷收錄の「彌作の鎌腹」で、七段目は「義平の拷問」八段目が本卷收錄の「鳩の平右衞門」九段目が「石堂屋敷の場」で由良之助が縫之助への暇乞ひ。十段目が「討入」といふ順である。

全體が、寶曆十一年十二月、角の芝居の「泰平いろは行列」へ、淨瑠璃の「大矢數四十七本」を加へて巧みに緊ぎ合せたもので、鎌腹も「勘平鎌腹」で「四十七本」の中にあるのだが、直し方が巧いので大いに行はれ、「鎌腹」は今でも流行つてゐるし、「鳩の平右衞門」は默阿彌の補筆で殘り、「高田の馬場」「加村屋敷」「義平拷問」「石堂屋敷」なぞ、いづれもツイこの頃まで、よく上演を見た場面なのである。八段目は、平右衞門（三桝大五郞）母所で役割だが、番附が不完全なので、肝心の鎌腹の役割が不明である。

(姉川新四郞)お北(芳澤いろは)了竹(三桝松五郞)力彌(淺尾彌太郞)喜多八(小川吉太郞)の役割であつた。江戶での初上演は、前記「太平記忠臣講釋」を三代目歌右衞門がやつた時で、卽ち文化九年七月の中村座。彌作（中村歌右衞門）おかや(藤川官吉)彌五郞(關三十郞)七太夫(大谷門藏)だつた。平右衞門の初演は慶應三年八月の市村座で扉はその時の番附。平右衞門(市川九藏)お北(藤川ともゑ)母は、父の平次兵衞に直して坂東龜藏が演じた。

本卷には、眼目の二幕だけを收錄した。

いろは假名四十七訓

神崎村彌作内の場

芝村七太夫屋敷の場

役名——百姓、彌作。同女房、おかや。芝村鄉士、七太夫。江口半平。千崎彌五郎。

造り物、三間の間茅家根、向う赤壁、納戸口。上手の方折廻し障子屋體。橋かゝり、塗垂れ、門口いつもの所にあり。この體にて、在鄉唄にて幕明く。

ト向うより百姓彌作、簑笠着て、鐵砲をかたげ、出て、來かゝる。橋がゝりより百姓三人、鐵砲をかたげ出で、花道中ほどにて行き合ひ

三人　オヽ、朝早うから彌作、鐵砲かたげ、どこへ行かしやつた。

彌作　さればいの、山際に在る畑へ、この間から每晚々々猪が來をつて、畑を荒し居るゆゑ、鐵砲打つてこまさうと思うて、昨夜、宵から仕掛けて待つてゐたが、畜生でも怖いものぢや。どうして知り居つたやら、昨夜はとんと來居らなんだわいの。

百一　そりや、むごい目に逢はしをつたなう。

百二　定めて寒かつたであらう。ちやつと去んで、何ぞ熱う喰やれ。

彌作　さうしませう。

三人　休まつしやれいや。

ト在鄉唄にて、百姓三人向うへ入る。彌作、本舞臺へ來る。門口へ來て

彌作　戻つたぞよ。

かや　アイ〳〵。

トおかや、在所者の拵らへにて、前垂れ掛けにて、膳椀持つて出で

いま戻らしやんしたか。定めし寒かつたでござんせう。熱う煮いて置いたお粥たべさんせ。

トいふうち、彌作、草鞋を脫いで、よき所へ坐り

彌作　オヽ、粥よかろ。とんと猪めにかゝつて夜通しに冷

えた。わりや内にて温う寝てゐたぢやあらうなア。

ト粥を喰ひにかゝる。

かや　何を云はんすやら。めん／＼の男の夜通しに外へ出して置いて、女房の身で熱うして、寝てゐられるものぢやないわいな。常住二人引附いて寝てゐて、たま／＼獨り寝ると、どこやらがそがそがと、大抵淋しいものぢやないわいな。お前、また猪打ちに行くと云うて、どこぞの可愛らしい猪打ちに行きやせなんだかえ。

彌七　何吐かし居るぞい。そんな色氣は昔の事、今は色氣も失せて、日向くさい畑仕事で、朝から晩まで立ちづくめ。夜に入ると腰はムリ／＼。色氣どころであらうかいやい。

かや　イカサマ、云はんすりやさうぢやなア。こなさんとわしが女夫になつたも、アヽ、やかましい事でござんした。忘れもせぬ、盆の十五日の晩、村中の踊りをかこつけ、宵から妾の内へ來てゐたを、父さんや母さんが見附けて、人の娘を引込んで置きやる彌作、不埓な男ぢやと怒らしやんして、わしを引ツ立て去なんした。ナニガ、それから去んで親子喧嘩。兩親の云はツしやるには、あの彌作は、去年もすんでの事に未進に詰まり、水牢へ入らうとした。そんな貧乏な百姓へ、此方のおかやは、やる事ならんと云はしやんす。わしや又、やつて下さんせぬと死ぬると云ふ。ナニガ、やつさもつさが、お代官七太夫さまへ聞えて、あなたの御挨拶で、父さん母さんも否とは云はれず、事が濟んで、妾の内へ嫁入り。いま此やうに二人仲よう暮らしてゐるも、皆七太夫さまのお庇。必らず仇に思はんすなえ。

彌作　勿體ない事を云へ。あの七太夫さまは、まだそればかりぢやない。いま云やつた水牢の時も、あなたが身に引受けて、いろ／＼とお世話なされて、たうとう水牢へも入らなんだは、皆七太夫さまのお庇。それぢやによつて、モウ／＼おれが命の恩送りぢやと思うて、一日も缺かさず、毎日々々畑へ行きがけに、庭までなりともお見舞ひ申すぢや。時に、また忝ない事を云うて下さるわいなう。

かや　そりやマア、どんな事を云はつしやるぞいなア。

彌作　今度弟彌五郎が御主人、鹽冶判官さまが死なつしやつて、家中は皆餓か浪人、弟彌五郎も内へ戻つてゐたが、なんと、浪人してゐても詰まらぬゆゑ、奉公の口を尋ねると云うて大坂へ行たが、その事を郷士の七太夫

さまが聞かしやつて、あの代官、印南瀬左衛門さまの所には、まだ跡取りの一子とてもないゆゑ、養子を媒人してくれと、常々頼んでござるところに、幸ひ其方が弟を養子にやれば、あれが仕合せ。殊に、おれが爲にも恩のある七太夫さまの仰しやる事ゆゑ、成る程、弟が歸りましたら申し聞かせ、瀬左衛門さまへ養子に上げませうと、請合うて置いたわいの。

かや　そりや、よい事でござんす。弟御の彌五郎さまが、七太夫さまのお世話で、代官の瀬左衛門さまへ養子に行かしやんすと、こなさんやわしが爲にもよし、また大恩ある七太夫さまの手前もよござんす。ほんにそりや嬉しい、いツち好い事ぢやなア。

彌作　どうぞ今日あたり、戻つてくれればよいが。オヽ、滅相な。話しに身が入つて、粥が冷たうなつた。

かや　待たしやんせ。盛りかへて來るわいなア。

彌作　そんなら、さうしてたも。

かや　アイ〳〵。

トまた在鄕唄になり、おかや、椀持つて納戸へ入ると、向うより彌五郎、旅がけの形、大小を差し、菅笠を持つて來て、門口へ入る。

彌五　また戻りましてござる。

彌作　オヽ、彌五郎。今も噂してゐたわいの、サア上がりや。コリヤ〳〵、おかや〳〵。

かや　アイ〳〵。こなさんもマア、盛る間があるわいなア。アタ忙しない。

ト云ひ〳〵出て來る。

彌作　イヤ、彌五郎が戻つたわいなう。

かや　オヽ、彌五郎さん、よう戻らしやんしたなア。

彌五　おかやどの。この四五日はお目にかゝりませぬ。さて、大坂表へ參つたが、事ない繁昌の地でござれども、奉公口はとんとござらぬ。こりや矢張り關東表へ參らずば、よい主取りはござるまいわい。

彌作　イヤ、彌五郎、其やうに遠い所へ駈け歩かいでも、わが身の上は兄が納めて置いた。心遣ひせぬがよい〳〵。

彌五　それは千萬忝なう存じまする。して、その納まりとは、如何やうな筋でござるな。

彌作　其方も知つてゐる、この芝村の鄕士、七太夫さまのお世話で、印南瀬左衛門さまへ其方を養子に遣はして欲しいとの望み。如何にも遣はしませうと約束して置いた程に、さう心得て、瀬左衛門さまへ行きや。

彌五　これはまた兄者人、あまり火急な御相談。マア、拙者が立歸つた上にて、一應も、再應も、とくと思案を仕つたその上にて。

彌作　ハテサテ、さういふ手延びな事ぢやない。この間から其方の戻りを待つてござる。コレ、よう合點したがよい。例へ鎌倉へ奉公に行くにしても、腹切つて、城をも國をも取上げられた鹽冶の浪人と聞いたら、滅多に抱へる者はないぞや。其やうな口惜しい目に逢はうより、七太夫さまが仰しやる養子に、行きや〳〵。

彌五　ハテ、よう物を辨まへて見さッしやれ。鹽冶さま御在世の時は、相應に家中の列にも加はりしこの彌五郎。如何に本國離散いたせばとて、代官へ養子に參つたなどと噂いたさるゝは、何とやら腑甲斐なうござる。それよりは鎌倉へ參り、如何ほどの小知にても苦しうござらぬ。主取り致すがよろしうござりまする。

彌作　ハテ、固意地な。兄が悪い事は云はぬわいなう。

彌五　イヤ、例へ善い事でも、養子の儀は幾重にも御容赦下さりませう。

彌作　其やうに云やると、おれがどうも七太夫さまへ、云ひ譯がないわいなう。

彌五　でも、拙者にお尋ねも下されず、お約束召されたは、こなたの不調法と申すものでござる。

彌作　サヽ、その兄の不調法を償うてくれるが、弟の役ぢやないかいなう。

彌五　ぢやと申して、そりや無體と申すものでござる。

彌作　其方の身の納まりをするが、どうして無體ぢや。

彌五　得心いたさぬ者を、養子にやらうとは、なんと無體ぢやござりますまいか。

彌作　それぢやによつて、段々勸めるぢやないか。

彌五　お勸めなされても、不承知でござる。

彌作　そりや、其方、我まゝぢやわいなう。

彌五　無理に遣はさうと云はつしやるは、こなたの氣隨ぢや。

彌作　イヤ、こなたの我まゝぢや。

彌五　イヤ、こなたの氣隨ぢや。

彌作　其方ぢや。

彌五　こなたぢや。

ト兩方せり合ふ。此うちおかや、ウロ〳〵して兩人の中へ入る。

かや　コレ、マア〳〵、待たしやんせいなア。其やうにせ

り合ふ事はないわいなア。どちらからどう廻つても、弟御の事を思うて云はしやんす事ぢやによつて、急に思案も極まりますまい。マア／＼、ゆつくりと酒でも飲んで、機嫌よう相談したがようござんす。ドレ、酒買うて來て一つ上げう。

ト徳利を取つて來て

コレ、留守の内に、必らずせり合はんすなえ。

彌五　なんの／＼。左樣なら、大儀ながら。

かや　オヽ、アノ云はしやんす事わいの。ドレ、酒屋へ行て來うか。

ト唄になる。おかや、徳利提げて橋がゝりへ入る。あと合ひ方になり、彌五郎こなしあつて

彌五　兄者人、こなたの志し、忝なうござりまするが、彌五郎が養子に參られませぬといふ仔細、おかやどのにも打明けられぬ大事の樣子、お話し申しまする。必らず他言なされて下さりますな。

彌作　なんの他言せう。マア、その養子に行かれぬといふ譯を云やいなう。

ト彌五郎こなしあつて表へ出て、あたりを見廻し、また戸をさし、彌作が側へ坐り

彌五　養子に參らぬと申すその仔細は、去年伯州の本城は明け渡し、我れ／＼離散の節、その夜密かに由良之助どのと閑談に及びし諸士は、僅か四十餘人のその輩。何卒亡君の仇、高の師直を討たんと、義を金鐵に比し堅め、例へ如何やうの事ありとも、親兄弟にも語るまじと、神文を認め、相別れ、或ひは武士をやめ、町人百姓と姿を替へ、又は善き主取りなりと、思ひ／＼に僞はりを以て、親兄弟、緣者の端までも騙かるは、他聞を憚かる計略。この四五日他行いたしたは、京都に忍びござる諸士頭、原鄕右衞門どのへ、四十餘人の者ども集り、鎌倉へ發足の日限を定め、卽ち明日出立と契約仕り、立歸りしは、兄者人へ心の暇乞ひ仕らん爲。主君の爲に後榮を捨て、命を塵芥より輕んじ、本意を遂げし上、皆追腹の義士一統の堅め。それに、なんと養子に參れませうか。兄者人、エヽ、有り難う存じまする。誠に、世は後代なれども、斯く本心を定めし上、神文まで差上げたれば、なんと違背なりませうか。茲の所をお聞分けくだされ、何卒七太夫どのに、よきお斷わり仰せられ下さりませう。兄者人、どうも養子に參られぬと申す、仔細は斯くの通り。必らず／＼、この儀、他言なされ下されまするな。

彌作　樣子は段々、この通りでござりまする。

彌作　シタリ、成る程侍ひが性根を据ゑたら、そんなものであらう。なんぼ兄に産れても、この彌作は生れ落ちたる土百姓、其方は小さい時から、武家奉公に遣はして置かしつたによつて、魂ひが分侍ひぢや。出かした〳〵。お主の仇には、倶に天を戴かずとやら聞いてゐる。さうぢやさうぢや。敵師直を討つて、名を世間へ知らしてたも。出かしやつた〳〵。

彌五　すりや、お聞分けくだされ、七太夫どのへお斷わりを。

彌作　サア、云ふが、なんと云うたものであらうぞ。

彌五　申し、只今申した儀、曾以て他言はなりませぬぞ。

彌作　そりや、よう合點してゐるわいなう。

彌五　とくと御承知かな。

彌作　よいわいなう〳〵。

彌五　然らば只今、七太夫どのへお出で下され、首尾ようお斷わりを、仰しやつて下さりませい。

彌作　アノ、いま行くのかいなう。

彌五　只今も申す通り、京都へ參り、彼方より直ぐに發足仕るゆゑ、只今歸りましたは、立ちながら暇乞ひ仕らん爲ばかり。拙者がこれに居るうち、さつぱりと、お斷わり仰せられて下さりますると、出立仕る拙者も、心がさつぱりと致すと申すもの。サヽ、只今、お出で下され〳〵〳〵。

ト　せり立てる。

彌作　サア〳〵、そんなら行くわいの。行くは行くが、なんと云うたらよからうぞ。

ト　ぐづ〳〵云ひながら、立ち上がる。

彌五　必らず他言はなりませぬぞ。

彌作　サア、合點ぢやわいなう。

彌五　他言なさると、直ぐに切腹仕るぞ。

彌作　サア〳〵、よいわいの。コレ、必らず逸まるまいぞ逸まるまいぞ。

ト　云ひ〳〵門口へ行く。

彌五　拙者も餘程心急きにござります。どうぞ早う、お出で下さりませう〳〵。

彌作　サア、行くわいなう〳〵。

ト　云ひ〳〵花道へ行きかける。

彌五　お歸り下さるゝまで、これに待つて居りますが、もし隙取り、明日京都の會合に遲なはりますると、折角參

つても無駄事。その時は矢ッ張り切腹。

彌作　ヤア、滅多な事はすまいぞ。

トきつと云ふ。

サア、よいわいなう。行くは行くけれど、大恩ある七太夫さま、なんと斷わり云うたらよからう。困つたものぢや。

ト此やうな事云ひ〳〵、思案して向うへ入る。ト彌五郎、内へ入り、下にゐて、手を組み、思案して、また立ち上がり、門口へ出て彌作を見送り、彌作入り切ると、門口をしめて立ちながら

彌五　ムウ。

ト思案のこなしあると、チョン〳〵にて返し道具。

造り物、一面の二重舞臺、向う襖、臆病口折り廻し障子屋體。橋がゝり屋敷塀。門口、門構へ。右は鄕士家の體。平舞臺に七太夫、着附け、羽織、大小にて坐りゐる。この前に百兩包みを折板に載せあり、次に平樽、肴臺直しあり、江口半平、着附け、上下にて下手にゐる。家來一人扣へゐる。この體にて道具納まる。

半平　拙者は印南瀨左衞門が家來、江口半平と申す者、先達て貴公樣のお世話を以て、百姓彌作が弟千崎彌五郎どの、此方の子息に申し受けたく、即ち印と仕り、金子百兩持參仕り、殊に、今日は日柄もよし、それゆゑ輕少ながら、この品御披露くだされ、右彌五郎どの、今日手前屋敷へ御同道下されませうならば、主人の喜び、使者に立つたる拙者まで、如何ばかり大悦至極に存じ奉りまする。

七太　これは〳〵、御苦勞千萬。立歸り、瀨左衞門どのに申されうには、しるし金子百兩、慥かに受取り、彌作に相渡すでござらう。まつたこの品、彌作方へ送り遣はし、後刻彌五郎を同道仕るでござらう、と申し上げられい。

半平　畏まつてござりまする。御口上の趣き、主人に申し聞けなば、さぞ喜び。拙者は最早お暇申さう。

七太　然らば、ござるか。

半平　おさらばでござりまする。

ト家來連れ、半平、橋がゝりへ入る。七太夫、右の樽肴を片側へ直し、百兩包みを持つて

七太　百姓彌作が弟彌五郎を、代官瀨左衞門方へ養子の取次ぎ、この印金百兩は、彌作は沙汰なしに、この七太

夫が世話代に着服。ムウ、うまい〳〵。
ト百両包みを懷中へ入れると、在郷唄になる。向うより彌作出て來て、門口へ來かゝり、入りかねる思ひ入れあつて、たうとう內へ入り、モヂ〳〵してゐるこなしあつて

彌作　お賴み申しませう〳〵。
七太　アレ、表に誰れか參つたぞよ。
ト云ひ〳〵彌作を見て
オ、誰れかと思つたら彌作、お來やつたか、
彌作　ハイ、七太夫さま、ちよと、急にお目にかゝりたい儀がござりまする。
七太　身共も只今、其方へ人を遣はす所であつた。サアサア、これへ來やれ。
彌作　ハイ〳〵。イヤ、これがようござります。申さぬと私しも心が急きます。あなたに申し上げたいといふは
七太　大方右の儀であらう。
彌作　ハイ、左樣でござりまする。
七太　されば、その儀につき、この間其方が歸つた跡にて、直さま代官瀨左衞門どの方へ參り、いよ〳〵今日百姓彌作が弟彌五郎儀、貴公樣の賴みの養子の儀對談仕りしところ、即ち彌作得心の上、彌五郎を遣はしますると、其方が承知の趣き話したればな、瀨左衞門どのにも殊ない喜び。それよりあの方の上家中へも、彌五郎を養子に貰ひ受けしと披露いたされし所へ、一家中も先づは跡目相續めでたい、さりながら、善は急げといへば、早く彌五郎を呼び取り、披露目いたせよと、每日々々の催促。それゆゑ瀨左衞門どのより使者が參り、只今歸つたる所ぢや。即ちこれを見やれ。此やうに樽肴をおこされた。幸ひ今日は日柄もよいとあつて、この樽肴賴みの印を、其方へ持たせ遣はす積り。よい所へお來やつた。いよいよ彌五郎は承知か。承知であらう。其方が顏色、どうやら首尾なつた體に見える。段々の世話、忝ない〳〵。いま其方と同道にて、印の樽を持たせ遣はさうか。但し其方先に歸り、後より持たせ遣はさうか。同道いたさうか。
ト七太夫の方から段々たくしかけて云ふ。彌作、先を越されて、ウロ〳〵して
彌作　ヘ、申し〳〵、マア〳〵〳〵、私しが、申しまする事、お聞きなされて下さりませ。この間、お約束申しまして、內へ歸り、弟が戻りを待つて居りましたが、や

う〳〵今朝ほど歸りましたゆゑ、早速右の由を申し聞かせましてござりまするが、申し、私しは得心でござりまするか、兎角、無茶苦茶を申しまして、

ト後は口の内にて云ふ。

七太　彌作々々。そりやどう致した事ぢや。先日、其方へ申したは、存じの如く、瀬左衞門方は未だ世繼ぎの一子なし。幸ひ其方が弟彌五郎、當時主家の沒落により、其方へ歸り、浪人とあり、これ幸ひ。何卒瀬左衞門どの方へ遣り、養子に遣はしくれぬかと申したれば、その時、其方が何と云うた。大恩ある七太夫さまのお世話と申し、瀬左衞門さまの養子とならば、弟彌五郎の仕合せと申すもの。例へ彌五郎が如何やうに申しませうとも、私しが得心させて遣はしませうと、其方は身共へ丈夫に云つて歸つたぞよ。それに變替へ致すは。エヽ。聞えた、この間より大坂へ立越え、あの方にて有德なる町人へ仕拵らへ、金を取つて、彌五郎を養子に遣はす約束いたしたな。この七太夫を馬鹿に致すか。

彌作　イエ〳〵、滅相な。そんな事を。

七太　エヽ、吐かすなやい〳〵。おのれは畑かぢりの土百姓と思へどもナ、憎いは彌五郎め。おのれも武士でないか。僅かの金銀に目がくれて、變替へ致すとは、人畜生めが。どうしてくれうな。

彌作　申し〳〵、其やうに仰しやつて遣はされますな。彌五郎は中々金銀に目くれるやうな奴ではござりませぬ。弟めにも尤もな所がござりまするゆゑ。私しも是非なうお斷わり申しますのでござりまする。

七太　ムウ、弟にも尤もがあるとは、どういたした儀ぢや。その仔細を云へ。樣子によつては料簡の致しやうもある。サア、その仔細はどうぢや〳〵。サア、どうぢやどうぢや。

彌作　その樣子は。

七太　どういふ仔細ぢや。

彌作　それはなア。

トぐづ〳〵云ふ。

七太　サア、云はぬか。その仔細も云はぬか。

ト彌作うつむく。

ム、すりや、これも僞はりぢやな。

彌作　イエ〳〵、僞はりぢやござりませぬ。

七太　僞はりでなくば云やれ。サア〳〵、云はぬかよ。措き居らう。詞甘ういへば、武士を馬鹿にするなア。もう

よい、もう頼まぬワ。……ハテ、是非に及ばぬ、といふとて、其方をぶち殺すも無益の殺生。なんとせう。七太夫が麁忽からぢや。日頃から正直な彌作と思ひ、よしない事を頼み、今では後悔。武士々々の契約ならば、かゝる見違ひはあるまい。何を云うても、田夫土民を頼んだは身共が誤まり。今更誰れをか恨みん。というて、七太夫虚言者となつては武士が立たぬ。この上は切腹するより外はない。彌作、其方が料簡一つで、この七太夫を殺さうと、生かさうと、御身の心次第ぢや。是非々々彌五郎はくれぬか。

ト七太夫せり立て云ふ。彌作、切なきこなしにて、差し俯向き返答せぬゆゑ、七太夫、氣をいらちたるこなしあつて

如何やうに云うても、返答せぬは、不承知ぢやなア。不承知ならば、もう是非に及ばぬ。

ト刀を抜き、紙にて巻き、こなし、腹へ突ッ込まうとする。彌作あわてゝ止める。

彌作　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。

七太　イヤ〳〵、放せ〳〵。

彌作　ハイ〳〵。様子・申しまする〳〵。

七太　すりや、仔細を云ふか。

彌作　申しまする〳〵。マア〳〵、お待ちなされて下さりませい。

七太　ムウ、様子申さうとあるを、たつて切腹いたすでもない。この身に虚言は致さぬ。その仔細はなんと。どうぢや。

彌作　ハイ。これはモウ、親兄弟の中でも、滅多に申されぬ事でござれども、あなたが様子云はねば、腹切ると仰しやりますゆゑ、是非なう申しまするが、必らず他言なされて下さりますなや。

七太　なんの〳〵、他言せうぞ。して、その仔細は。

彌作　ハイ。

トあたりを見てこなしあつて、門の外をとくと見廻し、内へ入り、七太夫が側へ摺り寄つて、小聲になり

その様子は、斯うでござりまする。御存じの通り、弟彌五郎は伯州の家來。去年の騒動にて、家中は散り〳〵ばら〳〵、中にも大星由良之助どのを頭として、四十餘人の諸士が、師直を主の敵と討つ企て。弟彌五郎も其うちへ加はり、明日は皆鎌倉へ出立いたしまするゆゑ、どうもお前様の養子に參りまする事がなりませぬ。併し、

この事は親兄弟にも他言せまいといふ、神文を書きたれば、必らず人に云ふなと申しました。それも私しが、かかる大切な密意を承はりしも、あなた樣のお賴みを達せん爲、段々勸めまするにつけ、據ろなく物語りいたしました事なれば、御推量下され、必らず人に仰しやつて下されまするな。私しがこの譯申さねば、あなたが今のやうに腹切ると仰しやるゆゑ、是非なう申しました。樣子といふは斯くの如くでござりまする。

七太　ムウ。ハテ、思ひ寄らざる珍事を承はつた。ア、、誰れしも武士はさうあるべき事。數多ある家中は離散いたし、纔かに殘る四十餘人、亡君の仇を討たんと義を金鐵に固めし段、感じても猶餘りあり。ハア、天晴れ／＼。斯く義心の厚き千崎彌五郎、猶以て慕はしい。かゝる仁を瀨左衞門方へ養子となすは、この身の大慶。他門へ外聞。彌作、いよ／＼以て彌五郎を貰つたぞよ。彌作、一時も早く立歸り、彌五郎を同道してたもれ。サ、、、、早う／＼。

彌作　そんなら、どうでも弟を。

七太　貰はねば武士が立たぬ。コレ、彌作、よく物を合點しやれ。その敵と覘ふ師直は、高家の職といひ、天下の執事。首尾よく本望達したところが、四十餘人は皆逆磔け。所詮生きて歸る事はならぬぞよ。事によつて、一家一門兄弟の其方も、どういふお咎めに逢はうも知れぬぞよ。現在一人の弟を見殺しにせうよりも、瀨左衞門どのへ參れば、命に別條なし。村方の捌きを叮嚀に執り行へば、一生樂々と暮らされるといふもの。彌作、是非勸めてくりやれ。それでも、たつてならぬと云へば、最前より申す通り、身共は切腹。但し突ッ込まうか。

彌作　ア、、滅相な。

七太　然らば弟に得心させるか。

彌作　サア、それは。

七太　但し突ッ込まうか。

彌作　サア。

七太　得心か。

彌作　サア。

七太　腹切らうか。

彌作　サア。

兩人　サア／＼／＼／＼。

七太　どうぢや。

ト腹切らうとするを彌作、その手に縋り附き、止める。

彌作　サヽヽヽヽ。マア一應、申して見ませう。マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。

七太　ムウ。すりや、得心いたすとな。

彌作　どうぞ申して見ませう。

七太　ムウ　得心いたさうといふに、無體に此方も事を好まぬ。然らば早く立歸つて、今日中に同道しやれサ。

彌作　アノ今日中に。

七太　不承知ならば。

　トまた刀に手をかける。

彌作　サヽヽヽ。どうぞ得心させて、連れて參りまする。

七太　一時も早く〳〵。

　トせり立てる。

彌作　ハイ〳〵。左樣ならばお暇申しまする。

　ト云ひ〳〵、捨ぜりふにて門口へ出る。七太夫立ちかゝり

七太　彌作、待て。

彌作　ハイ、ヽヽヽヽヽ。

　ト立ち留まる。

七太　只今直ぐに承知の返答いたせばよし、返答延引に及ぶと、此方より仕掛け、彌五郎と對談の上、事によつては、武士と武士との論に及び、討ち果さうも知れぬぞよ。

彌作　エヽ。

七太　そこを無難に納めるは、其方が働らき。

彌作　ハイ。

七太　性根を据ゑて立歸れ。

　ト彌作キッと思案して

彌作　ようござりまする。呑み込みました。

七太　然らば早く。

彌作　ハイ。

　ト彌作、一散に向うへ入る。七太夫、門口へ出て、彌作を見送り、內へ入り、二重舞臺の石壇に立つて、思案のこなしあつて

七太　いま聞いたる樣子では、義を金鐵と固めたる義士の面々、なか〳〵變ぜぬ所存。もし彌五郎がたつて承知せぬ時は

　ト最前の百兩包みを出して

　この百兩は無駄事。

　ト百兩包みを懷へ入れ、兩手を組み

　こりや一思案せずばなるまい。

　ト二重舞臺へ腰をかけ、キッとこなしあり。とチョン

チョンにて返し。廻り道具、在郷唄になる。
造り物、元の彌作の内になる、平舞臺に彌五郎、旅立ちの體にて、側に旅用意の風呂敷包みを置き、酒を飲んでゐる。おかや酌してゐる。側に丸笠に肴鉢、土盞杯あり、襠袍を持ち、おかや旅立ちを祝うてゐる見得。この體にて在郷唄にて道具納まる。

かや　大事な旅立ち、祝うて一つ飲ましやんせいなア。

彌五　これは千萬忝なう存じまする。もう構うて下さるな。心が急けば、御酒は氣根に仕らう。

かや　なんぼうお前が急かしやんしても、こちの人が戻らしやんせにや、滅多に立たせは致しませぬ。

彌五　このマア兄者人は、何をしてゐさつしやる。殊なう隙が入る事ではあるぞ。

と云ひ／＼酒を飲んでゐると、向うよりバタ／＼にて、彌作戻つて來て、門口をズツと入り

彌作　彌五郎、いま戻つた。

トすつと上へ坐る。

彌五　只今お歸りなされましたか。

かや　オヽ、戻らしやんしたか。お前の留守のうち、あんまり愛想がなさに、鹽魚で祝うて酒を出してゐたわいなア。

彌作　オヽ、そりやようしやつた。

彌五　兄者人、七太夫どのへ、右のお斷わり仰せられたか。大方、七太夫どのも承知でござらう。拙者もその返答承つて出立いたさうと存じ、こなたの歸りを待つて居つた。最早日足も餘程過ぎました。隨分御健勝でお暮らし下されい。おかやどの、段々とお世話、忝なう存じまする。この上ながら兄者人の儀、よろしくお頼み申しまする。

かや　そりや氣遣ひさしやんすな。

彌五　猶詳しき儀は、あの方より書通を以て、お禮申し上げませう。最早お暇申しまする。

ト立ち上がり、行かうとする。彌作止めて

彌作　コレ、彌五郎。マア／＼、待つてたも／＼。

彌五　ムウ、なんぞ御用でござりまするか。

ト下にゐる。

彌作　サア、用というたら今の事ぢや。さて難儀なは七太夫どのぢや。逸まつて瀬左衛門どのへ遣はさうと請合うて戻られたゆゑ、即ち今日は日柄よいというて、瀬左衛門どのから印の樽肴を持つておこさうとする所へ、おれ

が行て段々と事を分けても、聞き屆けぬ固意地者。一家一門へも披露をしたれば、世間へ立たぬ、腹切つて死ぬると、云はるゝわいな。

彌五　そりや七太夫どのが無體と申すもの。手前がしつかりと、參らうと契約いたしたといふではなし。一家一門へあの方で披露召されたは、こりや七太夫どのの麁相と申すもの。この身は存ぜぬこと。なぜその儀をとくと斷わり云うては歸らしやれぬ。

彌作　サア、云うたわいの。

彌五　それに、マア

彌作　サア、云うたは云うたけれど、そこが彼の雉と鷹。彼方は郷士のてつぺい押し。此方は百姓。この事が首尾せずば切腹すると、刀ひねくり廻しての切端。おれもどうも仕様はなし。ソレ、彼の今の事をなア、云うたわいなア。

ト　おかやに隱してこなし。

彌五　ソレ、彼の今の事とは、何でござるぞ。

彌作　エヽ、ソレナ、彼の今の事いの。

ト云うても彌五郎合點のゆかぬこなし。

かや　コレ、こちの人、お前もをかしい謎かけるやうに、云はんすに依つて、彌五郎さまが合點がゆかぬわいなア。打割つて斯う／＼いふ譯ぢやと、とつくりと云うて上げさんせいなア。

彌作　エヽ、何を、女子の知つた事ぢやない。すッ込んでゐい。……コレ、彌五郎、ソレ、今の此方の事いの。

ト　おかや、腹立てもどかしがる。

かや　何ぢやなア、彌作どの。合點のゆくやうに云うて上げたがよいわいなア。斯う三人並んでゐるのに、誰れに遠慮をして物を隱さしやんす。ほんに、わたしや、ついぞお前は元より、弟御彌五郎さまは御兄弟御の事ゆゑ、内證の事まで打割つて話すに、それにお前なんで隱さしやんす。そりやハヤ、わたしが聞いて惡い事かも知らぬけれど、彌五郎さんの思はしやんす手前もあり、氣が惡い事なら、聞かいでも大事ないぢや。女房のわしに隱す事なら、あんまり碌な事ぢやあるまい。隱す事によい事はないものぢや。聞きたい事はなけれども、あんまり氣が惡いぢやないかいなア。

ト　腹立て、此方へ來て身を背け、下にゐる。彌作、氣の揉める思ひ入れあつて

彌作　エヽ、何にも知りはせいで、熱を吐かすわい。おの

れに隱しはせぬわい。

かや　そんなら又、人の合點のゆくやうに、云うたがよいわいなア。

彌作　それをおのれに習はうかい。けたいの惡い事吐かしをるな。エヽ、氣の揉めるのに。

かや　云はいでかいな。人に物を隱さんすによつて、腹が立つわいなア。

彌作　此奴が〳〵。つべこべとよい加減に、默り居らいでなア。

かや　イヽヤ。默つて居ん。云うたらどうさしやんす。

彌作　おのれ、男に向つて、云うたらどうするとは。

ト彌作腹立て、立ち上がる。

かや　堪忍がならざ、どうなとさんせ。

彌作　オヽ、斯うするわい。

トおかやを蹴る。

かや　お前、蹴らんしたぞえ。

トおかや腹立て、彌作に摑み附く。彌作突きやる、おかや、また行かうとする。彌作肩を脫ぎ、くらはさうと氣味合ひする。彌五郎、兩人が中へ入り

彌五　これはしたり、兄者人。高が女儀ではござらぬか。あまり大人氣なうござる。

ト彌作の方を宥める。

彌作　おれが方ばかり云はずと、彼奴が頰桁を止めやいなう。

かや　女房のわしに、物を隱さんすによつてぢやわいなア。

ト云ふ。また彌五郎おかやの方へ來て

彌五　おかやどのもおかやどのぢや。女房の身で男に口を過すとは、世間へ聞えても外聞が惡うはござらぬか。マア〳〵、鎭まらつしやれ。

ト双方鎭まり、下にゐる、彌作は氣の濟まぬ思ひ入れ、手を組み、思案してゐる。彌五郎、氣の毒なこなしありて

彌五　拙者も大切な旅立ち。それに其やうに、口論さつしやれては、何とも氣の毒。マア〳〵、お二人とも氣を鎭めさつしやれ。

かや　あの人さんの氣の揉める事は存じませぬよつて。

彌五　サヽヽ、それも云ふには及ばぬ。マア、ようござる〳〵。

トおかやを宥め、彌作の側へ行て

兄者人、いま云はつしやれた彼の今の事とは、最前拙者

が申した四十餘人の者ども、鎌倉へ下る儀を、七太夫どのへ云はつしやれたか。

彌作　おいなう。

彌五　アノ、その儀を。

彌作　云うたわいなう。

彌五　ホイ。

ト大きに驚ろき、彌作が胸倉を取つてキッとなり

エヽ、こなたはなう、例へ親兄弟にもせよ、この事他言せまじと誓ひの神文を認めたと、最前とくとこなたに云うたではないか。

彌作　ムウ。

ト差俯向く。

彌五　エヽ。

ト彌作を突き飛し、無念のこなしあつて

みだりに口外せしは我れらが誤まり。一大事を聞いたる七太夫、討ち放して我れも切腹。さうぢや。

ト表へ駈け出す。彌作、待てと止める。彌五郎、振り拂ひ駈け出すを、おかやも止めるを取つて突き退ける。彌作、後抱きに彌五郎を抱き留めるうち、おかや、門口の戸をさし、戸口に立つてゐる。彌五郎、身を跪くを、彌作いろ／＼と宥めて

彌作　コリヤ彌五郎、大事の事は、云やせぬ／＼／＼、云やせぬわいなう。

ト止めながら云うて、呑みこます。

彌五　ヤア。

彌作　なんぼう百姓でも、大事の事は知つてゐる。なんの滅多に云うて堪るものか。云やせぬ／＼。云やせぬわいなう。

彌五　ムウ、すりやその事を打明けて、云ひはさつしやれぬか。

彌作　なんのマア。

彌五　ア、嬉しや。それ聞いて安堵いたした。

彌作　そんならモウ、七太夫どのゝ所へ行きやせぬか。

彌五　右の一大事さへ仰しやらねば、なんの參りませう。

彌作　ア、嬉しや。それを聞いて落ち附いた。

彌五　然らば七太夫どのへ、いよ／＼斷わり云はつしやれたか。

彌作　サア、云うたは云うたけれど、どうで機嫌のよい事はないてや。

彌五　そりやその筈でござる。というて、根があの方が無

體と申すものでござる。エヽ、打ッちやつて置かつしやれ。イヤ、兎やかういふうち、日もたけました。もう參りませう。

ト立つて行きかけるを。彌作また止めて

彌作　彌五郎、待つてたも〳〵。大事の旅立ちに、モヤモヤ氣に掛かつて悪い。ニツコリ笑うて立つて下され。めでたう杯せう。

かや　こりや杯とは、よう氣が附いたわいなア。此まゝ立たしましては、どうやら氣にかゝつて悪い。幸ひ杯も爰にあり。ドレ〳〵。

ト土盞を兩人が眞中へ直す。彌作、杯取り上げ、おかや酌しながら

お前も祝うて一つ飲まんせ。

トつぐ。

彌作　サア、彌五郎、さしまするぞ。

彌五　然らば頂戴仕りませう。

ト杯を戴き、飲んで土盞に戴せ、彌作の前に置く。

アヽ、おめでたう存じまする。

彌作　時に彌五郎、其方は小さい時から武家奉公、おりや内にゐて土ほぜり。正眞の井の内の蛙で何にも知らぬが、アノ侍ひの腹切るといふ事は、どうしたものぢやいの。

彌五　ハテ、變つた事を尋ねさつしやる。

彌作　サイノ、此方は百姓の事ぢやによつて、ツイ何の事はない、刃物を腹へグツシヤリと突き立てさへすりや、死ぬると思うてゐる。さうぢやないかの。

彌五　イヤ、切腹の作法は大事でござる。先づ座敷に白張りの屛風を引き廻し、下には白き木綿を敷き、白木の三方に九寸五分の腹切り刀を載せ、切腹の人の前に置きまする。ところで、上下の肩衣を左右へ刎ね退け、三方を取つて戴き、刀の九寸五分の切尖一寸ばかり紙にて卷き、兩肌を脱ぎ、襦袢の肌をくつろげ、兩足を斯う組んで行儀に座して、左の脇腹へグツと突き立て、右へキリキリと引き廻します。九寸五分を引き拔き、直ぐに咽喉笛のくさりを刎ね切ると見せ、咽喉へ押し當てるを合圖に、介錯人が直ぐに首を打ち落しまする。先づ、これがお定まりの切腹。まだこの外に扇子腹、其切り、刑罪はさまざまござるてや。

ト彌作此うち、とくと見る事あつて、始終聞くこなしあつて

彌作　ハテ、むづかしいものぢやなア。

かや　お前も嗜なましやんせ。氣を急いてゐやしやんすのに、いろ／＼の事を聞うてから。アノ彌五郎さん、お前に。

彌五　イヤ、これより濱手へ廻り、もし大坂への便船あらば、それに乘る心積りでござりまする。

彌作　そんならおかや、濱の次郎兵衛にさう云うて、便船を頼んでやつてたも。

かや　アイ、そんならわしが、船を頼みがてら、濱まで見送りませうわいなア。

彌五　それは御苦勞でござりまする。左樣ならば、兄者人。

彌作　もう行かつしやるか。

彌五　いよ／＼最前の事、他言なりませぬぞや。

彌作　おれも侍ひの兄ぢや。なんの云はう。そんな事云うて堪るものかいなう。

彌五　それ聞いて落ち附きました。

かや　サア、彌五郎さん、參じませうか。

ト在郷唄になる。彌五郎に附き、おかやとも向うへ入る。あと合ひ方になる。彌作、途方にくれて

彌作　弟が他言するなと口止めした、大事の事を七太夫どのに云うたも、侍ひ同士の事、さういふ事なら、もう養子は止めにすると、云うて下さるぢやあらうと思ひの外、猶料簡ならぬと意地強い七太夫どの。内へ戻れば弟は、一大事を聞いたれば、七太夫どのを殺して、おれも死ぬると駈け出す。それやつては大亂。そこで云ひはせぬと、間に合を云うて、マア弟は出立させたが、濟まぬは七太夫どの。此方の返事が遲けりや、彼方から仕掛けるとの詞詰め。否と云はれぬは、先達て水牢の時、七太夫どののお世話で、その難儀も助かり、その上、女房おかやが事まで、お世話になつた七太夫どの。恩もあり、義理もあり、殊に、村のお役人。なんと云うてよからうぞ。どうもおれが口から云ひやうがない、思へば／＼、ひよんな事になつた事ではあるぞ。

ト投げ首して思案すると、合ひ方になり、橋がゝりより七太夫、着附け、羽織、野袴にて出て來て、ズツと内へ入り

七太　彌作、宿にゐめさるか。

彌作　オヽ、七太夫さま。

七太　あまり返答延引に及ぶゆゑ參つた。して、彌五郎はいづくにゐやる。直に逢うて返答聞かう、彌作、案内しやれ。

彌作　イヤ、彌五郎は、たつた今、アノ

七太　ムウ、すりや彌五郎は、最早出立いたさせたか。
彌作　あんまり急きまするゆゑ、
七太　ヤア／＼／＼。
ト驚ろき、門口へ駈け出し、向うを見て、いろ／＼跪き、內へ入り、彌作を蹴り飛ばし、また首筋取つて引附け、散々に打擲して
最前あれほど、詞詰めいたし置いたるに、彌五郎を出立させ、身が武士が立たうと思ひ居るかいやい。
ト彌作、引附けられながら
彌作　サ、、、。それは重々御尤もでござりますけれど
ト云ふを聞かず、首筋取つて引廻し、また散々にくらはし、引附けて
七太　ヤイ、茲な恩知らずの土ほぜりめ。ヤイ、うぬ、先達て未進に詰まり、既の事、水牢へぶち込まれ、くたばるところを、ア、不便やと思ふから、さま／＼と計らひ、水牢を赦し、命を助けくれたを、うぬはモウ、忘れ居つたか／＼ヤイ。またその上、女房おかやを親に貰ひ、この七太夫が親分となつて、おれが濟ませ置けば、身共は親も同然。大恩あるこの七太夫が武士を、よくも捨てさせたなア／＼。サア、いま後よりぼッかけ、彌五郎を呼び戻し、此方へ渡せばよし、渡さぬに於ては、大勢追手をかけ、引ツ捉へ、たつて得心せずば、彌五郎も其方もぶち殺して、武士を立つが、サア彌作、返答は何とぢや。
彌作　サア、お腹立ちは御尤もぢや／＼。私しも今更いたしやうがござりませぬ。斯うなされて下さりませ。とてものお情に、私しをズタ／＼に切り刻んで、どうぞ弟は、お赦しなされて下さりませ／＼。
七太　ヤア、默り居らう。うぬがやうな奴、千人萬人切つたとて刀よごし。役に立たうか。エ、、どうしたらよからうぞいやい／＼。
トこなしあつて
よい／＼、この上は四十餘人の義士ども、師直を討たんと密かに鎌倉へ下る密事の段々。京都西八條には藥師寺どのの下屋敷、これより早馬にて駈け附け、この儀を注進して、四十餘人の者ども、事成らぬうちに召捕らせ、この鬱憤を散せん。さうぢや。
ト向うへ駈け出さうとするを、彌作足に取り附き縋り、止め
彌作　マア／＼、待つて下さりませ。それを注進させては、四十餘人の身の上といひ、殊に、大願の妨げ。どうぞ御

料簡なされて下さりませ、

ト縋り附き泣く。

七太　ヤア、身共が武士がすたつた上は、餘人の事は、構はぬ〳〵。

彌作　ぢやというて。

七太　エ、、面倒な。

ト蹴り飛して、一散に向うへ行く。彌作、鐵炮を取つて後より追ひかけ行く。七太夫、鳥屋へ入り切る。ト彌作ポンと鐵炮を打つ。鳥屋の內にて七太夫、ウンと死ぬる。彌作、向うを見て手ごたへしたるこなしにて、ツカ〳〵と內へ入り、門口の戸しやんとさす。ト本釣鐘ゴンと打つ。彌作「ア、嬉しや」といふこなしにて、ガツクリとなる。これよりしめやかなる合ひ方となる。彌作、腹切りと覺悟極め、火打ち箱を取つて來て火を打ち、行燈へ火をともし、本舞臺よき所へ直し、古屛風を直し、寢茣座を押入れより出し、持つて來て下へ敷き、出刃庖丁を丸盆に載せて、最前、彌五郎が話しに聞きたる通り身拵らへして、とうど出刃を腹へ突き込み、術ながり、のた打廻り、苦しみながら、鎌を取り出し、右の腹へ突き込み、いろ〳〵術なきこなしにて、手桶を引き寄せ、杓にて水をすくひ、飲みにかゝると向うよりおかや戻つて來て、門口を叩く。

かや　彌作どの、彌五郎さまを見送つて、いま戻つたぞえ。

トこの聲を聞いて、彌作這ひ廻り、屛風に手をかけ、行燈の火を吹き消さうとしても、消されぬこなし。おかやこれを知らず、戸を叩く。

もう寢たのかいなア。コレ、明けさんせぬかいなア。

ト叩いても明けぬゆゑ、滅多無性に叩く。此うち彌作、屛風を持ちながらバツタリ倒れる、この拍子に行燈こけて火消え、暗がりになる。彌作、苦しみ呻く。この聲をおかや聞き、悄りして

ヤア、何とさしやんした。持病の癪が起つたかえ。術なからう〳〵。早う明けて、おくれぬかいなア。

ト云ひ〳〵、滅多無性に叩く拍子に、戸碎けて、其はずみにおかや內に入る。火消えて暗がりゆゑ探りながら

エ、、火打ち箱はどこへやつたのぢやぞいなア。エ、コレ、藥を取つて來て上げうにも、暗がりなり。術ないかえ。ドレ〳〵。マア撫つて上げう。辛抱さんせ〳〵。どこにゐやしやんすぞいなア。

ト云ひ〱探り寄り、彌作が脊中を撫でゝ、兩方の手を入れ、癪を押へるこなしにて、出刃庖丁手に探り當り、手先に血の附きし思ひ入れにて、また撫でゝ見て、恟りして

申し、こりやマア、どうしたのぢや。誰れぞ來ておくれいなア。

トあわてる。此うち、向うよりバタ〱にて、彌五郎、提灯下げ、走り出て來て、內へ入り、おかやと顏見合せて

彌五郎さん。彌作どのが

ト云ひさして泣く。

彌五　おかやどのか。

トいふうち彌五郎、彌作を見て驚ろき

兄者人、何ゆゑの御切腹。

彌作　彌五郎か。

彌五　船中にて俄の胸騷ぎ、飛び上がつて駈け附けたが、さては拙者が事より、こりや七太夫と口論に及びましたな。

彌作　オヽ、其方が他言すなと云やつた大事を、七太夫に物語り、武士と武士との事ゆゑ、料簡も附かうかと思ひの外、斷わり云うても聞き入れず、剩へその大事を、京都の藥師寺方へ注進すると駈け出るを、留めても留まらず、是非に及ばず、鐵砲にてたつた一擊ち。

彌五　さてこそ、只今參る途中にて老人の死骸。立寄り見れば鐵砲疵、すりや、こなたの仕業であつたよな。

彌作　所の鄕士を手に掛けた彌作。召捕りに來るは知れた事。彌五郎は大望ある身の上、爰にゐては掛り合ひ。一時も早う、出立せい〱。

彌五　ぢやというて、この體を見捨て、なんと出立がなりませう。

彌作　小事に事を替へるのか。親兄弟にも他言せまいと、神文書いたを忘れたか。

トきつといふ。彌五郎こなしあつて

彌五　あやまりました兄者人。

かや　わたしも共に。

ト彌五郎の刀に手を掛ける。

彌作　たわけ者。其方が死んでこの場の樣子、七太夫と彌作は口論してこの通りと、檢使に口書きは誰れがする。コリヤ、生殘つて尼になり、彌作があと弔うてくれい。

かや　そんなら死ぬるにも死なれぬ命。ハアヽ。



嘉永元年三月中村座上演　四世中村歌右衛門の彌作



三世關十郎の彌五郎　二世尾上菊次郎のおかや

ト泣き落す。彌作苦しみながら

彌作　アヽ、術ない〳〵。彌五郎、おれがこの首切つて、早う、助けてくれ〳〵。

彌五　おやと申して、現在兄者人、殊に、こなたは七太夫と口論に及ぶとの口書き。介錯いたしては後日の詮議が事むづかしい。この儀ばかりは御容赦下されい。

彌作　エヽ、何も其やうに、むづかしう云ふ事はない。術なさの餘り、我が手で首掻き落したと云や事は濟む。早う首切つてくれ〳〵。

彌五　おやと申して、兄者人の。

彌作　アヽ、術ない〳〵。この術ない目をするも、皆師直めゆゑぢや。エヽ、おれにまでえらい目に會はせくさる。コリヤ、彌五郎〳〵。おれが爲にも師直めは敵ぢやほどに、存分に切りゑぐつてくれ。頼んだぞよ、アヽ、術ない。早う首切つて、助けてくれ〳〵。

彌五　おやと申して、現在の兄の介錯がなりませうか。

彌作　アヽ、まだそんな事云ふわい。早う首切り、術なさを助けてくれ〳〵。

彌五　おやと申して。

彌作　但し苦しみをさすのか。

彌五　サア、それは。

彌作　首切るか。

彌五　サア。

彌作　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

彌作　コリヤ、お百姓でさへこの通りぢや。その未練な性根で敵師直が討たれるか。エヽ、茲な未練者めが。

彌五　ハア、、さうぢや。

トこなしあつて、スツと立ち上がる、おかや、彌作に取附き、「コレ」と留めるを、彌作、右の手にておかやを引附け、首差し延す。ト彌五郎、手早く刀を拔き、構へる。よろしく。

幕

平右衛門住居の場

逢坂山の場

役名――寺岡平右衛門。藥屋手代、伊兵衛。藪醫、太田了竹。矢間重太郎。竹森喜多八。大星力彌。在所嬶、おとき。同、おさか。同、おかね。平右

衞門母、お芳。平右衞門女房、お北。
造り物、二重舞臺、納戸口、上手に反古貼り障子屋體。藁屋根、暖簾。橋がゝり塗垂れ。すべて貧家の體。幕の內より女房お北、少し派手拵らへ、世話形にて茶を汲みゐる。お時、お坂、お兼、在所嬶にて豆茶を飲んでゐる。この見得、在鄕唄にて幕ひらく。

きた　申し、どなたも、しぶ／＼よう上がつておくれ。

とき　イヤモウ、器量がよけりや、茶の花香まで、なんと旨いぢやないかいなア。

さか　ほんに、爰のお北さんも、去年の冬ござつた時、ぴらしやらと赤いもの着て、飯一つ焚くすべ知らずであつたが、この頃は、何もかも、大分覺えさんしたなア。

かね　こんな豆茶の仕樣まで、習はうより慣れぢやなう。

きた　サイナア。皆樣のお世話のお庇で、どうやら飯も焚き習ふし、すゝぎ洗濯もいがみなりにするやうになつたれど、知つての通り、母樣の長々の御病氣。內の糴は自由に廻らず、貧しい中にも母樣に、世帶のしがら見せともなさ。いろ／＼と心遣ひ。一日なりとも御病氣の、早う御本腹なさるゝやうと、朝夕、妙見樣や、觀音樣を祈つて居りますわいなア。

とき　イヤモウ、お前の事は、近所隣りの褒めものぢやわいなア。

さか　マア、器量がようて、氣がようて、こちとらに挨拶ようて、押出しがよければ、何やらもよからうと思や、平右衞門さまは仕合せものぢや。ほんに、此方の娘に煎じて飮ましたいわい。

とき　それ／＼、此方の娘は尻が重たい代りにや口が輕い。ちつと氣が短かい癖に、手が長い。よう入れ合はしたもんぢやわいなア。

さか　イヤモウ、どこも／＼、知つての通り、此方の男は仕事は嫌ひ、博奕好き、酒ばかり飮んで、寢るが最後高鼾。女房の掃除はいつした儘やら、臺所の樋が詰まつた、その臭さといふものが。

かね　ア、コレ、モウ、茶を飮んでゐるものを、いろ／＼の事云やるわいなう。

とき　イヤモウ、爰の平右衞門さまは、形に似合はぬ正直者。

かね　そしてでつくりと、えい男ではある。

さか　おれがマア二十若けりや、ナウ、お時。

とき　ムウ、疫病神に取り附かれいで、仕合せぢやわいなア。ハヽヽヽ。

かれ　そして内儀さまの鹽梅は、ちつとえいかえ。もう何をいうても年病み。定めてお前の心遣ひであらう。

きた　推量して下さんせ。わたしがこんな世帯の事を知らぬによつて、どうでも無器用なさかいか、わしが事は構やんな、大事ない／＼と云はしやんすので、結句、氣が術なうござんすわいなア。

さか　イヤモウ、堅い内儀が、金挺鄽にならしやんしたも尤もぢや。

とき　さうして平右衛門さまはえ。

きた　サア、これも母様の御介抱したがつてゐやしやんすけれども、烟りも細い世渡りに、今日も商ひに。

かれ　アノ、草履賣りにかえ。

さか　えらう精が出るなう。

とき　ほんに、餘所の男の精出すので、こちの男の野良松に、小言おますをとんと忘れた。

かれ　ほんに、晩景の雜炊の拵らへもせにやならぬ。

さか　お北さん、いかい御馳走でござんす。

きた　マア、よいわいなア。今日は舅御様の御命日。茶もとつくりと飲んで下さんせ。

かれ　イエ／＼、もう茶もせんど下された。サア、もう去なうぢやないか。

とき　去なう／＼。おかさん、忝なうござんす。

きた　そんなら、去なさんすかえ。

三人　さばえ。

ト皆々橋がゝりへ入る。お北、皆に挨拶あつて

きた　ようござんしたえ。ほんに、皆さまのもてなしで、母様の御機嫌を。こつとりとも音のせぬは、よう御寢なつてござるか。そしてマア、こちの人は、早う戻つて下さんせぬことか。また留守の内へ、藥屋の伊兵衛づらが來て。アヽ、それも母様の爲の孝行ぢや。ドレ、母様の御機嫌を伺はうか。

ト在郷唄になる。お北、障子の内へ入る。向うより藥屋伊兵衛、着附け、羽織の形、太田了竹、醫者の形にて橋がゝりより出る。兩方よき所にて行き違ひ

伊兵　コレ／＼、こなた樣は、太田了竹どのぢやないか。

了竹　たそやたそ。愚老を呼ぶは何者ぢや。

伊兵　イヤ、おれぢや。

了竹　おれとは何の折れぢや。

ト顔を見合せ

ヤア、貴様は、薬屋の手代、伊兵衞どのか。

伊兵　了竹どの。こなさんはの〳〵。

了竹　オット皆までのたまふな。諸事取つてゐる〳〵。

伊兵　サア、その取つたばかりで、拂ふ術を知らんせぬによつて、親方が大抵ぼつてゐる事ぢやないぞえ。

了竹　サア、それはぼくる筈ぢや。シタガ、おれもこの間までは、斧九太夫どのから扶持も貰ひ、六枚肩で押した身分。九太夫どのがコロリと行かれてから、方々の引負ひ、借金で、たうとう夜逃げして、上方の知る邊へ今掛かりに行くのぢや。これまでの誼み甲斐に、見ぬ顔してたも。伊兵衞、賴む賴む。

伊兵　そりや男づく、賴まれまいものでもない。また品によつて、おれが世話して上方へやらぬ。よい相談に乘つて見るか。

了竹　イヤモウ、この節ぢや。儲け事なら、木馬でも乘りたい。

伊兵　そんなら話すぢや。高が今行く先きのひんこ婆、去年の冬から人參づくめの大病。婆は生きやうが、てこねやうが構はねど、そこな嫁にちつと氣味合ひがあつて、おれが人參を續けたが、もう小二十兩も喰うた。それで、おれも親方の手前、本しくじりぢや。

了竹　それが素人ぢや。高が向うは女郎才ぢやないか。人參ぢやというて、桔梗の根を飲まして置いたがよい。

伊兵　サ、そこぢやて。その婆めがざぶの下齒であつたものぢやによつて、字ろくは走る。薬は自分の手合せ。まだも取り得は金挺鞴ぢや。

了竹　そりや、人參で逆上せたのぢや。

伊兵　今日貴様を連れ立つて行くのは、病見るやうな顔して、人參を止めさする積りぢや。

了竹　オットよし。併し首尾よう匙が廻つたなら、人參代りの薬禮があるであらう。

伊兵　そりや、おれが惡いやうにはせぬ。併し、ちつとの間扣へてもらはう。

了竹　合點ぢや〳〵。

ト門に立つてゐる。伊兵衞入る。

伊兵　お北。内にゐやるか。來たぞや〳〵。

きた　誰れぢや。どなたぢやえ。

ト納戸より出で

オヽ、伊兵衞さま、待つてゐたに、よう來て下さんした

なア。
伊兵　待つてゐたとは忝ない。
　ト手を取ると、お北こなしあつて
きた　サイナア、昨日から人參が切れるしナ。
伊兵　ハア、それで待つてゐたのか。そんな事であらうと思うた。
きた　をかしい物の云ひやうしてから、何ぢやいなア。
　ト寄り添ふ。
伊兵　何ぢやとは何ぢや。
　ト抱き附いて、いろ〳〵揉み合つて、お北、障子の内へ逃げ込む。伊兵衞、追ひ掛け、行かうとする。母お芳つッと出る。
伊兵　それはつれない。コレ、お北ぼん。
　ト抱き附かうとして、お芳を見て悔り。
よし　オヽ、伊兵衞どの、ようござんしたなう。
伊兵　エヽ、アタ邪魔なところへ梅干婆。病人なら病人らしう、引ッ込んでけつかつたがよいわい。
よし　嫁女、その茶袋を取つて下され。
きた　アイ〳〵。
　ト大きな箱に藥種の大分入れたを、お芳の前へ置く。

伊兵　お北、構はずと爰へ來いやい。
　トお北、仕方にて「怖い」といふ思ひ入れ。
　エヽ、忌々しい餓鬼ぢや。
よし　それはなう、この間の大風は、誰れも悔りしましたが、マア、互ひに怪我がなうて喜びまする。イヤ、喜び次手に、伊兵衞どの、いつやらから、こなさんに禮を云はうと思うてゐたが、平右衞門が心助けになり、大枚の人參を續けて下さる志し、忘れは置かぬ。忝なうござるぞや。
伊兵　エヽ、ケチめんどい不具者め。相手になるも、盜人の晝寢ぢや。
　トお芳と話しする顏で、お北の方へ心意氣。
よし　晝飯をまだ喰はつしやらぬか。お北、氣の附かぬ。出來合ひでなと、進ぜましやいなう。
伊兵　イヤ、上口より下口が肝腎ぢや。ソレ、忘れもせぬ去年の冬、平右衞門が使ひに、おれに逢ひにおぢやつた。ハテ、美しい衒妻ぢやと、思ひ初めたが初戀ぢや。
よし　鮪の肉なら、よしにさつしやれ。ありやきつい毒魚ぢやぞや。
　トこれよりお芳、藥を手合せにするこなし。

伊兵　とつくりと聞きや、平右衞門が女房、エヽ、忌々しいと來て見れば、この梅干婆が大煩らひ。人參の事を談ずるによつて、諾と呑み込んだも、われを取つて締めたいぼつかりぢや。

よし　藥は唐の方がよいなう。

　ト云ひ〳〵合す。

伊兵　なんと、志しは憎うはあるまいがな。おれぢやといふて捨てられた男でもなし。マア、ちつと手附けに。

　ト引寄せる。

きた　アレ惡い事を。アレイ〳〵。

　ト逃げうとする。伊兵衞、後から抱いてゐる。

よし　コレ〳〵、嫁女、何とした。

　ト伊兵衞書いて見せる。

伊兵　穢ぢや〳〵。

　ト云ひ〳〵手を握つてゐる所へ、了竹、ツカ〳〵と入る。

了竹　コレ〳〵、この病人には人參を盛る事は、惡いぞ惡いぞ。

伊兵　エヽ、何ぬかす、病人は其方の婆ぢやわい。

　ト突きやる。

了竹　これはしたり。間違ひか。

よし　これは嫁女が穢でお見舞、御苦勞でござります。

了竹　イヤ、拙者ことは太田了竹と申して、即ち此あたりに。

伊兵　これはしたり、夷ぢやといふのに。

了竹　ナニサマ。然らば筆談を以て參らう。

きた　伊兵衞さま、あなたは

　ト云ふうち、お芳に了竹、つぶ〳〵書いて見せる。

よし　これは〳〵、忝ない。そんなら婆が病に、人參は惡いとナ。

了竹　如何にも。

　トうなづく。

よし　斯う見れば、お歴々のお醫者ぢやが、望聞問説といふ事知つてござるか。

了竹　ヤ。

よし　始めに病人の面色を望み、音聲を聞き、味ひを問ひ、その上にて脈を考ふるが、神聖工巧は醫案の定例。

了竹　ハテナア。

よし　何を飲むやら注意も聞かず、病根も糺さず、人參引くとは危ない配劑。規矩の立たぬお醫者樣。

了竹　ドレ、お脈を。
　ト手を取りにかゝるを叩き退け
よし　望みにござらぬ。お歸りなされ。
　ト奥へ入る。
了竹　何の事ぢやい。
　ト呆れる。
　ムウ、あれが病ぢや。アヽ、心元ない。
伊兵　降りさうなか。
了竹　彼方ものぢや。
お北　エヽ。
　ト悄りする。
了竹　ソレ、何やらの書物にある通り、有馬の湯でも、惚れた病は癒りやせん。
伊兵　何を阿房らしい。……お北、もう斯うなつたら破れかぶれぢや。サア、おれが云ふやうになつて、抱かれて寢い。
きた　サア、それはナ。
了竹　但しは、伊兵衞さまが呑み込んでやらした、人參の代金いま戻すか。
きた　サア、金といふては。
伊兵　無くば、おれが女房になるか。
きた　サア、
了竹　金立てるか。
きた　サア。
伊兵　サア／＼、返事はどうぢや。
　トお北思案して
きた　成る程、返事いたしませう。
伊兵　何の返事を。
きた　ならぬまでも才覺して、金調へて見せませう。ハテ、それも叶はぬ事ならば、お前の心に隨うて女房になるわいなア。
伊兵　面白い。
了竹　して、その返事は。
きた　暮れを合圖に。
伊兵　マア、それまでは
了竹　茶漬でも喰うて居催促ぢや。
きた　サア、マア、奥へ行かしやんせ。
伊兵　それなら、お北。
きた　伊兵衞さま。
伊兵　奥で返事を。

了竹　飯喰はさんせ。
ト唄になる。兩人奥へ入る。お北も思案しながら納戸へ入る。ト向うより力彌、着附け、野袴、羽織にて出る。後より平右衞門、繼ぎ〳〵の木綿やつしにて、草履大分提げ、附き出る。
平右　力彌さまには供も連れず、どれへお出でなされます。
力彌　イヤ、親どもより原郷右衞門さまへ、密事の使ひ。
平右　それは御苦勞さまでござります。
力彌　貴殿にも幸ひの所で御意得ました。ちとお話しもあれど、爰は途中。
平右　イヤ、私しが所は、もうあれでござりまする。苦しからずばちよつと、お立寄り下さりませう。
力彌　然らば、御案内なされ。
平右　それは有り難う存じ奉りまする。サア、斯うお出でなされませう。
ト小腰を屈め、いろ〳〵あつて、内へ入る。あたりを見廻す。
力彌　苦しうござらぬか。
ト内へ入る。
平右　苦しうござりませぬ。
力彌　只今、郷右衞門さまへ參る仔細は、本國開城の上は、無益の月日を送らんより、先づ、都山科にて萬事相談仕るべし。今日中に出立し、再會は京都にてとの示し合せ。歸りには貴殿へも立寄り、その趣き話せと、親どもが申し附けましてござる。
平右　これは〳〵。數ならぬ私しにまで、有り難きお觸れ。殊に、お使ひ柄と申し、イヤモ、義を鐵石に固めましたれば、御發足を今や〳〵と、相待ち居りまする。
力彌　然らば、一時も早く、出立の用意召さるか。
平右　イヤモ、一時も早く參りたうござりまするが、して、連判の人數、缺けは致しませぬかな。
力彌　さればの儀でござる。出立と聞き、小山田庄左衞門、鈴木田瀨左衞門、衣服、金銀を貯へ、いづくへか出奔いたした。
平右　すりや、小山田さま、鈴木田さまは、お駈落ちを。
力彌　如何にも。
平右　イヤハヤ、臆病至極の人外めら……樣でござりまする。
力彌　それゆゑ、親どもも申しまするは、連判いたした人數、この體では一人も油斷がならぬ。今日より三日の間に、

都山科まで馳せ來らぬ者は、連判を省き申すほどに、お悔みなきやうにとの觸れを、鄕右衞門さままで申し合せに參るのでござる。

平右　流石は大星由良之助さま、寬仁大度のお計らひ。イヤ、その性根の腐つた腰拔けどもを、無理にお供に召連れられたとて、何の役に立つものぢやござりませぬ。斯く申す私しにもせよ、お供に外れたら外れ次第、外れた奴こそ人外ぢやと、錠を卸ろして、構はずとお出で遊ばせと、鄕右衞門さまにも御傳言下さりませう。

力彌　それ〳〵、百人の腰拔けより、十人の忠臣が要でござる。

平右　左樣でござりまする。

力彌　然らば、手前は最早お暇申す。

ト立り上がる。

平右　あなた、お荷物がござりまするなら、拙者めが擔いで參りませう。

力彌　忝なう存ずるが、はや荷物は先達て上しました。

平右　お支度でも遊ばされませんか。

力彌　イヤ〳〵、急ぎますれば、最早參るでござらう。其許にも、早く發足召されい。

平右　左樣仕りませう。これは〳〵、御苦勞さま。こりや何の風情もなき仕合せでござりまする。

ト力彌、門口へ出る。

申し、力彌さま、お羽織に埃が附いてござりまする。

トいろ〳〵追從して塵を拂ふ。

力彌　これは慮外。

平右　憚りながら、由良之助さまへもよろしう。

力彌　然らば、平右衞門どの。

平右　力彌さま。

力彌　さらばでござる。

平右　ようお出でなされました。

ト唄になる。力彌入る。平右衞門喜ぶこなしあつて

エヽ、忝ない〳〵。氣が忙がしくなつて來たわい。

トいそ〳〵するうち、お北出で來て

きた　こちの人、戾つてかいなア。

平右　買つた脚絆はあり。三度笠もよし。

きた　どうぢや。商ひはござんしたかえ。

平右　三尺帶あり。合羽もよし。……兎角無いものは路用の金だ。

きた　エヽ、そんならお前。

ト平右衛門、お北をフッと見て

平右　オヽ、女房どもか。

きた　こちの人。

平右　コリヤ、喜べ〳〵。日頃の願ひが叶つたワ。

きた　エヽ、そんならお前は、もう出立さしやんすかえ。

平右　オヽサ、いま行くのだ。行李に詰める、飯はあるか飯はあるか。

きた　イヽエ。

平右　なんだ。飯がないか。コリヤ、何をジメ〳〵。早く飯を焚かないか。わりや吼えるか。

きた　イヽエ、わたしもお前の女房、千崎彌五郎が妹、かねて覺悟の出立、それが悲しうて泣くのぢやござんせぬけれど、母樣がお年の上のお煩らひ、お前が鎌倉で死なしやんしたと、お聞きなされたら定めて精も落ちよう、泣き死にがなさるゝであらうと思へば、

ト泣く。平右衛門ギックリ。

わたしぢやてゝ、よう思うても見て下さんせ。云ひ號けは名ばかりで、父樣の御病氣で廓で賣られ、由良之助さまのお情で、廓の苦患をやう〳〵遁がれ、嬉しやお前と一緒にゐて、昔の辛さを寢物語りと、樂んだ甲斐もない。まる一年も添ふ事か、夢見たやうな別れ。腹切りに行く膳立てを、何ぼうお主への忠義ぢやとて、なんと勇み喜ばれう。わしや泣くまいと思うても、涙がどうも堪忍せぬ。こちの人、堪えて下さんせ。料簡して下さんせいなア。

ト　お芳、障子を明け、聞いてゐる。

平右　エヽ、未練な女房、大切な出立に不吉な吼え面。たつて吼えると、手は見せぬぞ。

ト刀の柄に手をかける。お芳出で

よし　サア、尤もぢや〳〵。何ぢややら知らぬが、嫁が惡い。例へ逆さまな事を云やらうとも、そこが男の高下。女は五障三從とて、幼ない時は親に從ひ、中年では夫に從ひ、老いては子に從ふが、女の常。夫にあやまるのに、誰が笑ふものはない。サア〳〵、あやまりや〳〵。

きた　アイ〳〵。

ト拜み、泣き〳〵襷かけ

めでたく祝ふ出立のお膳が、直ぐに墓の飯。ドレ、めでたい出立の飯焚かうか。

ト合ひ方なしに、お北米をかす。

よし　アレ〳〵見や。お北も得心がいたか、われが惡いと

思やこそ、泣き〳〵も飯拵らへしやる。何から云ひ上ずつた事か知らねども、日頃睦ましい女夫仲、定めて悋氣であらう。悋氣も男を大切さから。モウ〳〵、大概な事なら料簡して下され。年は寄る、病は重る、生れも附かぬ不具になつて、其方衆がひよと退き去り。サア〳〵サア、そんな事は無い事ぢやけれども、萬一別るゝやうなら、この婆は何とせう。モウ〳〵母に免じて、料簡してたも。堪えてたもいなう。

ト平右衛門、思案して、フツと思ひ附きたる心意氣にて

平右　コレ、母者人。こなたはアノびつさかれめが贔屓ばつかりして、血を分けたおれを袖にするとは、けたいが悪い。

ト書いて、腹を立てるこなしして見せる。

よし　ホヽヽヽ。平右衛門、何を云ふぞいの。子となり嫁となるも、前生からの深い緣。なんの血を分けたの、分けぬのといふ隔てがあらうか。其やうな腕白な事を云はずとも、もう堪忍しや〳〵。

きた　アノマア、お志しを聞いて

ト泣かうとして

平右　サア、コリヤ。

ト目で知らせ、腹立ていといふこなしする。お北、いろ〳〵あつて

きた　あんまりお慈悲深い。お情深い、母様ぢやわいなア。

ト杓を取つて拋る。

平右　オヽ、それでこそ、おれが女房ぢや。

ト煙草盆を拋る。

よし　ヤア〳〵。こりや大抵の事ぢやないワ。

平右　コレ、母者人。

ト引附け、疊へ書いて見せる。

よし　ヤア、なんぢや。それほど嫁が可愛くば、親子の緣切つて下され。あれを殘しておれは出て行く、勘當して下され。……そりやマア、ほんかいやい。

ト平右衛門うなづく。

きた　あれ程までに。

平右　コリヤ、延引したら不忠の上塗り。ソレ、飯が吹く。木も早く引き居れやい。

トお芳を突き飛ばす、お芳こける。平右衛門、介抱せうとして、ヂツと氣を替へ、お北、釜の下を引く。

よし　サア、腹が立つなら、わしをどのやうにしてなりと

も、機嫌直してたも。親一人、子一人、いま其方に別れて、なんとせうぞいなう。腹が立つなら、母があやまる。コレ、平右衛門、料簡してたも〳〵。

平右　コレ、申し。例へ勘當なされいでも、わしは隠し女子が出來て、そこへ參ります。邪魔になる親女房。此方から緣切つた。

　ト書いて見せる。

よし　ヤア〳〵。

平右　女房ども、胸當おこせ。

きた　アイ。

　ト胸當渡す。

平右　ソレ、飯が出來たら、早う行李へ詰め居らう。

きた　お前も一生の別れ、せめて母樣の堪能さしやんすやうに、云うて上げたらよかりさうな事。

　ト行李へ飯を詰める。

平右　この事他言いたすまい、と彌五郎や身共が、お頭へ神文書いたを、わりや忘れたか。

きた　サア、それぢやというて。

平右　構ふな。その三尺帶おこせ。

きた　サア。

　ト渡す。お芳、始終呆れたこなし。

よし　すりや、どのやうに云うても聞入れぬな。不義不孝、道に背きし倅は、勘當するは天の道。いづくへなりとも出て行き居らう。この貞節な嫁を捨て、見下げ果てたる人非人。思ひ切つた。

平右　エヽ。……女房さらば。

　トつと橋がゝりへ入る。お北、行かうとする。お芳抱きとめる。返し。

　　造り物、一面の山、上手に松の大木、鳩の巣あり、下手に瀧、腰掛け岩あり、鳩の聲にて道具止まる。

　ト平右衛門橋がゝりより出て

平右　ヤレ〳〵、急いだ〳〵、最早一里半も來たであらう。先づ一服仕らう。

　ト岩に腰掛け

時に、もう何時であらう。七ツでもあらうか。今のモヤモヤで晝飯を喰はなんだ。ゲツソリと腹がへつた。爰でこそ用意の行李飯。また斯うした所で喰ふと旨い。

　ト喰ひにかゝる。方々にて鳩の啼く聲する。

エヽ、年寄り戀し〳〵と、アタやかましい土鳩めら。

ト土を掴んで抛らうとして思ひ入れあつて

世の中に若きは殘り、老いたるは先立つは順道なるに、母の老病、御安堵もさせませず、血判の手前を思ひ、心に思はぬ惡口雜言。

ト橋がゝりを見て

申し、母者人。忠孝二つは人道の誠、何れに重い輕いはない。小祿ながら、三代相恩の主君の欝憤散ぜん爲……勿體ないとは思へども、見捨てゝの旅立ちは、首尾よく敵討ち負ほせても、切腹はかねての覺悟。すりや、何れの道にても、今生で再びお目にかゝれぬ私し。相果てしとお聞きあらば、お嘆きは如何ばかり、重い忠義、輕い命、捨つるは覺悟といひながら、母者人の身の上。

ト氣を替へ、涙を拂ひ

ハヽヽヽ。ハヽヽ。アヽ愚痴々々、義によつては親子兄弟、刃を合すも武士の習ひ。それにアタ埒もない事思ひ出して、誰れ聞かねばこそ。益體もはい。ハヽヽハ。

ト泣き笑ひ

ドリヤ、また切米にあり附かうか。

ト鳩、頻りに鳴く。平右衛門、胸のつまり、飯の喰はれぬこなし。

ハテ、役にも立たぬ事で胸が塞がつて、とんと物が喰へぬ。アヽ、また先の宿で、蕎麥なと買つて喰ふべい。この剰りは。ムウ、幸ひ鳩にやるべい。

ト飯を投げてやる。鳩下りて對羽の鳩飛び戻る。また飛び出ると、子鳩二羽下りて餌食む。平右衛門キツと見て

反哺の孝、三枝の禮。親鳥が子鳥を愛し、食事を分け與へるもあり。アヽ、鳥でさへ子を憐れむ親の愛着。ましてや人間。さぞ母者人が。

トこなしあつて

せめて本心を申し上げう。さうぢや。

ト行かうとして

最前、力彌さまに番うた詞。こりや矢ツ張り。

トまた向うへ行かうとする。

矢ツ張り母者人へ。

トいろ／＼あつて、ムウと手を組む。ト矢間重太郎、竹森喜太八、旅姿にて臆病口より出で、平右衛門を見て

重太　平右衛門でないか。



大正十四年三月邦樂座所演　中村時藏のお北　尾上松助の平左衛門　中村吉右衛門の平右衛門

平右　これは矢間重太郎さま。竹森喜多八さま。
喜多　はや出立召されたか。
重太　幸ひの所で逢ひ申した。イザ、同道いたさう。
　ト平右衞門こなしあつて
平右　ヘイ、成る程。私しもお供仕りたうとは存じますけれど、據ろなき物を宿元に失念仕りましたゆゑ、これよりちよつと、取りに歸りたうござりまする。
　トくど／＼云ふ。
喜多　すりや、この所より、また引ッ返し召さるゝか。
平右　左樣でござりまする。
　ト重太郎、平右衞門の額を、つく／＼見て
重太　ハテナ、家を出づる時、妻子を忘れ、國を出づる時、その身を忘るゝ外に、忘るゝものはなさゝうなものぢや。
喜多　ア、イヤ／＼、矢間どの、さうでござらぬ。平右衞門は至つて小祿高。
　ト平右衞門が額を眺めて
失ふものもありさうなものでござる。
重太　イカサマナア、然らば身共らは先へ參らう。
喜多　平右衞門。
重太　後から來やれ。

　ト合ひ方になり、兩人向うへ入る。平右衞門、後を眺め。
平右　チエヽ。……いま御兩人の詞の端々。小山田などが腐れ武士同樣に、思はるゝ家中の思惑、由良之助さまの思し召し。遲參しては。さうぢや。
　ト向うへ行かうとする。平右衞門が前へ鳩一羽バッタリと落ちて死ぬ。平右衞門キッと見てゐる。子鳩集り、ぐるりより飛び廻る。これを見て平右衞門、いろ／＼あつて
こりやどうも。
　トきつと空を見て
まだ七つ過ぎ。暮れるには餘程。ムウ。
　ト橋がゝりへ走り入る。返し。
　元の道具へ戻る。了竹、伊兵衞、お北を引附けてゐる。お芳これを支へてゐる。この見得、暮れ六ツの鐘にて道具止まる。
了竹　サア、暮れ六ツが鳴つた。約束の金受取らう。
伊兵　但しはおれが女房になるか。
きた　穢らはしい。否ぢや／＼。

了竹　さう吐かしや。
　ト立廻り、お芳引き退ける。
よし　こりや嫁女を何とするのぢや。
了竹　エヽ、アタ邪魔なひばり骨。退いてけつかれ。
　ト突きのける。
きた　アヽコレ、母樣を。
　トお芳を伊兵衞引附けて
伊兵　サア、どうぢや。これがよいか。
　ト兩人を苛なむ所へ、バタ〳〵にて平右衞門走り戻り、
　兩人を投げ、お芳、お北を圍ひ、キツと見得。
よし　ヤア、其方は。
きた　こちの人、よう戻つて下さんしたなう。
平右　うぬら、こりや母者人や女房を、なんで手籠めにさ
　らすのぢや。
了竹　イヤ、手籠めにはせぬ。催促するのぢや。
平右　ヤヽ、なんと。
伊兵　其方に覺えがあらう。アノひんこめか喰うた人參代
　が廿兩。乞食小屋よりアタ穢ないこの内へ、何を目當に
　仕送らうぞいやい。
了竹　高で、この伊兵衞さまが、われが女房のお北に惚れ
　て、戀慕れゝつで仕送つた人參。すりや金代りに女房に
　なれと、お定まりの三勝ぜりふぢや。
伊兵　暮れ六ツまでに譯立てうと、最前詞番うて置いた。
了竹　オヽ、その證人はこの了竹。
伊兵　但しは人參代の金濟ますか。
兩人　二つに一つの返事をするか。
伊兵　平右衞門。
兩人　返事はどうぢや。
平右　金濟まさう。
兩人　面白い。受取らう。
平右　人參代の廿兩、ソレ渡した。受取れ。
　トお北を突きやる。
兩人　そんならお北を。
平右　女房去つた。
きた　コレイナア。こちの人。
平右　孝貞忠義に、去られてくれい、女房。
きた　ぢやというて。
平右　未練な奴の。
きた　ハヽア。
　ト泣き落す。

兩人　すりや。お北を金の代りに。
平右　うぬらに渡せばよいではないか。
了竹　如何にも。
伊兵　連れて去んで、今夜から
了竹　伊兵衛さま、お前の奥さまなア。行かんせ〳〵。
伊兵　ハテ、來いといふのに。
　ト兩人、お北を引ッ張りて入る。お芳こなしあつて
よし　平右衛門。
平右　ハッ〳〵。
よし　そちや勘當うけた母の家、何用あつて立歸つた。
平右　エヽ。
よし　最前、大星力彌さまに番ひし詞打忘れ、母女房に心引かれ、立歸つなアノうろたへ者めが。
平右　アノ、あなたはお耳が。
よし　聞える〳〵。ずんと聞える。可哀さうに嫁の北、其方への貞節、わしへの孝行、貧しい暮らしは苦にもせず、仕馴れもせぬ水仕業、ついまつ取たつり、香きいたり、小袖の縫ひ箔引きかへて、木綿布子に前垂れ掛け、母が病に心勞し、伊兵衛が心あるを幸ひ、心に思はぬ戯れごと云やるも、母へ氣兼ねであらうと、聞える耳を聞えぬと、不具になつて暮らすのも、嫁女が可哀さ、不便さから。それを一途に聞えぬと、思ひ詰めた其方衆夫婦。暫しなりともこの母に、嘆きの色目を見せまいと、騙かつての出立は、健氣な者よ、出かしたと、心の喜び引きかへて、母女房に心迷ひ、誓言を破り、立歸り、流石は足輕風情ぢやと、四十餘人の人々に指ざゝれ、父御の名まで呼び出すか。孝が重いか。忠が重いか。但しは腰が拔けたらば、親でないぞ。子でないぞ。サア、母に心を殘さずとも、潔よう、出立〳〵。
平右　ハア。御存じの上からは、何をか包まん。仰せの如く、御主人の仇師直を討ち取らんと、四十餘人の義士の面々、妻を賣り、子を捨てる艱難辛苦。最前、深く母人に隱し包むも誓紙の手前。當地を離れて一里餘り、山蔭にて食事の剩り、飛びかふ鳩に與へしところ、子鳥を數多呼び集め、餌を分つて育む有樣。鳥でさへ親と子の愛情はあるものを、さぞ母人のお嘆きあらん。せめて本心打明かし、お暇乞ひをも致さんと立歸る道筋にて、義士兩人の御目に掛り、小祿者とのお下げすみ。無念と心を取り直し、また行きかゝる拙者が目前、一羽死したる親鳩を、數多の小鳩が取圍み、嘆き悲しむ體を見て、未練

卑怯と笑はゞ笑へ、まさかの時の功名にて、汚名を雪ぐは今のうち。今生のお別れに、コレ申し。

トお芳に取り附く。

ま一度母人の、お顔が拜みたいばつかりに

ト兩人ヂッと泣く。

斯く本心顯はす上は、何しに後へ心殘らん、勢ひよく出立し、敵師直が首引ッ提げ、追ッ附け吉左右お聞かせ申さん、母者人。

よし　オヽ、出かしやつた〳〵。頼もしい。その本心を聞いた上は、この母も以前は武士の妻。敵討の門出は定法のあるものなれど、片田舍の事なれば、料理の數は揃はずとも、心ばかりの身祝ひも、母と一世の別れの杯しませう。

ト神棚のお神酒徳利・盆に杯載せて持つて出て

これ見や。この杯の畫は鶴と龜、取りも直さず蓬莱山。勝色見する槍梅の、模樣も即ち時に取つての吉左右。祝うて母から取上げませう。

トお芳飲んでさす。

平右　左樣なれば、頂戴仕りませう。

よし　平右衞門。肴しませう。

平右　ナニ、お肴とは。

トお芳懷中より藥袋を出し

よし　些少ながら旅の路用。

ト平右衞門取つて見て

平右　ヤア、こりや大人參。

よし　去々年三月十六日、師直が爲に御主人の御切腹と聞くよりも、おのれ殿樣の御無念を、何卒晴らし參らせんと、思ふ忠義の一心も、年寄つた女の身。賃仕事の忠義には、まさかの其方の路用金、ア、どうぞと思ふ祈禱・伊兵衞が世話を幸ひに、毎日二分三分づゝ、人參入れる作病も、煎じ詰まつて嫁女の難儀。例へ貞女を破つても、盜人騙りと云はれても、姑へ孝行と、達者な婆が病人と、思ひ詰めての抱きかゝへ。孝行にしてたもる程、病より辛い心の苦しさ。明かして心休めうか、云うて堪能さゝうかと、思ふうちに今日が日まで、溜め〳〵た人參の、價は大方廿兩。御用に立てやれ。

ト平右衞門喜ぶ思ひ入れあつて

平右　有り難き母の御恩。女房が眞實。お禮は未來より申し上げませう。母人、最早お暇申す。

よし　オヽ、一時の遲參は一時の不忠。

平右　一時三里犬走り、
よし　諸士に追ッ附き、後れを見せな。
平右　ハッ。
よし　平右衞門、待ちや。
平右　御用かな。
よし　門出の餞別。
　ト出刃庖丁を咽喉へ突ッ込む。
平右　ヤア、母者人。
よし　それ〳〵、その孝心では、まさか敵へ亂入の時、捗捗しい手柄がなるまい。母が事を思ひ出し、もしも不覺を取らうかと、先立つ母が敵も師直。お主ばかりの敵ぢやないぞ。母が敵も師直ぢやぞ。
平右　ハッ。
　ト取り亂し泣く。
よし　卑怯であらうぞ。
　トばた〳〵にて、お北走り出て
お北　コレ、こちの人。
平右　コリヤ。
　ト内へ抛り込み、向うへ入ろ。お北、出ようとする。お芳引き止め、よろしく、

幕

いろは假名四十七訓（終）


義臣傳讀切講釋
ぎしんでんよみきりかうしやく

義臣傳讀切講釋

西澤一鳳の「忠臣藏類聚大成」の序文に依つて、この狂言は寛政六年十一月、中の芝居に上演され、作者は並木五瓶といふ事が信じられてゐたのだが、それは間違ひである事が解つた。「義臣傳讀切講釋」は、それより以前、天明八年二月十六日初日の、大坂大西芝居、座元嵐文吉の一座で初上演された事が明かになつた。この二月一日から、一座は京都北側西の芝居で、五瓶の舊作「日本花赤穂鹽竈」を上演する筈だつたところ、京都の火事で芝居が焼けたので、一座は急に道頓堀の大西芝居へ引越し、右の狂言を增減して、外題も「義臣傳讀切講釋」と改めたのである。隨つてこの狂言の大部分は「日本花赤穂鹽竈」なので、本卷收錄の二幕だけが、この時の增補といふ譯である。作者は並木五瓶と云ふが、どうも疑問だ。當時大西芝居の立作者は竹本三郎兵衞なのだから、多分三郎兵衞の作と思はれる。

大序は「鎌倉長谷寺」から、「殿中刃傷の場」で、顔世に戀慕した師直が、お輕の假裝と知らず口說いて失敗し鹽冶に恨みを含み、遂に刃傷となる。二段目は「上村大炊屋敷の場」で判官の切腹から「大星屋敷の場」で由良之助復讐の決心。三段目四段目が「淺草觀世音の場」「染井植木屋の場」で、五段目「撞木町笹屋の場」では由良之助の遊興。忠臣藏の六段目と七段目を一緒にしたやうな筋。六段目は「天川屋の場」で義平が顔世の身替りにお輕を討つといふ所。七段目が「鳥屋喜平次内の場」で、喜平次實は彌五郎が病母の死を構はず出立する愁嘆場。大詰は「討入の場」で本望を遂げる。

八幕の中で、增補した二幕だけに「忠臣連理廼鉢植」といふ特別な名題が附いて今に殘り、他は廢れてしまつた。尤も序幕だけは、本卷收錄の「太平記忠臣講釋」へ融通された事、前記の通りである。

初演の役割は——彌七(嵐三五郎)おたか(澤村國太郎)杢右衞門(姉川新四郎)源四郎(嵐三八)で、三五郎と國太郎が非常に當てたところから、長く後に傳はつたのである。これを江戸で演じる時は、植木屋の場と豐後系統の淨瑠璃を使ふのが普通であるが、文化九年九月森田座の時、「重陽謎の常磐津」で常磐津を使つたのがその始め、扉はその時の番附である。江戸の舞臺へかゝつたのは、これより前、寛政四年五月の市村座「四十七染井鉢植」で、彌七(中山楯藏)おたか(瀨川菊之丞)十兵衞(市川鰕藏——杢右衞門の代り)源四郎(嵐龍藏)で演じたのが最初である。

義臣傳讀切講釋

淺草觀音の場

役名━━植木屋、杢右衞門實ハ竹森喜多八。小春屋彌七實ハ千崎彌五郎。上燗屋、喜三郎實ハ矢間十太郎同宿、道樂實ハ小寺十內。覗き屋太四郎、實ハ近藤源四郎。覗き屋九郎八實ハ大須賀團八。太四郎妹、お新。杢右衞門妹、お市。師直のお末、お鷹。自墮落寺なまぐさ和尚實ハ原郷右衞門。

造り物、向う奥深う仁王門、右の方銀杏の大木、臆病口、葭簀張りの掛け茶屋、床几直し、上燗屋喜三郎、亭主にて仕出しを呼んでゐる。この側に、小春屋彌七、小間物屋にて、店出しゐる。但し暖簾に「小春や」と書き附けあり。その次は覗きの機關。この兩方に、九郎八、太四郎、口上云うて立つてゐる。橋がゝりの端に杢右衞門、植木屋にて、植木並べてゐる。この見得、雙盤、揚弓の太鼓、すがゞきにて幕開く。

喜三　お入りなされませ。お休みなされませ。田樂、上燗、鹽梅よし。休んでおいでなされませ。

九郎　遙か向うに見えまするが、朝鮮釜山海の湊、お氣を附けられ、御覽じ。

太四　山のあなたが潯陽江、猩々の住所、引揚ぐれば、八島壇の浦の戰ひ。

九郎　西海一樣に、戰に埋もれ、赤旗白旗翩飜と、源平戰ひに鎬を削る體。

太四　平家の方には惡七兵衞景淸、源氏の方には三保谷四郎。

九郎　互ひに剛氣の爭ひにて、兜の錣をしつかと取る。

太四　あちらへ引けば、此方へ引く。

九郎　これは夜戰でござりますれば、火を點してお目に掛けます。

太四　元の四條河原へ戻りますれば、先の方は、替り／＼。

仕出　この紅葉は、なんぼぢや。

杢右　ハイ、六十四文でござります。

仕出　三十二文に負からんかの。
杢右　滅相な。其やうに掛け値は申しませぬ。
仕出　そんなら四十やらう。
杢右　ようござります。まだ今朝から一本も賣らん。口開けぢや。負けませう。エヽ、廉いものぢや。
ト仕出し、錢をつき、紅葉を持つて入る。
仕出　この煙草入れは、なんぼぢや。
彌七　ハイ、一匁三分でござります。
仕出　一匁に負からぬか。
彌七　イエ〱、とんと掛け値はござりませぬ。
仕出　エヽ、負けたがよいのに。
ト行かうとする。
彌七　申し〱。
仕出　負かるか〱。
彌七　もう一分おくれなされませ。
仕出　イヤ〱。
彌七　元値を外して負けもせい。
トすべて大勢、こんな事ごつちやに云うて、覗きを見たり、床几に腰掛けたり、いろ〱あり。よき所にて向うより道樂、同宿にて、米袋をかたげ、後よりなまぐさ和尚、鐵鉢に錫杖を持ち、出てくる。
道樂　なまぐさ山、自墮落寺。
仕出　ほんに、今日はおれが親の日ぢや、志しを入れませう。
道樂　御回向。
ト道樂、口の中にて、ブツ〱云ふ。
仕出　なんと皆聞かしやれ。五百羅漢建立とは、大望の事ぢやないかいの。
同　それいの。イヤ、申し、御出家様、五百羅漢を建立すると云はしやりますが、羅漢のうちにも、一々名がござりませう。お前、知つてゐやしやりますか。
和尚　大俗凡夫ぢやなう。それを知らいで建立がなるものかいの。
仕出　そんなら、どうぞ、聞かして下さりませ。
和尚　アノ、只でか。
仕出　ハテ、冥加の爲ぢや。志しを入れまするわいの。
和尚　そんなら云うて聞かさう。先づ一番に、眞ッ黒に片肌脱いだる羅漢こそ、五百羅漢の隨一、六寸銅返しの上代物。次に渡らせたまふが、子供もよういふ赤いつら大黒。色の白いは鳥居より白き羅漢としろしめせ。

仕出　さて又、帽子をスッポリとかぶつてござるは。
和尙　それこそ、すぼけすつぽん羅漢、グッと反つたは上手り羅漢、いがんでござるは祇園羅漢、頰らうてござるは便毒げかん。その外詳しく聞きたくば、地獄の沙汰もこれ次第で、お問ひなされ〳〵。
道樂　冥加錢々々々。
仕出　なんの事ぢや。阿房らしい。
ト仕出し皆々入る。
和尙　道樂、なんぼ程あつた。
道樂　イヤ、一文もござりませぬ。
和尙　ヤイ、おのれは〳〵。これほど口叩かせ、たつた一文の錢を惜しむ。慾ある煩惱、阿鼻地獄へ落ち居らう。アヽ、恐るべし〳〵。サテ、今日はえらう步いた。
道樂　ちとお休みなされませ。
和尙　御亭主、上燗が飮みたいが、肴があるかの。
ト腰掛ける。
喜三　お肴は、崑蒻の煮染。芋の汁もござります。
和尙　イヤ〳〵、精進物ではとんといけぬ。天蓋か、手巾はないかの。
喜三　アノ、天蓋や、手巾が酒の肴になりますかな。

和尙　これは又、どうしたものぢやの。煮賣りもして喰ふ者が、天蓋や手巾を知らぬか。
喜三　有やうは、私しも新參の、煮賣り屋でござりますゆゑ、その天蓋とやら手巾とやらいふ物は、まだ存じませぬ。マア、何で拵らへたものでござります。
和尙　ハテ、天蓋とは蛸の事。手巾とは鱧の俳名。
道樂　丁度芝居で、雛助や三五郎を、眠獅、來芝といふ格ぢやわいの。
喜三　エヽ、そんなら、蛸や鱧の名を、天蓋、手巾と申しますかえ。
道樂　オイナウ。
喜三　滅相な。アノ御出家が、魚類をあがりますかえ。
和尙　喰はいでならうか。愚僧は悟り切つてゐますわいなう。
喜三　イカサマ、魚は喰はれて成佛するといへば、味ようして上げませう。
和尙　生姜酢でいかうぞや。
喜三　畏まりました。
ト蒲公英と蛸の足、鱧の骨切りを持つて行く。道樂、なまぐさ和尙、ひだるさうにまんがちに酒を飮む。蛸

を喰ひ〳〵

和尙　御亭主、こりやよい酒ぢやの。

喜三　私しは新米でござりますから、損をいたして賣ります。

和尙　それ〳〵。愚僧は常住爰へ來るもの。これから贔屓にせうわいの。

喜三　お賴み申します。

ト酒を飮んでゐる。九郎八、咽喉をギク〳〵として

九郎　エヽ、人の心も知らず、面白さうに飮みアがるといふものぢやない。

太四　もう、いつも、辨當の來る時分ぢやが、この妹めは何してゐる知らん。

杢右　ほんに、此方の妹めも、もう晝飯を持つて來さうなものぢやが。

彌七　このお鷹さまは、もう來さうなものぢやが、今日は是非爰へ向けて來ると、文で書いて來たが、何として此やうに遲うなる知らん。

道樂　アヽ、蛸はうまい事ぢや。

九郎
太四　これは又、空腹いことぢや。

杢右　この辨當は遲い事ぢや。

彌七　このお鷹さまは待たす事ぢや。

トまたスガキになり、お新、お市、振り袖娘の形にて、橋がゝりより辨當持ち出で、彌七に思ひ入れあつて、お新は杢右衞門、お市は太四郞が側へ行き

新市　兄樣、辨當持つて參じたぞえ。

太杢　オヽ、待ちかねた〳〵。

杢右　お市、嗜なめ、今頃まで辨當を持つて來ぬといふ事があるものかい。大概程らいがあるぢや。もう、何時ぢやと思うて居るぞ。

いち　オヽ、兄樣の仰山な。まだ晝にはならぬわいなア。

杢右　さういふ痴氣ぢや。この淺草の觀音樣は、每日〳〵七ツから參詣があるによつて、朝暗いうちから來て、茶粥飯で晝時分まで堪えるものかい。腹の蟲めが、グヲグウとやかましうて、なるこつちやないわい。

しん　兄樣、叱つて下さんすな。わしも早う來たかつたけれども、仕附けぬ事ゆゑ、ツイ遲うなつたは、堪忍して下さんせえ。

ト杢右衞門へこなし。

太四　妹、氣遣ひすな。あんまり空腹さに、われを叱る勢がないわい。

トいろ〳〵あつて。辨當を開く。お市も始終、彌七へ思ひ入れあつて

いち　兄様、もう堪忍して下さんせえ。わたしも早う來うと、飛び立つやうに思うてゐるけれど、わたし一人が仕附けもせぬお菜ごしらへ。それで遲うなつたのでござんす。機嫌よう飯喰べて下さんせ、

杢右　よいワ。免じに免じて、料簡してやるぞ。

トそろ〳〵辨當を開き・九郎八、お新に惚れてゐることなしあつて

九郎　お新さま、アノわしが辨當、なぜ持つて來ておくれん。

しん　オヽ、九郎八どの、今日は兄様の手傳ひかえ。そんな事知つたら、お前にも辨當持つて來うもの。

九郎　イヤ、お辨よりは、お前の手入らずが一つ二つ喰うて見たい。

トしなだれる。

しん　コレ、九郎八さま、惡い事を。

ト振り放し、ズッと彌七に寄り添ふ。彌七、悄りして

彌七　オヽ、この子は悄りさした。ようお出でたの。サア、本見い〳〵。

九郎　コレ、惡い事ぢやない。よい事ぢやわいの。

ト行かうとする。太四郎止めて

太四　ヤイ〳〵、九郎八、兄の見る前で、あんまりぢやがな。ソレ、今日の雇ひ賃ぢや。一杯飲んで、去ね〳〵。

ト錢百やる。九郎八取つて

九郎　えいワ。これで何ぞ喰て來うわい。アタ忌々しい。

トぼやき〳〵

喜三郎さま、湯豆腐で飯喰はして下んせ。

喜三　オイ〳〵。サア、お客様も一緒に、奥へお出でおなされませ。

和尙　そんなら、さうせうわい。

九郎　いつその事の自暴に、こゝな喰ひ物の胴潰してこまさう。

和尙　これは迷惑。

喜三　サア〳〵、ござりませ。

ト喜三郎、道樂、なまぐさ和尙、九郎八を連れて入る。

太四　あいつ程、女子を見ると、舌垂るい奴はない。

ト云ひ〳〵、飯を喰ふ。

杢右　妹御寮の御料理、けうといものぢや。

ト云ひ〳〵、喰ふ。

九郎　人參と燒き豆腐の煮染、鳥貝に芹のあしらひとは奢つたな。

太四　この辛子和へでも、喰へるぞ／＼。

ト此うちお市いろ／＼あり。お新彌七が眞中へ入り

いち　その本、わたしにも、見せておくれいな。

ト引分ける。

しん　オヽ、お市さん。

彌七　ようお出でたなア。大方、兄樣の辨當を持つて、お出でたのであらうな。

いち　アイ、お辨やら、おりんやら、大方、惡い所へ參りましたでござんせうぞいな。お新さま、お前は　アノ彌七さまに引ツ附いて、晝中といひ、門中といひ、人も見るのに、小娘だてら、なんでマア引ツ附かしやんした。

しん　それはナ、アノナ、九郎八が惡い事をさんしたによつて、ツイ……それを又、其やうに、お前はなんで腹が立つえ。

いち　サア、わたしや、何も腹は立ちやせんけれど、あんまりぢやによつて…あんまりぢやわいな。

しん　なんの事ぢやぞいなア。

いち　彌七さま、お前、これぢやによつて。

ト彌七を此方へ引ツ張る。

いち　ほんにモウ、油斷も隙もなるこつちやない。

ト連れて來る。

しん　何のこつちやいな／＼。如何にわしが年のいかん者ぢやとて、其やうに甜めておくれな。

トまた彌七をば引摺つて來る。

いち　オヽ憎。小娘だてら、なんぢやいなア。

ト行かうとする。

杢右　お市よ、茶を一つ貰うて來てくれいよ。

いち　エヽ、そこどころぢやないわいなア。

杢右　早うくれ。咽喉に詰まりさうな。

トお市構はず、彌七を此方へ連れて來る。お新行かうとする。

太四　妹よ、あんまりかツかちいだゆゑ、咽喉が詰まつた。茶でも、水でも、早うくれ／＼。

しん　エヽ、そこどころかいなア。

トこれより彌七を兩方へ引ツ張る。

彌七　アヽ、目が舞ふ／＼。

ト坐る。杢右衛門、太四郎、咽喉に詰まりし思ひ入れ。此うち喜三郎、樽提げ出る。

喜三　ハイ〳〵、私しが取つて參じませう。……ヤア、こりや、なんぢや〳〵。

ト酒を呑ませる。

杢右　アヽ、苦しや、堪へ難や。

太四　すんでの事、辨當と心中しようとした。

彌七　あんまり引摺られて、フラ〳〵が來た。

杢右　併し、一滴の冷水、咽喉を潤すと思ふと、忽ち氣がはつきりとなつたワ。

喜三　そりや、その筈ぢや。此方のお客が、この酒は惡いによつて、よいのを取つて來てくれと、いま酒を取替へに行く所ぢやて。

杢右　そんなら今飲んだのは酒か。道理で口當りがよかつた。アヽ、詰まる〳〵。

トこける。皆々介抱する。

いち　兄樣、なんとさしやんした。

喜三　杢右衛門どの、なんとした〳〵。

トお新も介抱する。この間太四郎、彌七、酒を盜み飲んでゐる。

杢右　今の水を酒ぢやと聞いたらば、ハツと思うて、また辨當が咽喉に詰まつた。息が出來ぬ。水も茶も否ぢや。今の冷水を飲まして下され。アヽ、術ない〳〵。

喜三　エヽ、いろ〳〵の事を云ふわい。

ト突き飛ばす。

杢右　そんなら、此やうに死にかゝつてゐる者にも、もう今の冷水を施さぬか。エヽ、緣なき酒宴はなし難しぢやなア。

ト喜三郎見て

喜三　おのれらは〳〵。取替へに行く酒を、コリヤ、皆にひろいだぞよ。

彌太　それ飲まうばかりぢやわい。

喜三　イヤ、おのれらは。

ト皆々逃げ廻る。喜三郎追ひ掛け、彌七と女形を殘し、皆々入る。眞中の門より一人出で

男　太四郎さま、爰にか。向うの茶屋からお侍ひが

太四　アヽ、コレ〳〵。そりや、女子ぢやあらうがな〳〵。

男　イエ〳〵、左樣ぢやござりませぬ。

太四　ハテ、コレ、目を利かして物を云やいの。

ト彌七、お市がゐるゆゑ、こなしある。

またアノ衒妻はど、よう呼び附ける奴はない。妹、見世の番してゐいよ。ドリヤ、行てこうか。

ト男を連れ入る。あと合ひ方になる。彌七こなしあつて

彌七　ほんにマア、お前方にも、如何に年がいかんといふて、兄樣達の手前、ちつと差合ひといふ事を知つたがよい。わしやハラ〳〵思うたわいの。

いち　サイノ、わたしぢやというて、兄樣の手前、誰れやかや見るさかいで、恥かしいは耻かしいけれど、彼のお方ならではと思ひ詰めてからは、片時も側が離れられるものぢやござんせぬわいなア。

しん　それにお前は、素氣ない返事ばツかり。不束なわたしでも、此やうに戀ひ慕ふを、不便な事ぢやと思うて

いち　どうぞ色よい御返事を

しん　お聞かせなされて

いち　下さんせいなア。

彌七　忝ない。見る影もないこの彌七を、其やうにまで慕うて下さる志し、嬉しいけれど、ちつとこの身に願ひ事のある身、その願ひの盈てるまでは、淫らな事があつてはどうもならぬ程に、思ひ切つて下されい、ヤ。

いち　其やうに云はしやんすりや、お道理なやうなれど、思ひ切れと云はしやんしたとて、これがどうして思ひ切らるゝもので、

しん　そりや彌七さま、あんまり酷い、胴慾でござんすわいなア。

彌七　其方衆二人が、其やうにまで思うて下さる志し、無下にせねども、この身の願望。

市新　そんならどうでも

いち　とは云ふものゝ、せめて未來は。

彌七　なんの變らう、先の世では

しん　そんなら、わたしも。

いち　アノ、わたしも。

彌七　其方は本妻、其方は妾。

ト　お市、お新を引寄せる。

市新　エヽ、嬉しうござんす。

ト唄になる。お鷹、振り袖、古今帽子、抱へ帯にて、文箱を持つて出て、この體を見て、紙を抛つたり、いろ〳〵ある。トヾ彌七と顏見合せ

たか　彌七どの。

ト彌七恟りして、二人を突きのけ

彌七　オヽ、お鷹さまぢや〳〵。今日はよう御參詣なされました。先達でお參りなさるゝといふ事は、承はりまし

てござりますれど、今などであらうとは、夢三寳、存じがござりませぬゆゑ、御馳走も申し附けませんだ。マアマア、この床几へお腰をお掛けなされませ。サア〱、マア〱、これへ。

トお鷹を無理に床几へ腰を掛けさせ、此方へ來ると、お鷹、床几を下り、附いて來る。彌七これを見て

ハテサテ、床几へお腰をお掛けなされませ。

トまた無理に掛けさせ

サア、お茶。お煙草盆。目八分にして、お茶碗も淸潔にして。

トお市、お新、いろ〱うろ附きゐる。無理にお鷹が方へ彌七、割り膝にて坐り、俯向いてゐる。

たか　小春屋彌七どの。

彌七　ヘイ。

たか　わたしが今日、お局樣のお使ひに、其許の店へ香具調へに參じる事は、文を以てお知らせ申し、合點ぢやござんせぬか。

彌七　左樣でござりまする。

たか　それに、アノ、美しい娘御を、一人ならず、二人ならず、アタ淫ら千萬な。今のヒツタリは、ありやマア、何事でござんすえ。

彌七　イエ、サア、今のヒツタリは、ありや、アノ、どつと惡い具合で……イヤ、サア、惡い具合の印籠なア。印籠の細工が惡いによつて、今のやうにヒツタリと合ふ印籠拵らへてくれいと誂らへゐてぢや最中でござります。

たか　アノ、女中樣が、印籠を持たしやんすかえ。

彌七　サア、それは、女中印籠というて、いま流行りますでござります。

たか　こりや流行りさうものぢやわいなア。何ぢややら人が知らんかと思うて、女中さんさへ見ると、あちらへしつくり、こちらへしつくり。ほんに、惡性な印籠さんではあるわなア。

いち　お新さま、どうやら味いな詞附き。

しん　そんなら、女中さんも

彌七　コレ〱、滅多に麁相云はぬものぢやぞ。あなたは誰れあらう、高野師直さまのお局、橋富さまのお召使ひぢやぞ。

いち　アノ、師直さま。

彌七　それぢやによつて、大事にせにやならぬ。お屋敷の勤め、お部屋方からの誂らへ物。サア、どんな氣の毒な

差合ひな誂らへ物が出やうも知れぬ程に、ちつとは遠慮して、早う去んだがよさゝうなものぢやぞえ。

市新　でも、お前は爰に。

彌七　ハテ、大事ござりませぬ。わしも商賣が大事ぢや。お前方の誂らへの事は、キッと承知して居りまする程に、其やうに忙しなう仰しやらいでも、お誂らへ物が出來ましたら、持つて參ります程に、今日はマア、お歸りなされませ。

市新　そんならわたしらが、誂らへの返事は。

彌七　ハアテ、何にも云はずと……お得意樣方。

市新　エヽ。

ト思ひ入れ。

彌七　ようお出でなされました。

ト合ひ方になる、お新、お市思ひ入れあつて向うへ入る。彌七こなしあつて

ハヽヽヽヽ。サテ、お鷹さま、さぞお待遠にござりませう。モウ／＼、年の行かぬ小娘達ぢやによつて、とんと誂らへ物にしつこうて、念が入るさかいで、隙が入つてなるものぢやない。お前さん、ほんに御退屈にござりませう。

たか　エヽ、何の事ぢやぞいなア。面白さうに誂らへ物。惡性なお前の事なりや、念入れさしやんすに無理もござんすまい。ほんにマア、浮氣な、惡性らしい、辛氣な、受取り物でござんしたなア。

ト少し拗れる思ひ入れ。彌七、小間物の箱を出し

彌七　お鷹さま、この小春屋彌七は男でござりまする。たとへ楊貴妃、小野の小町が連れ立つて、女悅丸を買ひに來ても、水油を流して口說いても、一旦お前と云ひ交した心は金鐵、金赤の水引き、心の亂るゝ入れ髱ぢやござりませぬ。それに何ぢややら、藪から棒、練り油な事。ほんに、お前をわしがかもじにせうと思ふから、なんの外に妻櫛を差しませう。此方に思ふ心は並たいまいの事ぢやと思うて下さりまするかいなア。

ト香具屋の箱を探す。

たか　なアにを、匂ひ袋の口先ばかり、其やうに筋立てゝ、心の丈長云はしやんしても、艶白粉の地に附かず、いつきに剝げる蒔繪櫛。くし／＼思ふは女子の心、締りの惡い元結は、しめると切れるが殿御の常ぢやわいなア。

彌七　イヽエ、切れんぞえ。とんと切れませぬ。人は知らぬが、私しが店のこの元結は、お前の方から切れうとし

ても滅多に切れるやうな男元結ぢやござりませぬ。人には疾から、もう來るか／＼と待たして置いて、めいめいは、どこぞのいろは香になア。エヽ、腹の立つ。それを知らずにこのべら坊が、日がな一日天道干しになつてほんに／＼、黒鬢附けが呆れるわい。

たか　そりやお前、聞えぬぞえ。これ程までに云ひ交した二人が仲。なんのわたしが惡性らしい、外に浮氣な花の露。サ、露の情を身に受けて、枕かはした大事の殿御。お前を措いて、なんの外に惡性な事をしてよいものでござんすか。エヽモ、ほんに、むごいつれない、胴慾な事云うて下さんすなア。

ト縋りて泣く。

彌七　こりや、ほんまに泣くのかえ。ホウ、滅多にてんがうも云はれるものぢやない。もうよいわいな。ツイ今のは、商賣の小間物づくしに乘りが來て、思はぬ事を云うたも、お前の心を引いて見よう爲。もう泣くな。堪忍してい／＼。

ト膝で突く。

たか　それでも、今のやうな事云うてから。

彌七　サア、わしが惡かつた。堪忍々々。

たか　そんならわたしに惡性は

彌七　なんのあらう。

たか　疑ひは晴れたかえ。

彌七　商ひ冥利。

たか　嘘ぢやないかえ。

彌七　本眞實、交りなしの生五倍子の香具屋。ヘイ／＼、あやまり奉る。

たか　そんなら必らず、その詞に違ひなう。

彌七　替りはせぬ、二世掛けて。

たか　千崎彌五郎春重さま。

彌七　コレ、シイ。

ト　お鷹を引廻し。押へる。これよりメリヤス替る。

聲が高い。深う包む我が本名、千崎彌五郎と知つたる仔細は。

たか　さればでござんす。いつぞや御代參のその折から、日毎の往來にフト見染め、今日は云はう、明日は云はうわたしやお前に斯う／＼と、打ちつけても云はれもせず見る度々に、お前は店に夏書をしてゐやしやんす。これ幸ひと思うて、わしも夏書を認めて、せめてお側に寄り添ふ心で、お前の繪馬と一緒にして、掛けて置いたら、

末々は觀音樣のお庇にて、女夫にもなられるかと、つい掛けしなに卷き物を開いて見れば、「願主千崎彌五郎」、と、初めて知つたお前の實名。さては噂に聞き及ぶ、由ある赤穗の御浪人と、思へばわしが思ひが增し、お前の店へ立寄つて、何かと調ふ詞の端、優しい事を云はしやんしたも、觀音樣のお庇にて、夏書の願ひ叶うたかと、それから斯うした二人の仲。末は女夫と云ひ交したもの。夫の實名、知らいで何と致しませう。

彌七　すりや夏書の實名を。……ムウ、師直どのゝ屋敷勤めの其方が。

たか　師直さまのお屋敷に、お末を勤めるわたしとは、始めからよう知りながら、斯うなつたのぢやないかいなア。

彌七　成る程、師直どのゝ屋敷のお末と知つて

たか　云ひ交して下さんした、お前の心に、お願ひが

彌七　ヤ、何と云やる。

たか　サア、そのお願ひ、亡君の

彌七　ヤ。

たか　敵討でござんせうがな。

彌七　なんと。

たか　聞きたいかえ。

浪七　聞きたいかとは。

たか　鹽冶さまの御鬱憤、師直さまを附け覘ふ、さま〴〵のお心遣ひ、わしや推量して居りまする。屋敷の案內、詳しく知らうばつかりに、わたしがやうな不束者に、あのゝものゝと云うて下さんしたは、忠義の爲の戀路ぢやと知れど、わしも惚れたが因果。斯うなる上は、わたしや、モウ、お前の望み叶へた上、せめて一日半時でも、女房と云はれたい。何事も包まず、樣子を明かして下さんせ、彌五郎さま。

彌七　健氣な一言、嬉しいぞや。如何にも其方が云ふ通り、永々の浪人。斯く身を窶し、さまよふも、敵の案內知らん爲。馴れ染めしその後は、何卒心底試した上にて、師直が屋敷の案內問はんずものと思ふうち、早くも知つた今の一言。さほどにまでこの彌五郎を思うてくれる志し、忘れは置かぬ、忝ない。如何にも、亡君の敵討に相違ない。師直が討ちたいが、それにつき、折入つて、其方にちと賴みたい事があるが、聞いてたもるか。

たか　云ひ交したお前の事、なんのお詞背きませうぞいなア。

彌七　すりや、聞き屆けてくれるか。

たか　アイ。
彌七　手引きしや。
たか　エ、。
彌七　イヤサ、其方の手引きで敵が討ちたい。
たか　アノ、わたしに手引きを。
彌七　但しはならぬか。
たか　サア、それは。
彌七　なんと。
　トお鷹、思ひ入れある。
たか　サア、外の事は何なりとも、この事ばかりは、どうも。
　トぢつと泣く。彌七思案して
鷹七　ムウ、一旦武士に詞を番ひ、一大事まで明かせしといひ、殊には、敵の方に勤める女。不便ながら
　トこなしある。お鷹、前へ直り
たか　サア、切らしやんせ。
彌七　ヤ。
たか　口さがないは女の常。わたしを殺し、疑ひ晴らして未來は必らず
彌七　女夫ぢやといふのか。

たか　アイ。
彌七　出かした。覺悟はよいか。
　トお鷹ヂッと首差出す。彌七、店の下より脇差を出す
　南無阿彌陀佛。
　ト刀振り上げる。お鷹、首差出す。彌七思ひ入れあつて
　疑ひ晴れた、女房ども。
たか　エ、、そんならわたしを。
彌七　殺すに及ばぬ。
たか　嬉しうござんす。
彌七　と喜ぶ其方が、屋敷の案内ばつかりは、なぜ
たか　知らしたい。手引きがしたい。けれどもナ、いつぞやの騷動の後は、子といへど、油斷せぬ館の用心。わたしが主人、橋富のお局さまより外の者は、大奥へとては一向出入りも叶はねば、と云うてお前のお頼み。ア、どうぞして大奥へ、入込む仕様がありさうなものでござんすがな。
彌七　すりや、いつぞやの騷動より、奥へとは其方を始め、外の女中も
たか　腑甲斐ないお末の勤め。この事ばかりは、どうも

彌七　ハテ、是非に及ばぬ。
　ト刀を落す。お鷹、思ひ入れあつて
たか　申し、氣遣ひさしやんすな。よい事がござんすわいなア。
彌七　ナニ、よい事とは。
たか　サア、御主人の橋富さま、この間より、アノ、わたしにナ、師直さまが、
彌七　ヤ。
　トお鷹云ひかねるこなし。
たか　サ、師直さまの大奧、わたしが味よう手引きするほどに、マア、何ぢやあらうと、よいによつてナ、案じる事はないわいな。
彌七　して、案內を知らすはいつ頃。
たか　サア、その案內をお知らせ申すも
　トこなしあつて
　まだ外に何やかや、とつくり云ひたい事もあれど
彌七　イカサマ。爰は往來。
たか　どこぞ人目にかゝらぬ所で。
　ト彌七そこら見廻し
彌七　何かの事を

たか　云うたり
彌七　聞いたり
たか　彌五郎さま。
彌七　女房ども。
たか　アイ。
彌七　おゝや。
　ト唄になる。障子の內へ兩人入る。あとメリヤスになり、上燗屋より九郎八、門の內より太四郎出で、あたり見廻し
九郎　近藤源四郎どの。
太四　大須賀團八どの。
九郎　貴殿かね〴〵、主人師直公へ心を通はし、腹切つてくたばつたる鹽冶が家來、由良之助を始め、浪人してけつかれば如何なる事を企み、主人へ仇すまじきものにもあらざるゆゑ、貴殿を犬に附け置けば、何かの事を嗅ぎ出し、內通あるが働らきと申すものだ。
太四　成る程、拙者ことは由良之助が爲には甥なれど、師直公へ志しを運べども、由良之助が緣者とあつて、お取上げない。然るに、貴公御入魂の上、段々とのお執成しゆゑ、一つの功さへ立つならば、御家來になして下され

んとの事。それゆゑ、一味徒黨に交はり、嚔一つした事まで、書き出してお知らせ申す。兎に角、善惡わからぬは伯父由良之助、京都山科に閑居して、晝夜分たず、遊女町への入り亂れ、それゆゑ諸士の心も區々、一味の輩も散り／＼が中にも、義を金鐵に動かぬ奴が、原郷右衛門、千崎、小寺、竹森、矢間。

九郎　ムウ、よし／＼。猶こなたは一味同心と見せ、この上の變あらば、早速告げ知らされよ。

太四　心得ました。

九郎　身はこれに殘りゐて、五人のうち、一人なりとも討ち留めて。

太四　そんなら隨分ぬからぬやう。

九郎　氣遣ひせずと、早く行きやれ。

太四　合點ぢや。

ト走り入る。九郎八、跡に殘り、いろ／＼身拵らへ。

九郎　慥かに、この障子の內へ入つたは千崎彌五郎。障子越しに、ムウ、さうぢや。

ト嫉刃を合し、身拵らへして障子の側へ窺ひ寄る。

ハテ怪しや。ハテ心得ぬ。

トまた耳を附け、よろしくこなしあるうちに、お鷹出で、顏見合せ

たか　ヤア、お前は。

九郎　われは。

たか　御家來の團八さん。

九郎　お鷹、わりやとつてもない事仕出したなア。主人師直公がお口說きなさるゝその時は、牧出しの荒馬見るやうに、ピン／＼跳ね廻る其方が、今の體裁。

たか　そんなら、アノ。

ト逃げうとするを

九郎　イヤどつこい。

ト九郎八お鷹を追ひ廻す。ト彌七出で、九郎八を取つて投げる。又かゝるをポンと當てる。

たか　ヤア、彌五郎さま。

彌七　コレ、おれが名は小春屋の

たか　ほんに彌七さま。

彌七　人の見ぬうち、早う屋敷へ。

たか　合點でござんす。

ト向うへ走り入る、道樂、欠伸しい／＼出で

道樂　これは又、酒を待たす事ではあるぞ。

ト喜三郎、樽を持ち出で

喜三　さても暇のいつた事ぢや。

ト向うより杢右衛門

杢右　ア、、長話しにはホッとした。

トめい／＼云ひ／＼出る。彌七と顔見合せ

道樂　千崎どの。

彌七　十内どの。

杢右　矢間どの。

喜三　喜多八どの。

四人　郷右衛門どの。

ト四人ヒソ／＼並ぶ。奥よりなまぐさ和尚出でくる。

喜三　上燗屋と姿を替へ、多くの人を引受け、餘所ながら尋ねますれども、師直が館の手がゝり、相知れませぬ。

杢右　この喜多八めも植木屋となり、所々方々と窺ひますれど、敵の樣子、館の案内は

彌七　コレ、氣遣ひなされな。知れました。

四人　ナニ、敵の案内知れましたか。

彌七　面目ないが、師直が屋敷のお末に奉公いたす

杢右　すりや、その女と

喜三　アノ、云ひ交して

道樂　館の樣子を

杢右　詳しく知らする

彌七　かねての約束。

和尚　ホウ、出かしめされた

四人　彌五郎どの。

ト此うち九郎八起き上がり、樣子を聞いてゐて

九郎　樣子は聞いた。うぬ。

ト切つてかゝるを、彌七切り倒し、止めを刺す。

四人　これは。

彌七　大事は小事より漏るゝ。いづれも隱密。

四人　隱密々々。

トじやん／＼半鐘。後は本釣り鐘、靜かに鳴る。

和尚　ありや、もう暮れ六ツ。

杢右　いつもの通りに

彌七　姿を變へて

ト皆々見世を方附ける。杢右衛門は饂飩の荷をかたげ、彌七は薦冠り、喜三郎、道樂は九郎八が死骸を薦樽に包む。

杢右　幸ひのその明き樽。

ト皆々手傳ひ、九郎の死骸を明き樽へ入れ、白い風呂敷をかける。

道樂　人目を憚るこの葬禮。
和尚　三衣の姿を、其まゝ役僧。
彌七　お住持、御苦勞。
ト辭儀する。
杢右　我れ〳〵は、これより夜の商ひ。
彌七　この彌五郎も姿を變へて
ト薦を纏ひ、頰冠りして
夜のうかゞひ。
喜三　して、この死骸は。
杢右　淺草川へ
彌七　流れ灌頂。
和尚　南無阿彌陀佛。
道樂　そんなら、いづれも。
彌七　イヤ。
ト顏にて仕形して、兩人花道へかゝり
杢右　饂飩、蕎麥切りい。
彌七　お餘り下さい。
ト兩人向うへ入る。よろしくチョン〳〵。

幕

染井植木屋の場

役名――植木屋杢右衞門實ハ竹森喜多八。小春屋彌七實ハ千崎彌五郎。のぞき屋太四郎實ハ近藤源四郎。博奕打ち、正平。同、藤六。師直家來、種森兵内。家主、小兵衞。米屋、伊三郎。酒屋、勘兵衞。杢右衞門妹、お市。腰元、琴柱。同、正木。同、淺香。同、浪花。同、鵜の羽。同、皐月。師直妾、お蘭の方實ハお鷹。

造り物、植木屋の體、眞中大和葺き、赤壁、納戸口よき所に神棚、土器、德利。手拭に小刀を卷き、橋がかり、臆病口、兩方ちん二階。いつもの所に門口。臆病口にも柴折戸、植込み松、木犀など取り合はせ、その外、蘇鐵、柚の木、紅葉などの野鉢植ゑ、大分あり。幕の内よりお市、娘の姿にて、鉢植ゑ松を木鋏みにて、葉をすかしゐる。この側に刀屋、米屋、酒屋、家主、借錢乞ひにて、やかましう云うてゐる兩方のちん二階にて、春日龍神の謠曲と山姥の端唄等をごつちやにうたひ、幕ひらく。

兩方障子うち　ヨウ〳〵。

ト大勢の聲にて褒むる。

刀屋　エヽ、恟りするわい。ありや何ぢやいの。

家主　イヤ、ありや入市が所の唄會ぢや。こちら隣りは謠曲講、手事やら傳授ものになると、大抵面白い事ぢやないてや。

米屋　ハテサテ、お家主、悠長な。この辛い世界に、唄會開いてゐられるものか。

酒屋　さうぢや、謠曲講どころぢやない。この譯はどう立てるのぢや。

皆々　どうするのぢや〳〵。

いち　申し、お前樣方も聞分けのない。兄樣が太四郎さんに渡して、皆拂うてしまはしやんしたに違ひはござんせぬわいなア。

皆々　でも、受取りもせぬもの。

いち　こりや、何ぞの間違ひでござんせう。兄樣も今は留守なり、追ッ付け戻らしやんすであらうによつて、その時來て下さんせ。

刀屋　コレ〳〵、お娘、その云ひ譯も、もう聞き飽いたわいの。

酒屋　受取つた金を、此方が受取らぬと云うて、催促に來るものかいなう。

米屋　さうでごんす。二度取りをするやうな、米屋の伊三郎ぢやないぞ。わが身達がおこしやらぬによつて、催促を強うすりや、イヤ、あの伊三郎はむごい氣な者ぢや、大方米を買ひ込んでゐるであらう、悪い奴は米伊三と、なんぼう憂き名が辛いわいの。

酒屋　イヤ又、爰な內ほど得知れもせぬ浪人が寄り合うて、酒を飲む內はない。如何におれが快うやればとて、十一貫八百廿四文といふ酒飲んで、猩々にならんす下心かいの。

刀屋　此方の店にぶらつかして置いた大小、二兩二分といふ代物、現銀ぢやというて取り込んで、如何に鯉口がやらこいとて、さう空鞘は遣はぬものぢやわいの。

家主　オヽ、この家主も三軒家の家賃の溜り、今日はしやり無理、取らにや置かぬ。

皆々　オヽ、取るのぢや〳〵。

ト此うち杢右衛門、頭巾、袖無し羽織、木鋏を持ち、戻りかゝり、內の樣子を窺うてゐる。

いち　アヽ、皆さん、其やうに聲高に。マア、靜かに云う

て下さんせいなア。
米屋　イヤ、靜かに云ふまい。大きな聲で云はうわい。
酒屋　聲高に云ふのが、おとましくば、早う錢を拂やいの。
米屋　どうで、素手では渡すまい。百貫目の形に編笠。
家主　さうぢや。家附きのもの退けて、後は分産してしましれやれ。
いち　これはしたり、理不盡な。マア／＼、待つて下さんせ。
ト留める。
米屋　何を邪魔しやんないの。
ト手籠めにしてゐる。皆々道具を出さうとする。杢右衞門ツカ／＼と内へ入り、皆々を突きのけ、米屋を投げる。
いち　オヽ、兄樣、よい所へ、よう戻つて下さんした。
米屋　アイタヽヽヽ。こりや米伊三を米痛にしたな。
皆々　オヽ、なぜおいらを、投げた／＼。
杢右　全く以て、各々方を投げは致しませぬ。戻りかゝつて内を見れば、何か妹を手籠めにしてござるゆゑ、ちよつと取支へましたが、なぜ狼藉をさつしやるのぢやな。
酒屋　云やんないの。狼藉の、印肉のと、下手な篆字屋ぢやあるまいし。
刀屋　横柄な事云はずと、借錢拂うてもらはう。
皆々　さうぢや。拂うてもらはう／＼。
ト杢右衞門こなしあり
杢右　すりや、各々方にはこれまで、手前や彌七、太四郎がかゝりましたる代物の、催促にお出でなされたのか。
皆々　知れた事いの。
杢右　心得ませぬわい。その代金は覗き屋太四郎に、十兩餘りの金子を渡し、各々方は勿論、外々へも拂はせ置きましたが。
家主　コレ／＼、杢右衞門、其やうな、ぬけ／＼とした事を云やんないの。
米屋　こりや、あちこちぬぐつて、此方に拂はぬ工面ぢやなア。
皆々　さううまうはならぬわいの。
いち　聞かしやんしたか、兄樣。皆樣が口を揃へて、あのやうに云はしやんすからは、よもや違ひはござんすまいぞえ。
ト杢右衞門思ひ入れあり
杢右　何分、とくと吟味いたしませう。追ツ附け太四郎も

參る筈でござれば、各々方も御不請ながら、奥でお待ちなされて下さりませ。キツと糺しまして、わしも彼奴が拂ひませずは、私しがお拂ひ申しませう間、マア暫らく、奥でお待ちなされて下されませ。

酒屋　イヤモウ、譯さへ立つ事ならば、そりやいつまでも待ちもせうが

刀屋　とつくりと糺して、金拂うてもらはうぞや。

杢右　そりや、合點でござります。

家主　いづれも、奥で待たうぢやないか。

米屋　そんなら、御亭主。

杢右　後程お目にかゝりませう。

ト唄になる。皆々奥へ入る。あとメリヤス、杢右衛門、煙草盆扣へ思案の體。お市、側へ行きて

いち　申し兄樣、何を物案じ顔してゐやしやんすぞいなア、

杢右　妹、この喜多八をはじめ、原、矢間、小寺、千崎、大鷲なんど、何卒敵師直が館へ入り込まんと、廻國巡禮、又は商人、職人となつて徘徊するうち、配分の金も、この費えに大方なくし、今の掛け方のお衆も、近藤、千崎、身共らが取替へもらひし價のたゝまり。源四郎が妹や、其方が得心してくれたばかりで、調達した六十兩は、由良之助どのへ追借の返濟。相殘つた十三兩は、三人が諸拂ひ。源四郎がよろしく致すと云うて持つて出たが、日頃の身持ち。あの體ならば大方……ア、儘よ。源四郎が來たら、樣子が知れう。……思ひ廻せば、妹、腑甲斐ない兄を持つて、憂き川竹の勤めするも、主人への忠義ぢやと諦らめ、料簡して行てくれよ。

いち　勿體ない事云うて下さんす。君傾城はおろか、辻に立つ勤めでも、お主のお爲、兄さんの爲、いとし可愛い彌五郎さまの

杢右　ヤ。

いち　サア、彌五郎さまや源四郎さまの、お爲になる事ぢやもの、よう諦らめて居りますわいなア。

ト泣く。

杢右　出かした、妹、くど／＼と禮は云はぬ。近所があるゆゑ親方どのに、裏から來て下されと云うたれば、追ツ附け駕籠持つて見えるであらう。其方もソレ、身化粧でもして待つてゐやれ。ア、儘ならぬ浮世ぢやなア。

〽仇なこの世を貸し座敷、身じまひ薄き洗ひ顔、二つ井筒のなほ深い、せいて逢はさぬ親方の、きついは間夫の物思ひ。

トあとメリヤスになる。此うち杢右衞門思ひ入れあり、奥へ入る。お市、鏡立て、櫛箱を出し、髪撫で附ける。此うち向うより彌七、思案しい〳〵出る。

彌七　とんと氣の濟まぬものぢや。この間淺草で、お鷹と約束したる日限は、丁度今日あたり。それに、この間には、文一つおこさぬは。……但し、事顯はれ、手討ちにでもなりはせぬか。アヽ、樣子が聞きたいな。イヤ〳〵、此やうに思案ばかりしてゐては濟まぬ。マア、喜多八と相談の上。

トつか〳〵と内へ入らうとして、お市が泣いてゐるゆゑ、門口にヂッと立ち聞く。

いち　これに附けても、胴慾なは彌五郎さま、年月焦れた甲斐もなう、わたしや勤めに參ります。今一度お顔が見てから行きたい。それに引き替へ、あの源四郎さまが、わたしを見ると、附けつ廻しつ。ならう事なら、彌五郎さまと、なぜ替へ〳〵にしては下さんせぬ。ほんに結ぶの神さんも、意地、惡い事ではあるわいなア。

〽なるは否なり、思ふはならず、添ふに添はれぬ身とならばえ。

〽山寺の春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散るらん。

二階　よう〳〵。

ト聲する。あとメリヤス。彌七ヂッと泣き、向うを見て小隱れする。向うより太四郎、酒に醉ひ一腰差し、覗きの小さき箱を持ちながら、ヒョロ〳〵出てくる。跡より博奕打ち二人出る。

正平　オイ〳〵、太四郎、待ちやいの〳〵。

太四　待てとは、誰れぢやい。

藤六　イヤ、おいらぢやわい。

太四　ヤア、正平か。藤六か。こりや、消えたわい。

正平　消えても、逃げても、もう叶はぬワ。この間の四粒胴で、もく附けた四貫五百。

藤六　おれが貸した二貫五百も、高が目腐れぢやけれど、太郎にかゝつて貸したと思や、腹が立つ。四も五もいらぬ。錢戻せ。

藤六　サア、いま戻せ〳〵。どうぢやい。

太四　サア、えいわい。返すわい。有やうはわいらに、借つた錢の才覺、氣がむしや附くゆゑ、一杯引ッかけたのぢや。幸ひ杢右衞門の所へ寄りや、ちつと返す才覺もあり、もちつとぢや。待つてくれ。

正平　ハテ、返すなら、待つてやろか、その返す才覺とい

ふは。
正平　その才覺は、
　ト囁く。
ナア、合點か。
兩人　合點ぢや。
太四、サア、おれに附いて、ごんせ〳〵。
　ト内へ入る。二人は門口にゐる。
いち　オヽ、太四郎さん、ござんせ。
太四　ヤア、お市の君、またさう髪を結ひたてた所は、日頃の御器量十倍增し、おれが惚れたも無理でもない。どうぢやいな〳〵。
　トしなだれる。
いち　エヽ、モ、太四郎さん、じやら〳〵と、何ぢやぞいなア。また酒が過ぎたのぢやな。
太四　過ぎたとも〳〵、八百八町を竪横十文字に駈け歩いても、一文にもならぬゆゑ、けたいが惡さに、百廿四文がところを、キユウといたぢや。なんと、きようといかきようといか。次手に命取りめ。其やうにピン〳〵せずと、ちよと猿猴が梢傳ひを。
　ト嫌がるお市を無理に捉へる所へ、李右衞門出で、太四郎を突き退ける。太四郎、李右衞門にしなだれ、顏を見て
南無三。門違ひぢや。
　ト眞面目になる。
いち　兄さん、よい所へ。アノ源四郎さんが
李右　コリヤ〳〵、妹、何にも云ふな。源四郎も武士。誠の性根を亂されうと思ふか。馬鹿な奴。時に、源四郎どの、この間、其許へお渡し申した十三兩、その金子を以て、諸拂ひはなされたでござらうの。
太四　そりや知れた事、三軒家の家主から、米屋、木屋、酒屋まで、まださつぱりと拂へば六七十匁不足なれど、そりやおれが働らきで、殘らず帳面は消えたてや。
李右　ウム、そりやお世話な事。併し、六七十匁の不足金、外で働らいたとは合點がゆかぬ。皆お屋敷は疎遠の其許、いづれのお人に借用召された。
太四　サア、その金は、アノ。
　ト門口へこなしある。
兩人　オヽ、その金は、おいらが貸してやつたのぢや。
　ト内へ入る。李右衞門思ひ入れ。
李右　アノ、其許樣方が……ハテナア。

正平　太四郎。最前詞番うた通り、大枚七十匁といふ金を貸したおいら。
藤六　日限りは今日の約束ぢや。サア、いま、金戻せ。受取らう。
太四　サア、その金は。
正平　ないと云うて箱割りや、着ばつた物など脱がして取るのぢや。
藤六　オヽ、さうぢや。グッと云へ〳〵。
ト杢右衛門こなしあり
杢右　太四郎、いよ〳〵この兩人に、拂ひの足し金をお借り申し、掛け方は濟ましたのぢやなア。
太四　知れた事。
杢右　こゝな横道者、僞はり者めが。
太四　ヤイ〳〵、杢右衛門。なんぢや。おれを横道者ぢや、なんでおれが僞はりぢや。
杢右　僞はり者であるまいか。身共が渡した金子を以て、諸色の拂ひは致さず。まだその上に、借用せしその金子は何に遣うた。大方、例の博奕諸勝負。その元手に致したに違ひはない。エヽ、云はうやうもない不所存者ぢやなア。

太四　ヤイ、杢右衛門。不所存、どゝは舌長な。その不所存な證據を見ようか。
杢右　如何にも見せう。掛け方の衆、皆爰へござりませ。
四人　心得ました。
ト奥より四人出る。
太四　ヤア、こなた衆は。
ト悄りする。
四人　太四郎、貴樣が取込んだ金、拂うてもらひませうぞ
太四　サア、その金はなア。
四人　おいらが譯はどうするのぢや。
太四　サア、それは。
皆々　サア〳〵〳〵。どうぢやい。
ト太四郎、ヂリ〳〵舞ひする。
杢右　太四郎。コリヤ、どうぢや。お身や何と心得てゐる。この杢右衛門が渡した金、何事に遣ひ果した。あの金をつい假初の金ぢやと思ふか。其方と身の妹が……こりや云はいでも知れてゐる筈。これまで度々、酒と博奕のしすごし、その意見を受けるやうなお身の年輩かい。思へば思ひ廻す程、一兩はおろか、一分でも仇疎かに遣はるる金と思ふか。エヽ、見下げたる人非人ぢやなア。

太四　杢右衛門どの、誤まつた〳〵。此やうな惡者どもに誘のかされ、大切な金を、打つたり、飲んだり、その罰で、斯ういふ人中で耻面。せめてはこの場での云ひ譯、以前は武士の源四郎、侍ひらしう腹かッさばいて、

ト脇差へ手を掛ける。彌七、內へ入り、太四郎を留め

彌七　太四郎、待つた。待つた。待たッしやれ。

太四　イヤ、放して下され、彌七どの。こなたの手前も面目ない。いづれも、おさらば。

ト死なうとする。また留めて

彌七　コレ、死は易し、生は難し。死んで忠義に、イヤサ死んで花實が咲きますかいなう。

太四　でも、この場に及んで。

正平　云ひ譯の切腹など〻、そんな芝居でするやうな事をするないやい。

藤六　こりや何か、家內云ひ合して太郎にかけるのか。そんなで行くのぢやないぞ。

太四　サア、それぢやによつて。

トまた死なうとする。留めて立廻りあり

杢右　彌七、留めずと殺してしまや。太四郎、そちや面目ないゆゑ、爰で切腹するか。

太四　オヽ、腹切つて見せう。

杢右　今あのお人の云ふ通り、そりや人脅しのこれ見よがし。この杢右衛門會得せぬ。サア、腹切るなら切つて見い。その竹篦では、よもや腹は切られまいがや。

太四　ヤ。なんと。

ト杢右衛門、棚より手拭を卷きたる、刀の身を取出し

杢右　太四郎、これ見知つてをるか。

ト太四郎見て恟り

太四　ヤア、その一腰は。

ト取りにかゝる。立廻りにて、太四郎を峰打ちに打ち据ゑる。

いち　ア、コレ、兄さん、待たしやんせ。

彌七　尤もぢや。道理ぢやが、必らず聊爾せまいぞ。

ト二人が留める。

杢右　エヽ、うぬはなア。この一腰こそ拜領の、イヤサ、母の形見のこの刀。サ、母の御最期の無念を思はば、腹臟は顚倒し、寸の間も離されぬこの一腰を、ようもこれなる刀屋へ、僅かな價で賣り代なしたなア。折よく某が見當りしゆゑ、買ひ戻したこの、サア、母の形見。不孝不忠の胴骨へ、意見の荒身、荒療治、とくと性根にこた

えたか。うぬ。
ト彌七、太四郎の脇差を取り、拔いて見て
彌七　誠に、こりや竹箆、エヽ、返す〴〵人でなしぢやなア。
米屋　ほんに、聞けば聞く程、惡い奴は太四郎めぢや
酒屋　イヤ、モウ、いとしいは杢右衞門。ナウ、皆の衆。
刀屋　氣の毒千萬なものになつたわい。
杢右　大家さまを始め、いづれも方、血で血を洗ひます、面目もない儀をお目に掛けました。お聞きの通りの仕儀でござれば、どうぞ暫らく御容赦を。
家主　成る程、元が侍ひの杢右衞門どの。
米屋　さう云はつしやるに違ひもあるまい。
酒屋　いつそ待つてやらうぢやないか。
刀屋　おゝ、此方も待つてやりませうわい。
正平　總々が待たるゝに、こちら二人が突ッ張つてもゐられまい。
藤六　よいワ、おいらも四五日待つてやらうわい。
家主　オヽ、この大家小兵衞を始め
米屋　米屋の伊三郎
酒屋　酒屋勘兵衞、

刀屋　この刀屋の和吉も、こなたに免じて
皆々　皆待ちまするぞや。
ト云ひ〳〵、皆々門口へ出る。杢右衞門送り出る。
杢右　忝なう存じます。いづれも樣、あの態を御覽じませ面目を失なうて顏さへ得上げませぬ。ヤイ、太四郎、この杢右衞門に打擲せられ、無念なと思ふ魂ひがあらば、性根を入れ替へい。入れ替へる所存がなくば、朋友、イヤサ、友達のよしみもこれぎり。思案せい、太四郎。いづれも樣、ようござりました。
ト唄になる。皆々しか〴〵云うて入る。あとメリヤス、杢右衞門、神棚より神酒德利、土器、持ち出で、彌七お市が仲に置く。
彌七どの。押し附けがましき事なれど、一世一度の祝言の杯、妹、一つ飲んで彌五郎どのへさせ。彌五郎どのはこの竹箆へ、さしてやつて遣はされい。
ト泣く。彌七合點のゆかぬこなしあつて
彌七　竹森どの、妹御の杯は、品によつて戴きもせうがこの竹箆にさせとはな。
杢右　貴殿も存じの通り、由良之助どのより泊借の金子、何かに詰まり、武士のあるまじき事なれども、源四郎が

妹お新もろとも、妹お市を勤め奉公。兩人とも、かねてこなたに心あるとは知りながら、主人の爲、兄の爲を申し聞かし、得心させた甲斐もなく、この極惡人めが不埒ゆゑ、大切な身の代のうち十三兩、この竹篦ゆゑに水の泡。

ト太四郎を引き起す。太四郎ゆでたやうになつてゐる。

それに引き替へ、うぬが妹はナ、忠義にその身を苦界に沈め、思ふ男に引き別れ、辛い辛抱するわいやい。女に劣つた、こゝな大腰拔けめが。

太四　誤まつた〳〵。いま、喜多八が云ふ通り、如何なればこの源四郎、伯父に背き、妹にも離れ劣つた耻曝し。いづれもこの申し譯、この拜領の刀を以て、うぬが

ト騙し打ちに切り附ける。杢右衛門、竹篦にて立廻りあり、太四郎を當てる。ウンと反る。

いち　これは。

杢右　ハテ、構はずと、マア、奥で。大方親方も來て待つて居られう。サア、一時も、早う。

彌七　一世一度の杯事。

いち　嬉しい悲しい三々九度。

杢右　色直しは直ぐに廓の晴れ着。

彌七　夫婦の固めが今生の

いち　別れの杯、未來は必らず

ト取り附き泣く。彌七も思ひ入れあり。

杢右　繰り言を祝ひ奉る。

ト謠にて泣く。ト唄になる。彌七、土器を持ち、お市が手を引き、杢右衛門も入る。あとメリヤス、太四郎ソロ〳〵起きて

太四　エヽ、忌々しい。同じ朋輩でも、組下の喜多八めに打擲にあうたこの無念。よいワ。いま師直どのに、うぬが企み、ある事・ない事・注進して、疫病神で敵討ち、待つてゐよ。

ト行かうとする。向うより種森兵内、繼ぎ上下、侍ひにて走り出で

兵内　頼まうぞよ〳〵。

トこの聲にてうろたへ、太四郎、奥へ忍び込む。此うち彌七出で

彌七　アヽ、思ひもよらぬ涙をこぼした。

兵内　コリヤ〳〵、そなもの、植木屋杢右衛門宅はこれか

彌七　左樣でござります。

兵内　然らば身共が御主人、其方が植木御覽とあつて、こ

の所へお出でなさるゝ。隨分念入れ。お出迎へ申せ。もしお氣にさへ入れば、一攫の金の蔓だ。掃除萬端、心を附けい。アレ〳〵、向うへお出でなされた。下に居りませい〳〵。

ト彌七ウロ〳〵してゐるうち、向うより手振り、挾み箱、鋲乘り物、腰元六人、長刀、茶辨當、沓籠美々しく、しと〳〵門口へ來る。兵内手をつかへ

兵内　ハア、即ちこれが植木屋杢右衛門宅でござります。

ト乘り物の内より

たか　花商人植木屋杢右衛門宅とはこれか。

兵内　左樣でござりまする。

ト腰元皆々寄つて乘り物の戸を開く。內よりお鷹、衣裳、裲襠にて出で、ズッと二重舞臺へ通る。腰元先へ褥を敷く。お鷹その上へ坐ると、乘り物の內より結構なる蒔繪の煙草盆、長き煙管を附けお鷹が前に置くこの間、隨分靜かに。

たか　植木屋杢右衛門とは其方か。

彌七　イエ、杢右衛門は、只今ちよつと裏口より、駕籠を送つて、辻まで參りましてござりますゆゑ、呼びませうと存じまするうち、早お入り遊ばされましたゆゑ、マア、お出迎ひ申しました。私しは近所の小春屋

ト云ひ〳〵お鷹を見て

ヤア、其方は。

ト大きに恟りする。お鷹も驚ろく思ひ入れ。氣を替へ

たか　コレ、知らぬ〳〵〳〵。知らぬぞ。ついに見た事もない人。

彌七　イ、ヤイナウ、お鷹。

たか　イヤサ、お鷹、サア逢うた事も、見た事もない人。ナア、サア、あたりの人目……サア、ひと目見ても、近附きでないからは、馴れ〳〵しう物を云はれう筈もなし知らぬ〳〵。知らぬぞ。

彌七　とんと其まゝ瓜を二つ。生寫しと云はうか。矢ツ張りさうぢや。

ト寄らうとする。

兵內　ヤイ〳〵、慮外な奴の。あなたはどなたと思ふ忝なくも當時鎌倉の御出頭、高野師直さまのお部屋お蘭の方さまに向ひ、慮外いたすと手は見せぬぞ。

腰元　下がりや〳〵。

ト彌七いろ〳〵思ひ入れあり

彌七　すりや、鎌倉の御出頭師直さまの、お部屋樣とな。

兵内　如何にも。
彌七　アノお妾に。
兵内　くどい。
彌七　ムウ、そんならこれまでの約束を違へ、アノ、師直に。
　ト行かうとするを、兵内立廻つて留め
兵内　ヤア、憎くい毛二才め、師直さまのお部屋様と知らぬうちは格別、知つて慮外を働らかば、家來、ぶち据ゑて引ツ縛れ。
皆々　動くな。
　ト取り廻す。
たか　待て／＼。
皆々　ぢやと申して。
腰元　お部屋様の御意ぢや。鎮まらッしやれ。
皆々　ハア。
　ト扣へる。
兵内　アイヤ／＼、憚りながら、あなた様へ慮外いたす野郎めゆゑ、括し上げるを、なぜお留めなさるるな。
たか　師直さまのお部屋と知つて慮外するは、エヽ、聞えた、こりや、人違ひのぢやの。但しは深う云ひ交した女中に、別れての色狂人か。サア、狂人も一人は狂はぬもの。兵内。
兵内　ハア。
たか　其まゝにして、免してやりやいなう。
彌七　こりやモウ、どうも。
　ト立ちかゝらうとする。皆々反り打つ。杢右衛門、駈け出で、彌七を止める。
杢右　待て／＼。
彌七　ヤア、放せ／＼。
　ト揉み合ふ。
兵内　ヤア、許し置けば、附け上がりのした泥坊め。括しあげて、お屋敷へ引かッしやれ。
皆々　動くな。
杢右　マ、、、、お待ちなされて……ハテ、待てと云はば……マ、、、、お待ちなされて下さりませう。
　ト兩方へ掛けて云ふ。
兵内　して、其方は何者ぢや。
杢右　私しはこの家の亭主杢右衛門。商賣の植木御覽とあつて、願うても叶ひませぬお大身樣の、お部屋様のお出で、それに、まだ商ひもせぬ先に、私しの内から狼藉者

があつた。ヤレ、縛れ、屋敷へ引けと仰しやつて下さりましては、第一商ひの邪魔。次いでは、あなたのお屋敷のお名まで出る事。サア、爰の所をお聞分け下されて、幾重にも御料簡。

ト彌七キッとなる。兵内、供廻り皆々おこづく。

サ、、、、道理ぢや……尤もぢや。イヤ、御尤もぢや。が、折が悪い。イヤサ、場所が悪うござりまする。その上、お部屋様の仰しやる通り、こりや、人違ひ、間違ひでござりまする。何事も私しに免じられまして、御容赦なされて下さりませう。

たか　いかさまなう。人違ひとあらば、兵内、糺明にも及ぶまい。

兵内　して、其奴は何者ぢや。

杢右　男でござります。ハイ、私しが召使ひまする下男ぢや。ナア、下男なら、下男のやうに、ハテ、コリヤ、お部屋様に、早うお茶でも上げませい。

彌七　茶はない。

杢右　茶はないとは。

彌七　茶は最前水を注いだ。水くさい水を注しくさつたゆゑ、折角沸かした湯も、水の泡となつてしまうたわい。

たか　イヽヤ、ならぬぞや。例へ其方の湯は、水になつても、此方の湯はりん〳〵と……サ、そのたぎつた湯を早く持て。

ト彌七腹を立てる。

杢右　ハテ、コリヤ、湯を持てと仰しやるぢやないか。茶がなくば、幸ひの茶辨當のお茶を、早う早う。ハテ、斧を石に當て、針にするも辛抱ぢやがや。

ト彌七思ひ入れあつて、うなづく。

〽我が身の末の放れ駒、長き夜すがら引きしめて、昔語りと飛鳥川。

トこの間、彌七、茶辨當の火を煽いだり、茶を汲んだり、いろ〳〵腹立つる事あり。トヾお鷹を睨みながら茶を差出す。お鷹取る。

彌七　もう、どうも。

ト茶臺にて叩き掛からうとする。杢右衛門押へて

杢右　この、鉢植の蘇鐵、御覧じませ。なんと見事でござりませうがな。

たか　成る程、その鉢植も見事なれど、自らが今日爰へ立寄つたは、店並びの植木屋、もしお前を、イヤサ、大前は廣庭の桂男の、桂の木を、尋ねて逢はうと思うたに、よ

うマア爰に、この桂の木が、有り合はしたことぢやなう

ト木犀を見て云ふ。

杢右　イヤ、まだお望みの植木がござりませうならば、何なりとも取寄せまするでござりませう。マア、奥庭の植ゑ物も、ちと御覽なされませう。

たか　成る程、こゝは人目も繁し。詳しい誂らへ物は後の事。マア、奥庭の花を詠めませうわいの。腰元どもは殘し置き、兵內始め供廻りは、暫らくいづ方にぞ扣へてゐよ。

皆々　畏まつてござりまする。

ト皆々橋がゝりへ入る。

たか　そな者、駒下駄。

彌七　エ、。

なか　早う持て。

彌七　モ、あんまり。

杢右　ハテ、コリヤ、駒下駄直すは下人の役目。大切なるお客樣へ、早う、ソレ、お召し物。

ト彌七いろ／＼あり。お鷹に駒下駄直す。思ひ入れ、いろ／＼あり。お鷹ヂッと戴かうとして、腰元を見てちやつと穿き、こなしありて

たか　サア、杢右衞門とやら、案內賴む。

杢右　左樣なら

ト彌七捉へようとするを引き据ゑ

斯うお出でなされませ。

〽秋くれて、雁も空しき聲たてゝ。

トこの唄のうち、杢右衞門先に、お鷹、腰元連れ、切り戶へ入る。彌七殘り、こなしあつて

彌七　思や思ふほど合點のゆかぬ。主人の敵を覘ふ我れ我れ、定めし金が要るであらう、館の案內もこの月のうちには知らさう、必らず女夫になつて下さんせと、暇乞ひのその折に、あれ程までに……それがマア、師直さまのお部屋樣お蘭の方さま、知らぬ／＼、見知らぬ男、慮外な奴と、打つて變つた今の詞。但し、大勢の供廻り、何やかやの遠慮で、今のやうに云うたのか。でも、師直に隨うたりやこそお部屋樣、お妾樣と今の敬ひ……何ぢや、どぎ／＼と、とんと譯が知れぬやうになつた。……聞えた事があるわい。先度逢うた時、彼奴が云ふには、師直がわしを口說く、うるさうてならんけれど、どうあつてもこの身は穢さぬと云うたが、そんなら口說き落されて、師直と……男一人を守つて暮らす女子は、世



大正八年十月歌舞伎座上演

坂東秀調のお蘭の方　片岡我童の彌五郎

の中に、百人に二人か三人。その惡性な世の中ぢやけれど、あの女子にばかりは、よもやと思うて本心を。

ト云はうとして、門口ピッシャリ。

〽筒五筋の絲よりも、もつれもつるゝ藻汐の煙り。

トあとメリヤス、杢右衞門出掛け、窺ふ。彌七いろいろあつて、刀を拔き、如露にて水をかけ、寐刃を合せ身繕ひして駈け込む。杢右衞門留めて

杢杢　待て。

彌七　放せ。

杢右　イヤ、待て〳〵〳〵。

ト兩方揉み合ひ、杢右衞門、懷より位牌を出だし、彌七に突き附け

靈光院殿喜岸大居士。

彌七　ヤ。

杢右　御主君がお留めなさるゝ。千崎彌五郎、待てと云はば、マア〳〵、待て。

彌七　ハツ。

ト鎭まる。

杢右　茲な不忠不義の犬侍ひめが。

彌七　ナニ、某を不忠不義とは。

杢右　僅かの少女に魂ひを亂し、貞節を守る志しもなき匹婦に、一旦の怒りを以て寐刃を合はし、血相して駈けこむは、わりや、あの女を殺す心であらうがな。

彌七　如何にも。

杢右　師直が餘類の女、手に掛けなば供の同勢、其方を安穩で置かうか。例へ切り拔け立退いても、鹽冶崩れの浪人とて、敵に由縁の女を手にかけ、立退きしと聞くならば、いよ〳〵師直油斷せず、用心に用心の網を張らば、四十餘人の者共は、いつ敵の首取つて、泉下の君の欝憤は晴らし奉るぞ。サ、これ程の事に心の附かぬ貴殿にてはなけれど、生れ附いたる好色者、心の外の二字に迷ひ、あたら命失ふ事、サア、この竹森は意見せぬ。主人靈光院殿の御手を借つて、カウ〳〵。

ト散々に位牌にて打ち据ゑ

源四郎が惡事よりは、百倍まさりし不忠不義、犬侍ひと云うたが誤まりか。サア、斯う云ふが心外ならば、非を改めて本心に立返られよ、千崎どの。獨夫心を變ずれば百計成すに妨けありといふ所へ、氣が附かぬか。エヽ、情ない所存ぢやなア。

彌七　ハツ〳〵、勿體なや、我が誤まりゆゑ、三代相恩の

主人の御位牌を穢せし不忠不義、眞平御免下さりませい

ト位牌を戴き

喜多八どの、懇志の意見、仇には受けぬ、忝ない。さりながら、全く、千崎あの女に迷ひ、命は捨てぬ。貴殿も知らるゝ通り、あの女を手引きにして、師直が館の案內、忍び入つて見屆けんと、思ひの外なる徒ら女郎め、師直が妾となれば、閨の睦言さゝめ言に、我が存念を物語らば、師直猶以て油斷せず、用心嚴しくなるならば、我れゆゑ味方の難儀となる。元の起りはあの女め、生け置いては心安からず、刺し殺して我れも自殺し、せめてそれを連判の人々への申し譯、敵地の案內知らん爲、又は不足の入用金調へんと、鹿追ふ獵師は山を見ずと、よしない女を語らうて、却つて身方の害となる。我れも十の梯子をば、九つまで登りおほせ、無駄死する千崎が心の內推量して下され、竹森どの。無念な〳〵。殘念にござるわいなう。

杢右　すりや、本心放埒では……それ程にまで、忠義を磨く貴殿とは知りながら、誤まつて打擲したは、この喜多八が一生の誤まり。イヤ、拙者がお詫び申す。

彌七　イヽヤ、一味の面々に不覺を取らさうとせしは某が誤まり。

杢右　イヽヤ、拙者がお詫び申す。

彌七　イヽヤ、某が。

杢右　イヽヤ、手前が。

彌七　斯くまで心を盡せし事も

杢右　鵙の啼ほど喰ひ違ふは

彌七　よく〳〵弓矢神にも、見放されたか、喜多八どの。

杢右　彌五郎どの。

彌七　思へば〳〵

兩人　チエヽ、奇ッ怪なわいなう。

ト手を取り合つて泣く。內より

たか　杢右衛門どのはどれにぞ、それへ行て逢ひませうわいの。

彌七　ありやお鷹めが聲。

ト血相する。

杢右　コリヤ、急く事はない。最前、女が詞のうち、桂男の桂の木に尋ね逢はうと來たれども、人目あるゆゑ、誂らへは後の事と、云うたが耳の附けどころ。

彌七　日頃の深切、よもやあれに限つて、とは思へども、女に肌は許されぬ譬への通り、師直に隨ふ上は、とても

助け置かれぬ命、
杢右　イヽヤ、打ち殺すには手間隙いらぬ。
彌七　爰へ來るこそ最屈竟、
杢右　何かの事をとつくりと、聞き屆けたその上で
彌七　誠なき女ならば、騙し討にすつぱりと
　ト太四郎出で
太四　樣子は聞いた。うぬらが企み、師直公へ。
　ト行かうとするを杢右衛門立廻りにて當てる。彌七、
切らうとする。
杢右　コリヤ、殺すにも殺されぬ由良之助どのの血筋。幸
ひのこの下家へ。
　ト太四郎を下家へ入れ
コレ、萬事ぬからぬやう。
彌七　こなたも忍んで。
杢右　合點ぢや。
　ト杢右衛門奥へ入る。
謠〽されどもこの人、夜は來れども、晝見えず、ある夜
の睦言に、御身は如何なるゆゑにより、晝をば何と烏羽
玉の。
　トこの謠のうち、切り戸よりお鷹、駒下駄にて出で

たか　これはしたり、亭主、亭主。杢右衛門はどれへ行か
れた。……コレ／＼。そな人。
彌七　おりや聾ぢやないわいの。
たか　御亭主を知らずかいなう。
彌七　知りませぬわい。
たか　ホヽヽヽヽ、あの人とした事が、つかうどな物の
云ひやうの。
　トあたりを見廻し、側へ寄り
彌五郎さま、逢ひたかつた／＼。
　ト取り附き、泣く。彌七振り切り、ツイと退き
彌七　オヽ、逢ひたかりさうなものぢや。あのれより、お
れが逢ひたかつたわい／＼。イヤ、お前をのけて一生、
外の男は持たぬと云ふ、舌の根も乾かぬうち、この形は
何ぢや。イヤサ、この形は、ア、結構なお小袖ぢやなア。
例へ蜀紅を身に纏うても、おれが目からは、悉皆斑の野
良猫ぢや。三毛が毛色の染め小袖、うな、ひけらかしに
うせのぢやな。エヽ……と腹立てるも矢ツ張り未練、ド
リヤ、奥へなと參じませうか。
　ト行かうとする。お鷹ヂツと裾を捉へ、留める。彌七
こなしあつて

放せやい。放さつしやりませ。放して下さりませや。放しなされておくれなされませ。師直さまのお妾樣、イヤ、お部屋樣。

たか　アイ、わしや、師直さまのお妾ぢや。お部屋に違ひござんせぬ。

彌七　そりや結構な事でござります。隨分お自慢なされませ。

たか　アイ、お前に逢うたら、自慢せう、褒められうと、それぱつかりが樂しみに、今日爰へ來たのでござんすわいなア。彌五郎さま

彌七　なんと。

ト寄り添ふうち、切り戸より腰元六人、鉢植五つ、煙草盆、めい〳〵持ち出で

腰元　お蘭の方さま、これにござりますか。

同　仰せ附けられました鉢植。

同　持參いたしましてござりまする。

トお鷹、彌七ちやつと退きて

たか　オヽ、大儀〳〵。ナニ、そな人、この鉢植の代金、ソレ、早う。

腰元　畏まつてござります。

ト彌七の前へ袱紗包みの金を白臺に載せて、五百兩並べる。

彌七　ムウ、そんならこの金を

たか　サア、この間から心を盡した植木の價。その五包みその上、此方の屋敷へ出入りがしたい。手引き、イヤサ取次ぎしてお出入りの、手引きを賴みたいと云うた。わたしがやうな不束者でも、可愛いと、イヤサ、賴むと云うて下さんしたぢやないか。ナウ、腰元ども。

トこなしあつて云ふ。六人合點ゆかぬ思ひ入れにて、皆々顏を見合せ

腰元　何とござりませうぞ。

たか　エヽ、まだ鈍なその顏附。ツツトモウ。

腰元　私しらが、どんな顏附き致しましたえ。

たか　サア、まだ話しの山々は、この築山を廻るうち

彌七　これでちつと落ち附きました。そんなら詳しい樣子は、菊畑の

たか　花壇のほとりへ。

彌七　ドレ、お供いたしませう。

ト褥、煙草盆持つて、先へ行く。お鷹、煙管を持ち、腰元連れ、行きかゝる。返し。

道具廻ると、一面の菊畠になる。床几を直しある。

〽常磐の松と契りしも、仇な金ゆゑ身を書き入れの、金の代りに女房になれと、せがみ立てられ、返事もならず

たか　あの隣の座敷で彈き唄ふは、この頃流行る三勝とやらの唱歌。腰元ども、あの唄をよう聞きや。いとし可愛いと三勝が、夫の望みを叶へたい、入用の金も調へてやらうと、この間、イヤ、半七に請合うて別れてから、その約束の日は迫る　どうせうか、斯うせうかと、とつ置いつ思案すれど、意地の悪い、サア、善右衞門とやらの座敷へは、滅多に入られぬ嚴しい用心。すりや、善右衞門が寢所にも、用心がなうてはならぬゆゑ、迂濶な事を半七に知らし、却つて不覺を取らせては、樣子知らせた甲斐もない事。ア、、どうぞして知らせたい、と思ふ渡りに橋富さま、御主人の御執心、お手のかゝるは有り難い事、色よいお請け申し上げいと、主の權威の、イヤサ、金の威光の無理口說き。

〽思はざりにし身の恥辱、所詮憂き身は捨て草の。

いつそ死なうと思うたれど、イヤ〳〵、口說くこそ幸ひ、何かと樣子知る便り、金も自由になるものと、サア、穢らはしい事ながら、善右衞門に身を任せ、枕交したばつかりに、日頃の望みも、何もかも、叶うたといふものぢやござんせぬか、と三勝が云うたら、サア、半七が心はマア、何と思うてゐるであらうぞいなう。そこな人。

彌七　さればなア、併し當世の女中はマアお定まり。名を取らうより德取れと、尾羽を枯らした浪人者より、當時時めく、イヤ、善右衞門に、金の代りに女房になつたかよからうかい。

ト行かうとする。お鷹、煙管にてちよつと留める。

〽三勝取り付き、なう情なや、先の男と添ふ心なら、なんの斯うした話しをしませう。

たか　もうそんな疑ひは晴らして、矢ッ張り元の女夫、未來も替らぬ契りぢやと、云うて聞かして下さんせ、とサア、三勝が定めて云ふであらう。ナウ、腰元ども。

皆々　申しませうとも。

彌七　そんなら敵、イヤサ、金が敵の善右衞門が、心の奧の間知らさん爲。

たか　この金を調へて、半七に手渡したいばつかりに。

彌七　よう善右衞門に。三勝は隨つてたもつたなう。

杢右　卜杢右衞門、出掛けゐて
　天晴れ貞女の……三勝ぢやなア。
彌七　コレ、志しのコノ
杢右　ア、イヤ、植木の代金、しつかりと受取りました。
彌七　エヽ、忝ない……イヤ、嬉しうござるわいなう。
　卜供廻り、兵内始め、殘らずバラ〳〵と出て
皆々　お迎ひ。
　卜彌七、お鷹顏見合せる。
　謠〽契りも今宵限りぞと、懇ろに語るにぞ、流石別れの
　悲しさに、歸る所を知らんとて、
　卜この謠のうち、お鷹、乘り物に乘る。
たか　杢右衞門。
杢右　ハツ。
たか　彌七。
彌七　ハツ。
たか　今日は大儀、どの鉢植も皆自らが氣に入りました。
　明日屋敷へ、ナウ、ソレ、この書附けを持つて。
　卜書附けを抛る。兩人、取つて開き見て
彌七　こりやコレ、屋敷の
杢右　案內の畫圖。
彌七　そんならこれで
たか　尋ねておぢや。
　卜乘り物の戶をピツシヤリ
彌杢　エヽ、忝ない。
たか　乘り物やりや。
　卜乘り物仕掛けにて、物見よりねりぐりの血出ろ。彌
　七見て、恟り行かうとするを、杢右衞門、引き廻す。
　彌七ヂツと拜む。よろしくチヨン〳〵〳〵〳〵〳〵。

義臣傳讀切講釋（終り）

造鈧菊睦言（つくりものきくのむつごと）

〽常磐の松と契りしも、今は仇なる睦言と、なるも金ゆゑ色ゆゑに、身をかき入れの文のせめ．思ふに添はで思はぬに、投げの情を懲りもせで．逢瀬をまつと夕月の、身は空蟬の足元は．跡に引かる亂れ髪〽金の代りに女房になれと、せがみ立てられ返辭もならず〽思はざりにしこの恥辱、今のこの身は捨草や、二人が緣をさつぱりと、切つても切れぬ浮草や．よるべ定めぬ戀の闇〽三勝とりつき、なう情なや、これが世間にありふれた、色や浮氣ぢやあるまいし、初手から知らず知らぬ同士．それいつぞやの巳待の日、人目の關を不忍の、蓮見の折の雨やどり、ふつと見交す目遣ひに、しめからむ手もどこやらが、ぴつたり濡れた汗のあや、深い緣ぢやないかいな、嬉しい緣を神さんが、ひよんなお世話のその後に、先の男と添ふ心なら。なんのかうした話しをしましよ〽最早この世に秋の月．嵐の雪と散る花の、浮名は石碑に殘るらん、

（植木屋へ使ふ清元淨瑠璃）


繪本忠臣藏
ゑほんちうしんぐら

繪本忠臣藏

「不破數右衛門」と「嫁切り」の二種を收めた。これは享和元年三月、京都北側の芝居で上演したのが初めで、作者は近松德三だが、この時は「不破數右衛門」の筋だけで、「嫁切り」は無かつたやうである。諏訪勝右衛門(嵐吉三郎)春月尼(澤村國太郎)で、春月尼が非常に好評だつた。次に享和三年七月、大坂大西芝居で、同じく「繪本忠臣藏」を上演したが、この時は「不破數右衛門」の外に、「嫁切り」を德三が增補したらしい。無論通し狂言で、刃傷から討入まであつたのだが、外の筋は判然しない。この時は、與茂七(中村歌右衛門)久兵衛(山村友右衛門)太平次(三桝松五郎)江戸市(柴崎臺藏)淸光尼(中村ふせや)顏世(中村吉藏)おくめ(中村しのほ)鄉助、忠太兵衛(淺尾工左衛門)數右衛門(嵐吉三郎)春月尼(澤村國太郎)等の役割であつた。

數右衛門の一幕を江戸で上演したのは、文政二年八月の中村座「いろは假名隨筆」が初めで、この時は――光琳尼(岩井七之助)淸光尼(岩井龜次郎)伴內(淺尾友藏)貞心尼(中山介次郎)宅內(中村千代飛助)顏世(中山龜三郎)十內(關三十郎)春月尼(中村大吉)數右衛門(坂東三津五郎)で、三津五郎の數右衛門は大評判だつた。以來、江戸でも盛んに上演されたものである。

「嫁切り」を初めて江戸でやつたのは、文化六年四月の市村座「靈驗曾我籬」で、大南北が龜山の世界に書き直したのである。この時の役割は――田邊文藏(澤村源之助――與茂七の役)おつま(澤村田之助――おくめの役)田邊文太夫(坂東彥三郎――鄉助の役)伊丹鄉左衛門(市川宗三郎――忠太兵衛の役)進藤沼五郎(花井才三郎――太平次の役)庄屋杢兵衛(嵐新平――久兵衛の役)等であつた。以來、銘々傳にも組み入れられるし、また獨立した狂言として、いろ〳〵な役名に變へ、「花雨濡嫁入」「時鳥雨夜盃」等の名題で盛んに上演され、明治になつてまで舞臺に見られたものである。思ふに彼の無慚な筋は、頽廢期の看客には大受けに受けた爲であつたらう。

扉の表紙は、この「嫁切り」を初めて江戸で上演した「靈驗曾我籬」の繪本の一部である。

繪本忠臣藏

鹿島明神の場

役名 ―― 加藤與茂七。犬上四古九郎。猿島綱六。馬士、鬼鹿毛の權太。同、驛路の八。順禮娘、お新。同弟、粂吉。下女、お留。娘、おくめ。岩城忠太兵衛。

造り物、見付け、淺黄幕、松の吊り枝。上の方、鳥居、石垣、石燈籠、松の立ち木。下の方、葭簀圍ひの茶店、すべて、鹿島明神の體。幕の內より參詣の仕出し三人、床几にかゝり、煙草のんで居る。茶店の女、茶を運んでゐる、唄、神樂にて幕明く。

茶女 どなたもお茶一つお上がりなされませ。結構なお天氣ぢやござりませぬか。

仕一 されば、日和がよいので、この鹿島の稻荷樣は、賑はしい事ぢやて。

仕二 それにしても。えらい參詣ぢやの。

茶女 ハイ、今日はお宮に湯立ちがござりますゆゑ、別しての群集でござりまする。

仕三 そりや、どうぞ見て歸りたいものぢやが。

仕一 サア、見るもよいが、ひだる腹では、神子どのゝ舞を見た所が、とんと面白うないぞ。

仕三 そんなら又、今度の時見ませう。

仕二 オヽ、それがよい／＼。

仕一 姐さん、茶の錢は爰に置くぞや。

茶女 有り難うござりまする。

皆々 サア、ござれ／＼。

ト橋がゝりへ入る。茶店の女は、內へ入る。向うより忠太兵衛、鄕士の形にて、娘おくめ、振り袖、帽子掛け、下女おとめ、付き添ひ出て來り

忠太 娘、なんとよい日和でないか。

くめ 長閑なお天氣でござりまする。

とめ 御寮人樣、さぞお氣が晴れてようござりませうなア。

くめ 聞いたよりは、賑はしい事ぢやないかいなう。

とめ　左やうでござりまする。
忠太　娘、わりやまだこの鹿島の稲荷へ參詣した事はあるまいがの。
くめ　ハイ。
忠太　さうであらう。死にやつた母が今際の時、其方が事をくれ〲の頼み。さなくとも、我が娘、大事に育て上げたこの忠太兵衞、氣晴らしにもならうかと、同道して參詣したも、矢張り其方を思ふからの事サ。
くめ　其やうにまでお心遣ひ、エヽ有り難う存じまする。
忠太　それにしても、おれが體、若年の砌りは、近國までも人に知られた早足、日に二十里は苦にもせなんだが。年寄つては爰まで來るも大儀な。アヽ、役に立たぬ〲……幸ひの茶店、あれで暫らく休息して行かうぢやないか。
とめ　ほんに、それがよろしうござりませう。
忠太　サヽ、娘來い〲。
　ト本舞臺へ來り
　暫らく店を借り申すぞ。サア娘、これへ掛けやれ〲。
くめ　アイ〲。
　ト床几へかゝる。茶店の女、茶を汲んで來て
茶女　よう御參詣でござりまする。サア、お茶一つ、お上がりなされませいなア。
忠太　イヤ、構やるな、茶を呑めば錢が入る。ツイ店を借りるばかりぢや。併し娘、咽喉が乾くなら呑んだがよい。
くめ　アイ〲、左やうなら。
　ト茶碗を取る。
女　てもマア、吝い旦那様ぢや。シタガ、御ゆるりとお休みなされませ。
　トついと内へ入る。
忠太　なんと娘、斯う見渡した所は、身共が屋敷と違ひ、廣い境内ではないか。
くめ　ほんに晴れやかな、よい景色でござりまするなア。
とめ　御寮人様のお供で、私しもよい慰みを致しまする。
　ト鳥居の内より、綱六、四古九郎出て來り
四古　オヽ、これは岩城忠太兵衞どの。
綱六　オヽ、おくめどのにも同道にて、珍らしい、御遊參でござるか。
忠太　これは御兩所にも、御參詣でござるか。
四古　おくめどの、今日はお樂みでござるなう。
くめ　ハイ、あなた、ようお詣りなされましたな。

四古　ようお詣りなされましたなアとは、アノ、茲な畜生めが。
忠太　娘、此方へ掛けて居れ。
くめ　アイ〳〵。
卜上の方へ、腰をかける。
綱六　イカサマ、太平次どのが現を拔かさるゝも尤も。忠太兵衞どの、お腹立ち召さるな。貴殿の息女にしては、鳶が鷹と申すもの。
四古　イヤ、それは格別、忠太兵衞どの、御身に御相談がござるが、なんと聞入れては下さるまいかな。
綱六　御身の立身出世になる事、よもや否ではござるまいの。
忠太　斯く御治世の時に當つて、氏系圖、先祖の由緒に因つて、祿の高下等も、御直參、陪臣に至るまで、大略事相定まると承るに、今また相談に因つて、立身出世とは、どうで碌な相談ではござるまいて。
四古　これはさて、偏屈な事を申さるゝ事だ。かゝる太平の御代でも、出世の近道は、よい娘を持つたが親の仕合せ。
綱六　そこで拙者が御相談、斯樣な美しい御息女、當所の町支配いたさるゝ、小山田太平次どのと、緣組みの致さるゝと、鄕士風情とは違ひ、役柄と云ひ御内福と云ひ、男振りも立派なお人。
四古　おくめどのに大の熱心、丁度よい緣談と存ずるから、媒介の致す料簡、仕拵らへは先方より調へさす我れ我れが働らき。
綱六　シタガ、一人娘なり、跡に心便りがないと思はつしやるなら、貴殿諸とも引取つての樂隱居。
忠太　默らつしやい。
綱六　これがほんの、氏なうて玉の輿。
忠太　默らつしやい。
四古　是非ともこの緣は。
忠太　默れ〳〵默り召され……身不肖ながら岩城忠太兵衞親代々の鄕士、百五十石頂戴いたして、役目相勤め居れば、何不自由なきこの親仁、娘を當に、立身出世なんぞとはなんの痴事、役にも立たぬ仲人口、早く歸らつしやれ。
くめ　わたしや、殿御は持つ事は否でござります。この後とても、必らずお斷わり申しまする。
綱六　さう愛想なう云はれると、仕方がないが、親子とは

　云ひながら、揃ひも揃ひし悪い料簡。
四古　脊丈伸びた娘を、いつまでも子供のやうに思ひ居るうちには、埒もない徒らを致して、親の内をぽいとこな、こんな事なら疾に嫁入りでもさして置いたらと、後悔するは世間にいくらもある習ひ、これが下世話に申す、親馬鹿と云ふものでござる。
綱六　左やう〳〵、第一、家の外聞にも係はる事、何分息女を手離し召さるが。
忠太　ハテ、世間の盲どもが犬猫とも申せ、此方に構ひのない事。釣合はぬ緣組みは、鎗の身に長刀の鞘、反りの合はぬ太平次に、娘をくれる事罷りならん。
兩人　すりや、如何やうに勸めても。
忠太　得心ならば一言にて得心、否と云はゞ百曼陀羅勸めても不承知でござる。
四古　して、お娘の心は。
くめ　アイ、父様次第でござります。
綱六　犬上氏、もう云はつしやるな、忠太兵衛が日頃の片意地、如何程に申したとて、あつたら口に風引かすやうなもの。
四古　イカサマ、太平次どのに申し聞け、この緣談は思ひ切らせませう。
綱六　とは云へ、時代を知らぬ馬鹿侍ひ。これが彼の、口の端の飯粒を落すと云ふのでがなござらう。
四古　左やう〳〵、貧乏神が破れ團扇で、後から招いて居ると見えますわい。
二人　ハヽヽヽ。
綱六　イヤ、立歸らうではござらぬか。
四古　左やう仕らう……忠太兵衛どの、斯様な味い相談は、お身一生涯に又とない事、今一應思案いたしたがよいぞや。
綱六　今にも得心が參つたら、我れ〳〵が屋敷へ返事召され。
四古　それまでは太平次どのへ、よいやうに申して置から。必らず返事を相待ち居るぞよ。
　ト兩人、心意氣あつて
綱六　サア、參りませう。
　ト橋がゝりへ入る。
くめ　申し父様、返事を待つてゐると申しましたが、大事ござりませぬか。
忠太　ハテ、此方から返事いたさうと申しはしまいし、い



明治元年十月中村座上演番附

つまでなりと、勝手次第に待つたがよい。由ない事を聞いて耳が穢れた。こりやお宮へ詣らずと、もう歸らうではないか。

くめ　ほんに神は見通し、それがよろしうござりまする。

忠太　いま一服のんで行かう。

ト莨盆の火を捜して

こりや、火の用心のきついよい事だ。女中、火を一つ下され。

茶女　ハイ〳〵。

ト莨盆に火を入れる。鳥居の内より與茂七、着附け、大小、深編笠を持ち、跡より順禮娘お新、兼吉の手を引き、出て來り

しん　申し〳〵お侍ひ様、湊の方へはどう行きます。どうぞ教へて下さりませ。

與茂　オヽ、幼少な兄弟連れの順禮ぢやの。

兼吉　姉さん、術ないわいなア。

ト苦しきこなし。

しん　オヽ、この熱では、術なからうわいなう。

與茂　フウ、さては弟は病氣か。年端も行かぬに、さぞ難儀であらう。さうして、たつた二人か。

しん　イヽエ、母様と三人連れで、父様の菩提の爲に西國しましたが、今日このお宮で母様にはぐれ、あちこちと尋ねるうちに、この子の大熱、介抱しても治らず、段々日は暮れかゝる、詮方盡きて湊を尋ねて行きますのでござりまする。

與茂　オヽ、親を見失ひ、弟が急病、定めて其方が心遣ひ、ドレ〳〵。

ト子役の額へ手を當て

オヽ、こりや餘程の熱、その上、目も血走りあるは、この頃流行る麻疹であらう。なんぞ藥が……オヽ、幸ひ、持ち合せた一角。

ト紙入れより藥を出す。此うち忠太兵衞は、目を附けてゐる。おくめも、思はず與茂七に見惚れ居る。與茂七、藥をお新に渡し

與茂　コリヤ〳〵、早うこれを服ますがよいぞや。その上、定めて路銀もあるまいの。

ト莨入れよりはした錢を出し

爰に遣ひ殘りが七八十ばかり、これにて何なりとも調へ、湊まで參るがよい……湊はこの道を眞直ぐに、左へ取つて尋ねて行けば知れる程に、日の暮れぬうち、ちつとも

早う。

しん　アイ〳〵、有り難うござります。

ト弟を介抱しながら、向うへ入る。

與茂　アヽ、不便な者ぢやなア。年端も行かぬに旅の空、母を見失ひ、弟の病氣……定めて親人のお待兼ねであらうが、いつそ湊口まで送り屆けて遣はさう。オヽ、さうぢや。

ト向うへ行かうとする。向うより馬士の權、馬の沓をすげながら、次に馬士の八、竹の鞭を持ち、酒に醉ひたる體にて、馬士唄謳ひながら出て來り、與茂七にわざと行き當り

權　ヤイ、爰などう盲目め、脛踏みさらして、どうさらすのぢや。待ちさらんかい。

與茂　アノ拙者に。

二人　知れた事ぢや。此方へうせアがれ。

ト取巻きながら、本舞臺へ連れて戻る。

與茂　見受けました所が各〻方には、御酒機嫌と相見えますが、此方より行き當りも致さねば、元より足を踏んだる覺えござらぬ。それとも踏んだと云はつしやる事なれば、御免下され。

權　ナニ、酒の醉ひ。いつおいらに酒を吞ましやがつた。われに酒振舞はれた事はないぞよ。

八　オヽ、さうぢや〳〵。

權　おれも鬼鹿毛の權太と云はれ、西國邊で隱れのない馬士ぢや。キヨロ〳〵ぬかすと、頰桁引裂くぞよ。

八　四も五もない。どぎ突のめせ〳〵。

ト立ちかゝるを與茂七、ムツとするこなし。これにて兩人、氣味の惡いこなし。與茂七、氣を替へ

與茂　成る程、各〻方の御立腹は、重々御尤も。不調法の段は幾重にも御免下され。武士が手を下げてお詫び申すお詫び申すお詫び申す。

八　なんぢや、武士ぢや。松魚節の削り屑でもあらうかい。

權　イヤ、どうで碌な奴ぢやあるまい。

八　とてもの事に、土べへ額を付けて、おいらの脛を頂きさらせ。

ト蹴飛ばす。與茂七、ムツとするを

權　なんぢやい〳〵、睨みさらすのは、相手になりさらすのか。

八　オヽ、面白い。サア、どうなとさらせ〳〵。

與茂　これはしたり、敵對なぞとは存じも寄らず、殊に各
各方ゝ相手に取つては
權　かつたいに棒打ちと吐かすのか。
與茂　イヤ、全く以て。
八　馬士は相手にならんか。イヤサ、醉ひどれが恐ろし
いか。
權　わりや此やうに云うても、口惜しうないか。
八　こんな奴は性根の付くやう、どづきのめしてやるが
よい。
權　オヽ、斯うしてやるのぢや。
ト兩人してくらはす。與茂七、無念を堪えながら
與茂　其元達に行き當り、お足を踏んだは、此方の不調法
それゆゑ、この通り打ち打擲に會ひましたれば、これで
五分々々と思し召して、只幾重にも、御料簡をお頼み申
す／＼。
八　イヤ、まだ料簡はならん。いつその事、どづき殺し
てやらう。
トまた行かうとするを
權　待て／＼、殺し甲斐のない田樂めぢや。
八　イカサマ、われが云ふ通り、よう拔き居らぬは、大
方、中は竹光の銘作であらうかい。
權　今日はおれが挨拶で、料簡してやらう。エヽ、張合
ひのない大腰拔けめが。
八　この極道にかゝつて、醉ひを覺ましてのけた。
まん直しに、奴茶屋で飲み直さうぢやないか。
權　よう飲みたがる奴ぢや。
八　さう云ふ貴樣も
權　矢ツ張り飲みたいわい。
八　それ見されゝハヽヽヽ。
權　サア來い。
ト橋がゝりへ入る。與茂七、塵を拂ひ
與茂　夏は日南に、冬は日蔭、除けて通せば付け上がりの
したあぶれ者、打ち殺さんは易けれども……望みある身
は何事も、無事に濟ますが互ひの仕合せ。とは云ふもの
の。
トちよつと心意氣。本釣り鐘。
オヽ、まだ七つか。ハテ、春の日ゝ、永いものぢやな
ア。
トこなし、向うへ入る。忠太兵衛、おくめは與茂七を
見てゐて、感心のこなしにて、與茂七の跡を見送る。

忠太　おくめも、向うを見惚れ居る、
くめ　若いに似合はぬ神妙な心掛け。
忠太　最前からの立振舞ひ
くめ　仁あり、義あり
忠太　可愛らしうて、キツとして
くめ　しかも勇ある今の一言
忠太　とても女子に生れたからは
くめ　どうぞ娘が。
ト　おくめの方を見る。おくめは矢張り向うを見惚れ居るゆゑ
忠太　娘……ヤイ娘
ト　おくめ、恟りして
くめ　ハアイ。
ト大きな聲で、返事しながら、矢張り向うへ氣を取られ居る。
忠太　エヽ、恟りするわい。さうしてわりや、何を其やうに。
ト　おくめの身振りして
ムウ、そんなら今の……娘、わりや今の侍ひに。
くめ　エヽ。

ト恥かしいこなし。
忠太　惚れたか。
くめ　アイ。
ト顔を背け、思ひ入れ。
忠太　オヽ。
ト心意氣よろしく、木の頭
おれも惚れた。
ト双方心意氣よろしく、神樂にて　ひやうし幕

福島加藤住居の場

役名　加藤與茂七。娘、おくめ。鐵火の江戸市。鵜の目早九郎。鷹田早藏。久留卷鶴平。鬼殺し土武六。釜戸九度平。燒繼ぎの皿八。ふら切り出刃七。破れ傘下駄市。家主、苫屋久兵衛。小山田太平次。加藤鄕助。岩城忠太兵衛。

造り物。平舞臺、見付け赤壁、納戸口、その續き居間、紙を嵌めたる押入れ。上の方、折り廻り障子屋體、橋

がゝりの方塗垂れ塀、見越しの松、後の方隣の二階を見せ、いつもの所、門口、よき所に三ッ竈、すべて、福島邊、貸座敷の體。與茂七、清流しにて箒を持ち、掃いてゐる、春日龍神の太皷、謠にて幕明く。

トよろしく、掃きしまひ

與茂　隣は金持ちどもが寄り合うて、伊勢講の日待とやらで、今朝から打つたり舞うたり、親人の御病床へ筒抜け。どうぞお目が覺めねばよいが。ドレ、この間にお藥を仕掛けねばなるまい。

トかんてきを取つて來て、藥土瓶を掛ける。橋がゝりより小者一人、肴籠を持ち出て來り

小者　物もう、お頼み申しまする。

與茂　どなた樣か、お通りなされ。

小者　御免下され。

ト内へ入り

私しは田邊兵太夫から參りました。主人申しまするには、鄕助さま、御病氣は、ちとよろしうござりまするか。お尋ね申せとの儀でござりまする。

與茂　それは御深切のお使ひ、親どもへ傳へるでござる。

小者　さて承れば、今日御婚禮との儀、お喜びの爲、些少ながらこの品、進上仕るとの儀でござりまする。

ト肴籠を出す。

與茂　これは／＼、未だ定まつたと申す儀でもござらねども、親どもの病氣介抱人がてらでござる。併しながら、御心配の段、有り難う申し受けるでござる。

ト入れ物に困るこなし。

小者　イヤ、器は明日借りに參りませう。

與茂　然らば此まゝお預かり申さうが、よろしく仰せられて下され。

小者　左やうならば、お暇申しませう。

與茂　ようござりました。

ト小者引返し入る。屋體の内にて、咳の聲する。

こりや、親人にはお目が覺めたさうな。

ト藥を茶碗へ明ける。奥より鄕助、着付け、切繼ぎ、病人の形にて、刀を提げ、出て來る。

これは親人、お危なうござりまする。

鄕助　今日は餘程氣分がよいから、ちと世間を見晴らさうと存じて。

與茂　それはようござりまする。イヤ、お藥が煎じ上がりました。

郷助　オ、〳〵。

ト茶碗を取つて

寐入らうとすれば、隣り座敷の打ち囃子、耳に付いて寐させぬゆゑ、これへ參つたが、只今承れば、何か祝ひが參つたやうす。誰れが祝ひぢや。

與茂　イヤ、この儀は折入つて申し上げやうと存じて居りましたが、昨日、家主苫屋久兵衞どのが仰せられますには、親仁どのゝ御病氣、獨身で介抱は苦勞にもあらう、幸ひ百五十石取りの侍ひが、こなたに娘がやりたい、世話してくれいと據ない賴み。いつそ嫁に貰うて、親御の介抱人にしたがよいと、達て進められ、手前方は五十石、先方は百五十石、この緣談は釣り合ぬと辭退申したれば、イヤ、それは合點の上の娘の戀聟、祿の高下には係はらぬ、是非ともと賴まれたと、段々とのお進め。これまでお世話にあづかつた久兵衞どのゝお詞と云ひ、第一に親仁樣の御看病、何かの手助にもならうかと存じ、先づ親人に尋ねました上で、御返事仕らうと別れた儘でござりまする。

郷助　フム、それは久兵衞どのがいかい心配。さほど先の人が其方を懇望の上は、丁度幸ひ、兎も角も致したがよい。それは格別、其方に尋ね度い儀がある。この加藤郷助は、親代々明石の家來、其方幼少の砌り、家を立出でその後伯州の鹽冶家にあり付き、百石餘の御知行頂戴。天晴れ器量者、出かし居つたと、心で譽めてゐたが、いつぞや御用に付き、大坂へ立越えたこの郷助、逗留のうち病氣に取り付き合はし、役人中へ斷わつて、この福島に出養生、所へ計らず其方が、浪人となつて立歸つたが、その節は病も重く、其まゝに打捨て置いたが、何か鹽冶家に凶事でもあつて。

與茂　イヤ、主人のお家は、矢張り其まゝ。

郷助　フム、それに又、其方は、なぜ浪人いたした。

與茂　イヤその儀は……朋友どもの讒言によりまして。

郷助　すりや、讒言によりて

與茂　既に討ち果さうと存じましたれども、親人の事を思ひ出し、お暇を願ひ、立歸りました。イヤモウ、武家奉公は飽き果てました。親人にも、御病氣を幸ひに、仕官をお斷わりなされ、親子諸とも、町人百姓とも相成つて金銀を貯へ、氣樂に御孝行盡さんと拙者が思案。なんとよい分別でござりませうがや。

郷助　イヤ〳〵、その思案惡からう。二君に仕ゆるは武士

たる者、意にあらねども、これは又格別の沙汰。父の名跡を相續いたすに、誰が何と批判打たうぞ。小身の跡目、不足にも思はうが、さうでない、近々のうち御主人へお願ひ申し、お目見得を致さゝうから、左やう心得たがよいぞ。

與茂　何事も親人の仰せとあれば、兎も角も仕らん。嫁の儀とてもお指圖次第。今度の所は變替へ仕りませうかな。

鄕助　イヤ、これまでお世話になつたる家主のお賴み、變替へ致すも如何。併しながらこの住居、嫁の手前も氣の毒千萬。

與茂　拙者もその儀は、只管申してはござれども

鄕助　得心の儀なれば、呼び入れたがよい。シタガ、身共が相果てた跡へ參らば、舅の氣兼ねも入らず、差向ひでよいに……この老病も、早く勝負が付いてしまへばよい事を。儘ならぬものではあるわい。

ト咳き入る。與茂七、脊中を撫り、介抱して

與茂　これはしたり、左やうな事は思し召さずと、一日も早く御本腹なされて下さりませ。時も時とて半助めは痲疹で、親元へ養生に歸つて居りますゆゑ、何かに付けて御不自由がち。

ト云ひながら、藥を酌んで持ち行く。下手より仲仕三人、車に菰樽三挺載せ、引き出て

仲一　加藤鄕助さまと云ふは爰かな。

仲二　酒樽が三挺、來ました。

與茂　成る程、鄕助はこれぢやが、見れば仰山な菰樽。こりや大方門違ひであらう。

仲三　イヤ、門違ひぢやない、今宵爰の内に嫁入りがあつて、その祝儀に持つて來たのぢや。この送り狀が付けてあるわいの。

ト目錄を渡す。

與茂　御祝儀白梅三挺、加藤鄕助どのへ、若者中より……成る程、これでは、手前方へ參つたやうなれど、斯樣な品、申し請ける覺えは

仲一　あるか無いの知らんが、送り狀が慥かな證據、早う持ち込め〳〵。

皆々　合點ぢや〳〵。

ト菰樽を內へ入れる。

三人　慥かに渡しましたぞや。

與茂　これはしたり、その參つた先を。

仲一　ハテ、どうであらうと儘ぢや。皆來い〳〵。

ト橋がゝりへ走り入る。

與茂　ア、、これマア待つた。此方に覺えはない。門違ひに相違ない……雲を霞と歸り居つた。ハテ、麁相な奴もある者。併し、こりや如何いたしたものでござりませう

鄕助　ハテ、門違ひであらうから、片脇へ寄せて置くがよいて。

與茂　さて〳〵、面倒な事をさせ居るて。

ト樽を片脇へ片付ける。向うより苫屋久兵衞、肩付け羽織、家主の形にて出て來り

久兵　イヤ、與茂七どのはお宿かな。

與茂　これは久兵衞どの、ようお出でなされました。マアマアこれへ。

久兵　許さつしやれ……オヽ、これは鄕助どの、大分よいかして、端近う出さつしやつたの。マア〳〵、めでたいめでたい。

鄕助　これはお家主樣、毎々お世話になりまする。さて　承れば、忰めに嫁をお世話下さりますさうなが、旅がけの辻養生と云ひ、何かと不都合な暮らし方、所へ先方はお歷々との事。この緣談は調ひさうな儀でござるかな。

久兵　サア、あら方、與茂七どのへ、昨日話しをして置きましたが、今日改めて來ましたは、なんでも得心してもらはにやならん、先の仁と云ふは、岩城忠太兵衞と云うて、それは〳〵偏屈者、その又娘のおくめ女郎と云ふは、親に似合はぬ可愛らしい、一目見るから惚れ〳〵とした娘、その上、百五十石持ちの鄕士で、諸家中から娘をいろいろ懇望しても、七里けつぱい。所がこの中、鹿島の明神樣で、爰の與茂七どのが神妙な所作がらを見、親の心と娘の心が、調度合うたり叶うたりで、親子ともに御子息どのにほの字ぢや。その忠太兵衞と云ふ和郎は門徒宗、この久兵衞も同じ門徒宗ゆゑ、常住御堂さまへ參るぢや昨日フト御坊で、息子どのゝ話しから、それなら我れらが借家で、斯うしたお人の息子どのぢやと云うたら、それこそ幸ひの事。どうぞ世話してくれとの頼み。オット承知と請合うたも、こなさまは病氣なり、息子どのゝ手助けにもなりさうな事、仲人口を見知らすも、御開山の引合せと思うて、鄕助どの、どうぞ得心して下さるまいかの。

鄕助　成る程、貴公樣のお世話と申し、忰も承知の上は、そこをよいやうお賴み申す。

久兵　サア、與茂七どのゝ親御も得心の上は、善は急げ、直ぐに今宵祝言をやらかさうぢやないか。

與茂　そりや餘り早急と申すもの、マア、日柄を見ました上で。

久兵　これはしたり、さう悠々緩々とした事でない。先の娘は、早う行きたいとはずみ切つてゐる上、親仁とても至つて性急な人ゆゑ、いつそ押しかけて連れて行てくれいと云うたを、マアおれが先へ行て、あらまし話しを仕掛けるに依つて、跡からござれと云うて置いたゆゑ、追ッ付け娘を連れて、親仁がわせらるゝであらうぞや。

與茂　これは又怪しからぬ事ぢや。それでは何か心用意でも致さねばなりますまい。

鄕助　それ〳〵、婚禮は一生の曠れ業、身を納める元。アヽ、これが國元ならば、また致し方もあるべきが、何を申すも旅がけとは云ひ、病中にて心に任せぬ事ばかり。

　ト また咳き入る。與茂七、介抱する。

久兵　ハテサテ、何も心配さつしやる事はない。それでは却つて與茂七どのも迷惑、また病の障りになつては悪い程に、爰はわしらに任して、奥へ行かつしやつたがよいわい。

鄕助　何分よろしうお賴み申す。

　ト また咳き入る。與茂七、介抱して

與茂　マア〳〵、あれへござつて、暫らくお休みなされませ。

　ト いたはり、上手屋體へ連れて行き、障子をさして

御用がござりましたら、お呼びなされて下さりませ。

　ト 此うち久兵衞、門口の方を見て

久兵　もう見えさうなものぢやが。

與茂　久兵衞どの、如何やうに致したらようござりまする

久兵　心配さつしやるな。その心配さすまい爲、コレ、この通りぢや。

　ト 懐よりすつぽんに、酒を入れたるを出して、手を當て見て

丁度懐で燗が出來た。ハヽヽヽ。まだ鰹節も、味噌も調へて來た。待つたり〳〵。

　ト 袂、又は脊中より、竹の皮包み、鰹節を出して舞臺へ並べ

鰹も肴を荷ひにして、侍ひの祝言なれば、弓矢八幡と云ふ心で、燒立ての八幡蒲燒。その跡が、ソレ、座禪豆。

　ト 袂より蓋茶碗を出して、こなしあつて

南無三、汁の身にする物を、買ひ落して來た。一走り買うて來うか。

ト行かうとするを

與茂　イヤ、お待ち下され。先刻見舞ひに貰ひました肴がございます、これではどうでございまする。

ト肴籠を持つて來る。

久兵　ドレ／＼。

ト見て

えらいワ。なんぢや、赤貝に鯛がある。鯛は片身作つて跡身は濱燒、汁は味噌にして、赤貝とは古今の吸ひ物。マア、これで料理の手積りも出來たと云ふもの……時にもう見えさうなものぢやが。

ト向うを見てゐる。

與茂　左やうなら料理にかゝりませうか。

久兵　オヽ、かゝらにやならぬ。所が今に練りかけて來る、人手はなし……おれは味噌を擂るから、こなさまは肴の料理を頼みます。

與茂　心得ました。併しながら、あなたには、段々宿賃も滞つてございますれば。

久兵　エヽ、そんな事は打ッちやつて、マア、目先が肝心ドレ、おりや味噌擂りと出かけうわい。

ト久兵衛、擂り鉢を取つて來て、味噌を擂りかける。與茂七は俎板と出刃庖丁を取つて來て、鯛の水洗ひにかゝる。向うより忠太兵衛、着付け、羽織袴、大小、駕籠を吊らせ出て來り

忠太　久兵衛に承つたが、郷助どのゝ宅は、この邊であらう。

駕舁　ハイ、あの松の木の見える隣でございまする。

忠太　オヽ、よし／＼。

ト本舞臺へ來て

イヤ、郷助どのゝお宅はこれかな。苫屋久兵衛が參つてゐる筈、岩城忠太兵衛、娘を連れて參つたと、お取次ぎを頼み申す。

ト久兵衛うろたへながら

久兵　そりやこそ、嫁御のお入りぢや。サア／＼、爰らを片付けたり／＼。

トあわてながら、擂り鉢を持つて與茂七を追ひ立てる與茂七も、ウロ／＼してゐる。久兵衛、門口の側へ行き、忠太兵衛を見て

久兵　ハヽヽ、これはお早うございました。

忠太　久兵衞どの、禮はゆる〳〵申さうが、して、親御にも得心でござるかな。
久兵　イヤモウ、得心の段か、あなたのお出でを長う、短から待ち兼ねて居りました。マア〳〵、お入りなされませ。
忠太　然らば許し召され。
　ト內へ入る。
久兵　ソレ、與茂七さま、御挨拶ぢや〳〵。
　ト無理に前へ突き出す。
與茂　これは見苦しい宅へ、ようこそお越し下さりました
忠太　與茂七どの、不思議の緣で、この度は久兵衞どのゝ世話になり、何分娘が戀聟、如何と存じの外、早速の御承知、過分に存ずる。就いては、御知行が釣合ぬなぞと卑下を召さるゝよし承つたゆゑ、わざと婚禮の儀式は仕らず、略儀ながら直々に連れて參つた。お受取り下され、聟どの御免下され。
　ト門口へ行き
　サア娘、出やれ〳〵。
　ト駕籠の內にて
くめ　アイ〳〵。

　ト內より、お粂、振り袖、白無垢、綿帽子にて出て
申し、父樣、與茂七さまのお屋敷は、爰でござりますかえ。
　ト久兵衞見て
久兵　わしや恥かしい……と云ふやうな顏付きぢやて。ハヽヽヽ。
忠太　時に駕籠の衆、大儀であつた。歸つて休んでくりやれ。
駕舁　ハイ〳〵、左やうならお暇申しまする。
　ト駕籠を舁き、橋がゝりへ入る。
久兵　サア嫁御、これから御祝言の杯。何はなくとも、マア、座敷へお通り下さりませう。
忠太　イヤ〳〵、通りますまい。
久兵　そりや又なぜでござりますな。
忠太　さればサ、承れば御親父郷助どのには、御病中との事、御心配にあづかるも氣の毒と存じ、萬事其許へ相任せ置きたれば、此方にも安心。御挨拶は追つてゆるゆる申さう。イヤナニ與茂七どの、親が直々送つて參つた娘、慥かにお受取り下され。
　トおくめを內へ突きやる。久兵衞、よき所へ坐らす。

おくめ恥かしいこなし。
與茂　何かは久兵衛どのまで申す通り、身不肖の拙者、御大家の息女を申し受けまするは
忠太　ハテサテ、女は三界に家なし、一旦屋敷を連れて出たからは、最早手前の娘でござらぬ。こなたの氣に入つたやう、ぼひ使うて、末長う面倒をお頼み申す……イヤ娘、われが望みの通り、緣組みをさしたからは、聟どのは元より、舅を大切に……とサア、これは云はいでも知れた事。イヤ、拙者はお暇申さう。
久兵　オヽ、それ〳〵、何も祝儀ぢや。
三人　よい〳〵。
　ト手を打つて
久兵　おめでたうござりまする。
忠太　オヽ、めでたい〳〵。これで身共も心が濟んだと申すもの。見りや人手のない内。三日歸りと云ふ事もすな一生戻らいでも苦しうないから、隨分ともに氣を附けてよいか。
　ト心意氣ありて
久兵衛どの、跡を頼む……與茂七どの、さらば。
　トこなしあつて、ツイと、向うへ入る。

久兵　さて〳〵偏屈な和郎ぢや。石部金兵衛金頭とは、この事であらう。ハヽヽヽ。
與茂　イヤ〳〵、あの堅くろしい所が、侍ひの賞美する所でござる。
　トおくめ、モヂ〳〵してゐる。
久兵　なんでも、今時の人間ぢやない。
　トおくめを見て
これはしたり、大事の花嫁御。そこは端近。マア〳〵此方へ。
くめ　ハイ、これが勝手でござりまする。
久兵　偏屈の娘程あつて、ちよつぼりと小偏屈ぢや。ハヽハ。時に、祝言と云ふ所ぢやが、まだ料理拵らへも出來ず、第一、酒の燗と云うたら湯があるまい。こりや忙がしうなつて來たわえ。
　トうろ〳〵する。
くめ　私しも、なんぞ致しませうかえ。
久兵　イヤ〳〵、杯の濟まぬうちは、花嫁御を使はれまい。さて料理と云うてこれもよし、あれもよいと。所で跡がオヽ、さうぢや、肝心の吸ひ物椀を忘れて來た。ちよこちよこと取つて來る程に、與茂七どの、釜の下を焚きつけ

て置かつしやれ。
與茂　心得ました。
久兵　次手に鰹もかゝうぞや。
與茂　ハイ〳〵。
久兵　まだおや……れきはあるまいの。
　ト蒲團と枕の仕形する。與茂七、ないと云ふこなし。
オヽ、それも一緒に持つて來るぞや。
　ト表へ出かける。與茂七は、上手屋體を窺ひに行く。
　向うより下役走り出て來り
下役　オヽ、苫屋の旦那、これにござりましたか。町內から、急に寄合ひを云うて參りました。
久兵　エヽ、面倒な。不參は出來まいかの。
下役　滅相な。お年寄りが、やかましう云うて居られます。
久兵　そんなら、おりや直ぐに行くから、貴樣大儀ながらおらの內へ寄つて、吸ひ物椀の箱と、夜具蒲團二三組に枕二つ付けて、爰の內へ持つて來て下され。
下役　ハイ〳〵。
　ト引返して入る。
久兵　これもよし。さて跡が
　ト內へ入り
時に二人の衆、おりや、ちよつと會所へ寄合ひに行かにやならぬ程に、跡は二人が差向ひ。ソレ、嫁御、そこへボツ〳〵話しでも仕掛けたがよい〳〵。
くめ　アノ、たつた二人で。
　ト恥かしきこなし。
久兵　ハテ、たつた二人がお嫁入りの性根場ぢやわいの。
　ト表へ出て
跡でゆつくり、めでたう酒を過さぬやう、よい時分に表も締めて……ドリヤ、行て來うか。
　ト向うへ入る。
與茂　御苦勞さまでござります。ても氣の輕いお人ではあるわい。
　ト思はず、おくめと顏見合し、おくめ、恥かしさうに俯向く。與茂七もこなし。與茂七、煙草盆を取つて來て
マア、お煙草なりと參りませ。
　ト差出す。
くめ　ハイ、私しは不調法でござりまする。
與茂　上がりませぬか。
くめ　ハイ。

ト與茂七も繼ぎ穗のないこなしにて、此方へ來る。おくめ、煙草盆を與茂七の前へ突き出し

くめ　お煙草、參りませ。

與茂　不調法でござりまする。

くめ　上がりませぬかえ。

與茂　ヘイ。

トこなしありて、フト心付いて茶を酌んで來て

お茶進ぜませう。

トおくめ、恥かしさうに顏を背け

くめ　これはお慮外さまでござりまする。

ト茶碗を取つて、ヂツと俯向く。

與茂　ドレ、鰹でもかゝうか。

ト鰹をかきかける。

くめ　ア、申し、私しが。

ト側へ來るを

與茂　滅相な。お客がそんな事してよいものでござりますか。

くめ　イエ／＼、今日からあなたのお内へ參りましたからは、何なりと御用云ひつけて下さりませ。

與茂　イヤ／＼、先づ親仁樣にも引合し、また祝言もすんだ上では、何やかや、手傳うてもらはにやなりませぬが、マアそれまでは。

くめ　わたしや早う親御さまへお目見得し、お杯も濟んだ上、世帶とやらがして見たうござりまするわいなア。

與茂　イヤ、聞けば親御が寵愛あつて、荒い風にも當てず、大切に育てさつしやれたとやら。それに貧しい暮らしの此方へ、好んで嫁入りとは、變つた望みでござるの。

くめ　それと云ふも、この中あなたが、鹿島のお宮へ御參詣の時、フツと見初めて父樣へお願ひ申し、久兵衞どのにお世話になり、嬉しい嫁入り。この上ともに必らず見捨てゝ下さりますなえ。

與茂　それは互ひでござる。萬事不自由勝ちにもござらうが、そこは辛抱して、親人へ給仕の儀を、偏へに頼み申す。

くめ　アノ、仰しやる事わいなう。大事の／＼舅御樣、孝行に致しませいでなりませうか。斯う云ふうちも、早うお目見得がいたしたうござりまする。

與茂　イヤ、只今は御寐なつてござれば。

ト障子屋體より

郷助　イヤ悴、嫁女に對面いたさうわい。

　ト上手障子明ける。
與茂　オヽ、お目が覺めましたか。
　ト云ふうち、出て來り
郷助　委細はあれから承つた。さてはこなたが嫁女とな。未熟な悴を、よくも戀ひ慕うて下された。ドレ／＼、顏見せて下され。
　トおくめ、モヂ／＼してゐる。
郷助　オヽ、よい器量、褄はづれの尋常さ。育て柄もさこそあらん。して、母御はありますか。
くめ　イヽエ、母樣は、小さい時にお果てなされ、父樣の御養育、今から本の娘と思うて、お氣に叶はぬ事あらば、お叱りなされて、いつまでも可愛がつて下さりませ。
郷助　フム、父親育ちに似合はぬ、風俗と云ひ挨拶振り、なか／＼氣に入り申した……ナニ悴、早う祝言の致してくりやれ……ソレ、銚子杯をこれ／＼。
與茂　ハツ。
　ト杯と、すつぽんの酒を持つて來て
餘り火急の儀でござりましたゆゑ、熨斗島臺もござりませぬ。
郷助　イヤ、その島臺はこれにある。
　ト懷中より位牌を出し
ナニ嫁女、これは身が女房、與茂七が母の位牌。斯樣な祝言いたす事、母が見れば、如何ばかりの喜ばん。かゝる祝言の席にて、位牌を取出すは異なものなれど、却つてはかゆきがすると云ふ儀を取つて、取りも直さず尉と姥。この古葛籠の大島臺。サア／＼、飲んで悴へさゝつしやれ。
くめ　有り難う存じまする。
　ト葛籠の上へ、位牌を載せる。
郷助　ドレ、身共お酌を致さう。
　トおくめ、杯を取上げ、郷助、酒をつぐ。これを謡になり
〽四海波靜かにて、國も治まる時津風。
郷助　オヽ、幸ひ、隣には高砂の謡。これで祝儀も納まると云ふもの。
　トおくめ、酒を飲んで、この杯はと云ふこなし。
郷助　ソレ悴。
くめ　左やうなれば。
　ト差出す。與茂七、杯を取り、郷助、酒をつがうとするを

與茂　イヤ、お酌は憚り。

鄕助　ハテ、遠慮は無用。

與茂　左やうなれば。

ト杯を差出す。鄕助、酒をつぐ。

〽枝も鳴らさぬ御代なれや。

ト與茂七、酒を飲む。鄕助、顏におくめへと云ふこなし。與茂七、おくめへ杯をさす。

鄕助　三々九度も、爰らでめでたう納めて置きやれ。

〽相に相生の松こそ、めでたかりける。

ト鄕助、酌する。おくめ、酒を飲んで、杯を下に置く

鄕助　オヽ、めでたい／＼。

ト杯事納まる。向うより小山田太平次、着付け羽織次に鐵火の江戸市、海鼠衿、若黨の形、その外、鵜の目鮎九郎、鷹田早藏、久留卷鶴平、鬼殺し土武六、釜戸九度平、燒繼の皿八、ゐら切り出刃七、破れ傘下駄市、中間、足輕、或ひは惡者の形にて、ゆで蛸、又は鮨桶などかたげ、出て來り、本舞臺へ來て

太平　爰だ／＼。皆入れ／＼。

ト門口を引明けて

鄕助どの、今日はめでたうごんすの。

江戸　打揃うて喜びに來やした。

皆々　どうだ。拵らへはよいかな。

ト内へ入る。

與茂　見れば、近付きでもない衆達。何か御用でござつてお越しなされたか。

太平　こな若者、餘所々々しうお云やるな。オヽ、さてはてまへが鄕助の忰、おくめの聟の與茂七だな。オヽ、いい男だ。皆見ろ。

江戸　おくめが惚れたも尤もだ。なま白けたしやッ面だ、

皆々　祝うてやれ／＼。

與茂　理不盡とや云はん、法外千萬。狼藉いたすと、此ままには差置かぬぞ。

鄕助　ア、コリヤ、忰待て／＼。扣へて居やうぞ……これはいづれも、鄕助と云ふは身共でござるが、忰を祝ふとは、何を祝はつしやるのぢや。

太平　アヽ、コレ、親仁、恍ける事はない。そこにゐるおくめが嫁入りして來たを、若い手合ひが祝ひに來たのぢや。最前祝儀の樽入れさしたが、貴樣、受取つたぢやないか。

ト鄕助、與茂七顏見合せ、さてはと云ふこなし。

鶴平　白梅三挺、それ〳〵、爰にあるわい。
太平　樽を入れて祝儀に來たのぢや。
鮎九　どうで肴も喰はれまいと思うて、持つて來た茹で蛸五杯。
早藏　こけら鮨が二桶、マア、これで肴はあるわい。
太平　おらは今度鎌倉から、この大坂へ在番に付いて來た小山田太平次と云ふ者サ。後の奴等は子分子方、中にも頭分はこの男。
ト江戸市へ、こなし。
江戸　親仁どん、おりや鐵火の江戸市と云ふものぢや。よう面を見知つてもらひやせう。
鮎九　おいらは子分の鵜の目鮎九郎。
早藏　鷹の目早藏。
鶴平　久留巻鶴平。
士武　鬼殺しの士武六。
九度　釜戸の九度平。
皿八　燒繼ぎの皿八。
出刃　ゐら切の出刃七。
下駄　破れ傘の下駄市。
太平　祝うて皆、喰ひしめに來たのだ。

皆々　めでたうごんすの。
郷助　これは〳〵、いづれもお祝ひにお出で下されし段、大慶至極。併しながら、御覽の通り拙者は病中、家内は忰と嫁と只二人、なんの用意も
太平　何も云ふ事はない。さう思うて、持たしておこした白梅三挺。ヤイ市よ、その樽を奥へ持つて行け。
江戸　オヽ、皆の奴等も手傳うてくれ。
皆々　オヽ、合點ぢや。
太平　イヤ、客あしらひの給仕を頼むまでの事、酒も肴も世話にやならぬのぢや。
郷助　それはお心安い事。お心置きなら、いつまでなりと
太平　その代り、ぬく〳〵嫁御を給仕に頼むが此方の肴
コレ、おくめぼう、頼むぞよ。
ト おくめは氣味惡さうに與茂七の跡へ寄り
くめ　畏まりました。
太平　御亭主、石五器なりと貸してもらはう。
與茂　イヤ、酒器は跡より持たせて遣はしませう。
太平　エヽ、見りや見る程、ムカ〳〵するわい。
與茂　何がな。
太平　イヤ、貴樣はよい聟なり、嫁は充分。めでたいと云

ふ事だ。

皆々　オヽ、めでたい〳〵、やけめでたぢや。

江戸　こんなめでたい時、喰ひしめにや喰ひしめる折がないて。

太平　座敷が極まつたら、樽を入れんかい。

出刃　此まゝ奥へお神輿臺越し。

皆々　てうさや、ようさや〳〵〳〵。

ト皆々、菰樽を手舁きにして、舞臺中を持ち歩き行く

皆々　一足戻りや〳〵。

トあたりにある莨盆、葛籠などを蹴散らし、奥へ入る
郷助は、位牌を納め、呆れる。

與茂　親仁様、あの者共は、お近附きでござりまするか。

郷助　イヤ、此方は存ぜぬが、名を存じて居るからは、おくめの親御の近付きでがなあらう。

くめ　イエ、父様は至つて堅くろしいお人ゆゑ、あんな暴れ者に近附きはござりませぬ。

與茂　馴染みよしみもない大勢が、樽を入れたは、ハテ、呑み込めぬ……イヤ、何にもせよ、兎角相手にならぬがよい。存分惡あがきを致したら歸るであらう。

郷助　それ〳〵、めでたき日なれば、斯様なあぶれ者は、取上げぬがよいて。

ト江戸市、出て

江戸　茶を持つて來ないか。客が氣に食はぬか。早く持つて來い〳〵。

ト奥へ引返し、入る。

郷助　嫁女、大儀ながら、茶を持つて行てやりやれ。

くめ　アイ〳〵。

與茂　この土瓶と、茶碗を持つて行て下され。

ト丸盆に、茶碗澤山載せ、土瓶を渡す。

くめ　アイ〳〵、もう祝言も濟んだ上は、これからは女房のくめ、綿帽子も襠も取つて。

ト綿帽子・襠を取つて、振り袖の端を帯に挟んで
丸盆、茶碗、土瓶を持つて。

くめ　こちの人、似合うたかえ。

ト嬉しさうにこなし。與茂七は、郷助を教へ、差合ひがあると云ふこなし。おくめ、恥かしさうに俯向く

郷助　伜、女房どもと云うてやれ。

ト與茂七、云ひ憎さうに

與茂　女房ども、よく似合うた。

ト不器用に云ふ。

くめ　オヽ嬉し。
　トいそ〳〵して納戸へ入る。
與茂　なんぼう構はぬと申して、まんざら捨てゝも置かれぬ。幸ひのこの赤貝、吸ひ物にでも致しませうか。
鄕助　さうなと致したがよいわい。
　トまた江戸市、出て來り
江戸　どうだい。捨て育ちにするも加減がある。せめて吸ひ物位は出さないか。なんなりと工面しろ。
　ト惡口云ひながら、また引返し、入る。
鄕助　味噌があらば擂つてやらう。其方は鍋の下を焚き付けい。
與茂　畏まりました。
　ト擂り鉢を鄕助の側へ持ち行く。鄕助、連木を持ちながら思案のこなし。與茂七、ちやつと思案しながら、フト顏見合し、ちやつと氣を替へ、鄕助、味噌を擂り與茂七、鍋の下を焚き附ける。この見得よろしく、大小入りの誂らへの合ひ方にて返し。
　造り物、平舞臺、見附け唐紙、東西植込み、すべて奧座敷の模樣、爰に太平次、少し酒に醉ひたる體にて、おくめを無理に引き附け、しなだれかゝり居る。この側に、以前の惡者、狼藉の體にて、酒盛りしてゐる。この見得、よろしく、矢張り、大小入りの鳴り物にて、道具納まる。
くめ　アヽ申し、惡い事せずと、爰放して下さりませ。
太平　イヤ、何も惡い事はせぬ。おらは客人だから、嫁御に酌を賴むのだ。
くめ　銚子がござりませぬ。取つて參じませう。
　ト逃げようとするを
太平　と云うて逃げうでな。
くめ　それでもお銚子が
太平　オツト、あるぞ〳〵。
　ト土瓶の茶を打ち明けて、酒樽の酒をすくうて
ソレ、お銚子だ。
　ト土瓶をおくめに持たせ、茶碗を取上げて
サア、爰へおつぎなされい〳〵。
　ト突き出す。おくめ、慄へながら酒をつぐ。
江戸　ヨウ〳〵鳴神さま、酌さして、旨い事〳〵。
皆々　そりや親分、喜びぢやな〳〵。
太平　エヽ、おだてゝくれな。時におくめぼう、ちよつと



明治元年十月中村座所演番附

口添へてもらはうか。

ト茶碗を突き出す。

くめ　イエ、わたしや不調法にござります。

太平　否かな。どうで聟のやうにはあるまいが、おらが心底は……オヽ、江戸市、われ云うてくれんかい。

江戸　オヽ、合點ぢや。おくめぼう、親分が今夜渡られたは疾から貴樣にえら惚れで、これまでいろ〳〵手を入れ、足を入れて、貰ひかけたが、何分堅藏の岩城忠太兵衞、どうしても受け附けず、爰へ嫁入りぢやと聞き、そこで若い者が晝間のうちに、樽を入れて喜び旁々、祝儀に來たのぢや。

くめ　それは御深切に、お嬉しう存じまする。

江戸　ところで、皆が打揃うて來て見りや、素寒貧の鐘馗さん、こんな貧乏人の内へ嫁入りせうより、親分の所へ來りや、榮耀榮華はこの上もなしだ。どうだ、今から親分に乘り替へて見る氣はないか。

くめ　何を仰しやるやら。例へどのやうな事があらうとも親が得心で嫁入り致しました事ゆゑ、どうも今さら。

太平　イヤ、貴樣さへ得心なりや、引ッ擔げて爰をぼいとこな。跡腹病めずに、ツイ埒の明く事。なんと相談してくれる氣はないか。

くめ　エヽ、滅相な。そんな事したら、どんな難儀にならうも知れぬ。わたしや怖いわいなア。

太平　なんの怖い事がある。滅多に難儀をさゝぬ譯、云うて聞かさう。おらが兄貴は、小山田庄左衞門と云ふ鹽冶判官の家來であつたが、國家老の大星由良之助と云ふ奴が徒黨して、師直を敵ぢやと附け覘ひ、連判を拵らへた仲間内だが、よう考へて見りや、敵を討つた所が跡が詰らんから、由良之助めが寄合ひの廻文を廻す道から、おれが部屋に來た所が、因果と死病に取りつかれ、熱に浮されて、この廻文を師直公へ持つて行て注進すりや、御褒美の上に知行にありつくものを、搗てゝ加へてこの病エ、死にともない、死にともないと狂ひ死。おらも永々喰ひ潰された入れ合せに、これを見な。

ト廻文を懷より出し

この廻文を鎌倉へ持て行て、師直公へ斯やう〳〵と注進すりや、おらも立身。そこで貴樣を引ッ擔げて、注進と駈落ちと二膳込みにやらかしや、勿怪の幸ひ、なんとよい思案であらうがな。

くめ　何を嘘ばつかり。わたしやそんな事、知りませんわ

いなア。

トまた逃げようとするを

太平　なんの嘘を云ふものか。ほんまだと云ふ證據は、この廻文を貴樣に渡すが正銘。大事に掛けて預かつて置け置け。

トおくめの懷へ廻文を、無理に捻ぢ込み

ソレ、しつかりと持つて行け〱。

トおくめに寄り添ふを突き退け

くめ　エ、穢らはしい。最前から座興と思ひ、相手になればよい事と、武士の女房に不作法千萬。岩城忠太兵衞が娘、加藤與茂七と云ふ夫のある身。この後慮外さしやんしたら許しませぬぞ。

太平　すりや、此やうに云うても聞入れぬ

くめ　聞くも中々穢らはしい。夫の耳へ入らぬうち、とつとゝ去んでもらひませう。

江戸　親分、こりや大分手强いぞや。

皆々　この工合では、あかん〱。

太平　エヽ、忌々しい。市よ、どうせう。

江戸　ハテ、高で衒妻のせりふ。否と吐かしや、皆寄つて念佛講とはどうぢや。

くめ　エ、。

ト恟りして慄うてゐる。

太平　オヽ、人の花と眺めさすより、手短かに、皆寄つて念佛講ぢや。

ト皆々取巻いて

鮎九　そりや忝ない。親分の許しが出たからは。

早藏　遠慮なしにこの衒妻め。

鴾平　未だ手入らずの初物なれば

土武　七十五日生き延びるとは有り難い。

九度　何より結構なお肴。

トおくめの懷へ手を入れるを

くめ　アレエ、。

ト飛び退くを、引ッ捕へ

江戸　ドッコイ、おれが先ぢや。

皆々　イヤ、おれぢや〱。

くめ　エヽ、穢らはしい、アレイ〱。

ト聲立てんとするを江戸市、口を押へて

江戸　ソレ親分。

太平　オット合點ぢや。

ト太平次、おくめを引ッ捕へる。振り切り逃げうとす

ろ。鳴り物早める。

くめ　アレエ。

ト逃げ廻るを、皆々寄つて、手取り足取りにする。おくめ、振り放さうとする、よろしく返し。

造り物、元の平舞臺へ戻る。與茂七、鯛の料理してゐる。郷助、木具の膳を繕ろうてゐる。この見得よろしく、合ひ方にて、道具納まる。

與茂　ハテサテ、奥はドサ／＼と、騒々しい事でござります。

郷助　いまキヤツと申したは、嫁女の聲であつたぞよ。

與茂　どうで酒興の悪ほたへでがなござりませう……時に木具はどうでござります。

郷助　オヽ、それ／＼。

ト木具を差出す。與茂七取つて、作り身を並べかける奥よりおくめ、着付け、所々破れ、髪も亂れたる形にて、逃げ出て、與茂七に取り付き

くめ　與茂七さま、口惜しうござります／＼。

ト大泣きに泣く。

與茂　髪も亂れ、衣類も裂け、口惜しいとは、なんと致した。

くめ　サア、わたしが酌をしてゐましたら、さま／＼と無體を云ひかけ、エヽ、口惜しい／＼。

ト泣く。

郷助　何も泣く事はない。さては奥の客人が、悪洒落でも致したと云ふやうな事か。

與茂　ハテサテ、人馴れぬと申すものは仰山な。大方座興でがなあらう。

くめ　イエ／＼、座興ぢやござんせぬ。わたしを捕へて、女房になれのなんのかのと、無體を云ひかけ、否と申しましたら、エヽ、ツットモウ。

ト顔を隠して泣く。

與茂　エヽ、泣いて居つては事が解らぬ。どう致したのぢや／＼。

郷助　それ／＼、親や夫が控へて居る。どうだ／＼。

くめ　サア、それから寄つてかゝつてあられもない、手籠めにしくさつたわいなア。

與茂　ナ、なんと云ふ。すりや大勢が、其方を手籠めに。

くめ　始めは随分堪忍してゐましたれど、たうとう跡はあられもない。

與茂　狼藉いたしたか。
くめ　ハイ、私しもあなたの女房、例へ命は取らるゝとも滅多に手籠めになるまいと、力一ぱい揉み合ひしが、わたしの口から恥かしい事の有り條。やう／＼の事で振り切つて、逃げて來たのでござります。此まゝでは濟まされませぬ。どうぞ思案して下さりませ。わたしや口惜しひやら悲しいやら、何ともかとも云ひやうが。
ト口惜しいこなしにて泣く。
郷助　悴、察するところ、こりや何か意趣のある事と見ゆる。君子危ふきに近寄らず、大切な身ぢや。必らずうろたへな。親が後に付いて居るぞよ。
ト與茂七、おくめを前へ連れ出て
與茂　いま與茂七が尋ねる事、隱さずと申せ。
くめ　何をでござりますえ。
與茂　いま奥にゐる客人の中に、其方がこれまで、云ひ交した者があらうがな。
くめ　エヽ、穢らはしい、わたしや今日が日まで、殿御と云ひ交した事はござりませぬ。その上、奥へ來てゐる人達は、ツイに物云うた事もござりませぬ。
與茂　それに又、女房になれのと無體の業は。
くめ　サア、わたしの方は存じませねど、あつちの方から惚れてゐるのと法外な事ばかり。
ト以前の廻文、懐中より出かけあるを與茂七目を付け
與茂　イヤ、その云ひ譯、暗い／＼。その覺えのない者が懐中にこの艶書は。
ト引き出す。おくめ、思ひ出したと云ふこなしにて
くめ　アヽ申し、それは。
ト取らうとするを突き退け
與茂　こな徒ら者めが、斯樣な儀を致す女、與茂七が女房にはせぬ。暇をくれた。出てうせうぞ。
くめ　エヽ……イエ／＼、そりやあなたのお氣の廻りと云ふもの。文ではござりませぬ。廻文とやら云ふ物で、鎌倉へ持つて行くと、褒美の金になる程に、得心して女房になれ、今から賍落ちする印しぢやと云うて、無理にわたしが懐へ入れたのでござりますわいなア。
ト與茂七、廻文を開き見て、愕りして
與茂　して／＼、この廻文を持つてゐた者は。
くめ　奥にゐる頭分、太平次とやら云ふ奴。その兄は浪人者なれど病死とやら。
與茂　ムウ、すりやその弟の

ト奥を見ろ。この途端に鄕助と顔見合し、ちやつと廻文を隱し、おくめに目を付けて

與茂　こりや、迂濶に女房は去られぬわい。

トちつと思案のこなし。鄕助は上手にて窺ひゐるこなし。與茂七、思ひ入れありて鄕助が前に手を仕へ

與茂　親人樣、ちとお願ひがござりまする。

鄕助　フム。親子の中で、改まつた願ひとは。

與茂　されば、親人のお膝元を立去り、鹽冶家に奉公仕りしところ、不幸にして立歸り、親人の御介抱申さんと存じますれど、御覽の通り今宵の仕儀、どうも武士道が相立ちませぬ。何卒親人の御知行が、申し受けたう存じまする。

鄕助　フム、變つた願ひ。其方が鹽冶家へ奉公の砌りは、其方が兄長之助、家名相續いたせばよいと存じ居つたが、その兄は相果て、今は其方ならで讓るべき者はない。然るに今宵計らざる仕儀を見掛け、事々しう知行をくれとは……フム。

ト手を組み、與茂七が顔をキツと見込み、思ひ入れ。與茂七も思ひ入れあつて

與茂　どうも料簡がなり難きゆゑ、何卒お聞き屆けの下さりませう。

鄕助　フム、如何にも望みに任せ、知行を遣はさう。

與茂　すりや御得心とな。

鄕助　小知なれども數代の家祿、いま其方にくれたれば、捨てるか立てるか二つのうち。

與茂　イヤ、立ちませぬゆゑのお願ひ。

鄕助　オヽ、面白い。家を立つる所存がなくば、必らず立つなよ。

與茂　如何にも潰してお目にかけませう。

くめ　さうしてわたしの疑ひは。

與茂　晴れ過ぎてあるわい。

くめ　エヽ、嬉しうござんす。

ト手を合すを其まゝ、ポンと拔打ちに、おくめの首を切り、手早く木具の膳に載せ、布巾を上へ掛ける。鄕助へ目禮し、ツイと首を持ち、奥へ入る。此うち、鄕助、ヂツと目を付けてゐて、跡見送り、よしと云ふ思ひ入れにて、膝を叩き、ちよつと思案して、硯箱取り寄せ、サラ〳〵と何か手早く認め、これを懷中なし、下緒を取つて早襷かけ、目釘をしめし、ズツと立つてヨロ〳〵として留まり、キツと奥を見てこなし。よろ

しく合ひ方にて返し。

造り物、元の奥座敷になり、爰に太平次、皿八の膝を枕にして寢轉び居る。その外皆々、酒に醉ひたる體にて、正體なき見得。大小入りの鳴り物にて道具納まる。

江戸　どうだ。今まで亭主が面を出さぬとは、不躾ではないか。

太平　肴一つ出しさらさず、馬鹿にひろぐ、はッつけ野郎め、忌々しい。

皆々　これおやしまひが付かぬ。

太平　何にしろ、亭主を呼ぶがいゝ。

江戸　オ、さうだ。亭主を呼んで、肴を云ひ付けるがよい。

皆々　オヽ、それがよい、亭主々々。

ト奥より

與茂　イヤ、お好みの肴、只今それへ持參いたし申さう。

皆々　なんと。

ト與茂七、以前の木具の膳を持ち出て

與茂　やう／＼お肴が調ひました。甚だ珍物でござれば、これを肴に今一獻、召上がられて下さりませう。

ト太平次の前へ差し出す。太平次、起き直り

太平　なんだ、珍物だ。味噌を上げるが、どうで碌な物ぢやあるまいが、マア、見てやらうわい。

ト何心なく、布巾を取ると、切り首載せてあるゆゑ、愕りして

太平　やア、これは。

與茂　お客人には、この首、御好物でござらうがや。

皆々　ヤア／＼。

與茂　この肴をお好みとあつて、お越しなされたお客人へ亭主が手料理。この上は平强ひに、盛つて／＼盛り殺し、一人も生けては歸さぬ。サア、不義士小山田が弟太平次、押へてお酌仕らう。

ト切り首を目先へ突き付けて、キッとこなし。

太平　さては女めが口走つたよな。うぬから先へ、觀念さらせ。

江戸　四の五のなしに、疊んでしまへ。

皆々　オヽ、合點ぢや。

ト切つてかゝる。與茂七、皆々を相手に面白き立廻りにて、片腕、胴切りなどに切る事。皆々、手疵を負ひ、此うち二人、奥へ逃げ込む。これを追ひ打ちにとする

を、後より、太平次、江戸市、切つてかゝるゆゑ、ちよつと立廻つて、太平次、切り伏せ、續いて江戸市が首を見事に切つて、太平次が起き上がる所を、取つて押へ、止めを刺す。早き合ひ方にて返し。

造り物、また元の道具に戻る。爰に逃げ込んだる惡者二人、切り倒されゐる。鄕助、血刀を提げ、奧より逃げて出る者を待つてゐる見得にて道具納まる。

ト右の惡者、よろぼひながら、鄕助の足に取り付くを直ぐに蹴飛し、止めを刺す。與茂七、太平次とおくめの首を一つに提げ、血刀持つて出て來り。

與茂　親人樣。

鄕助　して、悴、奧の奴等は。

與茂　ハツ、二人は逃げ失せましたが、跡は殘らず。

鄕助　イヤ、滅多に一人も逃がしはせぬ。ソレ。

ト額にて死骸を数へる。

與茂　天晴れ御苦勞。

ト首を投げ捨て、血刀を拭ひ、鞘に納め

斯く大勢を手に掛けたれば、とても遁がれぬ拙者が一命役人の手にかゝらぬうち、此方より、いつそ。

ト行きかゝるを

鄕助　イヤ、悴待て。

與茂　イヤ、是非とも名乘つて。

鄕助　待て悴。知行を捨てたこの親に、隱さずと明かして行け。

與茂　ナニ、明かして行けとは。

鄕助　敵討の出立はいつ頃ぢや。

與茂　ヤ、なんと。

鄕助　大星どのゝ手筈の人數は、最早揃うたかと云ふ事サ

トこれにて、ツカ〳〵と立ち戻り

與茂　すりや親人には、その企てを。

鄕助　子を見る事親にしかず、知らいでならうか、年の功ぢや。

與茂　ハ、ハツ。

鄕助　與茂七、出かし居つたなア。

ト刀を投げ捨て、下にゐる。

いつぞや鹽冶家沒落の後、大星どのゝ企てありと聞くに付けても、この悴めは如何いたして居らうと、心で案ずる其うちに、立歸つたる其方、あからさまに尋ねんも如何と、わざと其まゝ期を延し、樣子を窺ふ折も折、この

度の縁組み。女房と貰ふ心になりしは、南無三方、我が目鏡の相違して、忠義の魂ひとろけしかと、口では云はねど心外さ。然るに計らず今宵の仕儀。不義士小山田が弟と聞き、親を捨て家を捨て、女房の首討つて、相手を仕留めし鐵石心。それでこそ我が悴、誠の武士の數に入る。人は一代名は末代、ホウ天晴れ出かし居つたなア

與茂　ハア、驚ろき入りたる御眼力。親兄弟にも知らせじと、神文まで認めたれば、それと明かさず餘所ながら、お暇乞ひと立歸つて承はれば、兄者人にはお果てなされ、親人樣には御病中。暫時なれど御介抱と止まるうちに、拙者の思案、せめては死後の取片付け、香花を取らさん爲と、貰ひ受けたる女房は、不義士小山田庄左衞門の、弟太平次が横戀慕。計らず手に入るこの廻文、大星どのゝ大望を、世に知られては大義の妨げ。密事を聞きたる女ゆゑ、わざと意趣切りにもてなして、この場を立退き、鎌倉に暫らく足を留めん思案。家にも親にも替へたる忠義。不孝の段は眞平御免。ハ、ハッ……下さりませう。

鄕助　ホ、ウ、天晴れの心底。武士たる者はさうありたきもの。忠義二つ全たからざれば、多勢の和順も成り難し。それで身共も安堵いたした。この上は餞別くれう。

ト最前認めたる書付けを投げ出す。與茂七、開き見て

與茂　こりやコレ、狼藉者を討ち捨てたると云ふ願ひ書。

鄕助　申し開きのその訴訟。それにて事は相濟めば、跡構はずと出立いたせ。

與茂　ハッ、然らば此まゝ。

鄕助　オ、、めでたう別れの杯くれう。

ト云ひながら、おくめの切り首の血汐を、茶碗へ絞り受け

一夜の枕は交さずとも、未來の緣を血汐の杯、取りも直さず門出の血祭り。

ト一口呑んで、與茂七へ差出す。與茂七、戴きグッと呑む。

鄕助　看くれう。

ト手早く、腹へ刀を突き立てる。與茂七、愕りして

與茂　ヤ、、親人には何ゆゑの、御生害でござりますぞ。

鄕助　何ゆゑとは、愚か／＼。家を出る時、妻子を忘れ、親を捨つるが武門の習ひ。親ありと思はゞ、もしも未練の心も出でん。この上は、心殘さず手柄を致せ。

與茂　ハア、返す／＼も御心籠められし御生害、心魂に徹

し、有り難う存じ奉りまする。

ト愁ひのこなしにて云ふ。鄕助、ニッコリこなしありて

鄕助　老いさらばうたこの骸、空しく病死せんは、武士の本意ならずと思ひしに、今計らずもこの生害。彼の賴政には劣れども……身の成り果てぞ。

ト謠ひにて云ふ。

與茂　哀れなりけり。

ト同じく謠ひにて云ふ。鄕助、キッとなりて

鄕助　早く出立。

與茂　とは云ふものゝ。

鄕助　ヤア、未練な事を。

トキッと睨む。これに勵まされ、ツッと立ち上がる。この時、惡者一人、起き上がり、うぬト與茂七にかゝるを、ちよつと突き廻すうち、鄕助、刀を拔き、バッタリ落入る。これと一時に、惡者を見事に切るを木の頭、與茂七、其まゝ、下にゐて、刀を突き立て、兩手を合し、鄕助を拜む。この見得、よろしく合ひ方にて

拍子幕

淺澤紅梅院の場

役名——淺澤の尼、春月尼。同、光琳尼。同、清光尼、同、梅薰尼、同、貞心尼。顏世御前。奴、宅内、木作り、杢作實ハ鷺坂伴內。研屋喜右衛門。大星力彌。小寺十內。矢間重太郎、千崎彌五郎。礒貝十郎、鹽田又作。竹森喜多八。不破數右衛門。

造り物、二重舞臺、正面に大佛檀、下手、瓦燈口障子、上手、書院床、丸木柱、竹椽、臆病口に連翹棚この前、水船、橋掛り、生垣、左右とも杜若、いつもの所に簀戶の門口。すべて淺澤邊庵室の體。右二重に、梅薰尼、貞心尼、振り袖、そぎ尼にて、偈を書き、花を摘んでゐる。庭に杢作、木作りの形にて杜若の手入れをする體。この見得、音樂にて幕明く

〽世の中は、淺澤小野の杜若、色を由緣の鹽冶家に、お乳の人と呼ばれしも、今は浮世を捨て人の、春月と申す尼公あり、弟子は花摘む偈書する、庭は出入りの木作りが

三世の佛に奉る、これや供養の花ならん。

杢作　先づ杜若はこれでよし。ドレ、休みと出かけようか

貞心　ほんに、庭作りも退屈にあらう。

梅薫　サア、莨でも參れいなう。

杢作　ドレ、一服下されい。

ト莨をのみながら

イヤモウ、仕事をして居れば眠たうなる。その中へあの通り、隣り裏の笙篳篥、ほつと聞き飽きた事ぢや。

貞心　あの屋敷は住吉の伶人衆、樂の稽古をさつしやるのぢやわいなう。

杢作　なんの事はない、練供養に參つた心持ちぢや。

貞心　それはさうと、先刻の話しの跡、話して聞かしや。

梅薫　ほんに、面白い事であつたぞえ。

杢作　話して聞かせませう……さて、わたしに惚れ居つて浮名を流したその女子と云ふは、大坂新町の全盛女郎、夕霧と云ひました。

貞心　ほんに、顏に似合ぬ色事師。

梅薫　その夕霧とやらは、よい器量であらうなう。

貞心　その傾城に通やつたかや。

杢作　通うた〳〵。恥かしながら我れ等が昔は、藤屋の伊左衞門が弟の、土左衞門と云うた者ぢや。末も遂げぬ仇惚れに登り詰めて、この通り木作りになつた。始めの程は有頂天、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理のもくらもちの仲なりしが、また同じ廓に小紫と云ふ女郎が、この土左衞門に惚れ居つて、附け文をし居つたワ。每日百通二百通、書きも書いたる痴話文は、大方馬に七駄半船に積んだら千石船、車に乘せたら

〽えんやらさ、木遣りでも音頭でも　祈つても呪うても、微塵氣もない二人が仲、いよ〳〵募つて逢ふ程に。

現在えらのかんこきで、ア、いつやらであつた。オ、それ〳〵、一昨年の八月の

〽十八日の觀音さん、日暮れ時分の飯時に、茶漬茶碗を取つて捨て、襦袢一つに長ゆもじ、脛もあらはに駈け來り我れらが膝にふうわりどんと藤蔓。

コレ、土左衞門さん、あんまり見られぬお好き樣、初午のおやまを退くの、退かぬか、サア、退け〳〵と、狐附きかなんぞのやうに、しやべり散らして、サア、返答が聞き度いと。

〽胸づくしを引ツ掴む。

ト梅薫の胸倉を取る。

梅薫　アヽコレ、何をするのぢやぞいなう。

杢作　何をせう、話をしますのぢや。

梅薫　否ぢやわいなう。

ト突き飛ばす。

杢作　惡い受けぢや。そんなら貴公ぢや。

ト貞心を捕へやうとする。

貞心　てんがうしやんないなう

ト逃げる。

杢作　どれを見ても、今を盛りの娘達、尼にするとは親達の無分別、水揚けするは木作りの商賣ぢや。誰れ彼れなしに、宙で取つてくれう。

ト兩人の尼、逃げ廻る。

〽花の芽生えを喰ひ荒す、山蜂なんぞの如くなり、折柄來かゝる堺の研屋、門口に會釋して。

ト喜右衛門、箱入り長刀の身を持ち來り

喜右　御院主さまは、お宅にござりまするか。

ト奥より淸光尼、詰め袖のそぎ尼にて、出て來り

淸光　オヽ、研屋の喜右衛門どの、誂らへの研は出來ましたかいなう。

喜右　叮嚀に研ぎ上げました。御院主さまへ、お目に掛けて下さりませ。

ト淸光尼、受取り

淸光　尼公樣のお側へ。

貞心　アイ〳〵。

ト箱を持ち、上手の屋體へ入る。

喜右　イヤモウ、長刀に月山の銘は、稀れ物でござります。殊に近來の出來物、よいお道具でござりまする。

ト此うち杢作、梅薫尼の側へ寄るを、ピンとして、あちらへ行くと、ちやつと莨のんでゐる。貞心、箱を持ち出て

貞心　研はお氣に入りました。次手に目釘を打たせとの御意ぢやわいの。

喜右　心得ました。

ト貞心、長刀の柄を取つて來て渡す。喜右衛門、目釘を打ち合す。

杢作　見れば、結構さうな長刀ぢやが、このお寺の寶物と云ふやうな事かな。

喜右　イヤ〳〵、どうでも御院主樣は、武家方の果てと見えるなア。

淸光　成る程、尼公樣は、もと伯州の御家中、不破數之進

さまの妹御、安藝の御家老、廣島源吾右衞門さまへ御緣附きをなされ、御男子が生れ、喜びに引替へて、源吾右衞門さまは御病死。お子様も御死去。是非なうお里へお歸り、その砌りお國には、判官さま御誕生、乳のあるを幸ひに、お乳の人とおなりなされ、御成人の後、お暇の願ひ叶ひ、夫やお子の菩提の爲と、お髮を下ろし、この紅梅院は河内道明寺の末寺なれば、後住に坐りなされたのぢやわいなう。

杢作　長刀の因緣が、さらりと分つた。

ト此うち喜右衞門、目釘をしめ、鞘を嵌めて

喜右　イヤ、私しは、お暇申しませう。

清光　大儀でござつたなう。

喜右　御院主様へ、よろしう仰しやつて下さりませ。

〽研屋に宿所へ立歸る。

ト喜右衞門、橋がゝりへ入る。淸光尼は、長刀を長押へ掛ける。

杢作　さて、先刻の繰話し、跡の所を申し上げる。

清光　また悪洒落をするのかいなう。

杢作　氣の惡い樂ぢや。爰へ寄り給へ〳〵。

トまた皆を連れて坐り

清光　あれから聞いてゐたが、由ある人の成れの果であつたさうなの。

梅薰　その小紫が悋氣をしたらば

貞心　夕霧も默つてはゐまいぞや。

杢作　二人が口舌の眞中へ、夕霧が走つて來て

トこれより女形の身振りになる、清光を引ツ張つて來て

コレ、紫とやら村月とやら、光りはくはぬ、出直してもらひませう。この廣い日本に、あの人ならでは男はないか。

〽マア〳〵あるにせよ、ないにせよ、それ程惚れた男なら、なぜ初手に惚れなんだ、男盜人、生き傾城と、云ひざま取つて投げ附けたれば、鎗の鍋の打ち返し、とろゝ汁に踏み辷り、緣から下へぬるぬる〳〵、そりやこそ喧嘩が始まつた。

大事の此方の金箱に、引けを附けては叶ふまい。加勢をやれと云うた程に。

〽茶棚竈莨盆、當る物を幸ひに、打ち破る踏み碎く。擂粉木に羽が羽えて飛び出すやら、手飼ひの小猫が新内節を謳ふやら。

〽庭の隅では泥鼈が踊るやら、前代未聞の悋氣のいさかひ、この事世上に隱れなく。たうとうしくじつてこの態ぢや。あんまりしやべつて息が切れた。茶を一つ下さりませ。

〽お茶下されと語りける。

梅薰　廓の手管とやら云ふものは、むづかしいものぢやわいな。

清光　さうして、夕霧とやらは、どうしやつたぞいなう。

杢作　サア、その夕霧も、秋の末から秋風が來て。

梅薰　退きやつたかや。

杢作　イヤ、あつちから退かれた。それから通うたは神崎の梅ケ枝。これも春の末つ方に散つてしまうて、それからが磯せゝり、瓦屋橋の油屋の、一人娘にお染とて

〽これも當座の一盛り、藝子に取りては小ばななり。

ト尼、皆々ツツと逃げて入る。杢作、知らずしやべつてゐる。橋がゝりより奴宅內、出て

宅內　頼みませう。

杢作　質屋の後家は置き去りぢや。

宅內　頼まうぞよ。

杢作　仲居と出合ひは島の內。

宅內　これはしたり。

杢作　尼御に逢うたは月江寺。

宅內　さりとては。

杢作　惣嫁買ひなら横堀ぢや。

宅內　頼みませう。

ト耳の側にて云ふ、悄りして

杢作　どうれ。

トうろたへて、脇の方へ云ふ。

宅內　モシ、この所に、木作りの杢作どのと云ふは。

杢作　杢作はおれぢやが。

ト顏見合せ

宅內でないか。

宅內　鷺坂伴內さま。

杢作　ア、コリヤ。

ト押へ、門口へ出て

して、源四郎に對面したか。

宅內　昨日生田の海道にてお目にかゝり、九太夫さまの書翰を渡し、卽ち師直さまへ仕官の印と、相渡されし驪龍の笛。

ト袋に入りし笛を渡す。

杢作　新田義貞より傳はりし、鹽冶家の重寶、師直公、兼ねて懇望、獻上いたさば國郡は慥かなもの、先づ忝ない。
宅内　御出世の幸ひ、先づ好い物がお手に入りました。
杢作　それに附き、當寺の尼は、伯州の家中、不破數之進が妹、判官を守り育てた乳母なれば、すべて山科に蟄居する大星由良之助、又は鹽冶の浪人が、折々立寄るとの風聞。さるに依つて斯く姿をやつし、浪人どもが密事の段々、聞き糺せと、師直公より密かの御内意。
宅内　忠義立てする不破數右衛門、生け置いては主人の仇、當寺の尼は伯母とあれば、是非この寺へ立寄るは必定。
杢作　萬事へ氣を附け、油斷いたすな。
宅内　畏まつてござりまする。
ト暮れ六ツの鐘鳴る。
杢作　最早黄昏。其方は、コリヤ。
ト囁く。内にて
貞心　杢作どの〳〵。
杢作　ハイ〳〵、只今參りまする。
宅内　然らば拙者は、この所に忍びゐて
杢作　とくと實否を。

宅内　心得ました。
ト橋がゝりの生垣へ忍ぶ。
杢作　時に、この品を一時も早く鎌倉へ差上げたし、此方も聞き出して注進をしたし、體は一つ、用は二つ、ハテ、どうしたものであらう。
ト貞心出て
貞心　コレ、杢作どの、日が暮れたによつて、奥庭を片附けいと、尼公樣が仰しやるわいなう。
杢作　今そこへ參ります。
貞心　サア、ちやつとござれいなう。
ト下へ下りる。
杢作　面妖な。腰提げをどこへやつた知らぬ。
ト尋ねる振りにて、笛の袋を杜若の中へ隱す。
貞心　コレ、莨入れなら爰にあるわいなう。
杢作　置き所を忘れて、道に迷うてのけた。ハヽヽヽ。
貞心　サア〳〵、ござれいなう。
〽心奥庭木作りを、誘なひてこそ。
ト杢作を、貞心、引ツ張つて、連翹棚の下の切り戸へ入る。
〽身は雲水の行くへなく、越し方をいつと定めん。

ト向うより數右衛門、脊附け、袴、大小にて、水子を抱へ出て

數右　百姓が教へし淺澤の寺院、絶えて久しく音信をせざれば、伯母君の心も如何あらん。マヽ、對面の上の事。

〽花の寺にぞ着きにけり〳〵。

ト本舞臺へ來る。

誰ぞお頼み申さう。

ト清光尼、角行燈を持ち、貞心、梅薫、光琳尼、出て來り

清光　どなたでござりまする。

數右　拙者は遠國の浪人者でござるが、御院主には、どれにござるな。

清光　只今佛間に。して、あなた樣は。

數右　不破數右衛門と申す。お取次ぎを下されい。

清光　暫らくお扣へ下さりませう。

ト上手の屋體へ入る。貞心は、莨盆、梅薫は茶を持ち行く。

數右　イヤ、お心遣ひ御無用でござる。

ト赤子、泣く。

貞心　抱いてござるは、あなたのお子樣でござりまするか。

梅薫　母御樣はどれにござりまする。

數右　妻が儀に附いては、段々譯のある事でござる。

ト奥より清光出て

清光　お出での樣子申しましたれば、今日は取込みもあれば、御對面はなりませぬと、お返事申せとの事でござりまする。

數右　すりや、御對面下されぬとな……ナニサマ、疎遠いたし居れば、お逢ひ下されぬは道理。イヤ、今一應、ちとお頼みの儀あつて、わざ〳〵參つてござる、隙取りは致すまい、ちよつとお逢ひ下さるやう、只管お願ひ申して下されい。

清光　ハイ、左やうなら今一應。

ト一間の障子を明けようとする。内より

春月　イヤ、障子一重も、明くる事は無用ぢやぞ。

ト正面引き拔く。春月尼、黑の衣、花の帽子、水晶の珠數を持ちゐる。

數右　左やう御意あるは伯母君。不破數右衛門でござる、何卒對面の儀を、願はしう存じまする。

春月　オヽ、弟子達、話しがある、近う寄りや。

三人　ハイ〳〵。

ト二重舞臺へ行き

尼皆　何事でござりまする。

春月　されば、鹽冶の家中に妾が兄、數之進どのゝ忰に、數右衞門と云ふ者ありしが、幼少にて父母に別れたれど武道も心得、仁義の道も辨まへしが、いつの程にか酒色に耽り、遂には追放の身となりしと聞きしのみ、この度、御主人には御切腹、さほどの事を餘所に見なすは不義不忠、人でなしの侍ひに、伯母と云はるゝ覺えはない、とサア、こりや其方衆への話しでござるわいなう。

清光　ハイ、どうやら面白さうな

貞心　氣の毒のやうな

尼皆　お話しでござりまする。

數右　成る程、お叱りの段々、返す詞はござりませぬ。酒色の二つに侍ひの魂ひとろけ、一家中の見せしめと、主人判官が手づからのお仕置、お白洲へ引出だされ、首さし延べる劍の下、肩衣ばかりお手討の國法。剰へ馴染みを掛けし傾城まで、身請けあつて、暇を遣はすとあるお情の數々、骨身に通つて立ちも立たれず、御門外にて切腹とは存ぜしが、さあつては主人の情も無足にせんと、國元を立ち去り、播州曾根に假の住居。御勘氣赦免の時節もがなと思ふうち、女が懷胎、產み落せしは即ちこの男子。お國表は今度の大變、聞いて恟り、エヽ、御存生の對面も、切れ果てし本意なさ、口惜しさ、御推量下されい。

〽はら／＼淚にくれければ、他人顏なる尼達も、淚催ふすばかりなり、宵寐惑ひに目覺ます水子。

ト赤子、泣く。

清光　オヽ、目が覺めたさうな。ドレ／＼。

ト抱き上げる。

貞心　私しにも抱かしなされ。

光琳　私しにも貸しなされ。

梅薫　わたしおやわいなア。

ト方々へ抱き合ふ。此うち春月、讀經し居る。

清光　オヽ、其やうになさると、蟲が出ますわいなア。

ト取つてゆすぶり

わたしが抱いたら、泣きやみなされたわいなア。

ト一間の際へ來て

申し尼公様、大事なくば、このお子様を。

春月　イヤ、不所存者の血筋なれば、子とても顏は見ぬ。シタガ、何ゆゑ母は居ぬぞ。其方衆、尋ねて見やいなう。



天保二年六月市村座所演



小佐川常世の春月尼　二世關三十郎の數右衛門

清光　申し、このお子の母樣は
皆々　どうなされたぞいなア。
數右　本國沒落の仕れば、歸參を願ふ主人もなく、再び主取りを致さんと、懷胎の妻を捨て、上方へ參りしところ、西國の諸侯、召抱へんと斯く大小、衣服まで賜はる。然るに夜前、生田の松原を通りかゝれば、手疵に惱む旅の女、立寄り見れば我が女房、慕ひ來りし甲斐もなく、盜賊に出會ひ、斯く手負ひしと抱へし水子を我れに渡し、相果てましてござる。とあつて、仕官する身の足手纏ひ、預け置くべき知音もなし、何卒悴を御養育下されなば、心置きなく西國へ立ち越さんと、わざ／＼尋ね參つてござりまする。
清光　尼公樣、お聞き
皆々　遊ばされましたか。
春月　この寺へ便りしは、恩ある主家の騷動、先非を悔んで、倶に天を戴かざる仇を報ぜん志し、天晴れ武士と思ひしに、二君へ仕へ、汚れ穢れた魂ひの、大小をひけらかしに參つたか。エヽ、腑甲斐ない心ぢやなア。
數右　イヤ、いま高家へ對し奉り、野心を差挾む時は、いよ／＼お上の憎しみ深く、顏世さまの胎内には、殿のお世嗣、お祟りあらば、長くお家は絶ゆるの道理。
春月　イヤ、お上の祟り、お國に及ばんと思ふならば、なぜ亡君の御墓前で、潔う殉死せぬ。
數右　されば、死は一旦にして易く、生を保つて安否を聞かんが爲。
春月　イヽヤ、お家の成行き見屆けんと思ふ身が、なぜ主取りは致したぞ。
數右　サア、その儀は……イヤ、お家の安否は兎も角も、良禽は樹を見て棲む、英雄は主を選んで仕ふるの本文。
春月　その主人無道ならば、三度諫めて身退くもある習ひなれども、殿樣は智仁の名將、恩を見て恩を知らぬは鬼畜木石。
數右　すりや、主取り致せしゆゑ。
春月　武士道はすたつたぞよ。
數右　ホイ。
春月　その不所存ゆゑ、天道にも見放され、妻も相果て、水子まで憂き目を見する因果歴然。父母より尊き御主人の、御高恩を辨まへ知らぬ人畜生。水子を預かり養育は思ひも寄らず。對面叶はぬ、立歸れ。
〽伯母の實儀に數右衞門、如何とためらふその氣色、こ

の場を氣遣ふ尼達も。

清光　お心強う仰しやれど、殿達がお子様の養育も出來まひし

貞心　と云うて尼公樣のお心にも叶はず

梅薫　どうぞ御思案は

皆々　ござりませぬかいなア。

春月　オヽ、妾とした事が、相手もないのに問はず語り。

皆々　エヽ。

數右　すりや、どうあつても。

春月　皆も休息。

〽云ひ捨て一間に入り給ふ、氣の毒さうに立ち寄つて。

ト春月尼、障子さす。尼皆々こちらへ來て

清光　ほんに、沒義道な御出家氣質。

梅薫　母御がなくば、お乳を貰ひ遊ばすか

貞心　乳味湯でも上げまして

ト水子を渡し

四人　お大事になされませ。

皆々　ほんに、お氣の毒な事ではある。

〽打連れてこそ入りにける。

ト皆々、納戸へ入る。

〽早更け渡る鐘の音も、胸にこたへて越し方を、思ひ續けて數右衞門。

數右　ハテ、是非もない。現在の伯母君に、僞はり飾るも洩らすまじと、朋友に契約を認め、番ひし詞を立てんが爲と、御存じあらざれば、只今の御教訓。これに附けても不便なるは、女房町、召連れし家來まで、所も變らず非業の最期。分けて不便はこの悴、地を走る獸

〽空を駈ける翅まで、子を憐れまぬ物はなし。

なれども、召連れては足手纏ひ、とあつて伯母君はお張かり下されず。この上は小寺氏へ兎角の對談。ソレ。

〽思案極めて立ち出でしが、

イヤ〳〵、十内が性根、所詮大望に遂げまじと、一味の人數に省かれなば、盡せし心も水の泡。アヽ、恩愛忠義、身一つに迫り果てしか。エヽ。

〽暫し心に分け兼ねしが。

イヤそれよ、親子の愛に心後れ、大事を忘るゝ場所に非ず、草葉の蔭より恨めしとも思はゞ思へ、爰に捨て置けば、せめて骸は尼公の計らひ。それとも憎しみ深く、野末に捨てられ、鳶烏の餌食ともならばなれ、忠義の道には替へられぬ。さうぢや。

〽心強くも子を捨てゝ、出で行く跡に泣き出す水子、思ひ切つても恩愛の、きづなに繋ぐ大磐石。

ムウ。

〽又立ち戻つて抱き上げ、すかせば泣き止む幼な子を、つく〴〵と打守り。

たま〳〵人界に生を受け、親と云ひ、子と呼ぶも、假初めならぬ宿世の因み。兎にも角にも、首枷ぢやなア。

ト戸家の内にて、尺八を合し、力彌、十內、對の虛無僧にて、出て來り、表に立ち、笛を吹く。此うち數右衞門、思案して

東西分らぬ其方なれど、人は萬物の靈なれば、とくと覺えよ……義に因つて相果つる武士の本意。父が最期の魁に、其方を刺し殺し、愛に溺れぬ臍を固め、忠義の道を全うするが、この身の本意、其方が手柄。女房が今際の賴み、未來で云ひ譯いたさう。親への孝行、父が刃に死んでくれよ。

〽膝に引敷き拔く刀、咽喉に當ては當てながら、すやすや眠る幼な子を、見るに目もくれ心消え。表に聞ゆる虛無僧の、尺八は鶴の巢籠り。

〽鳥類すら子を思ふに。

科なき悴を殺すとは、親も因果、子も因果。

〽と思へば胸も塞がつて、弱る心を取り直し。

暫時の後れは暫時の不忠。チエヽ、是非に及ばぬ。

〽思ひ定めて振り上ぐる刀の下。

ト內にて

春月　御無用。

〽聲掛けられて思はずも、たるみし拳尺八も、共にひつそと靜まりし。

數右、ムウ、今止めしは修行者の手の內。不便さに心後れ、猶豫せしは未練の至り。

〽また取り直す刃の下。

春月　御無用。

數右　ムウ、御無用と止められしは、修行者の手の內か、悴を止めの手の內か。

春月　イヤ、水子を止めの、手の內無用。

〽詞を掛けて春月尼公、靜々一間を立出で給ひ。

ト春月尼公、淸光、附添ひ出て

春月　子を殺し、忠義の道を全うせんとは、天晴れ健氣。

數右　すりや、拙者が本心を。

春月　水子をこれへ。

數右　ハツ。
　ト春月、子を抱き取り
春月　血筋とて面ざしのこの似やう。我れも昔は判官さまを守り育て。
〽乳房含めてはごぐみ參らす月も日も。
今は果敢なき育て君。
〽若木の花は散り失せて、殘る老木の花も實も。
替り果てたる世の有様、母に後れしこの孤子、尼が預かり、養育しませう。
〽衣の袖に法の道、哀れにも又殊勝なり。
數右　ハア、、今こそ女房が迷ひも晴れ、心も急けば早お暇。
春月　イヤ待て。斯く心底を聞く上は。
　ト表へ向ひ
御兩所ともに、イザ先づこれへ。
兩人　然らば、御免下されい。
〽笠脱ぎ捨て、靜々と內へ通れば。
數右　力彌どの、十內どの、存じがけなきそのお姿。先づ先づあれへ。
〽目禮挨拶、上座に通り。

力彌　數右衛門どの、堅固の體、喜ばしう存じまする。
十內　世を忍ぶ浪人なれば、斯く虛無僧となつて、巷を徘徊まつた夜前、生田の松原にて、不思議に出合ひし數右衛門どの、先非を悔みし本心を聞き屆け、大星氏へ吹擧いたさんと存せしところ、計らざるこの場の對面。
力彌　貴殿の實義は、小寺氏より承知仕る。
十內　この上は、熟談の仕様もござらう。
〽隔てぬ詞、朋友の、これも情と身一つに、數右衛門は用意の金子、二人が前に押直。
數右　小寺氏よりお指圖ありし石碑料、些少ながら三十金、由良之助どのへお取次ぎ下されませう。
力彌　慥かに落手仕る。
十內　この上は、顏世御前、不破氏へお目見得の儀を。
〽一間の障子押明くれば、爰に縋りの顏世花、いつかは色もうつろひて、思ひ惱みし御風情。
　ト顏世、先に、梅薰尼、若君を抱き、貞心尼、經机に位牌を載せしを持ち、光琳尼、附き添ひ出る。
數右　こは顏世の御方。ハ、ハア、。
〽すさつて禮儀をなしにける。
顏世　冷光院殿吹毛利劍大居士、月は變れど判官さまの御

命日。

力彌　只今調べし笛竹は

十內　心ばかりの御追善。

額世　判官さまに引別れ、あるに甲斐なきこの命も、若君御成人の時節を待つて、お家の根繼ぎ。この寺に匿まはれ、殘る方なき尼御の忠節。自らは兎も角も、若が先き、よいやうに、其方衆を賴みまするぞや。

〽跡は淚の杜若、空に知られぬ五月雨や、池の汀に淵なして、水嵩まさるばかりなり。

春月　そのお嘆きはさる事ながら、御出生の御男子は、殿のお筐。國を接木の御若生え。歎きの中の喜びぢやわいなう。

十內　これより山科へ立越え、何かの評議。數右衞門どのには、亡君の思し召しにも。

ト位牌の方を見る。

額世　イヤ、殿樣御存生に、仰せ置かれし驪龍の笛、在所を求め手に入らば、一つの功になりさうなものぢやぞや。

力彌　只今調達の金子は、親どもへ披露いたすでござらう。

數右　よろしうお願ひ申す。功だに立つてござらうならば。

額世　この位牌へ、お詫びを申して元の主從。

數右　承知仕つてござりまする。

力彌　父由良之助が申すにより、武器の類は泉州堺、天川屋義平を賴み、この一卷は織部彌次兵衞どのより、萬事の計らひ。數右衞門どのには、一つの功の立てし上にて。

數右　跡より發足、仕るでござらう。

十內　時刻も移れば。

ト呼子の笛を吹く。

〽手筈定めし矢間千崎、竹森鹽田磯貝なんど、旅裝束を其まゝに、伴ひ連れて入り來り

ト義士五人、出で來り

矢間　由良之助どのゝ內意によつて、諸士の面々申し合せ

千崎　都山科へ只今發足。

數右　これは矢間千崎氏、竹森鹽田磯貝どの、拙者も後より。

竹森　數右衞門どのゝ心底は、十內どのに承はる。

鹽田　何か調へ、追ッ附け入來。

磯貝　山科に於て

五人　相待ち申す。

數右　由良之助どのへ、よろしく通達。

力十　然らば此まゝ

皆々　お別れ申す。

〽立別れんとする所へ、始終木影に窺ふ宅內。

宅內　顔世御前を隱まひ置く事、師直公へ注進する。

〽逸足出して駈け出すを、數右衞門立ち塞がり。

數右　さては師直が廻し者よな。せめておのれを討ち放し、腹かツさばくが、何れもへの申し譯。

ト立廻つてポンと切る。連翹棚へ杢作、窺ひゐる。

〽すはと拔いて切り附ける、心得さそくの數右衞門、引取りさまに刃の稻妻、ぱらりすんと切り下ぐれば、不思義や流れに集まる蛙。

ト烈しき合ひ方になり

十內　ハテ心得ぬ。汀に集まる蛙の聲々、黨を結んで、亂世を知らせし事、間々ある例し

力彌　いま會合の時に望んで、もし鎌倉へ洩れ聞え、討手の向ふ前表なるか。

十內　先んずる時は人を制す。

力彌　善か

十內　惡か

兩人　ハテ、訝かしい。

數右　イヤ、蛙の鳴くは時候の變化。水面に如何なる重器、隱しあつて滴る血汐を。

十內　仔細ぞあらん、詮議召され。

數右　實に尤も。

〽ハツと云ふまゝ池の面、花を穿つて取り出す笛。

ト杢作見て、あせるこなし。袋を開き見て

こりやコレ紛失せし驪龍の笛。

ト渡す。

顔世　誠に家の重寶、驪龍の笛。

ト笛を位牌の前へ置く。

力彌　お家の寶、手に入れしは天晴れ手柄。

顔世　今こそ一つの功は立つた。

十內　數右衞門どの、これへ。

數右　ハツ。

ト位牌へ向ふ。

十內　御尊靈へ申し上げ奉る。御不興受けし數右衞門、驪龍の笛を手に入れしは、この場の大功、御勘氣御赦免下されうならば、千萬有り難う存じ奉りまする。

ト何か聞えるこなしあつて



天保二年六月市村座上演

十二世市村羽左衛門の十内

數右衞門、喜び召され。只今の功によつて、先知二百石
下し置かれ、御勘氣御赦免との儀でござるぞ。
數右　すりや、御勘氣御赦免とな。
力彌　急いで血判。
ト連判狀を渡す。
數右　ハヽツ。
ト血判よろしくあつて
願ひ叶ふも小寺氏の御吹擧。チエヽ。
ト手を合す。
〽天へも昇る心地して、勇み立ちたる門出の喜び。
額世　何れもの勇ましさ。妾も滿足しますわいなう。
〽御喜びは類なし、力彌十內突立ち上がり。
力彌　彼の地の手筈は、父由良之助が下地の采配。
十內　徒黨の人數は四十餘人、本意達せば生きて歸らぬ。
數右　冥途の道の時鳥、子で子にあらぬその水子を、この
上ともにお賴み申す。
額世　それこそは自らが、產み落せし若君に、年も相生、
守に附ける。
ト水子を抱く。
數右　殘る方なき御厚恩……最早お別れ申しまする。

春月　ト杢作、數右衞門を窺ふこなし。
妾も共に、吾妻の旅へ赴むく心。
ト長押に掛けし以前の長刀を取つて
門出を祝ふ當座の餞別。
〽長刀を投げければ、數右衞門ハツと押頂き。
數右　ハヽア、有り難き御賜物。樊噲が母の衣を賜はりて、
母衣となせしは異國の例し。
〽いま賜はりし長刀は、伯母の魂ひ、我が心魂にしつか
と納め、敵の館は直ぐに戰場、向ふ敵をば眞向梨子割り
すくひ切り、蜘蛛手かく繩水車、くるり／＼狂はぬ手の
內。
伯母御前にも同道と、思へば心に勇みあり。不日吉左右、
お聞かせ申さう。
〽早おさらばと立ち上がる。
力彌　ホ、ウ、勇ましき志し。猶山科にて會合せん。
十內　萬事は隱密。
諸五　路次の間は別れ／＼に
十力　忍び姿は笛竹の
春月　舍り定めぬ一節切り
額世　直ぐなる操、忠臣の鏡を照らし

皆々　埋もれし名も晴れ行く空。
ト連翹棚より杢作、延び上がる。この影、前の流れへ
映る。數右衛門これに月を附け
數右　月は一つ、影は二つの水鏡
ト振返る。杢作、引ッ込む。
春月　讓りし一振り、鈍しと人に云はれぬやうに。
數右　鍛へ上げたる寶珠月山。
ト長刀にて桂を切る。連翹棚、仕掛けにて半ば落ちる。
杢作、見事に水船へはまる。
諸皆　天晴れ手の內。
春月　めでたく發足。
數右　ハツ。
ト杢作、水船より上がつて
杢作　うぬ。
〽武士の手本と末の世に、美名は高くぞ。
ト立廻つて杢作を切る。首、棚に乘る。
力十　見事。
數右　おさらば。
〽殘りける。
ト段切れにて、よろしく拍子

幕

繪本忠臣藏（終）


假名手本忠臣藏
かなでほんちうしんぐら

假名手本忠臣藏（かなてほんちうしんぐら）

寛延元年八月、竹本座に書き卸した十一段續きの淨瑠璃で、作者は竹田出雲。義士劇中での最傑作と稱され、上演度數の多いこと日本一、芝居の獨參湯とまで云はれた名譽の戯曲である。全部が十一段で、大體本卷に納めた脚本と違はないが、餘り上演度數の多い爲、種々な型が生れ、多少院本と變つてゐる所もある。

大序は院本の通りである。人形でも歌舞伎でも幕明きの前に口上人形が出て役割を觸れるのが普通であるが、歌舞伎ではこれを俳優が人形振りで勤める事がある。二段目も大體同じであるが、本藏の妻戸名瀬を出さずに、妹水無瀨を出してゐるのは、勿論原作にはない。この場の戸名瀬は役が惡いので、俳優に依つては出場を嫌ふので、この場合は妹水無瀨を出すのが、天保以後の型である。變態の標本として、わざと其まゝ入れて置いた。或ひは又、全然書き替へて「建長寺の場」となし、力彌小浪の件を略し、若狹之助が建長寺へ佛參して本藏に意中を明かすといふ筋が流行した時代もあつた。三段目の「門外」は、原作では師直も判官も出るのであるが、歌舞伎では形式上、師直は駕籠に隱して姿を出さず、すべて伴内が代りをするのが普通で、これも場面が輕い所爲である。判官は昔から歌舞伎でも出さない。後には本藏も爰へ出さず、實説通りの梶川與惣兵衞といふ人物を出して代理させるなぞ、筋を破壞するやうな習慣になつてしまつた。お輕勘平の色模樣も、最初は見せたのだが、天保以後は殆んどやらない。「殿中の場」は大體原作通りであるが、廻つて「勘平駈附けの場」が省いてある。これは最近までも上演したのであるが、「道行旅路の花聟」の舞踊が入る時は、これとツクので省いてしまふ。本卷にもその淨瑠璃を加へたので割愛した。四段目も義太夫通りだが、凡そ忠臣藏中、上演毎に創意を加へられたのはこの幕で、その爲、いろ〳〵餘計な文句や仕草が加はつてゐる。原作の藥師寺次郎左衞門が山名次郎左衞門になつてゐるのは、或る年、同名の上役人から故障を申し込まれ、山名と變へたのが習慣になつて、東都ではツイ近頃までその型を踏襲してゐたのである。

五段目では、定九郎と與一兵衞の件が大いに簡略になつてゐる。これは定九郎を高級な俳優の演じるのが習慣になつた爲、引立せる意味で天保頃から斯う變へられたのが、今に型として殘つてゐるのである。定九郎は昔は大袈裟な山賊の形だつたのを、現在の浪人姿に改めたのは、初世中村仲藏の創意で、有名な話である。六段目も大體原作を辿つてゐるが、一文字屋才兵衞の外に、女衒を添へて出す事は、文化頃から始まつたので、今では當然の事になつてゐるが、原作には無い人物である。また才兵衞を女房お才に直す事も、今では普通になつてゐる。また二人侍ひのうち、一人は必らず千崎彌五郎であるが、一人は折々變る。本篇では不破數右衞門であるが、吉田忠左衞門や堀部彌次兵衞でやる事もある。これは、六段目は幹部俳優が勤める關係上、原作通り原郷右衞門でやるとなると、役の悪い四段目まで勤めなければならないからである。また、おかるの母の名は、原作ではハッキリしてゐない。昔は、おさわだの、おみやだのと云つた事もあつたが、文政以後はおかやに一定してしまつたやうである。

七段目も原作通りであるが、三人侍ひの名は時に依つて變る事もある。原作通りだと、六段目に出た幹部俳優が出なければならないからである。爰も歌舞伎の舞臺では、原作以外、非常に入れ事が多い。八段目は、原作は「道行旅路の嫁入」で景事である。京坂は勿論、江戸でも最初は義太夫でやつてゐたのであるが、江戸の習慣で、義太夫の通しを出す場合、氣分を替へる必要から、景事はいつも江戸音樂の地に變へるのが普通なので、寛政十一年四月の中村座を最初として、數多の「八段目道行」の淨瑠璃が出來てゐる。常磐津にも富本にも淸元にもある。本卷收錄のものは、天保元年四月、市村座に上演した三升屋二三治の作で、戸名瀨(尾上紋三郎)、小浪(岩井紫若)、喜之助(坂東簑助)、おかな(岩井粂三郎)で、肝心の戸名瀨小浪は子役に踊らせ、外の人物を主に踊らせてある。

九段目十段目は大體變らないが、九段目では前の由良之助を出さず、十段目では由良之助の代りに外の義士を出すのが最近での型である。十一段目の討入は、原作が不得要領なので、歌舞伎では上演の度に新作する事になつてゐる。

この脚本は、上演の年代に依つて大分趣きを異にするので、いつ頃のものを收錄したものかと大いに迷つたが、結局、讀者の目に馴染の深い、最近のものを入れる事にした。大部分は、文久三年十一月市村座上演のものであ


道行
旅路の花聟

るが、二段目十段目十一段目は、萬延元年五月中村座上演の脚本を以て當てたのである。八段目の淨瑠璃だけは、天保元年四月市村座の時の臺本である。

本集には、忠臣藏の正篇以外、「道行旅路の花聟」「蜂の巢の平右衞門」「兩國橋引揚」の三幕を加へて置いた。「道行旅路の花聟」の淸元と「蜂の巢」は、天保四年三月河原崎座で、裏表の趣向を演じた折、いづれも三升屋二三治が新作しので、勘平、平右衞門(市川海老藏)、おかる(尾上菊五郎)であつた。本卷の「蜂の巢」は初演の臺本だが、「道行旅路の花聟」は萬延元年五月中村座で、おかる(尾上菊五郎)、勘平(中村福助)で踊つた時に訂正されたもので、今行はれる初演の文句とは大分違つてゐる所もあつて珍らしいから、わざとこれを採つて加へたのである。また「引揚」は、嘉永二年九月中村座で上演したのが初めで、鳥取一郎(市川高麗藏)、由良之助(澤村長十郎)であつた。收錄したのは慶應元年五月中村座で、再演の折の脚本である。

「假名手本忠臣藏」が歌舞伎へ最初に取入れられたのは、矢張りお膝元の大坂芝居なので、初演に僅か一ヶ月後れたばかりの、寛延元年九月の角の芝居で、以下の役割であつた――伊吾(嵐勘三郎)師直、與一兵衞(市村三保右衞門)小浪(山下六三郎)かほよ(小野川龜菊)伴內、藥師寺、定九郎(民屋十三郎)戸名瀨(富澤喜代崎)おかる(吉田萬四郎)判官、十太郎、彌五郎(市野川彥四郎)若狹助、鄕右衞門、平右衞門(山本小平次)本藏、九太夫、與一兵衞女房、了竹(片岡仁左衞門)お石、おその(芳澤崎之助)勘平、由良之助(嵐三十郎)右馬之丞、義平(姉川新四郎)力彌(嵐三五郎)。次は寛延二年二月、江戸の森田座で、この時の役割は――直義(坂東伊三郎)伴內(大井川又藏)小浪(山本岩之丞)力彌(岸田幸太郎)右馬之丞(澤村藤三郎)彌五郎(荻野助三郎)藥師寺(中島虎藏)おかる、おその(吾妻藤藏)九太夫(市川勘十郎)師直、定九郎、了竹(大谷龍左衞門)本藏(坂田藤十郎)若狹助、鄕右衞門(富澤辰十郎)與一兵衞、伊吾(嵐音八)かほよ、お石(嵐吉彌)判官、與一兵衞女房(花井才三郎)勘平、戸名瀨(嵐小六)平右衞門、義平(岩井半四郎)由良之助(山本京四郎)等であつた。

これが當つたので、同年五月、市村座でも早速上演した。この時は――直義(市川和十郎)了竹(宮崎十四郎)藥師寺(坂東又八)右馬之助(水木九十郎)伴內(仙國左十郎――いろは評林に坂田左十郎とあるのは誤り)伊吾(中村

八十吉――これもいろは評林に八十太とあるのは誤り）小浪（嵐松五郎）與一兵衞（鶴屋南北）かほよ（玉澤才次郎）師直、九太夫（中村助五郎）戸名瀬（嵐富之助）力彌、おかる（佐野川市松）若狹助、義平（大谷廣次）平右衞門、鄕右衞門（津打門三郎）勘平、お石、おその（尾上菊五郎）本藏、定九郎（松本幸四郎）彌五郎、與一兵衞女房（市村羽左衞門）判官（市村龜藏）由良之助（坂東彥三郎）の役割であつた。

兩座とも當つたので、同年八月から中村座でも同じく上演した。この時は――直義、喜多八（市川門太郎）師直（中島三甫右衞門）伴內（中村平十郎）右馬之丞（市川團五郎――いろは評林に新四郎とあるは誤り）藥師寺（市川庄五郎）彌五郎（市川金三郎）若狹助（歌川四郎五郎）判官（市川八百藏――いろは評林に松島とあるは誤り）かほよ（岩井喜代太郎――いろは評林に嵐玉柏とあるは誤り）小野寺幸內、與一兵衞（市川新四郎）與一兵衞女房おさわ（澤村源次郎）おかる（中村粂太郎）九太夫（中島勘左衞門）定九郎（澤村喜十郎）了竹（市川團太郎）伊吾（北國屋京五郎）本藏、鄕右衞門（市川宗三郎）戸名瀨（澤村小傳次）小浪（瀧中富瀧）おその（瀨川菊次郎）お石（芳澤あやめ）力彌（菊川大吉）勘平（中村七三郎）平右衞門（中村傳九郎）由良之助（澤村長十郎）義平、大館熊之助（市川海老藏）の役割であつた。この大館熊之助といふのは、原作の大鷲文吾、實說の源吾である。

京都では、寬延二年三月の北側芝居が最初だつた。この時に役割は以下の通り――小浪（大和山仙助）藥師寺、伴內、了竹（篠塚惣三郎）定九郎（篠塚磯五郎）彌五郎（大和屋甚兵衞）九太夫（笠屋又九郎）鄕右衞門、與一兵衞、伊吾（坂東助三郎）戸名瀨（中村八重八）右馬之丞（中村四郎五郎）力彌（榊山四郎太郎）若狹助、勘平、與一兵衞女房（竹中兵吉）お石、おその（淺尾元五郎）師直、本藏、平右衞門　嵐七五郎）判官、義平（榊山小四郎）かほよ（中村喜代三郎）おかる（中村松兵衞）由良之助（中村十藏）。

これ以後、日本國中の劇場で上演された度數を計つたら、實に夥しい數であらう。又これから先も度々上演されるであらう。昭和三年には日本の俳優に依つて、實に露西亞の劇場にまで上演されたのだ。

扉は寶曆五年五月森田座所演、十段目の櫓下番附。解說挿入の繪番附は、蜂の巢と三段目道行の初演の時のもの。

假名手本忠臣藏

大序　鶴ヶ岡八幡宮の場

竹本連中

役名——足利直義公。高武藏守師直。鹽冶判官高定。桃井若狹助安近。石堂右馬之丞。鹽谷室、かほよ御前。

本舞臺、三間の間、鶴ヶ岡八幡、段葛の石段、後、二つ引き龍の紋染めたる幕を張り、左右とも同じく白張り紋付けたる幕、石の玉垣、下の方へ銀杏の大樹、同じく吊り枝、眞中に直義、金烏帽子、裝束にて床几にかゝり、左の方へ師直、立烏帽子、大紋の形、右の方へ右馬之丞、立烏帽子、大紋の形。平舞臺の眞中へ、唐櫃を直し、上の方に判官、烏帽子大紋、下の方、若狹助、烏帽子大紋、左右に烏帽子大紋の大名二人づゝ扣へ、その脇、半素袍侍ひ二人、仕丁四人扣へ、この見得、吉例の通り、天王立にて幕明く。

ト東西々々と聲をかける事よろしくあつて

〽嘉肴ありと雖も食せざれば、その味ひを知らずとは、國治まつてよき武士の、忠も武勇も隱るゝに、例へば、星の晝見えず、夜は亂れて現はるゝ、例を爰に假名書の、〽太平の世の政事、頃は曆應元年二月下旬、足利將軍尊氏公、新田義貞を打ち滅ぼし、京都に御所を構へ、德風四方にあまねく、萬民草の如くにて、靡き從ふ御威勢、國に羽を伸す鶴ヶ岡、八幡宮御造營成就し、御代參として御舍弟足利左兵衞督直義公、鎌倉に下着なりければ、在鎌倉の執事、高野武藏守師直、御膝元に人を見下ろす權柄眼、御馳走の役人は桃の井播磨守が弟、若狹助安近、伯州の城主鹽冶判官高定、馬場先に幕打めぐらし、威儀を正して相詰むる、直義仰せ出さるゝは。

直義　如何に師直。

師直　ハア、。

直義　この唐櫃に入れ置かれしは、兄尊氏に亡ぼされし新田義貞、後醍醐天皇より賜はつて着せし兜、敵ながらも義貞は、淸和源氏の嫡流、着捨ての兜と云ひながら、其

まゝにも打捨て置かれず、當社の御藏に納めよと、兄尊氏の嚴命なり。

〽嚴命なりと宣へば、武藏守承はり

師直　こは思ひ依らざる御事。新田が淸和の末なりとて、着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名、淸和源氏はいくらもござる。それに何ぞや、義貞ばかりの兜を、大事さうに塚を築けなんぞとは、御仰せとも覺え申さず、その御評議、然るべからず。

〽遠慮もなく言上す。

若狹　イヤ、左樣にては候ふまじ。この若狹助が存ずるに、これは全く尊氏公の御計略。新田に徒黨の討ち漏らされ、御仁德を感心し、攻めずして降參さする御手段と存ずれば、無用との御評議は、卒爾かと存じまする。

師直　默らつせえ若狹どの、出頭第一の師直に向つて、卒爾とは何の癡言。義貞討死の砌りは大童、死骸の側に落ち散つたる、兜の數は四十七、どれがどれやら解らぬ兜奉納したその後で、そでねえ時は大きな恥だ。なま若輩な身を以て、お尋ねもなき評議立て。すッこんでお居やれ。

〽御前よきまゝ出るまゝに、杭とも思はぬ詞の大槌、打ち込まれて急き立つ色目、鹽冶引取つて。

判官　こは御尤もなる御評議ながら、桃井どのゝ申さるるも、治まる御代の軍法、これ以て捨てられず、この上は、双方全たき直義公の御賢慮、偏へに仰ぎ奉る。

〽申し上ぐれば御機嫌あり。

直義　さもあらんと存せしゆゑ、所存あつて鹽冶が妻を、召寄せ置けよと兄の仰せ。かほよは如何いたせしぞ。

有馬　ハッ、君の上意の通り、兼ね／＼召寄せ置きましてござりまする。

大名　遠侍ひに扣へつらん。これへと申せ。

雜式　ハッ。

ト雜式一人、花道へ向つて

鹽冶判官の內室かほよどの、君のお召し、急いでこれへ。

ト揚げ幕にて

かほ　ハア、。

〽はつと答への程もなく、馬場の白砂素足にて、裾で庭はく裲襠は、神の御前の玉はばき、玉もあざむく薄化粧、鹽冶が妻のかほよ御前、遙か下がつて畏まる。

トこの文句のうち、かほよ、裲襠衣裳にて出で來り、花道の中程に住ふ。師直これを見て、思ひ入れ。

〽女好きの師直、其まゝ聲かけ。

ト師直、衣紋を作り思ひ入れあつて

師直　これは〳〵、かほよどの、最前よりさぞ待ち遠。御大儀々々々。サヽ、これへ〳〵。

〽近う〳〵と取持ち顔、直義御覽じ、

直義　召出す事餘の儀にあらず、往時元弘の亂に、後醍醐帝都にて召されし兜を、義貞に賜はつたれば、最後の砌り、着つらん事疑ひはなけれども、その兜誰れあつて見知る者なし、その頃は鹽冶が妻は、十二の內侍の其うちにて、兵庫の司の女官と聞く。さすれば見知りありつらん。覺えあらば兜の本阿彌、目利き〳〵。

〽嚴命さへも和らかに、お受け申すも叉嫋やか。

かほ　これは冥加に餘る君の仰せ　それこそは私しが、朝夕手馴れし御着の兜、義貞どの拜領にて、蘭奢待と云ふ名香を添へて賜はる、お取次ぎは即ちかほよ。その時の勅答には、人は一代名は末代、すは討死せん時、この蘭奢待を思ふ儘、內兜に焚きしめ着るならば、鬢の髪に香を留めて、名香かをる首取りしと云ふ者あらば、義貞が最期と思し召されよの、お詞よもや違ふまじ。

〽申し上げたる口元に、下心ある師直は、小鼻いからし聞き居たる、直義詳しく聞し召し。

直義　詳らかなるかほよが返答、さもあらんと思ひしゆゑ、落ち散つたる兜四十七、その唐櫃に入れ置いたり。ソレ見分けさせよ。

大名　ハツ、只今君の仰せの通り、御前に於てかほよどの、兜の眞僞改め召されい……ソレ。

雜式　ハツ。

〽御上意の下侍ひ、屈むる腰の海老錠を、明ける間遲しと取出だすを、

ト此うち、かほよ、舞臺へ來て、唐櫃の側へ來る。半素袍の侍ひ二人立ちかゝり、櫃の錠を明け、櫃より兜をいろ〳〵出し、かほよに見せる。

〽怯めず臆せず立ち寄つて。

トこれより兜を顔世に見せる事あつて

〽見れば所も名にし負ふ、鎌倉山の星兜、とつぱい頭、獅子頭、さて指し物は家々の、流義々々によるぞかし、或ひはちよつぺい筋兜、鍛のなきは弓の爲、その主々の好みとて、數々多きその中に。

トかほよ、段々兜を改める事あつて、龍頭の兜を見付け



天保六年八月森田座上演　四世坂東三津五郎の師直



澤村訥升の判官　坂東玉三郎のかほよ

〽五枚兜の龍頭、これぞと云はぬ其うちに、ぱつと香りし名香は。

かほ　これこそかほよが手馴れし、義貞どのの兜でござりまする。

〽差出せば。

トかほよ、兜を三方へ載せ差出す。右馬之丞取つて直義に見せる。

〽左様ならめと一決し。

直義　鹽冶、桃井兩人は、義貞の兜、當社の御藏へ納めてよからう。かほよ、大儀。

〽かほよにお暇賜はつて、段葛を過ぎ給へば、鹽冶、桃井兩人も、打連れてこそ入りにける。

ト直義先に大名、判官、若狹助、仕丁附添ひ、上の方へ入る。師直、かほよ殘る。

〽後にかほよは繼ぎ穗なく。

かほ　師直さまは今暫し、御苦勞ながらお役目を、おしまひあつてお靜かに。お暇の出た此かほよ、長居は恐れ、左やうならば、私しは。

〽立ち上がるを。

師直　アイヤ〳〵、かほよどの……イヤ、今日のお役目、御苦勞にござる。呼び留め申したは、おてまへ樣に、ちと申し上げたい儀がござる。

かほ　何事でござりまする。

師直　イヤ、手前も兼ねて、歌道に心をゆだねますれば、吉田の兼好を師範と賴み、日々の狀通、其許樣へ屆けくれよと、問ひ合せのこの書狀。

ト本舞臺へ來り

なる。ならざるの御返事は、御口上でも苦しうない。かほよどの、如何でござる。

〽袂から袂へ入るゝ結び文、顏に似合はぬ樣まゐる、武藏鐙と書いたるを、見るよりはつと思へども、はしたなう恥かしめては、却つて夫の名の出る事、持ち歸つて夫に見せうか、いや〳〵それでは鹽冶どの、憎しと思ふ心から、怪我過ちにもならうかと、物をも云はず投げ返す、人に見せじと手に取り上げ。

ト師直、かほよの袂に結び文を入れる。かほよ、これを見て恟り。いろ〳〵思ひ入れあつて、師直へ投げ返す。師直、取り上げ見て

師直　戾すさへ手に觸れたりと思ふにぞ、我が文ながら捨も置かれず、……色よい返事聞くまでは、口說いて口



天保六年八月森田座上演　市川團三郎の若狹助

說いて口說き拔く、この度の鹽判冶官の大役、首尾よく勤めさせようと、また勤めさせまいと、この師直が心、たつた一つだ。かほよどの、なんとさうではあるまいか。

〽聞くにかほよが返答も、泪ぐみたるばかりなり、折柄來合す若狹助、例の非道と見て取る機轉。

ト下手より若狹助出て來り、これを見て咳拂ひをする。師直も悔りして、同じく咳拂ひをする。若狹助、兩人の眞中へ入り、思ひ入れあつて

若狹　かほよどの、まだ退出召されぬか。お暇出でて隙取るは、却つて上への恐れ。サヽ、お歸りなされい。

かほ　左樣なれば、御免なされて下さりませ。

トかほよ、これにて會釋して下手へ入る。師直、ムツとする。

〽さては彼奴氣取りしと、弱味を食はぬ高師直、

師直　ヤア、又しても出過ぎた一言。歸してよけりや身が歸す。かほよどのが、これにござつたは……なにサ、オオ、それ／＼、この度の鹽冶判官の大役、首尾よく勤めさせくれいとの、身共へのお賴み。そりやさうなくて叶はぬ筈。大身でさへその通り。……小身者だぞ。

ト若狹助、ムツとして、顏を見る。

いゝやサ、小身者に捨て知行、誰が庇で取らすと思ふ。この師直が口先たつた一つで、明日から五器提げうも知れぬ危ねえ身代。それでも武士と思ふぢやまで。

〽邪魔の返報憎て口、くわつと急きたつ若狹助、刀の鯉口碎くる程、握り詰めは詰めたれども、神前なり御前なりと、一旦の堪忍も、いま一言が生き死の、詞の先手。

ト此うち若狹助、無念の思ひ入れ、いろ／＼あつて、刀の柄を握り詰め、とゞ堪え兼ねて「ムウ」と立寄る。

呼び　この時奧にて

還御。

師直　還御だ。

若狹　ハツ。

〽お先を拂ふ聲々に、詮方なくも期を延す、無念は胸に忘られず、惡事悖つて運強く、切られぬ高師直を、明日の我が身の敵とも、知らぬ鹽冶が後押へ、直義公は悠々と、步御なり給ふ御威勢。

ト此うち下がり羽になり、上手より直義、これに褄折り傘をさしかけ、大名大勢、半素袍侍ひ、仕丁大勢附添ひ、後より判官、附いて出て、この人數花道へかゝる。若狹助、無念のこなし。判官、心得ぬ思ひ入れに

て、師直へ目禮し、また若狹助へ目禮して行かうとする。直義皆々向うへ入る。下がり羽打ち上げ、舞臺に三人殘り、師直、若狹助を大紋の袖にて蹴上げる。鹽治、目を附ける。

〽人の兜の龍頭、御藏に入るゝ數々も、四十七字のいろは分け、假名の兜を和らげて、兜頭巾の綻びぬ、國の掟ぞ。

トこの文句のうち、若狹助、詰め寄る。師直また裾にて蹴上げる。判官この中へ入つて、三人見得よろしく、三重にて

拍子幕

二段目　桃井館の場

役名――桃井若狹助安近。本藏妹、水無瀨。同娘、小浪。大星力彌。加古川本藏行國。

竹本連中

本舞臺、三間の間、中足の二重。正面、襖たてきり、上手、一間の障子屋體。下手、柴垣、所々に春の草花。よき所に誂らへの仕掛け物の松の臺幹。桃井館庭先の體よろしく、調べにて幕明く。

〽空も彌生の黄昏時、桃井若狹助安近の、館の行儀掃き掃除、お庭の松も幾千代を、守る館の執權職、加古川本藏行國、年も五十路の分別盛り、上下ためつけ書院先、扣へゐるとも白洲の下人。

ト白囃子になり、橋がゝりより水打ち奴三人、竹箒、手桶を持ち出て來り、庭先の掃除よろしく

奴一　なんと關内、この頃お上には、でつかちねえお拵らへ。ありやア一體、どういふ譯だ。

奴二　オヽ、その譯といふは、今度都からのお客人、昨日鶴ケ岡の八幡樣へ御社參で、夥しいお物入りよ。

奴一　ハヽア、それで解つた。今度のお物入りの金があつたら、この可助も、名を替へて樂しまうにたア。

奴三　こりやア珍らしい。なんと替へるのだ。

奴一　角助と替へて、胴を取つて見る氣よ。

奴三　生ア云やアがるせ。

奴二　てめえ、昨日の事を知らねえか。

奴一　氣樂な奴だなア。べら坊め。昨日鶴ケ岡で、おらが殿樣は不首尾とやらであつたさうだが、また師直めが、

大きな恥をかゝせたといふ、奴部屋の噂よ。
奴二　又、おらが殿樣を、やり込めやアがつたのであらう。
〽さがなき口々。
　ト調べにて、上手より本藏、上下、大小にて出て來り
本藏　ヤイ〳〵、何をザワ〳〵とかしましい。お上の取沙汰。殊に御前の御病氣、お家の恥辱になるとあれば、本藏聞き流して置くべきや。爰では下郎の嗜なみ、掃除の役目しまうたら、皆行け〳〵。
三人　ハッ。
　ト橋がゝりへ入る。本藏、思ひ入れ。
〽和らかに、女小姓が持ち出づる、煙草輪を吹く雲を吹く、廊下おとなふ衣の香や、本藏がほんざうの一人娘の小浪御寮、叔母の水無瀨と諸共に、しとやかに立出づれば。
　ト上手より小浪、跡より水無瀨、出で來り、下手へよろしく住ふ。本藏、兩人を見て
本藏　コリヤ〳〵、兩人とも何事ぢや。御前のお伽は申さいで、自身の遊びか、不行儀千萬。
　トきつと云ふ。兩人、思ひ入れあつて
小浪　イエ〳〵、今日は御前樣にも、殊の外の御機嫌、今スヤ〳〵とお休み。それで叔母樣と。

水無　イヤモシ、兄上、先程御前のお物語り。昨日小浪が鶴ヶ岡へ、御代參の歸るさに、殿若狹助さま、高師直どのと詞爭ひ遊ばせしとのお噂、誰が云ふとなくお耳に入り、それは〳〵きついお案じ。兄本藏、仔細詳しく知りながら、自らに隱すのかやとお尋ね遊ばすゆゑ、小浪に樣子を尋ぬれば、これもわたしと同じ事、何も樣子は存じませぬとのお返事。御病氣の障り、お家の恥になる事なり
本藏　ア、コレ〳〵水無瀨、それ程の御返事、なぜ取繕らうて申し上げぬ。御主人は生得御短慮のお生れつき、なんの詞爭ひなどゝは、女童の口癖。一言半句にても、舌三寸の誤りより、身を果すが刀の役目。其方も身共が妹でないか。それ程の事に氣が附かぬか。嗜なみ居らう……ハヽヽヽヽ、なんの、別してもない事を……よしよし、奧方のお心休め、直ぐにお目にかゝるであらう。
〽立ちあがる折こそあれ、當番の役人罷り出で。
　ト下手より上下の侍ひ出て來り
侍ひ　ハッ、申し上げます。大星由良之助の御子息、大星力彌さま、お出でござりまする。
本藏　ハ、ア、お客人御馳走の申し合せ、判官どのよりの

お使ひならん。これへと申せ。

侍ひ　ハツ。

　ト引返して入る。本藏、思ひ入れあつて

本藏　コレ、水無瀨、其方は御口上受取り、殿へその通り申し上げられよ。お使者は力彌、娘小浪と云ひ號けの聟どの、御馳走申しやれ。先づ奧方へ御對面。

〽云ひ捨て一間へ入りにけり。水無瀨は姪を側近く。

　ト本藏入る。水無瀨、思ひ入れあつて

水無　ナウ小浪、兄上の堅くろしいは常なれど、いま仰しやつた御口上、受取り役は其方にとありそなところを、水無瀨にとは、わしが心とはきつい違ひ。そもじも又、力彌どのゝ顏見たかろ、逢ひたかろ。わしに代つて出迎や。よいか、よいか。

〽と問ひ返せば、あいとも否とも返答は、赤らむ顏のおぼこさよ、叔母は小浪の心を汲み。

アイタ、、、小浪、脊を押してたも。

　ト小浪、恟りして

小浪　これは、なんと遊ばしました。

〽と、うろたへ騷げば。

水無　今朝からの心遣ひで、また持病の癪が差込んで……これはどうもお使者には逢はれぬ……アイタ、、、其方大儀ながら、御口上も受取り、御馳走も申してたも。主と持病には、勝てぬ／＼。アイタ、、、。

〽そろ／＼と立ちあがり。

コリヤ小浪、隨分御馳走申しや。シタガ、餘り御馳走過ぎて、大事の口上を忘れまいぞ。わたしも力彌どのに、アイタ、、、

〽逢ひたからうと叔母水無瀨は、氣を通してぞ奧へ行く、小浪は跡を伏拜み／＼。

　ト小浪、いろ／＼思ひ入れあつて

小浪　エヽ、忝ない。日頃戀しい床しい力彌さま。

〽逢はゞどう云ほ斯う云ほと、娘心のとき／＼と、胸に小浪を打ち寄する、疊ざはりも故實を正し、入り來る大星力彌、また十七の角髮や、二つ巴の定紋に、大小立派爽かに、流石大星由良之助が、子息と見えしその器量、靜々と出で來れ。

　ト向うより力彌、上下大小にて出で來り、直ぐに舞臺へ來て、思ひ入れ。

力彌　誰そお取次ぎ、賴み存ずる。

〽慇懃に相述ぶる、小浪ははつと手をつかへ、おつと見

交す顏と顏、互ひの胸に戀人と、物も得云はぬ赤面は、梅と櫻の花角力、枕の行司なかりけり、小浪はやう〳〵胸押靜め

小浪　これは〳〵御苦勞千萬、ようこそお出でなされました……只今の御口上、受取る役は私し、その口上の趣きを、お前の口からわたしの口へ、直ぐに仰しやつて下さりませ。

〽と摺り寄れば身を扣へて。

力彌　これは〳〵不作法な。總じて口上受取り渡しは、行儀作法第一なり。

〽疊を下がつて手をつかへ。

主人鹽冶判官より、若狹助どのへ御口上。明日は管領直義公へ、未明より相詰め申す筈のところ、定めてお客人も早々に御出であらん。然らば判官 若狹助 兩人は、正七ツ時にキツと御前へ相詰めよと、師直さまより御仰せ、萬事間違ひのなきやうに、今一應お使者に參れと、主人判官申しつけ候ふゆゑ、右の仕合せ、この通り若狹助さまへ、御申し上げ下さるべし

〽水を流せる口上に、小浪はウツカリ顏見惚れ、とかう答へもなかりけり。

ト奥にて

若狹　聞いた〳〵。使者大儀。

〽と若狹助、一間より立出でゝ。

ト奥より若狹助、羽織袴大小にて、近習附添ひ、出で來り

昨日お別れ申してより、判官どのに間違うてお目にかからず、……成る程、正七ツ時に、貴意得奉らん、委細承知仕る、判官どのにも御苦勞千萬と、よろしく傳へくれくれよ。

力彌　ハツ……然らばお暇申し上げん。……ナニ、お取次ぎの女中、御苦勞に存ずる。

〽靜々立つて見向きもせず、衣紋繕ろひ立歸る。

ト力彌、思ひ入れあつて向うへ入る。

〽本藏一間より立ち代り。

ト本藏、上手より出で來り

本藏　殿、これに御入り遊ばしまするか……いよ〳〵明朝は、正七ツ時に御登城、御苦勞千萬に存じまする。今宵も早九ツ、暫らく御まどろみ遊ばしませう。

若狹　成る程〳〵……イヤナニ本藏、其方にちと用事あり、密々の事、小浪を奥へ。



岩井粂三郎の力彌　岩井紫若の小浪

本藏　ハツ……コリヤ〳〵娘、用事あらば手を打たう。奥へ行け〳〵。

〽と娘を追ひやり、合點のゆかぬ主人の顔色と、お側へ立寄り。

　ト小浪、會釋して奥へ入る。本藏、摺り寄り

先程より伺ひ申さんと存ぜしところ。委細具さに、御仰せ下さるべし。

〽差寄れば、にじり寄り。

若狹　本藏、今この若狹助が云ひ出す事、何に依らず、畏まり奉ると、二言と返さぬ誓言聞かう。

本藏　ハツ、これは〳〵、改まつたる其お詞、畏まり奉るではござりますれども

若狹　武士の誓言は、ならぬと云ふか。

本藏　アイヤ、さに非ず。先づ委細とつくりと承り

若狹　仔細を云はせて、後で意見か。

本藏　イヤ、その儀は。

若狹　詞を背くか。なんと〳〵。

本藏　ハツ〳〵。

〽はつとばかりに差俯向き、暫し詞もなかりしが、胸をきはめて差添抜き、片手に刀拔き出だし、てうてう〳〵と金打し。

本藏が心底、斯くの通り。止めも致さず、他言もせぬ。先づ思し召しの一通り、お急きなさらず本藏めが、胃の腑に落ちつくやう、とつくりと承らん。

若狹　一通り語つて聞かせん。

　トきつとなる。合ひ方になり

管領足利左兵衛督直義公、鶴ヶ岡造營ゆゑ、この鎌倉へ御下向。御馳走の役は鹽冶判官、某兩人承るところに、尊氏將軍より仰せにて、高師直を御添へ人、萬事彼れが下知に任ぜ、御馳走申し上げよ、年配といひ、諸事物馴れたる侍ひと、御意に隨ひ勝に乘つて、日頃の我まま十倍增し。都の諸武士並ゐる中、若年の某を見込み雜言過言。眞二つにと思へども、お上の仰せを憚り、堪忍の胸を押へしは幾度。明日は最早料簡ならず、御前にて恥面かゝせる武士の意地、その上にて討つて捨つる。必らず留めるな……日頃某を短慮なりと、奥を始め其方が意見、幾度か胸にとつくと合點なれども、無念重なる武士の性根。家の斷絶、奥が歎き、思はんにてはなけれども、刀の役目、弓矢神への恐れ、戰場にて討死はせずとも、師直一人討つて捨つれば天下の爲、家の恥辱に

は替へられぬ、必らず〳〵短氣ゆゑに、身を果す若狹助、猪武者よ、うろたへ者と、世の人口を思ふゆゑ、汝にとつくと打明かすぞよ。

〽思ひ込んだる無念の涙、五臟を貫く思ひなる、横手を打つて。

本藏　シタリ、ムウ、よう譯を仰しやつた。よう御料簡をなされた。この本藏なら今までに、料簡はならぬところ。

若狹　ヤイ本藏、ナ、なんと云ふ。今まではよう料簡した、堪忍したとは、わりやこの若狹助を蔑するか。

ト　きつと云ふ。本藏、こなしあつて

本藏　これはお詞とも覺えず、冬は日蔭、夏は日陽、除けて通れば門中にて、行き違ひの喧嘩口論、ないと申すは町人の譬へ。武士の家では杓子定規、除けて通せば方途がないと申すのが、本藏めが誤まりか。お詞蔑いたさぬ心底、御覽に入れん。

〽御傍らの小さ刀、拔くより早く書院なる召替へ草履、片足片手の早娭刃、とつくと合せ緣先の、松の片枝すつぱと切つて、手ばしこく鞘に納め。

ト　松の枝を切つて扇に載せ、若狹助の前へ出し

サア殿、まづこの通り、スッパリと、遊ばせ〳〵。

若狹　ト若狹助、ニッタリ笑ひ、思ひ入れあつて

云ふにや及ぶ。

ト　九ツの時計鳴る。

〽人や聞くと、あたりに氣を附け。

本藏　今夜は未だ九ツ。くつたりと一休み。枕時計の目覺まし、本藏が仕掛け置く。早く〳〵。

若狹　ムウ、聞入れあつて滿足せり。奥にも逢うて餘所ながら暇乞ひ……本藏々々、面を上げい。

ト　本藏、若狹助の顏を見る。

もう逢はぬぞよ。

〽さらば〳〵と云ひ捨てゝ、奥の一間へ入り給ふ。

ト　若狹助、ツイと奥へ入る。本藏、跡見送り

〽武士の意氣地は是非もなしと、御後影見送つて、緣先へ走り出で。

本藏　本藏が家來、馬曳け……早く〳〵。

ト　向う揚げ幕の内にて轡の音する。

〽云ふ間もなく、股立ちしやんと凜々しげに、御庭に曳き出せば。

ト　向うより絹羽織の侍ひ二人、紺看板の中間二人、馬を曳き、一散に出て舞臺へ來る。

〽縁よりひらりと打乘つて。
ト本藏、馬に乘り、キッと思ひ入れ。
師直が館まで、續け〳〵。
〽續けや續けと乘り出す。
トこの時、奥より、水無瀬、小浪、出て來り、馬の前に立ちふさがり。
水無　こりやどこへ……始終の樣子は聞きました。年にこそよれ本藏どの、御主人に御意見も申さず、合點がゆきませぬ。留めまする〳〵。
〽轡に縋り止むれば。
本藏　ヤア、小差出た。主人のお命お家の爲を、思ふゆゑにこの仕儀、必らず事、殿へ沙汰いたすな。お耳に入つたら二人は勘當。……コリヤ〳〵、家來ども。道にて始終を云ひつけん。そこ退け兩人。
ト鞭にて兩人を拂ひ退ける。兩人思ひ入れあつて
兩人　イヤ〳〵、やらぬ〳〵。
ト本藏、キッとなつて
本藏　エヽ、面倒な。
〽鐙の端、一當て發矢と當てられて、うんとばかりに仰向に反るを、見向きもせず。
家來、續け。
ト向うを見込み、キッと見得。小浪、水無瀬を介抱する
〽追ひ立て打ち立て力足、踏み立てゝこそ。
ト三重へ時の太鼓をかむせ、本藏、一散に向うへ入る。よろしく　　幕

三段目

足利城外の場
同　殿中の場

役名――高武藏守師直。鹽冶判官高定。桃井若狹助安近。加古川本藏。鷺坂伴内。

竹本連中

本舞臺、上の方へ寄せて金物を打つたる白木造り、結構なる四足門、畫心に飾り、扉開きあり、舞臺一面、練り塀の道具、幕。すべて足利家大手の模樣よろしく、時の太鼓にて幕明く。
〽足利左兵衞頭直義公、關八州の管領と、新たに建てし御殿の結構、大小名美麗を飾る曠れ装束、鎌倉山の星月

夜、袖を連ぬる御馳走に、お能役者は裏門口、表御門はお客人、御もてなしの役人衆、明七ッ時の御登城、武家の威光ぞ輝きける。

向う　はいほう。

〽入り來るは、出頭一の高師直、家來は役所に殘し置き、下部僅かに先を拂はせ、主の威光の召しおろし、鶴の眞似する鷺坂伴內。

ト向うより誂らへの乘り物、桐の紋附けたる箱提燈四人、定役の陸尺四人。伴內、大小、高股立ちにて、刀を持ち出て來り、直ぐに舞臺へ來り

伴內　ソレ、お乘り物。

皆々　ハ、ア。

トよき所へ乘り物を下ろす。伴內、乘り物の側へ來て

伴內　イヤナニ我が君、今日の御前表は、上首尾々々々、イヤモ、鹽冶で候ふの、桃井で候ふのと、日頃はとつばさつぱとひしめけども、行儀作法は犬ころを屋根へ上げたやうなもので、さりとは〳〵腹の皮。イヤ、それにつき、兼ね〴〵鹽冶が妻かほよ御前、未だ殿へ御返事いたさぬ由。お氣にはさへられな。器量はよけれど、氣が叶はぬ。なんの鹽冶づれと、當時出頭第一の師直公と。

ト云ひかゝる。乘り物の中にて制す心。

ハ、ハッ、ナニサマ〳〵……併し、これまでは歌の御師範に事よせ、度々申し送られても、よき御返歌もなし、さりながら誠御前が嫌ならば、夫に仔細を申す筈。夫に云はぬはまだしもの事……ハ、ッ、成る程〳〵、イカサマ、御意でござりまする。

〽主從頷き話し合ふ折もあれ、見附けに扣へし侍ひ、周章しく走り出で。

トばた〳〵になり、向うより侍ひ、出で來り

侍ひ　申し上げまする。桃井若狹助の家來、加古川本藏、師直公へ御直談申し上げたいと、早馬にて駈けつけ、家來大勢召し連れたる體。如何仕りませうな。

伴內　ヤア、早馬にて大勢を召連れて參つたとは……今日御用しげき師直公へ、直に對面とは推參千萬。某が參り、追ひ返してくれませう。

トまた乘り物の中にて呼ぶ。思ひ入れあつて

ハッ〳〵……エ、、成る程〳〵、一昨日鶴ヶ岡勅使御參詣の折柄、あの若輩の若狹助、おのれが粗忽を棚へ上げて、あなたへの意趣晴らし、加古川本藏めに云ひつけて、主人が鼻を挫がん計略。エ、、成る程〳〵……然らばこ

れへ呼び出し、息の根を留めてくれん。ソレ、桃井の使者、これへと申せ。

侍ひ　ハツ。

ト引返して向うへ入る。

ソレ、家來ぬかるな。

皆々　ハツ。

ト捨ぜりふよろしくあつて

伴内　鬼でも來い。

〽主從刀の目釘をしめし、手ぐすね引いて待ちかけ居る、詞に隨ひ加古川本藏、衣紋つくろひ悠々と、下部に持たせし臺の物、目通りに並べさせ、遙か下がつて。

トこれにて向うより、本藏、麻上下、大小にて、箱提灯を持たせ、吊り臺に載せし進物大分、家來大勢連れ出て來り、直ぐに舞臺へ來り下手へ平伏なし

本藏　ハツ、憚りながら師直公へ申し上げ奉りまする。主人若狹助儀、この度の大役仰せつけられ下さる段、武士の面目、身に餘り、有り難う存じ奉りまする。まだ若輩なる若狹助、何の作法も覺束なく、如何あらんと存ずるところに、師直公萬事御師範遊ばされ、首尾よく御用相勤まりまするも、全く主人の手柄にあらず、皆師直公のお執成し、主人を始め奧方、一家中の我れ〳〵までも、有り難う存じまする。さるによつて、近頃些少の至りには候へども、右御禮の爲、一家中より贈り物、御受納下され候へば、有り難う存じまする。

ト云へども伴内、素知らぬ顏にて居るゆゑ、本藏、包み金を伴内の袂へソツと入れる。

何分お取次ぎ、偏へに頼み奉る。

〽不審さうにそつと取り。

伴内　アハヽヽ。イヤ、これは〳〵……然らばこれなる目錄を、讀み上げませうか。

ト件の目錄を開き

目錄、一つ、卷き物三十本、黃金三十枚、若狹助奧方。一つ、黃金廿枚、家老加古川本藏、同じく拾枚、番頭。同じく拾枚、侍ひ中。

〽主從顏を見合せて、祭りの延びし六月の、晦日を見るが如くにて、手持ち無沙汰に見えにける。

ト乘り物の方へ目錄を出し見せ、よろしく思ひ入れあつて

これはハヤ、痛み入つたる仕合せ。誠にはハヤ若狹助どのが、元來御發明と申し、それに續いて奧方始め御家老

の本藏どの、侍ひ一同と申し、御丁寧なる儀でござる……イヤ又、只今は身共まで御心配下されて、痛み入つたる仕合せでござる。

ト また乘り物の中にて呼ぶ思ひ入れ。伴内こなしあつて

ハ、ハツ〳〵。

ト 此方へ來り

イヤナニ加古川どの、主人の申しまするは、御進物の品、辭退いたさば、却つてお志しを背くと申し、第一大きな失禮ゆゑ、この度は取納めまする。イヤモウ、御主人が御主人なら、御家來までがお心附かれたなさり方。ハハ、イヤナニ、本藏どの、途中でお茶さへエ、進ぜませぬ。

〽手の裏返す挨拶に、してやつたりと猶も手をつき。

本藏 エ、有り難きそのお詞。何を申すも、日頃若輩なる主人にござれば、この上ともに、よしなにお指圖の程、偏へに願ひ上げまする。然らばその品々、お納め下されうとや。これと申すも伴内どの、段々のお執成し、千萬忝なう存じまする。

伴内 ソレ、家來ども、進物の品々、取落しのないやう、心いたしたか。

大勢 心得ましてござりまする。

本藏 最早七ツの刻限なれば、拙者はお暇仕る。

ト 乘り物の中にて呼ぶ。思ひ入れあつて

伴内 ハツ〳〵。エ、承知仕りました。

ト 此方へ來り

主人師直公の御意には、貴殿にも今日のお座敷、座並び拜見なされいとの仰せでござる。

本藏 有り難う存じますれど、陪臣の拙者なれば、御前の恐れ、その儀は。

ト また乘り物の中より呼ぶ。

伴内 ハア〳〵……エ、成る程〳〵、承知仕りました……その儀は苦しうござらぬ。主人師直が御同道いたせば、誰が點の打ち手がござらう……また若狹助どのにも、やがて御登城でござらうゆゑ、それまでは拙者が詰所で、サ、お手を取れとの仰せでござる。サ、、平に〳〵。

本藏 左樣御意下されまするを、否みまするも無禮。然らばお供仕りませう。先づお先へ。

伴内 サ、斯うお越し下されませい。

〽金で面張る算用に、主人の命も買つてとる、二一天作

算盤の、桁も違へぬ白鼠、忠義忠臣忠孝の、臣は一筋眞直に、打連れてこそ。
本藏どの、敷居が高うござる。
〽入りにける。

トこれにて乘り物を立たせ、伴内、本藏を連れ、皆々門の中へ入る、時の太鼓を打ちあげ、知らせにつき、道具幕、切つて落す。

本舞臺、三間の間、向う一面に金襖、結構に飾りつけ、下手に大きなる衝立、右欄間一面に大御簾をかけ、所々に雪洞照らし、これと一時に花道へ欄間附きの長廊下セリ出し、舞臺雨落ちとも一面の黑塗りの高欄を出す。すべて足利館松の間の體、調べにてよろしく道具納まる。

〽脇能すぎて御樂屋に、鼓の調べ太鼓の音、天下泰平繁昌の、壽き祝ふ直義公、御機嫌斜めならざりける。

ト調べ續く。

〽若狹助は兼ねて待つ、師直遲しと御殿の内、奥を窺ふ長袴の、紐締め括り氣配りし。

ト早舞ひになり、向うより若狹助、長上下にて出て來り、花道に止まり、キッとなつて上の方を見込んで

若狹　おのれ師直、眞ッ二つ。

〽刀の鯉口息を詰め、待つとも知らぬ師直主從、遠目に見附け。

トこのうち上の方より、師直、烏帽子素袍にて、後より伴内附添ひ出て來る。若狹助これを見て、直ぐにツカ〳〵と舞臺へ來て、キッとなる。兩人こなしあつて

師直　これは〳〵若狹どの、お早い御登城。イヤハヤ、我折りました。我れら閉口、閉口次手に貴殿に云ひ譯いたし、お詫び申す事がござる。若狹どの、改めて申さねばならぬ一通り。いつぞや鶴ヶ岡で、拙者が申した過言。

ト若狹助拔きかける。これにて師直、刀を投げ出し

コレ、この通りあやまつて居る。お腹が立つてござらう。御尤も。そこをお詫び。その時は、どうやらした詞の間違ひか、ツカ〳〵と申した。我れら一生の粗忽。武士が手を突き、眞平々々。イヤ、其許が物馴れたお人なりやこそ。外々の慌て者で見さつしやれ、この師直め眞ッ二つ。ヤレ、怖やの〳〵。有やうはその節、貴殿の後影、手を合せて拜みました。ハヽヽ。年寄ると益體々々。年に免じて御免々々、これサ、この通り、武士が刀を投げ

出し、あやまつて居る。これ程に申すのを、聞入れぬ貴殿でもない。兎角幾重にもあやまる〳〵。コレ、伴内、共々にお詫・申せ。

伴内　ハツ〳〵。主人の不調法は、拙者が不調法。眞平御免御免。

〽余が云はせる追従とは、夢にも知らぬ若狭助、力みし腕も拍子抜け、今更抜くに抜かれもせず、寢刃合せし刀の手前、差俯向いて思案顔、襖の蔭には本藏が、瞬きもせず守り居る。

ト兩人こなし。下手の衝立の蔭に、本藏出かゝり居る

師直　ナニ伴内、判官はまだ登城いたさぬか。

伴内　左樣にござりまする。

師直　なんで遲いぞ。若狭どのとは違ひ、さて〳〵不行儀。今に於て面出しせぬは、主が主なれば家老で候ふとて、諸事細心のつく奴が一人もない。イザ、若狭助どの、御前へお供いたさう。サヽ、御同道いたさう。

ト若狭助、キツとこなし。

この通り、師直、あやまつて居るぞ〳〵。コリヤ、茲な粹め、粹め、粹さまめ……伴内、ソレ、お手を取れ。

伴内　ハツ〳〵。

ト伴内、若狭助の側へ寄る。

若狭　イヤ、若狭助最前から、ちと心惡しうござるわえ。

師直　ナニ、お心惡しうござるとな。定めし腹痛か……ソレ、伴内、お脊中〳〵。

伴内　ハツ。

ト側へ寄る。突き退け

若狭　エヽ、さのみでもござらぬわえ

師直　然らば斯うなされ。少しのうちお寛ろぎ召され。御前表は、我れらがよいやうに申し上げる。伴内、一間へお供申せ。サヽ、お越しなされい〳〵。

〽主従寄つてお手車に、迷惑ながら若狭助、これはと思へど是非なくも、奥の一間へ入りければ、あゝもう樂ちやと本藏が、天を拜し地を拜し、お次の間にぞ扣へ居る。

ト若狭助、長上下を蹴立て、伴内附いて上手へ入る。本藏、衝立の蔭にて、よろしく思ひ入れあつて、下手へ入る。師直ホッとこなし。

師直　あの小倅め、本當に切る氣と見える。馬鹿ほど怖いものはないのう。

〽程もあらせず鹽冶判官、御前へ通る長廊下、師直呼びかけ。



寛政十二年七月市村座上演



嵐三八の師直　荻野伊三郎の判官

師直　ト師直、向うを見て
判官どの、遲い〳〵。
ト判官、舞臺へ來り、よき所に住ふ。
判官この、何と心得てござる。今日の登城、正七ツ時と申し渡したに、遲參でござる。嗜なまつせえ。

判官　遲なはりしは拙者が不調法。さりながら、御前へ出まするには、餘程の間と存ぜしゆゑに、斯く延引、眞平御免下さりませう。
ト下手より茶道一人、文箱を持ち出て來り

茶道　ハツ、鹽冶公へ申し上げまする。御家來早野勘平、御内室かほよさまのお便りとして、これなる文箱持參仕り、歌道御執心の師直公へ、御覽に入れたしとの事ゆゑ、持參仕つてござりまする。

判官　ナニ、奥かほよより文箱が參つた。エヽ、如何いたした事ぢや。御用繁多の師直公へ對し、失禮とや云はん。文箱は此まゝ返し遣はせ。

茶道　ハツ。
ト立ちかゝる

師直　ア、コリヤ、坊主待て。

茶道　ハツ。

師直　奥方かほよどのより、この師直へ文箱が參つたとなつ

判官　御出頭に對し、失禮の至り……文箱は此まゝ戻し遣はせ。

茶道　ハツ。
トまた行きかゝる

師直　ア、コリヤ坊主待て。かほよどのより文箱とあれば、苦しうない。これへ持て〳〵。

判官　ではござりますが、餘り粗忽。立てと申さば立ち居らぬか。

師直　コレサ〳〵、判官どの、如何いたしたものでござる。御内室より折角のお頼み……ア、解りました。斯樣でござる。手前、兼ねて歌道に心をゆだねますれば、先達て添削の儀、仰せ越されましたが、大方その問ひ合せでがな。ムウ……イヤ、まだ〳〵暫らく御猶豫あつても苦しうない。御休息召されい。コレ〳〵、珍才。其方は下がつて居れ。

茶道　ハツ。
ト師直へ文箱を渡し入る。師直、思ひ入れあつて

師直　さて、奥方はお心がけがよいて。手前どもも、この道にかけては、目はござらぬて。

判官　お取込みの中、近頃以て。
師直　イヤ／＼、火急な中が樂しみでござる。何だな。さぞお見事でござらう。
ト文箱を明け、短册を出し見て
「さなきだに重きが上の小夜衣、我がつまならぬつまなかさねそ」……「さなきだに重きが上の小夜衣、わがつまならぬ……」こりや新古今述懷の歌。この歌に、添削とは、ムウ。
〽我が戀の叶はぬしるし、さては夫に打明けしと、思ふ怒りを素知らぬ顏。
判官どの、おてまへ、この歌御覽じたらうな。
判官　イヤ、只今承はるが初めてでござる。
師直　左樣かな……イヤ、鹽冶どの、其許の奥方は御發明だ。ちよつとなされるお歌がこの通り。御手蹟と云ひ、御器量と云ひ、御自慢もなさるゝ筈だ。貴殿の奥方は十二の内侍のその中で、美人と聞えのかほよどの、その美くしい側を離れるが否さによつて、奥方ばかりが大切で、御前の方はお構ひないぢやまで。
〽當てこする雜言過言、あちらの喧嘩の門違ひとは、判官更に合點ゆかず、むつとせしが押し靜め。

判官　これは／＼、師直どのには先刻よりのお詞、御座興でござるか。又は御酒機嫌か。こりや御酒參つたと見えました。
ト師直思ひ入れあつて
師直　ハテ、いつ酒盛らしやつた。おてまへさまより御酒頂戴した覺えはないぞ。酒に飲んでも飲まいでも、勤める所はキツと勤める武藏守……おてまへ樣こそ御酒參つたか。奥方のお器量はよし、屋敷にばかりこびりついて、さいつさゝれつ酒盛り、それで御登城が遲くなられたか。若狹どのには疾に御登城召された。師直とても御用繁多だ。なんだ、その中へ、こりや奥かほよが手跡でござるなぞと、鼻毛らしい。それ程奥方が大事なら、御登城は御無用だ。おてまへ樣のやうな、屋敷にばかりこびりついて居る人を、井の内の鮒だと云ふ譬へがある。後學の爲だ。聞かつせい。
ト思ひ入れあつて
その鮒と云ふやつは、僅か三尺か四尺の井の中を、これより外に結構な所はないと心得て居るを、何か井戸替への時分に、釣瓶にかゝつて上がると、心ある人は、ア、可哀さうに、いつがいつまでもこんな狹い所に置くより

は、大川へ放してやるがよいと思うて、何がその鮒を、大川へ持つて行つて放してやると、サア鮒めが、狹い所から、廣い所へ出たものぢやによつて、嬉しい事は嬉しいが、何か途を失ひまして、彼方へヒヨロ〳〵、此方へヒヨロ〳〵、橋杭へ頭を打ちつけて、ピリ〳〵〳〵と死にまする。その鮒がよ、……コレ、おてまへ樣もその通りだ。あんな狹い屋敷を、これより外に結構な所はないと心得て居る者が、たま〳〵此やうな結構な所へ出さつしやるものだによつて、刻限違ひ、松の間あたりへ斜に構へてござると……イヤモシ鹽冶どの、お詰め所へお出でなされぬか。ハア、手前が詰め所はどれでござる。これはしたり、判官どの、お手前の詰め所はあれでござる。イヤサ、これでござる、あれでござると、彼方へマゴマゴ、此方へマゴ〳〵。とゞのしまひは、お見附けの、大盡柱へ頭を打ちつけて、ピリ〳〵〳〵と死にまする。その鮒がよ。鮒だ、鮒だ、鮒だ〳〵、鮒侍ひだ。

ト出放題、判官腹に据ゑ兼ねて。

判官　最前よりの雜言過言、狂氣召されたか。イヤサ、氣が違うたか師直公。

師直　默れ判官。出頭第一の師直に向つて、氣が違つてかとは、なんの痴言。氣も違はぬ。本性だ。本性ならお身やなんとする。

判官　すりや、今の雜言は、本性でお云やつたか。

師直　本性だ。

判官　ムウ。

ト拔きかけるを

師直　殿中だ。

ト中啓にて打つ。これにて判官ハッと思ひ入れあつて、チッと扣へる。師直ニッタリ、思ひ入れあつて、上手へ行きかゝるを

判官　師直、お待ちやれ。

ト袴の裾を踏まへる

師直　よさぬかえ。袴が破れるわえ。そこを退かぬか。

ト云へども、判官、無念の思ひ入れにて、チッと師直を見詰める。

して、呼び留めたのは、なんぞ用か。

判官　伯州の城主、鹽冶判官高定を、お身や鱗魚に譬へたな。

師直　オヽ、譬へた。譬へたら。ナ、なんとする。

判官　もうこの上は。

師直　ド、どうする。
判官　斯うする。
ト師直に切りつける。早舞ひになり、上下より大名、茶道、伴内も打交り出て支へる。この時、下手衝立の蔭より、以前の本蔵出て、判官を後より抱き留める。師直、伴内にもたれ、上の方へ逃げて行く。判官、持ちたる刀を師直に打ちつける。差し金にて、この刀、上手の柱へ立ち、この見得よろしく
〽上を下へと。
ト早舞ひにてよろしく　　拍子幕

三段目—裏

戸塚道行の場

浄瑠璃「道行旅路の花聟」清元連中

役名——早野勘平。腰元、おかる。鷺坂伴内。

本舞臺、松並木より田甫を見渡す景色の道具幕。驛路、馬士唄にて幕明く。
ト同じ鳴り物にて旅人の仕出し、上下より出て東西へ捨ぜりふにて入る。この間に鳴り物ツナギ、よろしくあつて、鹿島の事觸れ、烏萬度を擔ぎ、藥賣り、絆纏股引、箱をかたげ、伊勢參り、柄杓を持ち、脚絆、手拭をかぶり出て來る。上の方より金毘羅參り、白の行衣、天狗の面の附きし神酒箱を脊負ひ、白手甲、脚絆、白手拭、順禮、淺黄頭巾、笈摺を掛け、手甲脚絆がけ、納め札を襟にかけ、柄杓、同行二人の菅笠かたげ、皆皆出て來り、この人數双方舞臺にて出合ふ。
鹿島　ヤア、金毘羅參りに順禮どの。
金毘　後からござるは伊勢參宮。
伊勢　こなたは海道の藥屋さん。
ト此うち芥太夫、下手より出て
芥太　どうで日毎に合せる顔。
藥賣　金毘羅どのと附合つて、今夜は一緒に木賃宿。
芥太　この芥太夫も合ひ宿で、爰らが旅の憂晴らし。
五人　泊りで一杯やらかさうか。
ト此うち上の方より伴内、件の形の上へ合羽を引ッかけ、三度笠、胴金の脇差にて、手拭をかむり、草鞋にて出て來り
伴内　一杯やるなら仲間へ入らう。

トこなしあつて笠を取る。皆々見て

皆々　ヤ、貴殿は鷺坂伴内どの。

伴内　コリヤ。

トこなしあつて

我れらが主人の師直公より、仰せを受けし我れ〳〵ども。この通りに姿を變へ、この海道に徘徊いたすも、師直公へ刃向つて、手疵を負はせし鹽冶判官、扇ケ谷の屋敷は閉門、どうでしまひは縛り首になる高定なれば、いはゞ一國の主ゆゑ、この騷動を傳へ聞き、本國にある譜代の家來、如何なる事を仕出かすも計られずと、道中筋は忍びの役目。

順禮　それゆゑ我れ〳〵人目を忍び、或ひは順禮、鹿島の事觸れ。

藥賣　海道流す藥賣り、萬金丹や一角の

伊勢　利目はあさから暮れまでも、往來の人へ目を附けるは

芥太　人に知られた我れ〳〵ゆゑ、面を隱す芥太夫。

ト目鬘を取る事

鹿島　鷺坂氏が首ッ丈、惚れ込んでござる腰元おかる。

金毘　鹽冶が家中の勘平と、二人連れにて逐電と、鎌倉中の取沙汰ゆゑ。

伴内　お主の仰せと觸れ流し、おかるを連れて行く時は、日頃の望みも叶ふ道理。

順禮　叶つた時は我れ〳〵も、骨折り代はズッシリと。

鹿島　なんでもおかるを引ッ捕へ、玉を掴んだその上で

伊勢　あなた樣から人を以て、親元へは渡り引き。

藥賣　女房にするとの

皆々　手緊しい相談。

伴内　ソレ、早まつてこの通り、結納書まで持つて來た。

ト懷中より書き物を出し、見せる事。

藥賣　ナニ結納書。ハテ、念の入つた事だな。

芥太　併し、得てこんな時は、淨瑠璃觸れと間違ふものだ。

皆々　よく改めて見さつしやい。

伴内　成る程、皆が云ふ通り、小口をおれが開いて見よう。

ト開き見て

ヤア、矢ッ張りこれは、淨瑠璃名題。

皆々　東西々々。

伴内　道行旅路の花聟。淨瑠璃太夫、淸元延壽太夫、ワキ淸元家内太夫。同じく誰れ、三味線誰れ、上調子誰れ。

トよろしくあつて

相勤むる役人誰れ〳〵。右の役人殘らず罷り出で相勤めまする。

伊勢　それにつけてもおかるをば、首尾よく捕へる

皆々　その爲口上。

ト此うち伴内、皆々に囁き

伴内　手筈はよいかな。

皆々　左やう。

トこなし。山颪しになり、皆々こなしあつて橋がゝりへ入る。知らせにつき、道具幕切つて落す。

本舞臺、正面打抜き富士山の遠見、夜の景色、山裾に雲かゝりし體、松並木。芝山の景色、在體賤ヶ家の切出し、誂らへの通り、舞臺見附け芝山の張り物、置き舞臺を並べ、下手に清元連中の太夫座。舞臺前、菜の花、若草の土手板、日覆より櫻の吊り枝、すべて誂らへの通りに飾りつけ、掠めし山颪し、本釣り鐘にて納まる。

ト前彈きあつて

〽誰れも言へ、思案の外に踏み迷ふ、若氣の色に落人の。

ト掠めし雨車、風の音、向うバタ〳〵にて、おかる、振り袖衣裳、文金島田、腰元のしどけなき拵らへにて、手拭を頭へかけ、供奴の竹笠をかざし、後より勘平、着附け棲からげ、大小、腰に肩衣を包みし袱紗包みをまとひ、溜塗りの紙合羽をかざし、雨を凌ぎし體、ツカツカと出て來る。後より以前の伊勢參り出て、勘平へ立ちかゝり

伊勢　慥かに勘平。うぬを

トかゝるを、見事に投げて行きかゝる。これにておかる、起き上がる。チョンと空へ霞に灯入りの月を出す。兩人、顏見合せ、時の鐘の頭を打ち込む。

勘平　おかる。

かる　勘平さん。

勘平　コレ。

ト思ひ入れ

〽見るかや野邊は若草に、薄尾花は菜の花と、その忍び路の夜を籠めて、急げば濡るゝ花の雨。

トこの文句のうちに勘平、かざしゐたる合羽を脱ぎ、傍に置き、雨晴れし心にて、お輕は帶引上げなぞ、兩人よろしく、道行の振りある事。

〽晴れ間も丁度よい月は、人目包めど振り袖の、重ね扇

へ裏梅の、かをり慕うて歸る鴈、まだ花寒き春風に、柳の都あとに見て、氣もとつかはと吉田橋、墨繪の筆に夜の富士。

トよろしく兩人、振りあつて、掠めし風の音のあしらひ

〽枝の雫に寄り添うて、片身替りの濡れ事や。

トとゞ兩人、紙合羽を引き合ひ、もやひに着て、田舍源氏の畫面の見得になり

〽鳥の塒をたどり來る。

ト兩人よろしく、こなしあつて舞臺へ來る。風の音、時の鐘、太夫座の合ひ方をあしらひ、勘平こなしあつて

勘平　思ひがけなき館の騷動、聞くと其まゝ腰掛けから、鎌倉を立退いて、やう〳〵爰は戸塚の石高道、足は痛みはせなんだか。

かる　イエ〳〵、なんの、それよりは、まだ行く先が思はるゝわいなア。

勘平　それも人目を憚るゆゑ、晝をいたうて夜の道。まだ夜明けには間もあらう。

かる　幸ひ爰の松蔭で

勘平　往來途絶えし其うちに

かる　暫しのうちの足休め。

兩人　さうぢや〳〵。

ト風の音のあしらひ、あたりへこなし。これを直ぐに後の文句のかゝりになる

〽憂さが中にも旅の空、初時鳥明け近く、色で逢ひしもこの春は、お宿下がりと成駒の、あのお土産の錦繪が、お前に似たととり〳〵の、噂に思ひ染め躑躅、餘所目に心盡様が、そのお使ひに猶深う、こんな縁が唐紙の、鴛鴦の番ひの樂しみに、泊り〳〵の旅籠屋で、ほんの旅寢の草枕、嬉しい仲ぢやないかいな。

ト此うち、おかる、よろしくクドキ模樣。勘平と兩人、こなしあつて

〽定めなき花曇り、暗きこの身の繰言を、お家の大事と聞いた時、重きこの身の罪科と。

ト此うち勘平、刀を取上げ、愁ひのこなしあつて、死なうとする。おかる、これを止める仕組みよろしく

〽かこち涙に目もうるむ。

ト兩人よろしく納まる。

勘平　思へば思ひ廻す程、主君の大事を餘所にして、この

勘平はとても生きて居られぬ身の上。其方は云はゞ女の事、後に長らへ我が亡き跡の、とひ弔らひを賴むぞよ。おかる、さらば。

ト刀を構へる。おかる、こなしあつて

かる　アレ、まだ其やうな事云はしやんす。わたしゆゑにお前の不忠、それが濟まぬと死なしやんしたら、わたしが死ぬるその時は、あれ二人は心中ぢやと、誰れがお前を褒めますぞえ。マア、待つて下さんせ。

勘平　でも、命長らへあるなれば、うろたへ武士と世の人の

ト刀へ手を掛ける。

かる　アコレ、待つた。

〽それその時の、うろたへ武士には誰れがした、みんなわたしが心から、死ぬるその身を長らへて、思ひ直して親里へ、連れて二人が身を忍び、野暮な田舍の暮らしには、機も織り候賃仕事、お前に盡す眞實の、念が屆いて山崎の、ほんにわたしがあるゆゑに、暫しの難儀堪忍して、どうぞ女房の云ふ事も、ちつとは聞いて下さんせえ、後は涙の花の雨、詞に色や含むらん。

ト兩人クドキ模樣よろしくあつて納まり

勘平　それ程までに思うてくれる其方が深切、聞き屆けた。併し、わが身の親里へ、面目なけれど一先づ立越え、時節を待つてお詫びせん。

かる　そんなら聞き屆けて下さんすか。エヽ、嬉しいぞえ。

勘平　サ、支度しや。

かる　アイ。

トこなし。兩人よろしく

〽身拵らへする向うより。

ト揚げ幕にて

伴內　ヤレ來いヱヽ。

大勢　ハア。

トどん〳〵になり、伴內、高股立ち、上下脫ぎかけ・大小、後鉢卷にて走り出る。後より以前の六人・好みの拵らへ。突棒、刺叉を持ち、出て來り

〽組子姿でヤレ來うえゝ、蹈踏む足の高上がり、身には重荷の鷺坂伴內、弱味は見せじと羽づくろひ。

ト伴內、右の文句にて振りあつて、兩人を見やり、こなしあつて

伴內　ソレ、者ども。

皆々　ハア。



天保四年三月河原崎座上演



三世尾上菊五郎のおかる　七世市川海老藏の勘平

〽ばら／＼／＼と走り寄り。
ト皆々引連れ、舞臺へ來り・太夫座の合ひ方にノリになり

伴内　ヤア／＼勘平、うぬが主人の家の斷絕、聞いか聞かぬか知らねども、色に耽つて二人が駈落ち、浮名は音羽やが上に、身分のお世話に成駒の、お師匠さんでも親方でも、色は別もの云ひ分を、云ふ氣で爰まで附いて來た。おかるを異議なく渡せばよし、なんの寬助ぬかすなら

六人　加勢に立つた惣がゝり。

伴内　そびいて行くが返答は、なんと／＼。

〽なんと／＼と呼はつたり。
ト伴内よろしくこなし。勘平ニツコリ思ひ入れして

勘平　ヤア、よい所へ鷺坂伴内、おのれ一羽で食ひ足らねど、勘平が腕の細葱、料理鹽梅・喰うて見よえゝ。

伴内　ソレ、者ども

六人　やらぬワ。

ト大太鼓入り、立廻りになり、吉例の紋切り型、大まくしにちよつとあつて、皆々、突棒刺叉を投げ捨て、六人竹田の形を引抜くと、下に紅絹襦袢へ兩人の臺附け紋附けし揃ひになり、對の下がり。六人、兩人を中に取卷き

皆々　どつこい。

トこれを賑やかなる鳴り物入り所作ダテになる　これより銘々水手桶を持ち・立ちかゝり、兩人、これをあしらひ、この中へ伴内割つて入り、よろしく所作ダテ模樣。

〽戀の意趣打ち花聟で、濡れた祝ひの水手桶、入れ込む樽のアリヤ／＼／＼、どつこい江戸一花に菊、白梅盛る劍菱に、ちよつと大鵬右左、壽海わたしはならぬが常と、東男の附け出しも、ぴんと刎ねたる蛭子鯛、音羽に汲んで猿若に、どつと入船アリヤ／＼持て來い、東風福助と廻る拳酒櫻いろ。

トこの文句にて六人、水手桶にかゝる。勘平あしらひ、よろしくあつて、此うちおかるへ伴内立ちかゝるを・この中へ搦んで、面白き所作ダテになり、トゞ勘平は六人を投げのけ、キツと見得、文句一ぱいに納まる。伴内、其まゝ切りかけるを、潜り拔け、立廻つて刀を引ッたくり、引きつけて

勘平　爰までうせた馳走には、突かうか切らうか。鼻を剃がうか。いつその事に

ト刀を振りあげる、おかる止めて
かる　コレ、もうよいわいなア。
ト伴内、起きあがり
〽羽搔ぶる／＼鷺坂は、命から〲逃げて行く。
トこなしあつて花道へかゝり
伴内　イヨ音羽屋に成駒屋、
ト向うへ逃げて入る。兩人、こなしあつて
勘平　殘念々々さりながら、彼奴を殺さば不忠の不忠。
ト鷄笛、本釣り鐘、
かる　アレ、短夜とて山の端の
勘平　東が白む
兩人　橫雲に。
トこなし、
〽塒を離れ啼く烏、可愛々々の女夫連れ、先は急げど心は後に、お家の安否如何ぞと、案じ。
ト此うち伴内、下座より出て、兩人、舞臺より東の方へ行かんとするを、おかるへ組みつく。
〽行くこそ。
ト伴内を引き廻し、ポンと投げる、三重、風の音、時の鐘の送り、勘平おかる、手を引き合して向うへ入る。

よろしく　幕

四段目　扇ヶ谷鹽冶館の場

役名――鹽冶判官高定。石堂右馬之丞、山名次郎左衛門、斧九太夫。原郷右衛門。大星力彌　鹽冶室、かほよ御前、大星由良之助義金。

竹本連中

本舞臺、三間の間、一面に花の丸の縮襖、上下折り廻し同じく襖、日覆より同じく花の丸の大欄間を下ろし、揚げ幕へ出入りの襖取つけあり、舞臺花道とも薄緣を敷き詰め、すべて鹽冶館奥の間の體。眞中にかほよ、褥の上に住まひ、脇息にもたれ、左右に腰元八人、櫻を活けし花筒を持ち居る、この模樣よろしく、琴唄にて幕明く。
腰一　御意に隨ひ取寄せし、鎌倉山の御所櫻、
腰二　お庭の花の眺めより、また一人と夕櫻
腰三　この程よりのお心も、結ぼれとけて糸櫻、

腰四　その辻占も吉野路に、盛りを願ふ一重の櫻。
腰五　花の心の末廣と、富士を見上げる山櫻。
腰六　開くは花の夕映えに、顔は茜の初櫻。
腰七　數ならねども私しまで、願ふは神の庭櫻。
腰八　お慰みの數にもと、不束なこの活け花。
八人　御覽に入れまするやうにござりまする。
ト此うち下手の襖を明け、力彌出て、よろしく住ひ
力彌　これは〳〵、女中方より差上げられ、櫻花、いづれをいづれと分け難き、見事な花ではござりませぬか。
かほ　力彌の云やる通り、腰元どもに云ひつけた櫻花、殿樣にもさぞかしお喜びであらうわいなう。
〽柳の間の廊下を傳ひ、諸士頭原郷右衞門、後に續いて斧九太夫。
ト向うより郷右衞門、麻上下、大小、老けたる拵らへにて出て來る。後より九太夫、同じ形にて出て來り、兩人直ぐに舞臺へ來り、かほよへ會釋して、よろしく住ふ。
九太　御臺樣には、これにお渡りなされまするか。
郷右　力彌どのにも、お早い御出仕。
力彌　イヤ、某は國元より、親ども參るまでは、晝夜相詰め罷り居りまする。
郷右　それは御苦勞千萬に存じまする。
九太　今日は殿樣の御機嫌、如何お渡り遊ばされまするな。
〽申し上げれば、かほよ御前。
ト合ひ方になり
かほ　オヽ、二人ともに、大儀〳〵。この度は判官さま、お氣詰まりにも思し召し、お煩らひでも出やうかと案じたとは格別、明暮れ築山の花盛り、御覽になられての御機嫌ゆゑ、自らもお慰みに差上げうと、名ある櫻を取寄せて、見やる通りの花拵らへぢやわいなう。
郷右　イカサマ、それはよろしき思し召し。櫻は開くものなれば、御門も開き、御閉門を赦さるゝ吉事の御趣向。拙者も何かなと存じますれど、斯樣の儀は思ひ附きも、不調法な郷右衞門。イヤ、肝心の事を申し上げん。今日御上使お入りと承はりしが、定めて殿の御閉門の、御免の御上使でがなござりませう。なんと九太夫どの、左樣なものではござらぬか。
九太　ハヽヽヽ、コレ、郷右衞門どの、この花と云ふ物は、當分人の目を喜ばすばかり、風が吹けば散り失せる。こ

なたの詞もその通り、人の心を喜ばせようとて、武士に似合はぬぬらりくらりと、後から剝げる正直詞、なぜとお云やれ。この度の殿の御度は、饗應使のお役儀を蒙むりながら、執事たる人に手を負はせ、館を騒がせし科、輕うて流罪、重うて切腹、自體また、師直公へ敵たふは、殿の御不覺と申すものでござる。

〽聞きもあへず鄕右衞門、

鄕右　ムウ、さては其許には殿の流罪、切腹を願はるゝか。

九太　イヤ、願ひは致さねど、詞を飾らず眞實を申すのぢや。元を云へば鄕右衞門どの、皆こなたの吝嗇から起つた事、金銀を以て面を張り召さるれば、斯樣な事は出來申さぬ。

〽おのが心に引き當てて、慾面打消す鄕右衞門。

鄕右　人に媚びへつらふは侍ひでない、武士でないワ。

ト九太夫ムッとして

九太　ナニ、武士でないとは、この九太夫へ當てつけた一言。いま一言云うて見よ。手は見せぬぞ。

鄕右　オヽ、云つて聞かさう。武士でない、侍ひでない。

九太　ムウ、さう云へば、いつそ身共が。

鄕右　何を小癪な。

ト兩人キッとなり、刀を引寄せ、詰め寄る。

かほ　兩人待ちや。

力彌　御臺樣の御意でござる。御兩所とも、お扣へなされい。

兩人　でも。

力彌　ハテ、お扣へなされいと申すに。

兩人　ハッ。

ト扣へる。

かほ　兩人とも爭ひ無用。今度殿樣の御難儀遊ばす、元の起りは自らゆゑ。いつぞや鶴ヶ岡にてもてなしの折柄、道知らずの師直、主ある自らに無體の戀を云ひかけ、さまざまと口說きしが、恥を與へ懲りさせんと、我が君樣にもお知らせ申さず、歌の添削に事寄せ、小夜衣の歌を書き、恥かしめてやつたれば、戀の叶はぬ意趣晴らし、判官さまに惡口、元より短慮のお生れゆゑ、御堪忍なされぬは、お道理ではないかいなう。

〽語り給へば鄕右衞門、力彌も共に御主君の、御憤りを察し入り、心外表に現はせり。

トこの時、向うにて

呼び　お上使のお入り、

鄕右　早お上使のお入りとあれば、力彌どの、この由殿へお傳へ下され。
力彌　委細承知仕る。
腰元　御臺樣には先づ
皆々　入らせられませう。
ト唄になり、かほよ先に、腰元皆々、力彌に附いて奧へ入る。
呼び　上使。
トこれにて花の丸の襖、鷹の羽の紋に替り、九太夫、鄕右衞門、出迎ふ事。
〽早お上使の御出でと、玄關廣間ひしめけば、兩人出迎ふ間もなく、入り來る上使は石堂右馬之丞、師直が昵近山名次郎右衞門。
ト向うより、右馬之丞、上下衣裳、御奉書を懷中して、しづ〳〵と出る。後より次郎左衞門、同じく上下形にて出て來り、兩人花道にて、ちよつと會釋して
〽會釋もなく上座に附けば、一間の內より鹽冶判官、しづしづと立出で〻。
ト奧より判官、羽織衣裳、刀を提げ、出て來り、よき所に住ひ

判官　これは〳〵、御上使とあつて石堂どの、山名どの、御苦勞千萬。先づお杯の用意いたせ。御上使の趣き承はり、何れもと一獻酌み、積鬱を晴らし申さん。
次郎　オヽ、それよくござらう。この山名もお合ひ致さう。シタガ、上意の趣き聞かれたら、酒も咽喉へは通りますまい。
〽嘲笑へば右馬之丞。
石堂　我れ〳〵今日上使に立つたるその趣き、具に承知いたされよ。
〽懷中より御書取出だし、押し開けば判官も、席を改め承る。
ト此うち、右馬之丞、懷中の御奉書を取出す。判官、席を敬ひ居る。右馬之丞、御奉書を開き。
一つ、其方儀、大役を蒙むりながら、場所柄日柄の儀相辨まへず、私しの宿意を以て、執事高武藏守を刃傷に及び、館を騷がし候ふ段不埒の至り、重罪に申しつくべき筈の所、格別の沙汰を以て、國郡を沒收し、切腹申しつくるものなり。
〽聞くよりはつと驚ろく御臺、並み居る諸士も顏見合せ、呆れ果てたるばかりなり、判官動ずる氣色もなく。

判官　上意の趣き、委細承知仕る……さてこれからは、各々の御苦勞休めに、打寛ろいで御酒一つ。

次郎　これサ〳〵判官どの、默り召され。其許が今度の科は、縛り首にも及ぶべきところ、お上のお慈悲を以て、切腹を仰せつけらるゝは、有り難い事と三拜して、早速用意もすべきところ、それに何ぢや、當世樣の長羽織、ぞべら〳〵としらるゝは、酒興か、但し血迷うたか。上使に立ちたる石堂どの、この山名へも無禮であらうぞ。

〽きめつければ、につこと笑ひ。

判官　この判官、酒興もせず、血迷ひも仕らぬ。今日上使と聞くよりも、斯くあらんと期したるゆゑ、兼ねての覺悟、御覽に入れん。

〽大小羽織を脱ぎ捨つれば、下には用意の白小袖、無紋の上下死裝束、皆々これはと驚ろけば、次郎左衞門は言句も出でず、面膨らして閉口す。右馬之丞差寄つて。

右馬　天晴れなる御覺悟。御心底察し入る。仰せ置かるゝ儀もござらば、お心置きなく申されよ。

ト文句の通りよろしくある。

判官　この期に及び、申し置くべき事もござらぬ。刃傷に及びしより、斯くあらんとは兼ねての覺悟。たゞ恨むらくは館にて、加古川本藏とやらに抱き止められ、師直を討ち漏らし、その無念骨髓に徹つて忘れがたし。湊川にて楠正成、最後の一念に依つて生を引くと云ひし如く、生き變り死變り、鬱憤を晴らさで措かうか

ト向うを見詰め、無念の思ひ入れ。

〽怒りの聲と諸ともに、お次の襖打ち叩き。

ト下の方にて

諸士　鄕右衞門どの〳〵、殿御存生のうち、御尊顏を拜したき一家中の願ひ。御前へ推參いたさんや。この儀お取次ぎ。

大勢　お取次ぎ。

ト鄕右衞門、下の方を向き

鄕右　御上使の御前でござるぞ。お控へなされい……殿、お聞きあられましたか。

判官　尤もなる願ひなれども、由良之助參るまでは、無用と申せ。

鄕右　ハツ。

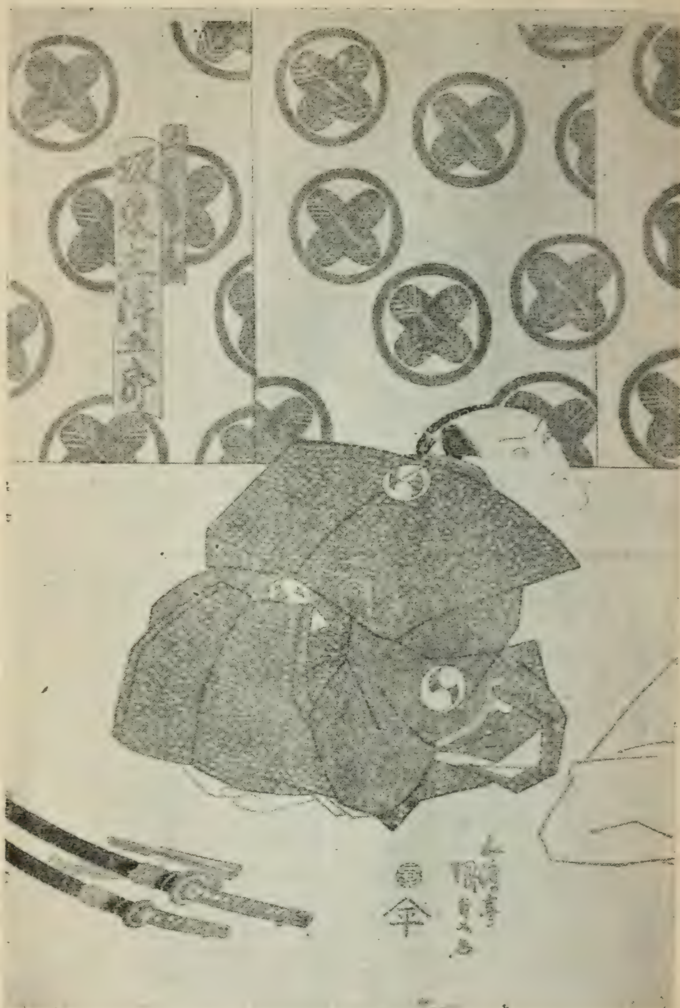
ト下手へ向ひ

聞かるゝ通りの御意なれば、一人も叶ひませぬぞ。

ト襖の内にて



文政十三年四月市村座上演



二世關三十郎の判官　三世坂東三津五郎の由良之助

皆々　すりや御對面は叶ひませぬか。
郷右　如何にも。
皆々　ハア、。
〽諸士は返も詞もなく、一間もひつそと靜まりける。
郷右　御用意。
　ト下手にて
諸士　ハア、。
　ト誠の合ひ方、此うち侍ひ出て、いつもの通りに疊白布の花などよき程に置く、判官座を直す。
〽力彌御意を承はり、かねて用意の腹切り刀、御前にこそは直し置く。
　ト文句の通り、力彌、白木の三方へ九寸五分を載せ、持ち出て、判官の前へ直し置き、名殘り惜しい思ひ入れ、判官、額にて立てと思ひ入れする、力彌、立ちかねるゆゑ、キッと睨む。是非なく下手へ扣へる。
〽心靜かに肩衣とりかけ、座を寛ろげ。
　ト三方を引寄せ、九寸五分を取つて頂き
判官　力彌。
力彌　ハッ。
判官　由良之助は。

力彌　未だ參上仕りませぬ。
判官　ムウ……力彌々々。
力彌　ハッ〱。
判官　由良之助は。
力彌　未だ參上仕りませぬ。
判官　エヽ、存生に對面せで、殘念なと申せ。
　ト思ひ入れあつて
御檢使、お見屆け下さるべし。
〽刀逆手に取り直し、弓手に突き立て引廻す、御臺は二目と見もやらず、口に唱名目に涙、廊下の襖踏み開き、駈け込む大星由良之助。
　ト判官、腹へ突き立てる。向うバタ〱にて由良之助、襖を押し明け、追取り刀にて駈け來り、花道よき所に住ひ、舞臺を見て平伏す。
右馬　國家老大星由良之助とは其方か。
由良　ハッ。
石堂　苦しうない。近う〱。
由良　ハ、ハッ。
〽主君の有樣見るよりも、はつとばかりに撞と伏す、後に續いて同家中、皆ばら〱と駈け入つたり。

由良　ト由良之助いろ〳〵思ひ入れあつて、大小を花道へ置き、舞臺へ來る。これにて下手の襖を明け、三階の諸士殘らず出てよろしく居並ぶ。由良之助、判官の側へ摺り寄り、耳に口を寄せ

　　大星由良之助義金、只今參着仕つてござりまする。

判官　由良之助か。

由良　ハヽハツ。

判官　待ち兼ねたわい。

由良　ハツ、御存生の尊顔を拜し、身にとりまして何ほどか

判官　オヽ、我れも滿足。定めて樣子は聞いたであらうな。聞いたか〳〵。

由良　ハツ。

判官　無念

　　ト云ふを

由良　アイヤ、この期に及び、申し上ぐる詞なし。只々尋常の御最期の程、願はしう存じまする。

判官　オヽ、云ふにや及ぶ。

〽云ふにや及ぶと諸手をかけ、きり〳〵と引廻し、苦しき息をほつとつき。

　　ト文句の通りあつて

　　由良之助々々々々。

由良　ハヽハツ。

判官　この九寸五分は汝へ形見……ナ、この短刀を以て、我が存念を

　　ト云はうとするを

由良　委細、畏まり奉る。

　　ト思ひ入れ。

〽切尖にて笛搔き切り、血刀投げ出し俯伏せに、撞と倒れ息絶ゆれば、御臺を始め並み居る家中、眼を閉ぢ息を詰め、齒を喰ひしばり扣ゆれば、由良之助にじり寄り、九寸五分を取納むれば。

　　ト判官よろしく落入る。由良之助判官の手より、九寸五分を取り、思ひ入れあつて袱紗に包み、懷中する。力彌、花道にある大小を取つて來る。

〽次郎左衞門突立ち上がり。

次郎　判官がくたばる上からは、早く屋敷を明け渡せ。

右馬　アイヤ、さな云はれそ山名どの、云はば一國一城の主。イヤナニ方々、葬送の規式取賄ひ、心靜かに立退かれよ。この石堂は上使の役目、切腹見屆けたれば、この旨

を言ーせん……ナニ、由良之助、愁傷の程察し入る。相應の用事もあらば、某が屋敷まで、必らず心置かるゝな。

〽並み居る諸士に目禮し、悠々として立歸る。

ト右馬之丞、思ひ入れあつて、向うへ入る。

次郎　この山名も、死骸片附けるその間、奥の一間で休息せん……ヤイ家來ども。判官の所持の道具、僞浪人めらにまげられな。

〽館の四方を睨め廻し、一間の內へ入りにける。

ト次郎左衛門、思ひ入れあつて、奥へ入る。

〽御臺所は一間より、惜しや盛りの黒髪を、切つて捨てたるこの世の名殘、泪ながらに出で給ひ。

トこの淨瑠璃のうち、上手襖を明け、かほよ、切り髪、白の着附けにて、これを腰元介抱して出る。後より幕明きの腰元、皆々いづれも白の着附けにて出て、上手へ住ふ。かほよ、判官の死骸の側へ行かうとして、喰ひしばり

かほ　由良之助、推量してたもいなう。

トむせび居る。

〽心に泣けど目に泣かぬ、武士の妻こそ是非もなき。

ト此うち由良之助、力彌に囁く。力彌心得て上の方へ入る。

由良　御臺樣へ申し上げまする。由良之助始め諸家中一同、御悔み申し上げまする。久々にて出府の義金、お目見得いたすか致さぬうち、直ぐにお暇乞ひにならうとは、恐れながら拙者が心中、御推察下さりませう。

ト落涙の思ひ入れあつて、九太夫の側へ來り、隠密にて何か談ずる思ひ入れ。鄉右衛門も差寄り、三人とも膝を進め

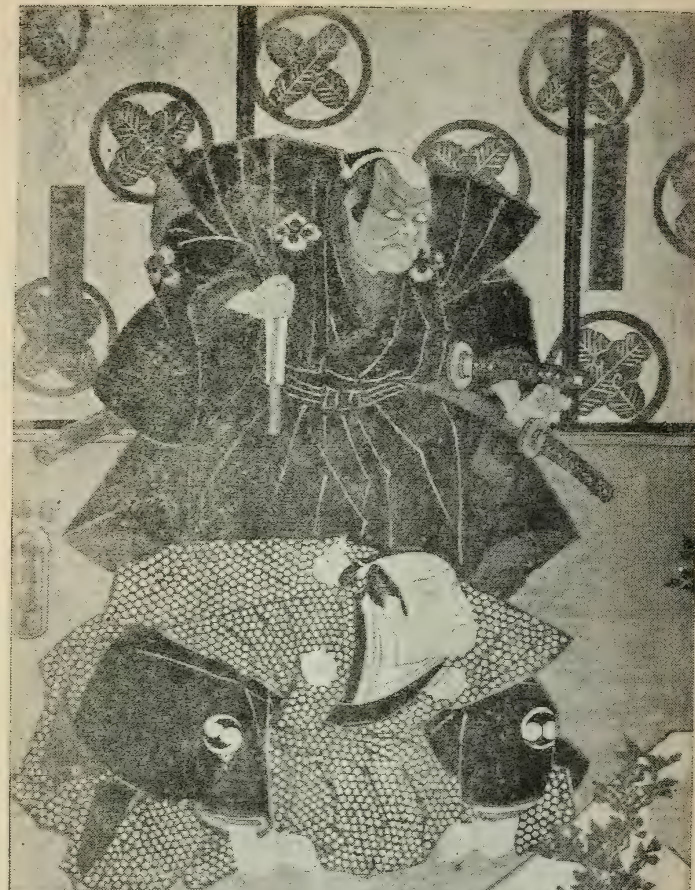
ナニ九太夫どの、斯くなる上は何かは差措き、亡君の御亡骸、御菩提所光明寺へ送り奉り、御葬送の式、取計らひ申すでござらう。

九太　左やうでござる。大切なる殿樣の事なれば、儀式取計らひがようござらう。

トこの時、力彌、上手顔世の側へ來り、ちよつと囁き合ふ事あつて、此方へ來り

力彌　ハツ、御臺所かほよさま、御亡骸お見送りの儀、お願ひにござりまする。

由良　御尤ものお願ひ。かゝる時節の事なれば、苦しうもござるまい。ナウ、九太夫どの。



嘉永四年二月市村座上演

市村竹之丞の由良之助　中山文五郎の次郎左衞門

九太　イカサマ、その儀がよろしうござらう。

由良　然らばその趣きに取計らひませう……イヤナニ、諸士の面々、先づ御尊骸は光明寺まで送り奉り、御臺所諸とも、路次の警護、この由良之助も後より追ッつき、萬端取計らひ致すでござらう……先づ原、浦松を始め、物頭組々の面々以上六人相殘り、その餘の人々一同に、路次の警護いたされよ。

皆々　ハッ。

由良　ソレ、お乘り物。

諸士　ハアヽ。

〽詞の下より御乘り物、手舁きに舁き据ゑ戸を開き、皆立寄つて御死骸、泪と共に乘せ奉り。

ト此うち近習の侍ひ、下手より乘り物を舁き出て、判官の死骸を乘せる。皆々立寄り介抱する。由良之助、郷右衛門に指圖して香爐を取寄せ、香包みを出し、諸士に指圖する。諸士心得、かほよに燒香させる事あつて、この香爐を由良之助の前へ持ち行く。

由良　九太夫どの。

九太　イヤ、先づ〳〵。

由良　然らば。

ト由良之助、郷右衛門順々に燒香あつて

郷右　御家中一同、これにて。

ト皆々へ會釋して燒香する事あつて、由良之助、手を上げる。これにて侍ひ乘り物を舁き上げる。

〽しづ〳〵と舁き上ぐれば、御臺所は正體なく、嘆き給ふを慰めて。

トかほよ立ち上がり、乘り物の側へ行くを、由良之助ちよつと隔てて、乘り物の戸を閉める。

〽諸士の面々我れ先と、御乘り物に引添ひ〳〵、御菩提所へと。

ト此うちいつもの通り、乘り物花道へかゝる。諸士警護して、後よりかほよ、腰元、皆々附添ひ、向うへ入る。後に郷右衛門、諸士六人殘る。

〽急ぎ行く、人々御骸見送つて、座に附けば、斧九太夫。

ト九太夫は上手、由良之助は眞中、郷右衛門殘る、諸士段々に住ふ。

九太　ア、生者必滅會者定離とは申せど、今更のやうに存じられ、誠に足の踏みども辨まへず。かゝる時には誰れ〳〵も、只當惑のみ致すものぢやが、これからは後の取計らひが大事でござる。銘々料簡ある者は、老若

上下の隔てはない。若侍ひの面々達、所存があらば申さつしやれ。九太夫、そのよろしきに同心仕らう。サヽ、料簡が承りたい。

諸一　イヤ、某が存するには、當館を足利どのへ、ムザムザ渡すは心外千萬。

諸二　殊に敵高師直、存命なるが我れ〳〵の鬱憤。

諸三　主君に離れおめ〳〵と、生き長らへんは不忠の至り。

諸四　君辱しめらるゝ時は、臣死するの本分。

諸五　足利どのゝ討手を引受け、城を枕に討死して

諸六　名を後代に殘さん事、我れ〳〵が本懷と

諸一　所存一決

皆々　致してござる。

九太　ホヽオ、頼もしゝ、勇ましゝ。忠義を思ふ面々は、斯くこそありたきもの。アヽ、出かされた〳〵。して、郷右衛門どのはな。

郷右　御評議御尤もには存ずれど、拙者に於きましては、由良之助どのゝ御所存に、御同心仕る。

九太　成る程、こりや斯うあるべき筈。この上は由良之助どの、御親父八幡六郎どのより家老職、手前とてもその右には座すれども、この度の急變、兩家老の分別所。貴殿には如何思はつしやる。お國家老の分別、どうでござる〳〵。コレサ大星。

〽評議のうちに由良之助、默念として居たりしが。

ト由良之助、此うち始終思ひ入れあつて

由良　九太夫どのゝお詞、御尤もにはござれども、この由良之助に於きましては、籠城殉死などとは、思ひも依らぬ儀でござる。

九太　して又、貴殿が御所存はな。

由良　お金配分が致したい。

九太　ナニ、アノお金配分とな。

由良　先づ手前が所存と申せば、異議なく當城を御上使に明け渡し、御臺所は御舍弟縫之助さまへお預け奉り、殿樣これまでお貯への御用金を取出し、足輕小者銘々に至るまで、頭割りに配分いたし、當城を退散いたす所存にござる。只今よりして由良之助、二君に仕へる所存なければ、大小弓矢を捨て、町人と相成り、これまで頂戴の御知行の餘分と、配分の金子を以て、百姓どもへ貸しつけ、田地田畑を買ひ求め、その利分を以て子孫の後榮を計る所存。先づこれよりは算盤秤の目をせゝらねば、なるまいかと存じまする。

九太　すりや、いよ／＼お金配分の所存でござるか。

由良　どう思案仕つても、お金配分より外、存じ寄りはござらぬて。

九太　アノお金配分とか。ムウ。

ト思ひ入れあつて

エヽ、見下げ果てたと申さうか、卑怯とや云はん。殿様御存生のうちは、いかめしく家老で候ふと、人の上に立ちながら、この期に及んで云ひ甲斐のなき有様。斯様な者と同席いたすも穢らはしい。身共は最早退出仕る…………それには引替へ若侍ひ、頼もしき今の一言。この上は、討死と覺悟極めし人々は、九太夫が宅までお越しなされ……イヤ、由良之助どの、九太夫歸宅のその後にて、お金配分と一決いたさば、頭割りは不承知だ。知行高に割らつせえ。この九太夫は貳千石、おてまへは千五百石、其許と九太夫とは、五百石違ひ申すぞ。イヤ、まだある。悴定九郎は部屋住みなれども、貳百石頂戴いたし罷り在る。さすれば兩人にて貳千貳百石だぞ。よいか、例へ一兩でも、壹分でも、こもうがあると免し申さぬぞ……これから身共は、足利の討手を引請け、老後の思ひ出、花々しく一軍仕る。コリヤ、若侍ひ衆、手柄は仕勝ちだ。高名いたせ。よいか／＼……ムウ、よくも殉死と定められた。これに付けても、老い朽ちた九太夫に貳千石、部屋住みの定九郎に貳百石、殿のお目鏡にて下し置かれた、日頃の御恩報ずるは今この時だ。サア、若侍ひ、討死はよいか。由良之助、知行高はよいか……キッと詞を番へたぞよ。

〽疊蹴立てゝ立歸る。

トよろしく思ひ入れあつて、向うへ入る。諸士、由良之助を左右に挾んで

諸一　日頃に似合はぬ九太夫どのゝ心底。

諸二　承つて見るところ、實に尤もと存ずるゆゑ

諸三　殉死なさんと決心せしが

諸四　只この上は御城代の

諸五　思し召しに依つて我れ／＼は

諸六　所存一決仕りたうござる。

六人　由良之助どの／＼。

ト云へども由良之助、默つて居るゆゑ、此方へ來り

諸一　鄕右衛門どのゝ

六人　思し召しはな。

鄕右　この儀に於ては御家老たる、由良之助どのゝ御賢慮

次第。
ト矢張り、思案の體。これにて皆々呆れし思ひ入れ。
諸一　この上は是非に及ばぬ。何れも、お越しなされ。
ト六人、花道へ行きかゝる。由良之助、見て
由良　ヤレ待たれよ何れも方、血相して何れへござる。
諸一　ハテ知れた事、これより直ぐに、九太夫どのゝ屋敷へ立越え
諸二　亡君の御無念晴らさん爲
諸三　足利どのゝ討手を引請け
諸四　花々しく一戰なし
諸五　城を枕に討死して
諸六　武名を殘す
六人　我れ〳〵ども。
由良　ヤア、なに恨みあつて足利どのへ弓引くべきや。恐れあり恐れあり、斯樣の節は一應も再應も、御詮議あるべき所でござる。只今九太夫が詞、なんとお聞きなされた。城を枕に討死と、申す詞に引替へて、お金配分と極まらば、知行高に割れよと申したではござらぬか……サ誠に城を枕に討死なすべき武士が、なに金の員數に拘はりませうや。これらの事もお糺しなく、彼れ一人が佞辯に欺むかれ、もし粗忽ばしござつては、あれ見よ鹽冶が家臣等は、何程まで思慮なき者と諸藩の嘲り。いま討死して亡君の、お喜びあるべき……。お手向に相成りませうか……これにござる諸士頭、原氏のお指圖も待たずして、血氣に逸るは匹夫の勇、短慮功をなさずの譬へ。さりとては、まだ御料簡が、若い〳〵。
トこれにて皆々、舞臺へ戻り
諸一　ムウ。して、由良之助どのゝ
六人　御所存はな。
由良　各々方を斯くお止め申せしは、この由良之助を始め失禮ながら各々方、今日の只今と相成り、かゝる急變ゆゑ轉倒いたし、互ひに粗忽の存じ寄りなどござつては、後代までの瑕瑾でござれば、先づ今日の所は速かに、當館を受取りのお役人へお引渡し申し……イヤサ、足利どのへ對し、お恨み申す筋はござらぬぞ、亡君の御遺言、御無念に御生害、恨むべきは只一人でござる。昔が今に至るまで、止まる所は唯一心でござる。御得心が參つたか。御得心でござらうがな……その上にては、御舍弟縫之助さまもござれば、御本家御一門方の御賢慮を、とくと伺ひし上ならでは、容易に事は計られませぬ。もしや

御本家等へお咎めの筋かゝらば、矢張り亡君の御恥辱となるのみならず、我れ／＼が存念までも立たざる道理。斯様な事ども相糺し、その思案の臍を固め、配分の金子を持つて、思ひ／＼に當家を立退く所存。斯くは申すものゝ、御自分々々の思し召しもあれば、いよ／＼以てこの由良之助と、御同腹下さるゝや、又はお用ひ下さらぬや、御腹藏なく御返答が承はりたうござる。

ト諸士六人、座を改め、よろしく相談の思ひ入れあつて、郷右衛門へこなしある。郷右衛門、由良之助へ向ひ

郷右　これに居並ぶ面々、由良之助どのと御同腹にござりまする。

由良　すりや、いよ／＼御同意下さるとや。アノ由良之助が下知を用ひ下さるとや。ハヽ、祝着至極に存ずる。先づ手前は、都山科に知るべござれば、彼の地へ立越え、再會の上は、某が心底、委細申し談ずるでござらう。……爰に一つの難事と申すは、今にもあれ、御臺所のお供せし、若侍ひの面々立歸らば、忠義を思ふ一圖に迫り、前後の辨まへもなく、逸るでござらう。その節は多人數の儀でござれば、なか／＼某一人制しましたとて行屆きますまい。その節は御自分の御支配へ、由良之助が存念申し聞けられ、お取鎭め方お頼み申す。只何事も都山科にて再會の上、某が深き所存もお話し申さん。先づそれまでは、隱密々々。

へ謀し合する折柄に、次郎左衛門一間を立出で。

トこれにて皆々席を改める。上手より、次郎左衛門出て

次郎　べん／＼だらりと長評議。判官が死骸片付いたら、早く屋敷を引渡せ。

トこれにて、郷右衛門進み出て

郷右　御尤もにはござりますれど、判官所持の道具萬端、とくと取調べお渡し申せば、暫時の間の御宥免、偏へに願ひ奉る。

山名　早く致せ。

ト上手へ入る。

郷右　イヤナニ、由良之助どの、最早退散いたさうではござらぬか。

由良　郷右衛門どの、然らば貴殿は殿樣の、御所持の品々、武具馬具に至るまで、お帳面に引合せ、御上使へお渡し下され、



文化六年五月中村座上演　三世中村歌右衛門の由良之助

鄕右　委細承知仕る。

由良　拙者はこれより御佛間へ參り、御先祖の過去帳諸と
も、御菩提所まで送り奉らん。
〽靜々と立ち上がり。
〽御先祖代々。

皆々　我れ/\も代々。

由良　晝夜詰めたる

皆々　館の內。

〽今日を限りと思ふにぞ、名殘惜しげに見返り/\、御
門外へと。

ト皆々、よろしく思ひ入れあつて、由良之助、先に、
上手襖の內へ入る。と知らせに付き、この道具廻る。

本舞臺、例の表門の道具、時の太鼓にて納まる。

〽御亡骸送り奉り、力彌、矢間、堀、小寺、追ひ/\に
馳せ歸り。

トばた/\にて、向うより、力彌先に皆々走り出て來
り、

力彌　最早屋敷を明け渡せし樣子、この上は足利の討手を
引受け討死せん。何れも、ござれ。

ト皆々、舞臺へ來る。門の內より、以前の六人、出て

諸士　御家老よりも御內意もござれば

六人　手向ひの儀は相成りませぬぞ。

諸士　例へ御家老の御意なりとも、猶豫はならぬ。

皆々　そこ退き召され。

六人　イヤ退かぬ、退き申さぬ。

ト由良之助、門より出て

由良　ヤア、何れも忠義一圖の心より、血氣に逸るは尤も
ながら、立騷ぐべき所でない。只今それなる各々と、申
し談ぜし儀もござれば、先づ/\お引取り下されい。

皆々　それぢやと申して。

由良　すりや、斯程まで申しても、お止まり下されぬか。

鄕右　コリヤ、大星氏が止むる詞に愚があらうか。待てと
申さばお待ちなされい。

六人　お止まり召され/\。

ト此うち、由良之助、力彌を見て

由良　コリヤ、其方は力彌でないか。其方までが同じやう
に、如何いたしたものぢや。キッと整して扣へ居らうぞ。

ト此うち、六人の諸士、鄕右衛門、諸とも皆々を制し

鄕右　ハヽ、一同得心いたせしゆゑ

皆々　扣へましてござりまする。
由良　すりや、お扣へ下されしとか……御得心の上は、何れもこれへ……殿御切腹の九寸五分、各々方、よつく見られよ。
ト懐中より以前の短刀を出し見せる　これにて皆々舞臺へ來る。よろしく居並び、短刀をキッと見詰め、無念の思ひ入れ。由良之助、皆々の面體をよく／＼見る事あつて
ハ、ア、心中面に顯はれたり。頼もし／＼。その志しあるなれば、命の捨て所がまだ早い。
皆々　して、由良之助どの、御所存はな。
由良　この九寸五分を由良之助へ御形見……御無念の血汐は。
ト血を手へ取り、呑み込みて
五臟六腑へ納め奉り、御形見の短刀を以て。
皆々　すりや、アノ敵
ト云ふを被せて
由良　コレ、秘すべし／＼。
トこの時、以前の次郎左衞門、門の内より
山名　ヤア／＼、家來ども、俄浪人の態を見て、笑へ／＼。

大勢　ハ、、、。
トこれにて、皆々キッとなり
皆々　あれを聞いては。
トきつとなるを
由良　コリヤ、御遺言を忘れてか。
皆々　でも。
由良　エ、、引かう／＼、引かうてや。
〽はつたと睨んで。
ト皆々思ひ入れあつて、向うへ入る。由良之助、殘り思ひ入れあつて
〽あたり見廻し由良之助、血に染まる切尖を、打眺め打眺め、無念の泪はら／＼／＼、判官が最期の一句、五臟六腑に染み渡り、さてこそ末世に大星が、忠臣義士の名を殘す、根ざしは斯くと知られたり
ト件の九寸五分を持ち、よろしく思ひ入れ。正面の門、遠見に打返し。これより誂らへの合ひ方になり、城に名殘を惜しみ、よろしくあつて向うへ入る。三重にて
幕

四段目裏　　鳥本宿蜂の巢の場

役名――足輕、寺岡平右衞門　酒屋の亭主。見通し法印。百姓大勢。

本舞臺、三間の間、向う一面の淺黄幕、眞中より上の方へかけて、葭簀張りの居酒屋店、増屋と書いたる障子、軒に小肴を差したる辨慶を吊し、此うちに土釜、酒樽なぞを見せたる立場茶屋、少し下の方に藪疊、上手に松の立ち樹、誂らへの蜂の巢、この下に江州鳥本宿と記したる榜示杭、日覆より松の吊り枝、よき所に床几を直し、爰に、平右衞門、旅形、大小、飛脚の拵らへ、狀箱を首にかけ、旅形の侍ひと酒盛りをして居る。松の樹の元に、百姓の四人、鍬鋤をかたげ立ち、見て居る、薄ドロ〳〵のやうに拵めたる風の音、馬士の唄にて、幕明く。

ト矢張り右の合ひ方にて、松の樹の蜂の巢より、小蜂大分出る。此うちに一疋大きなる蜂交り居て、喰ひ合ふ事よろしく、これを見て、百姓皆々、思ひ入れあつて

百一　アレ〳〵、見さつしやれ。あの蜂の巢から、凄まじい蜂が出たではござらぬか。見さつしやれ〳〵。

百二　ほんにそれよ。マア、小蜂の澤山居る中へ、大きな蜂がどこからか一疋、來ましたぞ〳〵。

百三　アレ〳〵、大きな蜂めを、寄つて集つて螫して居ます。見さつしやれ〳〵。

百一　これが昔から話しに聞いた、蜂の合戰と云ふのでござらうか。

百二　なんでも珍らしい事ではござらぬかいなう。

百三　それ〳〵、なんでも只事ではござるまいの。

ト此うち、平右衞門、後向きになり、酒を飲んで居る。侍ひは正面向きになり居る。內より酒屋の亭主ちろりを提げ出で、床几の上へ置きながら

亭主　コレ〳〵、こなた衆は、何をやかましう云うてござるぞいの。

百一　コレ、親仁どの、あれ見さつしやれ。松の木へ下がつて居ます蜂の巢から出て、蜂が喧嘩をするのを見て居ますわいなう。

亭主　なんぢや、蜂の喧嘩ぢや。

百二　アレ、見さつしやれ〳〵。
亭主　ドレ〳〵。
ト亭主、蜂の巣を見る。
百四　あれ見さつしやれ。小蜂が大分寄つて、大きな蜂一疋を喰ひ合つて居ますわいなう。
亭主　成る程、これは珍らしい事でござるわいなう。
百一　ア、、この蜂に螫されたら堪るまい。
百二　わしらは、あの蜂に螫されぬうち、行きませうか。
三人　それがいゝ〳〵。
ト矢張り右の鳴り物にて、捨ぜりふを云ひながら、百姓、向うへ入る。亭主、蜂を見て
亭主　アレ〳〵、段々と小蜂が殖えるワ〳〵。モシ、見通しさま、ちよつと來て見さつしやれ〳〵。
ト内にて、法印
法印　何事でござるな〳〵。
ト葭簀の内より、見通し法印、出て來る。
亭主　アレ、御覧じろ、あの巣の中より、小蜂が大層出て大きな一疋の蜂を螫して居ますわいなう。
法印　イカサマ、これは珍事な儀でござるな。
ト兩人、見て居るうち、矢張り薄ドロ〳〵にて、また山蜂大分群がり來り、松の木の蜂の巣を散々に螫し殺し、山蜂パツと飛び去り、これにて風の音止み、兩人これを見て
亭主　ヤア〳〵、小蜂めが大蜂を螫し殺したと思つたら、又どこからか山蜂が大分來て、巣も蜂も微塵にして行き居つた。モシ、見通しさま、なんと珍らしい事ではござりませぬか。
法印　俗に云ふ蜂の戰ひ。イカサマ、稀代でござる。
亭主　これが誠に、蜂の敵討と云ふのでござりませう。
法印　かゝる不思議は隨分ある事でござる。昔、唐土宋の代に、黄湯の市にて蜂の合戰あつて、列國の諸侯が亂を起したとある。なんでもこの蜂の戰ひは、下々に拘はらぬ事。こりや大方、諸侯方に何か變のある知らせでござらう。
トこの時、平右衛門、これを聞き付け、ちよつと思ひ入れ。
亭主　成る程、そんな事でござりませう。この間も私しが、裏の井戸へ豆腐が浮きましたが、これらも不思議な事ではござりませぬか。
法印　イカサマ、そんな話しも聞きました。この節は種々



天保四年三月河原崎座上演

七世海老藏の平右衛門

様々の天變がござると申す事を聞きました。

法印　左様ならばこの蜂も、天變とやらでござりませうか。

法印　さればサ、一體この蜂と云ふ奴は大毒蟲でござるから、唐歌にも申す通り、百花を取り得て、蜜となして甘味を含み、尻へに大毒の針を立て人を螫す、コレ、武士に取つては佞人の、輕薄表裏を持つ、人惑はす唐歌でござる。

亭主　そんなむづかしい事は、私しは存じやせぬが、なんでも、變な事でござりますなア。

法印　イヤ、我れ〳〵の身の上には、案じらるゝ事はないが、京か鎌倉に、何か騷動がなければ好いが。

ト此うち、平右衞門は一々胸に當り、思ひ入れ。侍ひ、よろしくあつて

侍ひ　イヤ、モウ〳〵いけませぬ〳〵。この上呑みますと、酒と討死せにやアならぬ。ヤレ〳〵、死にます〳〵。此まゝ宅へ行けばタヂ〳〵。

ト酒に醉つたる思ひ入れ。この時、法印思ひ入れあつて

法印　イヤ、わしも大きに隙取つた。ドレ、急ぎませうか。

ト馬士唄、合ひ方にて、法印、上手へ入る。

侍ひ　イヤ、亭主、世話であつた。おれはの、酒を飲むと、なんだか悲しくなつてならねえ。その上、いつでも自腹で呑むから、後腹が病めてならねえ。

トこれにて、花道へ來り

ア、、草鞋の紐が切れ果てた。頼みも綱も切れ果て、往生往生。

ト云ひながら向うへ入る。亭主、後を見送り、思ひ入れあつて

增治　ア、、あの人も酒を呑んでは、どうでしまひは行倒れものだわえ……イヤ、わしもこの間に、水を一杯汲んで來て置かうかい。ソシ、お客様、店をちつとお頼み申します。

ト右の合ひ方にて、上手へ入る。本釣り鐘になり、平右衞門、思ひ入れあつて

平右　最前から聞いて居りやア、氣にかゝる今の噂。あの法印が云つた蜂の合戰、蜂の講釋、京鎌倉の諸侯方に、變のある知らせだと云つたが、殿様この度鎌倉にて、御勅使饗應の重きお役目。もし凶事でもありやアせぬか。返す返すも氣になる夢見。なんだか胸騷ぎがするわえ。

トこの時、上下へ烏大分出て啼く。平右衞門、これを
キツと見て
アヽ、忌々しい。時も時、折も折、アヽ、氣にかゝる烏
啼き……、エヽ、畜生めら〳〵。
トこれにて、向うより、以前の、百姓四人出て來り
百一　コレ〳〵、皆の衆、先刻の蜂の合戰は、どうなつたであらうか。
百二　イヤコレ、蜂と云へば、八兵衞の家の婆さんは、よいか惡いか、どうでござるぞいの。
百三　イヤ〳〵、ありやアむづかしい。善いの惡いの段か、こつちの物ではござらぬわいなう。
百四　エヽ、そりやア氣の毒な事ぢや。ちよつと廻つて見舞うてやりませう。
百一　ハテ、措いたがいゝ〳〵。廻つたと云うて、モウモウ後の祭り。
百二　ハテ、後の祭りにもせよ、廻つて樣子聞いた方がよいではござらぬか。
百三　それ〳〵、そんなら直ぐに。
三人　それがいゝ〳〵。
百一　サア、皆の衆、ござれ〳〵。

ト矢張り捨ぜりふにて上手へ入る。これと平右衞門花道にて行違ひ、立どまり、辻占を聞く思ひ入れあつて
平右　エヽ、見るも聞くも氣にかゝる。忌々しい辻占。
トこの時、舞臺の障子を見て、ツカ〳〵と舞臺へ來り
いま氣が付いたこの障子……讀みは適へど文字は鹽屋……いま百姓が話しのうちに、後の祭りであらうとも、廻つて樣子を聞いたがましと、餘所事ながら詞の辻占……爰は所も鳥本宿、足の翅で飛んだなら、これより直ぐに木曾海道、廻れば長濱北陸道……善惡二つの鐵臑で、一時七里晝夜をかけ、急いで里數も八十餘里……弓と弦なる鎌倉へ、取つて返さば大事の使ひも。
トこれにて、本釣り打ち切る。この時、亭主出て來り
亭主　なんぢや。いま晝飯喰つたに、もう七ツが廻つたさうな。
平右　又の辻占、廻るがまし。こりやどうしても鎌倉へ。
亭主　ヘイ、もうお歸りでござりますか。
平右　イヤ、歸りがけぢやア事の手遲れ。併し大事の御用の御狀、時日が延引しちやア。
亭主　マア、御緩りとお休みなされませ。
平右　フム、休む所を休まずに、急ぐは覺えのこの空臑。

ト身拵らへして行きかゝる。この時、亭主、ツカ〳〵と側へ來り

亭主　モシ、お酒の御勘定を。

平右　これより直ぐに。

トまた行きかゝるを、亭主、留めて

亭主　エヽ、この人は、お酒の勘定、申し。

ト大きく云ふ。平右衞門、心付き

平右　ほんにさうだつけ。

ト懷中より、錢一本出し

ソレ酒代。

ト亭主に渡す。亭主、取つて

亭主　これではお釣が。

平右　エヽ、面倒な。

ト振り切る。このはずみに亭主、見事に返る。これを木の頭。平右衞門、ツカ〳〵と花道へ行き

してこいな。

ト曲撥にて、一散に向うへ入る。よろしく。

幕

五段目　山崎海道の場

役名――早野勘平。千崎彌五郎。斧定九郎。百姓與一兵衞。　竹本連中

本舞臺、一面小高き藪疊、うしろ黒幕、好き所に松の立ち樹、日覆より、同じく吊り枝、この松の際に勘平、好みの拵らへ、簑を着て鐵砲を擔ぎ、岩臺に腰をかけ、竹笠をかざし、雨止みをして居る。本雨大雷の音にて、幕明く。

〽鷹に死しても穗は摘まずと、譬へに洩れず入る月や、鐵砲雨の震動雷電、誰が水無月と夕立の、晴れ間を爰に佇みぬ

ト花道より、彌五郎、半纏、股引三尺帶、大小、半合羽の上へ丸桐油を着て、菅笠を被り、草鞋にて、小田原提灯を灯し出て來り。直ぐに本舞臺へ來る。雨は小降りになる。勘平、立寄り

勘平　イヤ申し、御無心ながら、火を一つお貸しなされて下さりませ。

ヽ旅人もちやつと身構へなし。
彌五　ムウ、この海道は不用心と、知つて合點の一人旅、見れば飛び道具の一口商ひ、得こそは貸さじ出直せ／＼。
ヽびくと動かば一討ちと、眼を配れば。
勘平　成る程、盗賊とのお目違ひ、御尤も千萬。我れらは此あたりの獵人でござりまするが、先程の大雨に火口も濕り、難儀至極……サ、鐵砲それへお渡し申す。自身に火を付け、お貸し下さりませ。
ト鐵砲を彌五郎の前へ差置く。
ヽ他事なき詞顏付きを、キツと眺めて。
彌五　ヤ、和殿は早野勘平ならずや。
勘平　さ云ふ貴殿は千崎彌五郎。
彌五　先づは堅固で。
勘平　貴殿も御無事で。
兩人　これはしたり。
ヽ絶えて久しき對面に、主人のお家沒落の、胸に忘れぬ無念の思ひ、互ひに拳を握り合ひ、勘平は差俯向き、暫し詞もなかりしが。
ト兩人、よろしく思ひ入れあつて
勘平　アヽ、面目もなき我が身の上、古朋輩の貴殿にも、顏も得上げぬこの仕合せ、武士の冥加に盡きたるか、殿判官公のお供先、お家の大事起りしは、是非に及ばぬ我が不運、その場にも有り合さず、お屋敷へは歸られず、所詮時節を待つて御詫びと、思ひの外に御切腹。南無三方、みな師直めが爲す業、せめて冥途の御供と、刀に手はかけたれど、何を手柄にお供先、どの面下げて云ひ譯せんと、心を碎くその折柄、密かに樣子を承れば、由良之助どの御親子、郷右衞門どのを始めとして、故殿の鬱憤散せん爲、寄り／＼の思し召し立ちあるとの噂。我れらとても、御勘當の身と云ふでもなし、手がゝりを求め、由良之助どのに對面遂げ、御企ての連判に、お加へ下さらば、生々世々の面目、貴殿に逢ふは優曇華の、花を咲かせて侍ひの、一分立つて給はれかし。古朋輩のよしみ、武士の情、お頼み申す、彌五郎どの、
ヽ先非を悔いし男泣き、理りせめし不便なる、彌五郎も朋輩の、悔み道理と思へども、大事をむざと、明かさじと。
彌五　これサ／＼勘平、身の云ひ譯に取交ぜて、御企てのイヤ連判などとは、なんの痴言。左樣な噂曾てなし。某は由良之助どのより、郷右衞門どのへ急の使ひ、御廟所



文化二年七月河原崎座上演
尾上榮三郎の勘平

〽お石碑を建立せんとの催ふし。併し、我れ／＼とても浪人の身の上。これこそ鹽冶判官どのゝ、御石塔と末の世までも、人の口の端にかゝる物ゆゑ、御用金を集めるそのお使ひ、先君の御恩を思ふ人を選み出す爲、わざと大事を明かされず、貴殿も先君の御恩を思はゞ、ナ、合點か。

〽石碑に傚へ大星の、企みを餘所に知らせしは、實に朋輩のよしみなり。

勘平　ハテ、忝ない彌五郎どの、成る程、石碑を云ひ立て、御用金のお企てある事、とつくに承り及び、某も何卒して、用金を調へ、それを力にお詫びと、心は千々に碎けども、彌五郎どの恥かしや、主人の御罰で今この態、誰れに斯うとの便りもなし、尤も、かるが親與一兵衞と申すは、賤もしい百姓、我れ／＼夫婦が判官公へ、不奉公を悔み嘆き、何卒して元の武士に立歸れと、爺嫗ともに嘆き悲しむ。これ幸ひ御邊に逢ひし物語り、段々の仔細を語り、元の武士に立歸ると云ひ聞かさば、僅かの田地も我が子の爲、何しに否は申すまじ、明々日は金子調達仕り、お手渡し、何卒郷右衞門どのへお執成しを、お願ひ申す。

彌五　成る程、然らばこれより郷右衞門どのまで、右の譯をも話し、由良之助どのへ願うて見ん。明々日は必らずキツとお返事を相待つ。即ち郷右衞門どのゝ旅宿の所書を、お渡し申さう。

ト矢立を出し、鼻紙へ所書を認め、勘平に渡す。

勘平　重々お世話、忝なう存ずる。拙者が宅をお尋ねならば、この山崎の渡し場を左へ取り、百姓與一兵衞とお尋ねあれば、早速相知れ申すべし。

彌五　然らば、これにて、お別れ申すでござらう。

勘平　ア、イヤ、この行く先は猶物騷、必らずともに、御油斷召さるな。

彌五　合點々々。石碑成就するまでは、蚤にも喰はさぬこの體、御邊も堅固で御用金の、便りを相待ち申すぞ。

勘平　彌五郎どの。

彌五　勘平との。

兩人　お別れ申す。

〽さらば／＼兩方へ、立別れてぞ

トまた本雨、雷の音になり、彌五郎は上の方、勘平は橋がゝりへ入る。知らせに付き、後の黒幕、切つて落す。

本舞臺、三間の間、正面黒幕、上に松の大樹、眞中、古びたる掛け稻、深山にかけ、人出入りあり、上下藪疊、日覆より松の吊り枝、タップリと下ろし、すべて、物凄き道具、本雨、時の鐘、蛙の聲にて、よろしく道具納まる。

〽又も降り來る雨の音、人の足音とぼ／＼と、道は闇路に迷はれど、子ゆゑの闇に突く杖も、直ぐなる心堅親仁、

ト向うより、與一兵衛、脚絆、草鞋、糸立を纏ひ、菅笠を被り、杖を突き、小田原提灯を提げ出て來り、直ぐに本舞臺へ來り

與一　ア、、今の雷さまで、雨もちつと小降りになつた。いつきせつき來たせいか、思ひがけなく草臥れたが、爰から在所に一里足らず、ドリヤ、一休みして行かうか。

ト合ひ方になり、與一兵衛、掛け稻の前の石に腰をかけ、思ひ入れあつて、

さぞ今頃は、婆や娘が待ち兼ねて居るであらう、今に戻つて喜ばしてやらにやならぬ。イヤ、わしが子を褒めるぢやないが、百姓づれの娘には、生れ優つたあのおかる。聟と云ふは誰れあらう。鹽冶さまの御家中で、早野勘平どのとて立派な侍ひ、その勘平どのゝ失策りしも、元の起りは娘ゆゑ、どうぞして金拵らへ、お侍ひ様にしたいものぢやと思うた所が、山崎で僅か二反か三反の痩せ田を持つた水呑み百姓、どうか仕様はあるまいかと、親子三人談合に、文珠の智惠と娘が云ふには、祇園町へ身を賣つて、金調へて聟どのを、世に出してくれと頼むゆゑ、聟どのへは沙汰なしで、この間より祇園町の、一文字屋と相談したれば、百兩に買ふと定り、五十兩今日手附に受取つたが、明日は後金五十兩、都合拵らへて迎ひが來る筈ぢやが、沙汰をせぬとて聟どのも、その身の出世になる事なりや、なぜ勤めに出したとも云はれまい。この金さへ調へば、娘も聟も願ひが叶ひ、さぞや喜ぶ事であらうが、その喜んだ後が、永い別れに泣かずばなるまい。

ト與一兵衛、此うち、提灯を下に置き、首に掛けし金財布を出し、よろしく愁ひの思ひ入れ。氣を替へて

ア、、わしとした事が、問はず語りに金の事。畢竟あたりに聞く人がなけりやこそよけれ、人に聞かれたら、どんな目に合ふも知れぬ。ヤレ、恐ろしや／＼、斯う云ふうちも、ちつとも早く内へ歸つて、三人の喜ぶ顏が見たいわい。これを云ふもこの金ゆゑ。ア、、忝ない／＼…



寛政十三年二月中村座上演

四世市川團藏、定九郎と與一兵衛早替りの舞臺裏

……。

ト與一兵衛、金財布を押戴き、思ひ入れ。この時、掛け稲の間より、手を出し、財布を引ッたくる。與一兵衛、愕りして

ヤア、こりや財布を。

ト立ち上がる。この時、白刃出て、與一兵衛を貫く。これにて、ワッと苦しむ。時の鐘、凄き合ひ方、日暮し箭になり、掛け稲を押分け、定九郎、好みの拵らへにて出て來り、刀を拔く。與一兵衛、バッタリ倒るゝ。定九郎、思ひ入れあつて、財布を取り、口に啣へ、血刀を拭ふ。この見得、時の鐘、忍び三重。白刃を鞘に納め、財布の金を見て、ニッタリ思ひ入れあつて、首に掛け、死骸を上の方へ蹴込み

定九　五十兩、忝ない。

〽死骸を直ぐに谷底へ、刎ね込み蹴込み泥まぶれ、果には我が身にかゝるとも、知らず立つたる向うより

ト早箭になり、向うより、手負ひ猪、一散に出て來る。定九郎、愕り驚ろき、松の木へ隱るゝ。猪は舞臺を駈け歩き、上の方へ入る。定九郎出て思ひ入れ。

〽あわやと見送る定九郎が、脊骨をかけてどつさりと、肋へ拔ける二つ玉、うんともぎやつとも云ふ間なく、ふすぶり返つて死んだるは、心地よくこそ見えにける。

ト定九郎、下の方へ行きかゝる。この時ドンと本鐵砲の音して、掛け煙硝パッと立つ。定九郎、血を吐き苦しみ、よろしくあつて、バッタリ倒れる。時の鐘、床の合ひ方になり、向うより、以前の勘平、火繩を振つて出て來り

〽猪撃ち留めしと勘平は、鐵砲引提げ爰かしこ、探り廻つて

ト勘平、舞臺へ來り、探り廻つて、定九郎の懷中より、金財布を引出し、いろ〳〵思ひ入れあつて、押戴き行かうとする。財布の紐、定九郎の首にかゝりあるゆゑ、定九郎起き上がる。勘平、この紐を手繰つて、南無三と驚ろき、山刀にて、紐を切る。これにて、定九郎、バッタリ倒るゝ。

〽猪より先へ、一散に、飛ぶが如くに。

ト鐵砲を抱へて向うへ入る。この見得、よろしく道具ぶん廻す。

六段目　　與一兵衛内の場

役名――早野勘平、千崎彌五郎。不破數右衛門。與一兵衛女房、おかや。同娘、おかる。一文字屋才兵衛、ぜげん、源六。獵人、めつぽ小彌八。同、種ケ島の六。同、狸の角兵衛。

竹本連中

本舞臺、三間の間、藁葺きの平舞臺、向う鼠壁、暖簾口、上の方、一間反古貼りの障子屋體、例の所、門口、下の方に盥、手桶、上の方に鏡臺直し、爰におかる、やつし女房の形にて、髪結うてゐる。三崎踊りの唄にて道具納まる。

ト下手よりおかや、やつし婆の形にて、澁團扇を持ち出て來り

かや　オヽ、娘、髪結うたか。美しう、よう出來ましたわいの。イヤモウ、在所はどこもかも麥秋時分で忙がしい。今も藪際で、若い衆が麥刈り唄で、親仁出て見や婆連れてと、唄ふを聞きて親仁どのゝ遲いが氣にかゝり、在口まで行たれど、影も形も見えぬわいの。

かる　サイナア、こりやマア、どうして遲い事ぢややら。わたしが一走り見て來ようわいの。

かや　イヤ／＼、若い女子の獨り歩きはいらぬ事。殊に其方は幼ない時から、在所を歩く事さへ嫌ひで、鹽冶さまへ御奉公にやつたれど、どうでも草深い所に緣があるやら戻りやつたが、勘平どのと二人居やれば、おとましい顏も出ぬわいの。

かる　母さんとした事が、そりや知れた事いな。好いた男と添ふのぢやもの、在所は愚か、貧しい暮らしでも、なんの苦になりませうぞいな。やんがて盆になつて、とさま出て見やかゝん連れてと云ふ唄の通り、勘平どのとたつた二人、踊り見て行きやんせう。お前も若い時、覺えがござんせうがな。

かや　何を云やるぞいな。ハヽヽ。

〽差合くらぬぐわら娘、氣もわさ／＼と見えにける。

なんぼ其やうに面白をかしう云やつても、心の内はの。

かる　イエ／＼、濟んでござんす、主の爲に祇園町へ勤め奉公に行くは、兼ねて覺悟の前なれど、年寄つた父樣の、世話やかしやんすのがな。

かや　コレ〳〵、そりや云やんな。小身者なれども、兒も鹽冶さまの御家來なれば、外の世話するやうにもないわいの。

〽親子話しの中道傳ひ、駕籠を舁かせて急ぎ來るは、祇園町の一文字屋。

トてんつゝになり、向うより源六、半合羽、紺の脚絆藤倉草履を穿き、出て來る。後より、一文字屋、羽織着流しにて、駕籠に乘り、駕籠舁き二人、駕籠を舁き出て來り、花道にて

源六　モシ、親方、向うの內が、奉公人の內でござります。

才兵　もう來たか。さて〳〵後の畷は、暑い事であつた。蔭と云つちやア微塵もなかつた。

源六　イヤモウ、あすこは名代の所サ……サア、駕籠屋さん、向うの內へ下ろして下せえ。

駕籠　畏まりました。

ト本舞臺へ來り、駕籠を下ろし、源六、門口へ來り

源六　お頼み申します。與一兵衞どのはお內かな。

ト母、門口を明けて見て

かや　オヽ、これはこの間お出でなされた京のお方。遠い所を、ようお出でなされました。コレ〳〵娘、京からお見えなされたぞや。

源六　サア、親方、マア、お入りなされませ。

才兵　ドレ、御免なされませ。アヽ、今日も暑い事でごんしたの。

ト內へ入り、上手へ住ふ。

かや　ハイ〳〵これは、ようお出でなされました。コレ娘、お茶が出來るであらうの。

かる　アイ〳〵、今お煮花が出來ましたわいの。

ト茶を汲んで出す。

才兵　ア、イヤ〳〵、構はつしやりますな。時に昨夜は、きつい雷でごんしたの。

ト云ひながら、おかるの顏を見る。源六、才兵衞の袖を引く。

源六　モシ、親方、どうでござります。

才兵　極上云ひ分なしの玉だなう。

源六　なんと、どんなものだえ。ハヽヽ、時に昨日は親仁とのも、いかい御大儀でごんしたの。さうして昨夜、別條なく戻られたかの。

かや　エヽ、そんなら親仁どのと、連れ立つてゝはござり



萬延元年五月中村座上演

八世片岡仁左衛門の才兵衛

ませぬか。ハテナウ、お前へ行かれてから、今になつて戻られませぬわいの。

源六　ハテ、それは面妖な……そんならもしや稲荷の前でいゝれこにでもつまゝれやアしねえか知らん。眞逆さうでもあるめえ……それはさうと、阿母や、今日爰へ奉公人の御主人をお連れ申したから、ちよつとお近付きになんなせえ。

かや　エヽ、そんならあなたが、今度娘をお抱へなされまする、親方様でござりまするか。これはマア、不思議な御縁で、穢くろしい所へ、ようマアお出でなされました。

才兵　こりやア阿母かえ、與一兵衛どのには、この間から逢ひましたが、お前には初めて。わしや一文字屋の才兵衛でござります。娘御の事は、必らず案じさつしやるな。

かや　ハイ〳〵、何分あなた、お頼み申しまする。

源六　時に阿母、この間相談して定めた通り、お娘の年も丸五年で、給金はサラリと手を打つて、昨夜親仁どのゝ云はるゝには、今夜中に渡さねばならぬ金があるゆゑ、直ぐに證文認めて、百兩の金をお貸しなされて下されと、泪をこぼしての頼みゆゑ、證文の上で半金渡し、後金は奉公人と引替への約束、何がその五十兩を受取るが最期、喜び勇んで戻られたは、四ツでもあらうかい。夜道と云ひ、金を持つて、連れはなし、いらぬものといろいろ留めたを聞入れず、戻られたが、但しはどこぞ。

かる　イエ〳〵、寄らしやんす所は、ナウ母さん。

かや　ないとも〳〵。殊に一時も早う、其方やわしに金見せて、喜ばさうとて、息急き戻らつしやる筈ぢやに、合點のゆかぬ。

源六　これサ〳〵、合點のゆかぬは其方の詮索、此方は殘りの金を渡し、奉公人を連れて行かにやアならぬ。モシ、親方、後金を渡して行きませう。

才兵　オヽ、これが後金五十兩。昨夜の五十兩と都合百兩、改めて渡してくりやれ。

ト才兵衛、懐より、財布に入れし五十兩を取出し、源六に渡す。

源六　サア、後金の五十兩、しつかりと渡しましたぞ。

ト金を母に渡す。

かや　左樣でもござりませうが親仁どのゝ戻られぬうちはナウおかる。

かる　いま戻つてゞござりませう。どうぞそれまで

源六　ハテ、愚図々々と埒の明かぬ。コレ、ぐつともすつとも云はれぬ、與一兵衞どのゝ印形、證文が物を云ふわい。今日から金で買ひ切つた體、一日違へばレコづゝ違ふ。サア、親方ござりませ。

才兵　成る程、さうぢや。そんならわれは、奉公人を連れて、先へ行きや〱。

源六　畏まりました……サア、お娘、行かうわい〱。アア、どうで斯うせざア濟むまいわえ。

トおかるが手を取つて、無理に駕籠に乘せ、母は五十兩を受取るまいとする、無理に渡す。

〽無體に駕籠へ押込み〱、舁き上げる門の口、鐵砲に簑笠打かけ、戻りかゝつて見る勘平。

ト皆々花道へ行きかゝる。テンツヽになり、向うより勘平、鐵砲へ簑笠を付け、これを擔ぎ出て來り、花道にて、行き合ひ、勘平、おかるを見て

勘平　ヤ、おかるぢやないか。

かる　勘平どの。

勘平　コレおかる、駕籠へ乘つて、どこへ行くのぢや。

かる　サア、これは。

勘平　獵人の女房が、お駕籠でもあるまいわい。

トおかる、思ひ入れ。

なんであらうと、この駕籠戻して下せえ。

ト源六は駕籠をやれと云ふ。勘平は棒鼻を押へて本舞臺へ來る。母、勘平を見て

かや　ヤヽ、勘平どの、好い所へ、よう戻つて下されたなう。

勘平　ハイ、只今戻りましてござりまする。

ト才兵衞、間の惡き思ひ入れ。源六、おかる、内へ入る。勘平、門口へ腰をかける。脚絆を取り、おかる、盥へ水を入れ、足を洗ひながら

母者人、さて〱きつい雷でござりましたが、お前樣は日頃から雷嫌ひ、大抵お案じ申した事ぢやアござりませぬ。

かや　ほに強い雷であつたわいの。それはさうと、どこも彼所も、ビツシヨリになりやつたの。

勘平　折角洗濯をした着物を、臺なしに致しました……モシ、母者人、あそこにお出でなさるゝお方は、どこのお方でござりまする。

かや　あのお方はの。

トもぢ〳〵して居る。

勘平　コレ、おかる。どこのお方ぢや。

かる　あのお方はの、

勘平　エヽ、其方までが同じやうに。

ト勘平、紋付きの着物に着替へ、母、以前の着物を片付ける。勘平、思ひ入れあつて

これには何ぞ深い譯が。母者人、女房ども、その様子聞からかい。

〽様子聞かうと家の眞中、どつかと坐れば以前の男。

源六　エヽ、さてはこなたが、奉公人の御亭主か。例へ亭主でもなんでも、脇より故障申す者これなく候ふと、親仁の印形があるからは、此方は構はぬ。金を出して連れて行くのだ。五分でも此方に引けはねえのだ。マア、さう思つてもらはうかい。

勘平　母者人、一貫合點が参りませぬ。こりや、どう云ふ譯でござりまする。

かや　オヽ、聟どの、合點がゆくまい。兼ねてこなたに金の要る様子、娘の話しで聞いたゆゑ、どうぞ調へて進ぜたいと、云うたばかりで一錢の當もなし、そこで親仁どのゝ云はつしやるには、ひよつとこなたの氣に、女房賣つて金調ふと、サよもや思うてゞはあるまいけれど、もし兩親の手前を遠慮して、居やつしやるまいものでもない、いつそこの與一兵衞が、聟どのに知らさず、娘を賣らう、まさかの時に切取りするも武士の習ひ、女房を賣つても恥にはならぬ、お主の役に立てる金、調へてやつたなら、萬ざら腹も立つまいと、昨日から祇園町へ、取極めに行つて、今に戻らつしやれぬゆゑ、親子案じて居る中へ、この衆が見えて、昨夜親仁どのに半金渡し、後金の五十兩と引替へに、娘を連れて去なうと云うて居れど、親仁どのに逢うての上と、譯を云うても聞入れず、いま連れて行かつしやる所。勘平どの、こりや、どうしたものであらうぞいの。

勘平　それで様子が、ガラリと判りました。先づ以て親仁様のお志し、お前様の思し召し、女房どもが深切、有り難うござりますが、もう女房どもを賣りますにも及びませぬ。ちつと此方に、好い事がござりまして。

かや　好い事とは耳寄りな。

かる　どう云ふ事でござんすぞいな。

勘平　好い事とは、昨夜不思議ゝ。

トあたりへ思ひ入れあつて



萬延元年五月中村座上演



四世尾上菊五郎のおかる　中村福助の勘平

それはマア、追つてお話し申しませう。先づ親仁様も戻られぬに、女房どもは渡されまい。

源六 これサ〳〵、金で買つた奉公人が、なぜ渡されねえのだ。

ト勘平、源六を見て

勘平 母者人、あなた方は、どこのお方でござります。

かや オヽ、彼方のが祇園町の旦那様で、此方のお方はお手代様ぢやわいの。

勘平 左様でござりますか。

ト才兵衛に向ひ

存ぜぬ事とて先刻よりの失禮、眞平御免下さりませ……何がさて、渡すの渡されぬのと、申す事もござりませぬが、云はゞ親なり判がゝり、尤も昨夜半金の五十両は、渡されたであらう、けれど

源六 モシ〳〵、御亭主さん、あらうけれどとは何でござります。けれどでは濟みやせぬ。憚りながら判人の源六と云はれちやア、京大坂は云ふに及ばず、江戸長崎までも顔を賣つた男だ。仲間の者にもちつとやそつと立てられて、初穂茶の一杯も呑む男だ。また親方と云ふのは、祇園町での色問屋、女護の島ほど奉公人を抱へる置き屋だ。そんなねすり事で行くのぢやない。渡さにアいゝわえ。この村にも名主もありやア庄屋もあらう。案内しろ、代官所へ持ち出して、渡すとも渡さぬとも、高い目で見てもらはう。サア、キリ〳〵と歩びやアがれ。

ト源六、立ちかゝり、キッとなる。才兵衛、留めて

才兵 コレサ〳〵、源六、何をそんなに聲高に云ふのだ。大きな聲をしねえでも解る事だ。

源六 それだと云つて、こんな解らねえ掛合ひをしたかとお前さんに思はれちやア濟まねえ。

才兵 イヽサ、おれに濟まねえなア尤もだが、さう聲高に云つても解らねえ。マア、靜かにしやれ。

源六 そりやア、お前さんの仰しやる事だが、あんまり解らねえ。

才兵 マア、いゝから其方へ行つて居なよ。

ト源六、扣へる。一文字屋、勘平に向ひ

ハヽヽヽヽ、左様ならお前が、奉公人の御亭主さんでござりますか。

勘平 ヘイ。

才兵 こりやお前、お初にお目にかゝります。

勘平 不思議な御縁であなた様にも、お初に御意得ました。

今日は遠方、所を、ようこそお出で下さりました。
才兵　マア／＼、そんなに手を突かずと、お手をお上げなさい／＼。
勘平　ヘイ／＼。
才兵　さて、只今段々と源六とのお掛合ひ、何かそこには間違ひがあつて、あの男も不行屆きな掛合ひをしては、わたしの前へ濟まぬと存じまして、今のやうに聲高に申しましたが、何を申すも商賣づく、お氣に障つたでござりませうが、そこはマア、御料簡下さりませ。
ト思ひ入れ。勘平も思ひ入れ。
一體この事は、いま源六が荒方申す通り、先達てから此方の親仁どのが、度々通つての頼み。わつちが方にも奉公人は、減らしたい程の事でもあり、ならう事なら斷りたい時節なれど、年寄りが度々の頼みゆゑ、さう云ふ事ならば、と先づあの源六に云ひ付け、奉公人を見屆けて、百兩と取極めをして……マア／＼、口で斯う云つても、お前の合點がゆくまい。マア、早く解るがいゝ。
ト懷より、證文を出し
私しの方には、此やうな堅い證文が取つてござります。年季は五年で百兩、半金渡しで五十兩。

ト此せりふのうち、勘平、思ひ入れあつて
勘平　憚りながら、そのお證文を、ちよつと拜見は出來ますまいかな。
才兵　アノ、この證文をかえ。
勘平　どうぞちよつと。
才兵　ヘイ、サア、御覽なせえ。
ト證文を出す。勘平、取つて讀み、母に向ひ
勘平　母者人、この印形は、親仁樣のに相違ござりませぬかな。
ト母見て
かや　相違ござりませぬわいの。
勘平　左樣なら、親仁樣のに相違ござりませぬかな。
ト證文を卷き、才兵衞に向ひ
成る程、親與一兵衞の印形に、相違ござりませぬ。
ト證文を才兵衞へ返す。才兵衞、受取り
才兵　そんなら、親仁どのゝ印形に違ひござりませぬかな……そこでお聞きなさい、約束の五十兩、親仁どのに渡したら、喜び勇んで手拭に卷いて行くから、そりやア危ねえ、わしが下着の出裂れで、財布を二つ拵らへたが、一つは今おれが持つて來た、その財布の中へ入れて、首

へかけて行きなせえと貸してやつたが、直ぐに歸らうと云ふから、待ちなせえ、もうコレ五ツ過ぎでもあり、夜道を一人で危ねえ、今夜は泊つて、明日の朝歸んなせえと云ふのを、振りもぎつて行つたのは、大方四ツでもあらうか。

ト勘平、財布へ目を付け、煙管を落し、心付き

勘平　左樣ならあなた、なんと仰しやります。その財布を與一兵衞に、お貸しなされましたか。

才兵　オヽ、その財布を貸したのよ。

勘平　アノ、その縞の……ちよつとお見せ下さりませ。

才兵　ムウ、サア見なせえ。

ト財布を見せる。勘平、手に取り

勘平　おかる、茶を一つくりやれ。

かる　アイ。

〽側あたりへ目を配り、袂の財布見合せば、寸分違はぬ糸入り縞、南無三方、さては昨夜鐵砲、擊ち殺したは舅であつたか、はアはつと我が胸板を二つ玉で、擊ち拔かるゝより切なき思ひ。

トおかる、茶を汲んでくる。勘平、茶を吞む振りにて文句の通り、よろしくあつて、茶にむせる。おかる、脊中を撫る。

〽とは知らずして女房は。

かる　コレ、こちの人、そわ／＼せずと、やるものかやらぬものか、分別して下さんせいな。

勘平　あのやうに、慥かに云はるゝからは、行きやらずばなるまいかい。

かる　アノ、父樣に逢はいでもかえ。

勘平　イヤ／＼、親仁樣には今朝、ちよつと逢うたが、まだ／＼戻りは知れまいわい。

かる　エヽ、母さん、父さんに逢うたといの。

かや　嬉しや／＼。そんなら親仁どのに逢はしやつたか。コレ娘、親仁どのに逢うたといなう。

かる　サイナア、逢うたら逢うたと、こちの人も、早う云うたがよいわいの。

かや　あなた、聟どのが親仁どのに、逢ひましたといの。

源六　それ見なせえな、七度探して人を疑へぢや。親仁の在所の知れたので、其方も安堵、わしまでも落ちついたこの上に四の五のがあれば、嫌ながらでんど沙汰にせにやアならぬ。マア／＼、道行が解つて、こんなめでたい事はない。

才兵　コレ阿母、六條詣りさしつたら、必らず尋ねて寄らんせ。祇園町の中程ぢや。イヤ、兎や角云ふうち、片影が出來た。歸り道でも五里餘りぢや。サア、源六、支度しやれ。

源六　畏まりました。サア、お娘、行きませうぞ。

かる　ハイ、參る事は參りますが、少しの間、お待ちなされて下さりませ。

源六　アヽ、あるやつだ。どうで別れは惡いものだ……旦那、表で待ちませう。

ト才兵衛、源六、門口へ出て、立ちかゝり居る。

かる　母さん、もう參らねばなりませぬわいなア。

ト勘平の側へ來て

コレ、勘平どの、年寄つた二人の親達、どうでお前のみんな世話、取分けて父樣は、きつい持病、氣を付けて下さんせ。エヽ。

〽親の死目を露知らず、賴む不便さいぢらしさ、母は傍へ差寄つて。

かや　オヽ、聟どの、夫婦の別れ、暇乞ひがしたかろけれど、其方に未練な氣も出やうかと、思うての事であらう。

かる　エヽモヽ、母さんとした事が……イエ〳〵、なんぼ別れても、主の爲に身を賣れば、悲しうもなんともござんせぬ。シタが、父樣に逢はずに行くのが。

かや　オヽ、それも戻らしやつたら、ツイ逢ひに行かつしやろぞいの。隨分煩らはぬやうに灸据ゑて、息災な顏見せに來てたも。鼻紙扇もなけりや不自由な。なんにもよいかや。とはついて怪我しやんなや。なんの因果で人並な娘を持つて、この悲しみを見る事ぢやぞいなう。

〽齒を喰ひしばり泣きければ。

かる　母さん、もう何にも云うて下さんすな。勘平どの、そんなら、もう行くぞえ……さらばでござんす。

ト行きかゝるを

勘平　アイヤ、おかる待ちや。

かる　アイ。

ト勘平の側へ來る。勘平抱きしめ、思ひ入れあつて

勘平　達者で居やれ。

かる　ハアヽ。

ト泣き伏す。源六、内へ入り

源六　サア〳〵、どうで水離れは惡いものだ　早く駕籠に乘らしやれ〳〵。

〽情なくも駕籠舁き上げ、道を早めて急ぎ行く。

トおかるを駕籠に乘せ、才兵衛、源六、付添ひ、向うへ入る。おかや、後見送り、内へ入り

かや　アヽ、出ない事云うて、娘もさぞ悲しからう。

ト勘平を見て

オヽ、こな人わいの、親の身でさへ思ひ切りがよいに、女房の事ぐづ／＼思うて、煩らうて下さるな……この親仁どのは、まだ戻らしやれぬ事かいなう。イヤ、最前こなた、逢うたと云はつしやつたの。

勘平　エヽ、成る程、お目にかゝりました。

かや　そりやマア、どこらで逢はしやつて、どこへ別れて行かしやつたぞいの。

勘平　サア、そのお別れ申した所は。

かや　別れた所は。

勘平　鳥羽か、アイヤ、伏見か。

〽淀竹田、口から出次第滅法彌八、種ケ島の六、狸の角兵衛、所の獵人三人連れ、親仁の死骸に蓑笠着せて、戸板に乘せ、どや／＼と内に入り。

ト此うち、向うより、彌八、六、角兵衛の三人、山裁付け、ほくそ頭巾、山刀を差し、鐵砲を持ち、與一兵衛の死骸に蓑打着せ、戸板に乘せ、舁き出て來り、直ぐに内へ入り

彌八　サア／＼婆どの、夜山しまうて戻りがけ、爰の親仁どのが殺されて居られたゆゑ

三人　獵人仲間が連れて來ましたぞや。

かや　アヽ、コレ、皆の衆とした事が、又いつものやうに酒呑まして、舁いて來たのでござらうの。そんならさうと云うたがよい。こちにもちと氣の揉める最中、滑稽も大概に云たがよいわいの。

三人　イヤ、おどけぢやござらぬ、佛でござるわいなう。

かや　エヽ、まだ云はつしやるかいなう。コレ、親仁どの親仁どの。

ト此うち、勘平、モヂ／＼して術なき思ひ入れ。三人捨ぜりふにて、母を死骸の側へ突きやる。母、何心なく死骸にかけし蓑を取り見て愕り。

〽見るよりはつと驚ろく母。

ア、、こりやマア何者の仕業。コレ聟どの、殺した奴は何者ぢや。敵を取つて下されいなう。コレ、親仁どの親仁どの。

〽呼べど叫へどその甲斐も、泣くより外の事ぞなき、獵人どもは口々に。

彌八　オヽ、阿母、悲しかろ、泣かつしやるは道理〳〵。コレ、阿母、こちの聟どのは、元は歴とした武士の浪人ぢやげな。

六　そんなら此方も猶強身ぢや程に、なんでも代官所へ願うて、敵を討つてもらはつしやれ。

角兵　モシ、そんな事があつたなら、わしらも寄つて、助鐵砲でも打つてやりませうぞや。

三人　アヽ、笑止〳〵。

〽笑止々々と打連れて、皆々我が家へ立歸る。

ト三人、向うへ入る。

かや　コレ〳〵、親仁どのが殺されて居るわいの……誰れが殺した。親仁どのいなう。

〽母は泪の隙よりも、勘平が側へ差寄つて。

トおかや死骸へ取付き、いろ〳〵こなし。勘平の側へ來て

コレ、聟どの、よもや〳〵とは思へども、合點がゆかぬなんぼ以前が武士ぢやとて、舅の死目見やしやつたら、悔りもしやる筈。こなた、道で逢うた時、金受取りはさつしやらぬか。親仁どのが、なんと云はしやつた。サア、云はつしやれ。サア、なんと……どうも返事はあるまいがの。云はれぬ證據は、これ爰に。

〽勘平が懐に、手を入れて引出す財布。

ト母、勘平の懐へ手を入れ、財布を引出し

先刻にチラリと見て置いたこの財布。コレ、血の付いてあるからは、こなたが親仁どのを殺さしやつたの。

ト勘平の胸倉を取る。

勘平　イヤ、それは

かや　それはとは、エヽ、こなたはなう……隱しても隱されぬ。天道樣が明らかな。親仁どのを殺して取つたその金は、誰れにやる金ぢや……オヽ、聞えた。身貧な舅、娘を賣つたその金を、中で半分くすねて置いて、皆やるまいと思うて、こりや殺して取つたのぢやな。今と云ふ今までも、律義な人ぢやと思うて、騙されたが腹が立つわい。エヽ、茲な人でなし。あんまり呆れて泪さへ出ぬわいやい。

〽ないとしや與一兵衞どの。

畜生のやうな聟とは知らず、どうぞ元の侍ひにしてやりたいと、年寄つて夜の目も寝ずに

〽京三界を駈け歩き。

世話さしやつたも却つてこなたの、身の仇となつたるか、

飼ひ犬に手を噛まるゝと、ようも〳〵此やうに、酷たらしう殺された事ぢやなう。コリヤ、慈な鬼よ、蛇よ、親仁どのを生けて戻せやい。

〽遠慮會釋も荒男の、髻を摑んで引寄せ〳〵、叩き付け、

ト母、勘平が髻を摑み、引寄せ〳〵、散々に打つ。

ずた〳〵に切り苛なんでも、これでなんの腹が癒やうぞいやい。

〽恨みの數々口說き立て、かつぱと伏して泣き居たる、身の誤まりに勘平も、五體に熱湯の汗を流し、疊に喰ひ付き天罰を、思ひ知つたる折こそあれ、深編笠の侍ひ二人。

ト在鄕唄になり向うより、數右衞門、彌五郎、野袴、ぶッ裂き羽織、深編笠にて出て來り、花道へとまり。

彌五　即ちあれが勘平の宿所でござる。

數右　然らば千崎氏。

彌五　先づ〳〵。

ト兩人、舞臺へ來り、門口にて

數右　早野勘平在宿召さるか。不破數右衞門。

彌五　千崎彌五郎。

兩人　御意得たし。

〽と訪へば、折惡しけれど勘平は。

勘平　母人者、表に誰れやら案内がござります。

かや　おのれ逃がさうか。

ト勘平に武者振り付くを、宥めながら

勘平　必らず逃げは致しませぬ。しつかりと付いてござりませ。

ト勘平、母を腰へ付け、刀を持ち、門口を明け、兩人を見て

ム、、、ハ、、、これは〳〵御兩所とも、見苦しき茅屋へ、ようこそ御入來。

數右　見れば家內に取込みのある樣す。

勘平　アイヤ、すんど些細な內證事。お構ひなくとも、イザ先づあれへ、お通り下されい。

兩人　然らば御免。

〽ずつと通り座に付けば、二人が前に兩手を突き。

勘平　この度殿の御大事に外れたるは、拙者が重々の誤まり、申し開かん詞とてもなし。何卒某が科、お赦しを蒙むり、亡君の御年忌、御家中諸とも相勤むるやう、御兩所のお執成し、偏へに願ひ奉る。

〽身をへり下り述べければ、數右衞門とりあへず。

數右　先づ以て其方、貯へなき浪人の身を以て、多くの金子、御石碑料に調達せられし段、由良之助どの甚だ感じ入られしが、石碑を營むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせし其方の金子を以て、御石碑料に用ひられんは、御尊靈の御心にも叶ふまじとあつて、金子は封の儘相戻さるゝ。彌五郎どの。ソレ。

彌五　心得ました。

〽詞のうちより彌五郎、懷中より金取出し、勘平が前に差置けば。

ト文句の通り、よろしくある。

勘平　すりや、この金子は、御用には立ちませぬか……アノ御用には。ホヽホイ。

〽はつとばかりに氣も轉倒、母は泪と諸ともに。

かや　コリヤ、爰な惡人づら。今と云ふ今、親の罰を思ひ知つたか。皆樣も聞いて下され。親仁どのが年寄つて、後生の事も思はずに、聟の爲に娘を賣り、金調へて戻らしやる。道に待伏せして、あのやうに殺して取つた金ぢやもの、天道樣がなくば格別、なんで御用に立つものぞ。舅殺しの生盗人に、罰を當てゝ下されぬのは、神や佛も聞えませぬ。あの不孝者、お前方の手にかけて、嬲り殺しにして下さりませ。わしや腹が立つ、腹が立つわいなう。

〽身を投げ伏して泣き居たる。聞くに驚ろき兩人は、刀押取り弓手右手に、詰めかけ／＼彌五郎聲あらゝげ。

彌五　ヤイ勘平、非義非道の金取つて、身の科の詫びせよと、この彌五郎は申したか。われがやうな人非人、武士の道は耳に入るまい。親同然の舅を殺し、金を盜んだ重罪人、大身鎗の田樂刺し、拙者が手料理振舞はうか。

〽はつたと睨めば數右衞門。

數右　ヤレ彌五郎どの、待たつしやい、貴殿の詞尤もなれど、マヽお下にござれ……コリヤヤイ勘平、渇しても盜泉の水を呑まずとは義者の戒め。舅を殺し取つたる金亡君の御用金になるべきか、生得汝が不忠不義の性根にて、調へたる金と推察あつて、戻されたる大星どのゝ眼力、天晴れ／＼。さりながら、情なきは、この事世上に流布あつて、あれ見よ、鹽冶判官の家來早野勘平、非義非道を行ひしと云はゞ、汝ばかりの恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか、白痴け者め。さほどの事の辨まへなき、汝にてはなかりしが、如何なる天魔が魅入りしや。チエヽ、情なき心ぢやなア……彌五郎どの、如何やうに

申せばとて、牛に經文、詞交すも身の穢れ、少しも早く由良之助どのゝ旅宿へ立越え、この旨委細申し達するでござらう。

彌五　左樣仕らう。イザ、數右衞門どの。

數右　彌五郎どの、サ、お立ちやれ。

　ト立ち上がるを、勘平、留めて

勘平　御兩所、先づ〳〵暫らくお待ち下さりませう。亡君の御恥辱とあれば、一通り申し開かん。御兩所とも、お下にござつて一通り、お聞きなされて下さりませ……夜前彌五郎どのにお目にかゝり、別れて歸る道々も、金の工面に兎や角と、心も暗き暗紛れ、山越す猪に出合ひ、二つ玉の強藥、切つて放てば誤またず、慥かに手應へ。駈け寄り見れば、こは如何に、猪にはあらで旅の人。南無三方、藥はなきかと懷中を、探して見れば手に當る金財布。ア、道ならぬ事とは存じながら、天より我れへ與ふる金と押戴き、直ぐに追ツ付き、貴殿にお手渡し致し、徒黨の數に入つたりと、喜び勇んで家へ歸り、樣子を聞けば情なや、金は女房を賣つた金、撃ち留めたるは。

兩人　撃ち留めたるは。

勘平　舅どの。

　ト勘平、白刃を拔き、腹へ突ッ込む。

兩人　ヤ、なんと。

　ト竹笛入りの合ひ方になり

勘平　如何なればこそ勘平は、三左衞門が嫡子と生れ、十五の年より御近習勤め、百五十石頂戴なし、代々鹽冶の御扶持を受け、束の間御恩を忘れぬに、色に耽つたばつかりに、大事の場所にも居り合さず、御仇討の連判へ、加はりたさに調達の、金も却つて石瓦、鵙の嘴と喰ひ違ふ、云ひ譯なさに勘平が、切腹なしたる身の成行き、御兩所、御推量なされて下されい。

　ト血走る眼に無念の泪、仔細を聞くより彌五郎ずんど立ち上がり、死骸引上げ打返し、疵口改め。

彌五　これ見られよ數右衞門どの、鐵砲疵には似たれども、こりやコレ刀で抉りし疵。

　ト數右衞門、見て

數右　イヤナニ千崎どの、これにて思ひ當つたるは、御自分も見られし通り、これへ參る道端に、鐵砲受けたる旅人の死骸、立寄り見れば斧定九郎、強慾非道な親九太夫さへ見限つて勘當したる惡黨者、身のたゞずみなきまゝに、山賊なすと聞きつるが、疑ひもなく勘平が、舅を討



嘉永四年二月市村座上演　八世市川團十郎の勘平
市川九藏の數右衛門　嵐小六のおかや　三世嵐吉三郎の彌五郎

つたは彼奴が仕業。コリヤ勘平。
兩人　早まつた事いたしたなア。
〽云ふに手負も見て悔り、母も驚ろくばかりなり。
かや　エヽ、そんならアノ親仁どのを殺したは、外の者でござりまするか。
兩人　如何にも。
かや　コレ、聟どの、手を合して拜みます。年寄りの愚痴な心から、恨み云うたはみな誤まり。堪えて下され、勘平どの、必らず死んで下さるな。
〽泣き詫ぶれば顏振上げ。
勘平　母人、お疑ひは晴れましたか。御兩所ともに、お疑ひは晴れましたか。
ト兩人うなづく。
エヽ、忝ない。母人、歎いて下さるな。舅御の御最期も、女房の奉公も、反古にはならぬこの金子、一味徒黨の御用金、早く／＼。
〽云ふに母も泪ながら、財布と共に、二包み、二人が前に差出し。
かや　勘平どのゝ魂ひの、入つたるこの財布、聟どのぢやと思うて、敵討のお供に、連れてござつて下されませ。

數右　思へば／＼この金は、縞の財布の紫摩黃金。
彌五　聟と舅の七々日、四十九日や五十兩。
數右　合せて百兩百ケ日の、追善供養は老母の役。
彌五　あと懇ろに弔らはれよ
數右　佛果を得よや。
兩人　早野勘平。
勘平　ヤア、佛果とは穢らはしい。死なぬ／＼、魂魄この土に留まつて、敵討、御供なさいで置かうか。
〽突ツ込む刀引廻せば。
數右　ヤレ引廻すな勘平。今端の際に申し聞かす一條あり、思はずも其方が、舅の敵討つたるは、未だ武運に盡きざるところ、弓矢神の御惠みにて、一つの功の立つる其方、その志しを感じ、某が寸志。息あるうちに見する物あり……彌五郎、ソレ。
ト彌五郎、門口を窺ふ。
〽懷中より一卷を取出だし、さら／＼と押開き。
この度亡君の敵、高師直を討取らんと、神文を取交せし、一味徒黨の連判狀。
勘平　して、姓名は誰れ／＼なるぞ。
彌五　徒黨の人數は四十五人。

數右　汝が心底見屆けたれば、其方を差加へ、一味の義士は四十六人、これを冥途の土産にせよ。

勘平　ムウ。

〽懷中の矢立取出し、姓名を書き記し。

ト數右衛門、連判狀へ姓名を記し

兩人　勘平、血判。

勘平　心得た。

〽心得たりと、腹十文字に搔き切つて、臟腑を摑んでしつかと押し。

ト勘平よろしく、血綿を摑み出し、連判へ押す。數右衛門、取上げ

數右　血判慥かに

兩人　受取つた。

〽哀れ果敢なき。

ト本釣り鐘、此うち、數右衛門、彌五郎、思ひ入れあつて門口へ出る。勘平、刀にて咽喉を搔く。母取付き愁ひの思ひ入れ、勘平、落入る。皆々よろしく、三重にて

幕

七段目　祇園一力の場

竹本連中

役名――大星由良之助、大星力彌、斧九太夫。鷺坂伴內、大鷲文吾、矢間重太郎、竹森喜多八、寺岡平右衛門、遊女、おかる。

本舞臺、三間の間、高足の二重、本緣付き、正面、白洲梯子をかけ、うしろ一面の長暖簾。上の方に二階家、手摺り付き、引拔きの障子、九ツ梯子、手水鉢、吊り燈籠、手拭掛け。庭に飛び石の捨て石、すべて、祇園町一力揚屋のかゝり、爰に赤前垂れの仲居四人、立ちかゝり居る。花に遊ばゝの唄にて、賑やかに幕明く。

ト直ぐに踊り地になり

仲一　なんと皆さん、見やしやんせ。日每に見ても見飽きぬは、祇園町の夕景色。

仲二　ソレイナア、軒端に並ぶ提灯の、水に映れば闇の夜も、河原を照らす星の影。

仲三　藝子さん方幇間衆の、囀ぎの唄の新文句、東訛りを加茂川で、洗うて見たい京の水。
仲四　ほんに自惚れぢやないけれど、江戸さん方も中々に、きやうといもので
四人　ござんすなア。
ト幕明きの唄になり、向うより、伴内、出て、枝折りの所へ來り
伴内　コレ〳〵、誰れか居らぬか。亭主は居ぬか。
亭主　ヘイ〳〵、ヤレ〳〵、忙しい事ではある。
ト亭主、出て、門口へ來り
これは、どなた樣でござりましたか。ようお出でなされました。
伴内　イヤ、手前事は、この家へ參つて居らるゝ九太夫どのに、ちと用事あつて參つた者ぢや。
亭主　左樣なら、あなたが九太夫さまのお連れ樣でござりまするか。それなれば先刻から、あなたをお待兼ねでござりまする。
伴内　アヽ、左樣かな。して、九太夫どのは、どれに居らるゝ。
亭主　ヘイ、奧二階にお出でござりまする。

伴内　然らば亭主、案内しやれ。
亭主　サア、斯うお出でなされませ。
ト亭主案内して伴内、奧へ入る。踊り地になり、向うより、大鷲文吾、矢間重太郎、竹森喜太八、ぶッ裂き羽織、大小にて、出て來り、後に平右衛門、菖蒲革の形にて、附添ひ出て來り、直ぐに舞臺へ來り
文吾　重太郎どの、喜太八どの、これが彼の由良之助どのの遊び茶屋、一力と申すのでござる。
重太　イカサマ、承り及んだ揚屋。
喜太　賑はしい儀でござる。
文吾　コリヤ〳〵、平右衛門、好い時分に呼び出さう。お身は勝手に扣へてお居やれ。
平右　畏まりました。よろしうお願ひ申し上げまする。
ト平右衛門、三人の草履を持つて下手へ入る。
重太　誰ぞ頼みたい。
三人　案内頼む。
トこれにて、仲居、皆々出て、三人を見て
仲一　アイ〳〵……どなたさんでござんすえ。
文吾　イヤ、我れ〳〵は由良之助どのに用事あつて參つた。奧へ行つて申さうには、大鷲文吾、矢間重太郎、竹森喜



寛政十二年七月市村座上演　嵐雛助の平右衞門

太八でござる。この間より切に迎ひの人を遣はしますれど、お歸りのないゆゑに、三人連れで參りました。ちと御相談申さねばならぬ儀がござる程に、お逢ひなされて下されと、キツと申しておくりやれ。

仲二　それは何ともお氣の毒でござんすが、由良さんは三日この方の呑み續け。お逢ひなされてから、他愛はあるまい。本性はないぞえ。

喜太　ハテサテ、マア、さう云うておくりやれ。

仲居　アイ〳〵。

ト仲居、奧へ入る。

文吾　重太郎どの、お聞きなされたか。

重太　承つて驚ろき入りました。初めの程は、敵へ聞かする計略と存じましたが、いから遊びに實が入り過ぎまして、合點が參らぬ。

喜太　なんと、この喜太八が申した通り、魂ひが入れ替つてござらうがの。いつそ一間へ踏ん込み

文吾　イヤ〳〵、とくと面談いたした上。

喜太　成る程、然らばこれにて。

三人　相待ち申さう。

ト駒鳥の合ひ方になり、仲居、幇間、大勢付いて、由良之助、羽織を脫ぎかけ、めんない千鳥をかけ出て來る。皆々よろしくあつて

皆々　手の鳴る方へ〳〵。

由良　捕まへよ〳〵。

皆々　由良鬼や、まだ〳〵。

由良　捕まへて酒呑まそ〳〵。

ト皆々をあちこちと追はへ、トヾ文吾を捕へる。皆々思ひ入れ。

コリヤ、捕まへたワ。サア、酒々。銚子持て。

仲居　モシイナア、違うたわいな。

ト由良之助、手拭を取り

由良　南無三方仕舞うた。これは御免〳〵。他愛々々。

仲居　それ見やしやんせいなア。

文吾　イヤコレ、仲居達、我れ〳〵は大星どのに、用事あつて參つた。暫らくこの場を遠慮しておくりやれ。

仲一　皆さん、聞きなさんせ。なんぢややら、鹿爪らしう云はしやんすぞえ。

重太　エヽ、無駄を云はずと、早く奧へ行きやれサ。

仲二　オヽ、怖。わたしらはナ、由良さんのお伽ぢやわいなア。

仲三　ほんに、それ〳〵、去んでよければ、由良さんが云うてぢやわいなア。
喜太　エヽ、ペリ〳〵と喧ましい。早く奥へ
三人　行かぬかえ。
仲居　オヽ怖……シッ〳〵〳〵、お獅子はどこぢや〳〵。
ト仲居皆々手を打ち、ワヤ〳〵と云ひ、奥へ入る。後に三人思ひ入れ。由良之助、横に寢入る。三人は側へ行き
文吾　由良之助どの、大鷲文吾でござる。
重太　矢間重太郎でござる。
喜太　竹森喜太八でござる。御意得に參つた
三人　お目覺まされませう。
トキッと云ふ。由良之助、起き上がつて
由良　これは〳〵、打揃うて、ようこそお出。何と思うて。
三人　鎌倉へ出立の時候は、いつ頃でござるな。
由良　さればこそ、大事の事をお尋ねなさるゝ。丹波與作が唄に、江戸三界へ行かんして。ハヽヽヽヽ。
ト一口唄ひ
御免候へ。他愛々々。
トまた横に寢轉ぶ。三人、思ひ入れあつて
文吾　ヤア、酒の醉ひ本性違はず。
重太　性根が付かずば我れ〳〵が
喜太　酒の醉を
三人　覺まさせませうかな。
ト三人、立ちかゝる。この時、下の方にて
平右　先づ〳〵、暫らく〳〵〳〵。
ト平右衛門、下の方より、出て來て、三人を留め
憚りながら、お三人樣へ申し上げます。この下郎めが一言申し上げたい儀がござりまする。暫らくお扣へ下さりませう。
文吾　其方は平右衛門、申す事あらば
三人　早く申せ。
平右　モシ、御家老樣、寺岡平右衛門めでござりまする。御機嫌の體を拜しまして、如何ばかりか大慶至極に存じ奉りまする。
由良　フム、寺岡平右衛門とは、ア、なんでえすか。前かど北國へ、お飛脚に行かれた、足の輕い足輕どのか。
平右　左樣でござりまする。殿樣御切腹を、北國にて承りまして、南無三方と、宙宇を飛んで歸りまする道にて、遂にはお家も召上げられ、一家中は散り〳〵と、承つた

時のその無念さ。奉公こそ足輕なれ、御恩は替らぬお家の仇。おのれ師直め、一討ちと、鎌倉へ立越え、三ケ月が間非人となつて、附け狙ひましたれども、敵は用心嚴しく、近寄る事も叶ひませず、腹かツさばかんと存じましたが、國元の親の事を思ひ出しまして、悄々歸りました。所に、天道樣のお知らせにや、何れも樣の一味連判の樣子、承りまするとヤレ嬉しや、有り難やと、取る物も取り敢へず、あなた樣の御旅宿を尋ね、只管お願ひ申し上げたれば、出かした、愛い奴ぢや。お頭へ願うてやらうと、お詞に縋り、これまで推參仕りました。師直が屋敷の

ト云はうとするを被せて

由良　アヽ、コレ〳〵、イヤ、其許は足輕でなうて、大きな口輕ぢやの。なんと、帮間にならぬか。尤もわしも、蛋の頭を斧で割つた程、無念なとも存じ、四五十人一味を拵らへて見たが、味な事の。よう思うて見れば、仕損じたら、この首がコロリ。仕負ふせたら切腹。どちらでも死なねばならぬと云ふは、人參服んで首縊るやうなもの。殊に其許は、五兩に三人扶持お取りなさるゝ足輕どの。お腹は立たれな。はつち坊主の報謝米ほど取つて居て、命を捨て、敵討せうとは、そりや青海苔貰うた禮に、太々神樂を打つやうなものぢや。我れら知行は千五百石、お身と比べると、敵の首を斗升で計る程取つても釣合はぬ。所で止めた。ナ、聞えたか。兎角浮世は斯うしたものぢや。

ト三味線を彈く眞似をする。

なぞと、斯う彈きかけた所は、堪らぬ〳〵。

平右　これは、御家老樣のお詞とも覺えませぬ。僅か五兩に三人扶持の拙者めでも、千五百石のあなた樣でも、今日まで繋ぎましたる命は一つ。御恩に高下はござりませぬ。押すに押されぬお家の筋目、殿の御名代お勤めなさるる、お歷々方樣の中へ、見る影もない私しめが、差出てお願ひ申すは、憚りとも慮外とも、ほんの猿が人の眞似。お草履を摑んでなりと、お荷物を擔いでなりとも、參じませう程に、お供に召連れましてナ、申し〳〵。

ト此うち、由良之助、寢入る。平右衞門、よろしくあつて

コレ〳〵申し。これはしたり、寐入つてござるさうな。

文吾　コレサ、平右衞門、あつたら口に風引かすまい。由良之助は死人も同然。

重太　大鷲どの、竹森どの、もう本心が見えました。
喜太　如何にも、申し合せた通り
兩人　計らひませう。
文吾　イカサマ、一味連判の者どもへの見せしめ。イザ、何れも。
ト三人、立ちかゝるを、平右衞門、よろしく留めて
平右　暫らく〳〵。
ト三人を留める。ちよつと立廻りあつて、キッと留める。
三人　手向ひ致すか。
平右　お手向ひは致しませぬ。暫らくお待ち下さりませ。
〽平右衞門押なだめ、側に寄り。
ア、つく〴〵思ひ廻しますれば、主君にお別れなされてより、仇を報はんと、さま〴〵の御艱難。木にも芽にも心を置き、人の誹り無念をば、チッと堪えてござるからは、酒でも無理に參らずば、これまでお命も續きますまい。吞んだ酒なら醒めずばなるまい。醒めての上の御分別。モシ、平に〳〵。
〽無理に押へて三人を、伴ふ一間は善惡の、燈火を照らす障子の內、影を隱すや。

ト無理に三人を連れ、平右衞門、奧へ入れる。平右衞門、殘つて、杯臺なぞ見立て、枕にして、いろ〳〵狂言あつて奧へ入る。
〽月の入る、山科よりは一里半、息を切つたる嫡子力彌、內を透かして正體なき、父が寐姿起すも人の耳近しと枕頭に立寄つて、轡に替る刀の鍔音、鯉口しやんと打ち鳴らせば、むつくと起きて。
ト文句のうち向うより、力彌、狀箱を持ち、小提灯を持ち、出て來て、枝折り戸の內を窺ふ思ひ入れあつて、由良之助の側へ行て、刀の鍔音をして、花道へ立戻つて扣へる。由良之助起き上がつて、あたりへ思ひ入れあつて、庭下駄を穿き、謠をうたひながら、花道枝折り戸の側へ來て
由良　ヤア、力彌か。鯉口の音響かせしは、急用あつてか。密かに〳〵。
力彌　只今御臺顏世さまより、急のお飛脚。密事の御狀。
由良　して、外に御口上はなかつたか。
力彌　近々敵……。
由良　シイ。
〽敵と見えしは群れ居る鷗。



安政元年五月市村座上演　八世市川團十郎の由良之助



松本幸藏の力彌　尾上梅幸のおかる

ト謠にて花道へ行く。

外に御口上はなかりしか。

力彌　委細の儀は、お文にとの御口上でござりまする。

ト狀箱を出す。由良之助、取つて中の封じ文を取上げ

由良　其方は宿へ歸り、夜のうちに迎ひの駕籠……、行け。

力彌　ハツ。

〽はつとためらふ暇もなく、山科さして。

由良　コリヤ……祇園町を放れてから急げ。

トこの文句にて、力彌、一散に向うへ入る。

〽先づ樣子氣遣ひと、狀の封じを切る所へ。

ト由良之助、舞臺へ歸り、狀の封を切らうとする所へ、奥にて

九太　大星どの、由良之助どの〳〵。

トこの聲を聞いて由良之助、懷へ入れる。九太夫、出て來て

斧九太夫でござる。御意得ませう。

由良　これは〳〵、久しや〳〵。一年も逢はぬうち、寄つたぞや〳〵。額のその皺、延しにお出でか。アノ爰な、莚破りめが。

ト九太夫を叩く。

九太　イヤ、由良どの、大功は細瑾を顧みずと、人の謗りも構はず、遊里の遊び、大功を立つる基、天晴れの大丈夫、末頼もしう存ずる。

由良　これは堅い〳〵。石火矢と出かけたな。

九太　サア、由良どの、誠貴殿の放埓は

由良　敵を打つ所存と見えるか。

九太　おんでもない事。

由良　忝ない。四十に餘つて色狂ひ、馬鹿者よ氣狂ひよと、笑はれうかと思つたに、敵を打つ手段とは、九太夫どの、嬉しい〳〵。

九太　すりや、いよ〳〵其許には、主人の仇を報ずる所存はないか。

由良　氣もない事〳〵。家國を渡す折柄、城を枕に討死と、おてまへは云うたのを、身共一人遮つて、お金配分と云うたのは、この樂みがしたさゆゑ。あの折、足利の討手を引請け、城を枕に討死なすか、又は主人の後を追ひ、殉死して見さつしやれ、おてまへも色酒に、皺を延ばす事はなるまい。そこを計つて由良之助が、お金配分したは智恵であらうが。サア、昔のよしみ思ふなら、堅氣を止めて、碎け居れ〳〵。

九太　イカサマ、この九太夫も、昔思へば信田の狐、化け顯はして一獻汲まうか。サア、由良どの、久しぶりのお杯。
由良　また頂戴と會所めくのか。
九太　さし居れ呑むワ。
由良　呑み居れさすワ。
兩人　こりや、話せるわえ。
由良　サア／＼、銚子持て。仲居ども／＼。
ト奥にて
仲居　アイ／＼／＼。
ト奥より、亭主、仲居、幇間、皆々大勢、酒肴を持ち出て來る。
由良　コリヤ／＼、今日は由良之助が、九太夫どのへ馳走。サ、皆寄つて、面白い事せい／＼。
仲居　面白い事なら、見立てがようござりませう。
ト見立ての合ひ方になり、皆々見立てあつて
九太　梅干とはどうだな。
ト我が頭を挾む。
由良　こりや古い。サア、酒々。
ト九太夫に突き付ける。九太夫、呑んで

九太　サア、由良どの、さし申さう。
由良　忝ない／＼。
ト杯を請ける。
九太　ドレ、肴いたさう。
〽側に有り合ふ蛸肴、挾んでずつと差出せば。
ト九太夫、蛸を挾んで由良之助に差出す。由良之助、思ひ入れあつて
由良　手を出して、足を頂く蛸肴。
〽忝ないと頂いて、喰はんとする手をちつと捉へ。
ト九太夫、由良之助の手を捉へ
九太　コレ、由良どの、明日は主君鹽冶判官の御命日、取分け逮夜は大切と申すが、見事その肴、貴殿は食ふ氣か。
由良　食べる／＼。但し主人鹽冶どのが、蛸になられたと云ふ便宜があるか。愚痴な人ではある。こなたやわしが浪人したは、判官どのが無分別から起つた事。すりや、恨みこそあれ、精進する氣微塵もござらぬ。お志しの肴、賞翫いたさう。
〽何氣もなく、只一口に味はふ風情、邪智深き九太夫も、呆れて詞もなかりける。
さて、この肴では呑めぬ／＼。鷄〆めさせ、鍋燒きさせ

浮……サア〳〵。皆唄へ〳〵……足元もしどろもどろのんき拍子。

九太　テレツク〳〵、ツ、テン〳〵。

ト箸にて鉢を叩く。

ト踊り地になり、由良之助、踊つて皆々附いて奥へ入る。

〽始終を見屆け鷺坂伴内、二階より降り立ち。

ト奥より、伴内、出て來り

伴内　九太夫どの、仔細とつくと見屆け申した。主人の命日に、精進さへせぬ根性で、敵を討つ所存思ひもよらず、この通り主人師直公へ申し立て、用心の門を開かせませう。

九太　成る程、最早御用心にも及ばぬ事でござる。

伴内　これサ、まだ爰に刀を忘れて置きました。

ト由良之助の脇差を置いたを見て

九太　ほんに、誠に大馬鹿者の證據、嗜なみの魂ひ、御覽なされい。

ト伴内、取つて拔いて見る。

伴内　イカサマ、さて錆びたりな赤鰯。

兩人　ハヽヽヽ。

ト兩人、顏見合せ笑ふ。

九太　いよ〳〵本心亂れ、御安堵々々々。

ト下手より、駕籠舁き、駕籠を擔ぎ出て來り

駕籠　ヘイ、お駕籠が參りました。

九太　サ、伴内どの、お召しなされい。

伴内　先づ御自分は御老體、平に〳〵。

九太　然らば御免下されい。

ト九太夫、駕籠の中へ入り、垂れを下ろす。

伴内　イヤナニ、九太夫どの、承れば爰に勘平の女房が、勤め居ると聞きました。貴殿には御存じないか。九太夫どの、九太夫どの。

〽云へど答へもこは不思議、駕籠の簾を引上ぐれば、内には手頃な庭の飛び石。

ト伴内、駕籠の垂れを上げる。内に飛び石あるゆゑ、恟り思ひ入れ。

こりやどうぢや。九太夫どのは松浦佐代姫をやられたさうな。

〽見廻すこなたの緣の下。

ト上の方、緣の下より九太夫、顏を出して

九太　コレ〳〵、伴内どの、身共が駕籠拔けの計略は、最



安永九年九月中村座上演

初世尾上菊五郎の由良之助　四世岩井半四郎のおかる

前力彌が持參せし、書翰が心元なし。樣子見屆け、後より知らさん。矢張り我れらが歸りし體にて、貴殿はその駕籠に……ナ。

ト思ひ入れ。

伴内　成る程……ソレ、石をやれ。

ト踊り地になり、駕籠を先に立て、伴内向うへ入る。

〽折に二階へ勘平が、妻のおかるは醉覺まし、はや里馴れて吹く風に、憂を晴らして居る所へ。

ト上の方、二階の障子引拔く。内におかる、扱帶の形にて、團扇を持ち、手摺りに倚りかゝり居る。奧より、由良之助、出で來り

由良　ちよつと行て來るぞよ。由良之助ともあらう侍ひが、大切の刀を忘れて置いた。ツイ取つて來るその間に、掛け物も掛け直し、爐の炭もついで置きや。ア、それそれ、此方の三味線踏み折るまいぞ……これはしたり、九太はもう去なれたさうな。

ト下座の獨吟になり

獨吟〽父よ母よと泣く聲聞けば、妻にあふむのうつせし言の葉、エ、なんぢやいな措かしやんせ。

竹本〽あたり見廻し由良之助、吊り燈籠の明を照らし、讀む長文は御臺より、敵の樣子細々と、女の文の後や先、參らせ候で捗どらず。

ト由良之助、手水鉢にて手を洗ひ、以前の文を出し、立ち身にて讀む思ひ入れ。

〽餘所の戀よと羨やましく、おかるは上より見下ろせば、夜目遠目なり字性も朧、思ひ付いたる延べ鏡、出して寫して讀み取る文章。

トおかる、延べ鏡を出し、見る思ひ入れ。緣の下より、九太夫、出かゝり、由良之助が文を段々卷き取り、讀む思ひ入れ。

〽下家よりは九太夫が、繰り卸ろす文月影に、透かし讀むとは神ならず、解けかゝりしおかるが釵、ばつたり落つれば、下にははつと、見上げて後へ隱す文、緣の下には猶笑壺、上には鏡の影隱し。

トおかる、簪を落す。由良之助、恟りして後へ文を隱す。九太夫、この文を引切り、緣の下へ入る。三人氣味合ひの思ひ入れ。おかる、下家を見下ろし

かる　由良さんか。

由良　おかる、そもじはそこに何して居やる。

かる　わたしやお前に盛り潰され、あんまり辛さに醉覺ま

し、風に吹かれて居たわいなア。
由良　ムウ、ハテ、よう風に吹かれてぢやの……イヤ、おかる、ちと話したい事があるが、屋根越しの天の川で話しが出來ぬ。ちよつと降りてたもらぬか。
かる　話したいとは、頼みたい事かえ。
由良　マア、そんなものぢや。
かる　そんなら廻つて行きやんせう。
由良　イヤ〳〵、段階子へ下りたれば、仲居が見付けて酒にせう。ア、コレ、どうしたものぢや。
ト二階に掛けてある、九ッ階子を取つて來て
コレ〳〵、幸ひ爰に九ッ階子。これを踏まへて降りてたも。
〽小屋根にかゝれば、
ト階子を取つて二階へかける。おかる、階子へ降りかかり
かる　この階子は勝手が違うて、どうやら危ないものぢやな。
由良　大事ない〳〵。危ない怖いは昔の事、今では三間づつ跨いでも、赤膏薬も要らぬ年輩。
かる　阿房云はんすな。船に乘つたやうで怖いわいなア。

由良　道理で船玉さまが見える。
ト思ひ入れ。おかる、こなしあつて
かる　ユヽ、覗かんすないな。
由良　洞庭の秋の月を拜み奉るぢや。
かる　そんなら降りやせぬぞえ。
由良　降りざ降ろしてやろ。
ト抱き抱へる。
かる　アレ又惡い事を。
ト恥かしきこなし。
由良　喧ましい。生娘か何ぞのやうに……。逆縁ながら。
〽後より、ぢつと抱き〆め抱き下ろし。
ト由良之助、おかるを抱き下ろし
おかる、何ぞそもじは御覽じたか。
かる　アイ……イヽエ。
由良　見たであらう〳〵。
かる　何ぢややら、面白さうな文を。
由良　ア、上から。
かる　アイ。
由良　みな讀んだか。
かる　おゝく。

由良　ア、身の上の大事とこそはなりにけり。
かる　なんの事ぢやぞいな。
由良　なんの事とは、古いが惚れた。女房になつてたもらぬか。
かる　措かんせ。嘘ぢや。
由良　サア、嘘から出た誠でなければ、根が遂げぬ　應と云や。應と云や。
かる　イヤ、云ふまいわいな。
由良　そりやなぜ。
かる　お前のは、嘘から出た誠ぢやない、誠から出た嘘ぢやわいな。
由良　嘘つかぬ證據、身請けせう。
かる　イ、エ、わたしには。
由良　間夫があるなら添はしてやろ。暇が欲しくば暇やろ。
かる　そりや、ほんまに。
由良　侍ひ冥利、三日なりとも圍うたら、それからは勝手次第。
かる　嬉しうござんす……と云はして置いて笑はうでの。
由良　イヤ、直ぐに亭主に金渡し　今の間に埒明かさう。氣遣ひせずと待つて居や。

かる　そんなら必らず待つて居るぞえ。
由良　金渡して來る間、どつちへも行きやるな女房ぢやぞ。
かる　それもたつた三日。
由良　三日合點。
かる　エ、、嬉しうござんす。
ト由良之助、思ひ入れあつて
由良　この由良之助に身請けされるが、それ程までに嬉しいか。
かる　アイ。
由良　あの嬉しさうな顏わいの。
ト獨吟になり、由良之助、思ひ入れあつて、奥へ入る。
獨吟〽世にも因果なものならわしが身ぢや、可愛い男に幾世の思ひ、えゝなんぢやいな措かしやんせ、忍び寐に啼く小夜千鳥。
ト獨吟のうち、おかる、思ひ入れあつて、硯箱を取出し、文を書くことよろしく
〽奥で唄ふも身の上と、おかるは思案取り〴〵の、折に出で合ふ平右衛門。
ト奥より、平右衛門、出て來り、顏見合はせ、捨ぜりふあつて

平右　ヤ、わりやおかるぢやないか。
かる　ヤア、兄さんか……恥かしい所で逢ひましたなア。
　ト顔を隱し、思ひ入れ。
平右　苦しうない。關東より戻りがけ、母人に逢うて詳しく聞いた。夫の爲、お主の爲、よく賣られた。出かした出かした。
かる　さう思うて下さんすりや、わたしや嬉しいが、シタガマア、喜んで下さんせ。思ひがけなう、わたしや今宵請け出さるゝ筈ぢやわいな。
平右　ムウ、それは重疊。して、何人のお世話で。
かる　アノ、お前も御存じの、大星由良之助さまのお世話でな。
　ト平右衛門、思ひ入れあつて
平右　ナニ、由良之助どのに請け出さるゝ。それは又、下地からの馴染みとでもと云ふ事か。
かる　なんのいな。この中より二三度の酒の相手。夫があらば添はしてやろ、暇が欲しくば暇やろと、結構過ぎた身請けの相談ぢやわいな。
平右　そんなら、われを早野勘平が女房と、
かる　イヽエ、知らずぢやぞえ。親夫の恥なれば、明かしてなんの云ひませう。
平右　ムウ。すりや、本心放埓者、お主の仇を報ずる、所存はないに極まつたな。
　トきつとなるを、おかる、留めて
かる　イエ〳〵、あるぞえ〳〵。高うは云はれぬ、コレ。〽斯う〳〵と囁けば。
平右　ムウ、すりや、その文を慥かに見たな。
かる　アイ、殘らず讀んだその後で、互ひに見合す顏と顏、それからじやらつき出して、身請けの相談。
平右　アノ、その文殘らず讀んだ後で。
　ト思ひ入れ。
かる　アイナア。
平右　ムウ、讀めた。
　ト大きく云ふ。
かる　エヽ、恟りするわいなア。
　ト平右衛門、奥へ向ひ
平右　御免下さりませ。
　ト由良之助にあやまる捨ぜりふあつて
　よくも罰が當らなんだ。
かる　何を云はしやんすぞいな。



安政元年五月市村座上演



三世嵐吉三郎の平右衛門　尾上梅幸のおかる

平右　コレ妹、われに折入つて頼みがあるが、聞いてくれぬか。
かる　お前の頼みなら、なんなりと聞かいでかいな。
平右　聞いてくれるなら、ちよつと來い。
ト花道切り戸の方へ連れて行く。この前に切り戸を舞臺の方へ寄せて置く事。
かる　して、兄さん、お前の頼みとわえ。
平右　妹、われが命は兄が貰つた。
〽はつしと切れば、ちやつと飛び退き。
ト踊り地になり、拔打ちに切りつける。兩人、立廻りよろしくあつて、おかる、花道の附け際へ行つて
かる　コレ兄さん、わしにはナニ誤まり。勘平と云ふ夫もあり、キッとした兩親あるからは、こなさんの儘にもなるまい。請け出されて親夫に逢はうと思ふがわしや樂しみ。どんな事でもあやまらう。どうぞ免して下さんせいなア。
〽どうぞ免して下さんせと、手を合すれば。
トおかる、よろしくあつて
〽平右衞門、拔身を捨てゝ、撞と伏し、悲嘆の泪にくれけるが。
ト平右衞門、拔身を捨て、どつかと座し、思ひ入れ。
平右　可哀や妹、わりやなんにも知らぬな。親與一兵衞どのはナ、六月二十九日の夜、人に切られて、お果てなされたわやい。
かる　エ……そりやマア、ほんの事かいなア〳〵。
ト恟り思ひ入れ。
平右　コリヤ〳〵、まだ恟りする、もつとどえらい事がある。われが請け出されて添はうと思ふ勘平はナ。
かる　勘平どのは、どうしやしやんたえ。
平右　勘平はナ。
かる　女房さんでも持たしやんしたかえ。
平右　腹切つて死んだわやい。
かる　エヽ、ヽ、ムウ。
トおかる、反り返る。平右衞門、恟り思ひ入れ。平右衞門、水を呑ませる事よろしく
〽これなう〳〵と取付いて、わつとばかりに泣き沈む。
ト平右衞門、いろ〳〵介抱して
平右　オヽ、道理〳〵。樣子話せば長い事。お痛はしいは母者人、云ひ出しては泣き、思ひ出しては泣き、娘かるに聞かしたら、泣死するであらう、必らず云うてくれな

とのお頼み。云ふまいと思へども、とても遁がれぬ其方が命。その譯は、忠義一圖に凝り固まつた由良之助どの勘平が女房と知らねば請け出す義理もなし、元より色には猶恥らず、見られた狀が一大事。請け出して刺し殺す、思案の底と慥かに見えた。さうなうても壁に耳、外より洩れてもわれが科。密書を覗き見たるが誤まり。殺さにやならぬ事なれば、いつそ人手にかけうより、我が手にかけ、大事を知つたる女、妹とて免されず、それを功に連判の、數に入つてお供に立たん。命をくれよ、コリヤ妹。

〽小身者の悲しさは、人に勝れた心底を、見せねば數には入れられず。コリヤ。

〽聞分けてくれ妹と、事を分けたる兄の詞、おかるは始終せき上げ〳〵、便りのないは身の代を、役に立てゝの旅立ちか、暇乞ひにも見えそなものと、恨んでばつかり居りました。

かる　勿體ないが父さんは、非業な死でもお年の上……勘平どのはモシ。

平右　さうだ。元和三年申の生れ、數へて見れば。

かる　ソレ、やう〳〵今年で三十に

〽なるやならずに死ぬるとは。

さぞ悲しかろ、口惜しかろ。

平右　逢ひたかつたであらうなア。

かる　アイ。

〽なぜ逢はしては下さんせぬ。

親夫の精進さへ、知らぬわたしの身の因果、なんの生きて居りませう……サア、手にかけて下さんせ。

平右　オウ、よい覺悟だ。南無阿彌陀佛。

かる　アモシ。

〽お手にかゝらば母さんが、お前をお恨みなされませう。自害したその後で、首なりと死骸なりと、功に立つなら功にさんせ。さらばでござんす。

〽云ひつゝ刀取上ぐる。

トおかる、拔身を取つて自害せうとする。この時、奥より由良之助出て、よろしく留めて

由良　ヤレ待て暫し、早まるな。

〽留むる人は由良之助、はつと驚ろく平右衛門、おかるは放して殺してと。

かる　放して殺して下さんせ。

ト又死なうとする。

〽焦るを押へて。

由良　ホヽオヽ兄妹ともに見上げた魂ひ。疑ひ晴れた。兄は東の供を許す。

平右　すりやアノ、東のお供が叶ひまするか。アノ東のお供……コレ、妹喜べ。東のお供が叶つた〳〵。アヽ有り難や忝なや。

〽天へも昇る心地せり。

由良　妹かるは長らへて、未來の追善。

かる　その追善は、冥途のお供。

ト刀を持ち、思ひ入れ。

〽もぎ取る刀をしつかと押へ。

由良　夫勘平、連判には加へしかど、敵一人も討ち取らず、未來で主君に云ひ譯あるまい。その云ひ譯は、コレ爰に。

〽ぐつと突込む疊の隙、下には九太夫肩先縫はれ七轉八倒。

トおかるが刀を持ち添へて、床下へグッと突ッ込む。下にて九太夫苦しむ。

ソレ、平右衛門、引出だせ。

平右　ハッ。

〽下知より早く緣先飛び降り、朱に染みたる骸をば、無二無三に引摺り出し。

ト平右衛門、九太夫を引摺り出して引据ゑる。

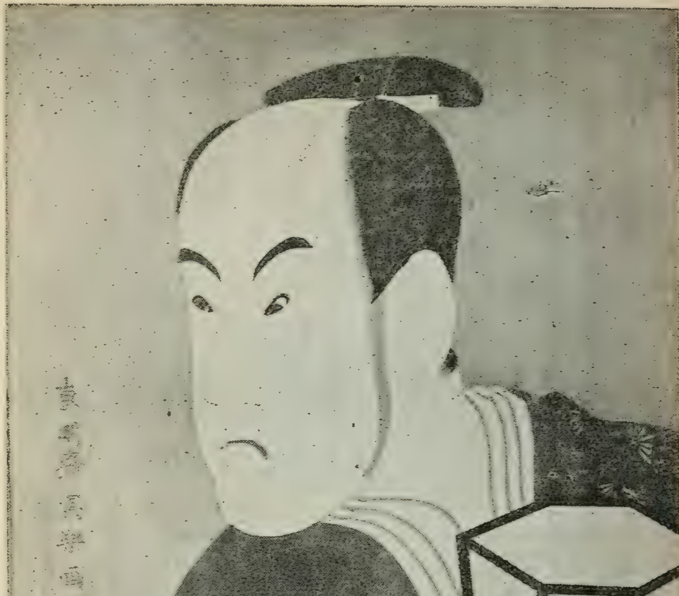
おのれ九太夫め。

〽目通りへ投げ付くれば、起き立たせもせず由良之助、髻を摑んでぐつと引寄せ。

ト由良之助、九太夫を引寄せ、襟髪を取つて

由良　獅子身中の蟲とは、おのれが事。我が君より高知を頂き、莫大の御恩を着ながら、敵師直が犬となつて、ある事ない事、よくも内通ひろいだな。コリヤヤイ、四十餘人の者どもは、親に別れ子に別れ、一生連れ添ふ女房を、君傾城の勤めをさせるも、亡君の仇を報じたさ。寐覺めにも現にも、御切腹の折を思ひ出しては、無念の泪、五臟六腑を絞りしぞや。取分け今宵は殿の逮夜、口に諸諸の不淨を云ふとも、愼みに愼みを重ぬる由良之助に、よくも魚肉を突きつけたな。否と云はれず、應と云はれぬ胸の苦しさ。三代相恩のお主の逮夜に、咽喉を通したその時の心、どのやうにあらうと思ふ。五體も一度に惱亂し、四十四の骨々も、碎くるやうにあつたわやい。エエ、獄卒め、魔王め。

〽土に摺り付け捻ぢ付けて、無念の泪にくれけるが。



寛政七年四月都座上演　坂東彦三郎の由良之助

コリヤ、平右衛門、最前錆び刀を忘れ置いたは、此奴をば嬲り殺しと云ふ知らせ。命取らずと、苦痛をさせよ。

平右　ハツ。

ト最前の錆び刀を渡す。平右衛門、取つて、九太夫を突く

〽拔くより早く躍り上がり飛び上がり、切れども僅か二三寸、明き所もなしに疵だらけ、のた打ち廻つて。

九太　コレ、平右どの、おかるどの、お詫び〳〵。

ト手を合せる。

〽詫びしてたべと手を合せ、以前は足輕づれなりと、目にもかけざる寺岡に、三拜するも見苦しき。

由良　この場で殺さば云ひ譯むづかし。喰ひ醉うたる體にして、館へ連れよ。

〽羽織打着せ疵の口。

ト羽織を投げてやる。平右衛門、九太夫に羽織をかける。

〽隱れ聞いたる三人が、障子ぐわらりと引明くれば。

ト奥より、文吾、重太郎、喜太八、出て來て

三人　由良之助どの、段々あやまり入りましてござります。

由良　コリヤ……ソレ、平右衛門、喰ひ醉ひたるその客に、加茂川でナ……水雜炊を喰はせい。

平右　ハツ。

由良　行け〳〵。

ト踊り地になり、平右衛門、九太夫を肩に引ッかけ、由良之助、おかる、よろしくあつて

幕

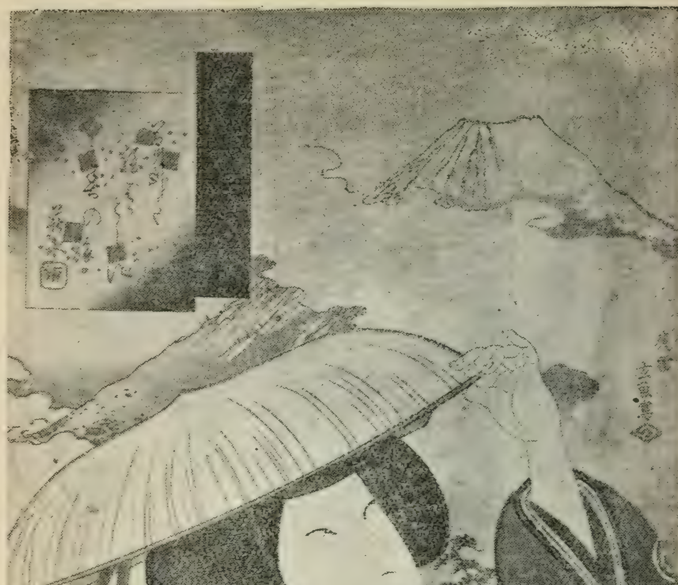
八段目　道行の場

淨瑠璃「道行旅路の嫁入」　清元連中

役名――本藏妻、戸名瀨。同娘、小浪。女商人、おかな。伊勢參り、喜之助。

本舞臺、向う富士を見たる裾野の遠見、その前一面の松原、すべて由井蒲原あたりの景色よろしく、馬士唄にて幕明く。

ト頭取、口上觸れあつて入ると、下手の土手板、打返しにて清元連中居並び、淨瑠璃になる。



坂東彦三郎の戸名瀬

〽誰が云うた、言の葉草も飛鳥川、淵も知行も瀬と變る、浮世の中の習ひとて、結ぶ鹽冶の緣あらば、慕うて上る加古川の、娘小浪が物思ひ、母の思ひは山科で、聟の力彌を力にて、押して嫁入の乘り物も、せめて親子の二人連れ。

ト合ひ方になり、向うへ戸名瀬、小浪、子役にて好みの拵らへにて出る。

〽遠目に富士の景色さへ、今を初めの道中は、双六の外白雲の〽心は先へ都へと、急ぐ徒歩路の足元は、氣も浮島ヶ原三保ヶ崎〽續く並松海道を、狹しと打つたる行列は。

ト向うへ遠見にて、大名嫁入りの行列、切出しにて通る事。

〽どの國司か知らねども、あら美やまし、世が世であらうものならば、一度の晴れと花飾る、伊達を駿河路さしかゝり〽爪づく石場大石や、小石拾うて我が夫と、撫でつさすりつ手に取つて、やがて殿御と添ひ寐して、二人が仲に嬰兒生んで〽ねんねんねんねこせ、ねんねが守りはどこへ行た、山を越えて山へ行た〽まだ宿次も遙かなる、山科さしてぞたどり行く。

ト兩人、よろしく振りあつて入る。

〽短夜に夜がな興津のおかづけは、そぐはぬ形の魚荷持ち。

ト合ひ方になり、向うよりおかな、女輕子の形、魚の荷を頭へ載せ、出て來る。

〽女子たてらに所譯さへ、云ひ譯云はずあやまらぬ、向う鉢卷なんのその〽あいがなア遠けりやなア〽えゝ立場が長い、繼ぎ場で酒々と、えゝその氣散じも天井拔け、女の名さへ輕子とは、なぜ深川で附けたやら、そんな無駄口沖の石〽可愛男の仕事の代り。

トよろしくあつて向うを招く。

〽問屋の仕切り算盤の、玉は御存じ大和屋の、家名も對の菅笠に。

ト向うより喜之助、伊勢參り好みの形、菅笠と柄杓を持ち、出で來り

〽伊勢參宮の目じるしは、今度この度阿波の國、豆おはらひの御託宣、てんとおてんと天から降つた天人か、三保のあたりであらうかと、聞いて後から御鬮頂受けて、お蔭參りは皆樣へ、お禮にちよつと旅がけの、連れに鳴海の染め浴衣。

ト花道にて振りよろしく
〽色氣ないとて苦にやせまいもの、サッサ隱して鐵漿つけた、このしよんでこえ 〽鐵漿つけて笠のサッサ〆め緒で隱す、しよんでこえ 〽浮き立つ心の面白酒や、爰も所の名物に、名題の二人打連れて、仲よくこそは來りける。
ト兩人舞臺へ來る。思ひ入れあつて
喜之 カウ、姐さん、見りやアお前は女の身として、こりやアどういふ譯だえ。
かな サア、わたしや女子の輕子でござんすわいな。
喜之 ハ、ア、女の輕子と云やア、江戸の深川や岡場所で云ふ女の名 そんなら女の魚荷の輕子かえ。
かな アイ、さうでござんす。アノわたしより、お前さんわえ。
喜之 わしやア今度、伊勢のお蔭參りに出かけた旅人サ。カウ姐さん。なんとお前、道連れになる氣はねえかえ。
かな そんな冗談、おかしやんせいな。
〽おどけ交りに云はしやんしても、此方は御亭の味知らぬ、得ては旅人が冗談に、手を出したらば此方から、ぐつと抱へて押出して、前からかゝりや刎ねを取り、四つに渡らば腹やぐら 〽もし後から抱きつけば、負ひ投げ脊負ひ投げ腕反り、足のいたづら褄返し 〽投げの情は露ほども、しらの侠の娘肌、此方はちよつと仇口に。
トおかな、振りある。喜之助出て
〽粹で小勇みで、めかさずすまさず、物數云はずこふところで、そこに情のある男、可愛うなうてなんとせう 〽廻らぬ舌で燭臺や、どんぶり火箸で南無三方、そふに忽ち泣き上戸。
ト三人生醉ひの振りになる。
〽この丼の割れたのを、見るにつけても娘の事、今年十二で痲疹も輕く、流行り風さへハックショ引きもせず、つい十三で此やうにと、しやくり上げたる溜め涙 〽側にはむつと 〽エ、、ナ、、なんのこつたえ、この丼が割れたと云つて、お娘の事では泣くならば、水瓶が割れたなら、婆樣の事で泣く氣かよ 〽エ、アタ外聞のと腹立ち上戸 〽笑ひ上戸は吹き出し 〽フウフ、、フウフフ、、こいつはいいぜいゝぜ、ハ、、、、、腹を立つたり泣いたりして、どうも斯うも云へねえ〱、ハ、、、ハ、、なんでも物の殖えるのは、めでたい事ではごんせぬか 〽それに涙をこぼしたり、筋を出したりハ、おい



天保元年四月市村座上演



岩井粂三郎のおかな　坂東簑助の喜之助

たゝ〽ハ、おいたゝ〽ハ、ハ、ハ、、、ハ、ハ、、おいたゝゝゝゝ〽わけ生醉ひのしどもなく、騒ぎ一座の浮き立ちて。

ト兩人手踊りになり

〽様によエ、コノ様にやろとて手織りの木綿を、新田紺屋へ誂らへた、なじよ〳〵なじよ染めるえ〽桐に鳳凰竹に虎、いつも離れぬ判じ物え、そりや又いしこい注文だ、次手に擂粉木擂小鉢、これも離れぬ染め模様、面白や。

ト大拍子になる。

かな　モシ、あの音は、なんでござんすえ。

喜之　ありやア三島の明神様の神樂よ。

かな　わたしや悔りしたわいな。

喜之　サア、行きやせう。

〽爰に三島の神垣や、幸ひありや道連れと、足を早めて急ぎ行く。

ト兩人、こなしあつて、引張りよろしく見得。大拍子にて

幕

九段目　山科閑居の場

役名━━大星由良之助。同女房、お石。同一子、力彌。下女、おりん。加古川本藏。同女房、戸名瀨。同娘、小浪。

竹本連中

本舞臺、四間高二重、上の方、一間障子屋體。正面手摺りの襖、後に引抜く事あり、上手に雪持ちの青竹、仕掛け物。長押に鎗をかけ、例の所、門口、軒口に雪程好く降りある體の遠見。すべて、山科閑居の體、雪降りの景色よろしく、雪颪しにて、幕明く。

ト唄になり、向うより、仲居二人。下駄傘にて出で來る。後より、駕籠舁き二人、乘れを下ろせし四ツ手駕籠を舁き、後より幇間大勢、下駄傘にて出で來り、門口へ來て

仲居　ハイ、旦那のお歸りでござりますわいなア。

ト上手より、りん、出て

りん　これは祇園町の女中さん、ようお出でなさんした。



文化十三年七月中村座上演　三世坂東三津五郎の本藏

アノ旦那さんはお駕籠かえ。

幇間　左樣でござります、お駕籠によう御寐なつておいでなされます。

同　無理にお起し申したら、また御機嫌を損ねませう。

りん　それなれば例の通り、切り戸口から奥座敷へ、搖れないやうにお連れ申して下さんせ。ドレ、案內しようわいな。

駕籠　イエ、お勝手は存じて居ります。

りん　オヤ、例の駕籠屋さん、そんなら賴むぞえ。

駕籠　畏まりました。

ト駕籠を舁いて、下手切り戸口へ入る。

りん　お前方は、いつもの通り、一口呑んで行きなさんせ

幇間　イエ〳〵、此方の旦那のお座敷で、昨日からの呑み明かしで、今日は少しも頂けませぬ。

同　又この次に上がるまで、お預けに致しませう。

りん　さうでもあらうが、奥樣の云ひ付けで、お前方が見えたなら、是非呑ませて歸せと云う、て酒の支度もしてあるし、上げぬとわしが叱られるわいな。

仲居　實に此方の奥樣のやうな、行き屆いた粹なお方はござんせぬなア。

同　それ〳〵、何れのお內儀さんでも、廓の者には當りの惡いものぢやに、いつ上がつてもやれこれと、お氣の毒なやうぢやわいな。

りん　そりや、ほんに自慢ぢやないが、どれ程旦那のお遊びが續いても、悋氣のりの字も怪我な事、わたしをりんと呼ぶより外、嫌味な事はちつとも仰しやらぬぞえ。

幇間　そりやア、あんまり粹過ぎるが、モシ旦那の外に。

ト親指を出し

お樂しみでもありやアしませぬかえ。

りん　どうして〳〵、わたしどもの奥樣に限つて、其やうな事があつてよいものでござんすか。コツ〳〵する程。堅いお方ぢやわいな。

幇間　そりや、その筈サ。

りん　なぜ〳〵。

幇間　名さへお石さまと云ふぢやござんせぬか。

りん　エヽ、何を云ふぞいな。

仲居　株で丹八さんの口合ひぢやわいな。ホヽヽヽ。

ト切り戸より以前の駕籠屋出て來り

駕籠　ヘイ、皆さん、お待遠でござりました。

りん　オヤ、駕籠屋さん、御苦勞でござんした。

仲居　サア、皆さん、もうお暇しようわいなア。
りん　マア、緩りとして行かしやんせいなア。
幇間　有り難うござりまするが、もうお暇いたしませう。
同　左様なら、奥様若旦那様へも
皆々　よろしう仰しやつて下さりませ。
りん　アイ／＼、又ござんせえ。
皆々　有り難うござります。
　トわや／＼云うて、皆々向うへ入る。
りん　ドレ、わしも勝手へ行きませうか。
　ト奥へ入る。
〽人の心の奥深き、山科の隠れ家を、尋ねて爰に來る人は、加古川本蔵行國が女房戸名瀬、道の案内の乗り物を傍へに待たせ只一人、刀脇差さずが實に、行儀亂さず庵の戸口。
　ト雪颪しになり、向うより、戸名瀬、襠裲、帽子、蛇の目傘、下駄にて出て來り、後より、侍ひ一人、中間一人、刀箱を持たせ、門口に思ひ入れあつて
戸名　頼みませう／＼。
　ト奥にて
りん　ハイ／＼／＼。

〽襷はづして飛んで出る、昔の奏者今のりん。
ドウレ。
　ト出て來り、門口を明けて
どちらからお出でなさんしたえ。
戸名　大星由良之助さまのお宅は、此方でござりまするか。
りん　左様でござりまする。
戸名　左様ならば、加古川本蔵が女房戸名瀬でござりまする。誠にその後は打絶えました。ちとお目にかゝりたい様子に付き、遙々参りましたと、傳へられて下されい。
りん　ハイ／＼、畏まりました。その通り奥様へ申しませう。少しのうち、それにお待ちなされませ。
〽尻振り廻はして入りにける。
　トりん、附け屋體へ入る。
〽云ひ入れさせて表の方。
　ト揚げ幕へ向ひ
戸名　乗り物、これへ。
　ト揚げ幕にて
大勢　ハア、
　ト向うより、鋲打ちの乗り物、侍ひ二人、挾み箱一人雪の付きし笠合羽にて出で來り

〽乘り物これへと舁き寄せさせ。
ト皆々、舞臺下手へ來り、駕籠を下ろす。
戸名　娘、これへ。
〽爰へと呼び出せば、谷の戸明けて鶯の、梅見附けたるほゝ笑顏、まぶかに着たる帽子のうち。
ト駕籠の戸を明ける。内より小浪、白の振り袖、丸綿にて出で
小浪　アノ、力彌さんのお屋敷は、もう爰かえ。
〽わしや恥かしいと艶めかし、取散らす物片付けて。
ト奥より、りん、出て
りん　先づこれへ、お通りなされませい。
ト手を突いて扣へる。
戸名　左樣なれば、御免なされて下さりませ。
ト戸名瀨、小浪、内へ入り、合羽を脱ぎ、裲襠を着て大小を差す。おりんは始終見惚れて居る事。門口へ向ひ
駕籠の者は、みな歸りや。
供廻　ハア、。
ト皆々下手へ入る。
りん　サア、此方へお通りなされませ。

ト皆々二重へ上がる。
〽と云ふもいそ〳〵娘の小浪、母に付添ひ座に直れば
〽お石しとやかに出で迎ひ。
トりん、火鉢、莨盆、茶を出す。二重上手より、お石出て上手へ住ひ
いし　お茶莨盆上げましたか。
りん　ハイ、差上げました。
いし　用事があれば呼ぶ程に、次へ行きや。
りん　ハイ……皆さん、御緩りとなされませ。
トおかし味の思ひ入れにて、上手障子屋體へ入る
いし　これは〳〵、お二方とも、ようぞお出で。疾よりお目にかゝる筈なれど、お聞き及びの今の身の上、お尋ねにあづかりまして、お恥かしう存じまする。
戸名　アノお石さまの改まつたお詞、お目にかゝるは今日初めてなれど、先達て御子息力彌どのに、娘小浪を云ひ號け致したからは、お前なりわたしなり、姻同士、その御遠慮には及びませぬわいなア。
いし　これは〳〵、痛み入つたる御挨拶、殊に御用繁い本藏さまの奥方、寒空と云ひ、思ひがけない御上京。戸名瀨さまは兎もあれ、小浪御寮、さぞ都珍らしからう。祇

閑清水智恩院、大佛樣御覽じたか。金閣寺拜見なら、好い傳手があるぞえ。
〽心置きなき挨拶に、只。
小浪　アイ。
〽アイも口の内、帽子まばゆき風情なり、戸名瀨は行儀改めて。
戸名　今日參る事、餘の儀にあらず、これなる娘小浪、云ひ號け致たして後、御主人鹽冶どの、不慮の儀に付き、由良之助さま力彌どの、御在所も定かならず、移り替りは世の習ひ、替らぬは親心、兎や角と聞き合せ、この山科にござると聞き、承りましたゆゑ、此方にも時分の娘早うお渡し申したさ。近頃押付けがましうはござりまするが、夫も參る筈なれど、勤めに暇のない身の上。この二腰は夫が魂ひ、これを差せば、卽ち夫本藏が名代と、わたしが役の二人前。由良之助さまにも御意得まし、祝言させて落ちつきたい。幸ひ今日は日柄もよし、御用意なされて下さりませ。
ト相述ぶる。
いし　これは〳〵、思ひも依らぬ仰せ。折悪しう夫由良之助は他行、さりながら、宿に居りまして、お目にかゝり申さうなら、御深切の段、千萬忝なう存じまする。云ひ號け致した時は、故殿樣の御恩にあづかり、御知行頂戴いたし罷り在るゆゑ、本藏さまの娘御を、貰ひませう然らばくれうと、云ひ約束は申したれども、只今は浪人、人遣ひとてもござらぬ家へ、如何に約束なればとて、大身な加古川本藏どのゝ御息女、下世話に申す提灯に釣鐘、釣合はぬは不緣の元。ハテ、賴みを遣はしたと申すではなし、どれへなりと外口へ、御遠慮なう遣はされませ、とサ、申さるゝでござりませうわいなア。
〽聞いてはつとは思ひながら。
戸名　アノマア、お石さまの仰しやる事。如何に卑下なされうとて、本藏と由良之助さま、身上が釣合はぬとな。左樣ならば申しませう。手前の主人は小身ゆゑ、家老を勤むる本藏は五百石、鹽冶どのは大名なりや、御家老の由良之助さまは千五百石、すりや本藏が知行とは、千石違ふを合點で、云ひ號けはなされぬか。只今は御浪人、本藏が知行とは、皆違うてから五百石。
いし　イヤ、そのお詞違ひまする。五百石はさておき、一萬石違うても、心と心が釣合へば、大身な娘でも、嫁に取るまいものでもない。



文政十年七月市村座上演　　小佐川常世のおいし

戸名　ムウ、こりや聞き所ぢや、お石さま。心と心が釣合はぬと仰しやるは、サア、どの心ぢや。それ聞かう。
いし　申しませうか。
戸名　承りませうか。
いし　左樣なれば申しませう……主人鹽冶判官さまの御生害、御短慮とは申しながら、正直を元とする、お心より起りし事、それに引替へ師直に、金銀遣ひ媚び諂らふ、追從武士の祿を取る本藏どのと、二君に仕へぬ由良之助が、大切の子に、釣合はぬ女房はハイ、持たされませぬ。
〽聞きも敢へず膝立て直し。
戸名　諂ひ武士とは誰が事、樣子に依つては、聞捨てられず。
〽そこを免すが娘が可哀さ。祝言あらうがあるまいが、云ひ號けあるからは、天下晴れての力彌が女房。
いし　ムウ、面白い。女房ならば夫が去る。力彌に代つてこの母が、去つた〳〵、去りました。
　ト云ひ捨て奥へ入る。
〽云ひ放し、心隔ての唐紙を、はたと引立て入りにける、娘はわつと泣き出し。

小浪　折角思ひ思はれて、云ひ號けした力彌さま。〽逢はせてやろとのお詞を、頼りに思うて來たものを。姑御の胴慾な。去られる覺えわたしやない。母樣、どうぞ詫び言して、祝言させて下さりませ。
　ト戸名瀨に取付く。
〽縋り歎けば母親は、娘の顏つく〴〵と打眺め〳〵。
戸名　親の慾目か知らねども、ほんに其方の器量なら、十人並も優つた娘、よい聟がなと詮議して、云ひ號けした力彌どの、尋ねて來た甲斐もなう、聟にも知らさず去つたとは、義理にも云はれぬお石どの。〽姑去りは心得ぬ。ムウ、さては浪人の身の寄る邊なう、筋目を云ひ立て有德な町人の聟になつて、義理も法も忘れたな。
　ト娘に向ひ
ナウ娘、今云うた通りの男の根性。去つたと云ふを面當てに、外へ嫁入りしてたもや。欲しがる所は山々ある。外へ嫁入りする氣はないか、どうぢや。
〽どうぢや〳〵と尋ぬる親の氣は張り弓。
　ト小浪、思ひ入れあつて泣き、戸名瀨、こなしあつて云ふ。

小浪 アノ母様の、胴慾な事仰しやります。國を出る折父様の仰しやつたは、浪人しても大星力彌。

〽行儀と云ひ器量と云ひ、仕合せな聟を取つた、貞女兩夫に見えず、譬へ夫に別れても、又の夫を設けなよ、主ある女の不義同然。

必らず〳〵。

〽寐覺めにも、殿御大事を忘るゝな、由良之助さま夫婦の衆へ、孝行盡し夫婦仲。

睦ましいとて、あじやらにも。

〽悋氣ばしして去らるゝな、あんぜうかとて隱さずに、身重になつたら早速に、知らせてくれと仰しやつたをわたしやよう覺えて居る。

〽去られて去んで父様に、苦に苦をかけてどう云うて、どう云ひ譯があらうとも。

力彌様より外に殿御は、わしや否々、否ぢやわいなア。

〽わしや否々と一筋に、戀を立て拔く心根を、聞くに耐へ兼ね母親、涙一圖に突き詰めし、覺悟の刀拔き放せば

ト刀を拔きて自害せうとする、小浪、驚ろき留め

母様、こりや何事でござりまするえ。

〽押留められて顏を上げ。

戸名 何事とは胴慾ぢや。今も其方が云ふ通り、一時も早う祝言させ、初孫の顏見たいと、娘に甘いは父御の習ひ喜んでござる中へ、まだ祝言もせぬ先に、去られて戻りましたとて、どうマア連れて去なれうぞ、と云うて先に合點せにや。

〽仕樣模樣もないわいの。

ト よき時分に戀慕の合ひ方になり、向うより、本藏、虚無僧の拵らへ、よろしく出て來り、門口に佇む。

殊に其方は先妻の子、わしとは生さぬ仲ゆゑ、袖にしたかと思はれて、どうも生きては居られぬ義理。この通りを死んだ後で、父御へ云ひ譯してたもや。

〽また取上ぐる刀に縋り。

小浪 ア、勿體ない事仰しやります。殿御に嫌はれ、わたしこそ死すべき筈。生きてお世話になる上に、苦を見せまする不孝者。母様の手にかけて、わたしを殺して下さりませ。去られても殿御の家、爰で死ぬれば本望ぢや早う殺して下さりませ。

ト 母に取付く。

戸名 オヽ、よう云やつた、出かしやつた。其方ばかり殺しはせぬ。この母も三途の友。其方をわしが手にかけて

母も後から行く程に、ナ、娘、覺期はよいか。

〽覺悟はよいかと立派にも、涙留めて立ちかゝり。

ト表の尺八の音を聞いて思ひ入れ。

コレ娘、あれを聞きや。表には虚無僧の尺八。ありや鶴の巢籠り。

〽鳥類でさへ子を思ふに、科もない子を手にかけるは。母も因果。

小浪　わたしも因果。

戸名　因果同士の

兩人　寄合ひぢやなア。

〽顫ふ拳をやう〳〵に、振り上ぐる刃の下、尋常に座を占め手を合せ。

ト正體なく泣き伏し、また氣を取り直し、刀を拔きかけ

戸名　サ、娘、覺悟はよいか。

小浪　南無阿彌陀佛。

〽と唱ふる內より。

いし　御無用。

〽聲かけられて思はずも、たるみし拳尺八も、共にひつそと靜まりしが。

ト表の尺八を止める。これに心付き

戸名　オ、さうぢや。いま御無用と止めたは、虚無僧の尺八よな。助けたいが山々で、無用と云ふに氣臆れし、未練なと笑はれな。娘、覺悟はよいか。

小浪　南無阿彌陀佛。

〽また振りあぐる。また吹き出す、途端の拍子に。

いし　御無用。

戸名　また御無用と止めたは、修行者の手の內か。但し又斯う振り上げた刀の手の內か。

いし　イヤ、お刀の手の內御無用。悴力彌と祝言させう。

戸名　エ、、さう云ふ聲はお石さま。そりやマア誠か、眞實かいなア。

〽と尋ぬる襖の內よりも。

いし　相に相生の松こそめでたかりけれ。

〽祝儀の小謠白木の小三方、目八分に携へ出で。

ト お石、裲襠衣裳にて、白木の三方を持ち、出て來りよき所へ住ふ。

義理ある仲の一人娘、殺さうとまで思ひ詰めた、戸名瀨さまの心底に、小浪どのゝ貞女、志しがいとほしさ。させ憎い祝言の杯。その代りには、世の常ならぬ嫁の杯、

受取るはこの三方、御用意あらば申し請けたい。

〽御用意あらばと差置けば、少しは心安まりて、拔いたる刀鞘に納め。

戸名　ト肌を入れ、行儀を直し、こなしあつて

世の常ならぬ杯とは、引出物の御所望ならん。

ト大小を三方に載せ

この二腰は夫が重代、刀は正宗、差添は浪の平行安、家にも身にも替へぬ重寳。これを引手に。

〽皆まで云はさず。

いし　イヤ、浪人と侮つて、價の高い二腰、まさかの時に賣り拂へと、云はぬばかりに聟引出。御所望申すは、これではない。

戸名　ムウ、そんなら何が御所望で。

いし　この三方へは、加古川本藏どのゝ、お首が載せてもらひたい。

戸名　エヽ、そりや又なぜに。

いし　さればいなア、御主人鹽冶判官さま、高師直にお恨みあつて、鎌倉殿にて一刀に、切りかけ給ふその時に、こなたの夫加古川本藏どの、その座にあつて抱き止め、殿を支へたばつかりに……御本望をも遂げられず、敵はやら〳〵薄手ばかり、殿はやみ〳〵御切腹。口へこそ出し給はねど、その時の御無念が、お前の夫本藏どのに、かゝるまいか、あるまいか、家來の身としてその娘、安閑と女房に持つやうな、力彌ぢやと思うての祝言ならば、この三方へ本藏どのゝ白髮首。否とあらばどなたでも、首を並ぶる尉と姥、それ見た上で杯させう。サア御返答が承りたい。

〽鋭き詞の理窟詰め、親子ははつと差打俯き、途方に暮れし折からに

本藏　加古川本藏が首、進上申す。

〽お受取り下されと、表に扣へし虚無僧の、笠脫ぎ捨てゝ靜々と。

ト天蓋を取り、内へ入る。兩人、恟りして

戸名　ヤ、お前は。

小浪　父さん。

戸名　本藏どの、爰へはどうして、この形は。

本藏　ヤア、ザワ〳〵と見苦しい。扣へて居らう。

ト本藏、袈裟を取り、大小を差し

コリヤ、戸名瀨、始終の樣子は皆聞いた。其方達に知らさず、上京せし本藏。御前表は病氣と披露し、出養生の

願ひを立て、夜を日についでこの地へ到着……見請けますれば其許が、由良之助どの〻御内室、お石どのよな。今日の仕儀、斯くあらんと思ひ、妻子にも知らせず様子を窺ふ加古川本藏。案に違はず拙者が首、聟引出に欲しいとな。ハヽヽヽヽ、イヤハヤ、そりや誠の侍ひの云ふ事。主人の仇を報はんと云ふ所存もなく、遊興に耽り、大酒に性根を亂し、放埒なる身持ち。日本一の阿房の鏡。蛙の子は蛙になると、親に劣らぬ力彌めが大白痴。

ト戸名瀨、小浪、心遣ひの思ひ入れにて、本藏の袖を引く。

ムウ、申してもよいわえ。打ッちやつて置け……狼狽へ武士の鈍ら刃金、この本藏が首へは立たぬ、馬鹿盡すな。

〽と踏み碎く。

ト件の三方を踏み碎く。兩人、心遣ひの思ひ入れ。

割れ三方のふち放され。此方から聟にや取らぬ。ナニ猪小才な。

〽猪小才な女と云はせも果てず。

いし　ヤア過言なり本藏どの、浪人の銹刀、切れるか切れぬか鹽梅見せう。不肖ながら由良之助が女房、望む相手ぢや。勝負々々。

〽裾引上げ、長押に掛けたる鎗おつとり、突きかゝらんずその氣色。

ト手早く長押の鎗を取つて立ちかゝる。戸名瀨、小浪、支へる、

戸名　ア、コレ待つて。

〽とゞめ隔てる女房娘、邪魔ひろぐなと荒氣なく、右と左へ引退ける、間もあらせず突きかゝる、鎗の汐首引ッ摑み、もぢつて拂へば身を反向け、諸足ぬはんとひらめかす、刃むねを蹴つて蹴上ぐれば、拳放れて取落す鎗奪はれじと走り寄る、腰輪帶際引ッ摑み、どうと打ち付け動かせず、膝に引敷き强氣の本藏。

トこの文句にて、兩人烈しき立廻り。トゞお石を引敷く。奥より、力彌、走り出て、落ちたる鎗を取つて直ぐに本藏を突き、これにて本藏ヌヂ／＼となる。

〽敷かれてお石が無念の齒噛み、親子はハア／＼危ぶむばかり、中へ駈け出る大星力彌、捨てたる鎗取る手も見せず、本藏が馬手の肋、弓手へ通れと突き通す、うんとばかりにかつぱと伏せば、なう情なやと母娘、取付き嘆くに目もかけず、止め刺さんと取り直す。この時、奥にて

ト力彌、鎗を拔かうとする。

由良　ヤレ待て力彌、早まるな。
〽鎗引留めて由良之助、手負ひに向ひ。
　ト由良之助、出て、本藏を介抱する。好き所に住ひ
一別以來珍らしゝ本藏どの、御計略の念願屆き、聟力彌
が手にかゝり、さぞ本望でござらうな。
〽星を差したる大星が、詞に本藏眼を開き。
　ト本藏、苦痛の思ひ入れ。
本藏　主人の鬱憤晴らさんと、この程の心遣ひ、遊所の出
合ひに氣を緩ませ、徒黨の人數は揃ひつらん。
由良　ヤ、なんと。
　ト竹笛入りの合ひ方になり
本藏　思へば貴殿の身の上は、本藏が身にあるべき筈。當
春鶴ケ岡御造營の砌り、主人桃井若狹助、高師直に恥し
められ、以ての外の憤り、某を密かに召され、先ッ斯う
斯うの物語り、明日御殿にて出ッくはせ、一刀に討ち留
めると、思ひ切つたるお顏色、留めても留まらぬ若氣の
短慮、小身ゆゑに師直に、賂ひ薄きを根に持つて、恥し
めたると知つたるゆゑ、主人に知らせず不相應の、金銀
衣服數の物、師直へ持參して、心、染まぬ諂ひも、主人
を大事と存ずるから。賂ひ負ふせ彼方から、あやまつて
出たゆゑに、切るに切られぬ拍子拔け。主人が恨みもさ
らりと晴れ。
〽相手變つて鹽冶どのが、御難儀となつたはその日。
相手死なずば切腹にも及ぶまじと、抱き留めたは思ひ過
した、本藏が一生の誤まり。娘が難儀と白髮のこの首、
聟どのに。
〽進ぜたさ。
女房娘を先へ上し、媚び諂ひを身の科に、お暇を願
うてナ、道を替へて其方達より、二日前に京着。若い折
の遊藝が、役に立つた四日のうち。こなたの所存を見拔
いた本藏、手にかゝれば恨みも晴れ、約束の通りこの娘
力彌に添はせて下さらば、未來永劫御恩は忘れぬ。コレ、
手を合せて賴み入る。忠義ならでは捨てぬ命、子ゆゑに
捨つる親心、推量あれ、由良之助どの。
〽云ふも泪に咽せ返れば、妻や娘はあるにもあられず。
小浪　ほんに斯うとは露知らず、死遲れたばつかりに、お
命捨てるはあんまりな、冥加の程が恐ろしい。お免しな
されて下さりませ。
〽免して下され父上と、かつぱと伏して泣き叫ぶ、親子
の心思ひやり、大星親子三人も、共に萎れて居たりしが

由良 ヤア本藏どの、君子はその罪を憎んでその人を憎まずと云へば、緣は緣、恨みは恨みと、格別の沙汰もあるべきにと、さぞ恨みに思はれんが、所詮この世を去る人へ、底意を明かし見せ申さん。

〽未前を察して奧庭の、障子さらりと引明くれば、雪を束ねて石塔の、五輪の形を二つまで、造り立てしは大星が、成り行く果ぞ顯はれたり。

ト正面の襖を引拔く。雪降りある體の遠見、雪持ちの五輪二つあり。

本藏 ハ、ア、嬉しや、本望や。吳王を諫めて誅せられ、恥かしめを笑ひし吳子胥が忠義は取るに足らず、忠臣の鏡とは、唐土の豫讓、日本の大星、昔より今日に至るまで、唐と日本にたんだ二人。その一人を親に持つ、力彌が妻になつたは。

〽女御高位に備はるより、百倍優つて其方が身は、武士の娘の手柄者。

手柄な娘が聟どのへ、引出の目錄進上いたさん。

〽懷中より取出すを、力彌取つて押戴き。

ト懷中より袱紗に包みし繪圖を出し、力彌に渡す。力彌取つて、由良之助が前へ持ち行き開き見る。

〽開き見れば、こは如何に、目錄ならぬ師直が、屋敷の樣子逐一に、玄關長家侍ひ部屋、水門物置、柴部屋まで、繪圖に委しく書き付けたり、由良之助ハツと押戴き。

由良 ヘエ、有り難し忝なし。徒黨の人數は揃へども、敵地の案內知れざるゆゑ、發足も延引せり。この繪圖こそは孫吳が秘書。我が爲の六踏三略。兼ねて夜討と定めたれば

力彌 繼ぎ梯子にて塀を越し。

由良 忍び入るには緣側傳ひ。

力彌 雨戸外せば

由良 直ぐに居間。

力彌 爰を仕切つて

由良 斯う責めて……ムウ。

〽親子が喜び、手負ひながらもぬからぬ本藏。

本藏 イヤ／＼、それは僻事ならん。用心嚴しき高師直、障子襖は皆尻ざし、雨戸に合栓合くろゝ。こぢては外れず、掛矢にて、壞たば音して用意せんが、サ、、、如何に／＼。

由良 オ、、それにこそ手段あり、凝つては思案に能はずと、遊所よりの歸るさ、思ひ寄つたる前栽の雪持ち竹、

雨戸を外す我が工夫。仕様を爰にて見せ申さん。ソレ力彌。

力彌　ハッ。

〽庭に折しも雪深く。

ト謡らへの合ひ方にて、力彌、股立ちを取つて、庭下駄を穿き、上手の竹へ小柄に下げ緒を結び付けて手裏剣に打ち、これにて、雪バラ／＼と散つて竹弛む。これを引寄せ、鴨居にはめる。

由良　アレ、あの如く弓を撓らへ、弦を張り、鴨居と敷居に嵌め置いて、一度に切つて放つ時は、

力彌　先ヅこの如く。

ト脇差にて弦を切る。

〽積つたる枝打ち拂へば、雪散つて伸びるは直なる竹の力、鴨居弛んで溝外れ、障子殘らずばた／＼／＼。

ト文句通り障子、仕掛けにてバタ／＼と落ちる。

〽本藏苦しさ打忘れ。

本藏　ハ、ア、したり／＼、計略と云ひ義心と云ひ、斯程の家來を持ちながら、料簡もあるべきに。

〽淺きたくみの鹽冶どの、口惜しき振舞ひやと、悔むを聞くに御主人の、御短慮なる御仕業。

ア、今の忠義を戰場の

由良　御馬前にて盡しなば

戸名　末世末代武夫の

力彌　美名は天下に

いし　殘らんもの。

本藏　由良之助どの。

由良　本藏どの。

本藏　是非もなき世の

皆々　有様ぢやなア。

〽思へば無念閉ぢふさがる、胸は七重の門の戸を、洩るは涙ばかりなり、力彌は父が前に手を仕へ。

力彌　本藏どのゝ寸志に依り、敵地の案内知れたる上は、泉州堺の町人、天川屋義平方へ通達し、荷物の駈引き仕らん。

由良　なにサ／＼、山科に在ること、隱れなき由良之助、人數集めは人目あり、一先づ堺へ下つて後、あれから直ぐに發足せん。其方は後に殘り、母娘諸ともに後の片附け諸事萬事、何もかも心殘りのなきやうに、ナ、コリヤ明日の夜船に下るべし。我れは切ひ本藏どのゝ、忍び姿を我が姿



文化十三年七月中村座上演　中村松江の戸名瀬

ト上着を脱ぎ、前帶にして袈裟をかける。お石、手傳ふ。此うち、由良之助、力彌にソレと云ひ付ける。心得て正面の額の内より袋入りの短刀を出す。由良之助取つて懷へ納め、天蓋を着て尺八を取り、花道の方へかゝる。

〽袈裟うちかけて編笠の、忍びをいたゞく報謝返し、未來の迷ひ晴らさん爲。

今宵一夜は嫁御寮へ、舅が情の

〽戀慕流し、歌口しめし立出づれば、兼ねて覺悟のお石が嘆き。

いし　どうぞめでたう御本望を。

〽御本望をとばかりにて、名殘り惜しさの山々を、云はぬ心のいぢらしさ、手負ひは今を致死期どき。

小浪　モシ。

〽父樣と呼べど答へぬ斷末魔、親子の緣も玉の緒も、切れて一世の憂き別れ、わつと泣く母泣く娘、共に死骸に向ひ路の、回向念佛は戀無情、出で行く足も立ち留まり六字の御名を笛の音に。

ト本藏苦しむ。兩人介抱。お石、力彌も立ちかゝり、由良之助、花道に立ちかゝり、尺八を吹く。此うち、

お石、手水鉢の柄杓にて、力彌と小浪に水杯をさせる。本藏落入る。

いし　モシ。

皆々　南無阿彌陀佛。

〽南無阿彌陀佛、これや尺八煩惱の、枕並べる追善供養閨の契りは一節切り、心殘して。

皆々　ハア、。

ト舞臺の三人、泣き落す。由良之助、拜む。段切れにて、

ト幕外、三重にて、由良之助、尺八を吹きながら、悠悠と向うへ入る。あとシャギリ。

幕

十段目　天川屋の場

役名——天川屋義平。同女房、おその。丁稚、伊吾。太田了竹。下男、權助。前原伊助。矢間重太郎。杉野十平次。勝田新左衞門。不破數右衞門。

竹本連中

本舞臺、一面の平舞臺、上手折り廻し、一間の障子屋體。向う押入れ。眞中三尺の暖簾口、赤壁に諸國狀さし帳面の書割り。いつもの所門口、すべて天川屋見世の體。爰に莚包みの荷物六ツ七ツ置き、仲士二人、帳面に目方番附を記しゐる。外に船頭三人、柿の筒袖、絆天にて荷物を積み出してゐる見得。てんつゝ、角兵衞獅子の鳴り物にて幕明く。

ト直ぐに床の淨瑠璃になる。

〽津の國と和泉河内を引受けて、餘所の國まで船よせる、三國一の大湊、堺というて人の氣も、さかしき町に底もなさ、天川屋義平とて、金から金を儲けため、見かけは輕く內證は、重い暮らしに重荷をば、てんでに店で〆くくり。

ト仲士の兩人荷札を見て

仲一　ソレ十八貫五百目、元右衞門船。

仲二　オツト、よし〳〵。

仲一　同く十九貫三百目。

仲二　それもよし。

ト銘々帳面へ寫し、掛け硯を片付けて

オイ若い衆、それで都合何箇ぢやの。

船一　今し方長持が五棹、これと合せて七箇でこんす。

仲一　成る程、それで數は合つたといふものだ。マア、一服やらつしやい。

仲二　こなた衆も大儀であつた。

船二　それはさうと、一體爰の奉公人衆は、どこへ行かれたの。

仲一　されば、どうした譯か知らぬが、飯焚き男までが出替りで、家內に殘るはたつた三人。

仲二　それで、わしらまでが雇はれて來たが、緣といふ者は乙なもので、親方の氣がよいから、ツイづる〳〵となつてはゐるが、奉公といふ譯でないから、毎晩々々內へ歸るのぢや。

皆々　それぢやア二人ながら日雇に來て居るのか。

兩人　オイナウ。

船三　そりやア氣樂なものだ。奉公人でなけりやア、もう用も仕舞ひであらう。請船の緣起に一杯やるから、一緒にごんせ。

仲一　それは有り難い。酒と聞いては、少し位惡く思はれても大事ない。御馳走になりに行かう。

仲二　コレ〳〵、それでも親方に斷わつて、ゆつくりやる

がいゝ。

船一　こなた衆も合點の悪い。ゆつくり飲まれてはなるものか。

仲一　ハテ、何にも云はつしやるな。お神酒の加減が程よく廻れば、戎島位の散財は此方の持きり、船玉を抱かせてやるワ。

船二　それは奇妙。大分話しが面白くなつて來たわえ。

船三　コレ、なんぼ船乗りでも、こなた衆の煽てには乗らぬぞや。

仲二　何を云ふぞえ。風間のよいうち、出船とやらかさう

三人　サア〳〵、湊へごんせ〳〵。

ト皆々荷物を擔ぎ、橋がゝりへ入る

〽家内の世繼は今年四ツ、守は十九の丸額、親方よりも我が遊び。

ト奥より伊吾、丁稚かづら、拍子木を襷にかけ、辨慶の人形を持ち、由松、金太郎の人形を持ち、伊吾に手を引かれ出で來り

伊吾　サア〳〵、始まりぢや〳〵。面白い事〳〵。

ト拍子木を叩きながら

泣き辨慶の信田妻。東西々々、爰に哀れを止めしは、この由松に止めたり。元來その身は父ばかり、母は去られて去なされたで、泣辨慶と申すなり。

由松　コリヤ伊吾よ。もう人形廻しは否ぢや〳〵。母さんを呼んでくれいやい。

伊吾　イヤモウ、其やうな無理を云はつしやるか。旦那はんに云うて、こなはんも追ひ出すぞや。よう聞かんせや。先の月からおかまが割れて、手代は手代で鼠の子かなんぞのやうに、目が明かぬというては追ひ出し、飯焚は大きな欠伸をしたというては暇をやり、今ではこなはんわしと旦那はんとばかり、どうでこの內を夜拔けをするのかして、ちよこ〳〵船へ荷物が行くが、駈落ちするなら人形箱持つて行かうぞや。

由松　イヤ、人形廻しより、おりやモウ寢たい。

伊吾　アレ、もうおればかりをそゝなかすか。せうがないおれが抱いて寢てやらうぞや。

由松　否ぢや〳〵。

伊吾　其やうにやんちやばかり云はぬものぢや。

由松　それでも伊吾は乳がないもの、否ぢや〳〵。

伊吾　アレ、また無理を云ふかいなう。こなはんが女の子なら、乳よりよい物があるけれど、何をいうても相輩同

士、角突合ひをしようより、もう寢やんせ〳〵。

〽これも涙の折柄に、息せき來る太田了竹。

ト伊吾、由松を下に寢かす。てんつゝになり、向うより了竹、好みのかつら、羽織一本差し、供男、海鼠えりの合羽にて、藥箱を脊負ひ出て來り、門口へ來り

了竹　頼まうぞや〳〵。

伊吾　誰れだ〳〵。

ト伊吾頭をあげる。

了竹　おれぢや。爰明けてくれ。

伊吾　なんぢや、大風な奴ぢや。明日うせう。

了竹　イヤ、けしからぬ事を吐かし居る。コリヤ、明けぬか。了竹ぢやが。

伊吾　ナニ、かんちくぢや。聞いたやうな名ぢや。オヽ、それ〳〵、寒竹なら藪醫者どのぢや。よし〳〵待たんせ、いま明けるワ。

ト由松を抱いて奧へ入り、直ぐに出て來る。了竹、戸を叩き居る。

了竹　早う明けぬか〳〵。

伊吾　それ明けたワ。

トぐわらりと明ける。了竹この拍子に内へ雪駄のまゝヒヨロ〳〵と入る。

了竹　馬鹿野郎め。明けるなら明けると吐かし居れ。さうしてまだマア宵から寢さつて、人も來るものだ。四ツまで起きてゐをれ。

ト足に飯粒の着いたる思ひ入れにて

何ぢや飯粒だらけぢや。これも大方、われが喰ひこぼしたものであらう。氣を附けろ。

伊吾　大きにお世話。

了竹　お茶でも持つて來い。

伊吾　面倒な。湯も茶もないといふに。

了竹　そんなら煙草盆を出せ。

伊吾　よくいろ〳〵な事を云ふ。

ト莨盆を足にて引かけ出し

それ莨盆。

ト了竹の前へ出す。

了竹　おのれマア、いつまでも〳〵困つた奴ぢや。阿房に付ける藥がないとは、よういうた者ぢや。

伊吾　ナニ藥がない、えらい貧乏醫者の。

了竹　べら坊づらめ。奧へ行つて義平を呼んで來い。

伊吾　オイ〳〵。呼びは呼ばうが、先刻から頭痛がするか

ら、ちよつと見て下んせ。
了竹　マア、呼んで來いと云ふに。
伊吾　わしが頭痛を癒したら呼んでやる。それでなければおいらは否ぢや。
了竹　エヽ、うるさい奴ぢや。そんなら見せい。
ト煙管を置いて居直る。
伊吾　オヽ、見て下んすか、嬉しい〳〵。ソレ
ト足を了竹の前へ出す。
了竹　オヽ、呆れた阿房ぢや。胴脈といふはあるが、おのれは脛脈といふものだ。
トふと心付きしこなしにて
われにはよい丸藥がある。
ト入りし時踏みつけし飯粒を始終手にて拈り居て
ソレ、これを呑め。
伊吾　えらい物を下んしたの。
ト直ぐに口へ入れて
アノ、ぐちや〳〵と和らかな、さうして鹽が辛いやうぢや。
了竹　その筈ぢや。いま出來立のホヤ〳〵。結構な妙藥。名は犀飯丸というて、秘法の事ゆゑ、鹽氣の加減がしてある。用ひやうは鹽湯なれども、跡から湯水を呑めば、丁度間に合ふといふ早手まはしの良藥。どうぢや、もうよからう。
伊吾　いゝどころか、さつぱり利かぬ。さうして胸が惡くなつた。
了竹　それが利目ぢや。動じるといふのは藥の加減。もどしさへすれば、直に癒るから、奥へ行つて水を呑むなら義平を呼んで來い。
伊吾　誰れが呼ぶものか。達者なわしを、よう此やうに。ゲイ〳〵〳〵。
了竹　達者なら喰はねばよいに。意地ぎたなしめ。
伊吾　ナニ穢な物も喰はせねえで、竹の子醫者め。
了竹　此奴が〳〵、恩知らずめ、キリ〳〵うせぬか。
伊吾　うせぬ〳〵。秘法の藥ぢやというて、秘法どころか滅法界の、ゲイ〳〵〳〵
了竹　エヽ、それだから水でも呑めといふのだ。樣々な事を吐かし居る。キリ〳〵と行けと云ふに。
ト立ちかける。伊吾は行かじと爭ふ。捨ぜりふよろしく、この時奥より義平、好みの着附けにて出て來り
義平　イケ騷々しい。また騷ぎやアがるか。

伊吾　それでもゲイ
了竹　ゲイどころか、藝なし猿め、うぬ、おれを馬鹿にしをるか。
義平　ハテ、ようござりまする。おのれも奥へ行き居らぬか。
伊吾　ゲイ。
　トまじめになり、こなしあつて奥へ入る。
義平　ヤ、舅御さま、お出でなされましたか。
了竹　イヤ、あんまりようも來ぬが、マア、許さつしやれ
〽ずつと通つてきよろ／＼眼。
　義平どの、この頃は逢ひませぬの。
　ト莨盆を引寄せる。合ひ方になり
義平　左様でござりまする、商賣に取紛れて、大きに御無沙汰を仕りました。何かと女房そのを、養生がてら遣はしまして、お世話様でござりませう。して、この間は、お藥でもたべまするか。
了竹　オヽ、藥も服みまする、飯も隨分一人前に喰ひまする。
義平　それは重疊な儀でござりまする。
了竹　イヤ、あんまり重疊な儀でもござらぬて。手前なぞも國元に居た時分は、斧九太夫どのより御扶持を貰ひ、殊の外なるお世話になりし時分は、相應な身代でござつたが、今でに召使さへ、やう／＼一人か。
　ト思ひ入れあつて
イヤ、一人といへば、コリヤ／＼、權助々々。
　ト呼ぶ。供男、門口にて藥箱に腰をかけ、居眠りをして居る。
コレ權助、目を覺まさぬか。よう眠る奴ではないか。
　トこの時惘りして
權助　アイ／＼、あの入替へに利が行かねば、今度は附けかへると云ひました。
　トうか／＼云ふゆゑ、了竹こなしあつて
了竹　エヽ、やかましい。また寢惚けたか。大たわけめ。さうしてマア、どこの國にか藥箱に腰かけて、おのれマア、滅法界もない奴ぢや。
權助　ナニ藥箱へ……モシ、そりやアお前が滅法界だ。こりやア藥箱ではござりませぬ。針箱の古いのだものを。
　ト寢惚けたる振にて浮々と云ふ。
了竹　シイ／＼、たわけ面め。藥箱だわえ／＼。
　ト氣の毒なる思ひ入れにて

權助　ヤイ、目を覺ませ。寢惚けて役にも立たぬ事を。コレ、この藥、横町の肴屋へ持つて行つてナ、加減の藥でござると、早く持つて行け〳〵。

ト藥紙を出して渡す。供男、目をこすり〳〵

權助　それでも針箱だから、さう云つたのだ……モシ何かえ、この藥を、アノ肴屋へ持つて行くのかえ。

了竹　急病人だから早く持つて行け、道で又落すな。

權助　落したら又叱られるが、向うの病人は仕合せだ。

了竹　無駄口を叩かずと持つてうせぬか。

權助　エ、よく叱るぜ。給金もくれないで。

了竹　どうしたと。

權助　なにサ、暮れないうちに歸つて來ますよ。

ト捨て鐘になり、小言を云ひ〳〵向うへ入る。此うち義平、丸行燈を出し、灯をつける。了竹側へ寄り、こなしあつて合ひ方になり

了竹　ヤレ〳〵、人を遣ふは苦を遣へぢや……時に聟どのいま申した通り、何かと愚老身代が殊の外大病ぢや。その中へ娘を寄越して、イヤモウ、人增せば水增せとやら、それは親子の事ぢやゆゑ構はぬが、何を云うても若い女、殊に近所に、それは〳〵浮氣な若い息子なぞもあつて、アノ張るとやら何とやらに參らるゝが、併し、遊びに來るをござるなともいはれず、イヤモウ、大きに心遣ひぢやて。そこでわしが思ふには、世間體は貴樣の所から暇の出た分にして、サ、亭主のない女であれば、わしも心遣ひがない。又ひよつと不埒があつては貴樣も立たず、おれは勿論、コレこの皺腹でも切らねばならぬ。そこでこりや世間へ萬一の時云ひ譯の爲ぢやによつて、去り狀を書いてくりやれ。

義平　エ。

了竹　サ、なるまい。子もある仲ぢや。ナニ無理にとは云はぬが、そこが浮世の義理がらみ、人の口には戶が立てられぬ。そんな間違ひがあつてはならぬに依つて、ツイさら〳〵と三行半、義平どの、サア、わしが氣休め、書いて下され。

〽興に云ふのも物工み、一物ありと知りながら、否と云はゞ女房を直ぐに戾さん、戾されては賴みし人々へ、詞も立たずとつおいつ、思案する程もがりかゝり。

コレ聟どの、義平どの、去り狀は書かれぬか。イヤサ不承知か。不承知ならば、どうするものだ。隨分と取らずともよいてや。不得心なら是非がない。お園はモウモ

ウ一時片時も、親の內には置かれぬぞえ。ハテ、喰ひ潰されるは構はぬが、親の面のよごれる事が出來ては跡での後悔。また有やうは此方も娘に懸るが親の習ひ、今日から馬老はこの內に居候ふ。舅御樣なら義平、こなたもおれが子だ。世間で知つた聟舅、にぢり込んだら朝晩とも尾鰭の付いた肴を附け、云はずと知れた据る膳で孝行しやれ。義平どの、マアさう思うてくれよ。

〽附込まれて流石の義平、企みに乘るが口惜しやと、思へど此方の一大事、見出されてはと掛け硯、取つて引寄せさら〳〵と。

ト掛け硯を引寄せ、去り狀を認め

義平　サア、了竹どの、舅どの、達てお前の望みゆゑ、書き憎い暇の狀、この書き物を渡すからは、赤の他人、餘り無法な云ひ分なれど、少し此方に込入つた話しもあれば、云ふ通りおこわにかゝつて遣る去り狀、緣が切れゝば親でもなし、必らず明日から親仁どの、此方の內へござるなよ。

〽去り狀渡せば了竹は、猶も巧いと笑坪に入り。

ト去り狀を了竹取つて思ひ入れあつて

了竹　オヽ、そりや云はずとも知れた事だワ。聟でもくいでもない內へ、なんのよしみで來るものか。コレ、おれがちつと聞いた事があるワ。何だかこの頃は、得體も知れぬ浪人が、爰の內へ入り込むげな。其やうな男に、あの娘添はして置くは危ないもの。そこで書かせたこの去り狀、これさへ取れば、どこのどうした金持の、世話にさするも親の勝手、行く〳〵は御親造樣にもならうも知れぬ。そこが女は氏なうて、玉の輿にも乘るが當世。

ト莨を吸ひつけ思ひ入れ。

なんと、さうではござらぬか。

義平　さうであらうよ。常から知れたこなたの氣質、商賣柄に似合はぬ胸氣、どうで彼奴は鬪ひ者、無理暇取つて外々へ、嫁らす事と見え透いて居ますワ。性根の腐つた女なら、子があつたとて未練は殘さぬ、こなたの勝手にさつしやれな。

了竹　親の威光で勝手にするのだ。緣さへ切れば、今夜のうちにも片附けるワ。

義平　こなたの娘だ、どうともさつしやれ。

了竹　しかねるものか、今の間だ。

義平　エヽ、小肝のいれる。歸らつしやれい。

了竹　ハテ、一服のんで行くワ。

義平　のまずとキリ／＼歸らつしやい。
　ト門口へ突き出す。
了竹　うぬ、親をどうしやがる。
義平　親ぢやアないワ。去り狀やつたら赤の他人。その根性でも末々が、思ひやらるゝ了竹どの。
了竹　どうしたと。
　ト立ちかゝるを突きのけて
義平　一昨日ごんせ。
〽門口びつしやりかけ金かけ、其まゝ奥へ入りにける。
ト義平こなしあつて奥へ入る。了竹、門口にころびて痛む思ひ入れ。この時以前の權助出て來り　提灯を持つて
權助　旦那、只今お歸りなされまするか。
了竹　いま歸る所だ。なぜ早く迎ひにうせぬ。
權助　ナニ、うせない事があるものか。いま來た所だ。さうして肴屋へ藥を持つて行つたが、モシ、向うの病人がね。
了竹　どうした／＼。殊の外よいと云うたか。
權助　ハイ、あの藥を服みまするると
了竹　加減の藥でよいと云うたか。

權助　サア、たべまするど、それから眩暈がして
了竹　ムウ面白い。
權助　手先が急に痺れまして、
了竹　ムウ、面白い。
權助　痰が強くなりまして
了竹　ムウ、面白い。
權助　グツと目を見詰めまして
了竹　ムウ、面白い。
權助　其まゝ往生し
了竹　ムウ、面白い。
權助　モシ、死なれました。
了竹　ヤレ、氣の毒千萬な。
　トてんつゝ角兵衛獅子の鳴り物にて、兩人早足に向うへ入る。時の鐘を打込む。
〽月の曇りに影隱す、隣家も寢入る亥の刻過、この家を目がけて捕り手の人數、十手早繩腰提灯、影を隱して窺ひ／＼、間者と覺しき家來を招き、耳打ちすればさし心得、門の戸せはしく打ち叩き。
　ト此うちに蔀明きの仲仕兩人、菰包みの長持を擔ぎ、以前の船頭、黑四天大小凛々しき出立ち、一人に囁く事

あつて長持を門口に置き、門口を叩く事。義平出て
義平　誰れぢや〳〵。
船頭　イヤ、宵に來た元船の船頭でござる、船賃の算用が違うた。ちよつと明けてもらひませう。
義平　ハテ仰山な、僅かの事であらう、明日でも來やれ。
仲一　イヤ、今夜泛ける船、仕切つてもらはにや出されませぬて。
〽云ふも聲高近所の聞え、義平は立出で何心なく、門の戸を明くると其まゝ
船頭　御上意々々々。
ト内へバラ〳〵と入る。
〽捕つた動くな御上意と、押取り卷いて。
ト義平を圍ひ
皆々　動くな。
ト十手振り上げる。
義平　こは何ゆゑ。マア〳〵、お待ちなされませ。
ト皆々を押退けキツとなる。
〽四方八方眼を配れば、捕り手の兩人。
捕一　何ゆゑとは横道者。おのれ鹽冶判官が家來、大星由良之助に頼まれ、武具馬具を買ひ調へ
捕二　大廻しにて鎌倉表へ遣はす條、急ぎ召捕り拷問せよとの御上意、遁がれぬ所ぢや。
四人　腕まはせ。
義平　これは思ひも寄らぬお咎め、左樣の覺え聊かなし、定めてそれは人違ひ。
〽云はせも立てず。
捕一　ヤア吐かすまい。掟の趣き存じながら、忍び〳〵に武器を調へ
捕二　鎌倉表へ下す段々、間者を以て慥かに知る。
捕三　サア、何者に頼まれて大望に組みするや。何ほど包み隱すとも、足利どのゝ御制道
捕四　嚴しき事を知らざるや。見遁がし置かば役目の越度。汝白狀せぬに於ては
四人　いつその事に
捕一　爭はれぬ證據あり……ソレ、家來ども。
仲仕　ハア、。
〽ハツと心得持ち來る、宵に積んだる薦荷の長持、見るより義平は心も空。
義平　ヤ、この長持を
捕一　ソレ、動かすな。

〽四方の、十手その間に荷物切りほどき、長持明けんとするところ、飛びかゝつて下部を蹴退け、蓋の上にどつかと坐り。

ト皆々長持を切りほどかんとするを、義平皆々を支へ長持の上へ上がり、キッとなつて

義平　ヤア、麁忽千萬。この長持の內に入れ置いたは、さるお大名の奥方より、お誂らへのお手道具。お具足櫃の笑ひ本、笑ひ道具の注文まで、その名を記し置いたれば、明けさしては歴々の、お家のお名の出る事なれば、御覧あつてはいづれもの、御身の上にもかゝりませうぞ。

捕二　ヤア、いよ／＼以て胡亂な曲者。なか／＼大體では白狀は致すまい。申し合せた通り計らひ召され。

捕一　心得申した。

〽一間へ駈け入り一子由松を引立て出で。

ト一人、暖簾口へ入り、由松を引立てゝ來り

サア、義平、長持の內は兎もあれ、鹽冶浪人一統に固まり、師直を討つ密事の段々、よく知りつらん。有やうに云へばよし、云はぬと忽ち悴が身の上。コリヤ、これを見よ

〽と拔く刀、幼なき咽喉にさし附けられ、はつとは思へど色も變ぜず。

ト由松の咽喉元へ拔刀をさしつける、義平思ひ入れあつて

義平　ハテ、女童を責めるやうに、人質取つての御詮議か。天川屋の義平は男でござるぞ。子にほだされて存ぜぬ事を、存じたとは得申さぬ。曾て何にも存ぜぬ。知らぬと云ふから金輪奈落、憎しと思はゞその悴、我が見る前で殺した／＼

捕一　ても、土性骨の太い奴、管槍鐵砲鎖帷子、四十六本の槍印まで、調へやつたる其方。

捕二　知らぬというて其まゝに置かうか。達てあらがふ上からは、脊を立割り鉛の熱湯。

捕三　本馬ぶり／＼矢柄責め、水火の責は愚かな事。

捕四　一寸試しに切り刻み、苦痛の上に手痛き拷問。

捕一　それでも白狀

四人　致さぬか

義平　オ、面白い、刻まれう。武具は勿論、公卿武家の冠り烏帽子、下女小者が藁沓まで、買ひ調へて賣るが商人。それ不思議とて御詮議あらば、日本に人種が盡きませう……一寸試しや三寸繩も、商賣ゆゑに取らるゝ命、惜し

いとも思はぬ。サア殺せ、倅が見る前で、突け〳〵。一寸試しは腕から切るか、胸から裂くか、肩骨脊骨も望み次第、ナニこれしきに、びくともするのぢやアごんせぬ。

ト長持より飛び下り、由松を引ッたくり

〽差付け突付け我が子をもぎ取り。子にほだされぬ性根はまッかう。〽〆め殺すべきその血相。

ト由松を殺さうとする。この時長持の內にて

數右　ヤレ聊爾せまい。義平どの、暫し〳〵。

〽暫し〳〵と長持より、不破數右衞門重種、立出る體を見て悔り、捕手の人々一時に、十手捕繩打捨てゝ、遙か下がつて座を占むる、威儀を正しく數右衞門、義平に向ひ手を仕へ。

ト數右衞門、野袴ぷッ裂き大小、好みの忍び頭巾にて、長持の中より出る。捕り手の人々下座へ住ふ。義平由松を下に置き、思ひ入れ。

義平　ヤ、、、あなたは不破數右衞門さま。思ひがけない

數右　さて〳〵驚ろき入つたる御心底。泥中の蓮、砂の中の黃金とは貴公の御事。さもあらん、さもさうずと大星氏が、其許を見込んで賴みし一大事、微塵お疑ひは申さねども、馴染み近づきでない人々、四十餘人の中にも、天川屋義平は生れながらの町人、今にも捕へられ詮議にあはゞ如何あらん、何とか云はん、殊に寵愛の一子もあれば、子に迷ふは親心と評議まちまち、案じに胸も休まらず、所詮一心の定まりし所を見せ、古朋輩の者どもへ安堵させせん爲、せまじき事とは存じながら右の仕合せ。麁忽の段は眞平〳〵。花は櫻木人は武士と申せども、いつかな武士も及ばぬ御所存。百萬騎の强敵を防げども、左程に性根は据らぬもの。貴公の一心お借り受け、我れ我れが手本として、敵師直を討つならば、例へ巖石の中に籠り、鐵桶の內に隱るゝとも、やはか仕損じ申すべき。人ある中にも人なしと申せども、町家の中にもあればあるもの、一味合體の者どもの爲には、產土神とも氏神とも貴み奉らずんば、御恩の冥加に盡き果てませう。靜謐の代には賢者も現はれずと、エ、惜しいかな、亡君御存生の折ならば、一方の旗大將、一國の政道をお預け申したとて惜しからぬ御器量。これに並ぶ矢間重太郞、前原伊助、勝田杉野が輩、潰れし眼を開かする妙藥・名醫の心魂、有り難し忝なし。

四人　武骨の段々、頓平御免下さるべし。

〽すさつて三拜ひと〴〵も、疊に頭を摺りつければ。

ト皆々よろしく思ひ入れ。

義平　ヤア、それは御迷惑、お手上げられて下さりませ：お馴：染ない方々は、氣遣ひに思し召すも御尤も。もと私しは輕い者、お國の御用承つてより、經上がつたこの身代。判官さまの樣子承つて、共に無念さ止み難く、何卒この恥辱雪ぎやうはない事かと、力んで見ても石龜が地團太、及ばぬ事と存じた所へ、由良之助さまのお頼みこそ、心得たりと向う見ず、共にお力付けるばかり、情ないは町人の身の上、手一合でもお扶持を頂きましたらば、この度の思し立、袖褄に取着いてなりとも御供申し、いづれも樣へ息繼の、茶の水でも汲みませうに、それも叶はぬは、よく〳〵町人は淺ましいものと、これを思へばお主の御恩、刀の威光は有り難いもの。それゆゑにこそお命を、捨てらるゝはお羨しう存じまする。猶も冥途で御奉公のお次手に、義平めが志しも、お執成しなされて下さりませ。

〽あつき詞に人々も、思はず涙催ふして、奥齒かみ破るばかりなり、數右衞門取敢へず。

トよろしく皆々こなし。

數右　今晩鎌倉へ出立、本望遂ぐるも百日とは過すまじ、承はれば御内所まで省き給ふよし、重々の御志し、追ツつけそれも呼び返させ申さん。御不自由も今暫らく……イヤ、とかう申すうち暫時の隙入り。

ト立ち上がる。

義平　アイヤ、暫らく〳〵、申さばめでたき旅立なれば、いづれも樣へ御酒一つ。

數右　イヤ〳〵、その御心配は必らず御無用。

義平　ハテサテ、祝うて手打の蕎麥切を。

數右　手打とは吉左右。然らば前原矢間の御兩人は跡に殘り、先手組の人々は、郷右衞門どのゝ誘ひ、佐田の森までお先へ立たれよ。

伊重　委細承知いたしてござる。

義平　左樣ならば、あなた方は、直さま御出立でござりまするか。

十新　義平どのにも、段々お世話に相成り申した。

義平　隨分御無事で

數右　イザ義平どの

義平　いづれも様

兩人　おさらばでござる

〽別れてこそは入りにける。

ト送りにて數右衞門、重太郎、伊助兩人を案內して、義平由松を抱き奥へ入る。新左衞門、十平治兩人は思ひ入れあつて橋がゝりへ入る。時の鐘、風の音のあしらひになり

〽入る月と又出る月と二つ輪の、親と夫の中に立つ、お園は獨り小提灯、暗き思ひも子ゆゑの闇、あやなき門を打ち叩き。

ト向うよりお園、着流し、お高祖頭巾、小提灯を持つて出て來り、よろしくこなしあつて門口を叩き

その　伊吾よ〳〵。

〽と呼ぶ聲が、寢耳にふつと阿房は駈け出で。

ト奥より伊吾走り出で

伊吾　おれを呼んだは誰れぢや。化性の者か、魔性の者か。

その　イヤ、園ぢや、ちよつと爰明けてくれ。

伊吾　何ぢや明けてくれ……待たんせ、氣味が惡い。必らずバアと云ふまいぞ。

〽云ひつゝ門の戸押開き。

エヽ、お家さんか。ようごんしたなう。夜道を一人歩きをすると、病犬が嚙むぞえ。

その　オヽ、その犬になりとも嚙まれて死んだなら、今の思ひはあるまいに、わしや去られたわいなう。

伊吾　鈍な事にならんしたなう。

ト手拭を出して、あたりを拭ひなどして

マア〳〵、內へ入らんせ〳〵

その　ほんに其方は優しい者ぢやなう。して、旦那どのは寢てかや。

伊吾　イヽエ。

その　留守かや。

伊吾　イヽエ。

その　何の事ぢやぞいなう。

伊吾　ソレ、マア足を拭かんせ。

ト手拭を前へ置く。

その　オヽ、よう氣が附きました。わが身は大分賢うなりやつたわいなう。

伊吾　さうかして誰れでも譽めるわえ。

その　オヽ、さうであらう。伊吾よ、わしが留守のうち、變つた事はなかつたかや。

伊吾　その變つた事といふはの……オヽ、あるぞ〳〵。

その　早う話して聞かしや。

伊吾　聞かんせ、斯うぢや。お前も知つて居やんす、アノめいたがの。

その　アヽ、めいたとは女の事ぢやないか。

伊吾　オイナウ、そのめいた犬が子を產んだぞや。

その　エヽ、何を云やる。そんな事を聞くのぢやない。誰れぞ餘所の人が來やせぬかと尋ねるのぢやわいなう。

伊吾　オヽ、そんなら來たぞや〳〵。

ト云はうとして思ひ入れ。

イヤ〳〵、こりや滅多に云はれぬ〳〵。

その　云はれぬといふ事があるものか。そちや賢いではないか。ちよつと話して聞かしや。

伊吾　云うてもようごんすか。

その　わしが尋ねるに、云はぬといふ事があるものか。早う云や〳〵。

伊吾　さう云はんすなら云うてこまさう。聞かんせや。宵の口に、猫が鼠でも見付けたか、聟どのが嫁でも取つたかして、とつた〳〵と滅多無性にドカ〳〵と來をつたから、わしも蒲團をかむつて寢た振りをして聞いて居れば荷物は跡から來るとやら遣るとやら、それからコツ〳〵小聲になると、旦那はんが嬉しがつて手を執つて、マア奧へござれと云うて、氣が急くのなんのと云ひ居つたが、たうとう奧へ入つて、いま酒盛ぢや。それから杯をば三度ばかり、あつち此方へやると、めでたい〳〵と云うたが、何ぢややら譯が分らぬ。それからをかしな事が始まつたぞや。

ト此せりふのうち、お園は氣を廻して奧の方を覗はうとして、腹の立つ思ひ入れあつて立上がり

その　ハヽア、それで樣子が大方知れた。道理こそこんな事であらうと思つた。科もないわしを、よう其やうに惡性な……さうして坊は寢たかや。

伊吾　オヽ、坊さんはよう寢てゞごんす。

その　旦那どのと寢たかや。

伊吾　イヽエ。

その　其方と寢たかや。

伊吾　イヽエ、ツイ一人ころりと。

その　エヽ、なぜ伽して寢さしてくれぬのぢや。

伊吾　それでも、わしにも旦那はんにも乳がないと云うて、泣いてばつかりゐやんすもの。

その　エヽ、可哀や〳〵。さうであろ〳〵。そればつかりがほんの事。

〽それはかりがほんの事と、わつと泣き出す折柄に、

ト お園はワッと泣く。伊吾、ひよんなと思ひ入れ。この時奥にて

義平　ヤイ、伊吾、どこに居る。

〽呼び立て出づる主の義平。

伊吾　アイ〳〵、爰に居やんす。

〽爰にと云ふを尻目にかけ。

義平　何をして居る。白痴めが。奥へ行つて給仕なとひろげ。

伊吾　オッと承知。

〽呵り追ひやり門の戸を、さすを抑へて。

ト 伊吾、怖々後ずさりにて奥へ入る。義平、門口しめようとする。

その　コレ、旦那どの、云ふ事がある。こゝ明けて下さんせ。

義平　イヤ、聞く事も云ふ事も、内所は一つの畜生め、穢らはしい、そこ退かうぞ。

その　イヤ、親と一つでない證據は…　それ見て疑ひ晴らして下さんせ。

〽戸の透よりも投げ込む一通、拾ひとる間に付込む女房、夫は書き物一目見て。

ト お園は去り狀を出し内へ投げ込む。この時義平もフト手を離す。これにてお園内へ入る。

義平　こりや最前遣つた暇の狀。それ戻してどうするのぢや。

その　どうするとは聞えませぬ。

ト 思ひ入れ。合ひ方になり

親了竹の惡工みは、常からよう知つての事。例へどのやうな事あるとても、なぜ暇狀を下さんした。持つて戻ると嫁らすと、思ひもよらぬ拵らへ事、嬉しい顔で油斷させ、鼻紙袋の去り狀を、盗んでわしは逃げて來ました。お前は由松が可愛くはないか、去つてあの子を繼母にかける氣かいなう……そりや胴慾でござんすわいなア。

〽縋り嘆けば。

義平　ヤア、その怨みは逆捻ぢ。この内を去なす折、云ひ慰めたを何と聞いた。樣子あつて其方に暇やるでなし。暫しのうち親里へ歸つて居よ、舅了竹はもと九太夫が扶持人、心解けねば仔細は云はぬ、病氣の證にもてなし、

起臥しも自由にすな、櫛も取るなと云ひ付け遣つたを、なぜ忘れた。さんばら髪でゐる者を、嫁に取らうといはぬわやい。なんのおのれが由松が可愛かろ。晝は一日阿房めが騙しすかせど、夜になると母さん〳〵と尋ね居る。母はおッつけもう爰へと、騙して寢させどよう寢入らず、叱つて寢させと叩きつけ、怖い聲でりや聲あげず、しくしく泣いて居るを見ては、身節が碎けて堪えらるゝものぢやない。これも思へば親の恩、子を持つて知るといふ不孝の罰と我が身をば、悔んで夜ととも泣き明かし、昨夜も三度抱きあげて、もう連れて行こ、抱いて行こと、門口まで出たれども、一夜で堪能するでもなし、五十日隙どらうやら、百日隔て置かうやら、知れぬ事に馴染ましては、跡の難儀と五町三町、ゆぶり歩いて叩きつけ、寢さしてはそつとこかし、我が肌着くれば現にも、乳を探してしがみ付き、僅かの間の別れでさへ、戀ひに焦るゝもの、一生を引分けうとは思はねども、是非に及ばず暇の狀、了竹へ渡せしを、內所にて受取つては、親の許さぬ不義の科、心よからず、持つて歸れ。これまでの緣、約束事と諦らめ、死んだと思へば事は濟むわえ。

〽切れ離れよき男氣は、常を知る程猶悲しく。

その　この家に居るとお前が立たず、內へ去ぬると嫁らにやならず、悲しいものはわたし一人、これが別れにならうも知れぬ。由松を起して、ちよつと逢はして下さんせ。

義平　イヤそりやならぬ。いま逢うて今別るゝその身を以て、跡の思ひが猶不便さ。分けて今宵はお客もあり、くど〳〵云はずと早く行きやれ。

その　それでもちよつと由松を

義平　ハテサテ未練な。跡の難儀を思はずや。たわけ面め。

〽無理に引立て去り狀を、共に渡して門先へ、心強くも突出だし。

　トお園を門口へ突き出し

子が可愛くば了竹へ詫び言して、春までも隱まひ貰はゞ思案もあらん。それがならずばこれ限り。

〽門の戶しめて內に入る。

　ト義平戶を立て、其まゝ奥へ入る。

その　それが叶ふ程なれば、この思ひはござんせぬ。そりやつれないぞやこちの人。科もない身を去るのみか、我が子にまで逢はさぬは、あんまり酷い胴慾な。顏見るまではなんぼでも去なぬ〳〵、情ぢや慈悲ぢや、こゝ明けて、寢顏なりとも見せてたべ。コレ、手を合せて拜みま



文化三年五月市村座上演

五世松本幸四郎の義平　中山富三郎のお園

す。酷いわいなう。
〽撞と伏し、前後不覺に泣きけるが。
ア、、恨むまい嘆くまい。生なか顔を見たならば、母さんかと取付いて、放しもせまいし離れもなるまい。
〽今宵去ぬれば今宵の嫁入り、明日まで待たれぬわたしが命。
さらばでござる。
〽さらばやと、云うては戸口へ耳を寄せ、もしや我が子が聲するか、顔でも見せてくれるかと、窺ひ聞けど音もせず。
ト此うち抜足しては門口へ戻り、様子を窺ひ、悲しき思ひ入れあつてハッと泣き落す。
ア、、是非もなや。
〽是非もなやこれまでと、思ひ切つて駈け出す、向うより、目ばかり出したる大男、道を塞いで引ッ捉へ、これはといふ間も情なや、すらりと抜いて島田髷、根よりふつつと切り取つて、懐までを引さらひ、いづくともなく逃げ行きし、無法無息は是非もなき。
ト向うより覆面頭巾着けたる黑出立ちの義士兩人出て、お園を引ッ捕へ、髷を切り拂ひ、懐中の去り狀を取つて橋がゝりへ入る。お園はヲッと伏し
何者かむごたらしう髮切つて、書いた物まで取つて去んだは、櫛笄の盗人なら、いつそ殺してたもいなう。
〽泣き叫ぶ聲に驚ろき、義平は思はず駈け出でしが、立てきる戸口胸の中、爰が男の魂ひの、亂れ口よと喰しばり。
ト義平走り出てよろしく思ひ入れ。
〽ためらふうちに奧よりも。
數右　御亭主々々々、義平どの。
〽立出づる數右衛門。
ト以前の數右衛門、跡より重太郎、伊助出て
段々の御深切の御馳走、お禮は鎌倉より申し越す。猶後荷物の儀は、早飛脚を以てお賴み申す。夜の明けぬうち早お暇申さん。
義平　イカサマ、今しばしとも申されぬ刻限の道中、御健勝で御吉左右、お待ち申しまする。
數右　着いたさば、早速書翰を以てお知らせ申さう。返す返すもこの度のお世話、詞でお禮は盡し難し……ソレ矢間、前原氏、御亭主へ置き土産。
兩人　ハッ。

〽扇を時の白臺と、乘せて出したる一包み。
ト兩人切つたる髻と去り狀を扇へ載せ、義平の前へ出し
重太　これは貴殿へ。又これは御内室お園どのへ。
伊助　些少ながら。
〽些少ながらと差出す、義平はむつと顏色變り。
義平　詞で云はれぬ禮とあれば……イヤコレ、禮物受けうと存じ、命がけのお世話は申さぬ。町人と見侮り、小判の耳で面はるのか。
數右　イヤ、我れ〲は娑婆の暇、貴殿は殘るこの世の家祿、御臺顏世御前の儀をお賴み申さん爲、寸志ばかりに。
〽云ひ殘し〲、立たんとすれば猶むつと。
義平　性根魂ひを見違へたか。踏み付けたよな。アタ忌々しい、穢らはしい。
〽包みし物を蹴飛ばせば、包みほどけて中よりばらり、女房髢けより。
その　こりやコレわたしが櫛笄、切られた髮。
義平　ヤア〲〲、この一包みは去り狀……ホイ。
ト兩人見て恟り
その　さては最前切つたのは。

數右　ホウ、不審な尤も。それこそはこの數右衛門が計らひにて、この方々を裏道より廻らせ、根よりフツと切らした心は、いかな親でも尼法師を、嫁らさうとも云ふまじ、嫁に取る者は猶あるまい。その髮の伸びるうちも凡そ百日、我れ〲本望遂げるも百日は過ごさじ。討ち果せた後、めでたく祝言。その時には櫛笄、その切り髮を添に入れ、笄髷の三國一。先づそれまでは尼の乳母、一季半季の奉公人。
伊助　その肝煎りは前原伊助。
重太　同じく矢間重太郎、この兩人が連中へ
伊助　大事は洩れぬといふ請け判。
數右　數右衛門は冥途から、仲人いたさん、義平どの。
義平　ハア、重々のお志し、お禮申せ、女房ども。
その　アレ、女房と申されまするわいなア。わたしが爲には命の親。
兩人　有り難うござりまする
數右　イヤ、お禮に及ばず、返禮申すも九牛が一毛、義平どのにも町人ならずば、共に出立とのお望み、幸ひかな、兼ねて夜討と存ずれば、敵中へ入込む時、貴殿の家名の天川屋を、直ぐに夜討の合ひ詞、天とかけなば

兩人　川と答へ。
數右　四十餘人の者どもが
兩人　天よ
數右　川よと申すなら、貴殿も夜討にお出でも同然。コレ、
　この帳面の裏に記せし文字を見れば
　ト船積みの帳面を取り、裏を見て
　義平の義の字は
兩人　義臣の義の字。
數右　平はたひらか、
兩人　容易く本望。
數右　はやお暇。
　〽と立出づれば。
　ト數右衞門皆々立ちかける。義平こなしあつて
義平　ハ、ア、何から何まで感じ入つたる自然の道理。
その　それぞ誠に
兩人　めでたい吉左右。
數右　義平どの
義平　お三人樣。
三人　お別れ申す。
　〽末世に天を山といふ、その棟梁は孫吳の術、忠臣藏と
も云ひ囃す。娑婆の詞の定めなき、別れ〳〵て。
　ト皆々よろしく立ち並び、思ひ〳〵のこなしあつて
　〽出でゝ行く。
　三重にてよろしく
　　　　　　　　　　　　　　　　幕

十一段目　　討入の場

役名――大星由良之助。大星力彌。不破數右衞門。矢間重太郎。千崎彌五郎。竹森喜多八。勝田新左衞門。義士大勢。小林平內。

　　　　　　　　　　　　　　　　竹本連中

本舞臺。正面白木造り、如輪杢、見事なる鐵物打ちの門。上下、海鼠壁、惣長屋の前づら、誂らへの通り、潜り門明けたて、すべて高家、表門の體、屋根に雪つもり、雪颪し、雪颪しにて幕明く。
ト本釣り鐘、雪颪し、日覆より雪を降らせる。
〽柔よく剛を制し、弱よく強を制すとは、張良に石公が傳へし祕法とかや、既に更け行く夜嵐に、遠寺の鐘も

かう／＼と、人も子の刻白雪の、清くもつもる會稽の、雪ぐは直ぐなる忠心義心、智仁勇美のその大將、大星由良之助義金、義を金鐵の一味の武士、兜頭巾に黒羽織、忠義の胸當打揃ひ、脊に差し物の名印は、勇ましかりける次第なり。

トこの文句へ一セイ、雪颪しをかむせ、向うより義士二人、黒四天、鴈木のしろし着、半切り草鞋、大小にて、忍びの龕燈を携へ、鉢卷にて、槍を構へ、先立ちにて出る。後より由良之助、着込み袴、黒鴈木の羽織、錣頭巾、大小にて、采配を持ち、次に數右衛門、同じ拵らへ、半弓を持ち、次に力彌、着込み四天、大小、好みの如く凛々しく拵らへ、鉢卷、片鎌槍を構へ、重太郎、同じく四天鉢卷にて長柄の槍、次に喜多八、同じ形にて十文字の槍、次に新左衛門、手鍵附きの兩刃の槍、次に義士三人、いづれも同じ拵らへ、忠の字の附きし弓張を携へ、次に彌五郎、繻子の鴈木の四天、見事なる大小、絹三尺の上〆め、白柄の長刀を構へ、この前後に義士二人、一人は矢筒を脊負ひ、一人は蠟燭入れを肩より脇へ掛けて槍を携へ、片手に提灯を持ち、この次へ四天の義士、菰包みの長持を擔ぎ出る。この跡へ三階惣出の義士大勢、いづれも得物を携へ、右の文句よき程より、東の揚げ幕より出て、歩みを渡り、本花道へかゝり、右の順に勇ましく練り出る。此うち風の音、本釣り鐘、床の文句の中へメリヤスをあしらひ、段々に出て舞臺へ來る。と先立ちの兩人は少し扣へ、これにて由良之助、數右衛門、力彌より彌五郎まで順々に並び、各々前へ忠の字の提灯を置く事よろしく、これにて淨瑠璃一ぱいに納まる。本釣り鐘かすめて雪颪しになり、由良之助こなしあつて

由良　如何に方々。倶不戴天の君の仇、恨みも積る白雪の、今宵ぞ晴れの軍の門出。

數右　呉越の例し會稽の、雪にすゝぐの聲あれば。

力彌　時にとつての好き吉兆。

由良　身不肖ながら棟梁たる、大星由良之助義金。

力彌　跡に續いて同苗力彌。

數右　不破數右衛門重胤。

重太　矢間重太郎重行。

喜多　竹森喜多八秀直。

新左　勝田新左衛門行道。

彌五　千崎彌五郎則安。

トこれより皆々一々名乘りあつて

由良　いづれも、討入りの用意召されい。

皆々　ハア。

ト皆々舞臺へ一度に集まり、下の方よき所へ右の長持を据ゑ、中より繼ぎ梯子、青竹に弦をかけし弓を出すなど、よろしくあつて、梯子を門の屋根へかける。これまでドン／＼の寄せ太鼓あつて、これにてよろしく打ちあげる。雪颪しになり、義士二三人、手ばしこく梯子を上りて追々門内へ忍び入るこなし。ドン／＼になり、門の内にて物騷がしき音して

大勢　泥坊々々。

ト潜りを明けて門番一人出て

門番　泥坊だ。盗人だ。

ト皆々を見て

ヤア、堪らぬワ。助けて下さい／＼。

ト逃げ出すを皆々捕へ

彌五　屆竟の案内者。

數右　早く繩目に。

義士　ハア。

ト縛しあげる

彌五　開門々々。

ト中より義士、門を明ける。

由良　猶豫いたさず、込み入れ方々。

皆々　心得申した。

〽心得さうと大星が、傳へる下知に張り詰めし、心の逸り男、英氣を含み。

皆々　天。

皆々　川。

〽一度にどつとぞ。

ト皆々こなしあつて、由良之助より段々、この先へ門番を引立て、皆々勇ましく門内へ入る。

〽入りにける。

ト内より門の扉を立て切り　閂をかける音バツタリして、又ドン／＼の寄せ太鼓、この道具ぶん廻す。

本舞臺、正面、雪の積りし庭内の遠見。前通り雪積りし垣根にて、上の方に屋體の前面。上下、雪降り屋敷の高塀、庭續きの道具、師直屋敷内、外庭の體。

ドン／＼にて道具納まる。

ト袴股立ちの侍ひ、或ひは茶道、好みの拵らへにて逃



三世坂東三津五郎の由良之助　五世松本幸四郎の師直

げ出る。蔭にてアリヤ〳〵の聲。

侍ひ　そりやこそ爰へも押して來るぞ。

茶道　夜討が入つた〳〵。

皆々　逃げろ〳〵。

トばた〳〵にて上下へ行き違へ、逃げて入る。此うちも蔭にアリヤ〳〵の聲よろしく、ドン〳〵になり、重太郎、袴股立ち、鉢卷、拔刀の師直方の家來と立廻りながら出て來り、ドン〳〵にて、ちよつと立廻りあつて、トヾ兩人を切り倒し

重太　イデこの上は、敵の在所を。

ト行きかける。下手より喜多八、同じく師直方の家來と立廻りながら出て來り

喜多　天。

重太　川。

トこれにて重太郎。加勢して立廻り、トヾ兩人、左右へ一人づゝ追つて入る。ドン〳〵、バタ〳〵、アリヤアリヤの聲、上手より平內、着流し、尻端折り脫ぎかけ、繻袢、後鉢卷、白刃を携へ、彌五郎と立廻りながら出て來り

平內　小ざかしき鹽冶浪人。師直公の身內にて、鬼神と呼ばれし小林平內、片ッ端から撫切りだぞ。

彌五　殊勝らしき刃向ひ立て。千崎彌五郎則安が、第一番の手柄になさん。

平內　何を小癪な。

ト鳴り物變つて兩人よろしく、立廻りあつて、爰へ數右衛門出て來り、加勢する事あつて、トヾ平內切られる。彌五郎、附け込まんとするを

數右　アイヤ暫らく。

ト立廻りあつて平內を槍に貫き

早野勘平重氏、敵討の一番槍……これにて最後の無念を晴らし、淸く成佛いたされよ。

彌五　天晴れ實義の數右衛門どの。

平內　觀念。

ト切つてかゝるを突き伏せる。この時、上手の高塀へ石堂方の侍ひ、提灯を持ち、上り出て

侍ひ　ヤア〳〵、お屋敷騷動の聲、太刀音矢叫び事騷がしく、盜賊か狼藉者か、但し非常の沙汰なるか、承り屆けよと、主人よりの申し附けなり。

トこれにて兩人、思ひ入れあつて

數右　これは鹽冶判官が家來の者ども、主人の仇を報はん

爲、四十餘人の一味の武士、千變萬化のこの戰ひ。
彌五　斯く申すに千崎彌五郎則安、尊氏御兄弟へお恨みなし、元より兩隣りの仁木石堂どのへ、何の遺恨も候はねば、卒爾いたさんやうもなし。
數右　火の用心は堅く申しつけたれば、これ以て御用心に及ばぬ事、只穩便に捨て置かれよ、
彌五　それとても隣家の事、聞捨てならずと御加勢あらば、力なく一矢仕らん。
侍ひ　御神妙々々々、我れ人とも主人持つたる身は、尤も斯くこそありたきもの。御用あらば承らん。提灯引け。
　トこれにて内へ入る。
數右　この上ともに、お手柄召され。
彌五　心得申した。
　ト爰へ師直の家臣四人、左右より出て切つてかゝる。立廻りあつてキッと見得。知らせにつき、道具ぶん廻す。
　本舞臺、眞中に九尺の柴部屋、左右板塀、見越しの松。よき所に井戸あり。合ひ方にて道具納まる。
　ト爰に喜多八、重太郎、師直の首級を井戸にて洗ひゐる事あつて
喜多　いま討取りしこの首級は、正しく敵と覺しき曲者、
重太　額に殘る古疵は、主君御無念の痕と存ずれど、證據なければ詮方なし。
喜多　一先づ同志を呼び集め
重太　御鑑定願ふは大星御親子。
　トよろしくあつて呼子を吹く。これにて鳴り物になり、上下より由良之助力彌、數右衞門彌五郎、その外義士一同、出て來り
由良　合圖の呼子を吹かれしは、敵を仕留め召されしか。
重太　いま兩人にて討取りしは、慥かにそれと存ずれど
喜多　我れ／＼敵の面を知らねば、御鑑定を願はんと
兩人　合圖を致してござりまする。
　トこれにて由良之助、首級を見て
由良　紛ふ方なき敵の首級、隱しても隱されぬ、君御無念の刀疵、さりながら、慥かにそれと見極むるは、兼ねてより俳諧師となつて、高家へ入込まれし、千崎どの御一人、ソレ、鑑定いたされよ。
彌五　ハツ、心得申した。
　ト眞中へ出て、首級を改め

正しく敵師直の、首級に相違ござりませぬ。

重太　すりや我れ〳〵が討取りし

喜多　その首級こそ年來望みし

皆々　敵師直が首級なるか。

由良　御兩所には、お手柄〳〵……さりながら、假にも天下の執權職。

ト捨石へ首級を載せ、由良之助、手を支へ、思ひ入れあつて

ハツ、斯く陪臣の身分にて、執權の御館へ、亂入いたすのみならず、斯く御首を頂戴いたすも、たゞ亡君の御恨みを散ぜん爲に外ならず。日ならず一同冥府にて、今宵の御無禮、御詫び仕るでござりませう。

トこなしあつて

日頃の望み足んぬる上は、これより御菩提所たる光明寺へ引揚げ、亡君の御墓前にて、改めて御燒香仕らん。

力彌　年月苦心の甲斐あつて

數右　亡き御主君の仇敵を

重太　易々討取り申せし上は

喜多　今ぞ達せし日頃の本懷

彌五　これに過ぎたる

皆々　喜びなし。

由良　いづれも、勝鬨。

皆々　エイ〳〵オウ。

ト皆々思ひ入れ、雪颪し、勇ましき鳴り物にて　幕

大詰　兩國橋押戻しの場

役名──鳥取一郎。大星力彌。不破數右衞門。竹森喜多八。矢間重太郎。千崎彌五郎。寺岡平右衞門。大星由良之助。

竹本連中

本舞臺、上の方大臣柱の際より書心に掛かる橋の欄干。雪の積りし體。橋杭の上の方を見たる誂らへの道具、一聲、波の音にて幕明く。

〽荒鐵の土も升目に計るなる、黃金の巷一面に、降り積む雪の銀世界、寒紅梅に彩りて、綠の大河滔々と、絕えせず爰へ入船や、邸工商賤が軒、一目に見渡す兩國橋、雪晴れ渡る朝ぼらけ、登城戻りの御旗本、武威嚴重の先

拂ひ。

供廻　ハイホウ。

〽寒風に雪のいとひなく、麻裃の高股立ち、壯年武功の鳥取一郎、向うをきつと打見やり。

トこの淨瑠璃のうち正面の橋より仲間兩人、法被股引馬別當、上に一郎麻上下、高股立ち、熨斗目大小にて馬に乘り、この次に馬別當兩人付添ひ出る。槍持ち付添ひ出て來り、一郎、橋の上にて東の揚げ幕をキッと見て

一郎　ハテ心得ぬ。只今あれへ一群れに、四五十人に備へを分け、衣服の體も只ならぬ、殊に白刃も長道具。

仲間　我れ〱只今見受けしところ

別當　世の常ならぬ

四人　正しく曲者。

一郎　何にも致せ、事の實否を糺してくれん。ソレ、槍持て。

槍持　ハア、。

〽槍おつ取つてためらふ折柄。

トよろしくあつて

〽主君の怨敵討取つて、すゝぐは雪に會稽の、時に大星原大鷲、赤垣織部指麾正しく、勇威は竹森、念力矢間、備への中央義金が、隊伍を亂さず練り來る同勢。

トこの淨瑠璃のうち、東の揚げ幕より喜多八、重太郎、彌五郎、數右衛門、平右衛門この外義士大勢、眞中に由良之助と力彌、この順に花道にかかり、先手本舞臺へかゝり、一郎思ひ入れあつて

一郎　ソレ、仔細を尋ねい。

四人　心得ました。

供一　何者なれば主人の下城も憚りなく

供二　血汐にそみし得物を携へ

供三　列を亂せし多勢の人數。

供四　一揆徒黨の者ならん。

供三　主人のお咎めある上は、そこ一寸も

皆々　動くまいぞ。

ト此うち追々舞臺へかゝる事。喜多八、思ひ入れあつて

喜多　これは案外なる止立て。臣等は心外やみ難き、鬱憤の仔細あつて、本意を遂げし戻り道。

重太　往還途中の妨げは仕らず。

彌五　異議なく往來

三人　通し召されい。
〽お通しあれと勢ひ立つ。
ト義士皆々思ひ入れあつて
〽こなたは馬上に突立ち上がり。
一郎　ヤア、存外至極の狼藉者、いま治世の世の中に、汝等如きの亂暴者を、一人たりとも見遁がし通しなば、足利の營中へ、日勤の武士の大きな名折れ。サア、誰れなりとも通らば通れ。年來手馴れし持ち道具、イザ胸板に賞翫させん。
喜多　どうで惜しまぬ
重太　我れらが命。
彌五　是非に及ばぬ……ソレ。
先手　心得ました。
〽既に斯うよと見えたる所へ。
ト先手の人數息込む。此うち追々舞臺へかゝる。由良之助力彌、花道へ來て
由良　双方ともに聊爾めさるな。暫らく／＼。
力彌　お止まり下さりませう……後詰めに扣へし父義金が申し置きしは爰の事。
數右　先づ／＼、扣へ召されい。
〽諸士を制して威儀を正し。
トこれにて花道の皆々、舞臺へ來る。
由良　愚昧なれども義金が、制し置きしをお忘れありしか。無禮千萬、扣へ召されい。
ト先手の皆々を制し
ハツ、御覽の如く復讐の儀につき、據なくこの出立ち。
力彌　御　參の尊公へ對しまして
由良　先手の者が無禮の段々、眞平御高免
兩人　下さりませう。
〽慇懃に相述ぶる。一郎は打見やり。
一郎　して其方は誰れぢや。姓名を申せ。
由良　今は何をか包み申さん、私し事は先年足利どのゝ御沙汰に依つて、國郡を沒收せられ、家斷絶に及びましたる鹽冶が家臣、大星由良之助と申す者。
一郎　ムウ、さては聞き及びし城代家來、義金は其方か。
由良　ハツ。
十郎　して其方等が姓名は。
鄕右　同藩留主居役を勤めましたる、原鄕右衞門正種。
力彌　大星由良之助が悴、同苗力彌。
源藏　嗜なむ酒と槍術に、名を得し赤垣源藏正方。

重太　矢間重太郎重行。
十内　小野寺十内秀和。
又之　小汐田又之丞高教。
貞右　奧田貞右衞門行高。
傳助　倉橋傳助武行。
岡右　木村岡右衞門貞行。
喜兵　矢間喜兵衞光延。
五郎　矢田五郎右衞門祐武。
勘助　横川勘助宗教。
十郎　礒貝十郎正久。
次郎　三木次郎右衞門包道。
與茂　矢藤與茂七教兼。
幸右　小野寺幸右衞門秀富。
三郎　千馬三郎兵衞滿忠。
孫右　貝加孫右衞門友信。
和助　茅野和助常成。
金右　岡野金右衞門包秘。
彌五　千崎彌五郎則安。
忠左　吉田忠左衞門兼光。
久太　間瀬久太夫正明。

安兵　織部安兵衞金丸。
數右　不破數右衞門重胤。
文吾　その年の瀨の雪の敵、大鷲文吾忠信。
喜多　彼の樊噲の例しに習ひ、母の小袖を肌に着て、一番槍の高名は、竹森喜多八睦重。
平右　歷々のその中に、列なるこの身は輕けれど、御恩は重き掛矢の大槌、時を得物の働らきには、足輕寺岡平右衞門信行。
由良　その後陣の跡備へ、同勢合せて
皆々　四十六人。
一郎　ムウ、すりや鹽冶が城代家老、大星を始めとして、その外恩顧の浪人どもよな。
皆々　ハア、。
一郎　ムウ。
〽何思ひけん馬上より、飛び下りて身繕ひ、こなたも不審晴れやらず。
ト一郎馬上より下りる事。
由良　して我れ〳〵が通行を、止め召されし
皆々　其許樣は。
一郎　某事は足利の昵近鳥取一郎と申す者。いま明番の下



明治三年八月中村市村座合併上演



河原崎權之助の由良之助　大谷友右衛門の一郎

城道、狼藉者と見受けしゆゑ、まツこの通り支へたる。我が目は違はぬその出立ち、正しく一揆徒黨の亂暴……仔細を申せ、ナ、なんと。

由良　御直參の鳥取公へ、浪人の我れ〱が詞を返しまするは、恐れ入つてはござれども、仔細を一通り言上仕らん……主人高定が切腹の起りと申すは、執事高師直どのゝ、無道の所行によるところ、愚臣が申さずとも、公にも趣意はしろし召されん。主人高定には死を賜はり、國郡は收納になれど、師直どのにはお構ひなく、安泰にてましませば、主君が遺念の怨敵を、何安穩に置くべきや。臣等が恨み骨髓に徹し、止み難なく、何卒これを報ぜんと、一列の者申し合せ、四十餘人の者どもが、雪にイみ風雨をいとはず、銘々艱難辛苦を喫し、やう〱にして時至り。昨夜半師直どの御館へ推參仕り、師直どの御首級を、御覽の如く賜はつて、これより菩提寺光明寺へ立越え、主人が墳墓へ手向けんと、引取り參る我れ我れども、この儀御賢慮下さりませう。

喜多　只今由良之助申す如く、倶に天の戴かざる主人の怨敵。

彌五　やう〱の思ひにて、本意を達し候ふ上は

力彌　殉死を急ぐ我れ〱が胸中。

由良　心急ぎにござりますれば、異議なくお通し下さるやう、偏へに願ひ奉りまする。

〽低頭してぞ願ひ居る、鳥取一郎打見やり。

一郎　忠を守り義を思ふ、天晴れ健氣な一味の者ども、鳥取一郎驚ろき入つた……世に類ひなき忠義にめでて、此まゝ通しやりたきなれど、爰をよつく合點せよ。これなる橋は足利の旗本譜代の面々、朝暮にこれを通路なす、往來の爲に掛けたる橋。治世の御世に鞘を拂ひ、血汐に染みたる槍長刀、忠義の爲の仇討なりとも、天下の御法を犯せし者ども、此まゝに見遁がしなば、先祖の武功を我が世に至り、一時に家名を落すの道理。達つて通り行かんとならば、サア潔く勝負なせ。我が一命のあるうちは、一人たりとも其方等を、通す事罷りならぬ。

〽武道を磨く大丈夫。

喜多　すりや我れ〱が

皆々　通行は。

一郎　いつかな叶はぬ、罷りならぬ。

喜多　通行妨げある時は、主君の御墓へ手向もならず、事に依つたら

皆々　我れ〳〵が。

ト息込むを由良之助、皆々をとめて

由良　コリヤ、待たれよ、いづれも。麁忽あつては上への恐れ……ア、誠に武邊を守らせられ、お止めなされし大丈夫の御一言、御口外ある上は、二言と引かぬ御心底、義を守るが侍ひの道、相互ひと存ずるゆゑ、推参仕つてござりまする。

重太　すりや、どうあつても御菩提所へ

皆々　通る事は叶はぬとな。

皆々　〽義士は一同顔見合はせ、當惑なすも理りなり。

一郎　さはいへ忠義を磨く者ども、一旦亡君の其ために、天下の掟を犯すと雖も、直参の某が、止めし詞を相守り神妙に扣へし段……大星、よく指麾いたしたな……末世の鑑になるべき人々。見やれ、武士は斯くこそありたきものぢや……斯く忠義の人々が、望みを空しくなさんといふ、この鳥取が心底ならず、この橋筋は館の往來、光明寺へ罷り越すに、この橋を通らずとも外に……ナ、赴く道もあらん……サア、指圖は致さぬ、勝手次第。

〽とありければ、さとき大星進みより。

由良　ハア、御芳志忝なう存じます……方々それにてお聞きの通り、鳥取公の仰せの如く、この橋通りの市中へかからば、館下城の道筋ゆゑ、例へ此まゝ通り行くとも、又ぞろ路次に妨げあらんも計られず。この川岸を通り越し、大川橋より高輪筋へ……いづれもこの儀得心あらば、後詰めの列へも達し召されい。

皆々　心得ました。

由良　先刻より餘程の間、御通行を止めし段、何とも以て

皆々　然らばお暇仕らん。

〽と大星が指揮なせば、受納めたる側への義士等、譲り行く道かへる道、鳥取一郎會釋あり、引かせる駒の轡づら、手綱とり〳〵又もとへ、戻るも義者のゆがまぬ道、鳥取又も見かへりて。

一郎　ヤア〳〵、義士等へ問ふ事あり……高輪近くさしかかり、上杉山名の追手の人數、道遮らば、如何に〳〵。

〽詞も待たず寺岡が、隊伍の内より進み出で、

平右　上杉山名の追手とあらば。

〽これぞ敵方身寄りの奴原、百騎二百騎向ふとも、刃物に及ばぬ腕こぶし、首筋胴骨嫌ひなく、木灰微塵と打ち据ゑぶちのけ、通路の妨げ候はず。

喜多　太刀柄物にて刃向はゞ。

〽手馴れし大身の槍先を、電光稲妻ひらめかし、切り込む刃物は石突にて、刎ねのけ突き退け捲おとし、四方八面に突立て突伏せ、血路を開き敵の首、主君の墓へ手向けし上。

殉死を遂ぐる臣等が決心。

〽誓ふ連判袖印、とがなくて死す假名の留、目ざましくも又いさぎよし。一郎馬上に莞爾と笑み。

一郎　イヤナニ大星、日頃の念願相達し、さぞかし滿足。

由良　御賢察下さりませう。

一郎　類ひ稀れなる忠臣勇士に、今日これにて出逢はずば、また對面の期もあるまじ。末世の口碑に傳ふるも、弓矢の家の身の面目。

由良　武邊も猛き鳥取公の

皆々　御下城の道遮りしも

由良　忠義一圖に心の金鐵。

一郎　止める武士の義の鐵石。

由良　左樣ござらば鳥取公。

服部　大星義金。

兩人　お別れ申す。

〽互ひに會釋目禮も、名にし鳥取大星が、正すは威儀や武の作法、跨がる駒や駒止も、近きわたりの彼の岸へ。

ト此うち大星、一郎へこなし。皆々辭儀をして順よく橋の方へ入る。此うち右の文句あつて大星よろしく、一郎見送りながら、これにてよろしく浪の音、床のメリヤスをあしらひ、兩國橋を少し上の方へ行く事。

本舞臺、道具ぶん廻す。正面、見付け鏡板の所、向う川岸兩國本所の方の道具となり、誂らへの通りに納まる。

ト變へ一郎馬上にて皆々供廻り並よく附添ひ、舞臺へ出る事。

〽分ついろはの袖印、忠士の武名高輪に、殘す譽れの譬への止め、雪に散り行く。

ト義士皆々列を正し出て來り、皆々花道へかゝる。よき程に雪チラ／＼と降り出す。供廻り一郎へ傘をさす事、よろしくあつて一郎を見てよろしく思ひ入れ、大星こなしあつて立戻り、忍び頭巾を取つて、よろしく目禮をする。一郎、馬上にてよろしくこなし。雪、頻りに降る。

〽名殘なる。

ト三重にてよろしく。

ト幕外、義士西の揚幕へ入る。

幕

假名手本忠臣藏（終）

編纂校訂責任
渥美清太郎
鈴木 侃

日本戯曲全集・第拾五巻
赤穂義士劇篇・第七回配本

編纂者検印

昭和三年十一月廿七日印刷
昭和三年十一月三十日發行　（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二
　　　　　四四一五
振替東京　一六一七

製版所　新倉東文堂

（神田區・松下町・七番地・明治印刷株式會社印刷）



